茨城県教育財団文化財調査報告Ⅸ

冬木地区土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書

―冬木A貝塚．冬木B貝塚―

A+B10+69+38+10+429

昭和55年度

財団法人　茨城県教育財団

序

「岩井・境都市計画冬木特定土地区画整理事業」は，昭和48年度に日本住宅公団によって計画され，県西地区の開発事業として期待されております。

この地域の，埋蔵文化財包蔵地としては，冬木A貝塚・冬木B貝塚が存在するため，財団法人茨城県教育財団は，昭和54年度に日本住宅公団から委託をうけて記録保存のための発掘調査を実施いたしました。その結果，冬木A貝塚から10数体に及ぶ人骨をはじめ，多数の獣骨・魚骨などが出土し，郷土の歴史を解明する上に貴重な資料を得ることができました。

この冊子は，発掘調査の報告書として昭和55年度に整理し執筆・編集したものであります。この報告書が上梓するまで種々の御協力をいただいた日本住宅公団，五霞村教育委員会，地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課，人骨の科学的処置による取り上げの御指導をいただいた東京国立文化財研究所，それに人骨・獣骨・魚骨等の調査執筆にあたって下さいました東京大学総合研究資料館等の各位に対し，心から感謝を申し上げます。

おわりに，本書が学術研究の資料としてはもとより，教育資料としても十分活用されますことを希望してやみません。

昭和56年3月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　竹内藤男

例　　言

1．本書は，日本住宅公団と財団法人茨城県教育財団との委託契約に基づいて，昭和54年度に実施した猿島郡五霞村に所在する冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査報告書である。

2．冬木A貝塚・冬木B貝塚の調査にかかわる当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長	竹内藤男	(茨城県知事)
副理事長	大金新一	(茨城県教育長 昭和52.4～54.6)
	古橋靖	(茨城県教育長 昭和54.7～)
常務理事	川野辺四郎	(昭和52.4～　)
事務局長	大内秀夫	(昭和52.4～55.3)
	小林義久	(昭和55.4～　)
調査課長	川俣吉之助	(昭和52.4～55.3)
	大塚博	(昭和55.4～　)
企画管理班長	圷秀雄	(昭和54.4～　)
企画管理班	鈴木三郎	(昭和52.4～　)
	栗田孝志	(昭和53.4～　)
調査第1班	青木義夫	(昭和54年度班長)
	荒堀彰夫	(昭和54年4月～12月調査)
	高村勇	(昭和54年4月～12月調査 昭和55年度整理・執筆，冬木A貝塚)
	根本康弘	(昭和54年8月～12月調査 昭和55年度整理・執筆，冬木B貝塚)
	橋本勉	(昭和54年4月～7月調査)
補助員	鯉淵和彦	
	宮内良隆	
	仙波亨	

3．本報告書で使用した記号等は次の通りである。

ＳＩ……住居址　　Ｐ　……柱　穴（ピット）
ＳＫ……土　壙　　Ｋ　……貝　層
ＳＤ……溝　　ＹＰ……黄色パミス

4．住居址や土壙，ピットなどの深さは，すべて遺構確認面からの計測値である。

5．土層及び土器の色については「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。

6．冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査，出土遺物等の整理に際して御指導，御協力を賜わった関係諸機関・各位に深く感謝の意を表したい。

目　　次

序

例　言

第１章　調査経緯……1

　第１節　調査に至る経過……1

　第２節　調査の経過……1

第２章　遺跡の立地と環境……5

　第１節　地理的環境……5

　第２節　歴史的環境……5

第３章　冬木Ａ貝塚……9

　第１節　貝層・人骨・自然遺物……9

　　1　貝　層……9

　　2　人　骨……15

　　3　獣骨・魚骨……22

　第２節　遺構と遺物……22

　　1　住居址……22

　　2　土　壙……93

　　3　溝　……201

　第３節　まとめ……230

第４章　冬木Ｂ貝塚……239

　第１節　貝層・自然遺物……240

　　1　貝　層……240

　　2　獣骨・魚骨……241

　第２節　遺構と遺物……241

　　1　住居址……241

　　2　土　壙……248

　　3　遺　物……259

　第３節　まとめ……294

別冊　冬木Ａ貝塚の自然遺物と漁撈活動

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

日本住宅公団の行う51 ha に及ぶ「岩井・境都市計画事業冬木特定土地区画整理事業」が，昭和48年に計画された。

この区域内の埋蔵文化財包蔵地については，茨城県教育委員会と五霞村教育委員会による分布調査が実施された。その結果に基づいて，茨城県教育委員会・五霞村・日本住宅公団の三者により協議された結果，冬木A貝塚・冬木B貝塚の2遺跡については現状保存が困難であるため，記録保存の措置をとることで合意した。

茨城県教育委員会は，冬木A貝塚・冬木B貝塚の発掘調査について，日本住宅公団に対して財団法人茨城県教育財団を紹介した。これにより茨城県教育財団と日本住宅公団は，昭和54年4月に発掘調査業務についての委託契約を締結し，冬木A貝塚・冬木B貝塚の調査については同年4月1日より同7月までの予定で実施することになった。

このため，当教育財団は五霞村の冬木A貝塚・冬木B貝塚に関する発掘調査に「調査第1班」の調査員3名を配置し，業務の進行を図ることになった。

調査員は4月より現地に赴き，日本住宅公団冬木宅地開発事務所・五霞村教育委員会などと互いに連絡をとりながら，作業員募集・現地調査事務所の建設・発掘器材の搬入・調査区設定・残土置場の問題など調査前の諸準備を進めた。

第2節　調査の経過

4月　23日から小調査区（グリッド）設定のための杭打ち作業等発掘調査に入る前の諸準備に入った。

5月　9日　冬木A貝塚において鍬入れ式を挙行し，本格的な調査を開始する。

〔A貝塚〕遺跡の南側，D2区より遺構分布状況確認のためのグリッド発掘を開始した。とりあえず表土のみを除去することにし，中旬以降はC2区・C1区・B1区・A1区・A2区まで行なった。表土層下付近より多くの縄文土器片・獣骨等が出土し始めた。

6月　〔A貝塚〕　上旬から表土除去の終了したグリッドの掘り下げ，D2区内の溝・住居址・土壙などの調査を開始した。雨が少ないため調査区域内の乾燥がはげしく，作業は困難であった。作業はD2区及びC3区を主に進めたが，全体に貝層の広がりが見られ，貝層上面で一時ストップし，以後貝のサンプリングをしながら作業を進めた。

20日　日本住宅公団・茨城県教育委員会及び当教育財団で協議の結果，調査期間が延長されることになった。

〔B貝塚〕　これまではA貝塚のみの調査であったが，B貝塚も同時に調査を進めることになり，下旬に遺跡の全景写真を撮影した。

7月　〔A貝塚〕　D2区内の遺構調査を続行する。住居址は6軒を確認した。中旬からC3区及びC2区内の遺構調査に入ったが，貝層の調査・処理に時間がかかり，思うように進まない。特にC3区は全面貝層に近いため，出土遺物も多かった。骨類は保存状態も良好で，多量に確認された。25日，$C2a_3$において頭蓋骨の一部が発見された。これまで多くの骨類は出土していたものの，人骨の出土は初めてである。これ以後18体分もの人骨が続々と発見されることになったが，この時点では想像もつかなかった。記念すべき第1号人骨であった。

〔B貝塚〕　遺跡西側A1区・B1区より遺構分布状況確認のためのグリッド発掘作業を開始したところ，多くの土壙やピットが検出され，中旬以降は各遺構の調査も開始することにした。

8月　〔A貝塚〕　人骨の出土状態は良好なため，取り上げ保存を図ることにし，11日東京国立文化財研究所文部技官青木繁夫氏の指導を受け，23日に取り上げ作業を実施した。下旬にはC2区内の遺構調査にとりかかった。南側の遺構は密度が高く，多くの土壙及び8軒の住居址を検出した。

〔B貝塚〕　遺跡が低湿地状のため，雨が降るとしばらく作業が中断され，調査が遅れがちであったが，A1区を主に調査を進めた。南及び北側が低く，中央部が馬の背状に盛り上がっており，遺構も中央部に多く検出された。

9月　〔A貝塚〕　毎日のように新たな人骨が発見され，それにつれて見学者の数も増加し，調査員は四苦八苦の日が続いた。C2区内の調査を続けながら，C3区内の遺物の処理を行なった。下旬から雨天日が多く，作業も中止がちとなり，調査にもかなりの影響が出た。

10月　〔A貝塚〕　C3区の調査が終了し，B1区・B2区・A1区・A2区の調査に移った。D2区で検出された溝は，C3区内においても北北東に伸びて検出された。

〔B貝塚〕　水はけ不良のため連続した作業ができず，調査も遅れがちである。掘り込みの終了した遺構から，写真・平面図作成などの作業を進めていった。

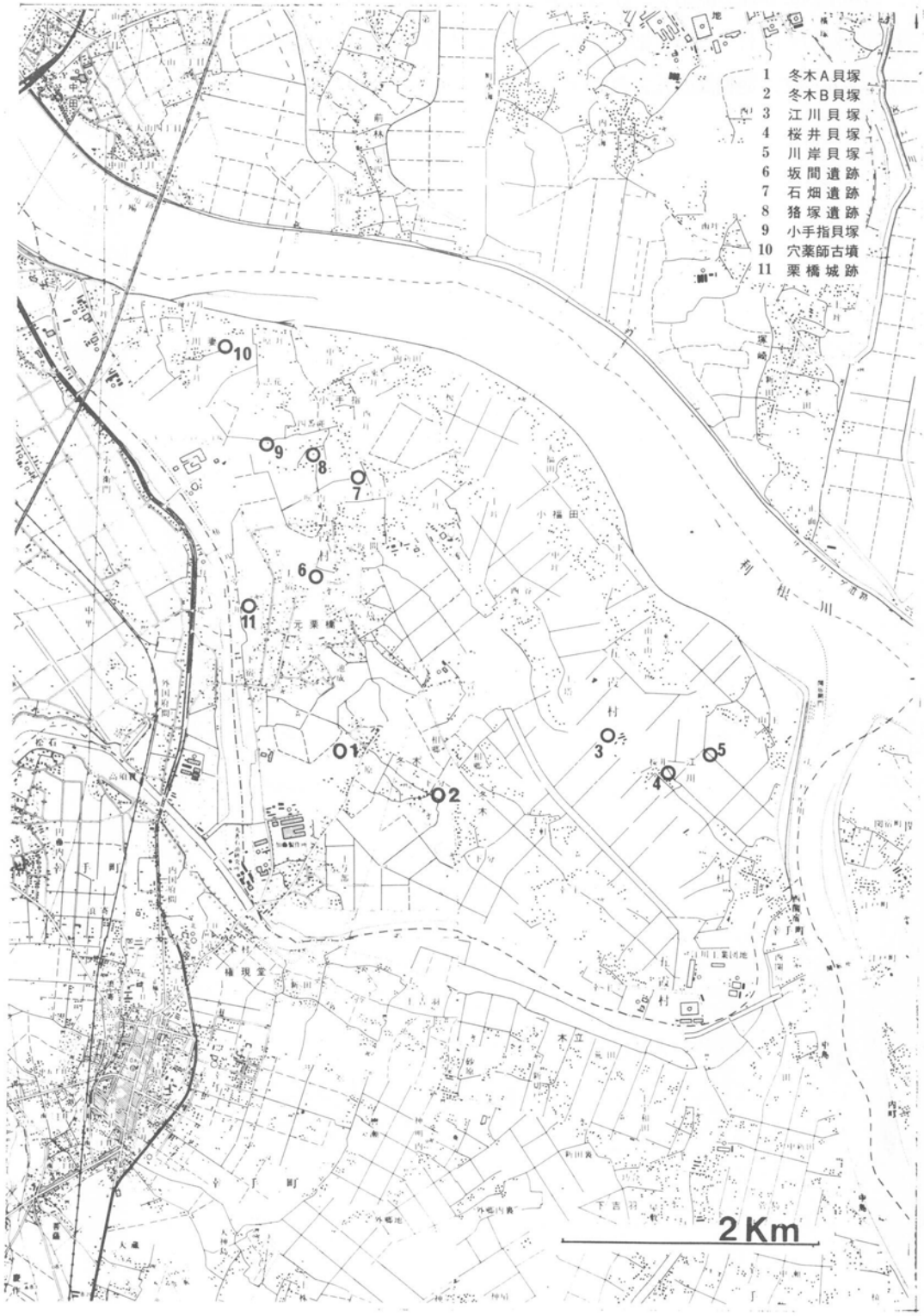
11月　〔A貝塚〕上旬にC2区，下旬にはC1区も調査が終了し，遺跡北西側のA区・B区の一部を残すのみとなった。B2区・B3区より調査を開始し，これまで通路としていた部分についても調査を進めた。

〔B貝塚〕　各遺構の調査は平面図作成を残してほぼ終了し，12月末を目標に作業を進めた。

12月　〔A貝塚〕　18体の人骨処理も上旬には終了し，遺構の掘り込みも中旬にはほぼ終了したため，18日にはB貝塚とともに航空写真を撮影した。両遺跡とも写真と平面図を残すのみとな

り，事務所内の整理も開始し，27日をもって全ての現地における調査活動を終了した。

昭和55年1月18日　五霞村協和会館において，大澤村長はじめ村関係者・日本住宅公団等多数の出席者を得て，発掘調査報告会を行なった。



第1図　五霞村遺跡位置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

猿島郡五霞村は関東平野のほぼ中央にあり，茨城県の南西端に位置する。北から北東にかけて利根川を隔てて古河市・総和町・境町に接し，東は江戸川を隔てて千葉県関宿町に，南西は権現堂川を隔てて埼玉県幸手町・栗橋町に接する。東西約 6 km，南北約 5 km，面積は 23.32㎢であり，楕円形に近い輪中の様相を呈する。人口は約 8,700 人を数える。

台地は最高点で標高 13～14 m を測るが，一般的には 12 m 前後と比較的低く平坦である。低地との比高は 1.5～2 m を計る。周囲を河川に囲まれているため洪水が多かったが，現在は河川改修・土地改良がなされ，従来畑地として利用されていた台地も陸田化している。

住民は，日常の買物等は埼玉県幸手町や栗橋町へ行くことが多く，生活感覚は茨城県よりも埼玉県に近い。また，都心部まで 40 数 km で，栗橋町・幸手町へ出れば国鉄・私鉄・四号国道により容易に都心へ達することができる。このことから，近年工場の進出，住宅の建設等が行なわれている。

Ａ貝塚は冬木字貝塚にあり，県道幸手一境線の西側に接し，権現堂川の東側約 0.8 km に位置する。Ｂ貝塚は，Ａ貝塚の東南東約 0.8 km に位置する。両遺跡とも奥東京湾に面した低台地上に立地し，Ａ貝塚は標高約 12 m・南西側水田との比高 1.5～2 m を計り，Ｂ貝塚は標高約 12 m 南側水田との比高約 1 m を計る。ともに平坦な地形である。ただしＡ貝塚はかつては南側が高く北へ行くにつれて低くなっていたが，10 数年前木工所建設の際に削平され，現在の地形になったものである。

第２節　歴史的環境

五霞村に存在する遺跡は地図に示す通りである。

縄文時代の遺跡はほとんどが湮滅状態にある。この中で調査が行なわれたのは，小手指貝塚・冬木Ａ貝塚・冬木Ｂ貝塚・江川貝塚（以上，埼玉県立不動岡高校社会クラブ）（注１）・坂間遺跡（立正大学考古学研究会）（注２）・石畑遺跡（石畑遺跡調査会）（注３）であるが，石畑を除けばいずれも遺跡の一部及至確認調査だけだったようである。これらの調査によると，小手指貝塚において縄文中期の土器の出土が見られ，冬木Ａ貝塚が縄文後期初頭・冬木Ｂ貝塚が縄文後期中葉～後葉に形成された遺跡とされている。石畑遺跡は昭和 51・52 年に調査され，住居址 21 軒・土壙 200 基弱が検出された。縄文前期から晩期にまたがる集落址であり，ヤマトシジミを主とする地点貝

塚が確認された。耳栓・土偶・土版・土器等が出土している。なおB貝塚については，本来は今回の調査区域に隣接した西側の畑地が遺跡の中心部であったと思われるが，住宅建設によりその大部分が破壊されており，今回調査した地点と異にしている。

弥生時代の遺跡は，現在までのところ確認されていない。

古墳時代の遺跡には，小手指の伊勢塚古墳(前方後円墳，全長 60 m・後円部径 40 m・高さ 7 m，破壊)・元栗橋の痕泉塚古墳 (前方後円墳，全長 50 m・高さ 6 m，破壊)・川妻の県指定史跡穴薬師古墳 (円墳，径 30 m・高さ約 4 m) がある。穴薬師古墳は昭和 44 年に調査が行なわれた。主体部は羨道・前室・玄室から成り，奥壁には五輪塔に似た板状の石を用いており，胴張りを呈する貴重な横穴式石室である。この古墳は古くから知られ，「利根川図誌」(赤松宗旦著) に「川妻の隠里膳椀伝説」として紹介されている。昭和 47 年に復元・整備が行なわれた。

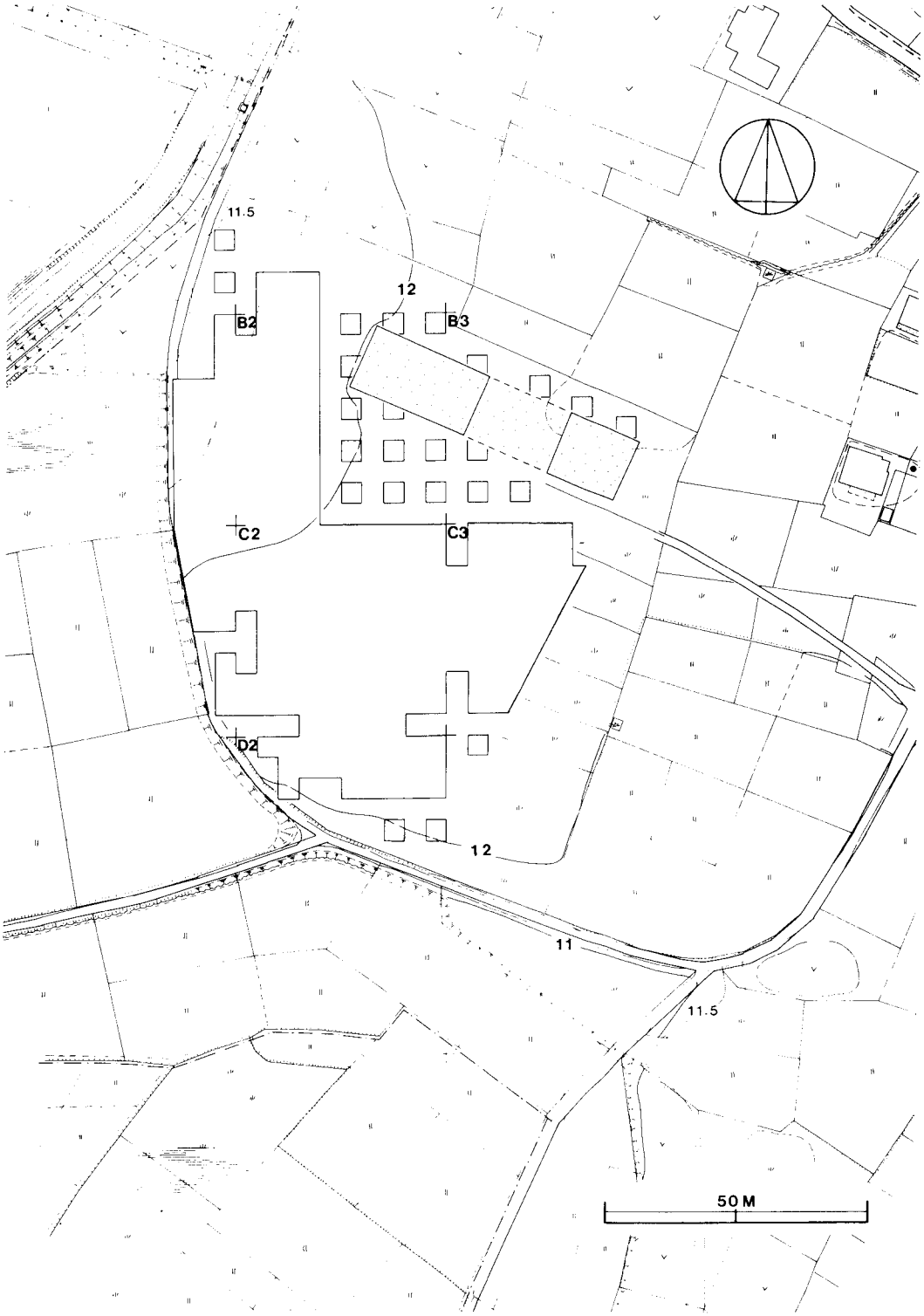
元栗橋には中世の栗橋城跡 (城山城跡) がある。これは古河公方足利氏にゆかりのある城跡である。一部宅地となっているが，堀跡の保存状態は良好である。

注 1　金井忠夫　「ひびき」5～8　埼玉県立不動岡高校社会クラブ　1963～1966

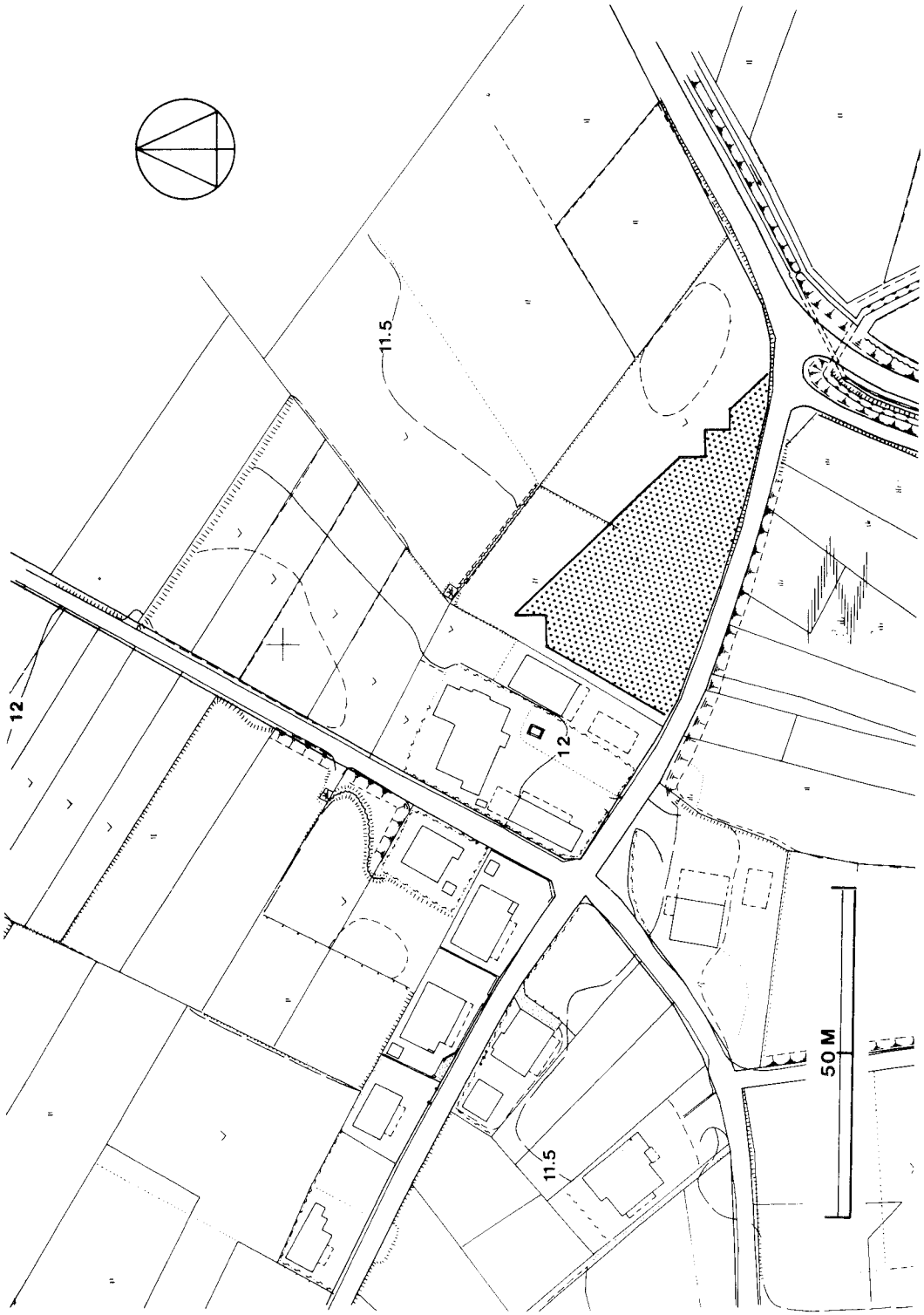
〃　「五霞村の貝塚」

注 2　立正大学考古学研究会　「坂間遺跡B地点発掘調査報告概要」　1974

注 3　茨城県猿島郡五霞村教育委員会　「石畑遺跡」　1977・3



第２図　冬木Ａ貝塚全体図



第３図　冬木Ｂ貝塚全体図

第3章　冬木A貝塚

第1節　貝層・人骨・自然遺物

今回の発掘では，土層をⅠ層（表土）・Ⅱ層（黒色土・黒褐色土）・Ⅲ層（暗褐色土）・Ⅳ層（褐色土，一部地山）とした。貝の混入が見られる場合，それぞれに「K」を付し，これを表わした。「ⅠK層」・「ⅡK層」の如くである。

純貝層は全て表土下にある。混土貝層・混貝土層は純貝層と同一層位を成す場合が多く，一部がⅢ層に落ち込みを見せていた。しかし，各貝層には明瞭な重層関係は認め難く，土器も層位により決まった形式を出土したわけではない。Ⅱ・ⅡK各層の出土遺物は堀之内式に属するものが圧倒的に多く，称名寺式・加曽利B式・安行式に属するものがわずかに混在していた。

1．貝　　層

冬木A貝塚における貝層の堆積は，図に示したように6ヶ所が確認された。この中で、a～cの各堆積区はその規模が小さく，廃棄された遺構内に投棄された貝殻によって形成されたものと判断される。ここでは、d～fの各堆積区について論述する。

d堆積区（図5）

全面に貝殻が散布するものの一様ではなく，堆積の厚さ・貝殻の密集の度合はさまざまである。また，純貝層の下から住居址等の遺構が検出され，その周辺には混土貝層・混貝土層が見られた。このことは，廃棄された遺構等に対する貝殻の投棄の範囲が，堆積の進展に伴って漸次拡大し、ついに連続するに至ったものと理解することができる。

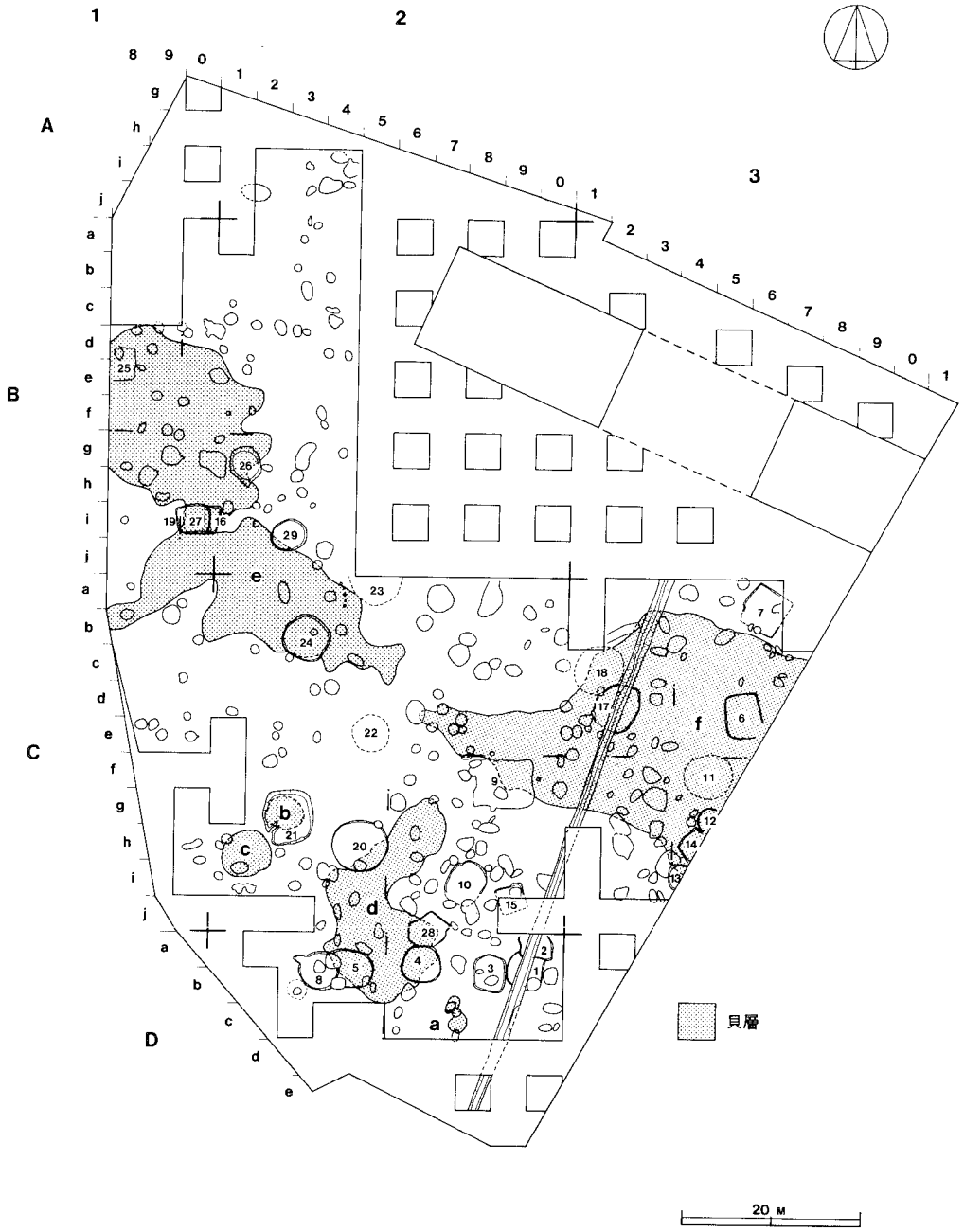
本堆積区の貝層を構成する貝類はシジミが大部分を占め，一部にカワニナを混ずるがほとんど単一種から成ると言える。

断面図の$C2i_6$・h_6には暗褐色土層中に黒褐色混貝土層の落ち込みが見られ、その上に堆積する黒色混貝土層にはさまれるように貝殻が集中して堆積している部分があることが認められる。この部分が遺構の一部であることは確実であり，調査を進めた結果，第20号住居址が確認された。

本堆積区の貝層下及び周縁部からは，第2号・11号・15号・17号の各人骨が発見された。土器は，堀之内式期のものが大部分を占め，称名寺式期のものが散見される。

e堆積区（図6）

部分的に貝殻が密集する堆積状況が観察された。貝層はd堆積区と同様の過程を辿って形成されたものと思われる。エリアの西端は，土採りのために崖になっている。この崖面にも貝層の堆



第４図　冬木Ａ貝塚グリッド及び遺構配置図

積が見られた。これは本堆積区の一部であり，更に西へ伸びていたことを示すものである。土地の人達の話によれば，エリア西側の土が削り取られた部分にも貝殻が散布していたということであり，上記の事実はその裏付となろう。

純貝層は30～40 cmの厚さに堆積しており，d堆積区よりも広範囲に及ぶ。廃棄された遺構を埋めた後も，継続して貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。

本堆積区の貝層を構成する貝類は，d堆積区同様に少量のカワニナを混じ，大部分をシジミが占める。しかし，C1区内にはタニシを多量に含む純貝層が見られた。

断面図の$B1e_9$には，暗褐色土中に混貝土層の落ち込みが見られ，その上に堆積している純貝層にも混貝土層中に落ち込んでいる部分があることが認められる。この部分に遺構があるものと予想されたが，床・柱穴等を確認することはできなかった。$B1f_9$・g_9にも土壙状の落ち込みが見られ，第159号土壙・第153号土壙が確認された。第153号土壙が暗褐色混土貝層を堀り込んでいることは，断面図から判断することができる。さらに，この土壙の覆土に堆積する黒褐色混土貝層が$B1f_9$の北端付近まで8 mにわたって堆積しており，暗褐色土・暗褐色混土貝層を堀り込んだような状態にあることが認められる。この部分でも遺構の存在が考えられたが，確認することができなかった。

本堆積区の貝層中及び貝層下からは，第1号・4号・7号等11体の人骨が発見された。土器は，堀之内式期のものが大半を占め，北半と南端付近に加曽利B式期のものが少量認められる。

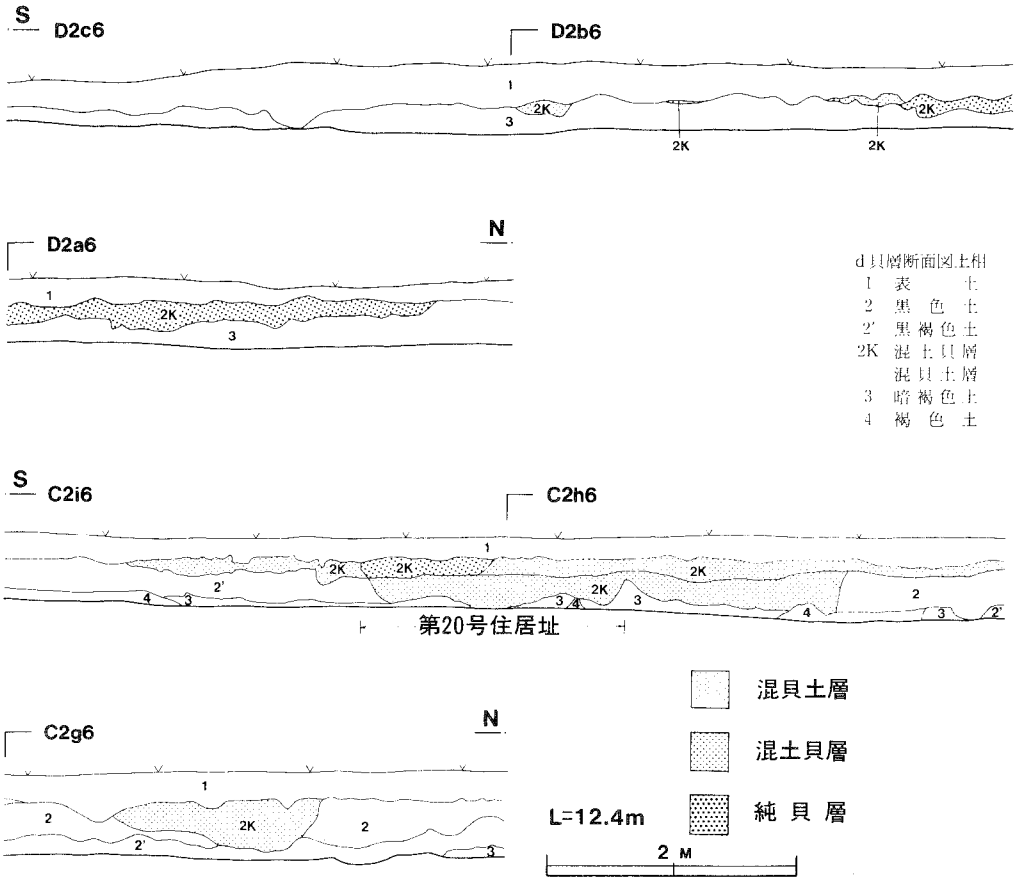
f堆積区（図7）

本貝塚中最も大規模なものである。表土にも貝が散布しているのが顕著に認められた。エリア東側の陸田にも貝の散布が認められ，更に東へ伸びていることは確実である。貝層の形成過程は，d・e各貝層と同様であったと思われる。貝殻が密集する様子は，断面図においても顕著に認めることができる。

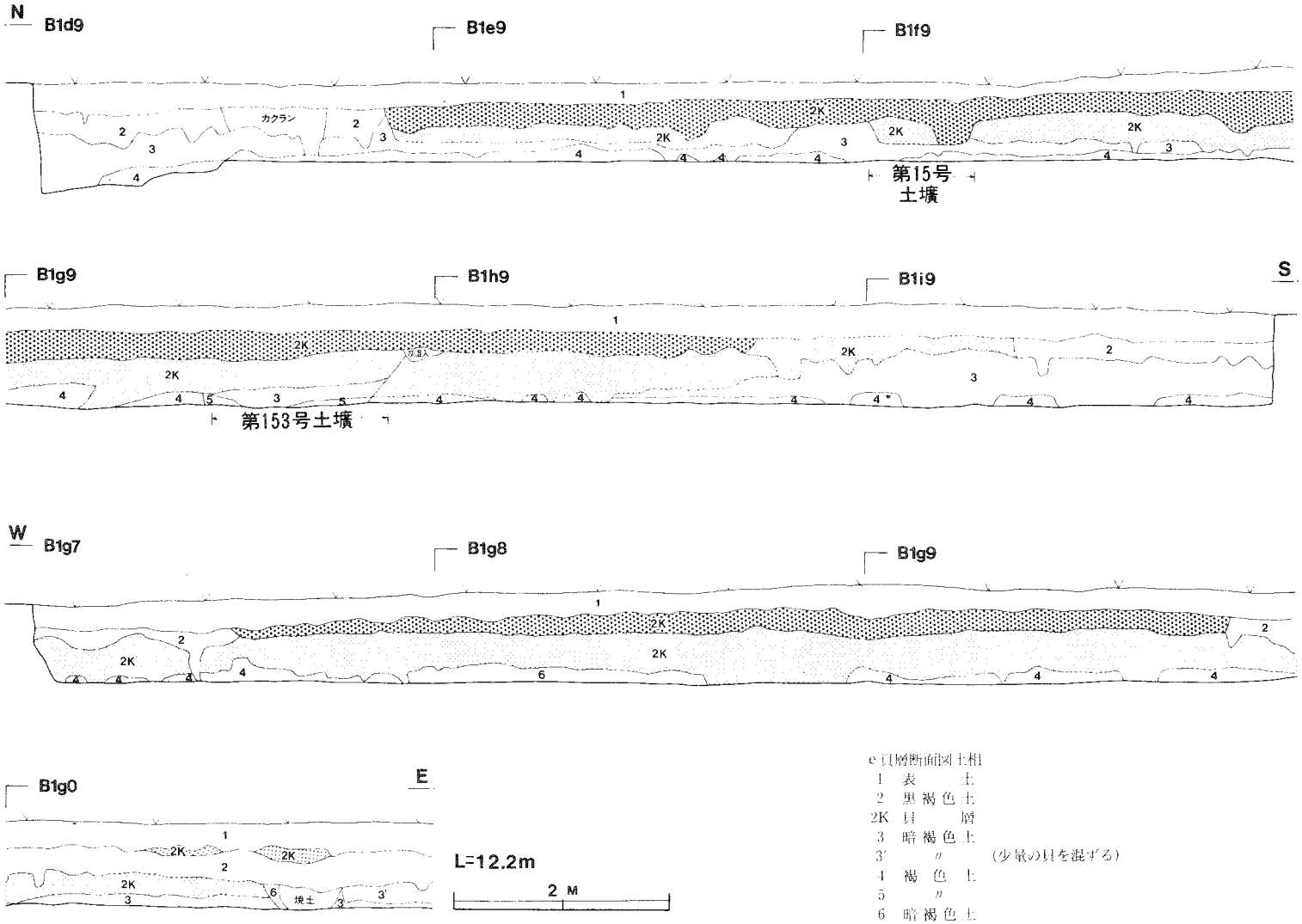
本堆積区の貝層を構成する貝類は，一部にタニシとシジミがほぼ半々に混在する純貝層が認められたものの，全体にシジミの占める割合が非常に高く，e堆積区と同様である。エリア東寄りの部分には，破砕されたシジミの貝殻を含む混貝土層が認められる。

断面図には，数ヶ所の純貝層が認められる。調査の結果，遺構も確認された。東西の断面図では，$C2f_0$に認められる純貝層下に第197号土壙があり，$C3e_4$・e_5の純貝層下には第11号住居址があった。$C3e_2$の純貝層下では東側純貝層下から第71号土壙，西側純貝層下から第77号土壙をそれぞれ確認している。断面から，第71号土壙が第77号土壙よりも古いと考えられた。出土遺物についても同様のことが言える。しかし，$C3e_3$の純貝層下には，遺構を確認することはできなかった。

本堆積区西端の貝層下からは，第5号・6号の人骨が発見されている。土器は，堀之内式期の


S
D2c6
D2b6
1
2K
3
2K
2K
2K
D2a6
N
1
2K
3
d貝層断面図土相
1 表 土
2 黒 色 土
2' 黒褐色土
2K 混土貝層
混貝土層
3 暗褐色土
4 褐 色 土
S
C2i6
C2h6
1
2K
2K
2K
2K
2'
4
3
3
4
3
4
3
2
2'
第20号住居址
C2g6
N
1
2
2K
2
2'
3
混貝土層
混土貝層
純 貝 層
L=12.4m
2 M

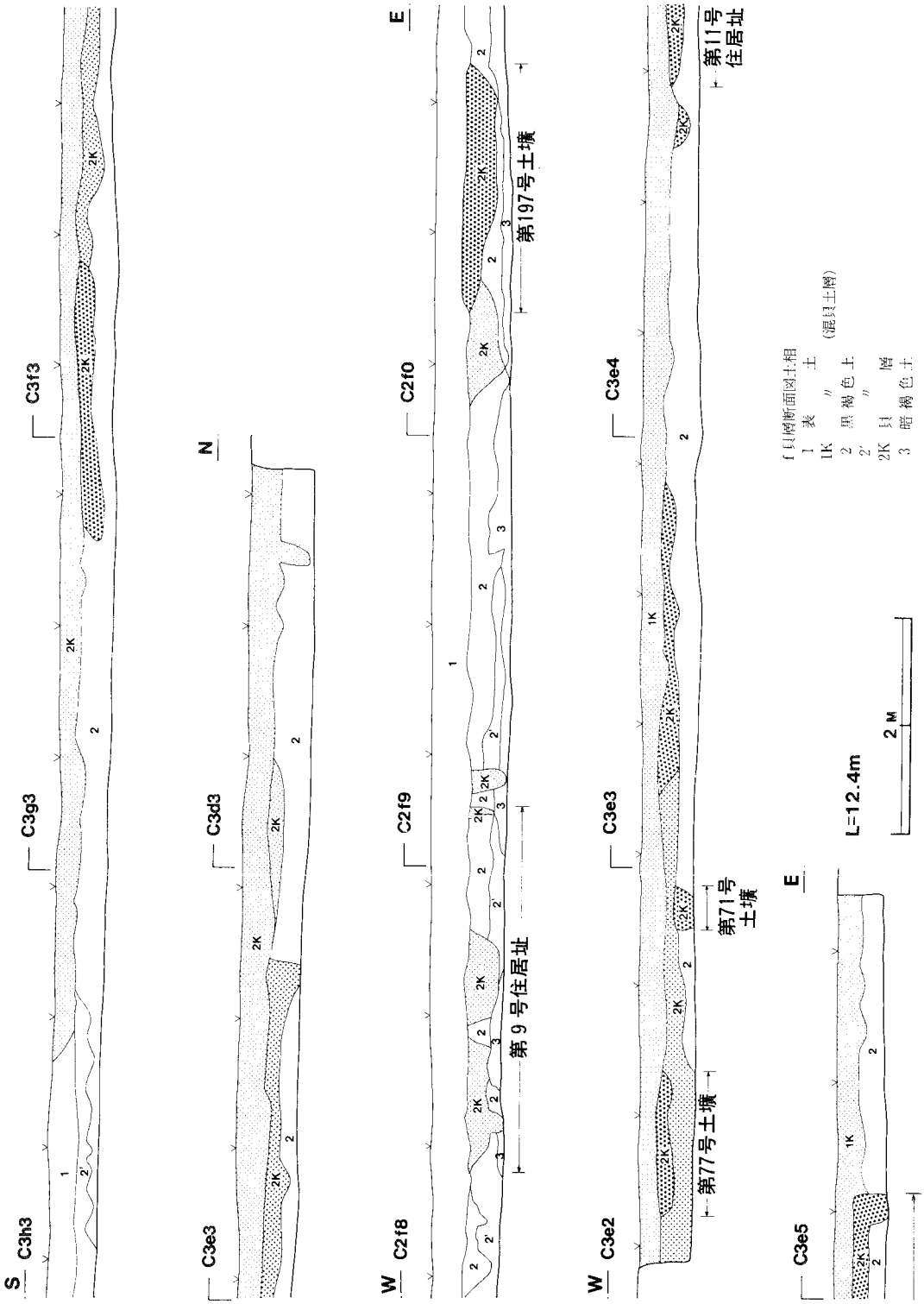
第 5 図　d 貝層断面図



e貝層断面図土相

1　表　　土
2　黒褐色土
2K　貝　　層
3　暗褐色土
3′　　〃　　（少量の貝を混ずる）
4　褐　色　土
5　　〃
6　暗褐色土

第6図　e貝層断面図


S
C3h3
C3g3
C3f3
N
C3e3
C3d3
W
C2f8
C2f9
C2f0
E
第9号住居址
第197号土壙
W
C3e2
C3e3
C3e4
第77号土壙
第71号土壙
第11号住居址
E
C3e5
L=12.4m
2 M
f貝層断面図土相
1 表 土
1K 〃 (混貝土層)
2 黒褐色土
2' 〃
2K 貝 層
3 暗褐色土

第7図　f 貝層断面図

ものが大部分を占め，一部に加曽利B式期のものが認められた。

以上のように，冬木A貝塚の貝層はその大部分がシジミによって形成されており，ほとんど単一種から成ると言っても過言ではない。C1区・C3区に部分的にタニシを多量に含む貝層が存在する以外は，少量のカワニナを認めるにすぎない。

貝層下には遺構を確認する場合が多い。貝層の堆積は，廃棄された住居址等への貝殻の投棄によって進展したと言える。人骨の埋葬場所は，貝層下及びその周縁に集中する。これは骨の保存の可能性と関係があることはもちろんであるが，いずれも堆積区の周縁部に近く，貝層の堆積が比較的薄い部分であることを併せ考えると興味深い。

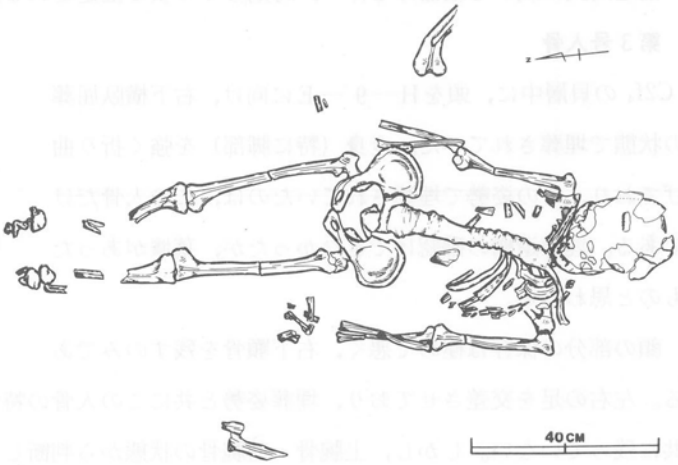
2．人　骨

冬木A貝塚において出土した人骨は，以下にその出土状況を詳述する。文中「右膝位」とは，人骨の膝が体の中心線よりも右側に位置する事を意味する。頭位は，骨盤の中央（またはそれに相当する場所）と頭頂部を結び，決定した。

第1号人骨

$C2a_3$ の貝層中に，頭をS—10°—Eに向けた仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

脚部はほぼ南北に真直に伸ばしているが，骨盤及び背骨は20°ほど東へ曲がり，首から上が再び南北に真直になる。一見投げ出されたような印象を受ける。顔は西へ傾いている。



第8図　第1号人骨

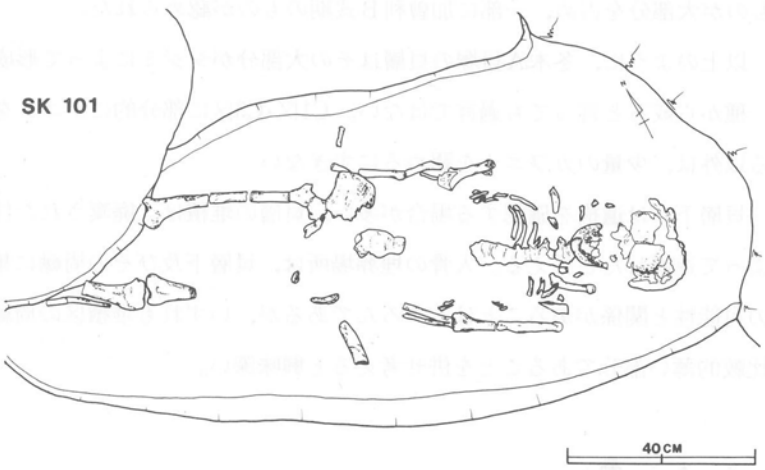
本貝塚において出土した人骨の中では，保存状態は良い方であるが，右手骨及び左右の脛骨以下の部分の保存は悪かった。脱落したものと思われる歯が数本，顎骨周辺に見られた。土圧のため骨盤が押し広げられた状態にあり，長骨も折れていた。頭部は右側頭方向からの圧力により，つぶれかかっていた。

発掘に際し，堀之内式に属する土器片の出土をみたが，人骨の時期を示すものか貝層の堆積時期を示すものか，確証は得られなかった。

第2号人骨

$C2g_7$ の貝層下に，頭をS—59°—Eに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は，

平面形状が長楕円形を呈する墓壙であるが，長径は不明である。短径は70cmを計る。なお，膝から下の部分は，第101号土壙によって切られている。



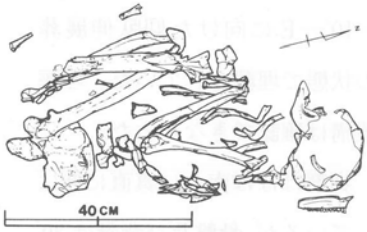
第9図　第2号人骨

下顎骨は歯と共に比較的良く残っていたが，上顎骨にほとんど残っていない。この上顎から脱落したと思われる歯が，頸椎付近において検出された。骨盤から上の部分は保存が悪く，背骨及び左右の手骨はほとんど残っていない。大腿骨及び脛骨の遺存部の保存は良い。しかし右腰部から右大腿部にかけて攪乱を受け，特に右大腿骨はほとんど直立していた。

堀之内式に属する土器片を伴い，時期もその頃と推定される。

第3号人骨

$C2f_4$ の貝層中に，頭をH—9°—Eに向け，右下横臥屈葬の状態で埋葬されていた。全身（特に脚部）を強く折り曲げており，この姿勢で埋葬されていたのは，この人骨だけである。埋葬遺構の確認はできなかったが，墓壙があったものと思われる。



第10図　第3号人骨

顔の部分の保存は極めて悪く，右下顎骨を残すのみである。左右の足を交差させており，埋葬姿勢と共にこの人骨の特色となっている。両足骨・両手骨共に残っていない。しかし，上腕骨・前腕骨の状態から判断して，両手は胸のあたりでそろえていたようである。後頭骨下に鹿の下顎骨があり，副葬品の可能性がある。

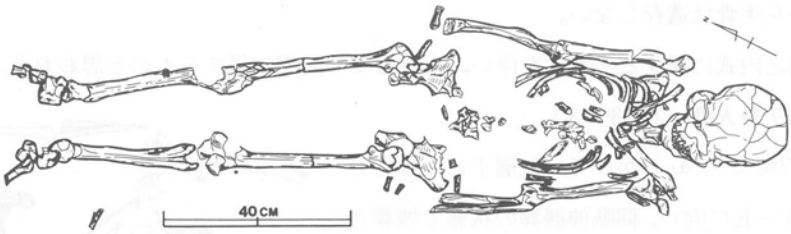
堀之内式に属する土器片と加曽利B式に属する土器片を伴うが，貝層形成と人骨埋葬のいずれの時期を示すものかは不明である。

第4号人骨（写23—1・2）

$C2c_6$ の貝層下に，頭をS—25°—Eに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は，平面形状が長径 240 cm・短径 70 cm の長楕円形を呈する墓壙である。

上顎右第2門歯が抜歯を受けているのが，この人骨の特色である。また，左上顎が下顎にくいこみ，上顎左第2門歯及び犬歯が脱落していた。右鎖骨の上において2本の歯が見られ，その形

状から脱落した歯であると思われる。これは，左側頭方向から強い土圧を受けたためと思われる。この他にも，左右大腿骨・右前腕骨・左上腕骨がほぼ中央で折れており，やはり土圧の影響によるものと推測される。なお，左右の手骨は遺存していない。

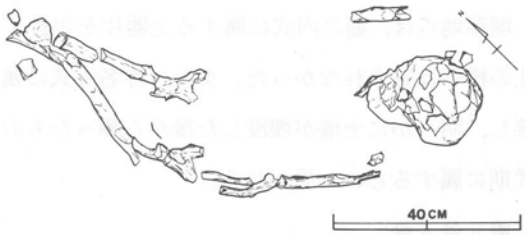


第11図　第４号人骨

本貝塚で出土した人骨の中では，最も保存状態が良好であったにもかかわらず，伴出遺物に乏しく，時期は不明である。

第５号人骨

$C2d_8$ の貝層下に，頭をＳ—48°—Ｅに向け，右膝位仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は，長径 100 cm・短径 50 cm の楕円形を呈する墓壙である。



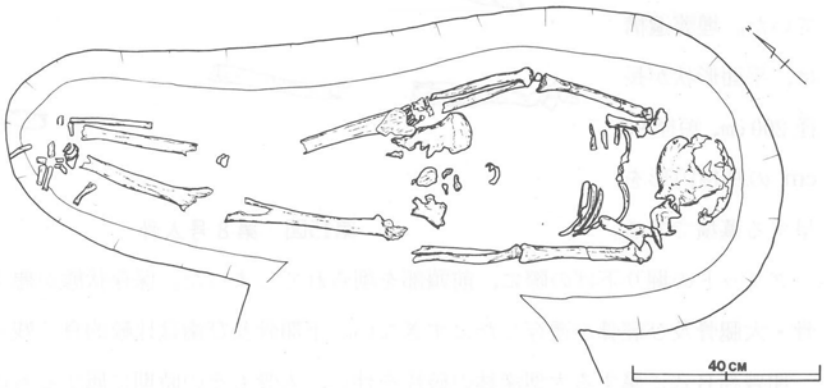
第12図　第５号人骨

保存状態が悪く，遺存する骨もわずかであり，非常に脆かった。

墓壙内に堀之内式に属する土器片が見られたが，人骨の時期を確定するには至らなかった。

第６号人骨

$C2d_7$ の貝層下に，頭をＳ—45°—Ｅに向け，伏臥伸展葬の状態で埋葬されていた。伏臥の状態にあったのは，この人骨のみである。埋葬遺構は，平面形状が長径 170 cm ・短径 70 cm の楕円形を呈する墓壙である。



第13図　第６号人骨

壙底はゆるいスリバチ状を呈し，人骨もわずかに弓なりに反っていた。足は墓壙端にかかり，顔は左頬側を下にし，右側頭部を上にしていた。胸部・背骨の保存は悪い。右手骨は右腰部の下に入り込み，右膝を少し折り曲げるなど，埋葬の際に墓壙に投げ込まれたかのような印象を受け

る。左手骨は遺存しない。

堀之内式に属する土器片を伴い，人骨もその時期に属するものと思われる。

第7号人骨（写23—3）

C2a$_3$ から a$_4$ にかけての貝層下に，頭をS—25°—Eに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

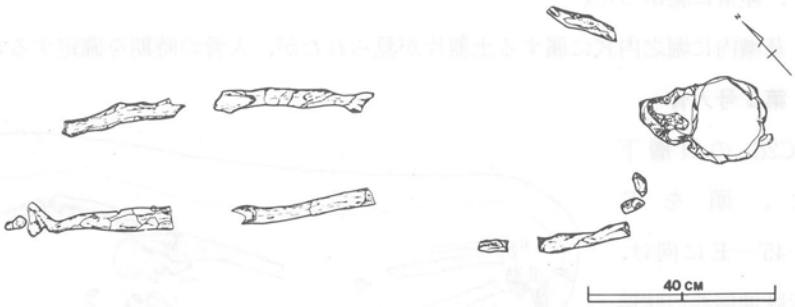
第14図　第7号人骨

この人骨は，頭部が目と耳を結ぶ線で上下に分かれ，上部が後方及び右方へそれぞれ4分の1回転した状態にあり，さらに左手骨が大きく腰部の下へもぐり込み，右寛骨の下で右手骨と重ねられた状態にあるという特異な埋葬形態を呈していた。

埋葬地点は，堀之内式に属する土器片を包含する貝層の下約30 cmであり，しかも貝層には攪乱の様子は見られなかった。また，称名寺式に属する土器片を出土した第149号土壙が東側に隣接し，明らかに土壙が埋没した後から葬ったものと判断された。このことから，本人骨は堀之内式期に属するものと思われる。

第8号人骨

C2b$_4$ から b$_5$ にかけての貝層下に，頭をS—54°—Eに向けて埋葬されていた。埋葬遺構は，平面形状が長径200 cm，短径90 cmの長楕円形を呈する墓壙である。



第15図　第8号人骨

グリッドの堀り下げの際に，前頭部を削られてしまった。保存状態が悪く，頭部・左右の上腕骨・大腿骨及び脛骨が遺存したにすぎない。下顎骨及び歯は比較的良く残った。

加曽利B式に属する大型深鉢の破片を伴い，人骨もその時期に属するものと思われる。

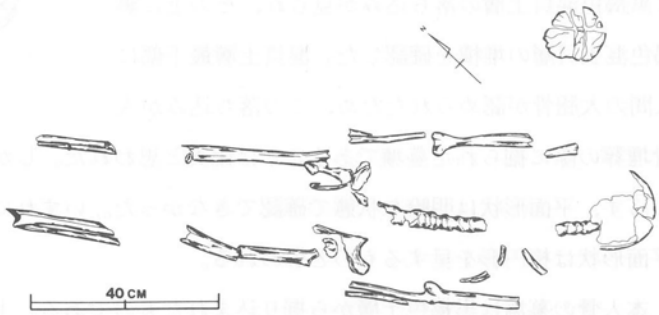
第9号人骨

C2a$_4$ の貝層下に埋葬されていた。保存状態は劣悪であり，しかも下半身部に攪乱を受けているため，頭位・葬法ともに不明である。埋葬遺構の存在は確認された。平面形状が円形を呈する墓壙と思われる。しかし，北半に攪乱があり，長径方向が南東を示すと思われること以外には，判然としない。

第16図　第９号人骨

第 10 号人骨（写 23—３）

C2a$_4$ の貝層下に，第７号人骨と並ぶように頭をＳ—38°—Ｅに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

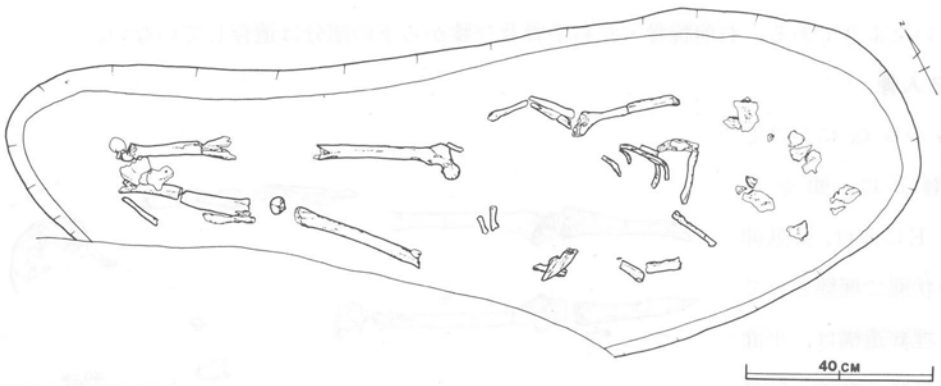


第17図　第10号人骨

右側頭部から右肩部にかけて攪乱を受け，頭蓋骨の破片が右上腕骨の東側 20 cm の所にあった。保存はあまり良い方ではなく，左右の手骨・膝関接部・足骨は遺存しない。

上部を覆う貝層は堀之内式に属する土器片を包含し，しかも本人骨の下には称名寺式期に属する第 149 号土壙があり，人骨は堀之内式期に属するものと思われる。

第 11 号人骨



第18図　第11号人骨

第２号人骨の南側に隣接し，頭をＳ—62°—Ｅに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。２体の人骨が意図的に並べられて埋葬されたものとは思えない。埋葬遺構は確認できなかった。

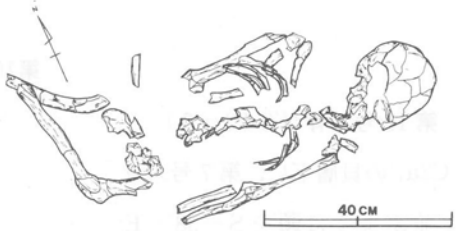
頭蓋骨は原形をとどめないほどバラバラになっていた。又，９月末の台風の際に厚板がぶつか

り，かなりの骨が壊れた。この時，右側頭部に相当する位置が崩れ，石鏃が発見された。しかし，人骨に伴う（または射込まれた）ものと判断することはできなかった。

時期は不明である。

第 12 号人骨

C2b$_5$ からc$_5$ にかけての貝層下に，頭をS—79°—Eに向け，右膝仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。両グリッド間のベルトの断面に，暗褐色土中に黒褐色混貝土層の落ち込みが見られ，その上に黒褐色混土貝層の堆積を確認した。混貝土層最下部に人間の大腿骨が認められたため，この落ち込みが人骨埋葬の際に掘られた墓壙であることは確実と思われた。しかし，慎重に調査を進めたにもかかわらず，平面形状は明瞭な状態で確認できなかった。いずれにせよ，墓壙の存在は確実であり，平面形状は楕円形を呈するものと思われる。



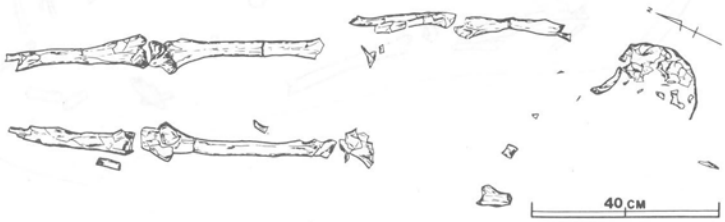
第19図　第12号人骨

本人骨の墓壙は黒褐色土層から掘り込まれたものである。上に堆積する混土貝層は，さらに西へ伸びるが，墓壙から西へ 1m 程の所で切れる。墓壙覆土中に貝の混入が見られ，埋葬地点にすでに貝が投棄されていたことをうかがわせる。混土貝層は，埋葬後に投棄された貝が堆積したものであろう。この貝層には加曽利B式期の土器が見られ，人骨もその時期に属するものと思われる。

額から顔に相当する部分にかけて陥没しており，頭頂部がひさし状を呈していた。顔は左側を向いていたようである。右前腕骨・左右手骨及び膝から下の部分は遺存していない。

第 13 人骨

C2b$_4$ から c$_4$ にかけての貝層下に，頭をS—27°—Eに向け，仰臥伸展葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は，平面形状が長径 230cm・短径 80cm のの長楕円形を呈する墓壙である。



第20図　第13号人骨

墓壙の下から，第 24 号住居址のピット列の一部が検出された。この住居址の時期は加曽利B式期と思われることから，人骨の所属する時期はそれ以降と判断される。しかし，明確な時期を決定することはできなかった。

頭部左半分と左肩に攪乱を受けている。保存状態は劣悪で，長骨が遺存しているのみである。

第 14・16 号人骨

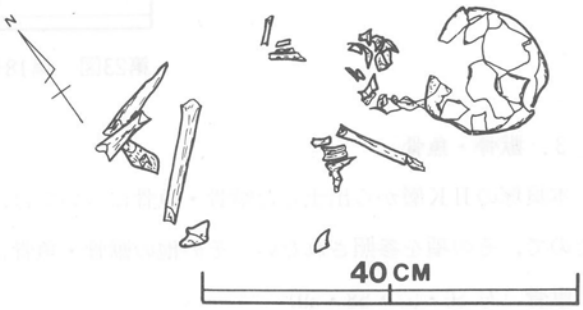
いずれも第 4 号人骨の周辺で発見された頭蓋骨の破片で，発見順に番号を付したものである。第 4 号人骨が埋葬された際に攪乱を受けた人骨と思われる。

時期は不明である。

第 15 号人骨（写 23－4）

$C2g_7$ からh_7 にかけての貝層下に，頭をS－80°－Eに向け，右膝位仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は確認できなかった。

骨は全体に小さくて薄く，脆かった。下顎骨を発掘する際に歯冠が抜け落ち，歯槽内に萌出しようとしている歯があることが認められた。これは，この人骨が永久歯の萌出前（または萌出期中）に葬られたものであることを示しているものと思われる。



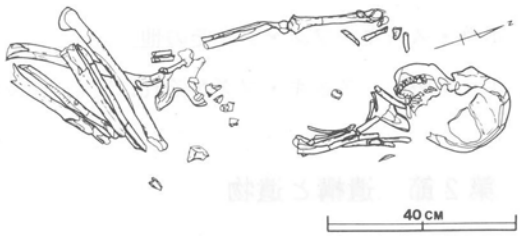
第21図　第15号人骨

時期は不明である。

第 17 号人骨（写 23－5）

$C2j_6$ の貝層下に，頭をN－16°－Eに向け，右膝位仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。埋葬遺構は，平面形状が長径 150cm・短径 60cm の楕円形を呈する墓壙である。

左足は強く折り曲げられ，右足の上に重ねられている。左腕はひじで曲げられ，手は顔の付近にあったものと思われる。頭蓋骨全体が左に傾いており，左手を左頬に添えて首をかしげたような状態である。上顎骨はほとんど遺存せず、歯だけが並んでいた。下顎骨は歯とともに比較的良好な保存状態であった。



第22図　第17号人骨

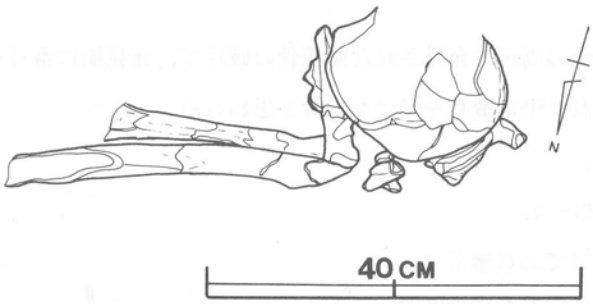
時期は不明である。

第 18 号人骨（写 23－6）

$B2j_4$ の貝層下に埋葬されていた。埋葬遺構は小規模な墓壙である。平面形状は判然としない。

死後バラバラされた骨を，小さな墓壙内に乱雑に積み重ね，最後に頭骨を乗せたような状態にあり，再葬が行なわれたものと思われる。保存状態は劣悪であり，遺存した部分も少なかった。

時期は不明である。



第23図　第18号人骨

3．獣骨・魚骨

本貝塚のⅡK層から出土した獣骨・魚骨については，東京大学助教授赤澤威氏に分析を依頼したので，その項を参照されたい。その他の獣骨・魚骨については，以下に簡単に記す。

獣骨（写56・57・58・59）

シカ・イノシシ・イヌ・タヌキ・テン

シカ・イノシシが大部分を占める。両者を比較すると，シカの方が多い。テンは下顎骨1点を確認したのみである。

魚骨（写60・61・62）

ボラ・スズキ・フグ・タイその他

ボラが多く，スズキ・フグがそれに次ぐ。その他は数点を確認したのみである。

第2節　遺構と遺物

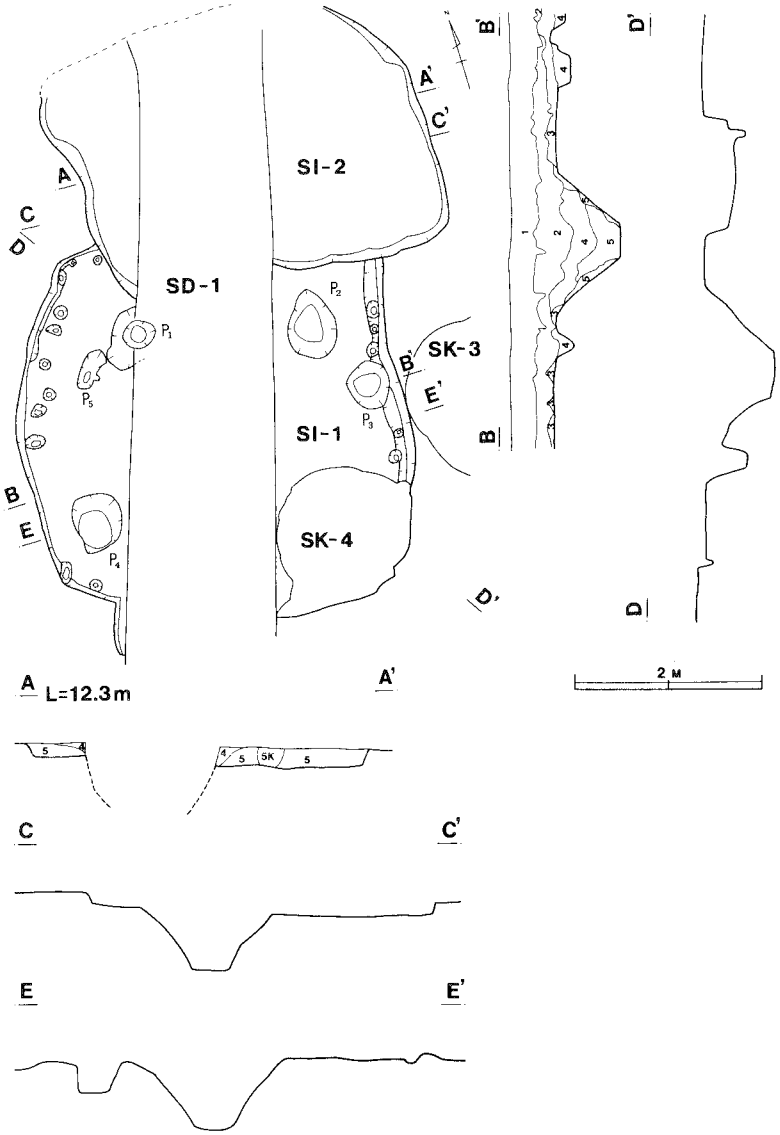
1．住 居 址

第1号住居址（実測図　図24，遺物　図29，写5－1）

本住居址は調査区南側D2区に位置し，第2号・第4号住居址と重複関係にある。第2号住居址との新旧をみると，当住居址の方が古いとみられる。なお南から北にかけて第1号溝が縦断している。

主軸方向はN－23°－Eで，長軸約4.15m，短軸約3.7mの隅丸方形を呈している。床面までの深さは5cm内外と非常に浅い。このため壁の立ち上がりは確実ではないが，ゆるやかに立ち上がるものとみられる。壁溝は東側及び西側に部分的に検出できた。壁溝内及び壁直下に径15cm，深さ15cm内外の壁柱穴があり，ほぼ25cmの等間隔で並んでいる。

床面はほぼ平坦であるが，締まりはない。炉址は検出できなかったが，恐らく第1号溝によって失なわれたものと考えられる。ピットは5ケ所検出され P_1～P_4 が主柱穴とみられるが，第4号



第24図　第１・２号住居址

第１号・第２号住居址土層解説

1	表　　土	
2	黒褐色土	(ＹＰ・ソフトロームブロック・粘土ブロックを含む)
3	褐　色　土	(細砂粒を少量含む)
4	黒褐色土	(ＹＰ・小レキを含む)
5	〃	(締まりなくＹＰ・ハードロームブロックを含む)
5Ｋ	黒褐色土	(混貝土層)
6	暗褐色土	(ソフトロームブロックを多量に含む)

土壙・第1号溝内にも存在したものと思われる。深さは 30cm～50cm であるが，P_4 は 88cm と例外的に深い。覆土は表土下第3層が浅く不規則に堆積し，柱穴などの落ち込みには小礫を含む黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少く，深鉢形土器片，磨石片などである。

第2号住居址（実測図　図24，遺物　図29）

本住居址は調査区南側D2区に位置し，第1号住居址・第1号溝と重複している。第1号住居址との新旧関係をみると本住居址のほうが新しいと考えられる。

主軸方向はN－87°－Wで，長軸 3.75m，短軸約 2.9m の不整方形を呈している。床面までの深さは 15～20cm 程で，壁はいずれも外傾して立ち上がる。柱穴をはじめ壁溝や壁柱穴は全く検出されなかった。

床面は締まりがなく，炉址は確認できなかった。遺構内覆土は1層のみで，部分的に混貝土層の混入がみられる。いずれにしても本住居址は第1号溝の掘り込みによる攪乱の影響が大きかったものと思われる。

遺物は少量で，称名寺式とみられる土器片が出土している。

第3号住居址（実測図　図25，遺物　図28・29・30，写5－2）

本住居址は調査区南側D2区に位置し，第1号住居址の西側に接している。なお床面上に第8号・9号土壙が存在しており，第9号土壙は明らかに本住居址を切って掘り込まれていることがわかるが，第8号土壙は確実ではない。

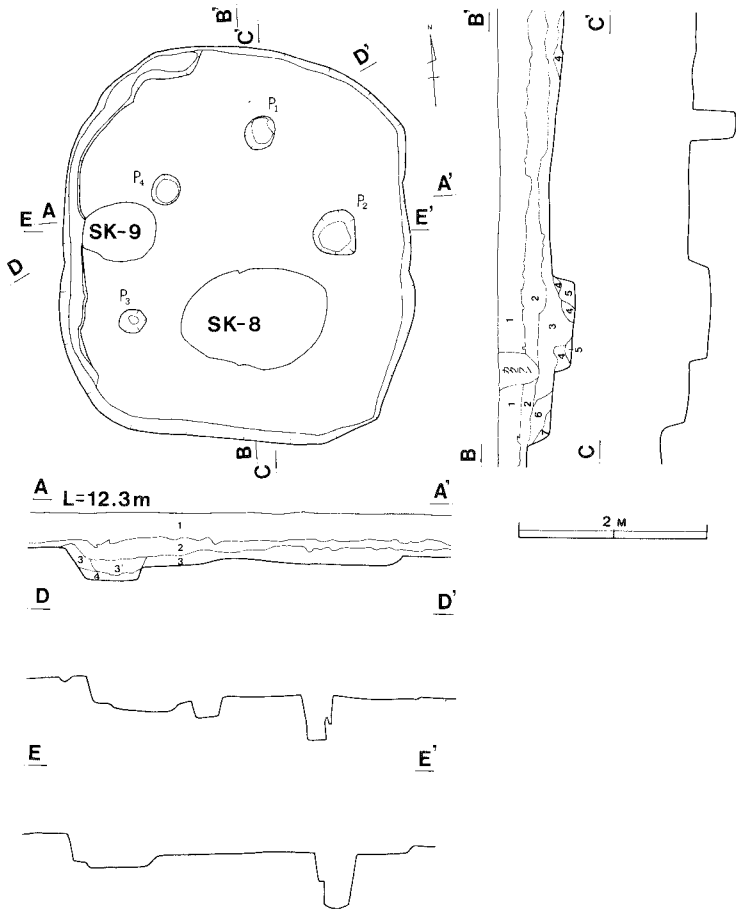
主軸方向はN－8°－Eで，長軸 4.13m，短軸 3.76m の隅丸方形を呈している。床面までの深さは，5～30cm で，南及び西に向かって傾斜しているが，凹凸はほとんどなく平坦である。したがって壁も南及び西側では明確に立ち上がりが認められるが，東及び北側ではほとんど認められない。

床面はロームで，中央部はやや締まっているが，周辺部は軟らかであり，炉址はない。ただ覆土中に焼土粒子を多量に含んだ土層の堆積がみられた。ピットは4本検出され，P_1・P_2 は 50～60cm と深いが，P_3・P_4 は 12～20cm と浅くなってしまう。

覆土は1層のみで，黄色パミス・焼土粒子を含む褐色土層である。南東部コーナー付近には少量の貝の堆積がみられた。床面からは 20～30cm ぐらい上面に当たる混貝土層である。

出土遺物は縄文土器片多数と，磨石1点，石棒片1点などである。

第4号住居址（実測図　図26，遺物　図30，写6－1）

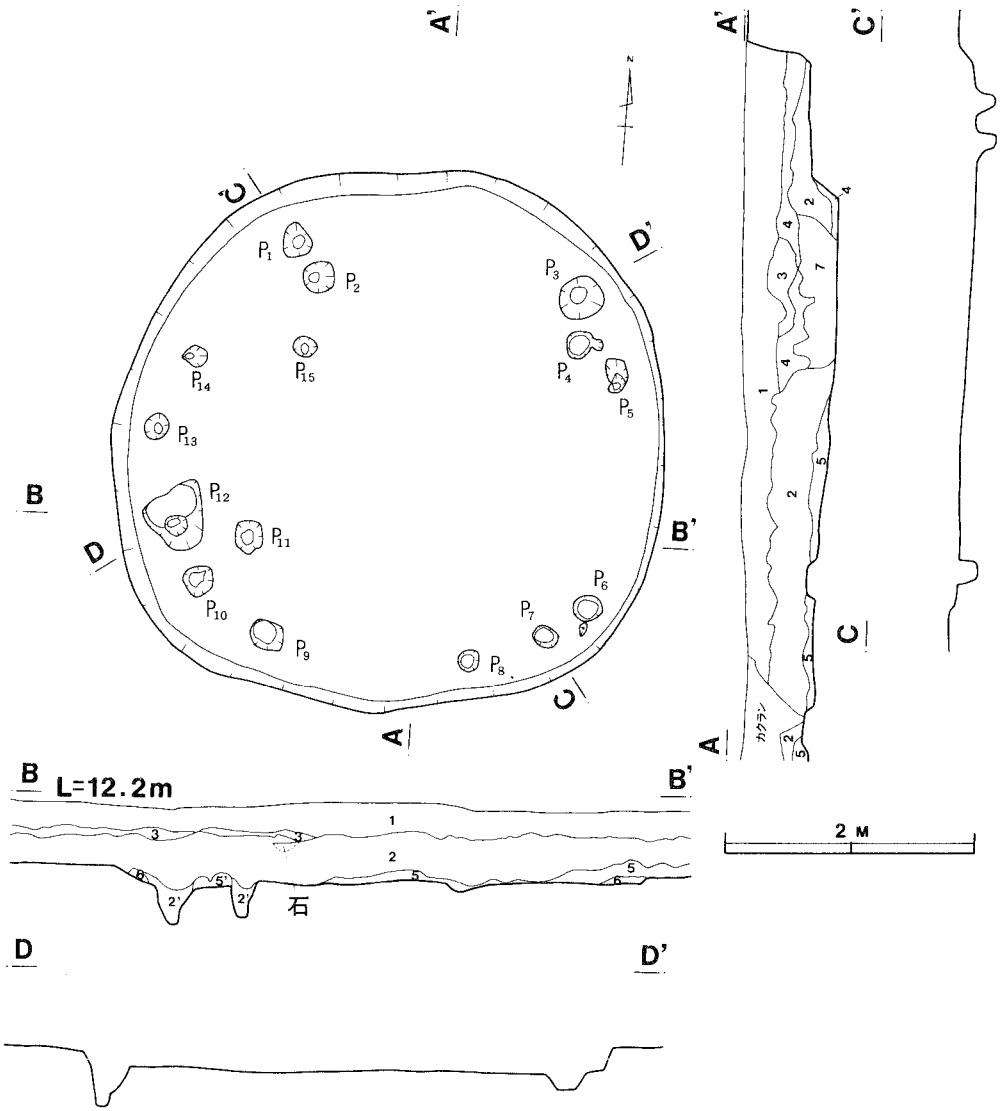


第25図　第３号住居址

第３号住居址土層解説

A—A′, B—B′

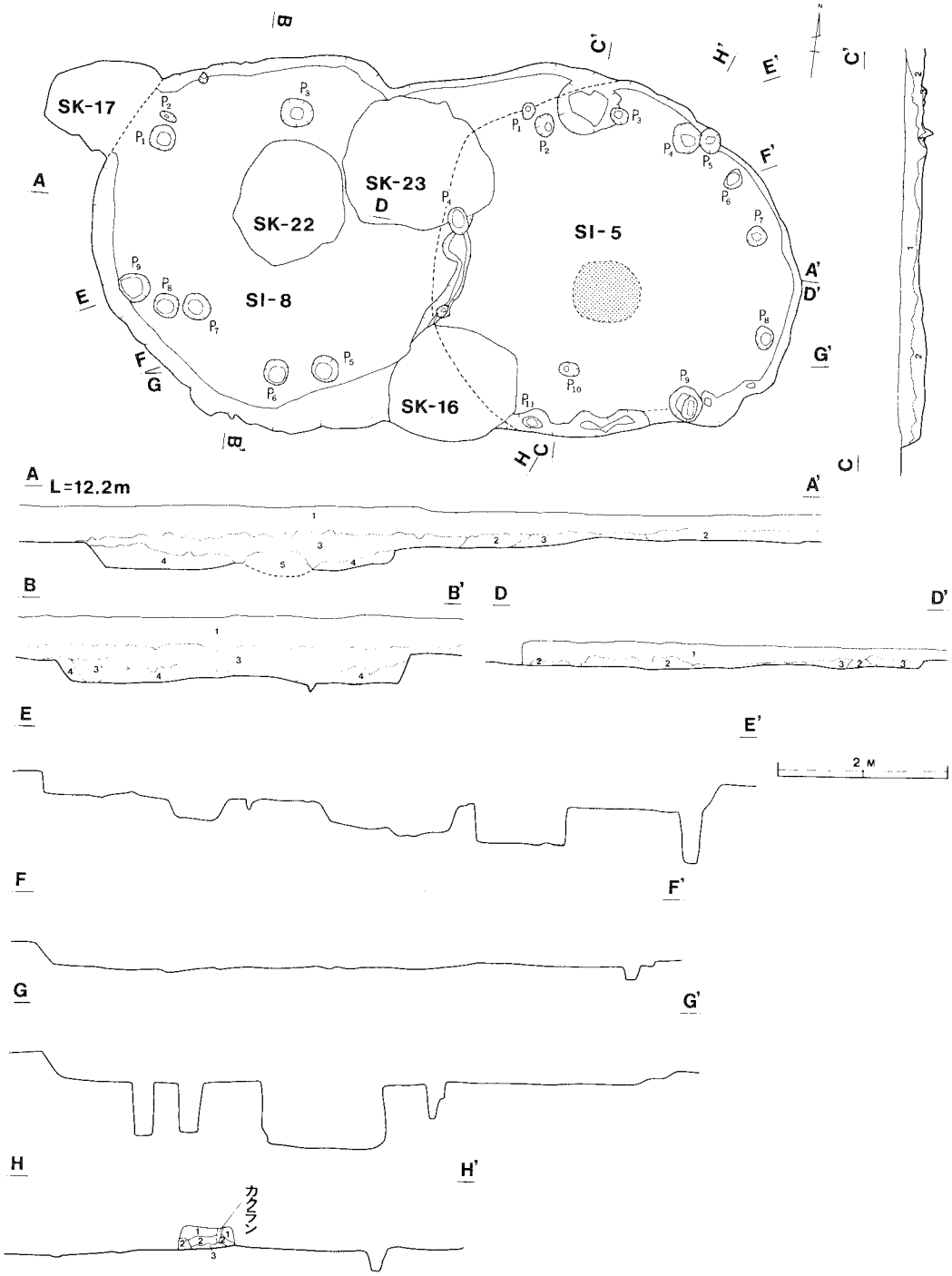
1	表　　土	
2	暗褐色土	(ＹＰ・焼土粒子を含む)
3	褐　色　土	(極めて固くＹＰ・焼土粒子を含む)
3′	〃	(３に同じ，ハードロームブロックを含む)
4	〃	(固く締まりハードロームブロックを多量に含む)
5	〃	(極めて固く粘性あり，ハードローム中にソフトロームが混入する)
6	暗褐色土	(ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
7	褐　色　土	(よく締まりローム質)



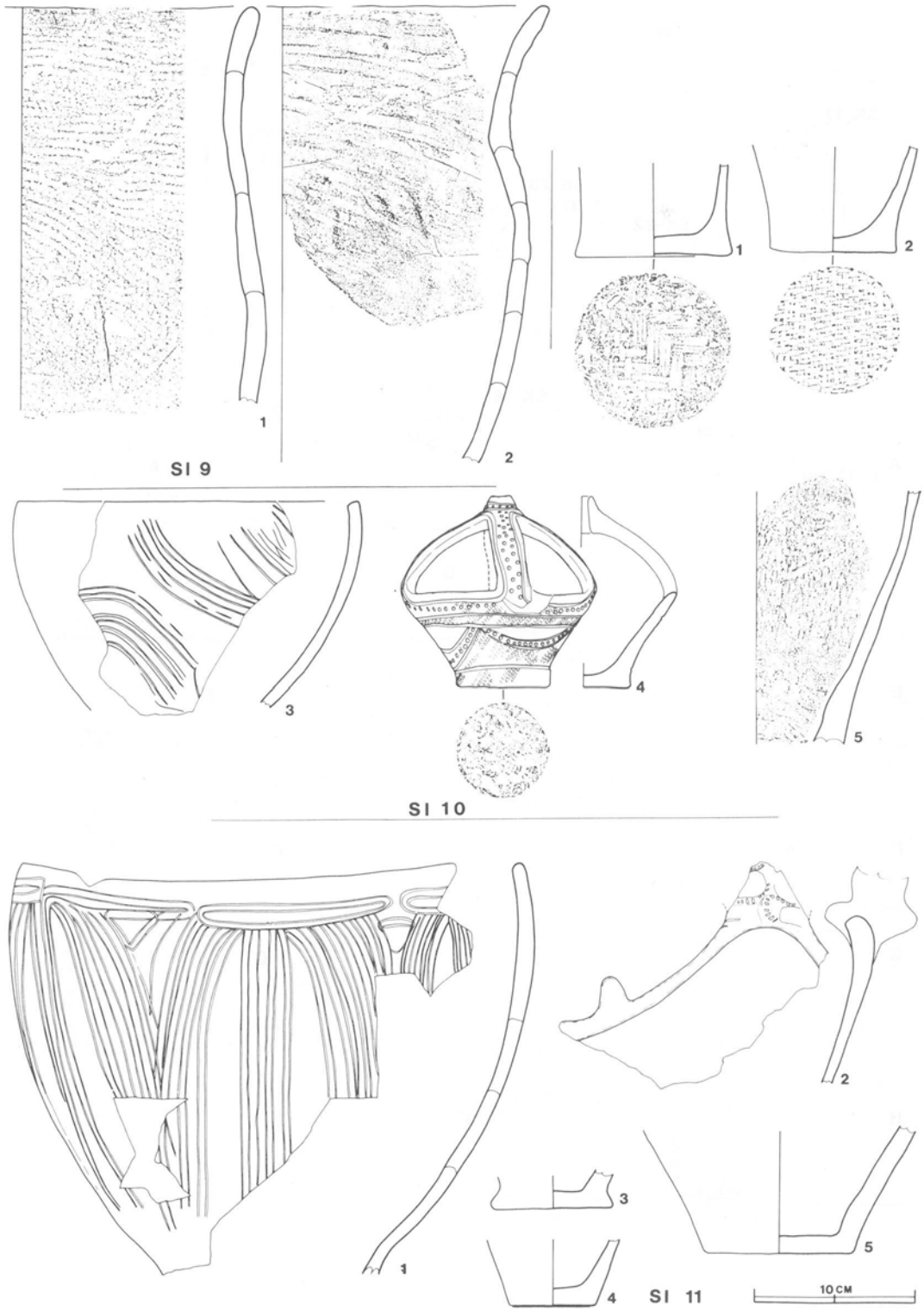
第26図　第４号住居址

第４号住居址土層解説

1	表　　土	
2	黒　褐　色　土	(ＹＰを含む)
2′	〃	(締まりなくソフトロームブロックを多く含む)
3	黒　　色　　土	(混貝土層)
4	極暗褐色土	(締まりなくＹＰ含む)
5	暗　褐　色　土	(よく締まりローム質)
6	〃	(ハードロームブロックを含む)
7	〃	(よく締まりパミスを多く含む)



第27図　第５・８号住居址



第28図　住居址出土遺物

第29図　住居址出土遺物

第30図　住居址出土遺物

表１　第28図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-09	1	深鉢形	口径 29.2 現存高 25.7 胴部最大径 29.8	縄文（RL）のみ施文 内面はヘラ整形	胎土にスコリア細粒を含む赤褐色を呈する
	2	深鉢形	口径 (32.8) 現存高 28.1	大型の粗製土器で，斜方向のヘラ削り整形がみられる	胎土に砂粒，スコリアを含む，にぶい褐色を呈する
SI-10	1	深鉢底部	口径 9.1 現存高 5.7 底径 9.6	外面　ヘラナデ 内面　ヘラ削り	胎土にスコリア砂粒含む，にぶい赤褐色を呈する
	2	深鉢底部	現存高 6.6 底径 7.8	内外面ともヘラ磨き整形，底部に網代圧痕を有する	胎土に砂粒を含有する。外面は，にぶい橙色を呈し，内面は，黒色を呈する
	3	鉢形	口径 21.9 現存高 12.7	内面は，ヘラ磨き，外面はヘラ削り整形，体部に半截竹管で孤状沈線を配する	胎土にスコリア砂粒を含有する。明褐色を呈する
	4	釣手形土器	器高 11.8 底径 5.8	平行沈線，孤状沈線による区割内に縄文・列点文を配する。釣手集合部は盛り上がり貫通孔を有する。底部網代痕	胎土に砂粒スコリアを含む。にぶい橙色を呈する(写39—７)
	5	深鉢形	現存高 15.5	胴部に粗い縄文（LR）を施す。内面は，ヘラナデ	胎土にスコリア砂粒を含む。灰黄褐色を呈する
SI—11	1	鉢形	口径 26.7 現存高 25.3	半截竹管による長楕円形のモチーフを施し，下位に懸垂文，孤線文を配しロート状空間に，三角形を図案化して配する	胎土に砂粒を含む。にぶい褐色を呈する
	2	波状口縁	現存高 13.4	口縁に粘土を盛り上げ，内彎させる波頂部は隆起させ刻みを配する	胎土に細砂粒を含む。黒褐色を呈する
	3	深鉢底部	底径 7.5	全面ヘラナデ整形	胎土に砂粒，スコリアを含有，外面は，明褐色，内面は黒色を呈する
	4	深鉢底部	現存高 4.1 底径 5.3	全面ヘラナデ整形	胎土に砂礫・スコリアを含有，黒褐色を呈す
	5	深鉢底部	現存高 7.6 底径 9.3	全面ヘラナデ整形	胎土にスコリア，砂粒を含む。にぶい褐色を呈する

表２　第29図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—01	1	口縁部		口縁部に横１条の沈線が走り部分的に浅い刺突文が残る	
	2	〃		１本の隆帯を貼付け，これになめ方向の刺突を加える。沈線区画内に縄文	
	3	〃		無文帯の中に横方向の沈線	
	4	〃		口縁部内彎・口唇下部に凹みをもち胴部にかけての地文はＲＬ	
	5	頸部		紐線で区切られ，上部は縄文を地文とし太目の沈線が横方向に２条	
	6	胴部		沈線で区画された中にまばらに縄文が施文される	称名寺式
	7	〃		縄文施文後沈線で区画され，区画外は磨消し	堀之内式
	8	〃		地文なし縦方向の隆帯に細かな刺突がある	〃
	9	〃		８の字状の粘土紐張り付け	〃
	10	〃		沈線で直線的に区画し，内部はＬＲの縄文。区画外は磨消し	〃
	11	〃		太い沈線が縦方向に走る。ヘラ整形	
	12	〃		沈線が主で若干の刺突がみられる	
SI—02	1	胴部		曲線状の沈線。ヘラ整形	
	2	〃		直線及び曲線の沈線で区画し内部に米粒状の刺突がある	称名寺式
	3	〃		粗製。縦方向の条線	
	4	〃		粗製。なめ方向の条線	
SI—03	1	口縁部		地文はＬＲの縄文で沈線。口唇部は平坦で刺突が施文される	
	2	〃		口縁部に２～３条の沈線が横方向に走る。胴部にかけて縄文	堀之内式
	3	〃		直線的な沈線で区画され，刺突が施文される	
	4	〃		口唇部直下に１条の沈線	
	5	〃		口縁部上端は無文。胴部の縄文とは沈線で区切される	

表３　第30図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—03	6	鉢形口縁部		口縁部はゆるく内彎する。頸部はくびれ１条の沈線が施される	堀之内式
	7	口縁部		口縁部はくの字状に内彎する。指頭大の円形刺突文が施される	〃
	8	〃		口唇部に１本の沈線。縦方向の蛇行沈線が施文される	〃
	9	〃		口縁部はゆるく外反し，口唇部に平行沈線が走り内部には連続刺突文が施文される	〃
	10	〃		紐線を貼り付ける。横方向の沈線間に右下がりの沈線が施文される	
	11	頸部		連続刺突文で文様帯が区画され上部は平行沈線文が施される	
	12	胴部		隆帯が縦及び横方向に走り，上に刺突が施される	
	13	〃		曲線状の平行沈線が施され，内部に連続爪形文が施される	
	14	〃		No.13 と同様に平行沈線十連続爪形文	
	15	〃		太い沈線が縦方向に施文され，間に曲線文が施される	
	16	〃		波状沈線が横走する。地文は縄文	
	17	〃		隆帯が楕円形に貼り付けられ，半截竹管文がみられる	
SI—04	1	口縁部		口縁部は外反して立ち上がる。平行沈線間を半截竹管により刺突で埋める	前期
	2	〃		口縁部は直立し，数本の沈線が横走する	
	3	〃		口縁部はゆるく外反し，平行沈線間に山形の平行沈線が施される	前期
	4	胴部		直線・曲線からなる沈線文。地文はまばらな縄文	〃
	5	〃		スリットの入る隆帯で区画され，下部は縦方向の細密線	
SI—05	1	胴部		平行沈線間に刺突を施す	
	2	口縁部		口縁部はゆるく内彎し無文である。口唇部に円形刺突が並ぶ	堀之内式
	3	胴部		２本の沈線が横走し，直下に三角形の刺突文が施される	
	4	〃		沈線文	
	5	〃		口縁部に近い胴部で２本の沈線が横走する。地文は縄文	
	6	〃		縦位及び斜位の平行沈線文。地文は荒い縄文	
	7	〃		縄文のみ	
	8	〃		沈線による曲線文	堀之内式
	9	口縁部		極めて荒い縄文のみ	

本住居址は調査区南側D２区に位置し，第３号・第５号住居址にはさまれており，本住居址に接する形で第28号住居址が北側に存在する。なお第28号住居址とは重複しており，新旧関係をみると本住居址の方が新しいものと思われる。

平面形は長径 4.63m，短径 4.5m の円形を呈し，床面までの深さは，北側で約 20cm，南及び西側は浅くなり 5～10cm 程である。よって壁も北側では外傾して立ち上がるが，南西部では明確な壁はみられない。壁溝及び壁柱穴は検出されていない。

床面はほとんど平坦であるが，わずかに北東部に向けて傾斜している。床全面がロームであり中央部を除き締まりがない。炉址は元来なかったものと思われる。ピットは 15 ケ所検出された。いずれも壁内側，円周上に並ぶように確認されたものが多い。直径 15～30cm，深さ 10～20cm のものが主であるが，P_1 だけは内部に段がつき，深さ 34cm を測ることができる。覆土は暗褐色土層のみであったが，自然堆積の様相をみせている。表土直下には部分的に混貝土層の堆積がみられる。

出土遺物は深鉢形胴部片などの縄文土器片の他，磨石片が１点出土している。

第５号住居址（実測図　図 27，遺物　図 30，写６－２）

本住居址は調査区南側D２区に位置し，第８号住居址，第 14 号・15 号・16 号・18 号・23 号土壙の各遺構と重複している。なお本住居址は第８号住居址に切られており，より古いことがわかる。第 16 号・23 号土壙は本住居址の床面を切っており，第 14 号・18 号土壙は床面上に検出された。

主軸方向はN－85°－Wで，長径 3.9m，短径 4.24m の楕円形を呈している。長径が短径より短いのは，西側４分の１程を第８号住居址に切られているためであり，本来は 5.5～6m 程になるであろう。床面までの深さは 20～30cm であるが，南側では壁は確認できず浅い壁溝だけの検出にとどまる。この壁溝も東及び北側では検出できなかった。

床面は平坦で締まりがあり，南側にゆるく傾斜を有する。中央やや南東寄りに炉址とみられる焼土の層が検出された。しかし床面の掘り込みもなく焼土層も極めてうすいものであることから長期間の使用を考えるのは無理であり，炉址かどうかの断定は避けたい。ピットは 11 ケ所確認され，壁及び壁溝に沿ってアトランダムに並んでいる。直径 15～40cm，深さ １０～５０cm を測るものが大部分である。

覆土は２層に分かれ，上層は混土貝層であり，遺構内全面に堆積していた。住居廃棄後の凹みに貝が捨てられたものであろう。貝はその大部分がシジミ類であった。

出土遺物の大半は混土貝層中からで，深鉢形土器の破片とみられるものが多数認められた。他に黒曜石の剝片が数点出土した。

第5号・8号住居址土層解説

A—A′, B—B′
1 表　　土
2 黒 褐 色 土 (混土貝層)
3 〃 (よく締まりYPを含む)
3′ 暗 褐 色 土 (3に同じ)
4 〃 (固く締まりYPを含む)
5 極 暗 褐 色 土 (混土貝層)
C—C′
1 黒 褐 色 土 (混土貝層)
2 〃 (粘土ブロック・ローム粒子を含む)
3 暗 赤 褐 色 土 (ローム層)
D—D′
1 黒 褐 色 土 (粘土ブロック・ローム粒子を含む)
2 暗 褐 色 土 (粘土が多い)
3 〃 (ローム粒子・貝を含む)
H—H′
1 暗 褐 色 土 (焼土粒子を含む)
2 黒 褐 色 土 (よく締まりYP・焼土粒子を含む)
2′ 極 暗 褐 色 土 (2層に同じ)
3 暗 褐 色 土 (ローム粒子・貝片を含む)

第6号住居址 (実測図　図31, 遺物　図35, 写7－1)

本住居址は調査区東側C3区に位置し, 北側に第7号住居址, 南西側に第11号住居址が検出されている。

主軸方向はN－7°－Wで, 長軸5.05 m, 短軸4.0 mの隅丸方形を呈している。南東コーナー部はエリア外のため確認できなかった。床面までの深さは南側で15 cm, 東側で12 cmであるが, 北及び北西部ではわずか数cmの立ち上がりが認められるに過ぎない。壁溝及び壁柱穴は検出されなかった。床面はロームで, それほど締まりはなく平坦であるが, 南から北に向けてゆるい傾斜を有している。炉址は確認されなかった。

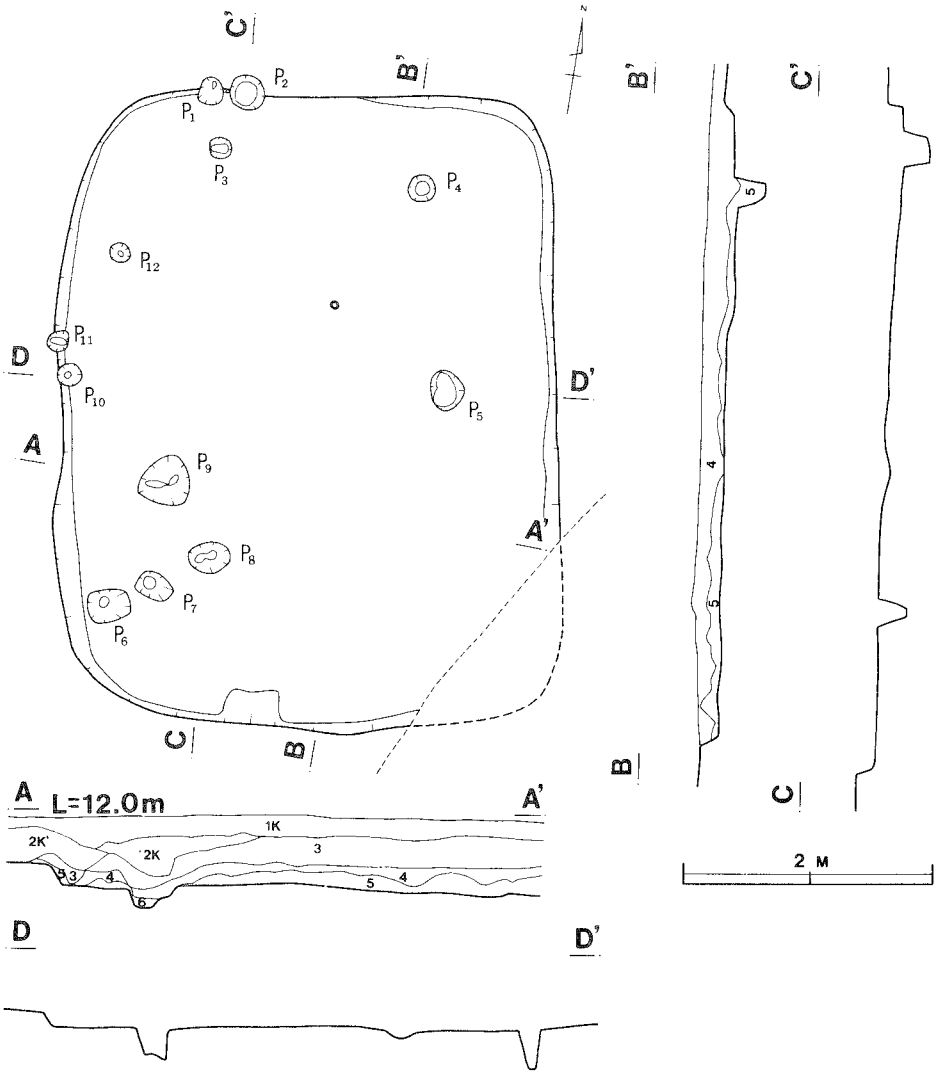
ピットは壁及び床面より12ケ所検出されたが, 位置及び形状はまちまちである。深さ20 cm前後のものが主で, P_6の46 cmが1番深いピットである。覆土は大きく2層に大別される。自然堆積と思われ, ともに良く締まりをおびた暗褐色土層である。覆土上部には貝の堆積がみられ, 厚さ15～45 cmである。西側では2層に分かれ, 上から完全な貝の多い混土貝層, 混貝土層であるが, 他は混土貝層だけである。なおこれらの貝層はそれぞれ焼土粒子を多く含むのが特徴である。

出土遺物は縄文土器片と打製石斧1点である。

第7号住居址 (実測図　図32, 遺物　図35)

本住居址は調査区東側C3区に位置し, 第24号・57号・59号土壙と重複している。各土壙とも本住居址よりは新しいと思われ, 中でも第24号土壙は明らかに住居址を切って掘り込まれたことがわかる。

主軸方向はN－30°－Eで, 一辺約4.7 m (推定) の方形を呈する。北及び東側は後世の攪乱やエリア外のため確認できなかった。床面までの深さは5～10 cm程で, 壁はゆるく外傾して立ち

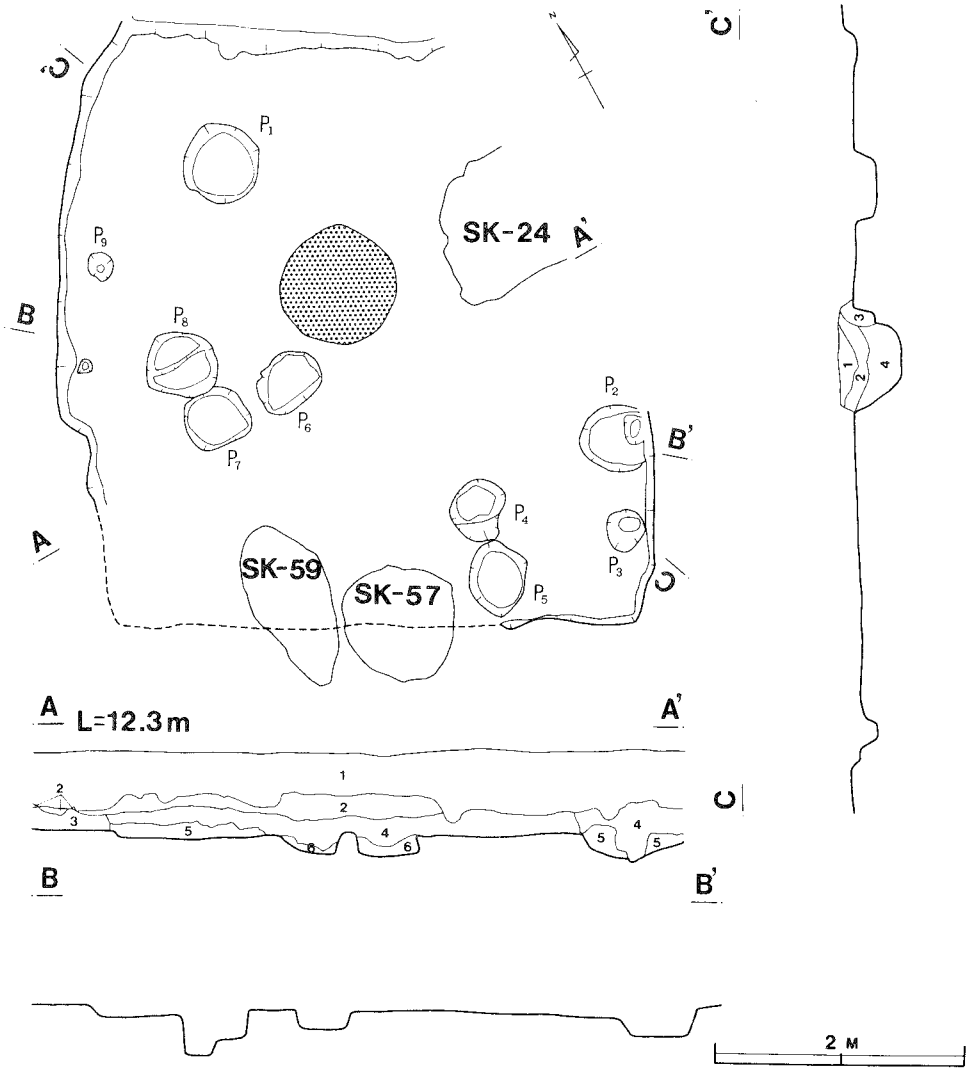


第31図　第６号住居址

第６号住居址土層解説

A－A′、B－B′

1K	黒褐色土	(混土貝層)
2K	〃	(混貝土層，ＹＰ・焼土粒子を含む)
2K′	〃	(2K に同じ，焼土粒子が多くなる)
3	〃	(固く締まりＹＰ・ハードロームブロックを含む)
4	暗褐色土	(固く締まりＹＰ・ハードロームブロックを多く含む)
5	〃	(よく締まりハードロームブロックを含む)
6	褐色土	(ハードロームブロックのみ)



第32図　第７号住居址

第７号住居址土層解説

A—A'

1　表　　土

2　褐　灰　色　土　(よく締まり小レキを含む)

3　黒　　色　　土　(ＹＰを含む)

4　暗　褐　色　土　(ＹＰ・ロームブロック含む)

5　　〃　　(ＹＰを少量含む)

6　褐　　色　　土　(ロームブロックを含む)

C—C'

1　褐　　色　　土　(焼土・ローム粒子・炭化物を含む)

2　暗　褐　色　土　(焼土を少量含む)

3　褐　　色　　土　(よく締まりローム粒子・炭化物を含む)

4　暗　褐　色　土　(ローム粒子・焼土・炭化物を含む)

上がる。床面はロームで，傾斜もなく平坦である。炉址周辺は少々締まりがみられるものの他はそれほどではない。住居址主軸線上のほぼ中央部に炉址が設けられている。直径 95 cm の円形を呈し，深さ 35 cm の地床炉である。炉址内部には，炭化物・焼土粒子混入の層が 3 層ほど堆積していたがハードな焼土層は認められなかった。

ピットは床面上に 9 ケ所確認されたが，規則的な配置は認められない。いずれのピットも小規模で，径 23～55 cm である。深さは 12～35 cm を測る。P_8 だけが 2 段掘り込みのピットであり，径 60 cm，深さ 23 cm と 35 cm である。覆土は自然堆積の状態を示しているが，おおむね暗褐色土 1 層であった。

出土遺物は少量の縄文土器片だけであり，床面からの出土遺物はみられない。

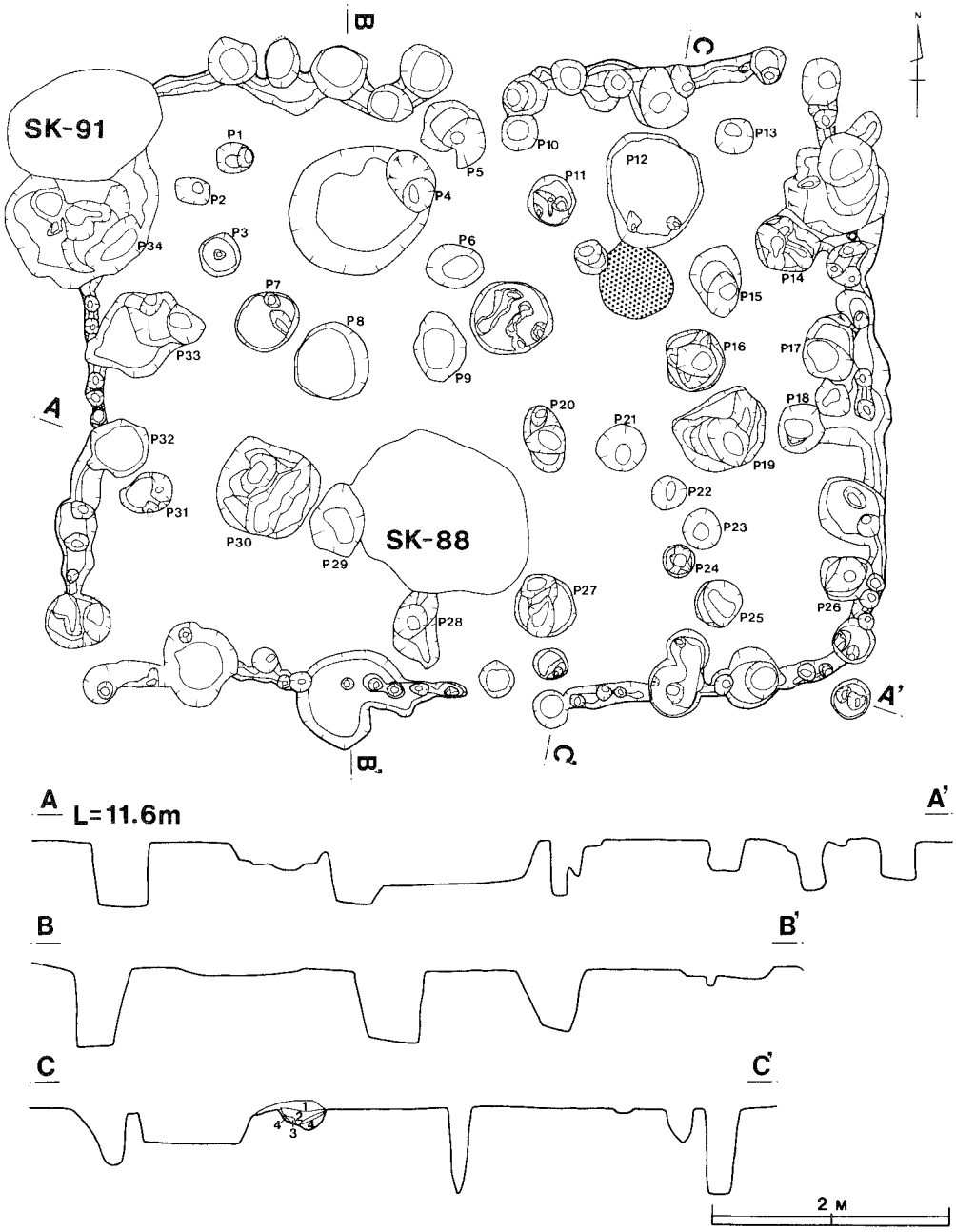
第 8 号住居址（実測図　図 27，遺物　図 36）

本住居址は調査区南側 D2 に位置し，東側で第 5 号住居址，第 16 号・23 号土壙と，中央部で第 22 号土壙と，そして西側で第 17 号土壙の各遺構と重複している。本住居址との新旧をみると，第 5 号住居址・第 17 号土壙よりは新しく，第 16 号・22 号・23 号土壙よりは古いと思われる。

平面形は不完全ながらも直径 4.4 m の円形を呈している。床面までの深さは 25～37 cm で，壁は外傾して立ち上がっている。しかし重複している第 5 号住居址と床面のレベルが同一であるため，東側では壁の検出ができなかった。ただ壁溝状のわずかな凹みがみられ，この部分が本住居址東側の境界になると考えられる。床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で，傾斜もみられない。ロームを掘り込んだ床面であり，P_7 ～P_9 の周辺はよく踏み固められてしまっているが，他の部分はそれほど顕著ではない。炉址は検出されなかったが，あったとすれば第 22 号土壙により破壊されてしまった可能性が大きいと思われる。ピットは床面外囲に沿って 9 ケ所確認された。規則性はないが，直径 30 cm，深さ60～70 cm のピット（P_5・P_6・P_8・P_9）と直径 30～35 cm，深さ 10～39 cm のピット（P_1・P_2・P_3・P_4・P_7）の 2 種がみられる。

覆土は大きく 2 層に分かれ順に黒褐色土層，暗褐色土層である。上部での貝層は認められなかったが，1 層下部まで掘り下げたところ，中央部及び東部の 2 ケ所から貝層が検出された。貝層上部は床面レベルより 20 cm 上にあたっている。覆土内の貝層であったため，そのまま床面まで掘り下げたところ，貝層は床を切って堆積していることが判明した。結果的にこの貝層は住居址覆土を切って掘り込まれた第 22 号・23 号土壙の覆土であったわけである。以上の経過から 2 基の土壙は住居址床面から掘り下げられているような結果になってしまったが，実際には床面より最底 20 cm 以上も上部から掘り込まれていたと考えられるのである。

出土遺物はその大部分が覆土中からで，縄文土器片（深鉢形土器の破片が主），無茎石鏃 2 点（黒曜石・チャート）などであった。



第33図　第９号住居址

第９号住居址土層解説

C—C′

1　暗黒褐色土　（混貝土層）

2　灰白色土　（締まりなく焼土を含む）

3　明赤褐色土　（焼土層）

4　黄褐色土　（ローム，焼けて固い）

第9号住居址（実測図　図33，遺物　図28・36・37，写8－1・2）

本住居址はC2区東側に位置し，第88号・91号土壙と重複している。また北側に接して第145号土壙が所在する。床面がロームを掘り込んで作られていないためにピット列のみの確認しかできなかった。したがって2基の土壙との断面図作成が不可能であったため，新旧は不明である。

主軸を東西方向に有し，長軸6.8 m，短軸5.35 mの長方形を呈する。前述のように遺構確認面が床面であった関係で壁の検出はできなかった。壁溝は断続的に周回しており幅15 cm，深さ5 cmである。壁溝内には壁柱穴がある。これは2種に大別でき，径15 cm深さ5～10 cm程の小柱穴と，径25～50 cm深さ30～80 cm程の大柱穴とである。床面はロームでよく締まり平坦である。特に炉址周辺は貼り床と思えるほど踏み固められていた。炉址は主軸北側，やや東寄りに確認され，長径65 cmの楕円形を呈している。床面より約15 cmほど掘り下げた地床炉で，赤褐色に焼けた焼土の堆積がみられた。

ピットは壁柱穴以外に35ケ所認められた。主柱穴としてP_5・P_8・P_9・P_{10}・P_{14}・P_{16}・P_{17}・P_{18}・P_{27}・P_{28}・P_{32}・P_{34}などが考えられ，径35～65 cm，深さ26～94 cmを測る。P_{12}は径（95 cm）のわりに浅く（28 cm），灰及び焼土粒子の堆積が認められたことから炉から出た灰などを一時的に捨てるためのピットと考えても良いと思われる。遺構内の覆土は確認できなかったが，C3区から西に向かって伸びる貝層の先端部直下に当たっている。表土下数cmよりヤマトシジミを主にした純貝層が遺構北東部上面に堆積していた。

出土遺物の多くの縄文土器片の他に，粗製深鉢形土器，深鉢形土器の口縁部片などがあり，ピット内からも土器片の出土をみた。

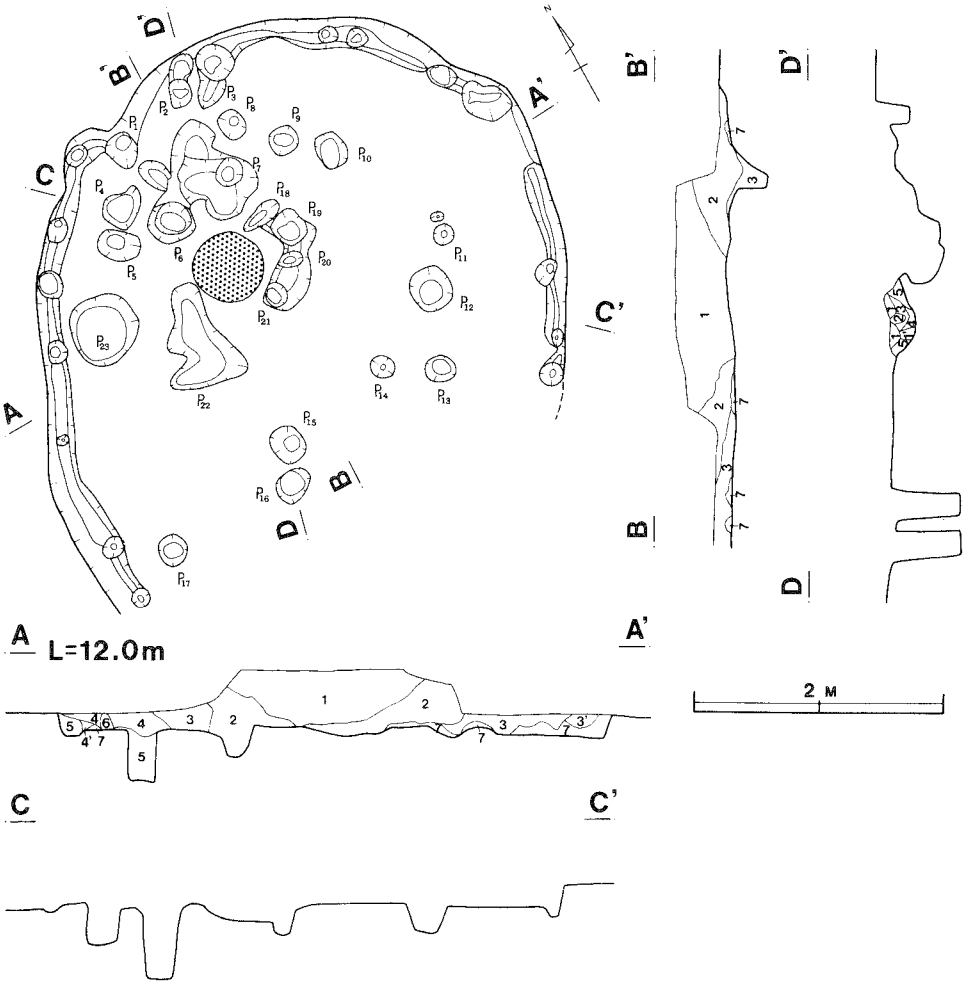
第10号住居址（実測図　図34，遺物　図28・37，写9　1・2）

本住居址はC2区南東部に位置し，第15号住居址の西側にあたっている。

主軸方向はN－34°－Eで，長径5 m以上，短径4.26 mの楕円形を呈している。南側は通路や土壙との重複のため確認できなかった。床面までの深さは5～20 cmで，壁は外傾して立ち上がる。壁溝は北及び東側の一部で切れているが，幅約20 cm，深さ約5 cmのものが検出された。壁溝内には径・深さとも20 cm前後の壁柱穴が存在している。床面は炉址周辺が固く締まり，ほぼ平坦である。中軸の西側やや北寄りに炉址があり，径55 cm，深さ17 cmの地床炉である。床面を皿状に掘り凹めたもので，厚さ8 cmの焼土がみられた。

ピットは床面に23ケ所確認された。炉址周辺及び北側に多く集中しているのが特徴である。径17～58 cm，深さ16～74 cmを計る。覆土は住居址中央部に純貝層・混土層が厚く床面まで堆積していた。住居廃棄後，早い時期から貝の堆積が始まったものと思われる。

出土遺物はほとんど覆土からで，多数の縄文土器片，深鉢形土器，釣手付土器，石皿片，砥石



第34図　第10号住居址

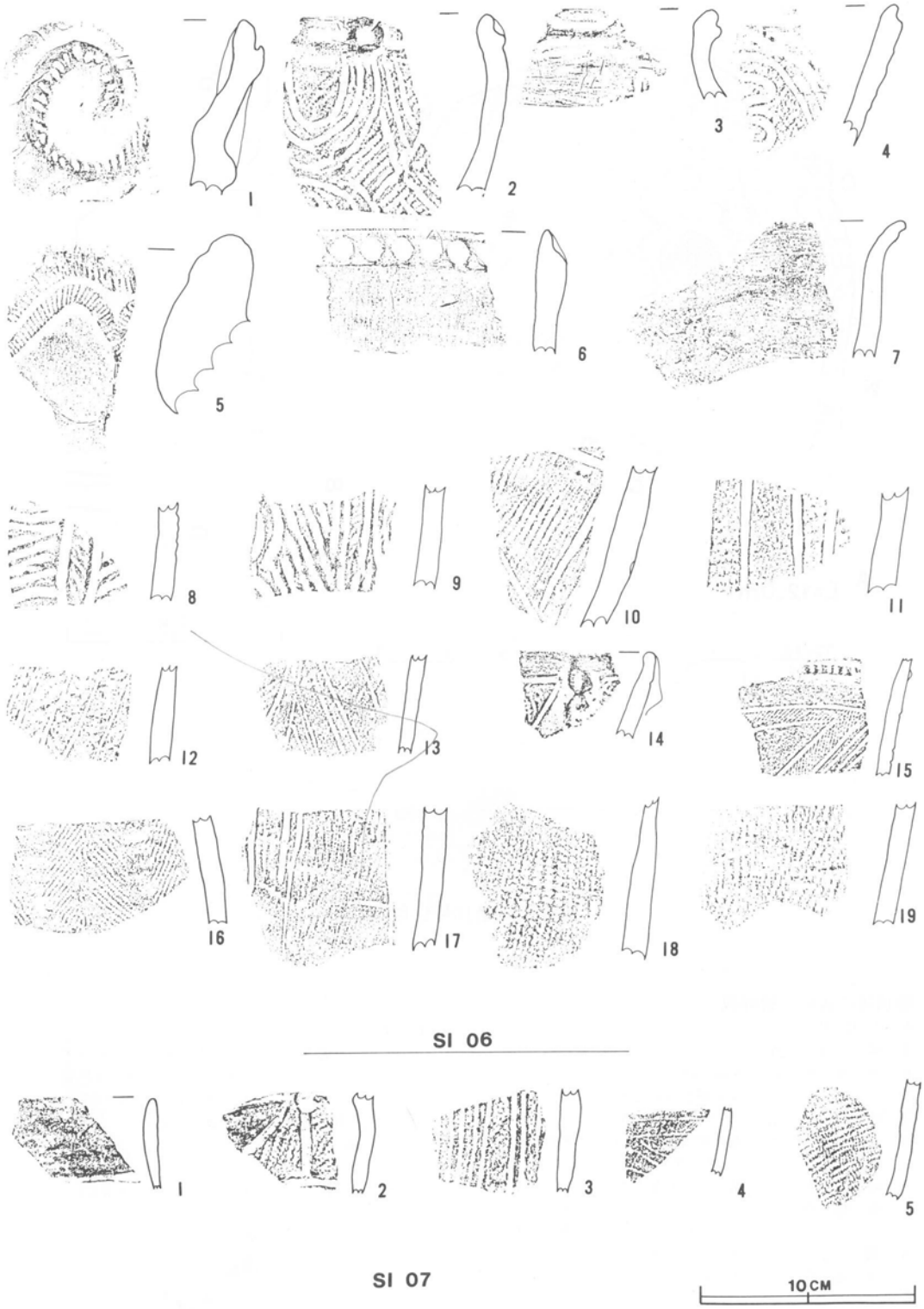
第10号住居址土層解説

A－A′, B－B′

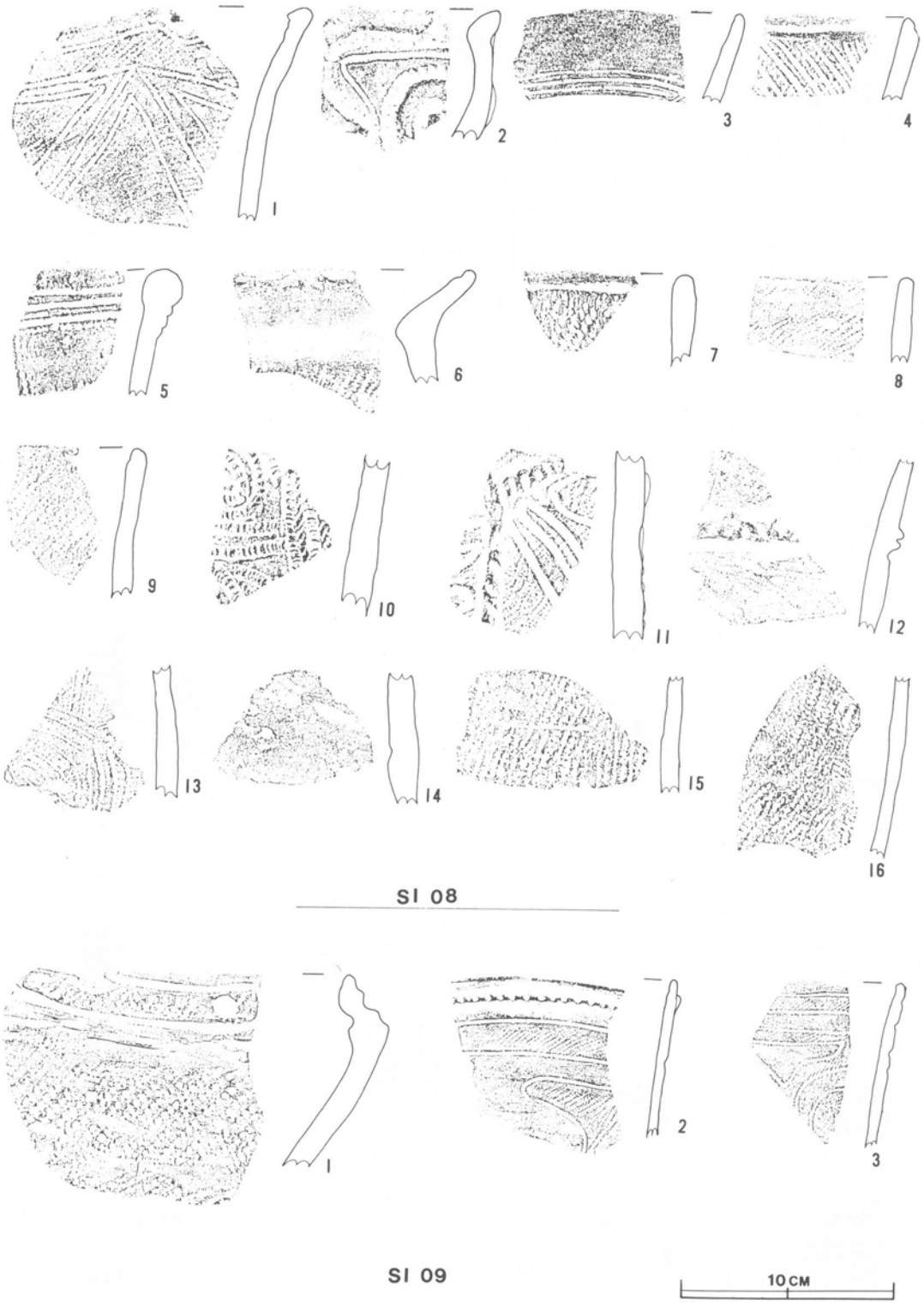
1　純　貝　層
2　黒　褐　色　土　(混貝土層)
3　〃　(よく締まり焼土・灰・YPを含む)
3′　暗　褐　色　土　(ロームブロックを含む)
4　黒　褐　色　土　(固く締まりYP・ハードロームブロックを含む)
4′　暗　褐　色　土　(粘りがありYPを含む)
5　暗　褐　色　土　(ハードロームブロック・ブラックハードロームブロックを多く含む)
6　褐　色　土　(大変固く締まっている)
7　黒　褐　色　土　(固く締まりハードロームブロックを含む)

D－D′

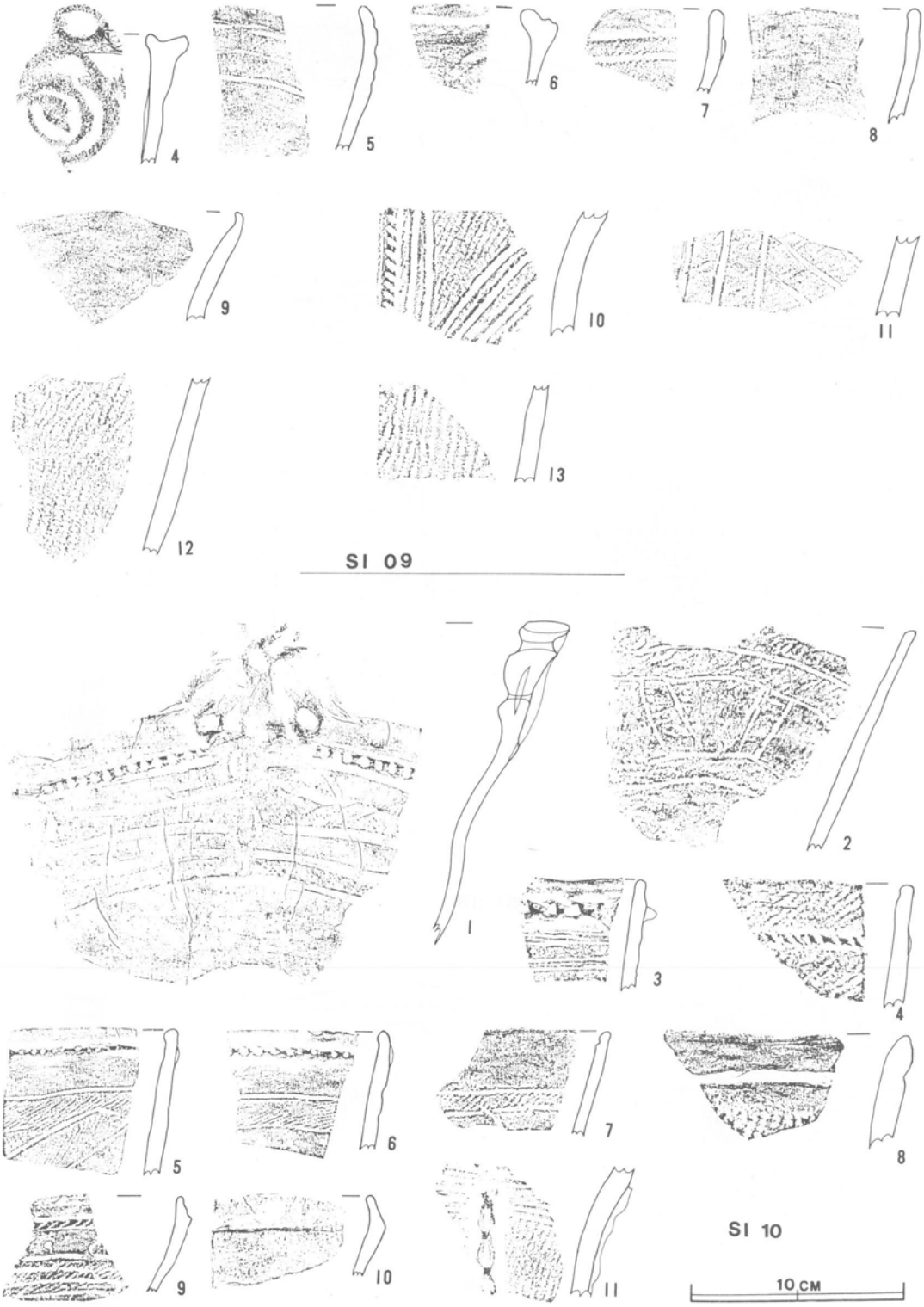
1　にぶい褐色土　(貝・灰・焼土粒子を含む)
1′　〃　(貝を含まない，他は1に同じ)
2　灰　白　色　土　(大部分が灰で焼土粒子を含む)
3　明　赤　褐　色　土　(焼土層，大変固い)
4　暗　褐　色　土　(上部は熱を受けて固い，焼土を含む)
5　極　暗　褐　色　土　(灰・焼土粒子を少量含む)



第35図　住居址出土遺物



第36図　住居址出土遺物



第37図　住居址出土遺物

表４　第35図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量(cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI--06	1	波状口縁		隆帯を渦巻状に貼り付け，そこに楕円形の刺突文を配する	
	2	口縁部		口縁部は内彎し，太い横走する沈線と，円形の貼り付けがある。弧状の沈線を主にして，間を斜行沈線で埋めている	
	3	〃		外反する口縁で弧状の沈線を配する	
	4	〃		口縁は直立して立ち上がり蛇行沈線を配する。地文は縄文	
	5	波状口縁		波状口縁の突出部で，口縁に平行して２本の沈線を配し，間を刺突文でうめる	
	6	口縁部		口唇部に沿って円形の刺突文を配する。地文なし（ヘラ整形）	
	7	〃		ほとんど無文の口縁部で，所々に条線又は縄文が残る	
	8	胴部		縦位の沈線を配し，その間を斜行沈線でうめる	堀之内式
	9	〃		直線及び曲線の沈線文のみ。地文は縄文	〃
	10	〃		直線的な沈線。地文は縄文	
	11	〃		縦位の沈線を配す。地文は縄文	
	12	〃		斜行沈線。地文は縄文	
	13	〃		地文は縄文で，直線的な沈線	
	14	口縁部		８の字状貼り付け。沈線で幾何学的な文様に区画し内部は縄文。外は磨り消し	堀之内式
	15	〃		細い紐線を配し，沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外側は磨消し	〃
	16	胴部		羽状縄文のみ	
	17	〃		胴下半部にあたり，上部からの沈線が止まる。地文は縄文	
	18	〃		縄文のみ	
	19	〃		縄文のみ	
SI--07	1	口縁部		１本の横走する沈線が施文され，上部は無文帯	
	2	胴部		円形刺突から出る沈線で区画され，内部に縄文を充填する部分と磨消し部に分かれる	
	3	〃		縦位の平行沈線。地文は縄文。	
	4	〃		沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	5	〃		縄文のみ，ＬＲ	

表５　第36図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—08	1	波状口縁		小突起をつくる波状口縁部で外反して立ち上がる。沈線で直線的な文様を構成する。地文は縄文	
	2	口縁部		内彎して立ち上がってきて，口唇部でくの字状に外反する。連続刺突文が曲線状に配置される	
	3	〃		口縁部は無文帯で，下部数条の沈線が配される	
	4	〃		口唇部に沈線を有し，胴部にかけて多数の沈線が施文される	
	5	〃		ゆるく外反して立ち上がり，口唇部と平行に三本の沈線が配される。幾何学的に刺突文も施され，内部は磨消しである	
	6	〃		くの字状に強く外反する口縁部で，内側が若干凹んでいる。下部は縄文	
	7	〃		直立する口縁部で，口縁に平行に１本の沈線を有し，下部は比較的荒い縄文	
	8	〃		直立する口縁部で，縄文のみ	
	9	〃		わずかに外反する口縁部で，地文は縄文。口唇部内側が若干凹む	
	10	胴部		半截竹管文が弧状に配置される	
	11	〃		隆帯をＹ字状に貼り付けそこに刺突を有する。沈線が曲線状に施文される。地文は縄文	
	12	〃		横位の隆帯に刺突文を有し，地文はまばらな縄文。ヘラ整形がみられる	
	13	〃		沈線が曲線状に施文される。地文は縄文	
	14	〃		無文。ヘラ整形がみられる	
	15	〃		縄文のみ	
	16	〃		縄文のみ。ＬＲ	
SI—09	1	浅鉢口縁部		口唇部に２本の沈線を配し，所々に円形の刺突文を有する	
	2	小型深鉢口縁部		口縁部に細い紐線を配し，胴部にかけて直線及び曲線の沈線で区画した中に縄文を充填する。外は磨消し	精製品
	3	〃		口縁部はゆるく外反し，沈線で直線及び曲線的な文様を区画し，中を縄文で埋める。外側は磨消し	〃

表6　第37図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－09	4	口縁部		波状口縁の突起部で，口唇部に楕円形の刺突文を有す。太い沈線	
	5	浅鉢口縁部		口縁部は内彎して立ち上がり，三本の沈線を施文し，中にまばらな縄文を残す。胴部は磨消し	
	6	口縁部		口縁部内側がくの字状に内彎する。口唇部は平坦で沈線と刺突を施文する	
	7	〃		口縁部は内彎する。口縁部に平行な帯縄文を有する	
	8	〃		内彎して立ち上がる口縁部で，無文	
	9	〃		ゆるい波状口縁を呈し，無文	
	10	胴部		隆帯を縦位に貼り付け刺突を有する。平行沈線が直線的につく。地文は縄文	
	11	〃		直線的な沈線文。地文は縄文	
	12	〃		縄文のみ	
	13	〃		縄文のみ	
SI－10	1	波状口縁		口縁は平縁で突起を有し，楕円形の刺突文が３ヶ所ある。細い紐線がつき，下部にＣ字状及び横位の沈線を施文する。胴部は無文	堀之内式
	2	口縁部		口縁部は直立し，２本の沈線を２段に配し，さらに斜行する沈線を間に施文し内部に縄文を充填する	〃
	3	〃		口縁部は直立し，一条の紐線を配する。胴部には平行沈線が２段に施文される。地文は縄文	
	4	〃		口縁部に隆帯を有しその上に刺突を施す 地文はＲＬの縄文	
	5	〃		口縁部に細い紐線を配し，沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外側は磨消し	堀之内式
	6	〃		No.5 と同一個体	〃
	7	〃		２本の平行沈線を有し，中を縄文で埋める。他はヘラ整形	
	8	〃		口縁部に平行な太い沈線を有し，地文は荒い縄文	
	9	〃		横位の沈線を主体とし，Ｓ字状の沈線を縦位に配する。口唇部の稜にきざみがはいる	
	10	〃		口縁部がくの字状に内反し，無文である	
	11	胴部		縦位に隆帯を貼り付け，その上に刺突を加える。横走する数本の沈線もみられる	

状石器，たたき石，磨石片，磨製石斧などがある。

第11号住居址（実測図　図38，遺物　図28・43・44・45，写10－1・2）

本住居址は調査区東側C 3区に位置し，北東2mに第6号住居址，南2mに第12号住居址が存在する。平面形は円形で，直径は約5.2mである。遺構確認が覆土上部でできなかった関係で，壁や壁溝は検出できていない。

床面は平坦であるが，北東側にゆるい傾斜を有する。なお中央部及び北西部に浅い落ち込みがあるが，これは炉址直下の掘り込みとみてよいと思われる。ピットは23ケ所検出された。特徴的なことは径30cm・深さ30cm前後のピットと，径40～45cm・深さ63～90cmのピットが80cmの間隔をおいて交互に確認されたことである。なお大ピット列は小ピット列より30cm程内側に位置している。この規則的なピット列も，南側においてはいくらか不規則になっており，出入口との関連が考えられそうである。

遺構内覆土は確認できなかったが，遺構上面は混土貝層の堆積がみられ，この貝層下部で炉址が検出された。しかしそれに対応する遺構が確認できないため掘り下げていったところ，本遺構が検出されたわけである。結果的に炉址が床面より40cm浮いてしまうことになった。炉址内部には灰白色の灰，赤褐色の焼土の堆積がみられた。なお本遺構には北側床面上にもう一ケ所炉址が検出されている。長径約105cmで，楕円形を呈し深さ35cmの地床炉である。しかしP_1と重複していることもあり，本遺構に伴うものかどうかは判定しがたい。

出土遺物は縄文土器片の底部片5点，口縁部片，石皿片，磨り切り手法によるとみられる刀子状装身具などがある。

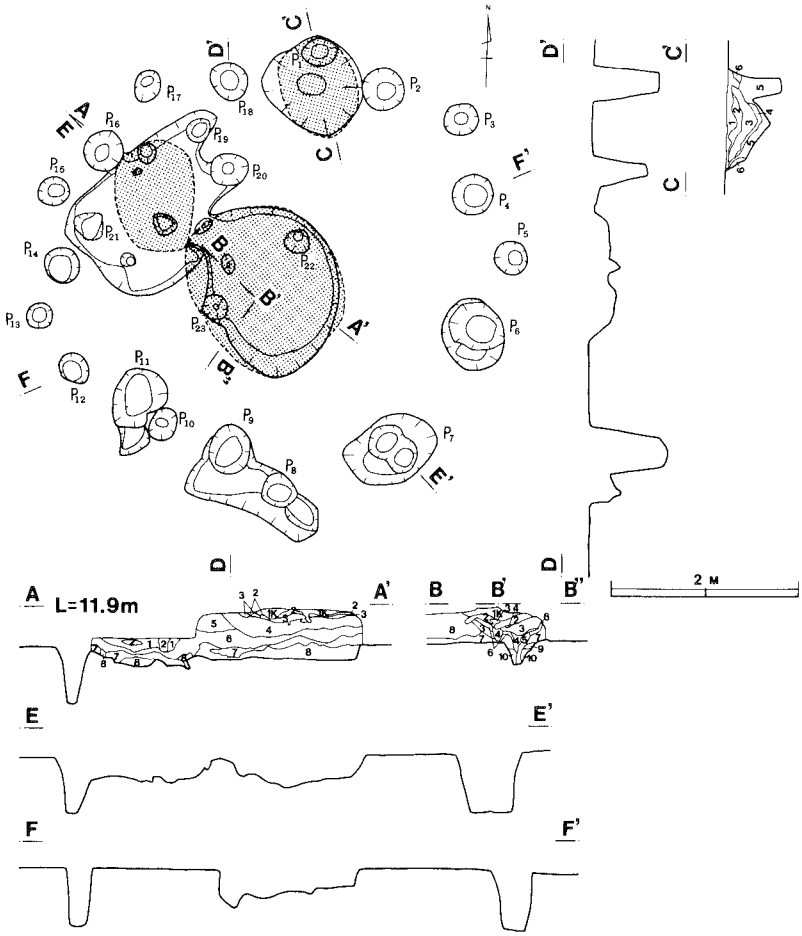
第12号住居址（実測図　図39，遺物　図45・46）

本住居址は調査区東側C 3区に位置し，北に第11号住居址，南に第14号住居址が存在する。東側はエリア外のため確認できなかったが，径約2.75mの円形を呈するものとみられる。床面までの深さは約20cmを測り，壁溝・壁柱穴は存在しない。

床面はロームであり，平坦で傾斜はない。炉址は検出されなかった。ピットは3ケ所検出された。径30～40cm，深さ16～20cmのピットで，径に比して浅いものである。覆土は現地表面が混貝土層であり，その下部にも混貝土層が堆積する。遺構内部は自然流入による様相をみせ，暗褐色土・黒褐色土の堆積がある。

出土遺物は縄文土器片の他に，完形の椀形土器1点，無茎石鏃1点などがある。

第13号住居址（実測図　図40，遺物　図57）



第38図　第11号住居址

第11号住居址土層解説

A　A′

1K　にぶい黄褐色土　(混土貝層)

2　にぶい黄橙色土　(固く締まり焼土ブロック・炭化物を含む)

3　明　褐　色　土　(黒色土を含む)

4　黒　褐　色　土　(ＹＰ・焼土ブロックを含む)

5　〃　(ＹＰ・ハードロームブロックを多く含む)

6　〃　(締まり弱くＹＰ・ハードロームブロックを含む)

7　暗　褐　色　土　(ローム粒子・ソフトロームブロックを含む)

8　にぶい黄褐色土　(締まり弱くソフトロームを多く含む)

B—B′

1K　にぶい黄褐色土　(混土貝層)

2　灰　黄　褐　色　土　(固く締まり，炭化物・黒色土ブロックを多く含む)

3　にぶい黄橙色土　(固く締まり焼土・炭化物を含む)

4　にぶい橙色土　(締まり弱く焼土粒子・黒色土ブロックを含む)

5　橙　色　土　(焼土の中に灰が混入する)

6　明　褐　色　土　(黒色土ブロックを含む)

7　黒　褐　色　土　(固く締まり焼土・ＹＰを含む)

8　〃　(締まりなくＹＰ・ハードロームブロックを含む)

9　暗　褐　色　土　(ソフトロームブロックを含む)

10　にぶい黄褐色土　(ソフトロームを多く含む)

C—C′

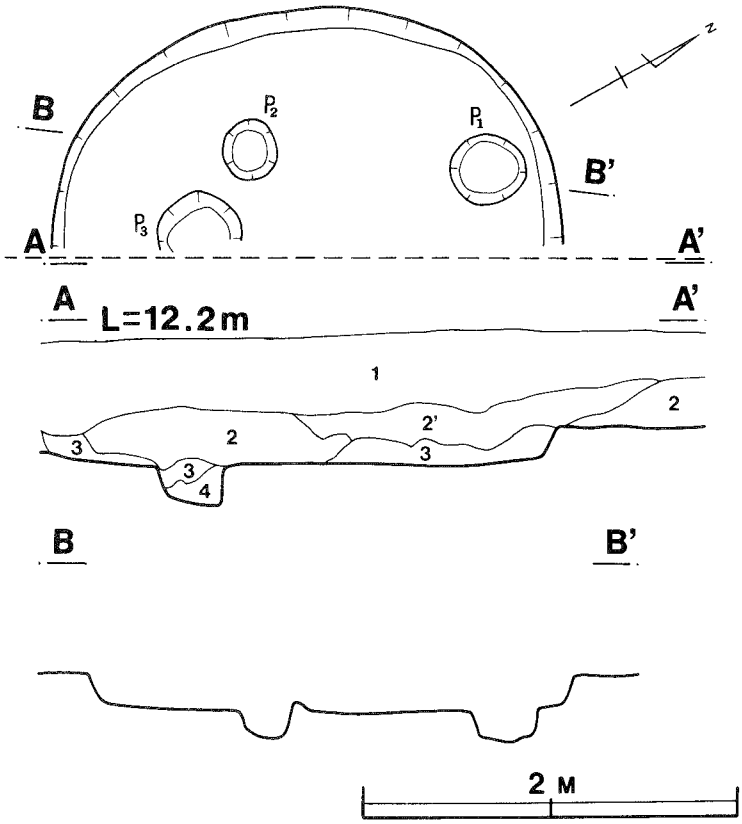
1　黒　褐　色　土　(焼土粒子・灰を含む)

2　にぶい黄褐色土　(しまりなく灰をブロック状に含む)

3　にぶい黄橙色土　(固く締まり焼土・炭化物を含む)

4　明　褐　色　土　(黒色土ブロックを含む)

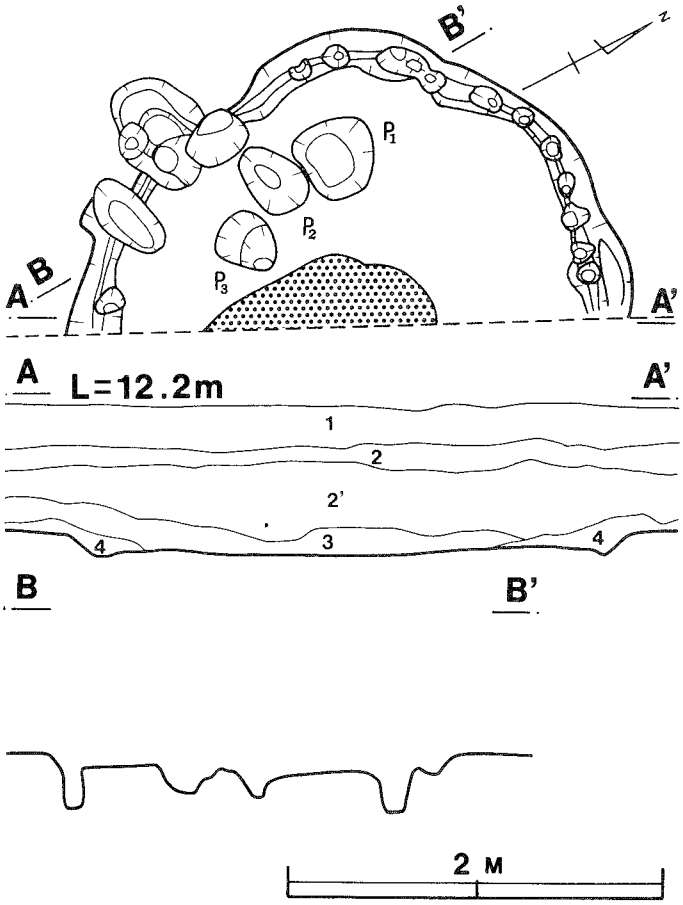
5　暗　褐　色　土　(焼けて固く締まる)



第39図　第12号住居址

第12号住居址土層解説

1　黒　褐　色　土　(混貝土層)
2　暗　褐　色　土　(ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
2′　黒　褐　色　土　(ＹＰ・貝片を含む)
3　褐　色　土　(ＹＰ・ソフトロームを含む)
4　〃　(ハードロームブロックを含む)



第40図　第13号住居址

第13号住居址土層解説

1　暗　褐　色　土　(混貝土層)
2　　〃　　(ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
2′　黒　褐　色　土　(貝・土器片を多く含む)
3　褐　　色　　土　(ＹＰ・ソフトローム含む)
4　暗　褐　色　土　(ＹＰ・焼土粒子含む)

本住居址は調査区東側C 3 区に位置し，北側に第 14 号住居址・第 48 号土壙などが存在している。調査エリアぎりぎりに位置しているため，50%以上の部分が調査できなかった。

調査できた範囲では南北約 3 m，主軸方向をN—45°—Wに有する楕円形の住居址であろうと思われる。床面までの深さは約 7 cm で，壁は外傾して立ち上がっている。壁溝は幅 5～10 cm 程で，壁柱穴が約 20 cm 間隔で並んでいる。深さはおおむね 20 cm を測る。

床面はロームで，締まりがなく軟らかい。起伏はほとんどないが北側に向けてゆるい傾斜を有している。炉址はその大部分がエリア外に位置しており，西端部が確認できたにすぎない。ピットは壁柱穴以外に 3 ケ所確認できた。径 30～40 cm，深さ 15 cm 程である。覆土は固く締まった褐色土と暗褐色土である。地表面近くには混貝土層が約 20 cm の厚さで堆積していた。

遺物は縄文土器片の他に，完形の小型鉢形土器の出土をみた。

第 14 号住居址（実測図　図 41）

本住居址は調査区東側C 3 区に位置し，北及び南側を第 12 号•13 号住居址によりはさまれている。東側は第 13 号住居址同様エリア外のため確認できないが，一辺約 3.4 m の方形を呈するとみられる。遺構確認面からの深さは 8～15 cm を測り，壁は外傾して立ち上がっている。壁溝はほとんど確認できず，壁柱穴も極めて浅いものが数ケ所検出できたにすぎない。

床面はロームで，傾斜もなく平坦であるが，P_2・P_3 を囲むように長軸約 80 cm の浅い凹みが認められた。炉址は検出されていない。ピットは 7 ヶ所検出され，P_1・P_4・P_5 が主柱穴の一部であると思われる。径 35～50 cm，深さ 54～61 cm を計る。覆土は固く締まった黒褐色土・暗褐色土であり，地表面より 20 cmの厚さで混土貝層がみられた。

遺物は極めて少量で，破片が数点出土しただけだった。

第 15 号住居址（実測図　図 42，遺物　図 57，写 11—1）

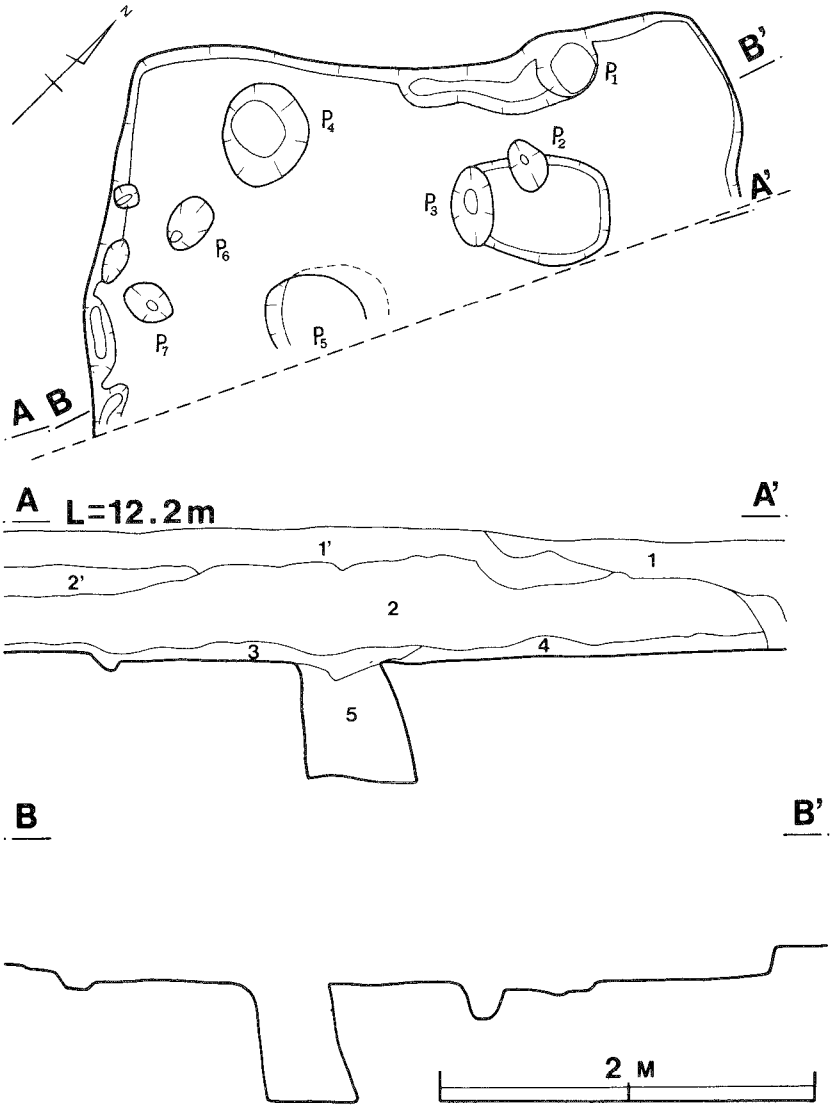
本住居址はC 2 区南東部に位置し，内部に第 99 号土壙が所在する。本遺構との新旧関係であるが，住居址内覆土を切っている様子もないことから，同時期，すなわち本住居址に付属する貯蔵穴とみてもよいかと思われる。

遺構の大半が通路にかかっているため，正確な主軸方向は計測できないが，西側に傾くとみられ，南北 1.4 m，東西 3.2 m の長方形を呈している（現況）。床面までの深さは 7 cm で，遺構中央部では深くなり約 25 cm を測る。壁溝は北及び西側において部分的に検出された。壁柱穴は 20～40 cm の間隔を置いて検出され，径は 15 cm 前後，深さは 24～31.5 cm である。

床面はロームで締まりがなく，中央部に向けてゆるい傾斜を有する。炉址は確認できなかったが，恐らく通路下部に存在していると考えられる。ピットは 2 ケ所しか検出されなかった。覆土

はおおむね2層に分けられ，焼土粒子や炭化物を含む暗褐色土層である。なお土壙内には厚さ15cm程の純貝層が堆積していた。

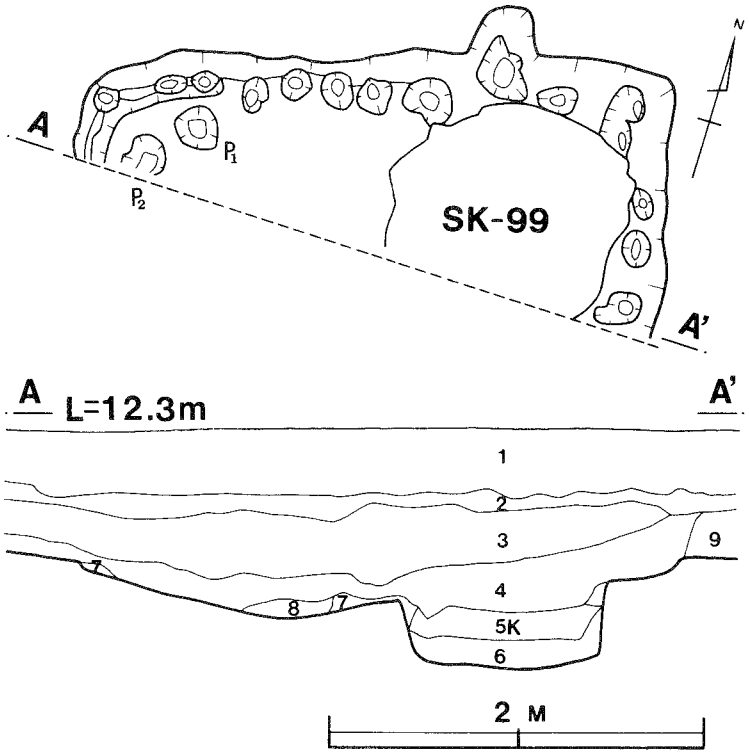
出土遺物として多数の縄文土器片，鉢形土器底部，無茎石鏃などがある。



第41図　第14号住居址

第14号住居址土層解説

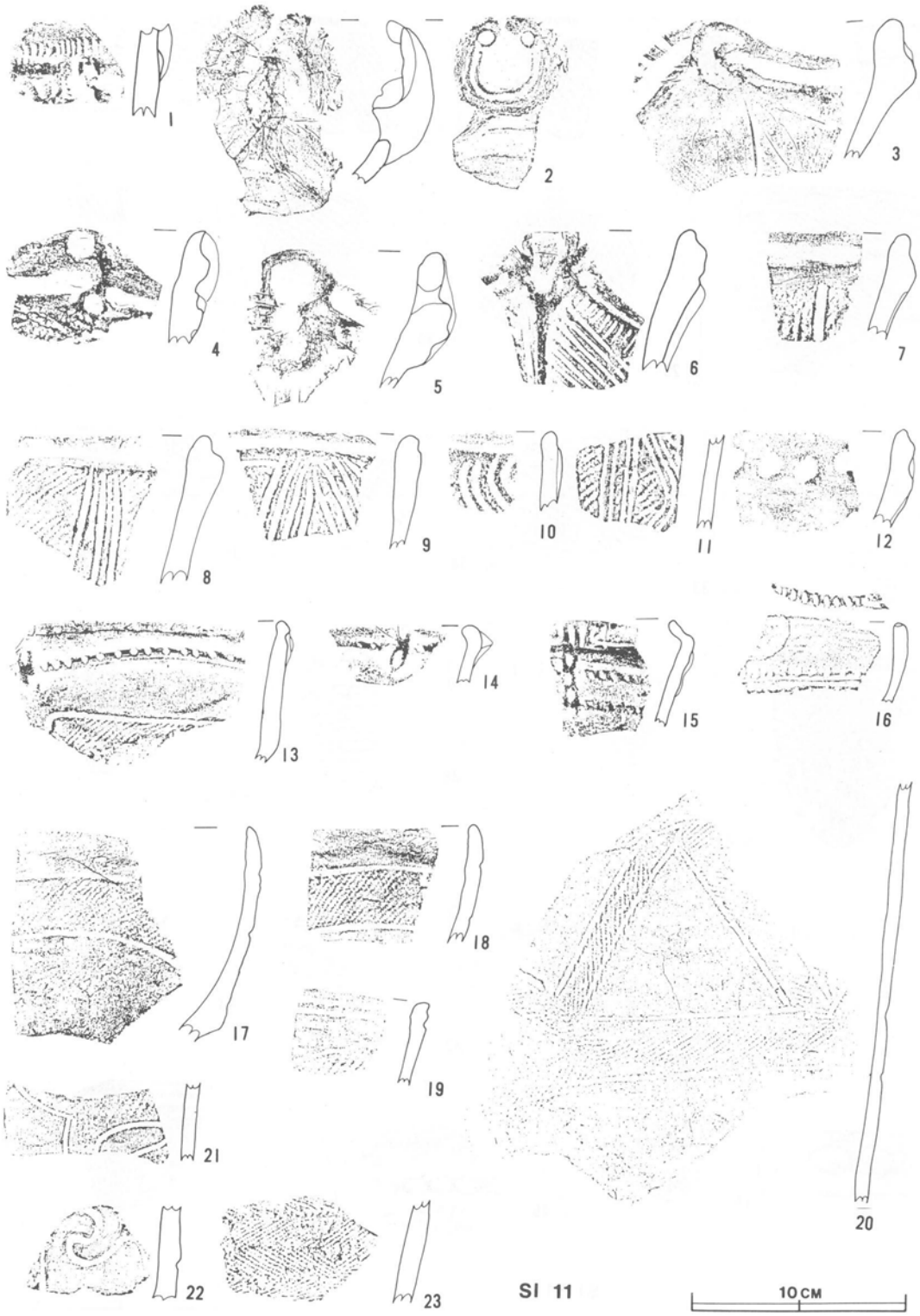
1　黒　褐　色　土　(混貝土層)
1′　暗　褐　色　土　(　〃　)
2　〃　(YP・ハードロームブロックを含む)
2′　黒　褐　色　土　(貝・土器片を含む)
3　暗　褐　色　土　(YP・焼土粒子を含む)
4　褐　色　土　(YP・ソフトローム含む)
5　〃　(ハードロームブロック含む)



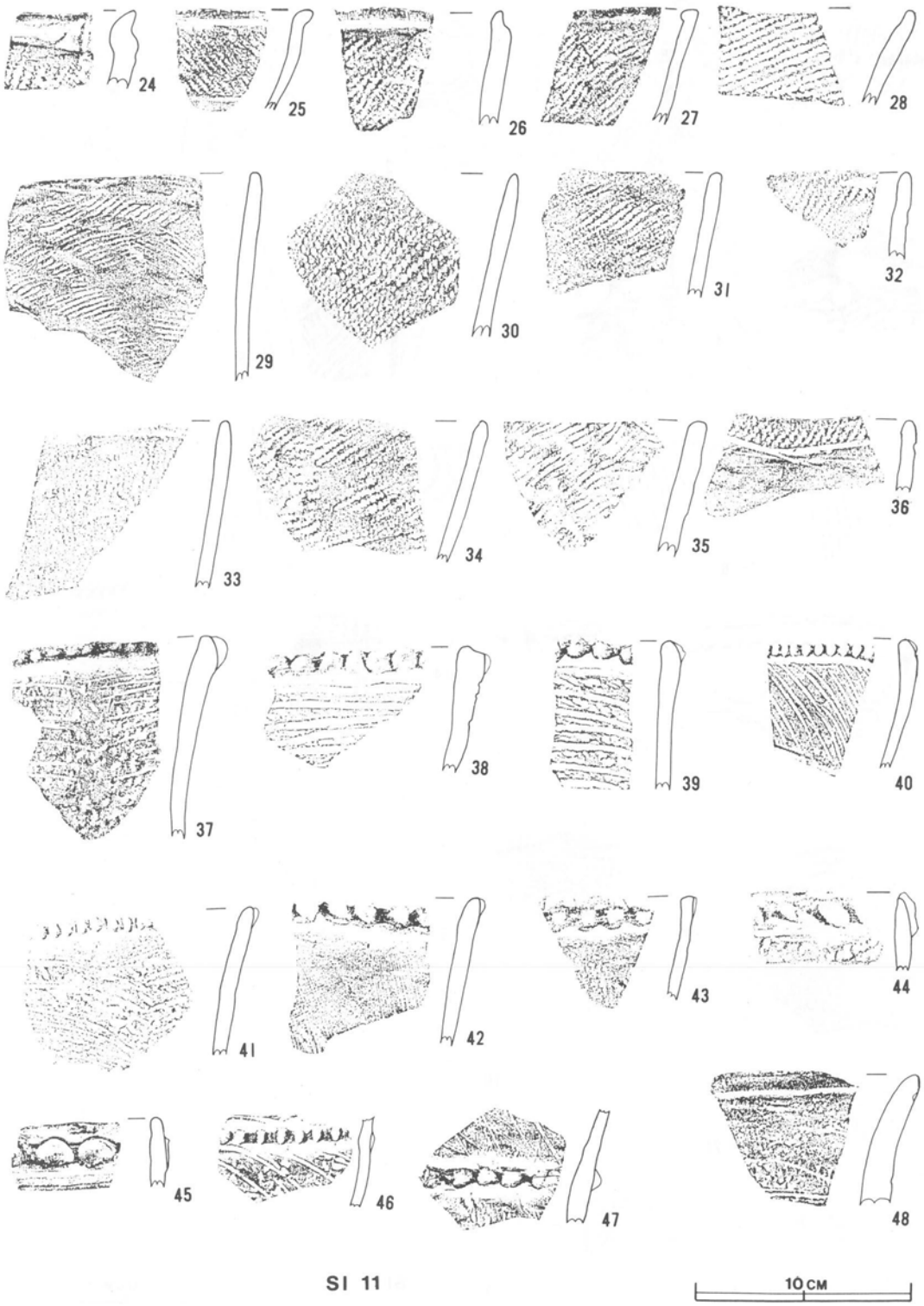
第42図　第15号住居址

第15号住居址土層解説

1　表　　土
2　黒　褐　色　土　(締まりなくボロボロである)
3　暗　褐　色　土　(よく締まりＹＰ・焼土粒子・炭化物を含む)
4　　〃　　(よく締まりＹＰ・炭化物を含む)
5K　純　貝　層
6　黒　褐　色　土　(極めて固くロームブロックを含む)
7　褐　色　土　(粘りがありロームブロックを含む)
8　黒　褐　色　土　(締まり弱くロームブロックを少量含む)
9　褐　色　土　(よく締まりロームブロックを含む)

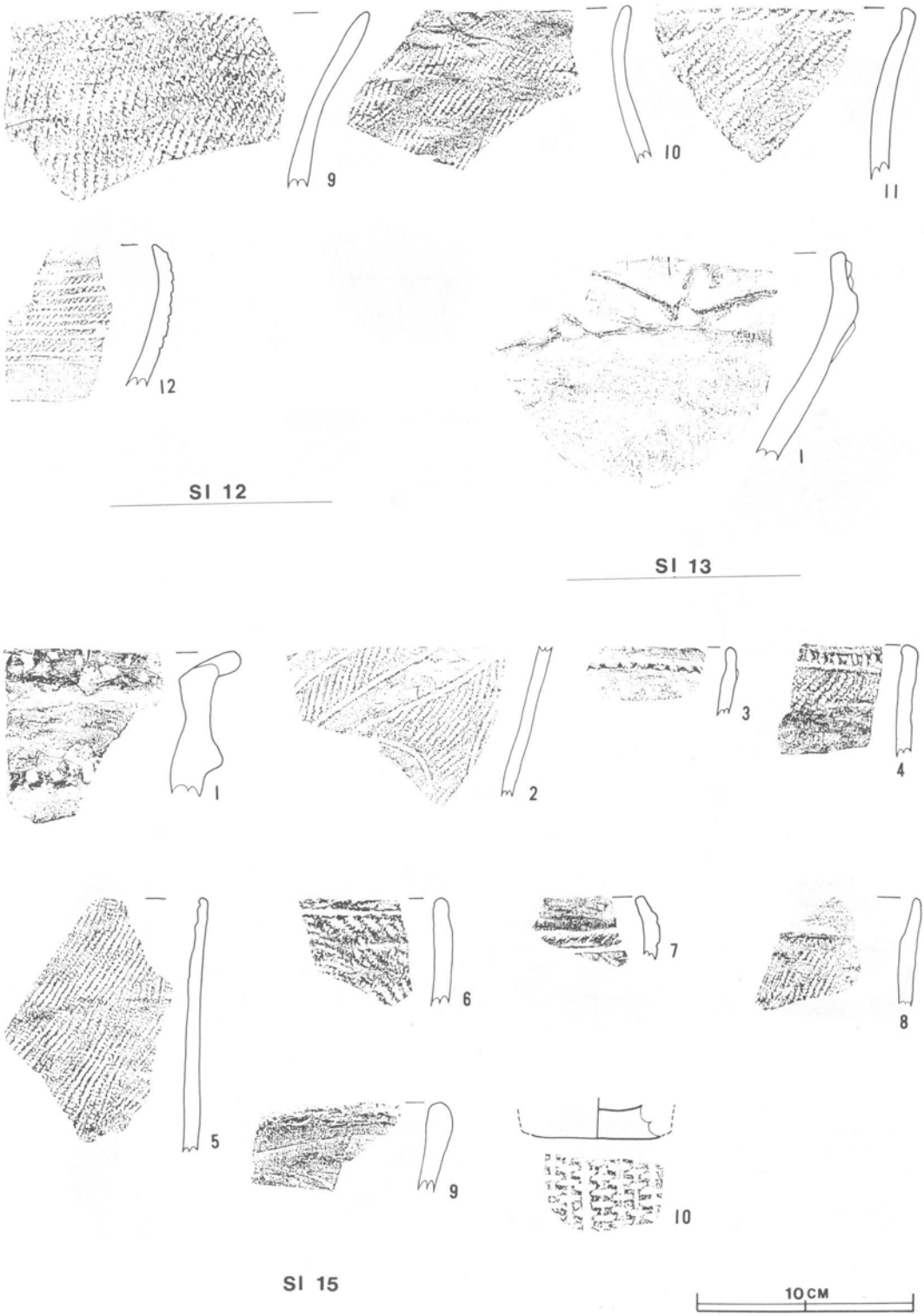


第43図　住居址出土遺物



第44図　住居址出土遺物

第45図　住居址出土遺物



第46図　住居址出土遺物

表７　第43図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－11	1	胴部		横位の隆帯をはさんで刺突文を配する。	
	2	波状口縁突起部		突起部で内側が大きく彎曲し，２この円形刺突部より下にU字形の沈線がはいる	
	3	波状口縁		口縁に平行して凹みがみられ，波頂部にC字状の陰刻文を配する	
	4	〃		波頂部から左右に太い沈線が入り，これをはさむ形で円形の刺突文が２個配される。地文は縄文	
	5	〃		波状口縁の突起部で，大きな円形の刺突文が縦に３個並ぶ	
	6	〃		波頂部より縦位にY字状の隆帯を貼り付け，両側を直線的な沈線で埋める	
	7	口縁部		口縁部凹状沈線。胴部に縦位の沈線。地文は縄文	堀之内式
	8	〃		口唇部に凹状沈線。胴部に縦位の沈線。地文は縄文	〃
	9	〃		口縁部に１条の沈線。胴部は縦位の沈線で埋める	〃
	10	〃		口縁部に１条の沈線。胴部に弧状の沈線がのびる	〃
	11	胴部		直線及び弧状の沈線。地文は縄文	〃
	12	口縁部		口縁部はゆるく内彎し，横方向に円形刺突文が施される	
	13	〃		細い隆帯が口縁と平行して回り，途中に８の字状の貼り付け文がある。沈線で幾何学的に区画され，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	14	〃		刺突のある細隆帯をめぐらし，８の字状の貼り付け文を有する	
	15	〃		縦位及び横位の隆帯を有し，その上に刺突を施す。口縁部はくの字状に内側に曲がる	
	16	〃		口縁部は内彎し，口唇部にきざみを有する。１組の平行沈線を施文し，その上下に接する形で刺突文を加える	
	17	〃		内彎する浅鉢の口縁部で，上下を沈線で区画した縄文帯を持つ	
	18	〃		No.17と同一個体。縄文帯の中に縦方向の沈線あるいは刺突がある	
	19	〃		口縁部に平行する２条の沈線を有し，中に刺突を加える。胴部は沈線で区画された磨消縄文である	
	20	胴部		沈線で幾何学的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消しである	堀之内式
	21	〃		曲線状の沈線で区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	22	〃		蛇行沈線を施文する	
	23	〃		結束第１種	

表８　第44図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－11	24	口縁部		口唇部がくの字状に外反する。胴部は縄文	
	25	〃		口縁部はゆるく内彎に立ち上がり，口唇部でくの字状に外反する。沈線で区画された縄文帯をもつ	
	26	〃		口縁部に１条の沈線を有し，胴部は縄文のみ。ＬＲが多い	
	27	〃		口唇部内外に凸帯を有す。地文は縄文。	
	28	〃		縄文のみ。ＲＬ	
	29	〃		わずかに外反する。縄文のみ	
	30	〃		波状口縁。縄文のみ	
	31	〃		地文は縄文	
	32	〃		地文は縄文	
	33	〃		口縁部に１条の沈線。地文は縄文	
	34	〃		口縁部は凹凸をみせる。地文は縄文	
	35	〃		地文は縄文。Ｌ｝ｌ	
	36	〃		一条の沈線で区画し，口唇部まで縄文を充填する	
	37	〃		口縁部に紐線を付し，横方向の斜沈線を施す。地文は荒い縄文	加曽利Ｂ式（粗製）
	38	〃		口縁部に紐線を付し，横方向の沈線を施す。地文は荒い縄文	〃　〃
	39	〃		口縁部に紐線を付し，横方向の沈線を施す。地文は荒い縄文	〃　〃
	40	〃		口縁部に紐線を付す。沈線で区画された中に斜位の沈線を施す	加曽利Ｂ式
	41	〃		口縁部に紐線を付し，荒い縄文の上に斜位の沈線を施す	〃
	42	〃		口縁部に紐線を付し，細い条線を斜方向に施す	〃
	43	〃		口縁部に紐線を付し，胴部は縄文のみ	
	44	〃		口縁部に紐線を付す。地文は縄文	
	45	〃		口縁部に紐線を付す	
	46	胴部		頸部に紐線を付し，上下段ともに斜方向の沈線を施す。地文は荒い縄文	
	47	〃		頸部に紐線を付し，上は斜方向の沈線，下は縄文を施す	
	48	口縁部		口縁部は外反し，２本の沈線の間にまばらな縄文を配す	

表 9　第45図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－11	49	口縁部		口縁部は外反する。斜行する沈線を施す	
	50	〃		横走する沈線を施す。地文は荒い縄文	
	51	〃		ゆるく内彎する口縁部で，横走する沈線→斜行する沈線の順に施文する	
	52	〃		右下がり→左下がりの順で沈線を施文する	
	53	〃		右下がり→左下がりの順に沈線を施し，地文は縄文である	
	54	胴部		右下がり→左下がりの順に沈線を施す	
	55	〃		右下がり→左下がりの順に沈線を施す	
	56	〃		右下がり→左下がりの順に斜行沈線を配する	
	57	口縁部		内彎する浅鉢の口縁部で，数条の平行沈線を引き，間を斜位の沈線，磨消し，縄文などで施文する	
	58	〃		内側の口唇部に刻みを持ち，内面は削りによる凸帯を残し，ここにも刻みを有する	
	59	〃		口縁部内側が凹み，文様はない	
	60	〃		波状口縁を呈し，波頂部から沈線が下がる。（　）形の単位文が2段に付く	
	61	底部		網代痕	
SI－12	1	口縁部		隆帯が楕円形に回り，中を幾何学的な沈線でかざる	
	2	〃		口唇部に円形刺突を施こし両側に2条の沈線を配す。胴部に沈線を施文する	
	3	〃		口縁部が内彎し，沈線を施す	
	4	〃		数条の沈線で文様を現わす。地文は荒い縄文	
	5	〃		口唇部に太い沈線を配し，平行する数条の沈線が横走する	
	6	〃		口唇部及び胴部に横走する沈線を施文する。地文は縄文	
	7	〃		口唇部に太い沈線を配す。地文は縄文	
	8	〃		口縁部に2条の沈線を横走させ，その間に点刻文を施す。地文は縄文	

表10　第46図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－12	9	口縁部		外反する口縁で，縄文のみ。ＬＲ	
	10	〃		内傾する口縁部で，口唇部のみ外反する。横方向の縄文	
	11	〃		外反する口縁部で，口唇部内側がくの字状に屈曲する。縄文のみ	
	12	〃		内彎する鉢形土器で，10本の沈線が横走し，内部に縄文を充填する。外は磨消し	加曽利Ｂ式
SI－13	1	口縁部		口縁部がくの字状に屈曲し，斜位及び弧状に隆帯を貼り付ける。ヘラ整形	
SI－15	1	口縁部		くの字状に屈曲する口縁部で，紐線を付し，口唇部に列点刺突が施される	
	2	胴部		沈線で区画した中にＲＬの縄文を充填する。外側は磨消し	
	3	口縁部		口縁に平行に細い紐線を付す。磨消し	
	4	〃		口縁はゆるく外反し，口唇部を沈線で区画し内部は列点刺突を加える。沈線下に縄文を施す	
	5	〃		直立する口縁部で，内側に数条の沈線が入る。縄文のみ	
	6	〃		口縁はゆるく内彎し，口唇部の１条の沈線で区画する。縄文のみ	
	7	〃		口縁部は内彎し，２本の平行沈線の間を斜位の短い沈線で埋める	
	8	〃		ゆるく外反し，口唇部内側は削り取られて稜を成す。縄文のみ	
	9	〃		ヘラ整形	
	10	底部		網代痕	

第16号住居址（実測図　図63）

本住居址はＢ１区・Ｂ２区にまたがって検出され，第27号住居址と重複している。土層断面図をみると，第27号住居址に切られていることがわかるが，床面レベルが同一なこと，壁溝が連続していることなどから第27号住居址の拡張部分とも考えられる。しかしここでは各々単独の住居址として説明しておく。

主軸は東西方向であると思われ，確認部分の南北長3.21 m，東西長1.5 m を測る。壁は確認できなかった。床面は黒色土中に検出された比較的軟らかい。また傾斜もなく平坦である。炉址は

なかった。ピットは1ケ所検出され，北東コーナー部に位置している。なお床面上には混貝土層の堆積がみられた。出土遺物はない。

第17号住居址（実測図　図47，遺物　図57・58図，写11―2）

本住居址はC3区に位置し，第1号溝・第190号土壙と重複している。各遺構とも本住居址よりは新しいと思われる。特に第1号溝は遺構中央部を横切っているため，炉址などは半分近く失われていた。

主軸方向はN―25°―Eで，長径5.5m，短径5.0mの楕円形を呈している。床面までの深さは東及び南側で深く18～23cmを測るが，北及び西側では極めて浅く5cm程である。壁溝や壁柱穴などは確認されなかった。床面は炉址の周囲は固く踏みしめられていたが，壁近くはそれほどでもない。また多少の凹凸がみられ，北東方向にゆるい傾斜を有する。

ピットは18ヶ所検出された。主軸と平行に東西に配置されている傾向がみられ，径25～80cm，深さ16～102cmを測る。この他に第1号溝内にも数ヶ所のピットが存在する。第1号溝により半分切断された形で炉址が床面のほぼ中央部に検出された。元来は長径75cm程の楕円形を呈していたものと思われるが，前述のように東半分は消失している。床面を25cm掘り凹めた地床址で，焼土層の堆積がみられた。覆土は貝層と暗褐色土層に大別される。貝層は住居址中央部から南側一帯にかけて床面まで堆積しており，上面は混土貝層，下面は混貝土層である。

遺物は深鉢の破片とみられるものが多数みられ，他に完形の鉢形土器(加曽利B式)，小型深鉢形土器が出土している。

第18号住居址（実測図　図48）

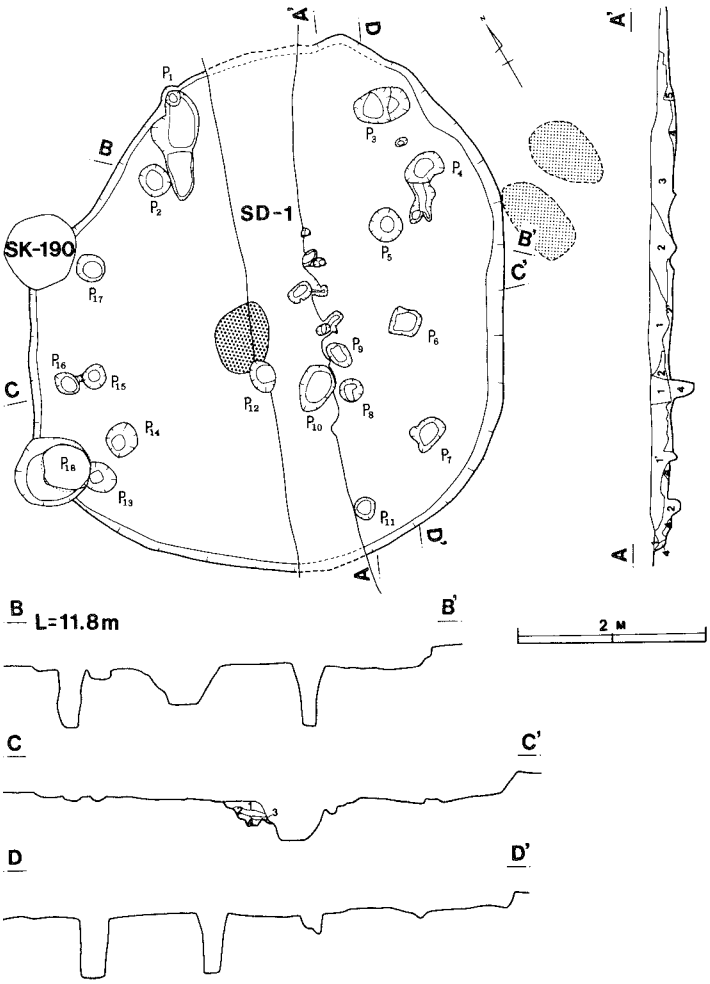
本住居址はC3区に位置し，南東部には第1号溝・第17号住居址が所在している。

表土掘り下げ後，ピット列としてとらえることのできた遺構で，径5.6mの円形を呈している。床面はロームで，それほど締まりはみられない。炉址状の遺構が中央やや北寄りに検出された。この部分は焼土粒子の堆積が4cmの厚さに堆積していただけで，純粋の焼土層はみられず，長径約55cmの楕円形を呈している。床面の掘り込みなどもないことから，炉址であった可能性は少い。ピットは11ヶ所検出された。径のわりに浅いものが多い。P_2・P_3・P_4は2段掘り込みのあるピットであった。

遺物として縄文土器片があるだけである。

第19号住居址（実測図　図49，遺物　図57）

本住居址は調査区西側B1区に位置し，第27号住居址の真下に当たっている。第27号住居址



第47図　第17号住居址

第17号住居址土層解説

A—A′

1　黒　色　土　(混土貝層)

1′　〃　(1に同じ，貝がいくらか少量になる)

2　暗　褐　色　土　(混貝土層)

2′　〃　(混貝土層，ハードロームブロックを含む)

3　〃　(固く締まりＹＰ・焼土粒子・ハードロームブロックを含む)

4　〃　(固く締まりＹＰ・ハードロームブロックを含む)

5　〃　(締まり弱くハードロームブロックを含む)

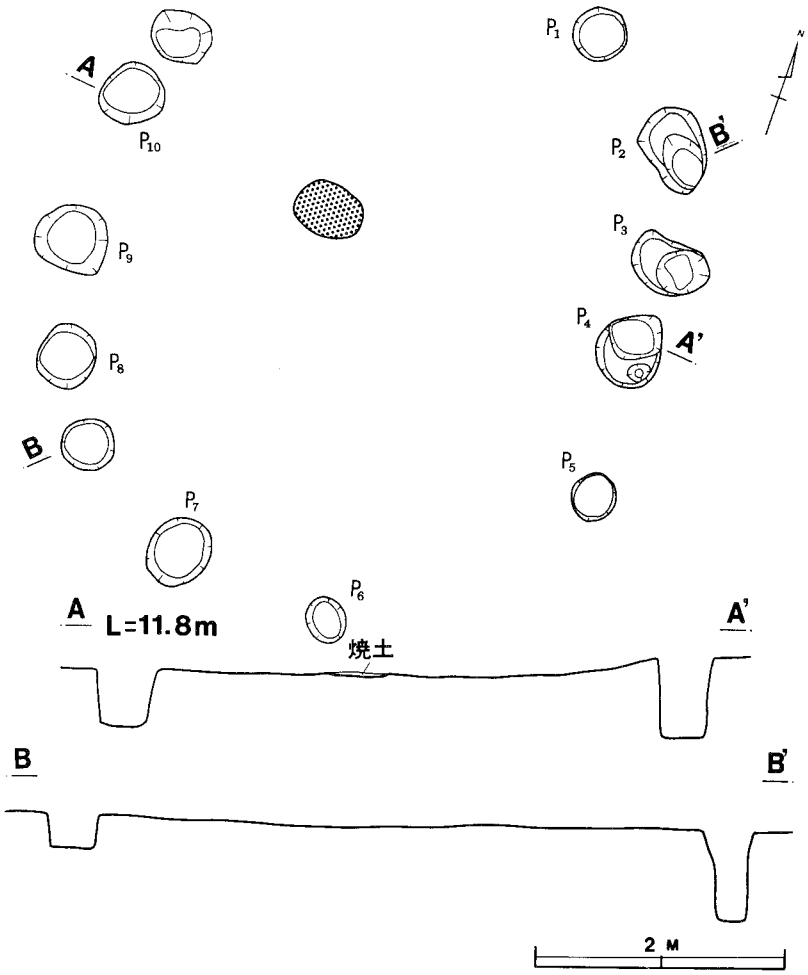
C—C′

1　暗　褐　色　土　(固く締まり焼土粒子・ロームブロックを含む)

2　暗　褐　色　土　(よく締まり焼土・ハードロームブロックを含む)

3　うすい赤色土　(固く焼けている)

4　褐　色　土　(ハードロームブロックが多い)



第48図　第18号住居址

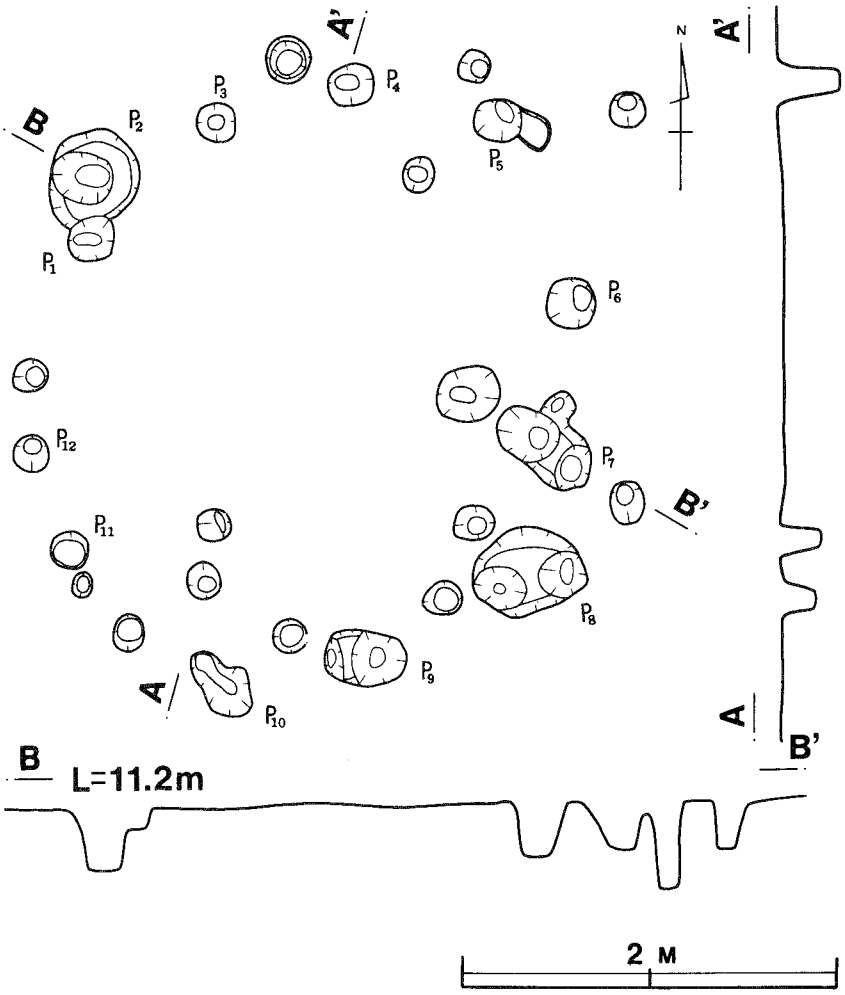
が黒色土中に営まれており，調査終了後に黒色土を除去したところ本住居址のピット列が確認された。

主軸方向はN—26°—Eで，長径約 3.8 m，短径約 3.3 m の楕円形を呈している。床面はロームで，締まりはなく，炉址も検出されなかった。ピットは 29ヶ所検出されたが，主柱穴とみられるものは P_1～P_{12} である。それぞれ径 20～55 cm，深さ 30～63 cm を測る。

遺物として深鉢形土器の胴部片が覆土より出土している。

第 20 号住居址（実測図　図 50，遺物　図 57・58）

本住居址はC 2 区南側に位置し，第 92 号・137 号土壙と重複している。新旧関係をみると，2 基の土壙とも住居址より新しいと考えられる。



第49図　第19号住居址

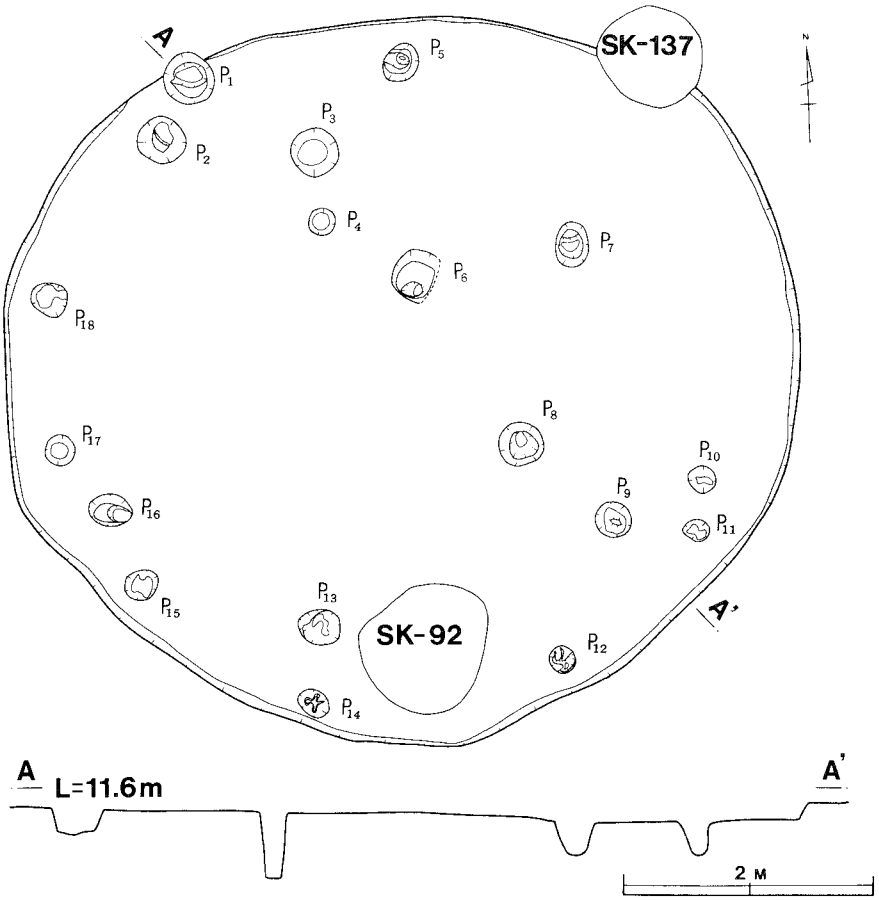
平面形は長径 6.35 m，短径 5.83 m の不整円形を呈している。遺構確認面と床面がほぼ同一レベルであったため，明確な壁は検出できなかったが，南東部で約 15 cm ほどの立ち上がりがつかめた。壁溝及び壁柱穴は存在しない。床面はロームで，中央部が若干締まりをおびている程度である。炉址はなかったものと思われる。遺構確認面と床面とが同一レベルであるため，覆土の状況は不明であるが，縄文土器片が多く出土している。なおピットは 18ヶ所検出されたが，径・深さとも小規模なものが多く，ともに 30 cm前後である。

第 21 号住居址（実測図　図 51，遺物　図 56，写 12―1・2）

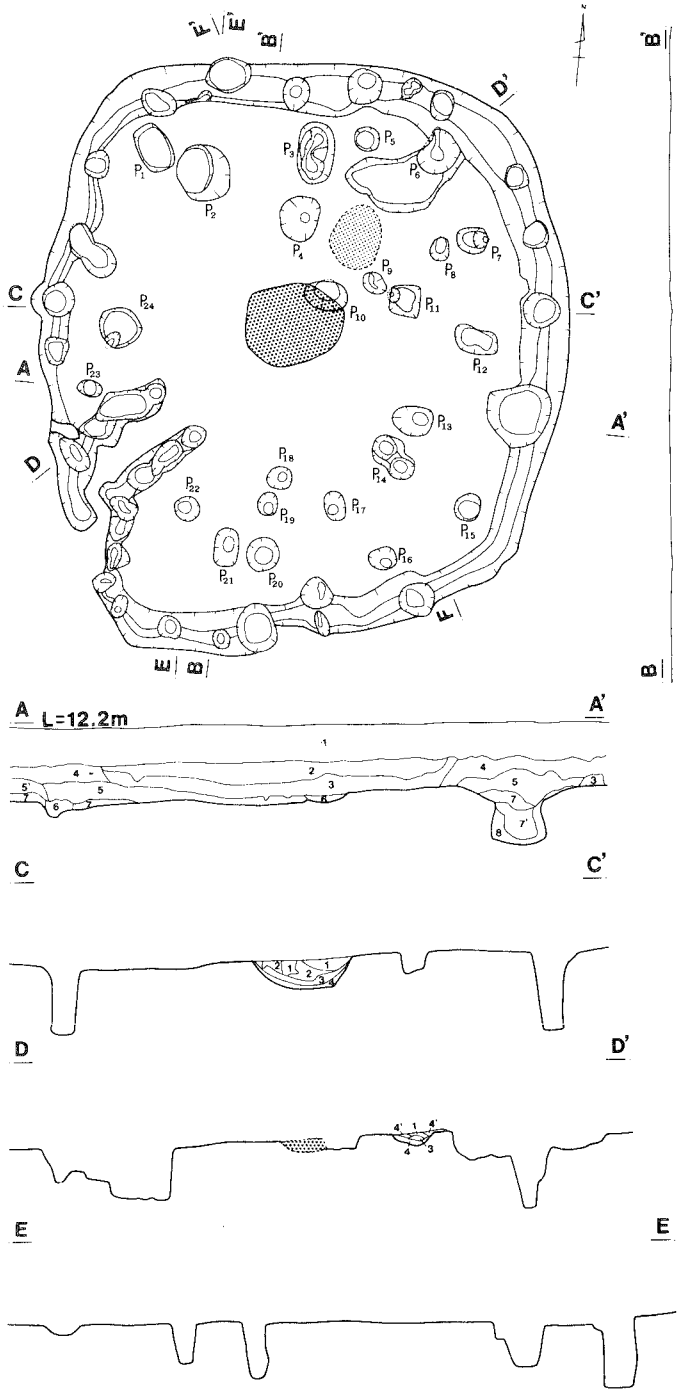
本住居址はC 2 区南西部に位置し南東方向に第 20 号住居址が所在している。

主軸方向はほぼ南北線上にあり，長軸 6.47 m，短軸 5.62 m の隅丸方形を呈している。壁は確認できなかったが，土層断面図でみると表土下第2層部分より掘り込みが開始され，床面までの深さは 40 cmを測ることがわかる。壁溝は南西コーナー部で切れている他は連続して検出され，幅 40 cm 前後，深さ 10 cm 程の溝である。壁柱穴は 0.7～1.0 m の間隔をもって位置している。西及び北側の柱穴は比較的深いものが多く，40～71 cm である。これに対して東及び南側の柱穴をみると一部が深くなるだけで，他は径 30 cm，深さ 11～20 cm のものが多い。

床面は中央部が踏み固められて締まっているが，周辺部は軟らかい。また極端な凹凸はみられないが，炉址周辺がいくらか高くなり，西側に向けてゆるい傾斜を有している。炉址は床面中央やや北寄りに検出された。長径 100 cm，短径 85 cm の楕円形を呈しており，床を 30 cm 掘り下げた地床炉である。多量の灰，焼土の堆積がみられ，地山部も熱を受けてボロボロの状態であった。なおこの炉址の北東 40 cm の床面にも小規模な炉址が検出された。長径約 70 cm の楕円形で，床を皿状に 15 cm 程掘り下げたもので，内部には焼土の堆積もみられる。ピットは壁柱穴以



第50図　第20号住居址



第21号住居址土層解説

A—A′, B—B′

1 表　土
2 純貝層
3 黒褐色土 (混貝土層)
4 〃 (締まり弱くハードローム ブロック含む)
5 〃 (良く締まりハードローム ブロック・焼土を含む)
5′ (5層ほど固くなくローム 粒子が多くなる)
6 褐色土 (良く締まりローム及び ロームブロックを多量に含 む)
7 黒褐色土 (良く締まりハードローム ブロックを含む)
7′ 〃 (7層よりハードロームブ ロックが少量になる)
8 暗褐色土 (ハードロームブロックを 含む)
9 黒褐色土 (極めて固くYPを含む)
10 暗褐色土 (締まりなく焼土・灰を多量 に含む)

C—C′, D—D′

1 黒色土 (灰が混入する)
2 灰　層 (灰白色)
3 焼土層 (赤茶色)
4 黄褐色土 (熱を受けて固い)
4′ 〃 (4より焼土が多い)

第51図　第21号住居址

外に24ヶ所確認できた。深いもので76 cm，浅いもので13 cm と数値的にはバラツキがある。

覆土は上部に純貝層がレンズ状に堆積していた。2層目は混貝土層で，この層は床面まで堆積していた。他の部分は黒褐色土及び暗褐色土であるが，いずれにしても住居廃棄後わりと早い時期に貝の投棄が始まったものと考えられる。出土遺物は少く，縄文土器片が40数点出土しただけである。

ところで本住居址では「出入口」とみられる部分が確認できた。これは南西コーナー部にあたり，一周してきた壁溝がつながらずにこの地点だけ床面が外側の地山と地続きになっている。この平坦な部分は幅 15～40 cm であり，その両側には深さ 26～63 cm 程のピットが連続して掘られ，溝状に深く落ち込んでいるようにみえる。平面図でわかる通り，最外部では幅50 cm あり2度の屈曲をみせ，炉址方向に開いている。床の締まり具合からみても出入口と考えてよいと思われる。

第22号住居址（実測図　図52，遺物　図58，写13―1）

本住居址はC 2 区中央部に位置し，主軸方向はN―33°―E，長径 5.0 m，短径 4.6 m の円形を呈すものとみられる。遺構確認面と床面が同一レベルであったため，壁や壁溝は確認できず，多数のピット列としてとらえられた遺構である。床はロームで傾斜はなく，ほぼ平坦である。炉址は中央部に検出されたが，それほど良好なものではない。灰や焼土粒子を含む層は観察できたが，焼土自体の堆積はみられなかった。

さてピット列であるが，炉址を中心にして円形に並んでいるが，西側では2重に回っていることが確認できる。さらに第21号住居址で確認できた出入口と同様の形態をもつ遺構が，南西及び北東の2ケ所に検出された。2軒の住居址が重複しているのかあるいは拡張された結果なのか，土層断面図が取れなかったこともあり断定はできない。

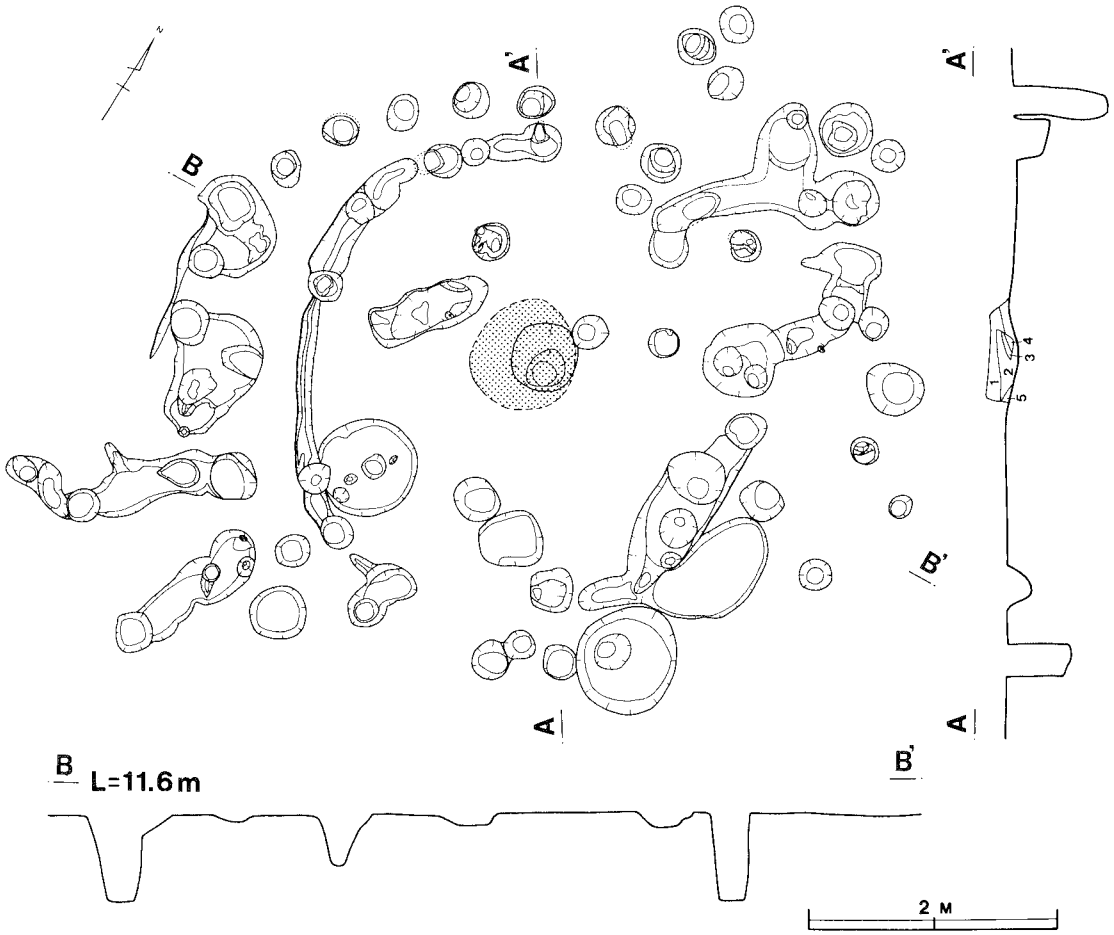
遺物はほとんどなく，縄文土器片10数点だけである。

第23号住居址（実測図　図53，遺物　図58）

本住居址はC 2 区北側，通路に接して検出されたピット列からなる遺構である。確認部分だけでみると東西 5 m，南北 4.6 m の半円形を呈している。

遺構確認面と床面が同一レベルであるため，壁や壁溝は確認できなかった。床面はロームであり，平坦で傾斜も有しない。しかし本来はもう少し上の面に床があった可能性が強い。炉址は確認できなかった。出土遺部は縄文土器片5点のみであった。

第24号住居址（実測図　図54，遺物　図58・59，写13―2）

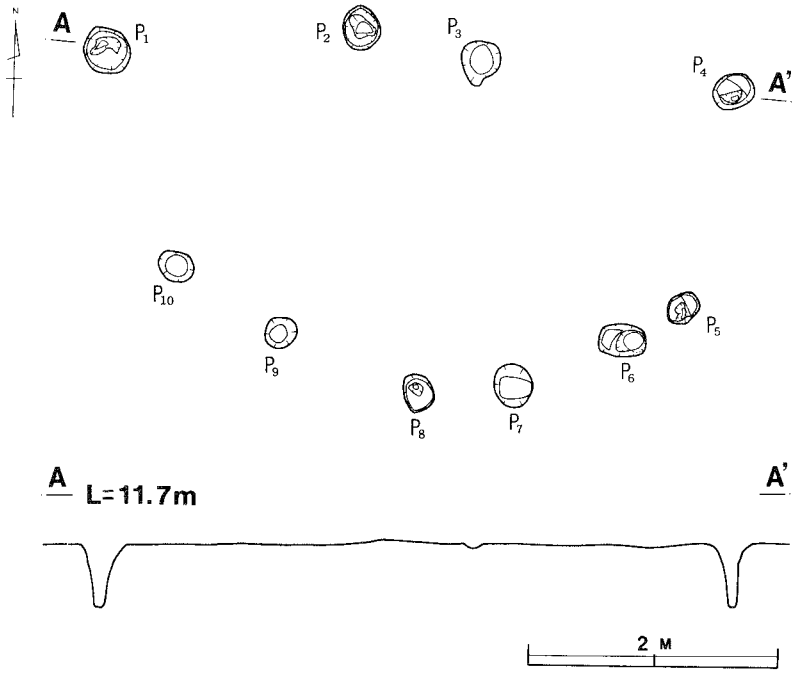


第52図　第22号住居址

第22号住居址土層解説

A－A′

1　褐　色　土　(焼土粒子を含む)
2　暗　褐　色　土　(灰・焼土粒子を含む)
3　灰　褐　色　土　(灰を多量に含む)
4　にぶい赤褐色土　(焼土を多量に含み，熱を受けて締まっている)
5　暗　褐　色　土　(焼土粒子を含む)



第53図　第23号住居址

本住居址はC 2 区北西部に位置し，内部に第 139 号土壙が所在する。

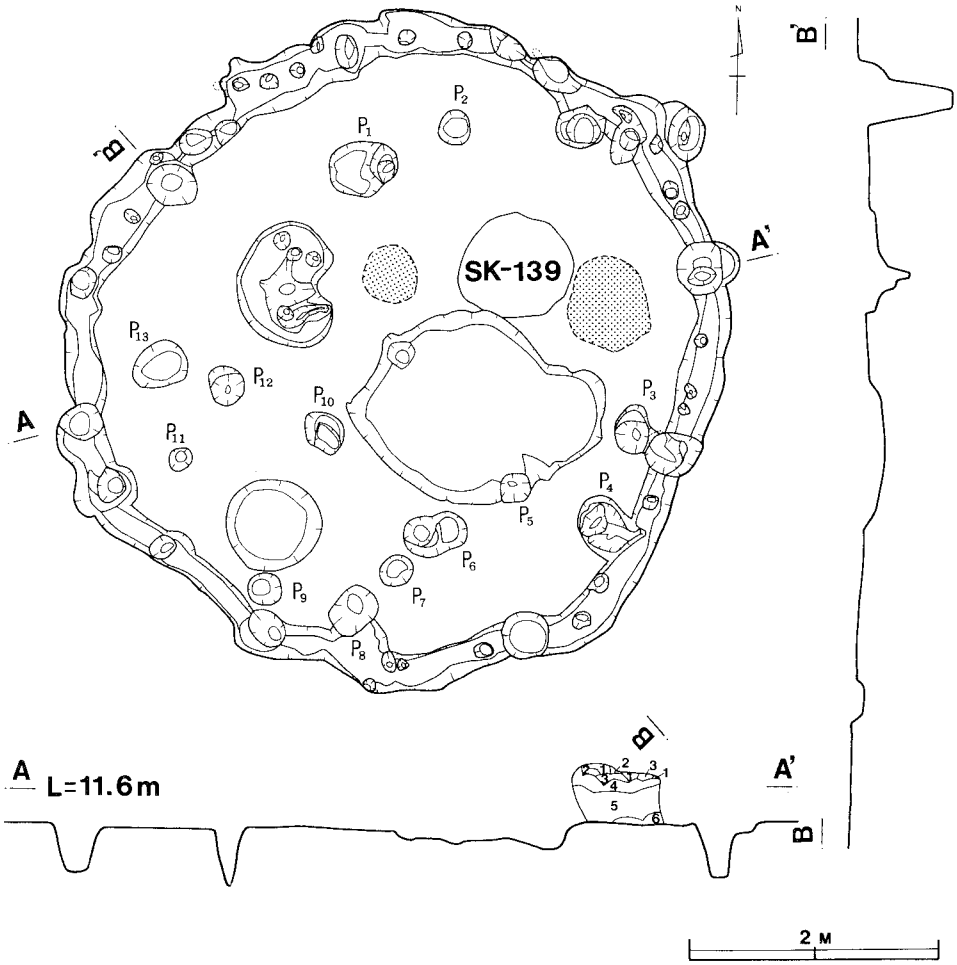
主軸方向はN—78°—Eで，長径 5.67 m，短径 5.45 m の円形を呈している。壁は検出できなかったが，壁溝は幅 30 cm 前後，深さ 10 cm を測り，円形に回っている。壁柱穴は径・深さとも規則性がないが壁溝内に連続して検出された。径 15～50 cm，深さ 20～81 cm を測る。床面は中央部に向けてゆるい傾斜を有し，それほど踏み固められた様子はみえない。第 139 号土壙をはさむようなかたちで，東西に焼土の堆積が確認された。しかし床面の掘り込みは認められない。ピットは 13ヶ所検出された。それらの大きさは径 20～55 cm，深さ 18～50 cm を測る。

遺物は少量で，縄文土器片，石斧の破片等がある。

第 25 号住居址（実測図　図 55，遺物　図 59・60，写 14—1）

本住居址は調査区西側 B1 区に位置し，第 177 号土壙と重複している。東側 0.6 mには第 176 号土壙が所在している。第 177 号土壙は本住居址の床を切っていることからより新しいと思われる。なお全体の半分以上がエリア外のため全体の調査はできなかった。

確認された範囲では主軸を東西線上に有し，短軸 3.8 m，長軸方向 2.7 m を測り，長方形を呈すものと推定される。壁はほとんどとらえることができなかったが，南側では約 10 cm の深さで外反して立ち上がることが確認できた。また壁柱穴と考えられる径 15～30 cm のピットが方形に連続して確認され，部分的ではあるがピットとピットをつないでいる溝状の落ち込みも検出できた。



第54図　第24号住居址

第24号住居址土層解説

A　A′

1　黒　褐　色　土　(締まりなく焼土粒子・灰・炭化物を含む)

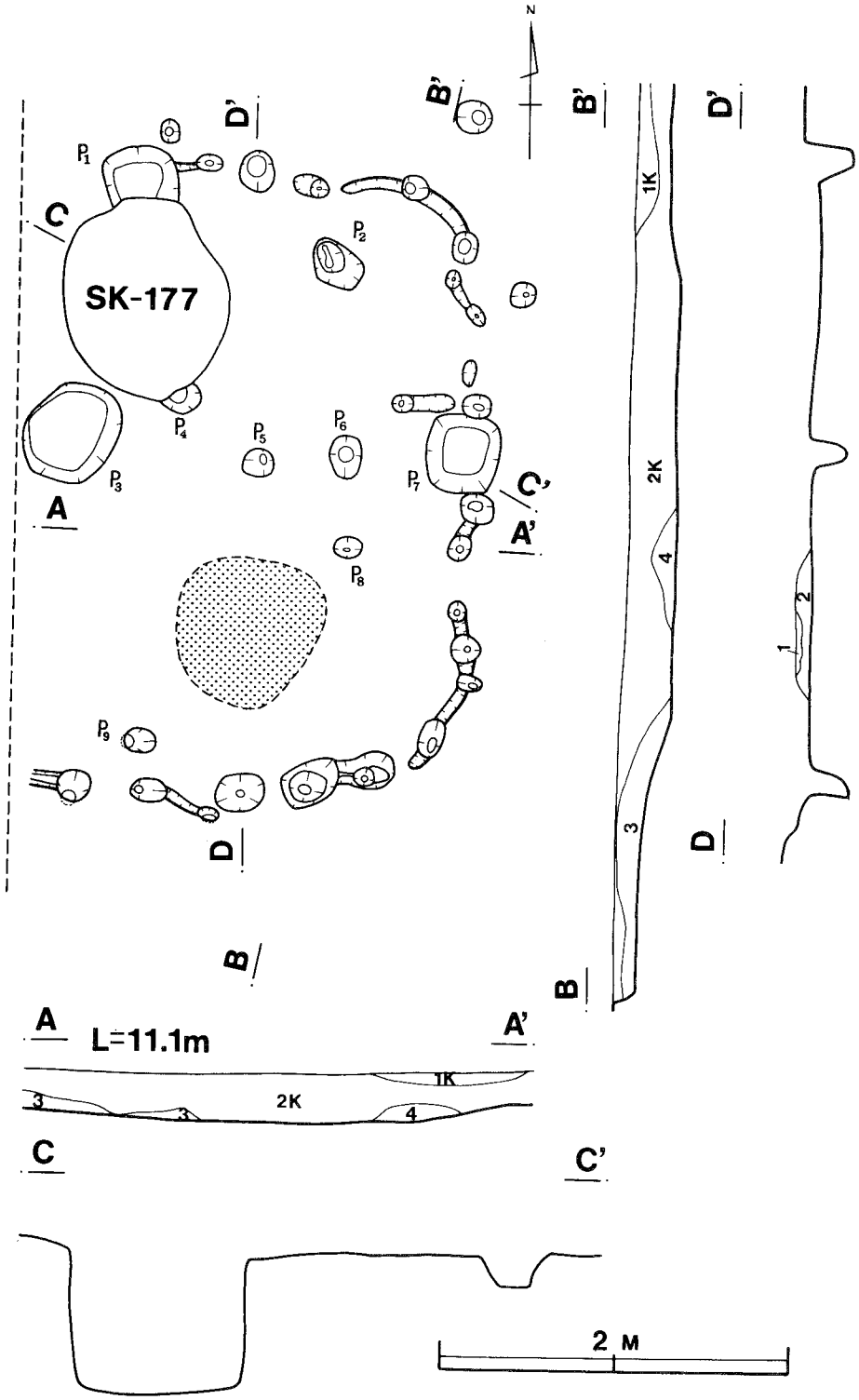
2　にぶい黄橙色土　(大部分が灰層，焼土粒子を含む)

3　橙　色　土　(焼土)

4　黒　褐　色　土　(締まり弱く焼土粒子・炭化物・貝を含む)

5　〃　(よく締まりハードロームブロック・炭化物を含む)

6　暗　褐　色　土　(ローム粒子・炭化物を含む)



第55図　第25号住居址

床面はロームで，それ程締まりはない。床面中央部が若干盛り上がっているが，周辺部は平坦である。炉址とみられる灰の堆積が南東コーナー付近に確認され，長径 90 cm，短径 85 cm を測る。灰及び炭化物を含む層で床面を掘り込んだ様子はみられない。ピットは 9 ヶ所検出された。径 15～60 cm，深さ 16～38 cm を測る。覆土はその部分が貝層であった。混貝土層が主で，部分的に混土貝層も存在し床面まで堆積している。

出土遺物は多くの縄文土器片の他に，凹石，たたき石，打製石斧等がみられる。

第25号住居址土層解説

A－A′，B－B′

1K	褐　色　土	(混土貝層)
2K	黒　褐　色　土	(混貝土層，焼土・炭化物を含む)
3	〃	(締まり弱くハードロームブロック・炭化物を含む)
4	〃	(締まりなく灰ブロックの混入がある)

D－D′

1	黒　褐　色　土	(灰と焼けた貝片を含む)
2	〃	(締まりなく炭化物を含む)

第 26 号住居址（実測図　図 62，遺物　図 56・57・60）

本住居址はＢ２区に検出され，他の遺構との重複はなかった。

主軸方向はN－6°－Wで，長径 3.52 m，短径 3.31 m の楕円形を呈している。床面までの深さは約 50 cmで，壁は外反して立ち上がっている。壁溝はなく，明確な壁柱穴も検出できなかった。床面はロームで多少の凹凸をみせながら中央部に向けて傾斜を有している。炉址は最初からなかったものとみられる。ピットは 15ヶ所検出された。円形もしくは楕円形を呈し，径 14～34 ㎜，深さ 15～75 cm を計る。P_1・P_9・P_{13}・P_{15} などが主柱穴であろうか。覆土は黒褐色土・暗褐色土が 3 層に堆積し，自然流入の様相をみせている。

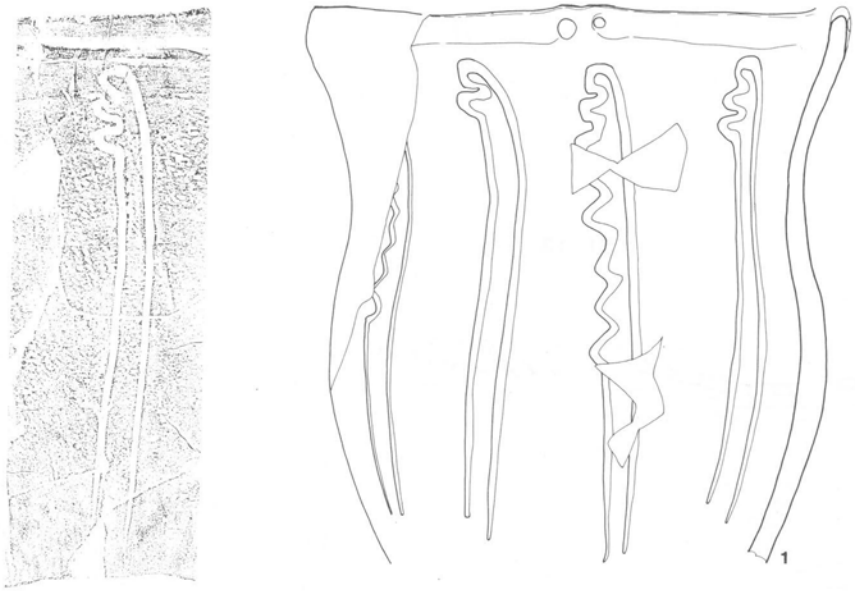
出土遺物として多数の縄文土器片，磨石，砥石などがみられる。

第 27 号住居址（実測図　図 63，遺物　図 57・61，写 14－２）

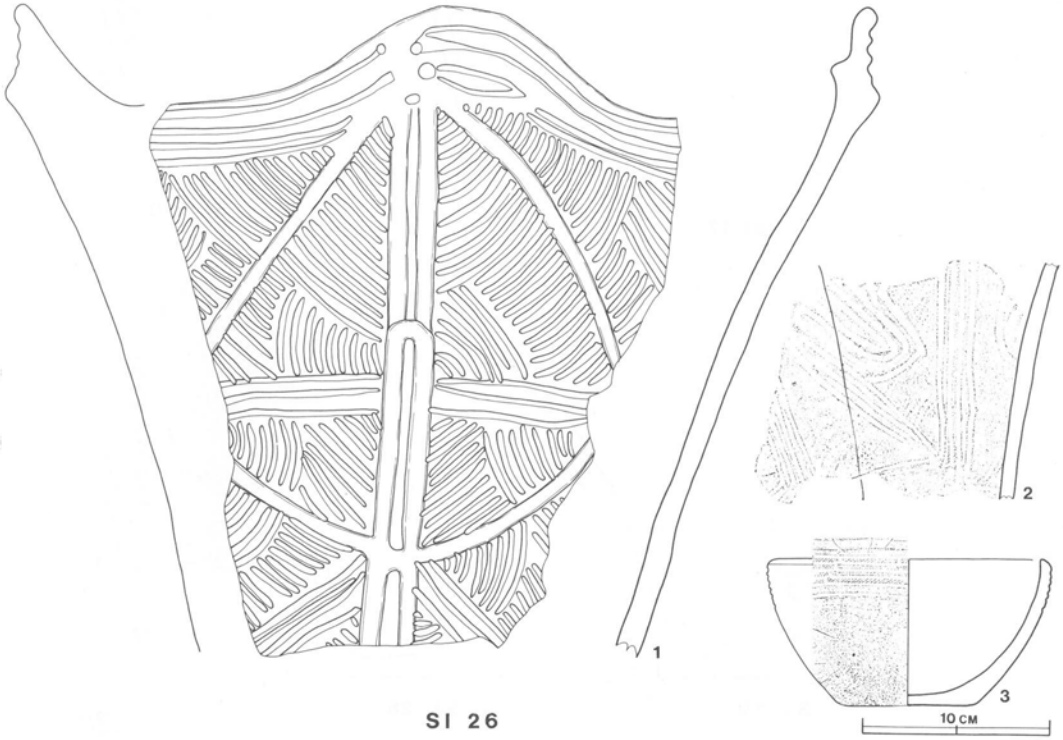
本住居址はＢ１区に位置し，第 16 号・19 号住居址と重複している。

主軸を東西線上に有し，長軸 3.7m，短軸 3.41m の隅丸方形を呈する。遺構は黒色土中に確認され，貝及び焼土粒子が全面に堆積していた。ただ確認面がすでに床面であったため，壁は検出できず，壁溝が幅 15～30cm，深さ 5cm の数値をみせて周回している。壁溝中からはピットが 4 ケ所検出された。

床面は固く締まっておらず，貝破片の散布がみられほぼ平坦である。主軸線上中央に炉址をもっている。この炉址は長径 75cm，短径 60cm を測り，楕円形を呈する地床炉である。断面は逆台形で，床面から 20cm 程掘り下げてある。内部には焼土・灰の堆積がみられた。ピットは 9 ケ所

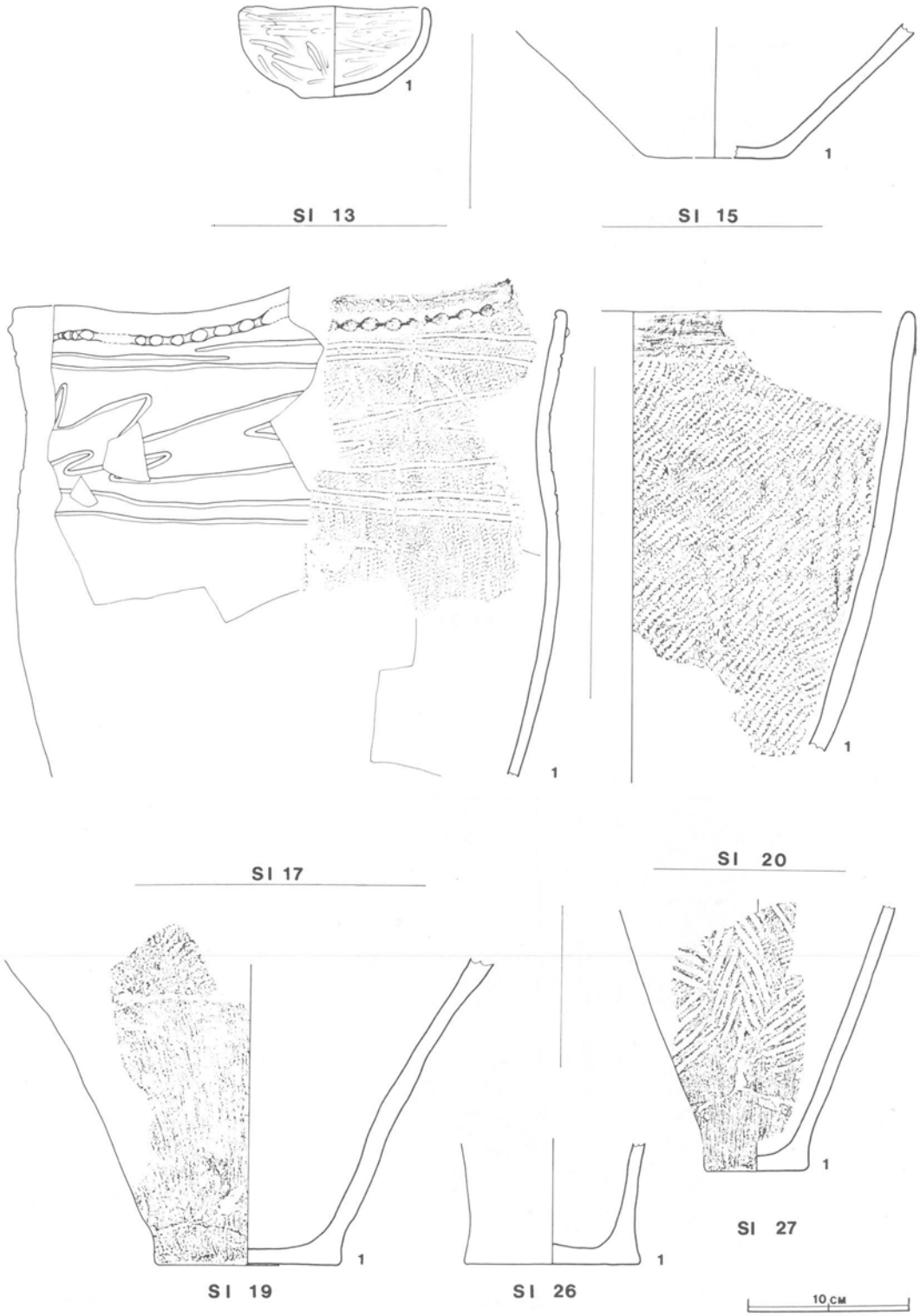


SI 21

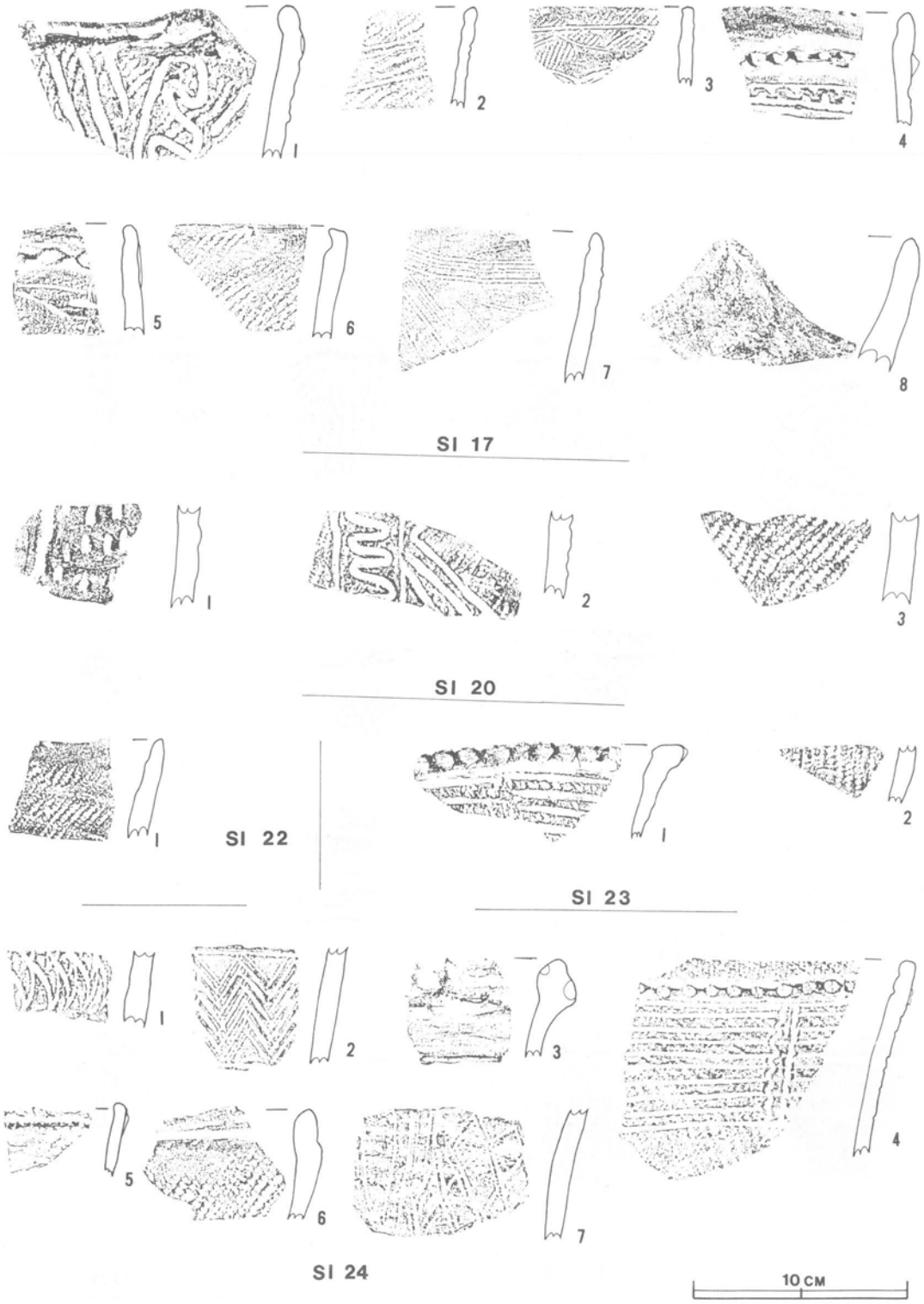


SI 26

第56図　住居址出土遺物

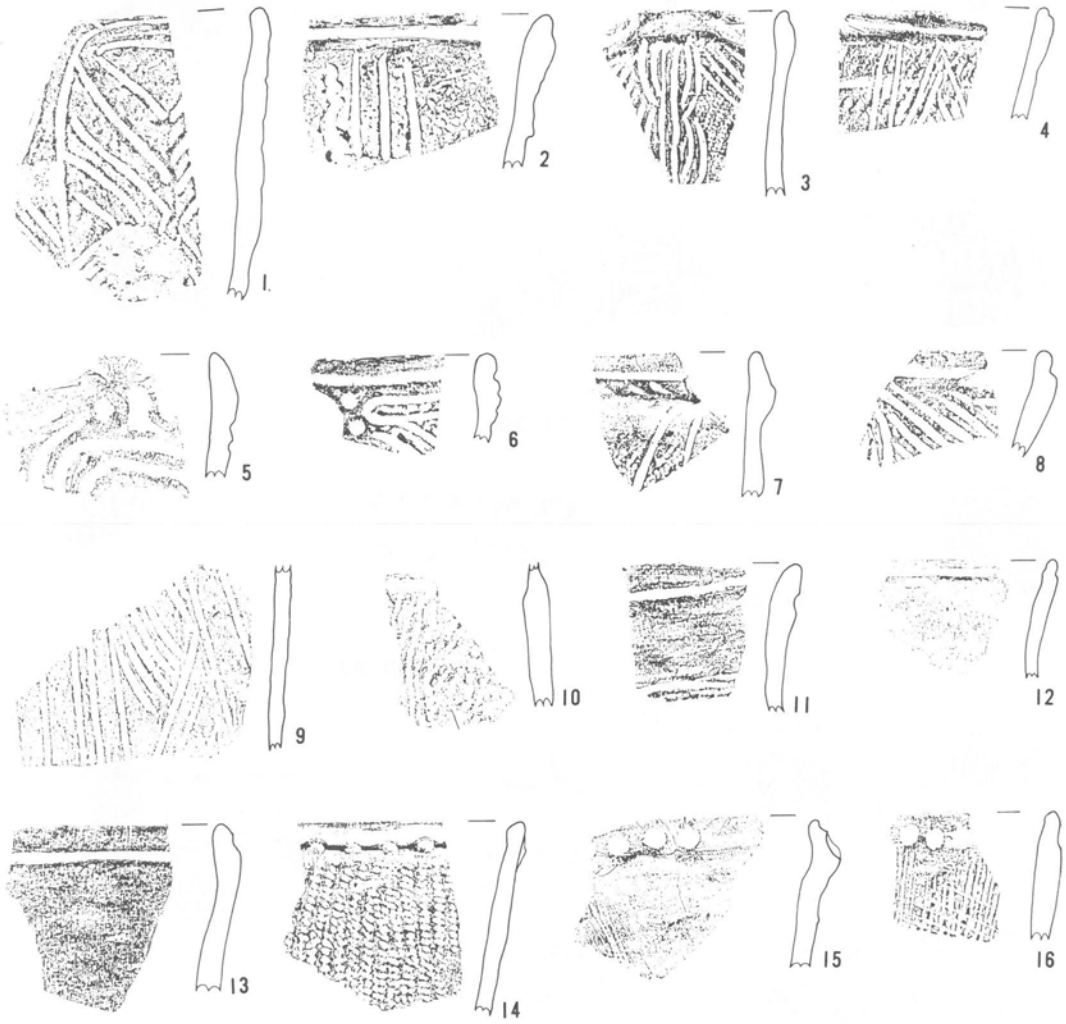


第57図　住居址出土遺物



第58図　住居址出土遺物

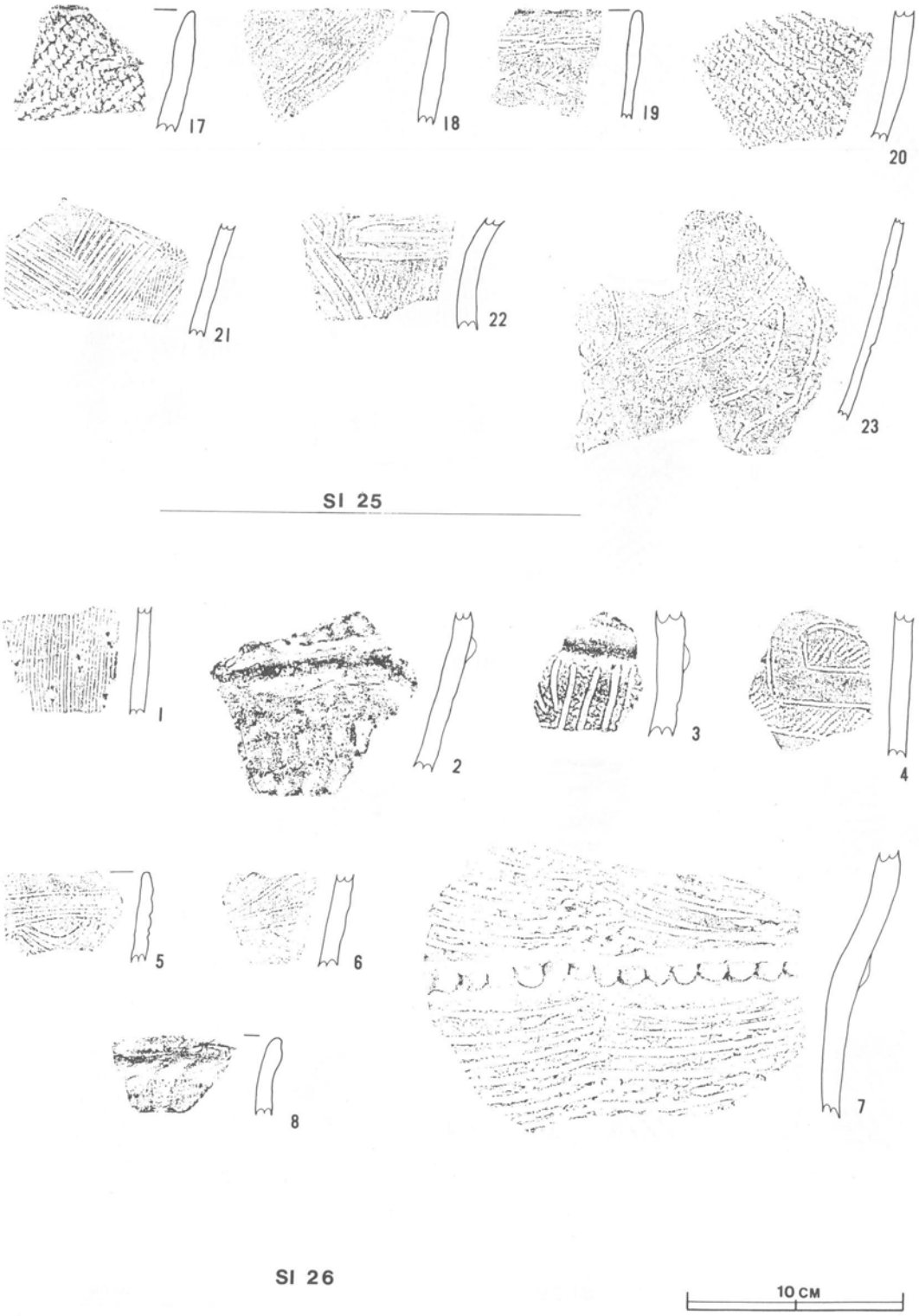
SI 24



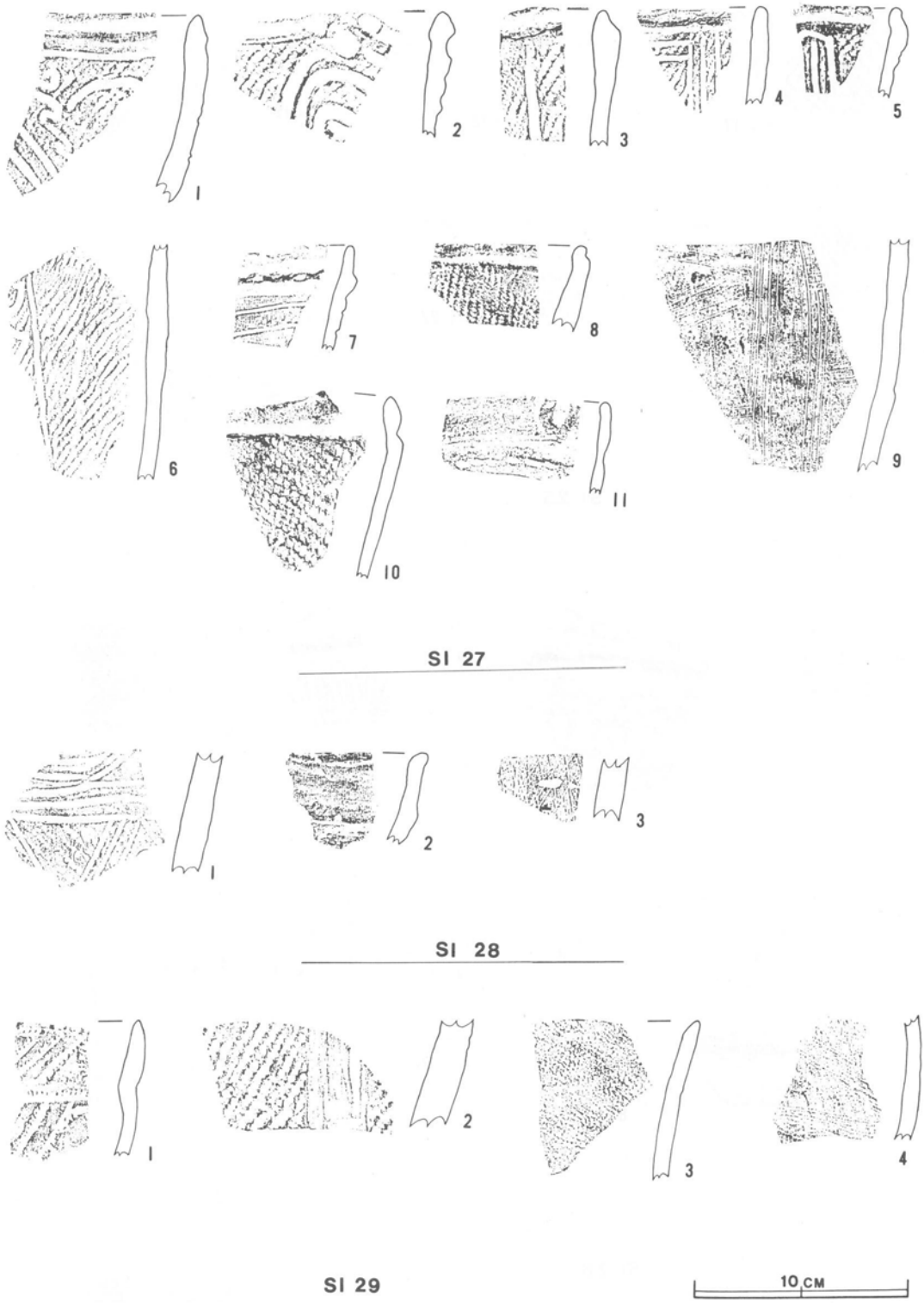
SI 25

10CM

第59図　住居址出土遺物



第60図　住居址出土遺物



第61図　住居址出土遺物

表11　第56図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—21	1	深鉢形	口径 28.6 現存高 29.4 胴部 26.4	口縁に4ヶ所の微隆起・刺突を有し，口縁部無文帯下に懸垂文が施される	橙色を呈する。堀之内Ⅰ式（写31—5）
SI—26	1	深鉢形	口径 45.0 現存高 34.5	口縁部に4ヶ所の波頂部を有するものと思われる。地文に縄文を施し，ナデ整形後隆帯を貼付け羊歯状に沈線を配する	外面は灰褐色で，内面は淡黄色。堀之内Ⅰ式波状口縁（写31—1）
	2	深鉢形	現存高 12.4	4本の垂下する沈線で区画し，間に屈曲する沈線文を配する	胎土に砂粒，砂礫を含む。にぶい褐色を呈する。堀之内式
	3	鉢形	口径 (15.2) 現存高 7.8 底径 7.2	口縁に平行な6本の沈線を施し，1段目と4段目の沈線間には刻み目を充塡する。内外面ともヘラナデ	胎土に砂粒，砂礫を含む。にぶい赤褐色を呈する。加曽利B式

表12　第57図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—13	1	小型浅鉢	口径 11.5 器高 5.6 底径 4.4	外面……ヘラ削り 内面……口縁部はヘラナデ，胴部以下はヘラ削り	胎土にスコリア砂粒を含む黒褐色を呈する（写40—5）
SI—15	1	鉢形底部	現存高 7.6 底径 8.7	内外面ともヘラナデ 内面底部のみヘラ削り	胎土にスコリア砂粒を含む。明赤褐色を呈する
SI—17	1	深鉢形	口径 33.6 最大胴部 33.6 現存高 28.4	口縁部に粘土紐を貼り付け，指頭による刺突を施す。胴部は2段の平行沈線に2条の波沈線を配す	胎土に細砂粒を含む。灰褐色を呈する（32—5）
SI—19	1	深鉢底部	現存高 18.7 底径 11.2	胴部上半は縄文（LR）を施す。胴部下半・底部はヘラ削り，内面はヘラ磨き	胎土に砂粒を含む。にぶい赤褐色を呈する
SI—20	1	深鉢口縁部	口径 34 現存高 27	全面に縄文（LR）が施されるが，口縁部に無文帯を有する	胎土に細砂粒・スコリアを含む。暗褐色を呈する
SI—26	1	深鉢底部	現存高 12.4 底径 10.7	全面ヘラ削り	胎土にスコリア・砂礫を含む。にぶい黄橙色を呈する
SI—27	1	深鉢底部	現存高 16 底径 6.7	地文として縄文（LR）を施し，羽状を呈する。沈線を配する	胎土にスコリア，砂礫を混入する。赤褐色を呈する

表13　第58図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—17	1	波状口縁		小波状口縁で，口縁に平行な沈線を配し，直線及び蛇行する沈線を施文する。地文は縄文	堀之内式
	2	口縁部		口縁部に左下がりの沈線3条を有す。地文は縄文	
	3	〃		口唇部に平行な沈線をまわし，さらに鋸歯状の沈線が2段横位に施行される。地文は縄文	
	4	〃		紐線を付し，下部に平行沈線十列点刺突の手法により逆U字状の凸帯を残す	
	5	〃		口縁部に紐線を付し，斜行沈線を施文する。地文は縄文	

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—17	6	〃		口縁部内側に凹帯を施す。縄文のみ	
	7	〃		ヘラ整形後，平行沈線・斜行沈線を施文する	
	8	波状口縁		大波状口縁の波頂部。若干の縄文を残す	
SI—20	1	胴部		沈線で区画された中に，米粒状の刺突文を充塡する。ヘラ整形	称名寺式
	2	〃		蛇行沈線の両側に縦位の沈線を配し，さらに斜行沈線を施文する。地文は縄文	堀之内式
	3	〃		縄文のみ	
SI—22	1	口縁部		口唇部横ナデ。縄文のみ	
SI—23	1	口縁部		口縁部に紐線を付し，横位の沈線を施文する。地文は荒い縄文	
	2	胴部		縄文のみ	
SI—24	1	胴部		波状貝殻文を施す	浮島式
	2	〃		2本の沈線で区画された内部に半截竹管による平行沈線が山形に充塡される	五領ヵ台式
	3	口縁部		口唇部表・裏面に刺突が施される	
	4	〃		口縁部に紐線を付し，横走する10本の沈線を施文し，所々縦位の沈線を入れる。地文は縄文	
	5	〃		極めて細い紐線を貼り付ける	
	6	〃		太い沈線で口唇部を区画し，胴部は縄文	
	7	胴部		縦位及び斜行する沈線を施文する	

表14　第59図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI—24	8	胴部		横方向の細い条線に不規則な刺突文を加える	
	9	〃		縄文のみ	
	10	〃		縄文のみ	
SI—25	1	口縁部		直線及び弧状の沈線で器面を埋める。地文は縄文	堀之内式
	2	〃		口唇部に1条の沈線をめぐらし，直線及び蛇行状の沈線を縦位に施文する。地文は縄文	〃
	3	〃		ゆるい波状口縁を呈し，縦位に平行沈線を施文し，両側に弧状の沈線を配する。地文は縄文	〃
	4	〃		口唇部に1条の沈線を有し，斜行沈線を施文する。地文は縄文	〃
	5	〃		波状口縁の波頂部で，円形刺突文から曲線状の沈線がのびる	〃
	6	〃		口縁は内彎し，口縁に平行な沈線をめぐらす。円形刺突文を2個施し，横位・斜位の沈線を施文する	〃

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－25	7	〃		口縁に平行な沈線を有し，直下に列点刺突を配す。胴部に斜行沈線をのばす	〃
	8	〃		口縁に平行な沈線を有し，斜行及び弧状の沈線を施す	〃
	9	胴部		縦位の平行沈線の間に斜行沈線を施文する	〃
	10	〃		荒い縄文地に数条の沈線を縦位に施文する	
	11	口縁部		口縁は外反し，数条の沈線が横走する。ヘラ削り	
	12	〃		口縁は外反し，1条の沈線が回っている。ヘラ削り	
	13	〃		口縁はゆるく内彎し，口縁部に平行な沈線が1条横走する	
	14	〃		口縁部に紐線を配し，胴部は縄文のみ	
	15	〃		口縁部はくの字状に屈曲し，3個1単位の円形刺突を施す。胴部は斜行沈線	堀之内式
	16	〃		口縁部に円形刺突を有し，左下がり→右下がりの順で沈線を施文する	〃

表15　第60図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI－25	17	口縁部		口縁は内彎する。縄文のみ	
	18	〃		縄文のみ	
	19	〃		横位及び斜行する沈線を施す	
	20	胴部		縄文のみ	
	21	〃		沈線を直交させて文様帯をつくり，その間は縄文を埋める	
	22	〃		頸部と思われ，半截竹管による平行沈線を施文する	
	23	〃		曲線状の沈線を施す。地文は荒くまばらな縄文	
SI－26	1	胴部		集合沈線を縦位に施し，竹管刺突を加える	
	2	〃		隆帯を帯状に貼り付け，上下に刺突を配する	
	3	〃		隆帯で口縁部と区画され，沈線を縦位に引く。地文は縄文	堀之内式
	4	〃		沈線で四角形を描き，内部は縄文を充填する。他は磨消し	
	5	口縁部		3条の沈線を平行に施文し，下部を波状沈線で埋める	
	6	胴部		No.5と同一個体であろう	
	7	〃		くびれ部に紐線を配し，その上下とも横方向の斜沈線を施す。地文は縄文	加曽利B式
	8	口縁部		外反する口縁で斜めの浅い刺突を施す	

表16　第61図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-27	1	口縁部		内彎する口縁に平行して2本の沈線が回る。胴部にかけて蛇行・直線・曲線状の沈線を施す	堀之内式
	2	〃		ゆるやかな波状口縁の波頂部で，円形刺突文を中心に，口縁に平行する沈線，蛇行沈線がのびる	〃
	3	〃		口唇部が凹み，縦位の沈線を施す。地文は縄文	〃
	4	〃		横位・縦位の沈線。地文は縄文	〃
	5	〃		口縁部に1本の沈線を配し，縦位の沈線を施文する。地文は縄文	〃
	6	胴部		蛇行沈線及び縦位の沈線を施す。地文は縄文。	〃
	7	口縁部		口縁部に紐線を付し，横位の沈線を施文。沈線間は縄文を充填する	〃
	8	〃		口縁部に平行な沈線を配する。胴部は縄文	〃
	9	胴部		半截竹管による平行沈線を縦位及び斜位に施文する	〃
	10	口縁部		小突起を有する口縁で，太い沈線を配する。胴部は縄文	〃
	11	〃		弧状・列点状の刺突を有する	〃
SI-28	1	胴部		横位及び斜位の沈線を施文する	
	2	口縁部		口縁に数条の沈線を横位にめぐらす	
	3	胴部		斜交沈線を施文する	
SI-29	1	口縁部		沈線で直線的な文様を区画し，その沈線に沿って刺突を加える	
	2	胴部		縦位に磨消し部を配し，この両端に縦位の沈線を引く。地文は縄文	
	3	口縁部		口縁部は外反し，縄文のみ	
	4	胴部		細い沈線が斜行する	

検出された。直径は 18～38cm を測るが，P_4・P_5は大きな掘り込みで底部に複数のピットを持ち，本遺構では特異である。覆土は 10 cm 弱の部分しか確認できなかったが，ほとんどの層に貝破片の混入が認められた。

出土遺物は縄文土器片多数の他に，小型深鉢形土器の胴～底部片，磨石片などがある。

第 28 号住居址（実測図　図 64，遺物　図 61）

本住居址はＣ２・Ｄ２両区にまたがって検出され，第４号住居址と重複している。新旧関係をみると第４号住居址は本住居址を切って営まれており，明らかに本住居址の方が古いと思われる。

主軸方向はＮ－53°－Ｅで，長軸 4.15m，短軸 3.5m の不整五角形状の平面形を呈している。床面までの深さは 15cm で，壁は外傾して立ち上がっている。壁溝・壁柱穴はみられない。床面は踏み固められた形跡はみえず，平坦である。炉址はない。北西壁側に長径 1.15m，短径 1.05m を測る楕円形のピットがある。このピットの深さは 45cm で底は平坦である。貯蔵穴と考えてもよいと思われる。その他に 17 ケ所のピットが検出された。径 23～45cm，深さ 10～53cm を測り，P_1～P_6 が主柱穴になると思われる。覆土は暗褐色土層が主で，この地区は貝層が分布していた場所にあたり，その一部とみられる混貝土層も部分的にみられる。

出土遺物は縄文土器片 10 数点がある。

第 29 号住居址（実測図　図 65，遺物　図 61，写７－２）

本住居址はＢ２区に位置し，第 26 号住居址の南東約 6m に当たっている。

主軸方向はＮ－83°－Ｅで，長径 3.94m，短径 3.52m の楕円形を呈している。床面までの深さは壁近くで 20cm，中央部で 38cm を測る。壁は南及び北側では２段掘り込みになっており，１段目の深さ 15cm，２段目は 35cm である（南壁）。壁構は回っていない。

床面はロームで，中央部に向けてゆるく傾斜している。炉址は検出されなかった。ピットは 14 ケ所検出され径 10～45cm，深さ 10～64cm を測る。P_1～P_6 が主柱穴であると思われる。中でも P_3と P_6 は主軸線上に位置している。覆土はおおむね４層であり，１～３層までは炭化物を含んでいるのが観察できた。いずれにしても本住居址は自然堆積の様相をみせている。

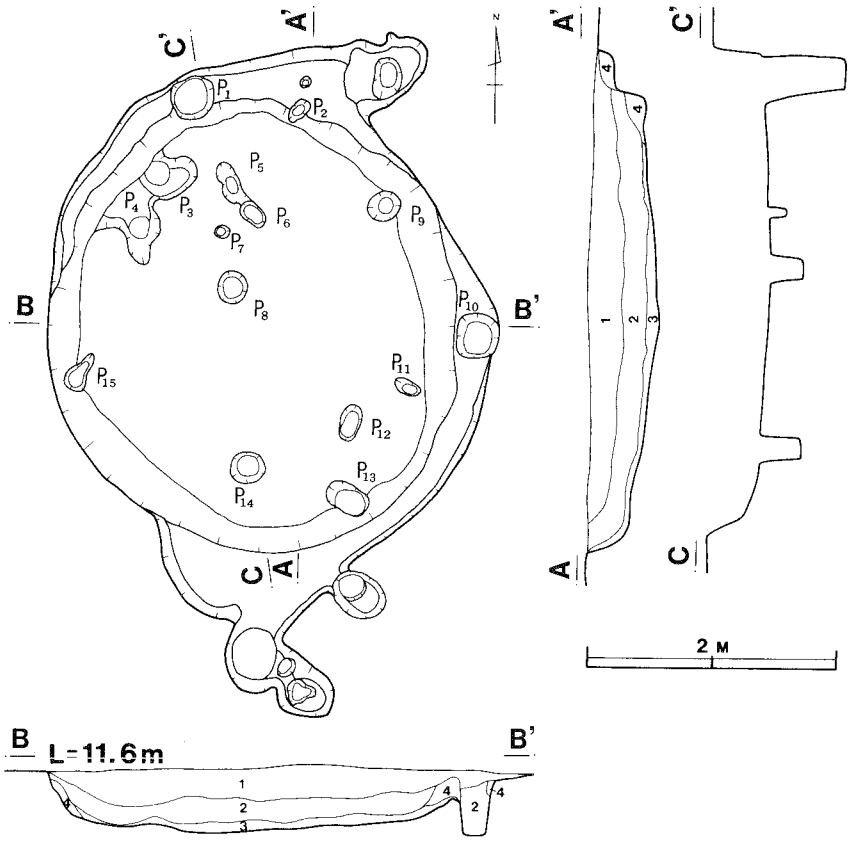
遺物として，覆土内より 30 数点の縄文土器片が出土した。

第29号住居址土層解説

A－A′，B－B′

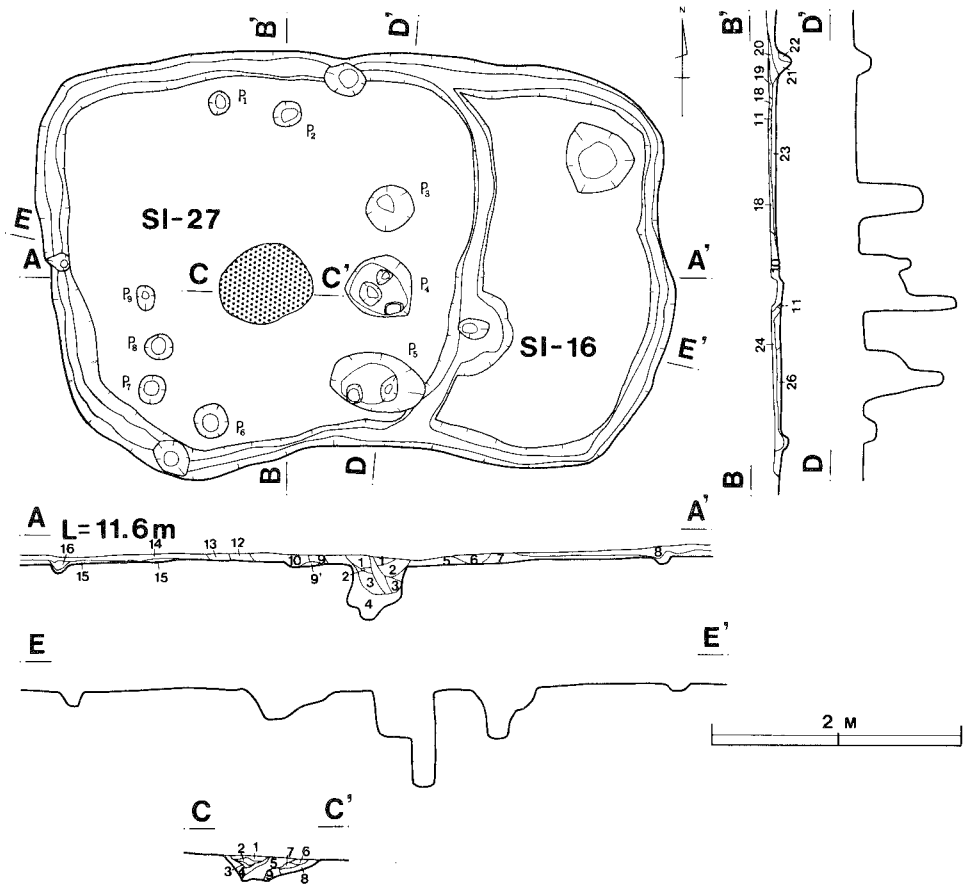
1　黒　褐　色　土　（少量のＹＰを含む）
2　　〃　　（少量のハードロームブロックを含む）
3　　〃　　（少量のハードローム粒子・炭化物粒子を含む）
4　極暗褐色土　（多量のＹＰを含む）
5　暗　褐　色　土　（ＹＰ・焼土粒子含む）
6　　〃　　（少量ＹＰ・ハードロームブロックあり）
7　褐　色　土　（ハードロームブロックを含む）
8　　〃　　（締まりあり，ＹＰを含む）

9　黒　褐　色　土　(少量のハードロームブロックを含む)
10　褐　　色　　土　(締まりあり)
11　暗　褐　色　土　(少量のハードロームブロックを含む)
12　　〃　　(多くのハードロームブロックを含む)
13　　〃　　(締まりあり，少量のＹＰを含む)



第62図　第26号住居址

第26号住居址土層解説
1　黒　褐　色　土　(炭化物・ローム粒子を含む)
2　　〃　　(よく締まりハードロームブロック・ローム粒子を含む)
3　暗　褐　色　土　(ローム粒子を多く含む)
4　　〃　　(ハードロームブロック・ローム粒子を含む)

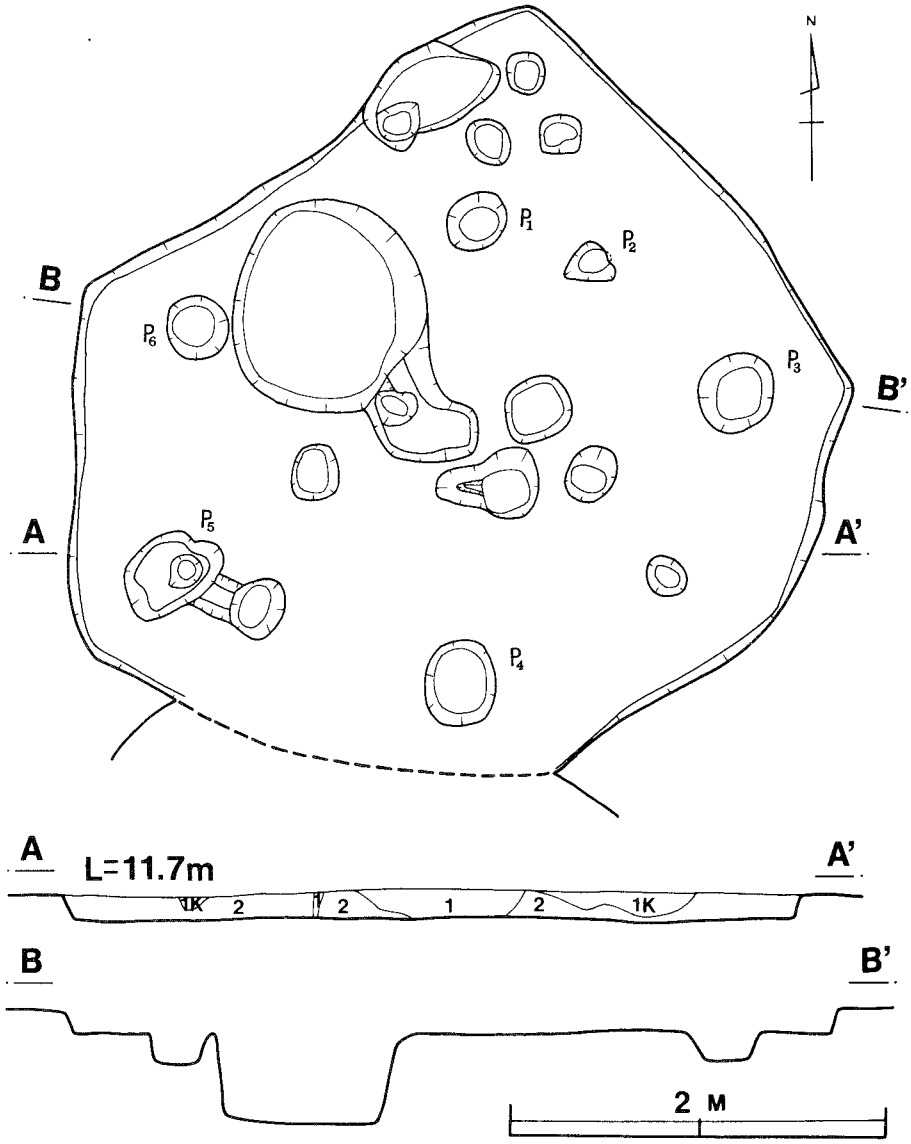


第63図　第16・27号住居址

第16号・第27号住居址土層解説

A−A′, B−B′

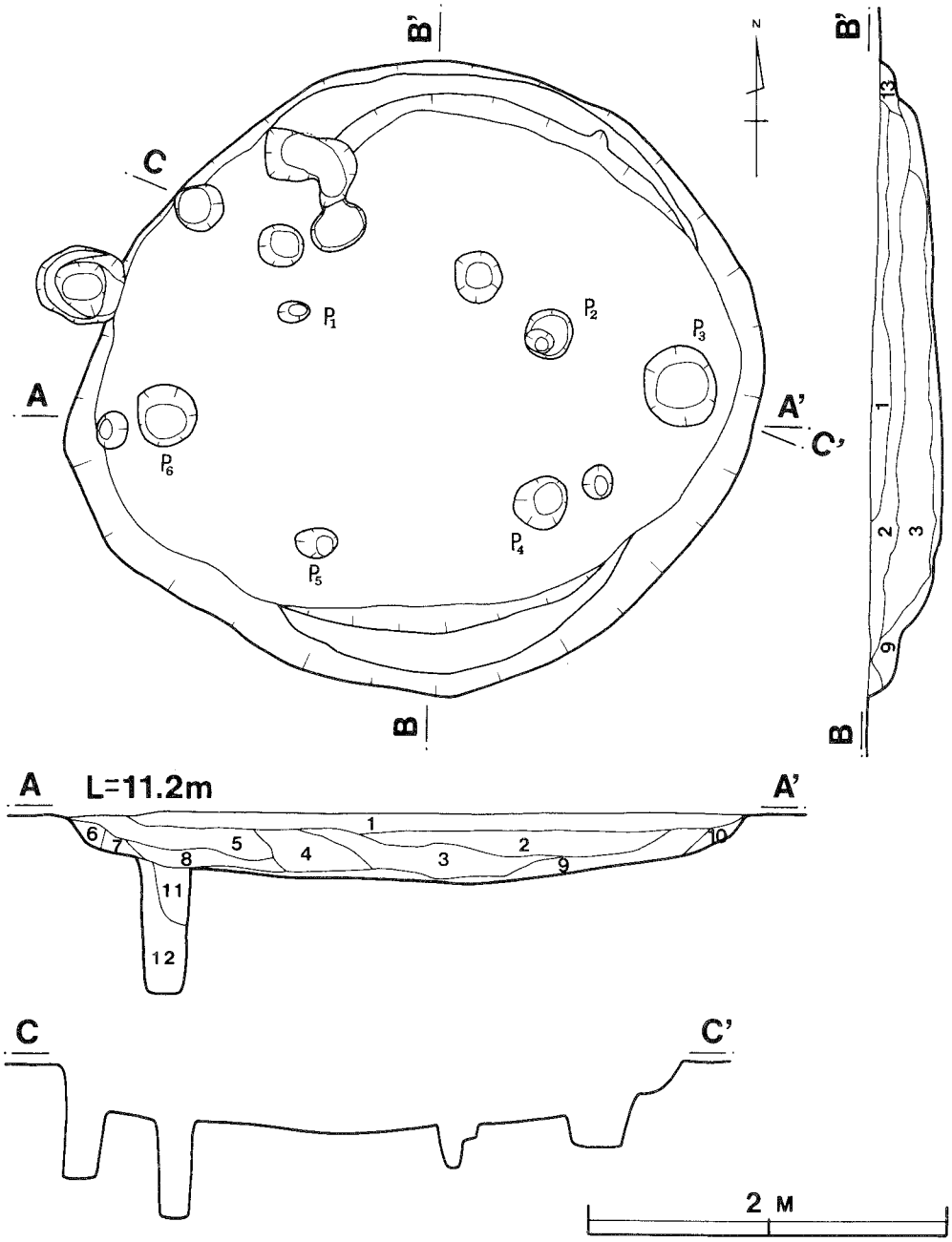
1　極暗褐色土　(焼土粒子・炭化物・貝細片を含む)
2　暗褐色土　(ＹＰ・焼土・炭化物を含む)
3　〃　(焼土粒子・ハードローム・貝細片を含む)
4　〃　(ハードロームブロックを含む)
5　極暗褐色　(柔らかくＹＰ・貝ガラを含む)
6　暗褐色土　(貝・焼土粒子を含む)
7　黒褐色土　(ＹＰ・焼土を含む)
8　極暗褐色土　(ＹＰ・焼土粒子を含む)
9　黒褐色土　(柔らかく多量の灰を含む)
9′　〃　(焼土・貝・ＹＰ・炭化物を含む)
10　灰褐色土　(多量の灰・貝を含む)
11　焼土
12　黒褐色土　(ハードロームブロック・焼土粒子を含む)
13　〃　(灰・焼土を含む)
14　〃　(ＹＰ・焼土粒子を含む)
15　〃　(ハードロームブロック・焼土粒子を含む)
16　暗褐色土　(焼土粒子・炭化物を含む)
17　黒褐色土　(炭化物・焼土粒子・貝片を含む)
18　〃　(焼土粒子・貝片を含む)
19　暗褐色土　(多量の焼土粒子を含む)
20　極暗褐色土　(ハードローム・炭化物・貝片を含む)
21　暗褐色土　(焼土・炭化物を含む)
22　〃　(ＹＰ・炭化物を含む)
23　黒褐色土　(焼土・ハードロームを含む)
24　極暗褐色土　(焼土・炭化物を含む)
25　〃　(焼土・貝片を含む)
26　〃　(焼土粒子・ハードロームブロックを含む)



第64図　第28号住居址

第28号住居址土層解説

1　暗　褐　色　土　(固く締まりＹＰ・パミスを含む)
1K　　〃　　(混貝土層)
2　　〃　　(よく締まりＹＰ・焼土粒子を含む)



第65図　第29号住居址

表17　住居址一覧表(1)

住居址No.	地　区	主軸方向	長軸×短軸(m)	壁高(m)	炉　址	備　考
01	D_2 a_9, a_0 b_9, b_0	N−23°−E	4.15 × 3.7	0.05	／	隅丸方形 ピット5
02	D_2a_9, a_0	N−87°−W	3.75 × 2.9	0.15 ∫ 0.2	／	不整方形
03	D_2 a_8, a_9 b_8, b_9	N−8°−E	4.13 × 3.76	0.05 ∫ 0.3	／	隅丸方形 ピット4
04	D_2 a_6, a_7 b_6, b_7	／	4.63 × 4.5	0.05 ∫ 0.2	／	円　形 ピット15
05	D_2 a_4, a_5 b_4, b_5	N−85°−W	4.24 × 3.9	0.2 ∫ 0.3	?	楕円形 ピット11
06	C_3 d_5, d_6 e_5, e_6	N−7°−W	5.05 × 4.0	0.12 ∫ 0.15	／	隅丸方形 ピット12
07	C_3 a_5, a_6 b_5, b_6	N−30°−E	4.7 × 4.7	0.05 ∫ 0.1	○ 地床炉	方　形 ピット9
08	D_2 a_3, a_4 b_3, b_4	／	4.4	0.25 ∫ 0.37	／	円　形 ピット9
09	C_2 f_8, f_9 g_8, g_9	N−90°	6.8 × 5.35	／	○ 地床炉	長方形 ピット35
10	C_2i_7, i_8	N−34°−E	5.0 × 4.26	0.05 ∫ 0.2	○ 地床炉	楕円形 ピット23
11	C_3 f_4, f_5 g_4, g_5	／	5.2	／	○ 地床炉	円　形 ピット23
12	C_3 g_4, g_5 h_4	／	2.75	0.2	／	円　形 ピット3

表18　住居址一覧表(2)

住居址No.	地　　区	主軸方向	長軸×短軸(m)	壁高(m)	炉　址	備　　考
13	C_3i_3, i_4	N−45°−W	3.0	0.07	○	楕円形 ピット3
14	C_3h_4	／	3.4	0.08 ∫ 0.15	／	方　形 ピット7
15	C_2i_9	／	3.2 × 1.4	0.07	／	長方形 ピット2
16	B_1i_0 B_2i_1	N−90°	3.21 × 1.5	／	／	隅丸方形 ピット2
17	C_3 d_1, d_2 d_3	N−25°−E	5.5 × 5.0	0.05 ∫ 0.23	／	楕円形 ピット18
18	C_3 c_1, c_2 d_2	／	5.6	／	?	円　形 ピット11
19	B_1i_0	N−26°−E	3.8 × 3.3	／	／	楕円形 ピット29
20	C_2 g_4, g_5 h_4, h_5 i_4, i_5	／	6.35 × 5.83	0.15	／	不整円形
21	C_2 g_2, g_3 h_2, h_3	N−0	6.47 × 5.62	／	○ 地床炉	隅丸方形 ピット24
22	C_2 d_5 e_4, e_5	N−33°−E	5.0 × 4.6	／	○ 地床炉	円　形 ピット列として確認
23	C_2 a_4, a_5 a_6	／	5.4 × 4.6	／	／	円　形 ピット列として確認
24	C_2 b_3, b_4 c_3, c_4	N−78°−E	5.67 × 5.45	／	○ 地床炉?	円　形 ピット13

表19　住居址一覧表(3)

住居址No.	地　　区	主軸方向	長軸 × 短軸(m)	壁高(m)	炉　　址	備　　考
25	B_1 d_8 e_8	／	3.8 × 2.7	0.1	?	長方形 ピット9
26	B_2 g_1,g_2 h_1,h_2	N—6—W	3.52 × 3.31	0.5	／	楕円形 ピット15
27	$B_1 i_9,i_0$	N—90°	3.7 × 3.41	／	○ 地床炉	隅丸方形 ピット9
28	$C_2 j_6,j_7$ $D_2 a_6,a_7$	N—53°—E	4.15 × 3.5	0.15	／	不整五角形 ピット18
29	B_2 i_2,i_3 j_2,j_3	N—83°—E	3.94 × 3.52	0.35	／	楕円形 ピット14

2．土　　壙

〈土壙の形態分類について〉

本遺跡では200基以上の多数の土壙が検出されたため，これらを整理の都合上いくつかのグループに分けそれをさらに細分する方法をとった。

分類の基本は平面・断面・深さ・ピットの有無の4点であり，出土遺物や時期的な要素は考えていない。大別すると5グループになったが，次の通りである。

グループ	平　面　形	断　面　形	類
A			A
			A1
			A′
			A1′
B			B
			B1
			B′
			B1′
C			C
D			D
			D1
			D′
			D1′
E	A～Dグループのいずれにも属さず、かつ平面形が不定形のもの		

A・B・Dの3グループは深さにより細分してあるが，その深さはおおむね40～50cmを細分化の基準とした。

表20　土壙一覧表(1)

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
001	D_2 b_7 c_7	長楕円形	N−29°−W	1.87 × 1.11	0.24	北壁にピット1，貝層あり	A1	図66
002	D_2 c_7 c_8	隅丸方形	N−0°	(N−S)1.68 (E−W) 1.5	0.18	貝層あり	／	図66
003	D_2b_0	不整円形	N−17°−E	1.78 × 1.70	0.12		A	図66 (写17−1)
004	D_2 b_9 b_0	不整円形	N−58°−E	1.50 × 1.36	0.25	ピット4，土器片，石鏃1	A1	図66
005	D_2c_6	楕円形	N−23°−W	1.28 × 0.98	0.09	ピット2	A1	図66
006	D_2c_6	楕円形	N−15°−W	1.49 × 1.05	0.06	壙底北側にピット1	A1	図66
007	D_2c_7	／	／	／	0.45	住宅の基礎にあたっていた	／	図66
008	D_2 b_8 b_9	不整楕円形	N−72°−E	1.59 × 1.09	0.23	SI−03と重複する，新旧関係は不明	A	図66
009	D_2b_8	隅丸方形	N−85°−W	0.77 × 0.63	0.11	SI−03と重複する	D	図66
010	D_2c_0	楕円形	N−9°−E	1.05 × 0.68	0.25		A	図66 (写17−2)
011	D_2c_0	不整楕円形	N−83°−W	1.75 × 1.14	0.18		A	図66 (写17−3)
012	D_2 b_0 c_0	長楕円形	N88°W	1.9以上 × 1.08	0.14	東側はエリア外，石鏃1	A	図67

表21　土壙一覧表(2)

土壙No.	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
013	D_2b_6	不整三角形	N−17°−E	1.93 × 1.52	0.15	壙底凹凸多し，ピット7，磨石片	D1	図67
014	D_2a_5	隅丸長方形	N−45°−W	1.88 × 1.00	0.32	SI−05と重複，底まで混貝土層が堆積する	D	図67
015	D_2b_5	楕円形	N−5°−W	1.11 × 0.72	0.29	SI−05と接する覆土上部は混貝土層	A	図67
016	D_2b_4	楕円形	N−57°−E	1.63 × 1.42	0.95	南壁オーバーハング，壙底まで混土貝層，浅鉢形土器	C	図67 (写17−5)
017	D_2a_3	楕円形	N−78°−W	1.4 × 1.1	0.18	SI−08 重複	A	図67
018	D_2b_5	楕円形	N−36°−E	1.29 × 0.93	0.32	SI−05と重複，壙底まで混土貝層	A	図67
019	D_2 a_8 a_9	不整楕円形	N−29°−E	1.11 × 0.90	0.82	オーバーハング部の径1.4 m，壙底の径1.0 m	C	図67
020	D_2b_3	円形	N−17°−E	1.07 × 1.03	1.13	オーバーハング部の径 2.4m，貝層あり	C	図68 (写17−6)
021	D_2a_4	楕円形	N−1°−E	1.80 × 0.84	0.38	混土貝層あり	A	図68
022	D_2b_4	楕円形	N−6°−E	1.48 × 1.36	0.45	SI−08と重複混土貝層あり，多量の獣骨	B′	図68
023	D_2a_4	不整楕円形	N−65°−W	1.82 × 1.70	0.45	SI−08と重複，ピット1，混土貝層あり	A′	図68
024	C_3a_6	／	／	(N−S)1.02 (E−W)0.85	0.35	東側エリア外	／	図68

表22　土壙一覧表(3)

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
025	C_3 c_3 d_3	楕円形	N—90°	1.58 × 1.02	0.22	ピット2，磨石	A1	図68
026	C_2 g_8 h_8	隅丸方形	N—55°—W	1.42 × 1.20	0.13	小ピット多し，断面図からC類と推定した，純貝層	C	図68
027	C_2i_9	不整楕円形	N—61°—E	1.49 × 0.68	0.08		A	図68
028	C_2 g_8g_9 h_8h_9	長楕円形	N—85°—E	2.54 × 1.26	0.1	ピット1	A1	図68
029	C_2h_8	楕円形	N—0°	1.65 × 1.25	0.3	壙底が2段になる	A	図68
030	C_3i_3	不整楕円形	N—61°—E	1.65 × 1.48	0.62	ピット2，覆土上部に混貝土層あり	A1	図69
031	C_3c_6,c_7	楕円形	N—20°—E	1.14 × 0.89	0.15	ピット1	A1	図69
032	C_3a_5	／	N—0°?	(N—S) 1.0以上 (E—W)1.24	0.37		A	図69
033	C_3a_5	楕円形	N—85°—W	1.57 × 1.18	0.18	ピット2	A1	図69
034	C_3i_3	楕円形	N—85°—E	1.47 × 1.24	0.2		A	図69
035	C_2 a_2 a_3	長楕円形	N—6°—W	3.04 × 1.53	0.23	ピット2，貝層が混入	A1	図69
036	C_3 b_3,b_4 c_3,c_4	楕円形	N—62°—E	2.27 × 1.65	0.4		A	図69

表23　土壙一覧表(4)

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
037	C_3b_5	長楕円形	N−54°−E	2.49 × 1.47	0.14		A	図69
038	C_3c_6	楕円形	N−40°−E	0.99 × 0.78	0.13		A	図70
039	C_3 b_6 c_6	楕円形	N−43°−W	1.17 × 0.82	0.18		A	図70
040	C_3 b_6 c_6	楕円形	N−55°−W	1.48 × 0.84	0.11		A	図70
041	C_3c_6,c_7	楕円形	N−58°−W	1.06 × 0.73	0.13	壙底東側2段掘り込み，ピット1	A1	図70
042	C_3a_4	不整楕円形	N−77°−E	1.84 × 1.49	0.75	オーバーハング部の径 2.15m，凹石	C	図70 (写18−1)
043	C_3c_5	楕円形	N−19°−W	0.71 × 0.56	0.27		A	図70
044	C_2c_0	／	／	(N−S)1.45 (E−W)1.1	0.34	東側は通路	A1	図70
045	C_3 g_3 h_3	隅丸長方形	N−2°−E	1.95 × 1.58	0.25		D	図71
046	C_3b_3	楕円形	N−64°−E	1.36 × 1.09	0.25		A	図70
047	C_3i_3	／	／	(N−S)0.8 (E−W)0.66	0.15	南側通路	／	図70
048	C_3 h_3,h_4 i_3,i_4	楕円形	N−16°−E	3.03 × 2.53	0.29	SI−13と重複	A	図72

表24　土壙一覧表(5)

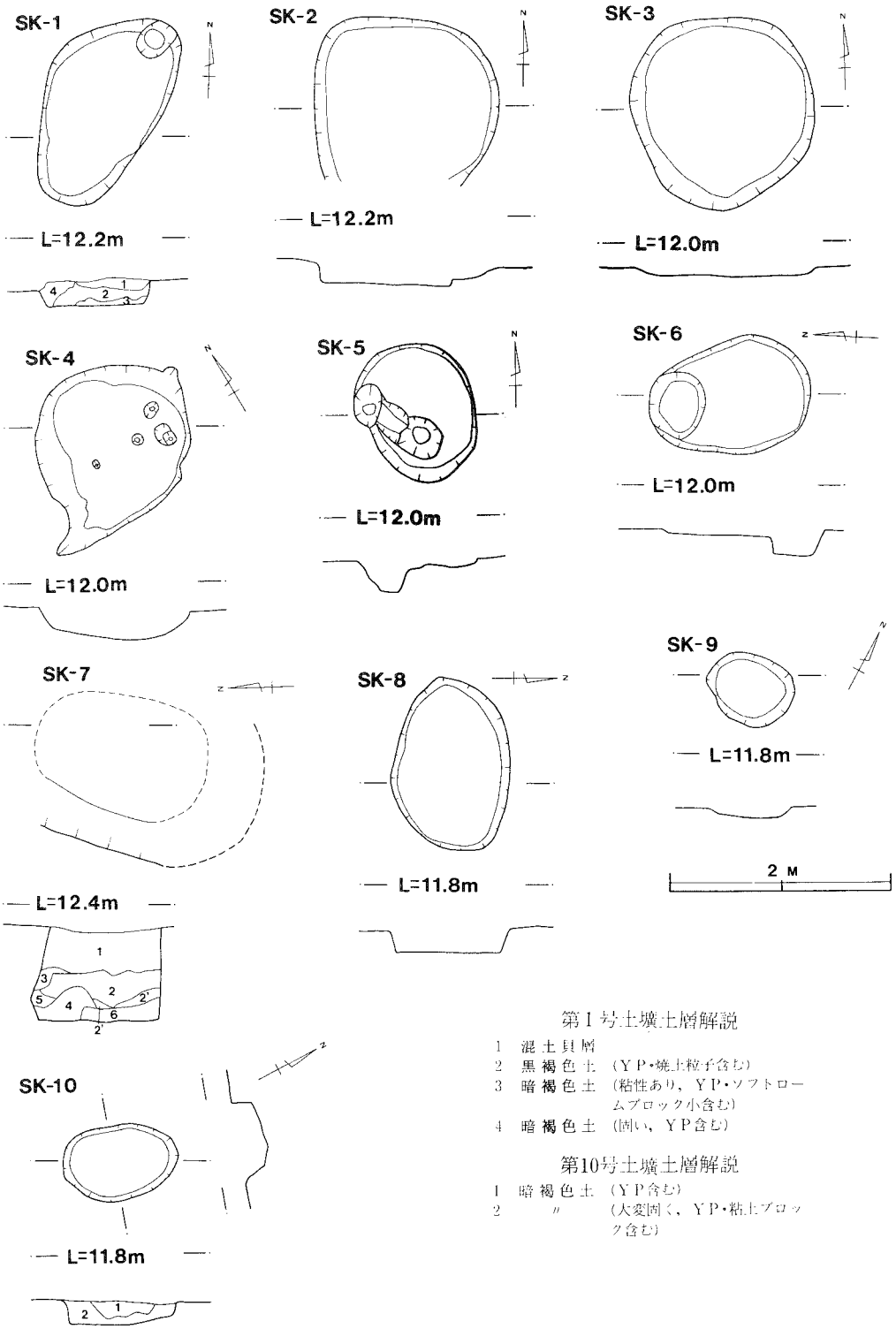
土壙No.	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
049	C_3i_2	不整楕円形	N—58°—E	1.71 × 1.2	0.47	南側は通路，石皿	B′	図70
050	C_3i_3	／	／	(N—S)0.73 (E—W)0.94	0.52	SK—047 と接する。壙底が凹む。皿形土器	／	図70
051	C_2i_0	／	N—7°—W	2.11 × 1.5	0.08	SD—1 と重複	／	図71
052	C_3c_4	楕円形	N—7°—W	1.56 × 1.08	0.42		A	図71
053	C_3 b_3 c_3	隅丸長方形	N—90°	1.93 × 0.98	0.55	壙底は2段掘り込み	B′	図71
054	C_3c_7	長楕円形	N—86°—W	1.04 × 0.72	0.22	ピット4	A′	図71
055	C_3 g_2 h_2	隅丸長方形	N—38°—W	2.76 × 1.74	0.28	壙底は2段掘り込み。ピット7，混貝土層あり	D	図71
056	C_3g_2	楕円形	N—73°—W	1.17 × 0.85	0.07	凹石	A	図72
057	C_3b_6	不整円形	N—13°—W	0.98 × 0.91	0.09	SI—07 と重複	A	図72
058	C_3b_3	楕円形	N—26°—W	1.85 × 1.19	0.18	SD—1と重複，ピット1	A1	図72
059	C_3b_6	長楕円形	N—6°—E	1.36 × 0.65	0.09	SI—07 と重複	A	図72
060	C_2i_8,i_9	不整楕円形	N—38°—E	1.78 × 1.33	0.15		A	図72

表25　土壙一覧表(6)

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
061	C_2i_8	楕円形	N−76°−E	0.95 × 0.8	0.15	SK−060に接するピット1	A	図72
062	C_2 h_7 i_7	楕円形	N−10°−E	1.65 × 1.07	0.15	SK−081と重複	A	図72
063	C_3h_2	不整楕円形	N−43°−W	約2.8 × 2.13	0.9	壁南部は2段になる	B′	図73 (写18−2)
064	C_2h_8	隅丸長方形	N−48°−E	1.0 ×0.82	0.11	ピット4	D1	図72
065	C_3 f_3 g_3	不整楕円形	N−35°−W	2.94 × 2.49	0.2	ピット多数あり，壙底まで混貝土層が堆積する	A1	図73
066	C_3 f_2,f_3 g_2,g_3	楕円形	N−54°−E	1.89 × 1.27	0.4	SK−065に接するピット1	A1	図73
067	C_3f_3	不整楕円形	N−51°−W	2.18 × 1.68	0.24	ピット4ヶ所あり	A1	図74
068	C_3f_3	円形	N−50°−E	0.94 × 0.9	0.63	壁は垂直，覆土上面は混貝土層である	B′	図73
069	C_2 e_2,e_3 f_2,f_3	円形	N−69°−E	0.93 × 0.91	0.23	壙底凹凸あり，覆土より土器出土	A	図73
070	C_3e_3	楕円形	N−0°	1.29 × 1.08	0.19	ピット4ヶ所	A1	図73
071	C_3e_2	不整楕円形	N−36°−E	1.44 × 1.08	0.3	覆土は混貝土層	A	図74
072	C_3g_4	不整楕円形	N−41°−E	1.40 × 0.93	0.36	ピット状の凹みが2ヶ所ある。混貝土層を含む	A1	図74

表26　土壙一覧表(7)

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
073	C_3f_2	円形	N−82°−W	0.69 × 0.62	0.73	覆土に貝殻が混入する	B′	図74
074	C_2g_5	楕円形	N−0°	1.96 × 1.59	0.45	2段掘り込みのピットあり	A1′	図74
075	C_3g_2	楕円形	N−14°−E	1.13 × 0.91	0.76	壁は垂直に立ち上がる	B′	図74
076	C_3d_3	不整楕円形	N−50°−W	2.11 × 1.57	0.79	ピット3	A1	図74
077	C_3e_2	楕円形	N−17°−E	1.05 × 0.85	0.63	覆土に貝破片を含む	B′	図74
078	C_4g_4	楕円形	N−4°−W	1.02 × 0.95	0.70	覆土上部は混貝土層，石鏃	B′	図74
079	C_3g_4	楕円形	N−69°−E	1.04 × 0.95	0.73	混貝土層あり	B′	図74
080	C_2h_7,h_8	隅丸方形	N−61°−E	1.74 × 1.41	0.23	壁部にピット2，混土貝層あり	D1	図74
081	C_2 h_7 i_7	円形	N−62°−E	1.1 × 1.01	0.12	SK−062と重複	A	図84
082	C_2i_6	不整円形	N−4°−W	1.1 × 1.02	0.81	壁は垂直に立ち上がる	B′	図84
083	C_2h_6	楕円形	N−3°−W	1.62 × 1.25	0.12		A	図84
084	C_2h_6	楕円形	N−79°−W	1.40 × 1.01	0.17		A	図84



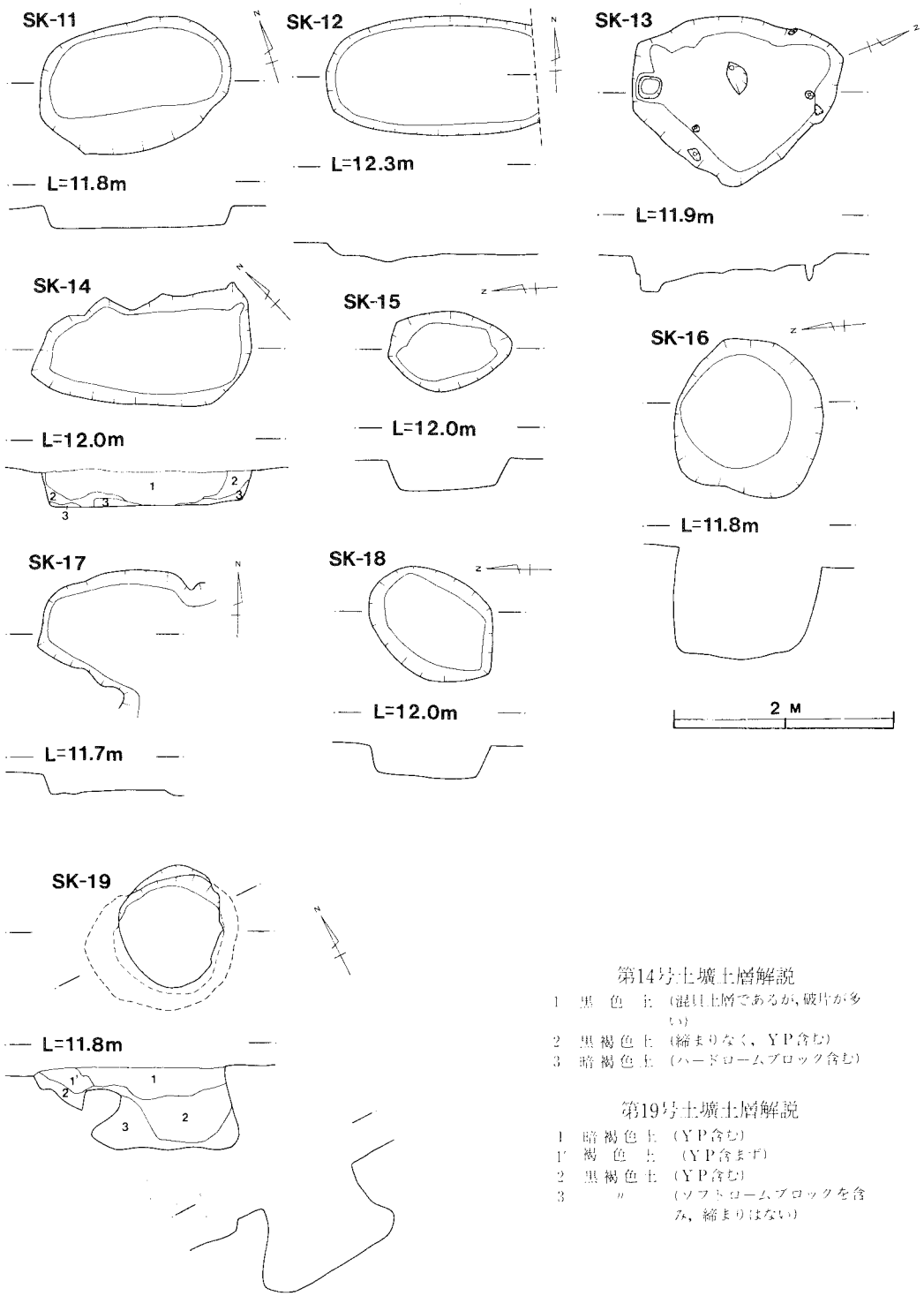
第1号土壙土層解説

1　混土貝層
2　黒褐色土　(YP・焼土粒子含む)
3　暗褐色土　(粘性あり，YP・ソフトロームブロック小含む)
4　暗褐色土　(固い，YP含む)

第10号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YP含む)
2　〃　(大変固く，YP・粘土ブロック含む)

第66図　第1～10号土壙



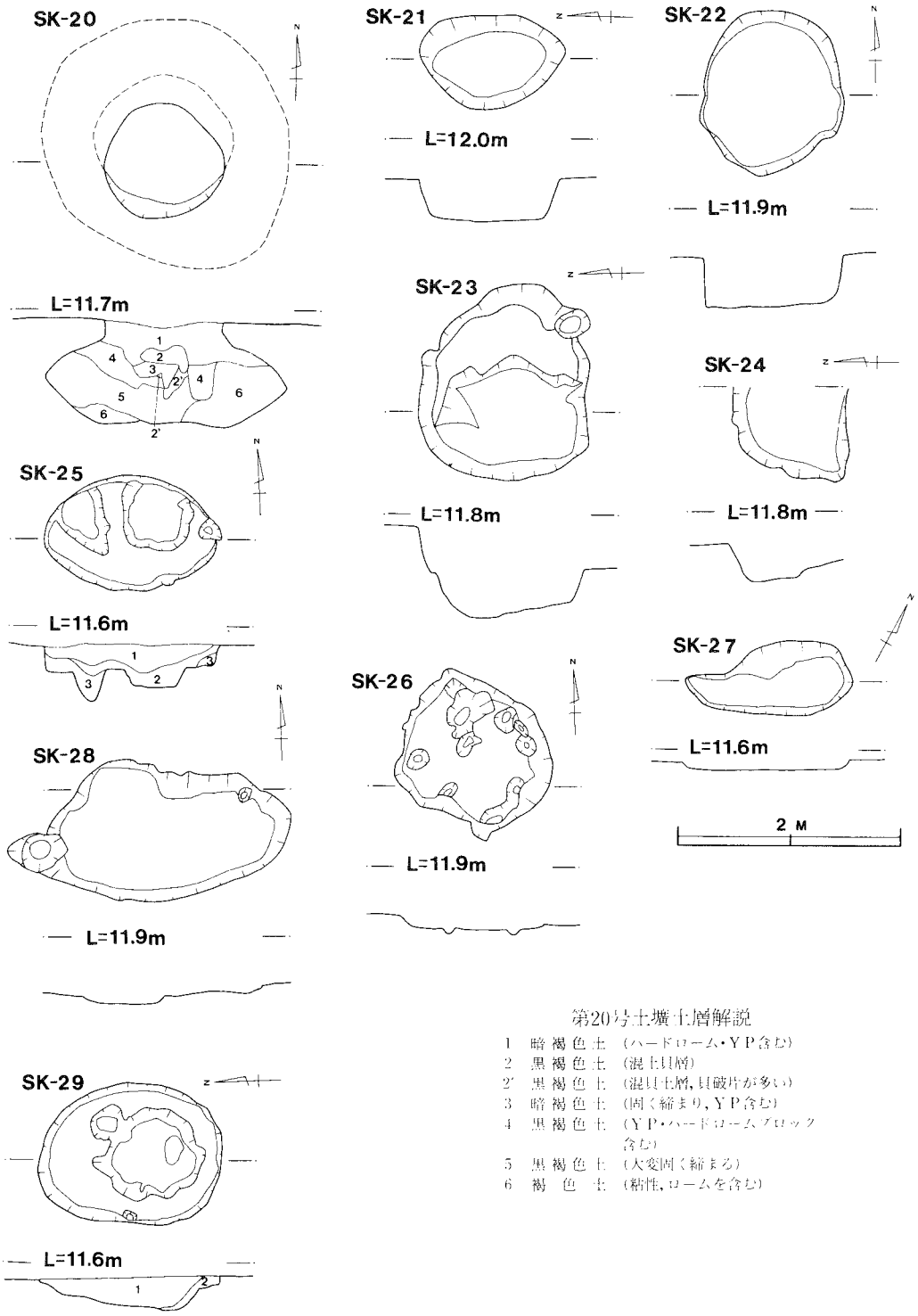
第14号土壙土層解説

1　黒　色　土　(混貝土層であるが、破片が多い)
2　黒褐色土　(締まりなく，YP含む)
3　暗褐色土　(ハードロームブロック含む)

第19号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YP含む)
1′　褐　色　土　(YP含まず)
2　黒褐色土　(YP含む)
3　〃　(ソフトロームブロックを含み，締まりはない)

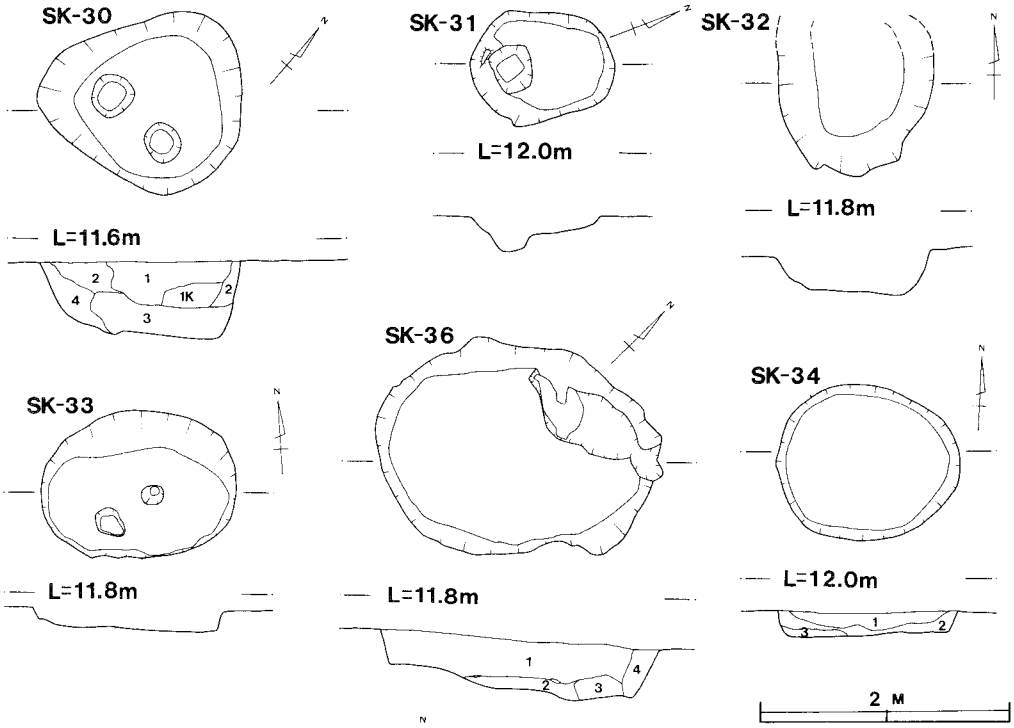
第67図　第11～19号土壙

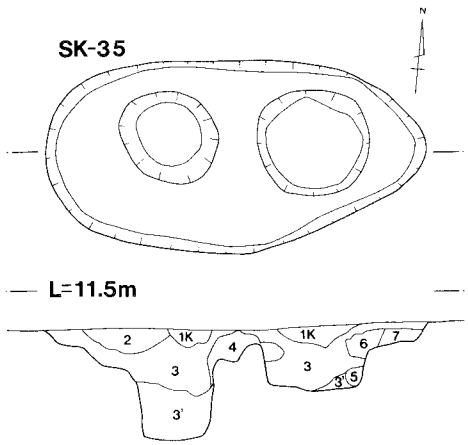


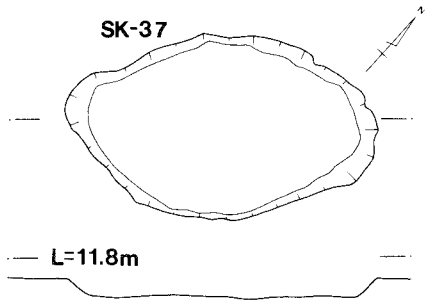
第20号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ハードローム・YP含む)
2　黒褐色土　(混土貝層)
2′　黒褐色土　(混貝土層,貝破片が多い)
3　暗褐色土　(固く締まり,YP含む)
4　黒褐色土　(YP・ハードロームブロック含む)
5　黒褐色土　(大変固く締まる)
6　褐　色　土　(粘性,ロームを含む)

第68図　第20～29号土壙







第30号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YP含む)
1K　〃　(混貝土層)
2　〃　(YP含む)
2′　〃　(YP含まない)
3　褐色土　(ローム粒子含む)

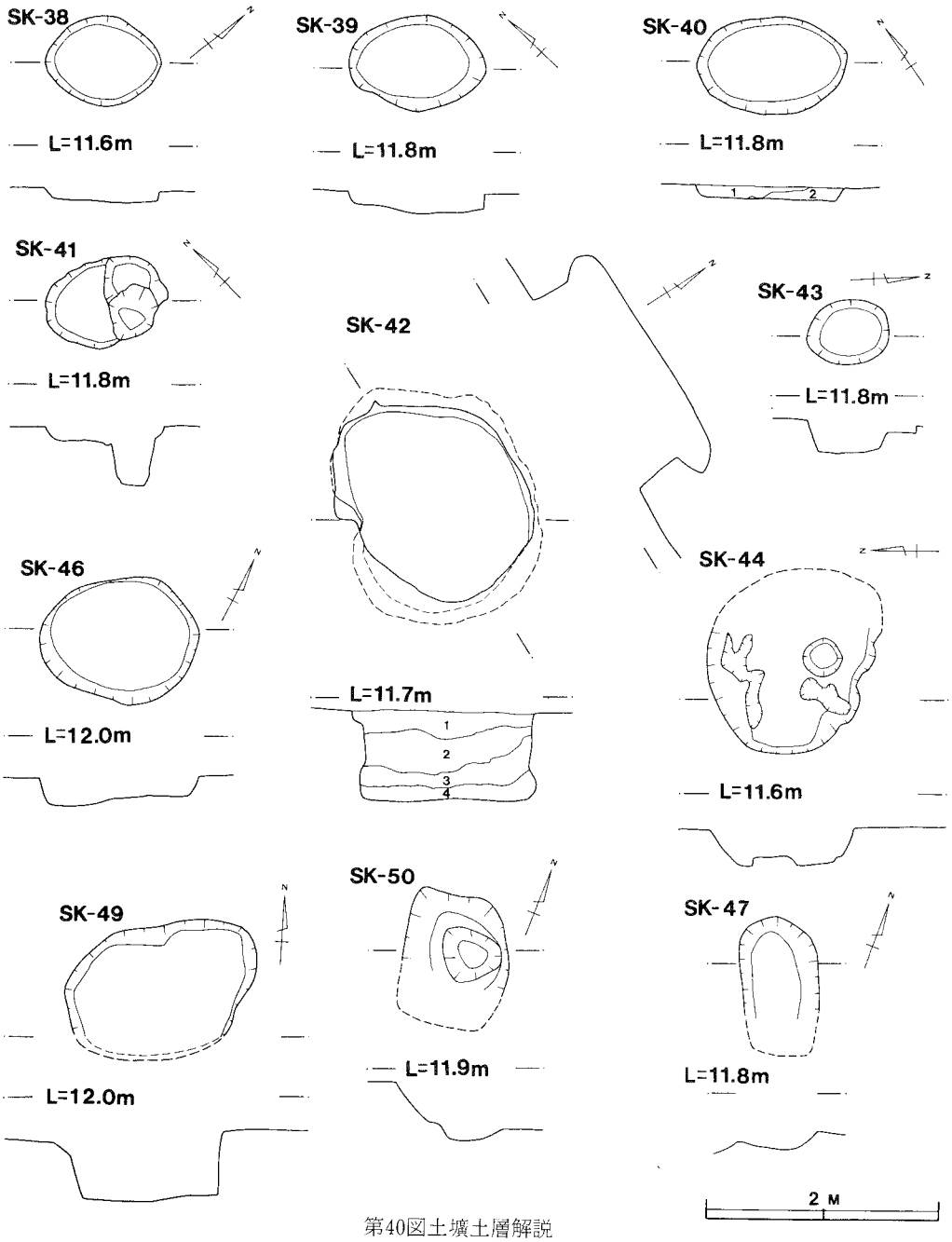
第34号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YPを少量含む)
2　〃　(YP・ロームブロック含む)
3　〃　(YPを少量含む)

第36号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ソフトロームブロック多く含む)
2a　暗褐色土　(ロームブロック含む)
2b　〃　(ロームブロック多量に含む)
2c　〃　(黒色ロームブロック含む)

第69図　第30～39号土壙



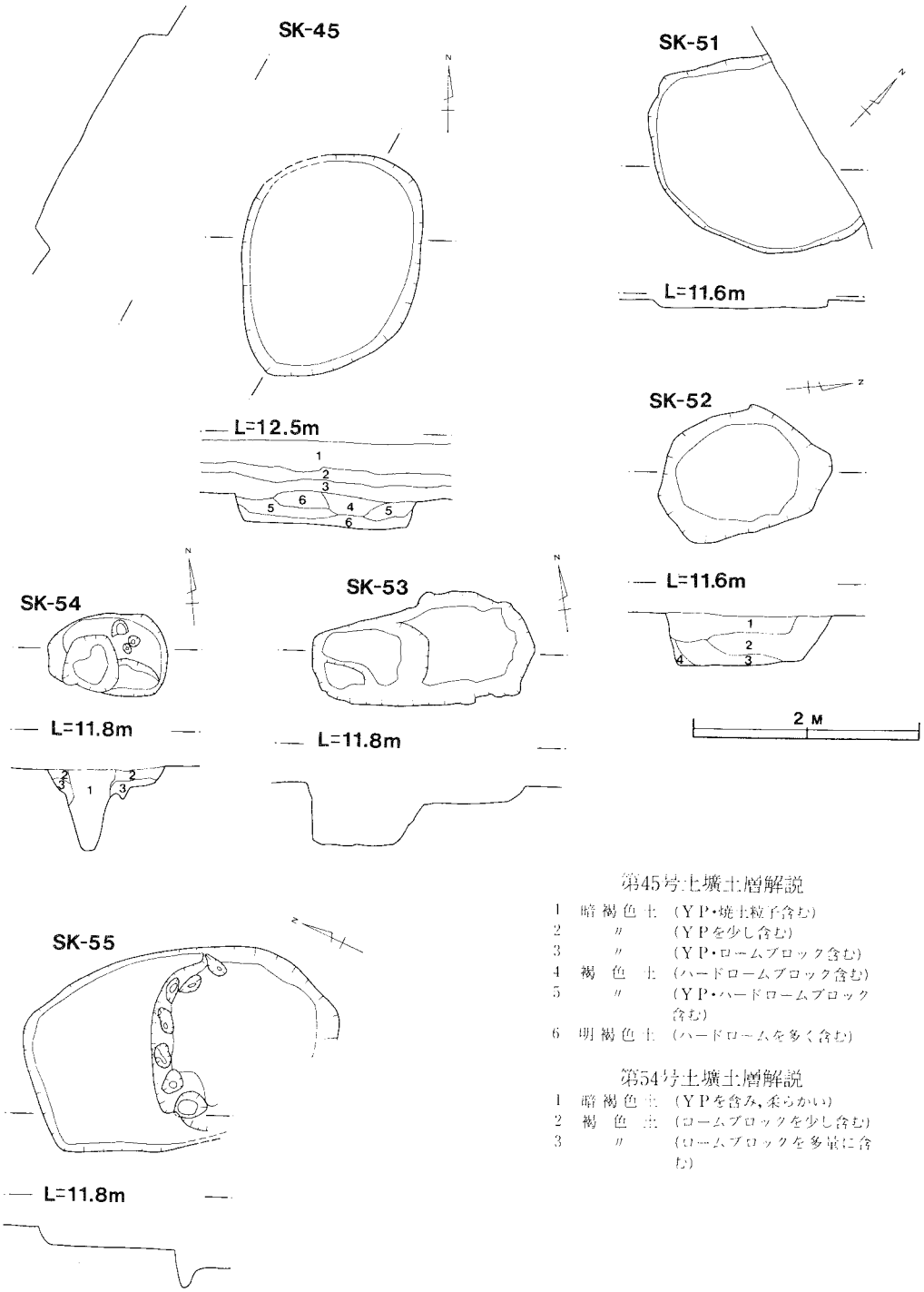
第40図土壙土層解説

1　暗褐色土　(YP・ロームブロック含む)
2　褐　色　土　(ロームブロック含む)

第42号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YPを少量含む)
2　〃　(YP・ロームブロック少量含む)
3　〃　(ロームブロック少量含む)
4　〃　(ロームブロック少量含む)

第70図　第38～44・46・47・49・50号土壙



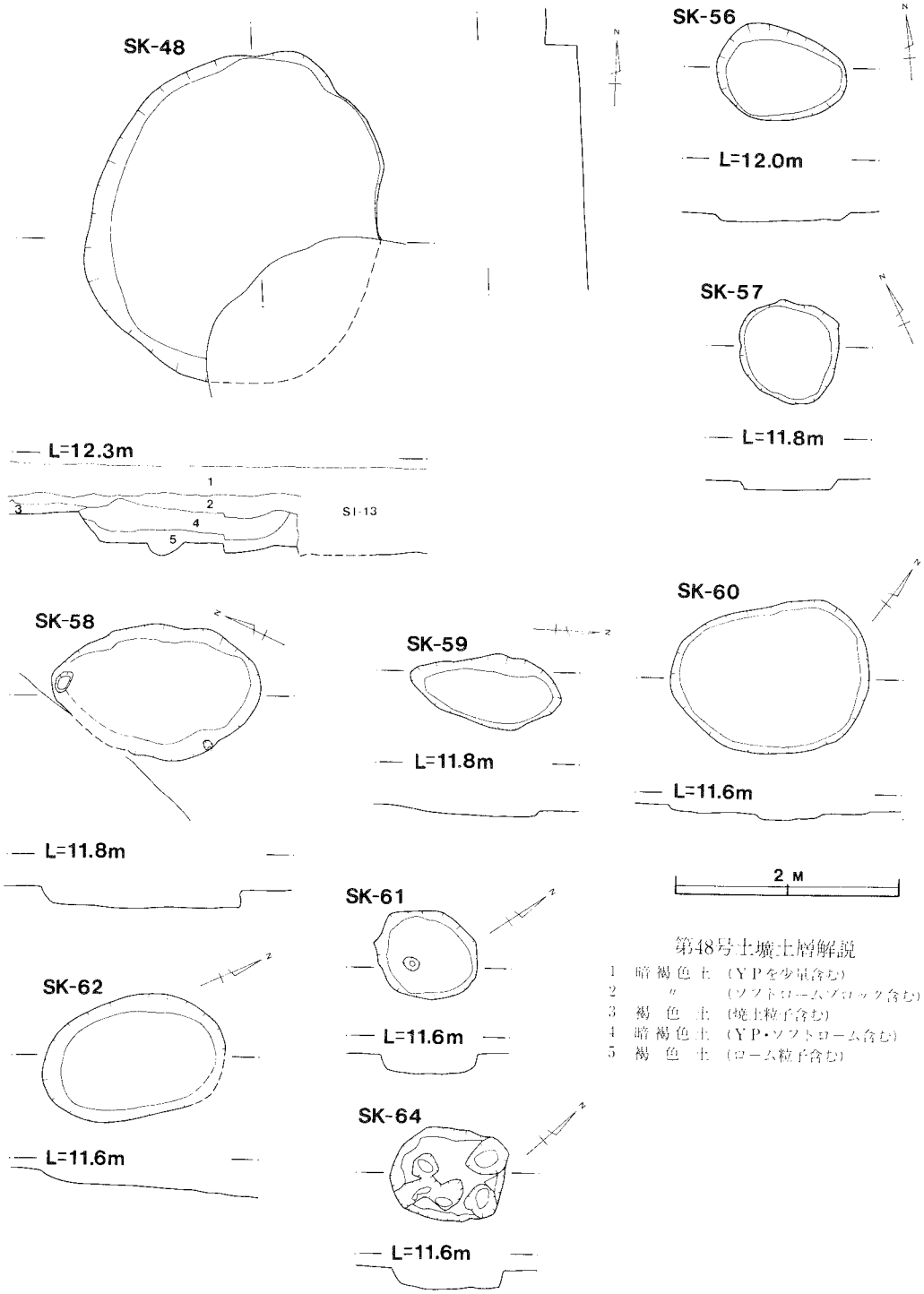
第45号土壙土層解説

1 暗褐色土 (YP・焼土粒子含む)
2 〃 (YPを少し含む)
3 〃 (YP・ロームブロック含む)
4 褐色土 (ハードロームブロック含む)
5 〃 (YP・ハードロームブロック含む)
6 明褐色土 (ハードロームを多く含む)

第54号土壙土層解説

1 暗褐色土 (YPを含み、柔らかい)
2 褐色土 (ロームブロックを少し含む)
3 〃 (ロームブロックを多量に含む)

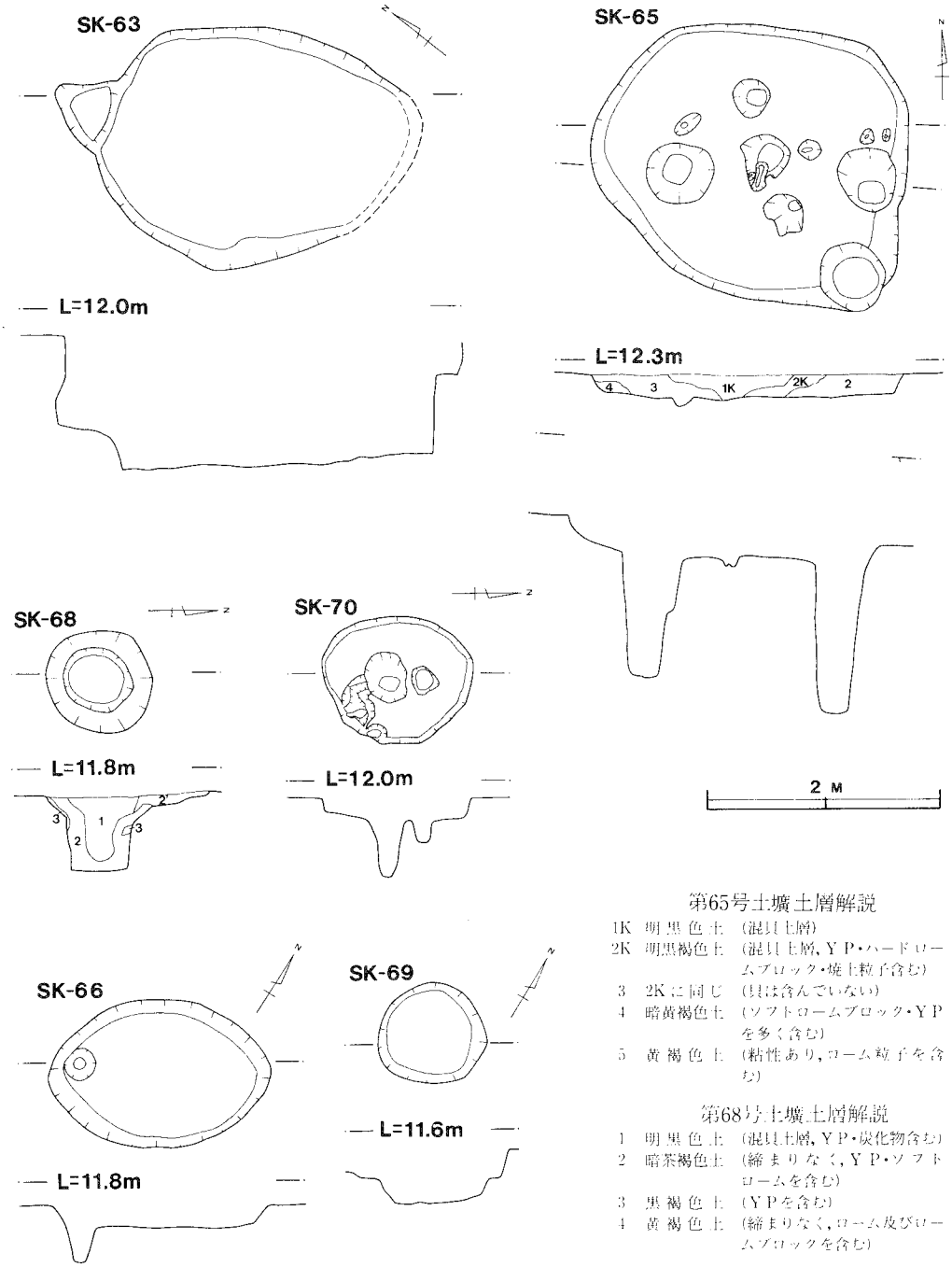
第71図　第45・51～55号土壙



第48号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YPを少量含む)
2　〃　(ソフトロームブロック含む)
3　褐色土　(焼土粒子含む)
4　暗褐色土　(YP・ソフトローム含む)
5　褐色土　(ローム粒子含む)

第72図　第48・56～62号土壙



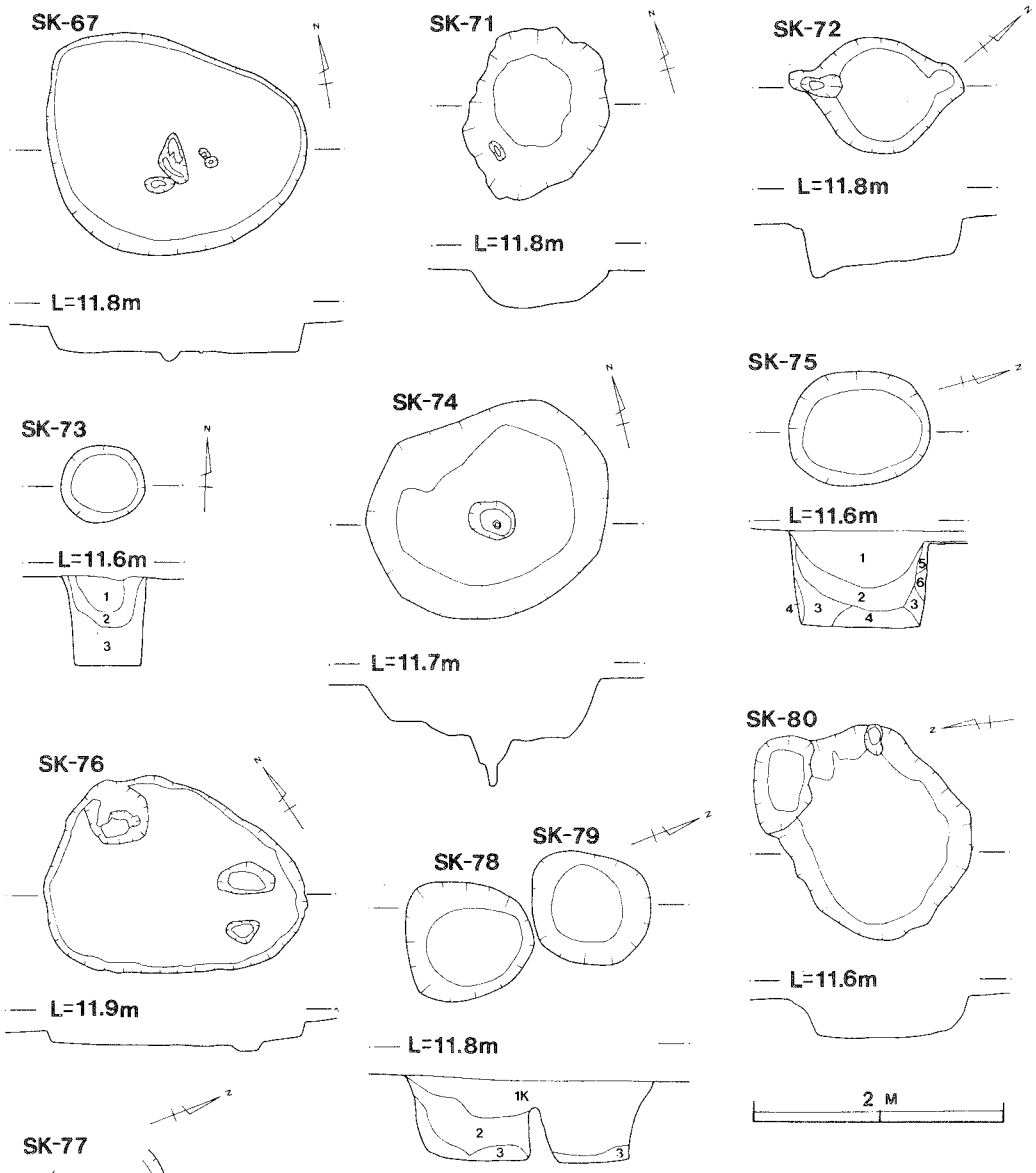
第65号土壙土層解説

1K　明黒色土　(混貝土層)
2K　明黒褐色土　(混貝土層, ＹＰ・ハードロームブロック・焼土粒子含む)
3　2Kに同じ　(貝は含んでいない)
4　暗黄褐色土　(ソフトロームブロック・ＹＰを多く含む)
5　黄褐色土　(粘性あり, ローム粒子を含む)

第68号土壙土層解説

1　明黒色土　(混貝土層, ＹＰ・炭化物含む)
2　暗茶褐色土　(締まりなく, ＹＰ・ソフトロームを含む)
3　黒褐色土　(ＹＰを含む)
4　黄褐色土　(締まりなく, ローム及びロームブロックを含む)

第73図　第63・65・66・68・69・70号土壙



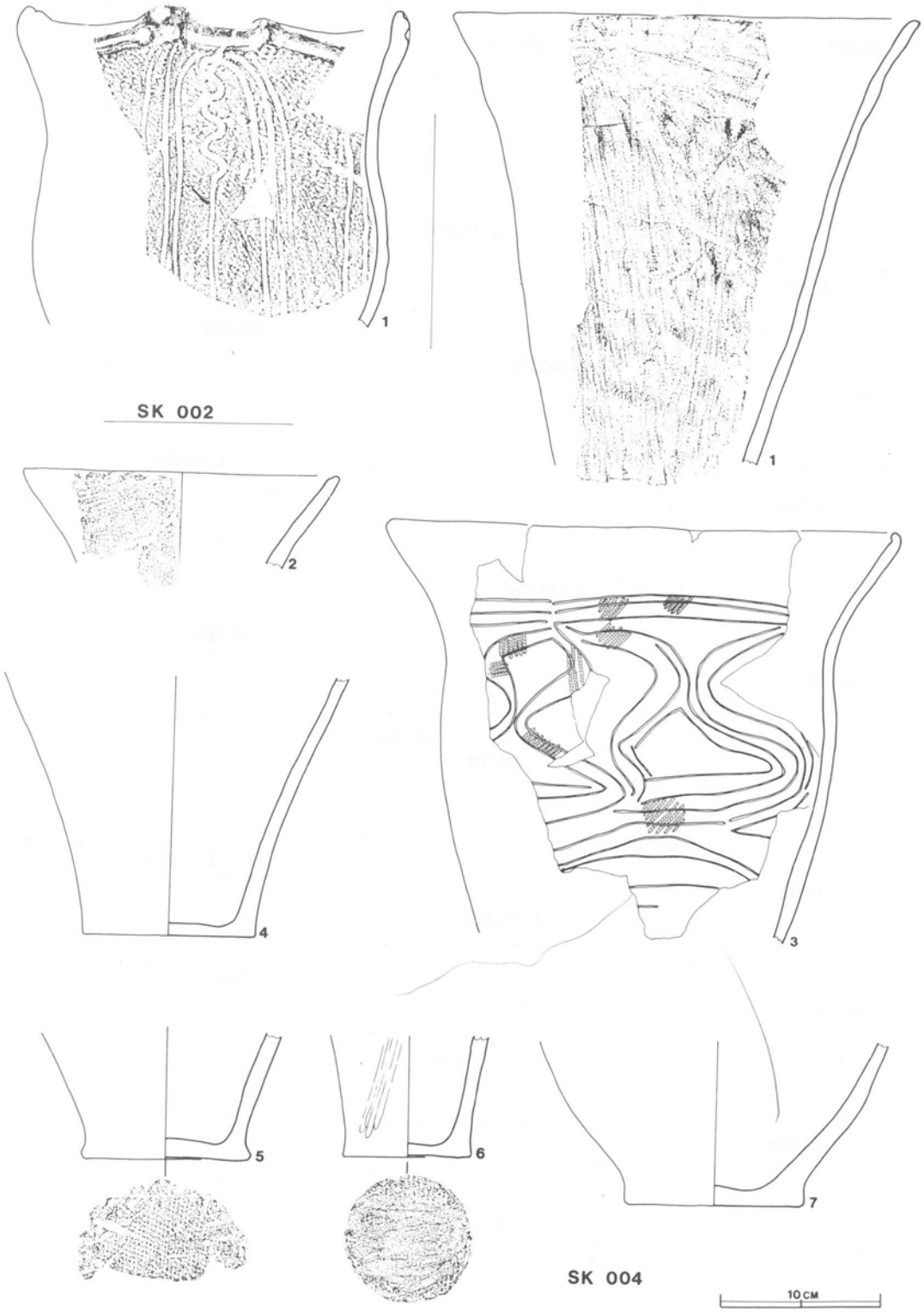
第73号土壙土層解説

1　黒褐色土　(混貝土層,締まり弱く灰粒子を含む)
2　〃　(混貝土層,締まり弱くYPを含む)
3　暗褐色土　(大変固く,黒色ロームブロックを多量に含む)

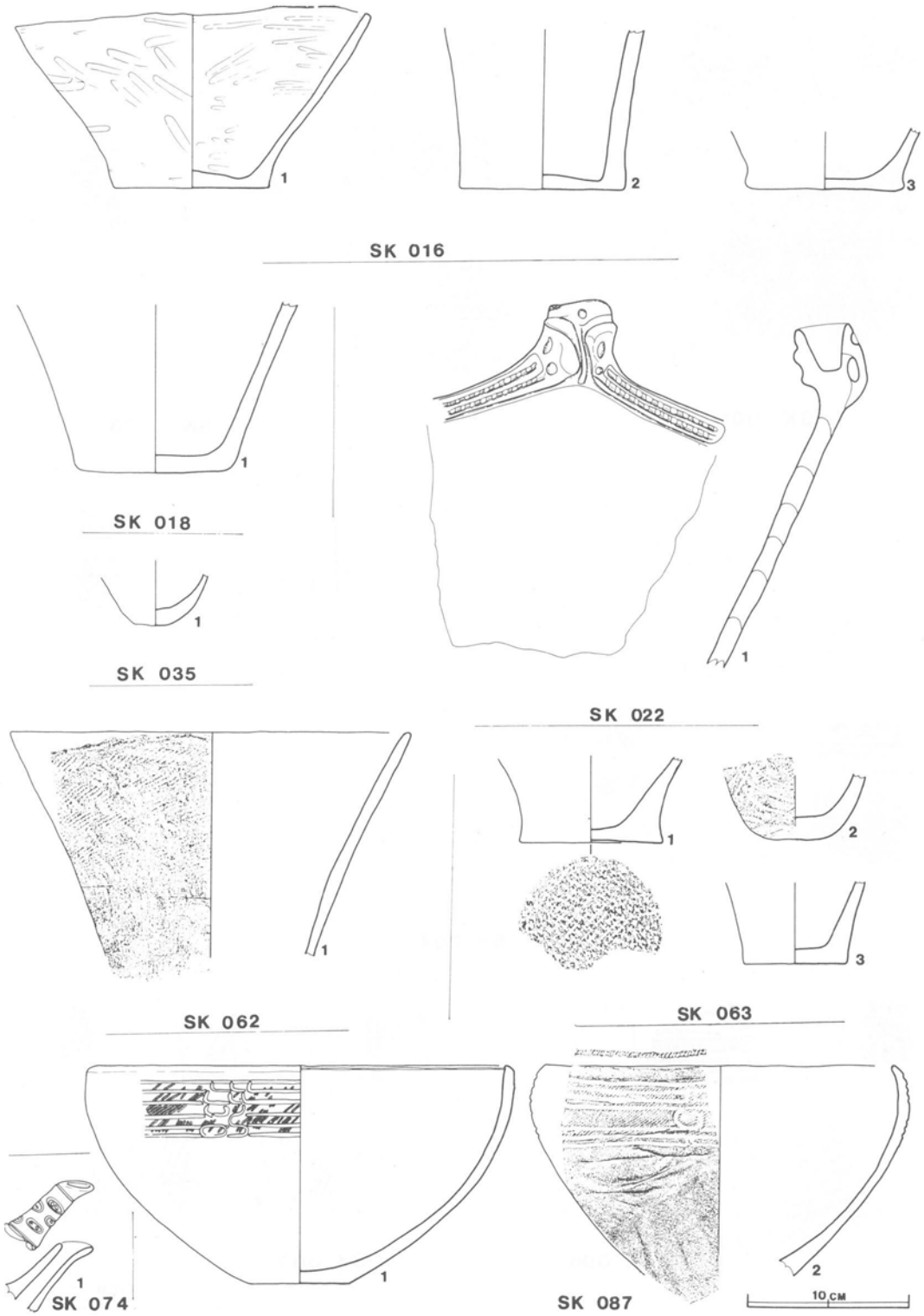
第75号土壙土層解説

1　暗褐色土　(YP・ハードロームブロック・焼土粒子等を含む)
2　黒褐色土　(ハードロームブロック多量に含む)
3　〃　(YP・ハードロームブロックを含む)
4　〃　(ブラックハードロームブロックを多量に含む)
5　褐色土　(よく締まり,ハードロームブロック含む)
6　黒褐色土　(大変固く,ブラックハードロームを多量に含む)

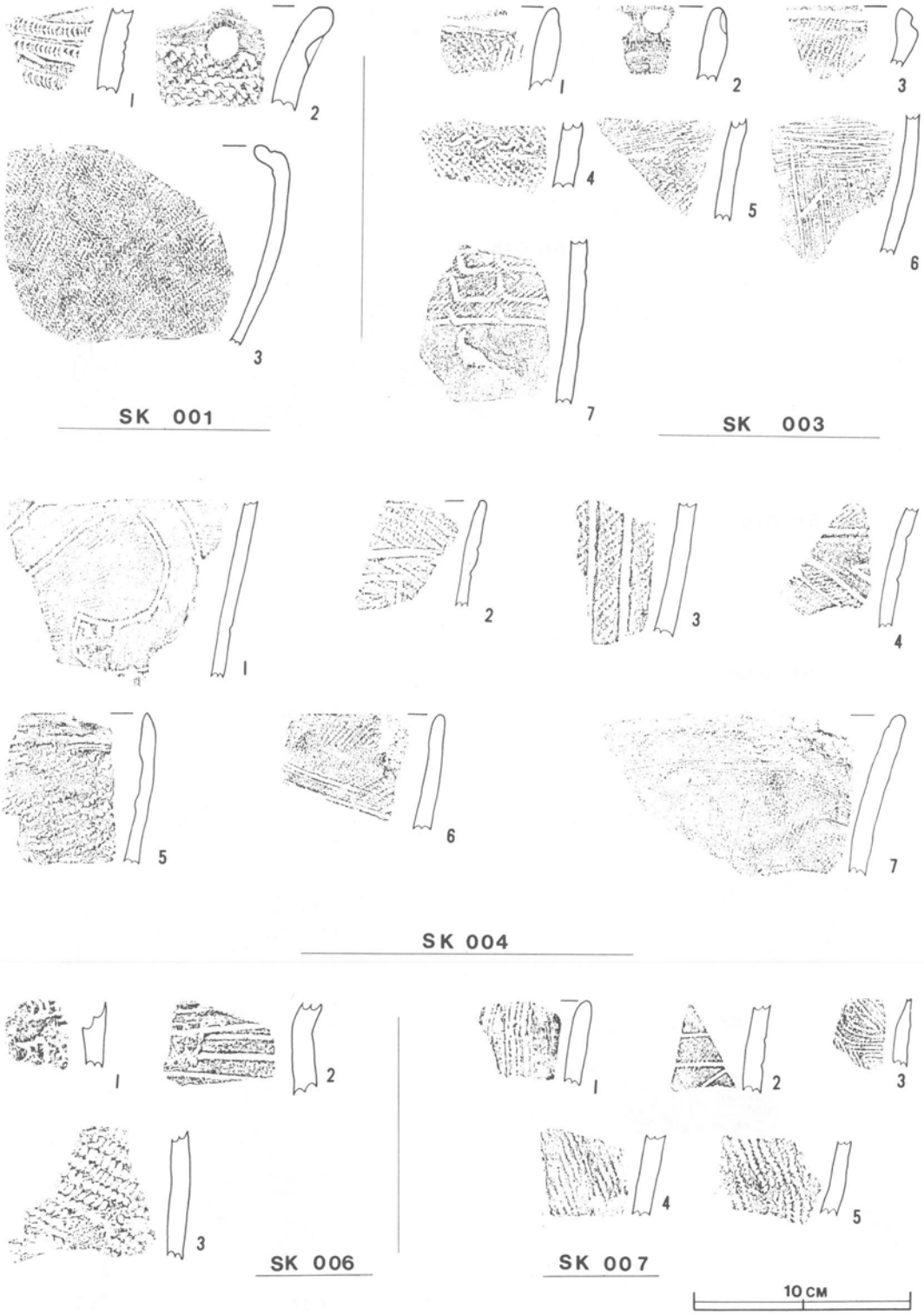
第74図　第67・71～80号土壙



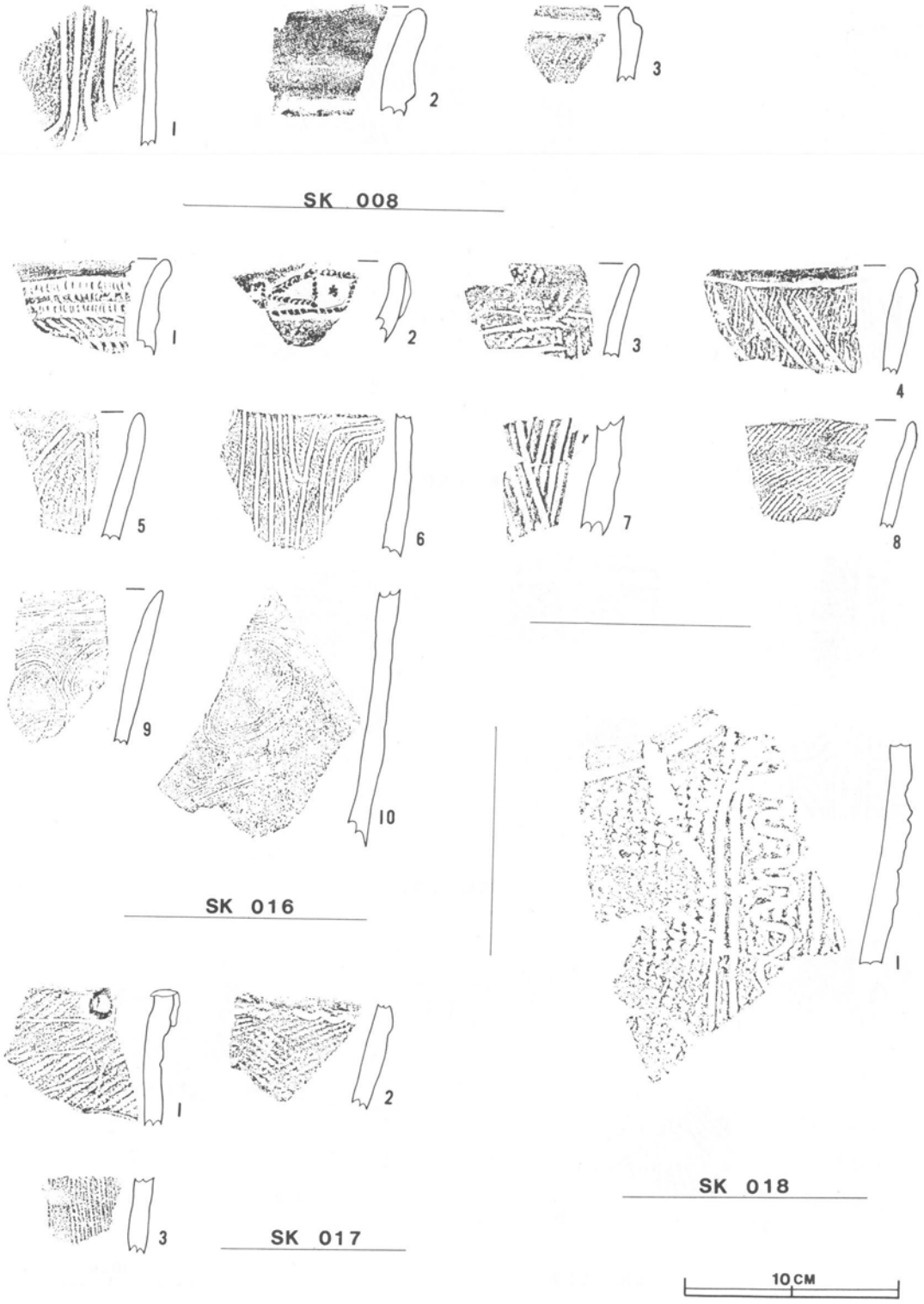
第75図　土壙出土遺物



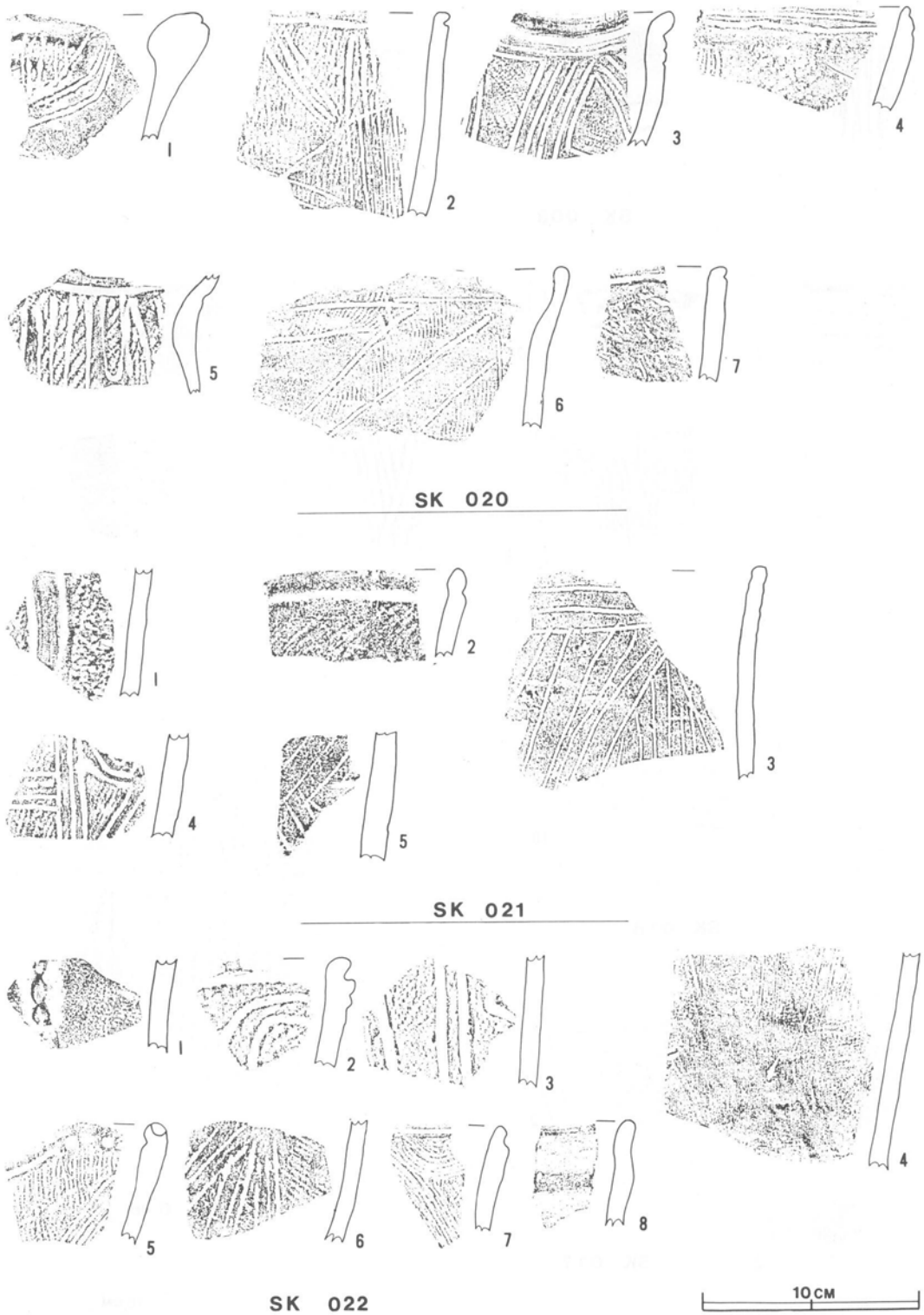
第76図　土壙出土遺物



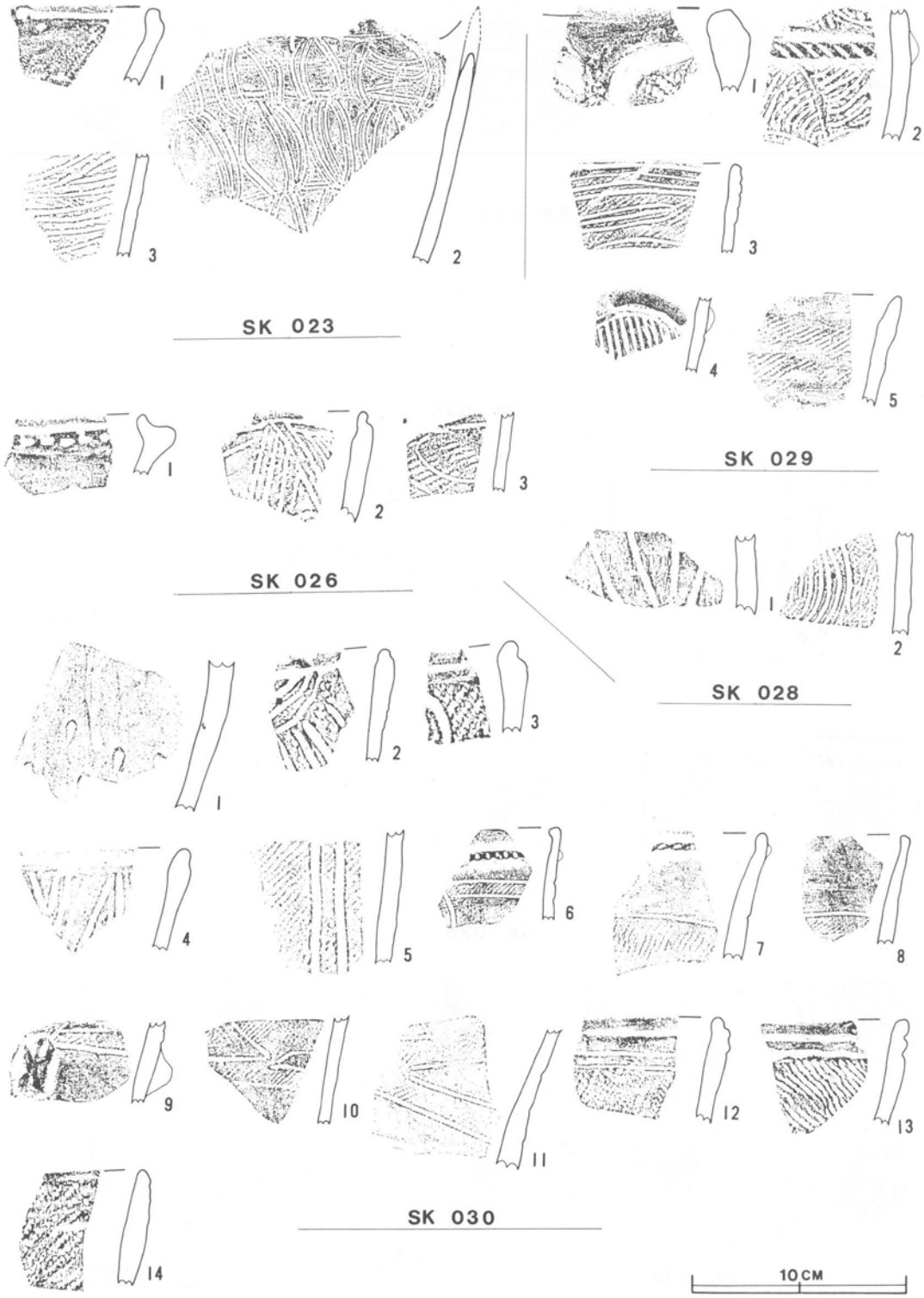
第77図　土壙出土遺物



第78図　土壙出土遺物



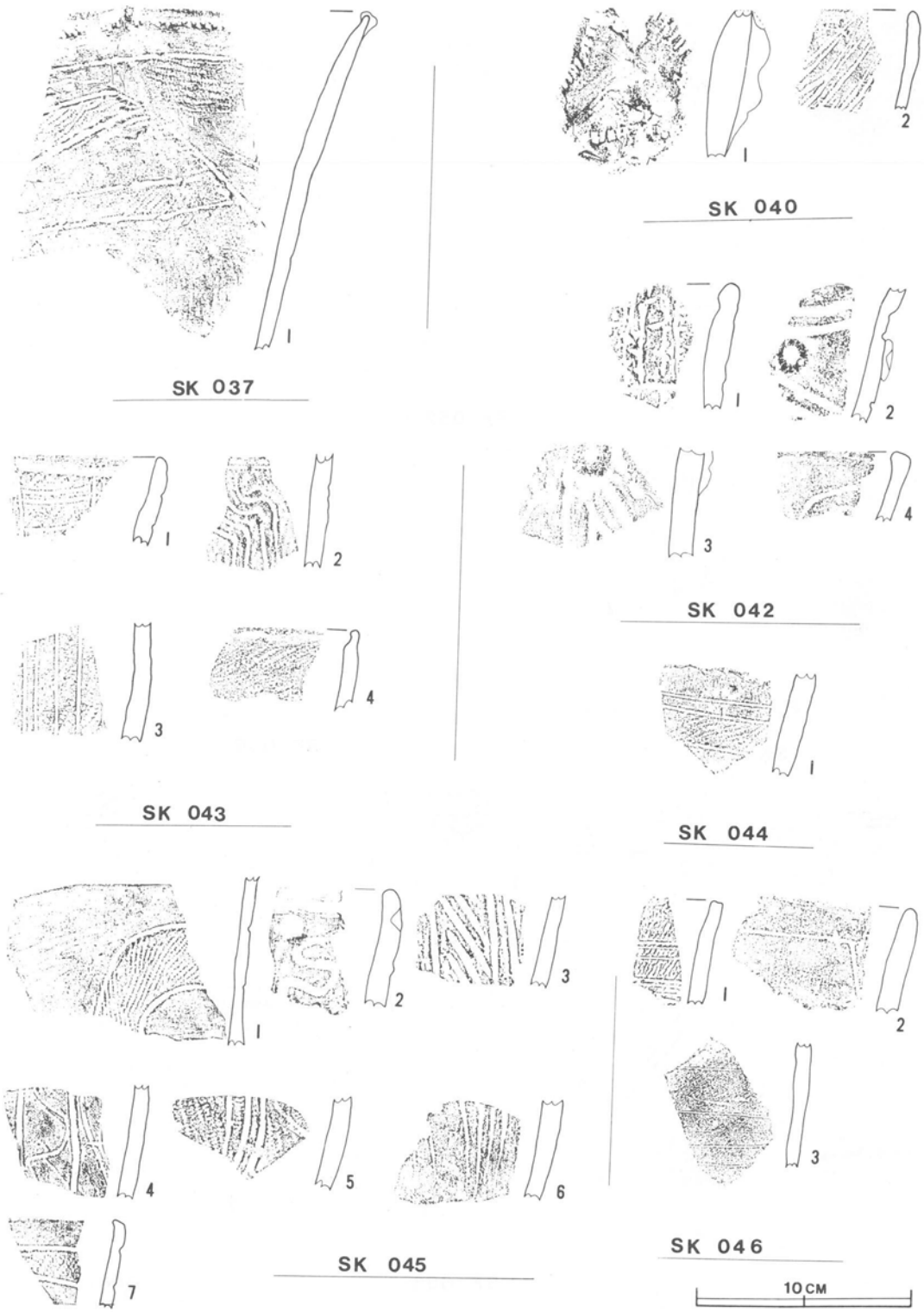
第79図　土壙出土遺物



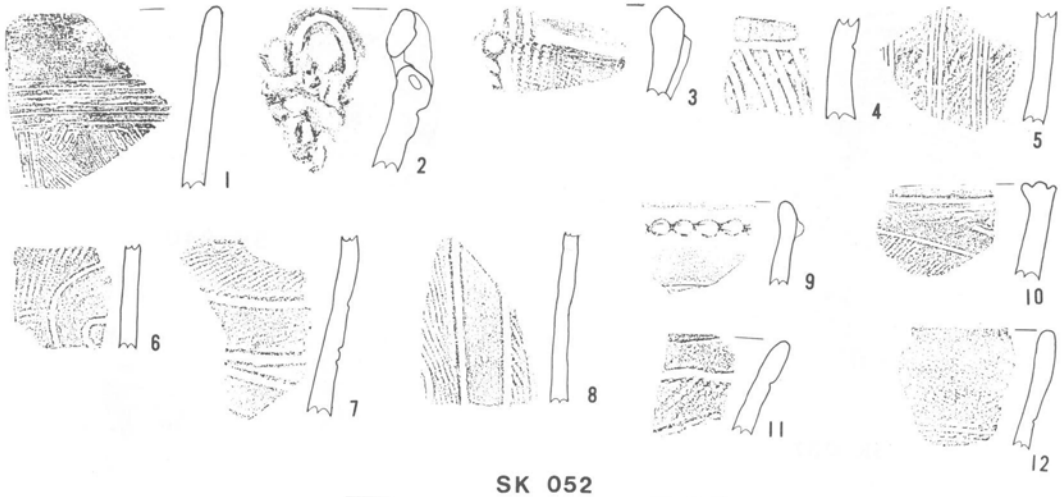
第80図　土壙出土遺物

1
2
3
SK 031
1
SK 034
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SK 035
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SK 036
10CM

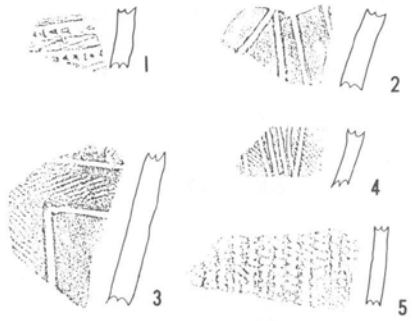
第81図　土壙出土遺物



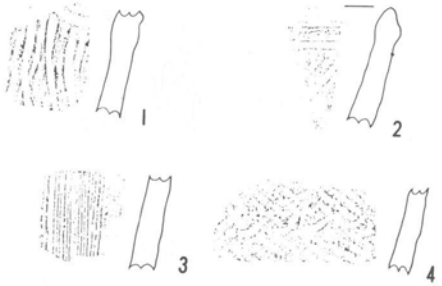
第82図　土壙出土遺物



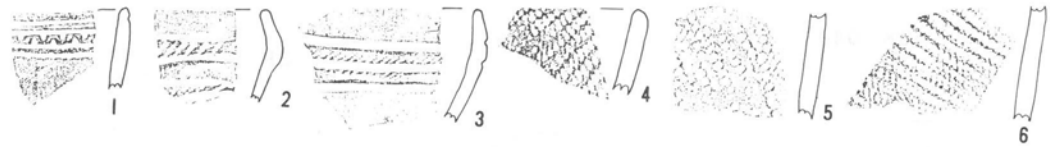
SK 052



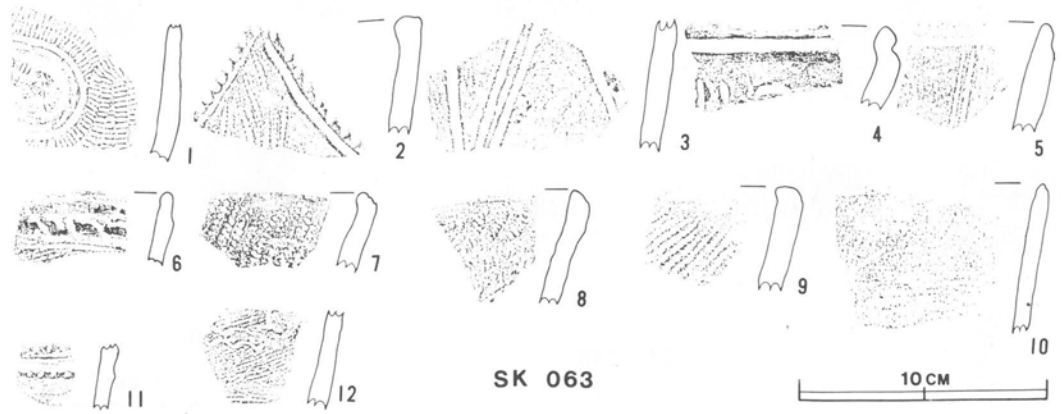
SK 054



SK 056



SK 058



SK 063

第83図　土壙出土遺物

表27　第75図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—002	1	深鉢形	口径 23.2 現存高 19.6	口唇部に小突起を有し，蛇行沈線及びそれを囲む形で沈線が垂下する	堀之内式
SK—004	1	深鉢形	口径 28.6 現存高 28.2	無文。表裏ともヘラ削り	明赤褐色を呈する
	2	深鉢口縁部	口径 19.2 現存高 5.7	内外面とも風化が著しい。外面にはわずかに縄文を残す	明褐色を呈する
	3	深鉢形	口径 32 現存高 25.5	沈線で文様を区画する。沈線間に部分的に縄文をほどこす	細砂粒を含み，精製されている。明赤褐色を呈す
	4	深鉢底部	現存高 16.2 底径 10.6	外面・底部……ヘラ削り 内面……ヘラナデ	橙色を呈する
	5	深鉢底部	現存高 7.7 底径 8	外面……ヘラ削り 内面……ヘラナデ，底部綱代痕	胎土に，スコリア・砂粒混入
	6	深鉢底部	現存高 7.5 底径 8	外面……縦位のヘラナデ 底部……ヘラ削り，一部に綱代圧痕を残す 内面……ヘラ削り	にぶい褐色を呈する
	7	深鉢底部	現存高 10 底径 10.7	底部……ヘラナデ 内・外面……ヘラ磨き	胎土にスコリア・砂粒混入，にぶい赤褐色を呈する

表28　第76図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—016	1	鉢形	口径 21.6 器高 10.9 底径 9.4	ヘラによるナデ，削りの整形，無文	明茶褐色を呈する (写40　1)
	2	深鉢底部	現存高 9.7 底径 10	内外面・底部ともヘラ削りによる整形	にぶい赤褐色を呈する
	3	深鉢底部	現存高 3.6 底径 9.7	外面はヘラ磨き，内面はナデ整形	にぶい赤褐色を呈する
SK—018	1	深鉢底部	現存高 10 底径 9.7	外面はヘラ削り，内面，底部はヘラ磨き	にぶい赤褐色を呈する
SK—022	1	波状口縁	現存高 21	体部は無文，内側に折れ曲がる口縁に沈線と刺突が施される。中空の突起を有し，橋状の把手が付く。突起両側と突起の中間に刺突が見られる	褐灰色を呈する。 堀之内Ⅰ式
SK—035	1	手捏土器	現存高 3.0 底径 1.8	内外面ともヘラ削り	にぶい橙色を呈する
SK—062	1	深鉢形	口径 24.2 現存高 13.7	縄文のみが施される。胴部下半は縦位のヘラ削り	にぶい赤褐色を呈する
SK—063	1	深鉢底部	現存高 5 底径 8.8	内外面ともていねいなヘラ磨き底部は綱代痕	黒褐色を呈する
	2	底部	現存高 3.7 底径 5.5	地文として縄文を施した後，斜めの沈線を配する。内面・底部はヘラ削り	にぶい褐色を呈する
	3	深鉢底部	現存高 4.9 底径 6.3	外面はヘラ磨き，内面・底部はヘラ削り	明褐色を呈する
SK—074	1	注口	全長 5.5 基部径 2.4	沈線で長楕円形を画し，内側に列点文を施す。外面はヘラ磨き	黒褐色を呈する
SK—087	1	鉢形	口径 25.5 器高 13.4 底径 6.2	縄文を施した後沈線を配する。口縁部内側に1条の沈線がめぐる。内外面ともヘラ磨き	黒色を呈する。 加曽利Ｂ１式
	2	鉢形	口径 21.5 現存高 13.1	沈線を施した後，縄文を配する。口唇に刻み目。内外面ヘラ磨き	黒色を呈する 加曽利Ｂ１式

表29　第77図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−001	1	胴部		平行沈線間に爪形の刺突を充填する	
	2	口縁部		口縁の小突状起部で円形刺突状の凹みを有する。地文は縄文	
	3	〃		口縁部が内側に屈曲する。縄文のみ	
SK 003	1	口縁部		縄文の上に沈線を施す	
	2	〃		口縁部に円形刺突を配する	
	3	〃		口縁部に1条の沈線を施文する。縄文のみ	
	4	胴部		縄文のみ	
	5	〃		横方向の条線。地文はまばらな縄文	
	6	〃		横方向→縦方向の順で沈線を施す	
	7	〃		数条の平行沈線文で縦位沈線を階段状に施す。沈線間は縄文を充填する。下部はヘラ整形	
SK−004	1	胴部		沈線で曲線的な文様を区画し，中は磨消し。地文は縄文	
	2	口縁部		幾何学的な区画を沈線で施文する。地文は縄文	
	3	胴部		2本の沈線を縦位に施す。地文は縄文。	
	4	〃		沈線で幾何学的な文様を区画し，中に縄文を充填する。他は磨消し	堀之内式
	5	口縁部		口縁部はわずかに内彎する。縄文のみ。ヘラ削り	
	6	〃		斜行沈線。縄文	
	7	〃		外反する口縁で横位の沈線のあと，縦位の沈線を施す	
SK−006	1	胴部		爪形文	
	2	〃		横位の沈線	
	3	〃		縄文のみ	
SK−007	1	口縁部		縦位の沈線	
	2	胴部		沈線で区画し，中に縄文を充填する	
	3	〃		孤状の沈線のみ	
	4	〃		縄文のみ	
	5	〃		縄文のみ	

表30　第78図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—008	1	胴部		縦位の沈線。下部で曲がる。地文は縄文	
	2	口縁部		口縁部に平行な沈線	
	3	〃		口唇部に太い沈線。胴部は縄文	
SK—016	1	口縁部		平行沈線を数条走らせ，中を刺突もしくは斜沈線で埋める	
	2	〃		細い粘土紐を幾何学的に張り付け，上に刻みを入れる	
	3	〃		口縁部は外反し，沈線を施文する。地文は縄文	
	4	〃		口縁に平行な沈線を施し，右下がりの斜沈線を入れる。地文は縄文	
	5	〃		斜沈線のみ。地文は縄文	
	6	胴部		縦位及び横方向に屈曲する沈線を施文する。地文は縄文	
	7	〃		太い斜沈線のみ	
	8	口縁部		縄文のみ	
	9	〃		口縁部に横位の沈線を数条回し，胴部にかけては沈線で曲線文を施文する	堀之内式
	10	胴部		No.9 と同一個体であろう	〃
SK—017	1	口縁部		口唇部から直角に 8 の字状の貼り付けを有し，沈線で直線的な文様を構成する	
	2	胴部		縄文のみ	
	3	〃		縦位の沈線	
SK—018	1	胴部		波状口縁を呈し，口縁に平行な沈線があり，波頂部より蛇行沈線が垂下する。地文は縄文	堀之内式

表31　第79図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－020	1	口縁部		口唇部が肥厚し，頂部が凹む。数条の沈線を施文する	
	2	〃		口縁部に平行な沈線を一本回し，下部は縦位及び斜行沈線を施す	堀之内式
	3	〃		内彎しながら立ち上がってきた口縁が口唇部でくの字状に外反する。沈線で文様を区画し，部分的に縄文を施す	〃
	4	〃		口縁に平行な2条の沈線を有し，弧状の沈線を垂下させる。地文は縄文	
	5	胴部		くびれ部に1条の沈線を配し，垂下する沈線を加える	〃
	6	口縁部		口縁部内側がS字状を呈す。沈線で幾何学文を描き，中に縄文を充填する。外は磨消し	〃
	7	〃		口縁に平行な沈線を施す。縄文	
SK－021	1	胴部		2本の沈線間を磨消す。地文は縄文	
	2	口縁部		口縁に平行な沈線を施す。縄文	
	3	〃		ゆるく外反し，口縁に平行な3本の沈線から，斜位に沈線を施文する	
	4	胴部		沈線で幾何学文を描き，部分的に刺突を加える。地文は縄文	
	5	〃		沈線で直線的な文様を描く	
SK－022	1	胴部		紐線を縦位に付す	
	2	口縁部		蛇行沈線の頂部であろう。地文は縄文	
	3	胴部		縦位の沈線及び蛇行沈線を施文する	
	4	〃		底部に近い胴部で，沈線の末端部がみえる	
	5	波状口縁		波頂部に円形刺突3個を配し，両方向に沈線がのびる。斜行する沈線を施す	
	6	胴部		斜沈線	
	7	口縁部		口縁部に平行な1本の沈線を有し，下部に弧状及び斜位の沈線を施文する	
	8	〃		2本の隆帯が横方向に回る	

表32　第80図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—023	1	口縁部		口唇部の円形刺突から1条の沈線が出る。縄文のみ	
	2	〃		（　）状の沈線を数段重ね，接合部は横位の沈線で区画する	
	3	胴部		斜沈線を充填する	
SK－025	1	口縁部		極めて太い沈線が弧状に入る。地文は縄文	
	2	胴部		刻みを持つ隆帯を横位に貼り付け，上下を弧状の沈線で充填する	
	3	口縁部		口縁に平行な沈線が数条施され，間に沈線で長楕円形を描く。地文は縄文	
	4	胴部		隆帯を弧状に貼り付け，それに平行する沈線を施す。下部は斜行する沈線で埋める	
	5	口縁部		製作時の突起部が残り，縄文をつける	
SK－026	1	口縁部		口唇部を沈線及び列点刺突でかざる	
	2	〃		口縁部先端が両側とも凹む。斜行する沈線を施す	
	3	胴部		沈線で曲線文様を描く。地文は縄文	
SK－028	1	胴部		沈線文	
	2	〃		沈線で渦巻文を描く。地文は縄文	
SK－030	1	胴部		ヘラ整形後，刺突を施す	
	2	口縁部		口縁に平行する沈線を有し，下部に弧状及び斜沈線を施す	堀之内式
	3	〃		口縁に平行する沈線を有し，弧状の沈線を垂下する	〃
	4	〃		口縁に平行する沈線を有し，斜位及び縦位の沈線を施す	〃
	5	胴部		縦位の平行沈線がみられる。	〃
	6	口縁部		口縁部に紐線を付し，沈線で区画された縄文帯をもつ	
	7	〃		口縁部に紐線を付し，沈線で区画された縄文帯をもつ	
	8	〃		沈線で区画された縄文帯をもつ。ヘラ整形	
	9	胴部		沈線で区画された縄文帯に接して，8の字状の隆帯を貼り付ける	堀之内式
	10	〃		沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	〃
	11	〃		沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	〃
	12	口縁部		口唇部及び口縁部に3条の沈線を横走させる。地文は縄文	
	13	〃		口縁部に2条の沈線を有する。縄文	
	14	〃		縄文のみ。LR	

表33　第81図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-031	1	口縁部		口縁部は外反し，縄目圧痕がみられる	
	2	〃		口縁部は外反し，縄目圧痕，右下がりの沈線を施す	
	3	胴部		くびれ上部に縦方向の刺突を有し，横位及び斜位の沈線を入れる	
SK-034	1	胴部		平行沈線がみられる	
SK-035	1	波状口縁		大波状口縁の突起部で，外反しており，U字形に紐線を付す。斜沈線も数条付加される	
	2	〃		No.1と同一個体	
	3	胴部		横走する数条の沈線と，縦位の沈線とに2分され，地文は縄文である	
	4	〃		1組の平行沈線が垂下する。地文は縄文	
	5	口縁部		口縁に平行に沈線を施す	
	6	〃		8本以上の沈線を口縁と平行に施す	
	7	〃		口縁部に紐線を付し，1組の平行沈線が並走する	
	8	胴部		沈線で区画し，中を縄文で充填する。外は磨消し	
	9	〃		沈線で区画し，中を縄文で充填する。外は磨消し	
	10	口縁部		3本の平行沈線の間に刺突を加える	
SK-036	1	胴部		くびれ部より上は横位，下は山形に細い隆帯を残し，刺突を加える	
	2	口縁部		浅い沈線を施し，部分的に刺突が加わる	
	3	〃		波状口縁突起部で，紐線及びメガネ状の隆帯を付し，胴部に横方向の沈線が走る	
	4	胴部		沈線区画内に縄文。外は磨消し	
	5	〃		平行沈線の横走。地文は縄文	
	6	口縁部		縄文のみ	
	7	〃		縄文のみ	
	8	〃		口唇部に列点刺突がみられる。無文	
	9	〃		無文。補修孔あり	
	10	胴部		平行沈線の横走。地文は縄文	

表34　第82図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-037	1	口縁部		口縁部に紐線を付し，沈線で幾何学文様を区画し，中に縄文を充填する	堀之内式
SK-040	1	口縁部		波状口縁。刺突文	
	2	〃		左下がりの沈線を施す	
SK-042	1	口縁部		突起部下に縦位の沈線。刺突を加える	
	2	胴部		円形の粘土紐を貼り付け，横位・斜位の沈線を施文する	
	3	〃		円形の張り付から沈線が出発し，中に刺突を施す	
	4	口縁部		弧状の沈線	
SK-043	1	口縁部		横位・縦位の沈線文。地文は縄文	堀之内式
	2	胴部		沈線で文様を区画する。地文は縄文	〃
	3	〃		縦位の沈線。地文は縄文	
	4	口縁部		口唇部内外両面に凹みをもつ。縄文	〃
SK-044	1	胴部		横位の沈線を3本施文し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
SK-045	1	胴部		2本の沈線で区画された中に縄文を充填する。外はヘラ整形	称名寺式
	2	口縁部		口縁部沈線。円形の刺突から蛇行沈線が垂下する	堀之内式
	3	胴部		縦位の沈線間に右下がりの斜沈線を配する	〃
	4	〃		直線・曲線の沈線が垂下する	
	5	〃		沈線文。地文は縄文	
	6	〃		底部に近く垂下した沈線の末端がみえる	
	7	口縁部		2本の沈線で区画された縄文帯をもつ。外は磨消し	
SK-046	1	口縁部		数本の沈線が横走する。地文は縄文	
	2	〃		沈線のみ	
	3	胴部		横位の細い沈線が施文される	

表35　第83図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK--052	1	口縁部		口縁に平行な8本の沈線が横走し，下部にも縦位・斜位の沈線を施文する	
	2	〃		波状口縁の突起部で，円形刺突・沈線が施される	
	3	〃		小波状口縁の突起部で3本の縦位沈線下より隆帯が垂下する。上に刺突が加わる	
	4	胴部		横位の沈線で上部と区画され，右下がりの沈線を施文する	
	5	〃		半截竹管による平行沈線が縦位につけられる	
	6	〃		沈線で区画され，縄文を配す	
	7	〃		弧状の沈線で区画され，縄文を充填する	
	8	〃		2本の沈線間を磨消す	
	9	口縁部		紐線文を付す	
	10	〃		沈線で区画され，内部は縄文	
	11	〃		沈線で区画され，中に縄文を充填する	
	12	〃		平行沈線で胴部と区別される	
SK--054	1	胴部		平行沈線間を刺突で埋める	
	2	〃		沈線文	
	3	〃		沈線で区画された中に縄文が充填される。外はヘラ整形	
	4	〃		沈線の間に縄文を充填する	
	5	〃		縄文のみ	
SK--056	1	胴部		弧状の沈線文	
	2	口縁部		口縁に平行な2本の沈線が施される。胴部にかけては縄文	
	3	胴部		5～7本を1単位とする細沈線を縦位に施文する	
	4	〃		縄文のみ	
SK--058	1	口縁部		沈線文	
	2	〃		くの字状に屈曲する。沈線間を刺突で埋める	
	3	〃		内湾する口縁部で，三本の平行沈線間は縄文を充填する	
	4	〃		縄文のみ。LR	

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—058	5	胴部		荒い縄文	
	6	〃		縄文のみ	
SK—063	1	胴部		沈線で内外を区画され，ヘラ先端による。刺突が複数列充塡される	
	2	波状口縁		大波状口縁を呈し，波頂部から口縁に平行な沈線を施文する。口唇部には刺突が加わる。地文は縄文	
	3	胴部		沈線文	
	4	口縁部		口縁部は屈曲し，太い沈線が施される	
	5	〃		口縁に平行な沈線，縦位の沈線が施文される。地文は縄文	
	6	〃		刺突及び横位の沈線	
	7	〃		縄文のみ	
	8	〃		縄文のみ	
	9	〃		縄文のみ	
	10	〃		ゆるい波状口縁を呈し，縄文のみ	
	11	〃		細い紐線を付す	
	12	胴部		縄文	

表36 （土壙一覧表 (8)）

土壙No	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	分類	実測図・写真
085	$C_2 i_7$	楕 円 形	N—37°—W	1.30 × 1.17	0.56	壙底南側は 10cm 低くなる。覆土上部は純貝層	B′	図84
086	$C_2 f_7, f_8$	楕 円 形	N—57°—W	1.31 × 1.17	0.56	壙底中央部に溝状の落ち込み	A	図84
087	C_2 d_6 c_6	楕 円 形	N—21°—W	2.63 × 2.07	0.17	ピット 3，魚骨多量に出土，浅鉢，凹石，	A1	図84 (写18—3)
088	C_2 f_8, f_9 g_8, g_9	楕 円 形	N—60°—W	1.57 × 1.29	0.38	SI—09 と重復貝層あり	A	図84
089	$C_2 b_6, b_7$	楕 円 形	N 5°— E	1.97 × 1.74	0.77		B′	図85 (写18— 4)
090	$C_2 g_8, g_9$	楕 円 形	N—61°—E	1.5 × 1.12	0.14	壙底まで貝層あり	A	図85
091	$C_2 f_8$	楕 円 形	N—70°—E	1.32 × 0.94	0.41	SI—09 と重複，石棒	A	図85
092	$C_2 i_5$	円 形	N—0°	壙底1.47 × 開口部1.07	1.20	SI—20 と重複，混貝土層あり，深鉢，浅鉢	C	図85 (写18— 5)
093	$C_2 i_4, i_5$	楕 円 形	N—21°—E	1.4 × 1.11	0.12	ピット 1	A1	図85
094	$C_2 i_4$	楕 円 形	N—0°	1.86 × 1.1	0.13	SK—097 と重複，ピット 5，	A1	図85
095	$C_2 i_4$	楕 円 形	N—20°—E	1.4 × 0.71	0.09		A	図85
096	$C_2 i_3$	円 形	／	1.34	0.41	壙底 2 段掘り込み	B	図85

表37 （土壙一覧表 (9)）

土壙No.	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
097	C_2i_4	楕円形	N—0°	1.84 × 1.25	0.15	ピット4	A1	図86
098	C_2i_3	楕円形	N—74°—W	1.37 × 1.21	0.16	ピット3	A1	図86 (写18—6)
099	C_2i_9	／	／	(N—S)1.0 (E—W)1.2	0.41	SI—15と重複，純貝層あり	／	図86 (写19—1)
100	C_2 h_9 i_9	長楕円形	N—31°—W	2.53 × 1.17	0.10	壙底中央部凹む	A1	図86
101	C_2g_7	不整円形	N—26°—E	1.09 × 1.06	0.47	第2号人骨を切って掘り込まれている。石斧	C	図86
102	C_2c_8	ほぼ円形	N—27°—E	2.03 × 1.9	0.35	ピット5，砥石状石器	A1	図88
103	C_2c_8,c_9	不整楕円形	N—60°—E	1.39 × 1.13	0.61	混貝土層あり	B′	図86
104	C_2b_8	円形	／	1.53	0.14	ピット4	A1	図86 (写19—2)
105	C_2f_6	不整楕円形	N—41°—E	1.28 × 1.15	0.47	貝層が厚く堆積する	A	図86
106	C_2a_7	不整楕円形	N—35°—W	3.29 × 2.86	0.83	ピット一，磨石，磨製石斧	B1′	図87 (写19—3)
107	C_2 a_9,a_0 b_9,b_0	楕円形	N—42°—W	1.61 × 1.34	0.67		B′	図88 (写19—4)
108	C_2 a_8,a_9 b_8	溝状	N—20°—E	4.35以上 × 2.23	0.85	北部は通路下，溝状を呈す，ピット1，磨石	E	図88

表38 （土壙一覧表 (10)）

土壙No	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
109	C_2 b_7,b_8 c_7,c_8	不整楕円形	N−13°−E	2.59 × 2.41	0.75	壙底南東部が落ち込む	A1	図87
110	C_2e_3,e_4	楕 円 形	N−13°−E	1.30 × 0.9	0.31	石皿	A	図86 (写19−5)
111	C_2b_0	楕 円 形	N−85°−E	0.85 × 0.55	0.29		A	図89
112	C_2a_0	不 整 円 形	N−11°−W	0.82 × 0.81	0.32		A	図89
113	C_2 b_9 c_9	楕 円 形	N−9°−E	1.11 × 0.77	0.55		A′	図89
114	C_2d_4	円 形	／	1.64	0.07		／	図89
115	C_2d_3,d_4	円 形	N−0°	1.27 × 1.21	0.2		A	図89
116	C_2e_2	不 整 円 形	N−35°−W	0.96 × 0.9	0.16	ピット3	A1	図89
117	C_2e_2,e_3	楕 円 形	N−51°−W	0.87 × 0.77	0.6	勾玉状石製装身具	B′	図89
118	C_2c_9	楕 円 形	N−77°−W	1.92 × 1.30	0.38	東壁2段，ピット1，混貝土層あり	A1	図89
119	C_2c_4,c_5	楕 円 形	N−67°−W	1.45 × 1.01	0.35	ピット3，ピット内まで貝層の堆積がある	A1	図89 (写19−6)
120	C_2b_0	／	／	(N−S)1.8 (E−W)1.3	0.67	東側通路下	B′	図89

表39 （土壙一覧表 (11)）

土壙№	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
121	C_3e_3,e_4	不整方形	N—81°—E	1.33 × 1.13	0.33	壙底中央部が落ち込む	D	図89
122	C_2 b_2 c_2	円 形	N—90°	1.53 × 1.38	0.34	覆土はすべて貝層	A	図90 (写20—1)
123	C_1b_8	楕円形	N—76°—E	1.27 × 1.10	0.65	ピット1，混土貝層あり	C1	図90 (写20—3)
124	C_1a_8	楕円形	N—50°—W	0.95 × 0.89	0.31		A	図90
125	C_2c_3	楕円形	N—26°—W	0.93 × 0.77	0.22	壙底は2段掘り込み，混貝土層あり	A	図90
126	C_3e_2	不整方形	N—75°—W	1.12 × 1.11	0.54	北壁にピット1，覆土は混貝土層	B1′	図90
127	C_2b_4	不整楕円形	N—5°—E	1.20 × 1.12	0.57	ピット1，覆土上部に混貝土層あり	C1	図90 (写20—4)
128	C_2i_2,i_3	円 形	N—57°—E	1.06 × 0.9	1.17		C	図91 (写20—5)
129	C_2e_8	不整円形	N—90°	1.03 × 0.96	0.23	ピット4，混貝土層あり，手づくね土器	A1	図91
130	C_2 e_8 f_8	不整楕円形	N—78°—W	1.43 × 1.14	0.62	覆土は混貝土層，石皿	C	図91
131	C_2 e_7 f_7	不整楕円形	N—0°	1.63 × 1.49	0.22	混貝土層あり	A1	図91
132	C_2f_6	楕円形	N—66°—E	1.23 × 1.03	0.18	ピット3	A1	図91

表40 （土壙一覧表(12)）

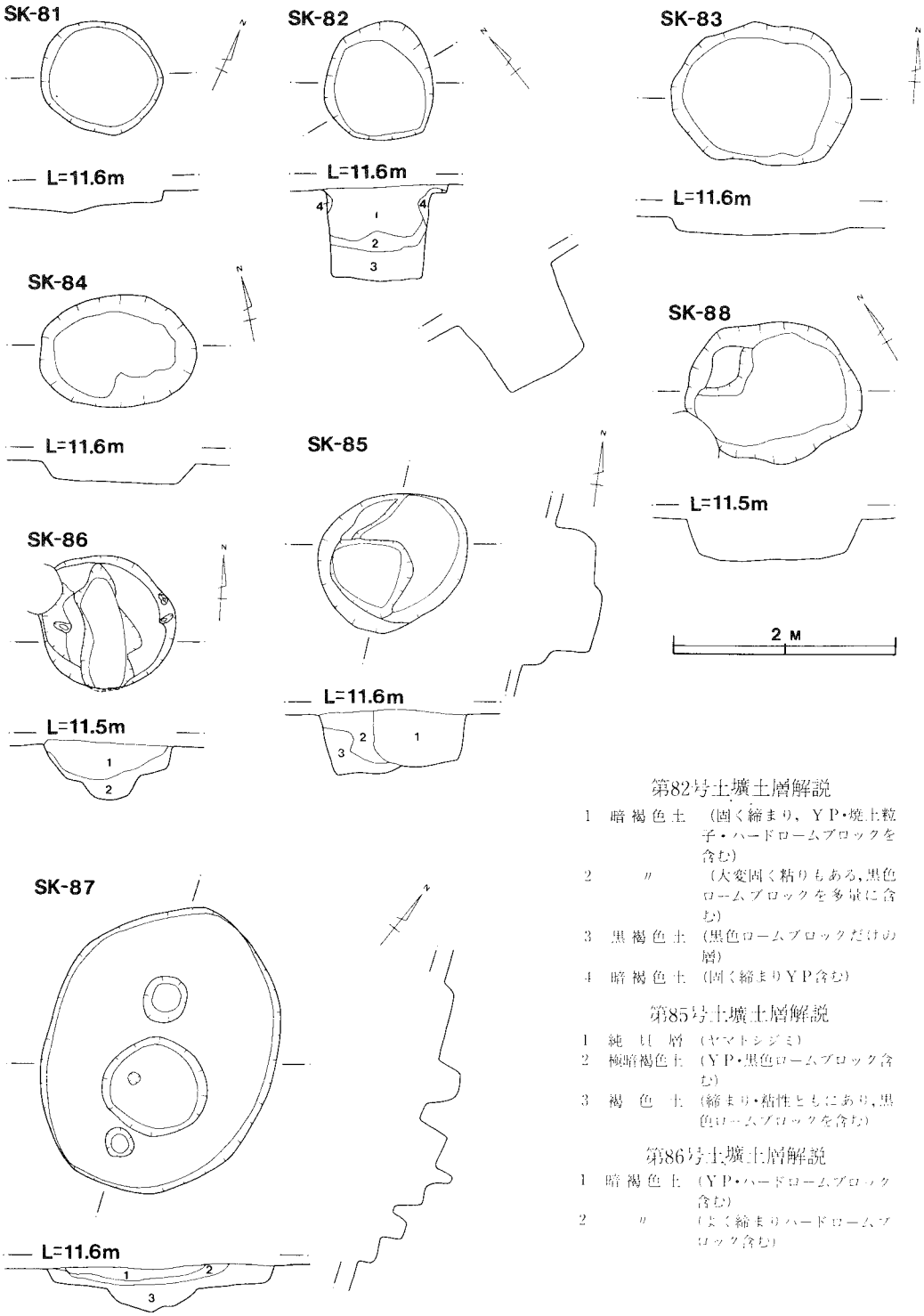
土壙No	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
133	C_2e_7,e_8	不整長楕円形	N—83°—W	2.05 × 1.27	0.43	2基の土壙の連結か，ピット5，貝層あり	A1	図91
135	C_2g_7,g_8	楕 円 形	N—63°—W	1.21 × 0.93	0.21	ピット4，混貝土層あり	A1	図91
136	C_2d_7	楕 円 形	N—56°—W	1.18 × 1.05	0.51	混貝土層あり	B′	図91
137	C_2 g_5 h_5	不整円形	N—15°—W	0.82 × 0.78	0.19	ピット1	A1	図92
138	C_2 d_7,d_8 e_7,e_8	円 形	N—20°—W	1.14 × 1.08	0.5	貝層あり，磨石	C	図92（写20—6）
139	C_2b_3	不整楕円形	N—70°—E	0.95 × 0.85	0.18	SI—24と重複，混貝土層あり	A	図92
140	$C_1d_0e_0$	不整楕円形	N—4°—E	0.92 × 0.82	0.18		A	図92
141	C_1e_0	楕 円 形	N—88°—E	1.58 × 1.1	0.25	壙底に段差あり	A1	図92
142	C_1e_9	楕 円 形	N—42°—E	1.42 × 1.09	0.09	ピット1	A1	図92
143	C_1e_9	不整楕円形	N—32°—E	1.47 × 1.07	0.16	ピット4	A1	図92
144	C_1e_8,e_9	楕 円 形	N—25°—E	1.11 × 0.89	0.16		A	図92
145	C_2e_8	不 安 形	N—38°—E	1.06 × 0.85	0.69	SI—09に接する	C	図92

表41 （土壙一覧表 (13)）

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
146	C_2d_7	楕円形	N—41°—E	1.41 × 1.26	0.31	ピット3	A1	図92
147	C_2f_2	楕円形	N—26°—E	1.67 × 1.48	0.52	土偶の足部	B′	図93
148	C_2e_7	円形	N—76°—E	1.91 × 1.80	0.53	混貝土層がレンズ状に堆積する，石鏃	C	図92 (写21—1)
149	C_2a_4	隅丸方形	N—8°—E	1.19 × 1.15	0.34	貝の堆積あり	D	図92 (写21—2)
150	C_1 a_9,a_0 b_9,b_0	円形	N—36°—W	2.21 × 1.97	0.71	壙底に純貝層がある，凹石	C	図93 (写21—3)
151	B_1 g_8 h_8	楕円形	N—80°—E	1.18 × 0.89	0.18		A	図93
152	B_1 h_8,h_9	不整楕円形	N—42°—E	2.26 × 1.75	0.2	小ピット17	A1	図93
153	B_1 g_9,g_0	楕円形	N—46°—E	2.29 × 1.94	0.36	混貝土層あり	A1	図94
154	B_1 h_9	不定形	N—71°—W	1.34 × 0.95	0.44		A	図93
155	B_1 i_8	楕円形	N—32°—E	0.97 × 0.83	0.97		B′	図93
156	B_1 e_9 f_9	楕円形	N—90°	1.06 × 0.96	0.17	純貝層あり	A	図93
157	C_1c_0	不整楕円形	N—49°—W	1.14 × 1.10	0.52	壁は垂直に立ち上がる	B′	図94

表42　土壙一覧表 (14)

土壙No.	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
158	C_1 c_0 d_0	不整楕円形	N−9°−W	1.01 × 0.93	0.42		B′	図94
159	B_1f_9,f_0	楕円形	N−90°	1.27 × 1.0	0.32	貝層あり	A1	図94
160	B_2d_1	不整楕円形	N−54°−W	1.02 × 0.87	0.2	ピット4	A1	図94
161	B_2e_1,e_2	楕円形	N−90°	1.17 × 1.07	0.16		A	図94
162	B_1e_0 B_2e_1	不整楕円形	N−73°−W	2.15 × 1.72	0.05	ピット1，混貝土層あり	A1	図94
163	B_2f_1	円形	N−64−E	0.83 × 0.78	0.83		B′	図94
164	B_1d_9	不整円形	N−41°−W	1.14 × 1.11	0.73	混貝土層あり	B′	図107 (写21−5)
165	B_1d_9	／	／	(N−S)0.73 (E−W)1.01	0.15	北側は通路下	／	図94
166	C_1a_0	楕円形	N−86°−E	1.1 × 0.97	1.18	2段掘り込み，ピット1，貝層あり	B1′	図107
167	B_1g_0 B_2g_1	楕円形	N−59°−E	1.40 × 0.95	0.35		A	図107
168	C_1h_0	長楕円形	N−67°−E	2.23 × 0.93	0.25		A	図107
169	B_1g_0,B_2g_1 B_1h_0,B_2h_1	不定形	N−44−W	3.89 × 2.17	0.28	ピット7，混貝土層あり	E	図107



第82号土壙土層解説

1　暗褐色土　（固く締まり，ＹＰ・焼土粒子・ハードロームブロックを含む）
2　〃　（大変固く粘りもある，黒色ロームブロックを多量に含む）
3　黒褐色土　（黒色ロームブロックだけの層）
4　暗褐色土　（固く締まりＹＰ含む）

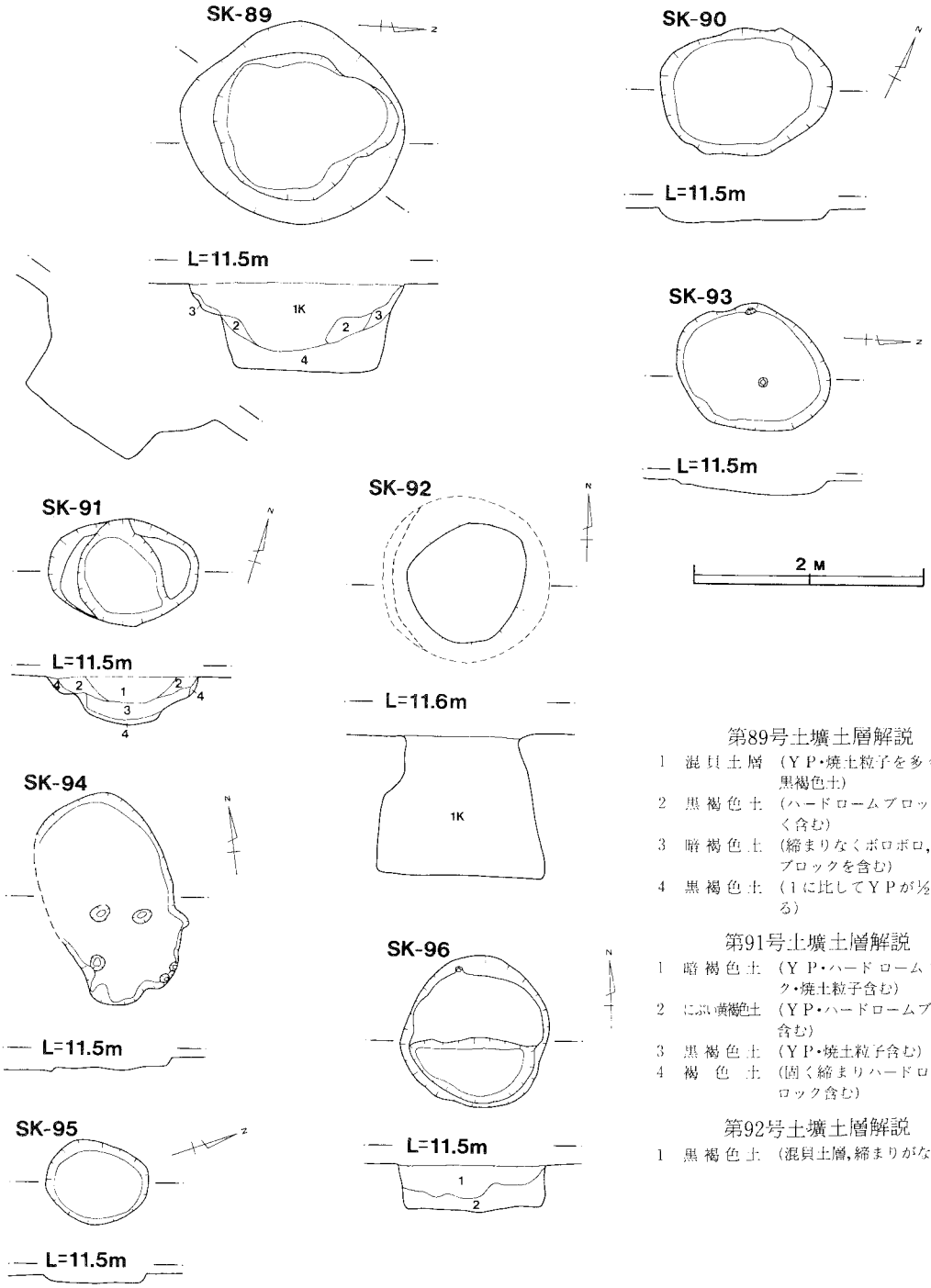
第85号土壙土層解説

1　純貝層　（ヤマトシジミ）
2　極暗褐色土　（ＹＰ・黒色ロームブロック含む）
3　褐色土　（締まり・粘性ともにあり，黒色ロームブロックを含む）

第86号土壙土層解説

1　暗褐色土　（ＹＰ・ハードロームブロック含む）
2　〃　（よく締まりハードロームブロック含む）

第84図　第81～88号土壙



第89号土壙土層解説

1　混貝土層　(ＹＰ・焼土粒子を多く含み，黒褐色土)
2　黒褐色土　(ハードロームブロックを多く含む)
3　暗褐色土　(締まりなくボロボロ，ロームブロックを含む)
4　黒褐色土　(1に比してＹＰが½位になる)

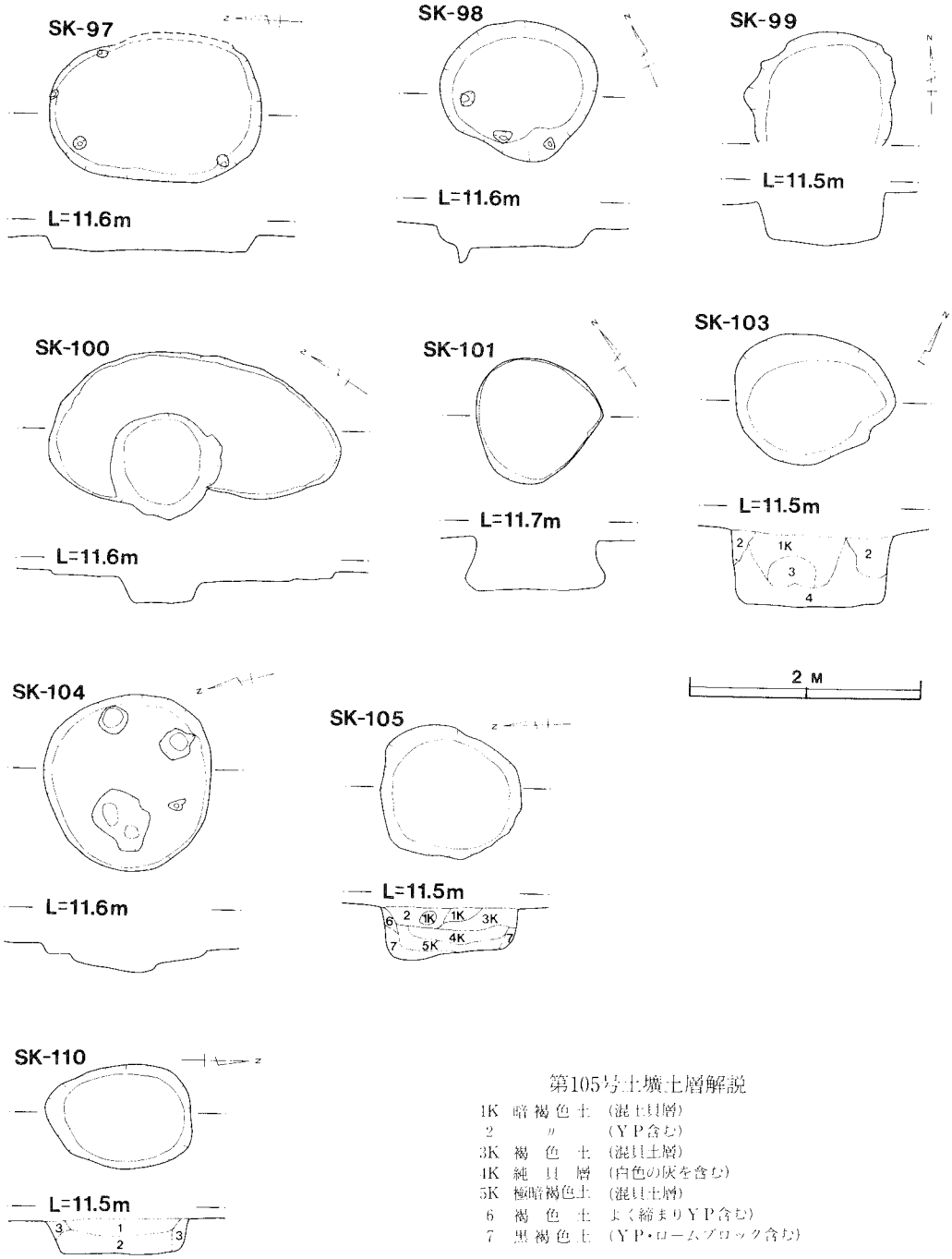
第91号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ＹＰ・ハードロームブロック・焼土粒子含む)
2　にぶい黄褐色土　(ＹＰ・ハードロームブロック含む)
3　黒褐色土　(ＹＰ・焼土粒子含む)
4　褐色土　(固く締まりハードロームブロック含む)

第92号土壙土層解説

1　黒褐色土　(混貝土層，締まりがない)

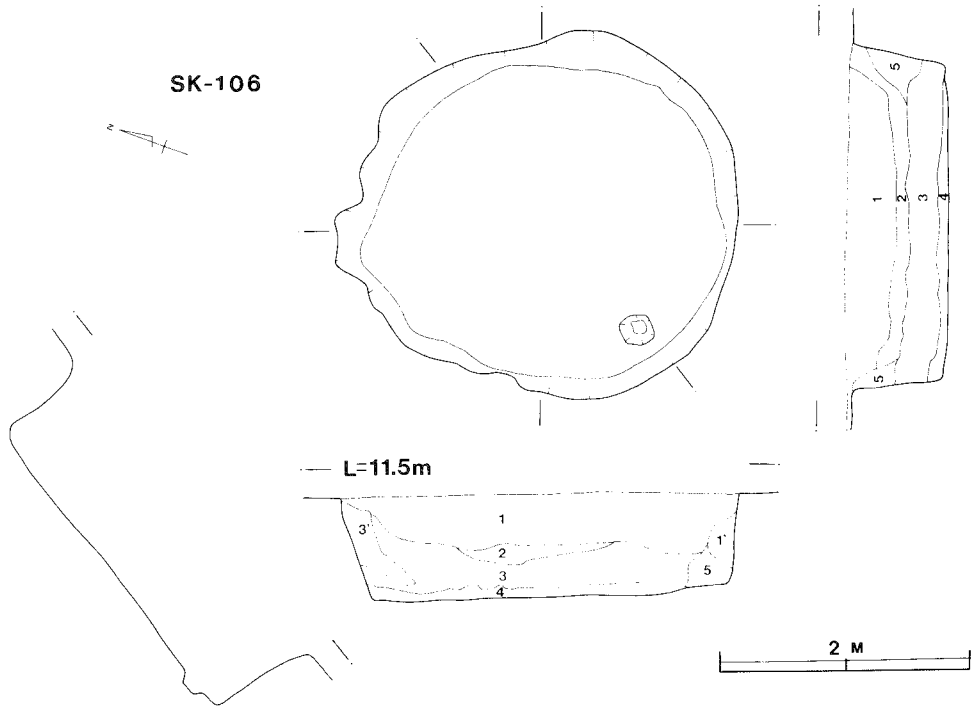
第85図　第89～96号土壙

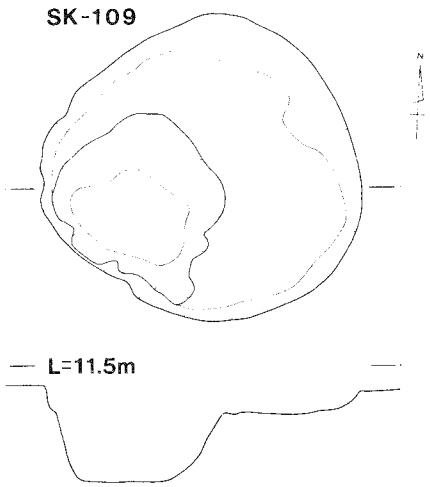


第105号土壙土層解説

1K	暗褐色土	(混土貝層)
2	〃	(YP含む)
3K	褐色土	(混貝土層)
4K	純貝層	(白色の灰を含む)
5K	極暗褐色土	(混貝土層)
6	褐色土	よく締まりYP含む)
7	黒褐色土	(YP・ロームブロック含む)

第86図　第97～101・103～105・110号土壙

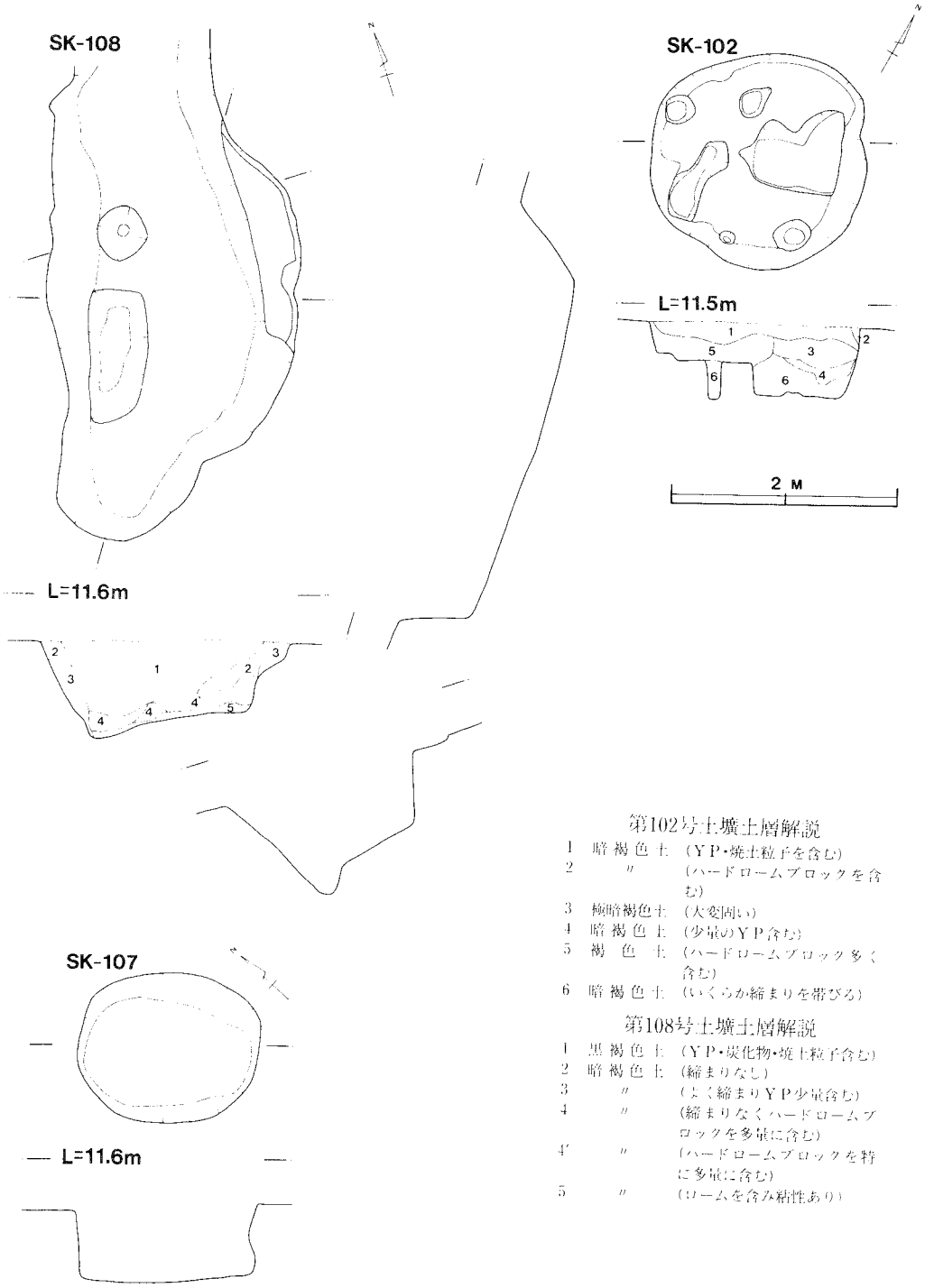




第106号土壙土層解説

1　黒褐色土　(よく締まりハードロームブロックを含む)
2　〃　(大変固くハードロームブロックを含む)
3　暗褐色土　(大変固く黒色ロームブロック含む)
4　褐色土　(粘性あり，ロームを含む)
5　暗褐色土　(固くＹＰ・炭化物含む)
1′　1より明るい調子になる
3′　3に黒色ハードロームブロックが混入する

第87図　第106・109号土壙



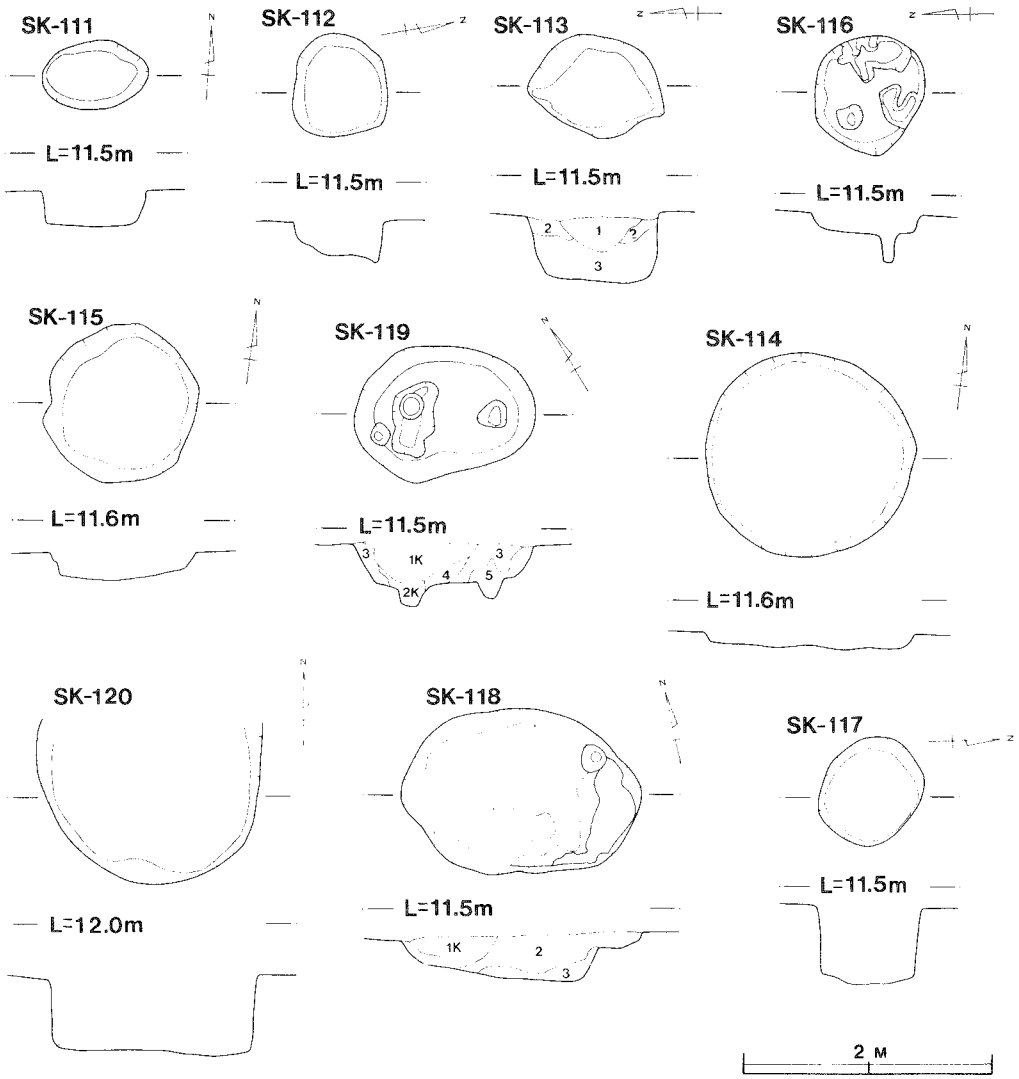
第102号土壙土層解説

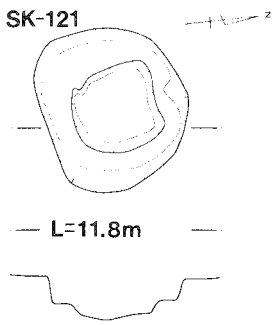
1　暗褐色土　(YP・焼土粒子を含む)
2　〃　(ハードロームブロックを含む)
3　極暗褐色土　(大変固い)
4　暗褐色土　(少量のYP含む)
5　褐色土　(ハードロームブロック多く含む)
6　暗褐色土　(いくらか締まりを帯びる)

第108号土壙土層解説

1　黒褐色土　(YP・炭化物・焼土粒子含む)
2　暗褐色土　(締まりなし)
3　〃　(よく締まりYP少量含む)
4　〃　(締まりなくハードロームブロックを多量に含む)
4'　〃　(ハードロームブロックを特に多量に含む)
5　〃　(ロームを含み粘性あり)

第88図　第102・107・108号土壙





第113号土壙土層解説

1　黒褐色土　(固く締まりＹＰを多く含む)
2　暗褐色土　(ＹＰを含む)
3　黒褐色土　(固く締まり黒色ハードローム ブロックを含む)

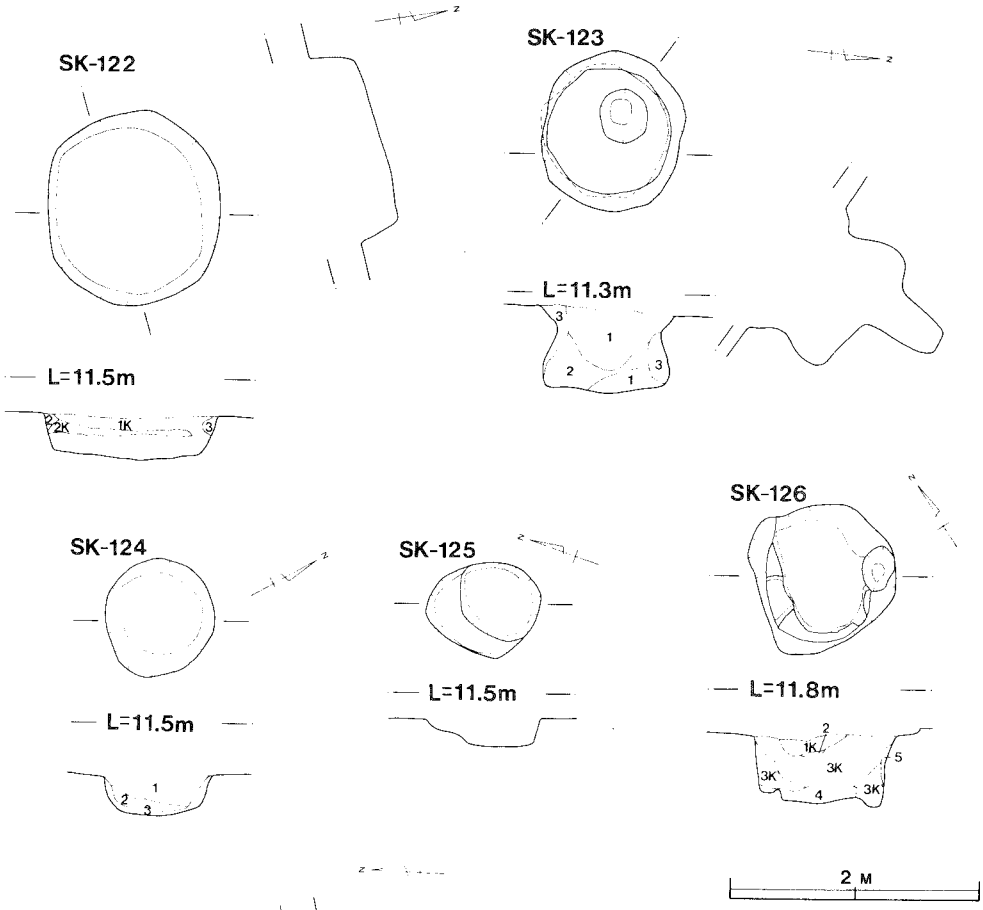
第118号土壙土層解説

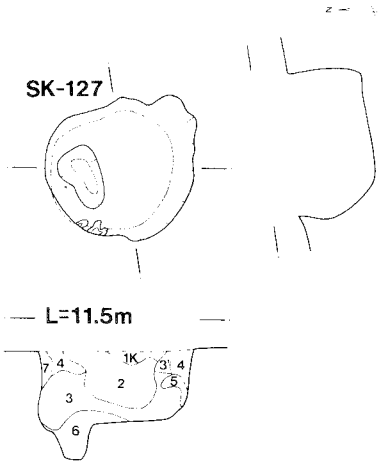
1K　黒褐色土　(混貝土層)
2　〃　(固く締まりＹＰ含む)
3　〃　(ＹＰを少量含む)

第119号土壙土層解説

1K　黒褐色土　(混貝土層)
2K　〃　(　〃　)
3　〃　(ロームブロックを含む)
4　〃　(締まりなくＹＰ含む)
5　暗褐色土　(粘性あり)

第89図　第111～121号土壙





第122号土壙土層解説

1K 純貝層
2 褐色土 (ロームブロック混入)
2K 混土貝層
3 暗褐色土 (ハードロームブロック含む)

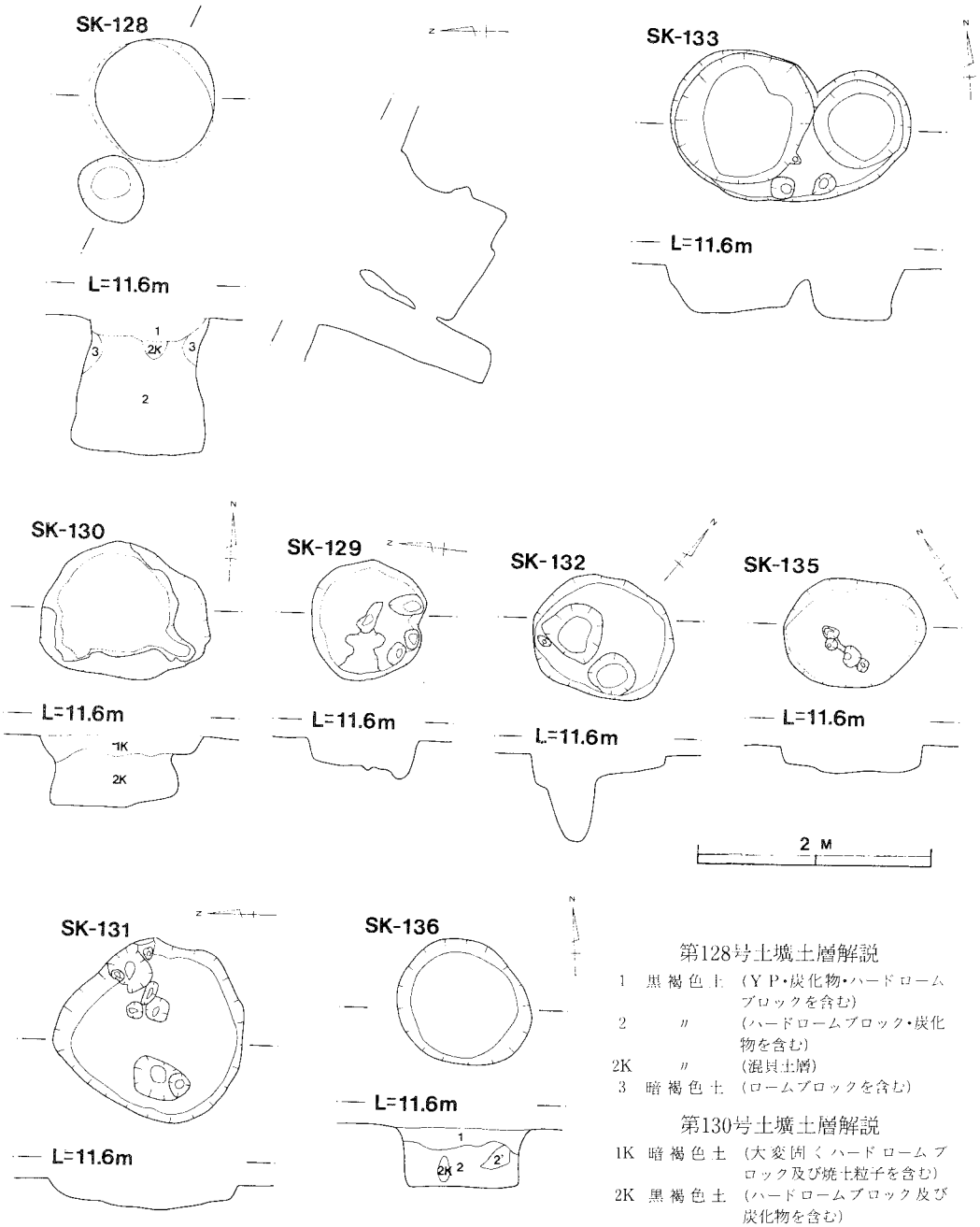
第123号土壙土層解説

1 混土貝層 (炭化物・YPを含む)
2 黒褐色土 (混貝土層)
3 〃 (よく締まりハードロームブロック及びYPを含む)

第124号土壙土層解説

1 黒褐色土 (締まりなくハードロームブロックを多く含む)
2 〃 (締まり弱くハードロームブロックを多く含む)
3 暗褐色土 (よく締まりローム・ハードロームブロックを含む)

第90図 第122～127号土壙



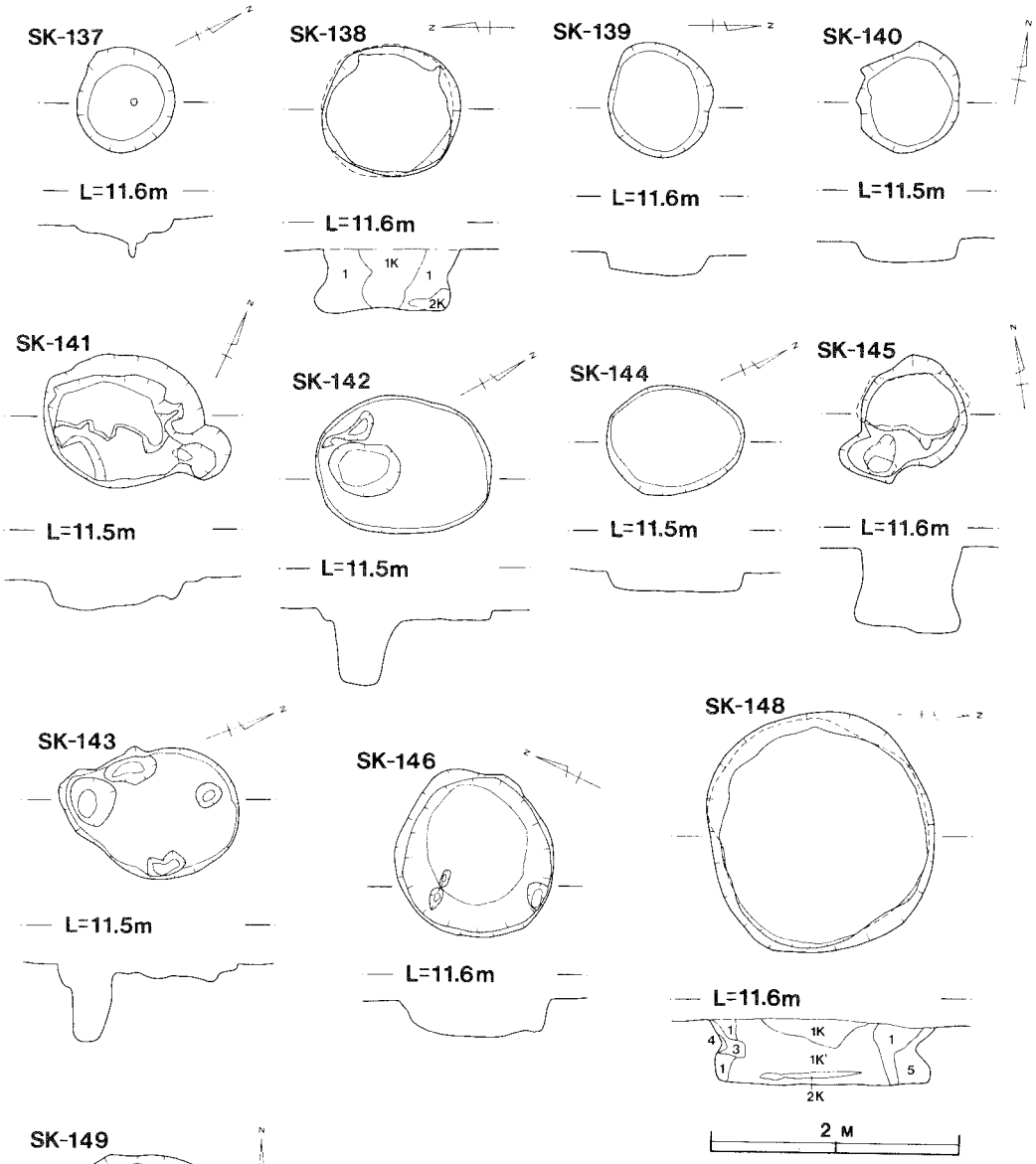
第128号土壙土層解説

1　黒褐色土　(ＹＰ・炭化物・ハードロームブロックを含む)
2　〃　(ハードロームブロック・炭化物を含む)
2K　〃　(混貝土層)
3　暗褐色土　(ロームブロックを含む)

第130号土壙土層解説

1K　暗褐色土　(大変固くハードロームブロック及び焼土粒子を含む)
2K　黒褐色土　(ハードロームブロック及び炭化物を含む)

第91図　第128～133・135・136号土壙



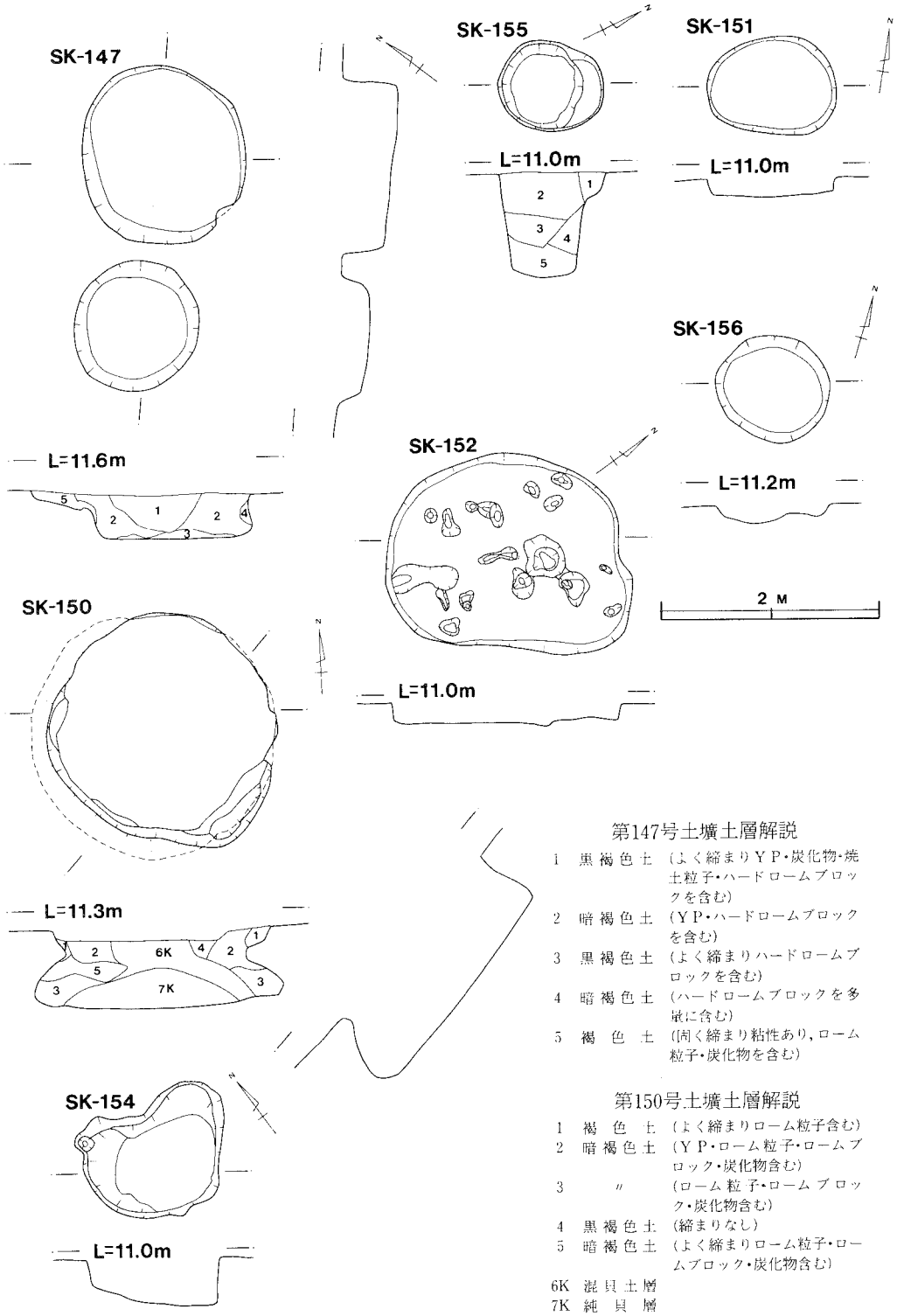
第138号土壙土層解説

1K 黒褐色土 (混貝土層)
1 〃 (固く締まり，ハードロームブロックを含む)
2K 純貝層

第148号土壙土層解説

1 黒褐色土 (ハードロームブロック・炭化物を多く含む)
1K 〃 (混貝土層)
1K' 黒色土 (締まり弱くハードロームブロック・炭化物を含む，混貝土層)
2K 〃 (混土貝層)
3 黒褐色土 (よく締まりローム粒子を含む)
4 褐色土 (ハードロームブロック)
5 黒褐色土 (よく締まりハードロームブロックを含む)

第92図　第137～146・148・149号土壙



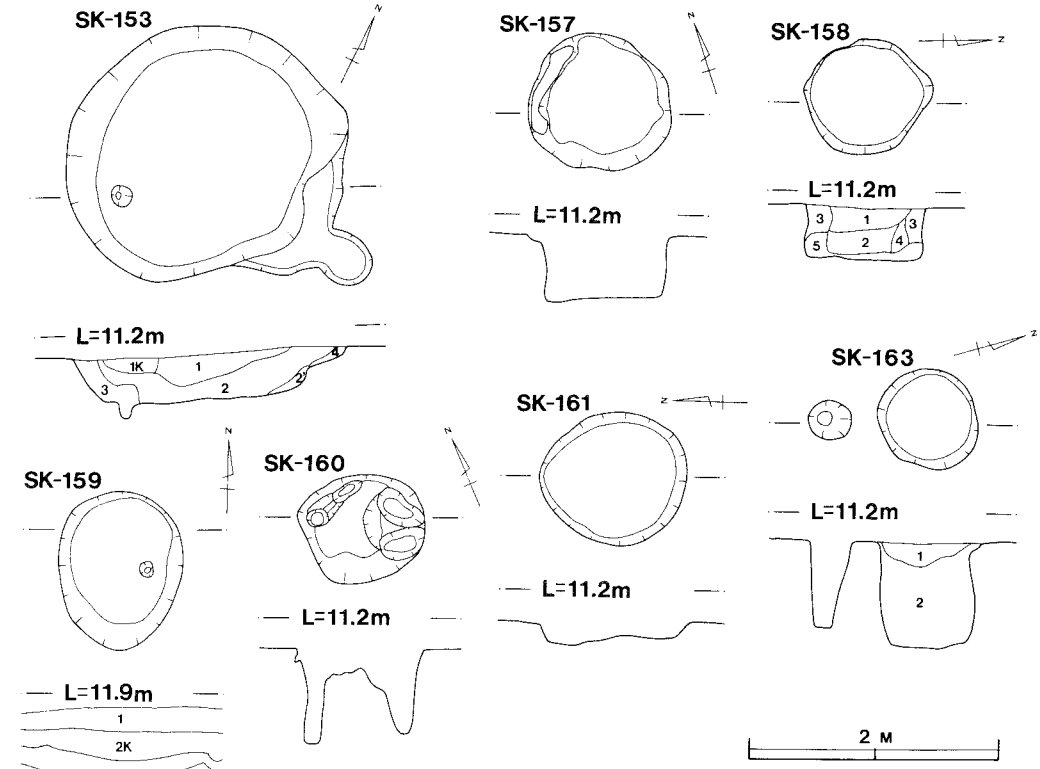
第147号土壙土層解説

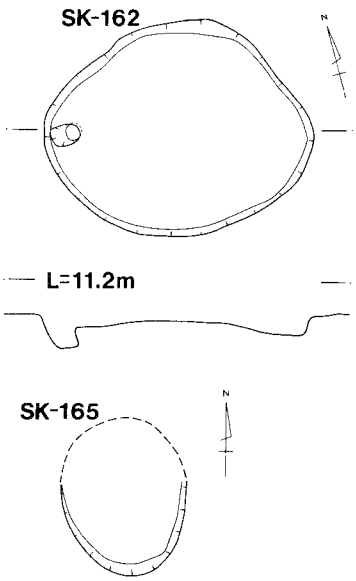
1　黒褐色土　(よく締まりＹＰ・炭化物・焼土粒子・ハードロームブロックを含む)
2　暗褐色土　(ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
3　黒褐色土　(よく締まりハードロームブロックを含む)
4　暗褐色土　(ハードロームブロックを多量に含む)
5　褐　色　土　(固く締まり粘性あり，ローム粒子・炭化物を含む)

第150号土壙土層解説

1　褐　色　土　(よく締まりローム粒子含む)
2　暗褐色土　(ＹＰ・ローム粒子・ロームブロック・炭化物含む)
3　〃　(ローム粒子・ロームブロック・炭化物含む)
4　黒褐色土　(締まりなし)
5　暗褐色土　(よく締まりローム粒子・ロームブロック・炭化物含む)
6K　混貝土層
7K　純　貝　層

第93図　第147・150・151・152・154・155・156号土壙





第153号土壙土層解説

1	明黒色土	(ローム粒子・炭化物を含む)
1K	〃	(混貝土層)
2	黒褐色土	(締まり弱く炭化物・ローム粒子・ハードロームブロックを含む)
3	暗褐色土	(よく締まり炭化物・ローム粒子を含む)
4	黒褐色土	(ハードロームブロックを含む)
2′	〃	(炭化物・ローム粒子を含む)

第158号土壙土層解説

1	極暗褐色土	(よく締まりＹＰ・ローム粒子を含む)
2	〃	(ローム粒子・炭化物・石を含む)
3	暗褐色土	(よく締まりローム粒子・ロームブロックを含む)
4	〃	(ローム粒子を含む)
5	〃	(ローム粒子を含む)

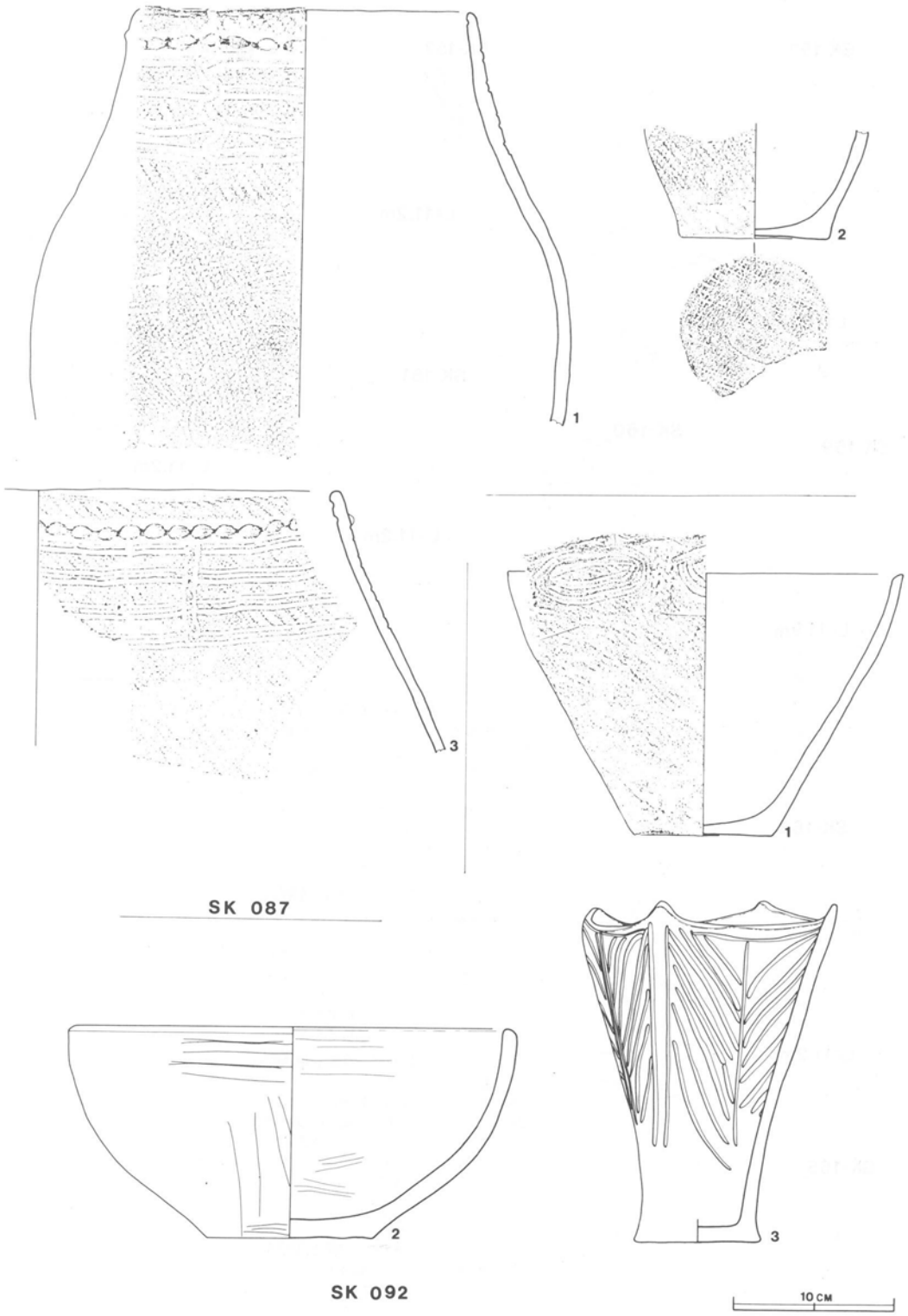
第159号土壙土層解説

1	表土	
2K	黒色土	(混土貝層)
2K′	〃	(混貝土層,炭化物を含む)
3	黒褐色土	(ローム粒子を含む)
4	〃	(締まりなくハードロームブロックを含む)
5	暗褐色土	(締まりなくハードロームブロックを含む)

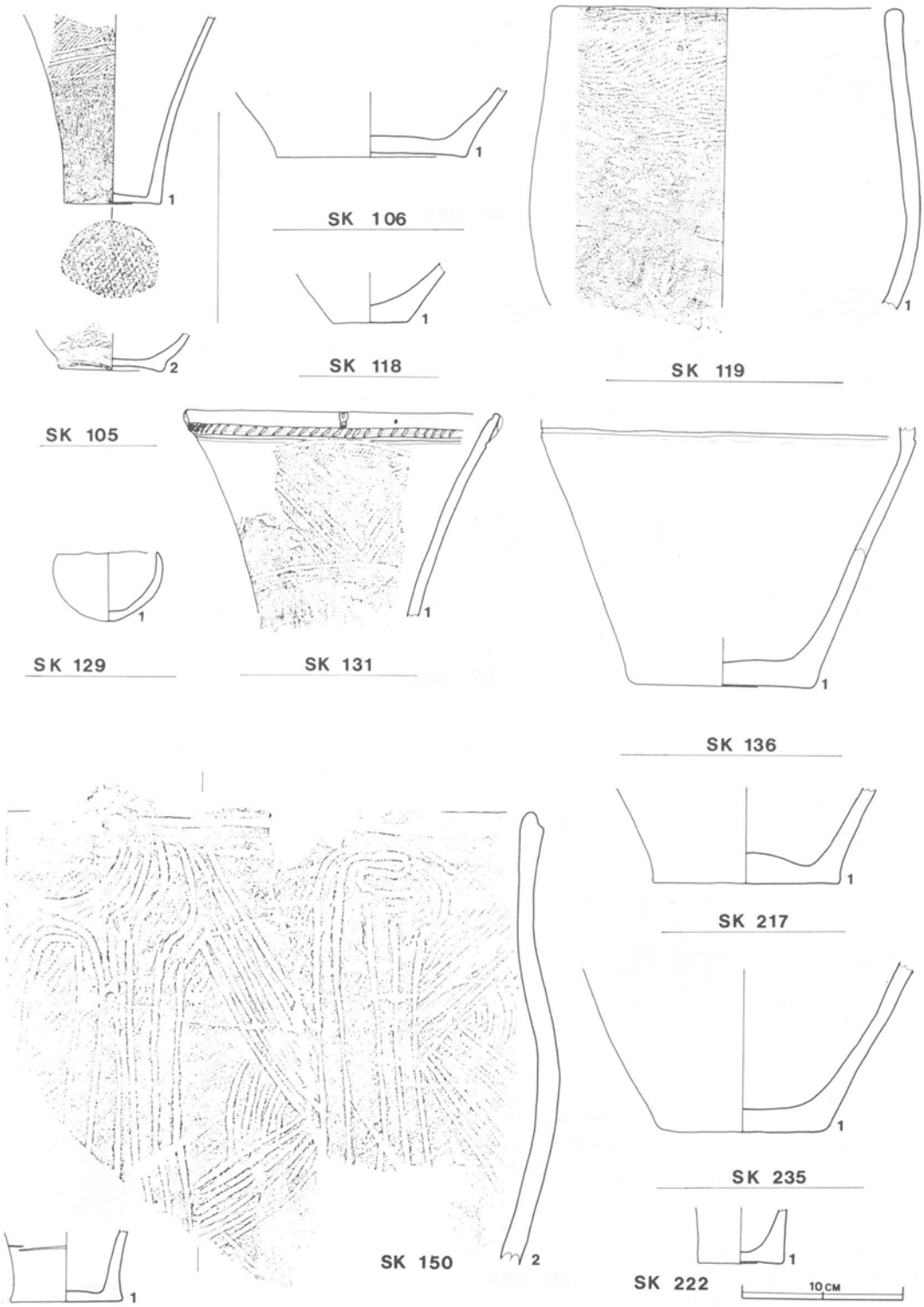
第163号土壙土層解説

1	黒褐色土	(よく締まりハードロームブロック・炭化物を含む)
2	〃	(ハードロームブロックを含む)

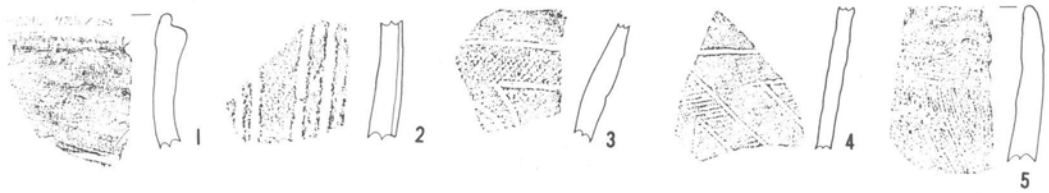
第94図　第153・157～163・165号土壙



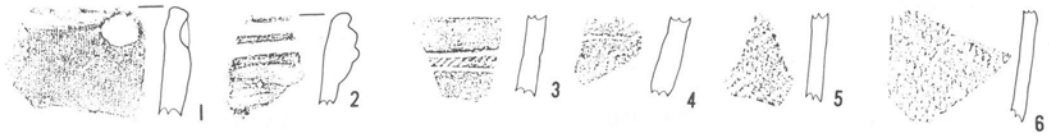
第95図　土壙出土遺物


SK 105
SK 106
SK 118
SK 119
SK 129
SK 131
SK 136
SK 217
SK 235
SK 150
SK 222
10CM

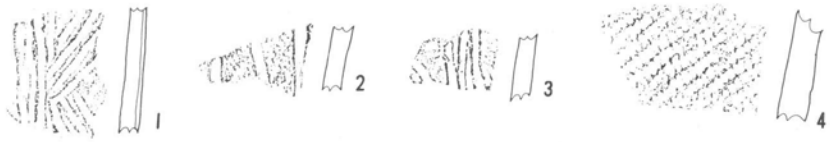
第96図　土壙出土遺物



SK 080

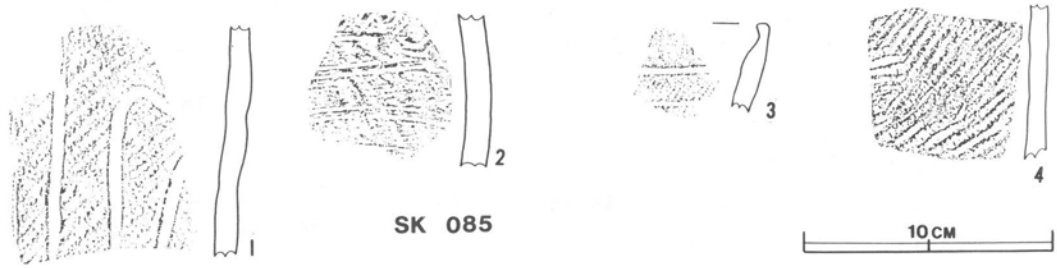


SK 081



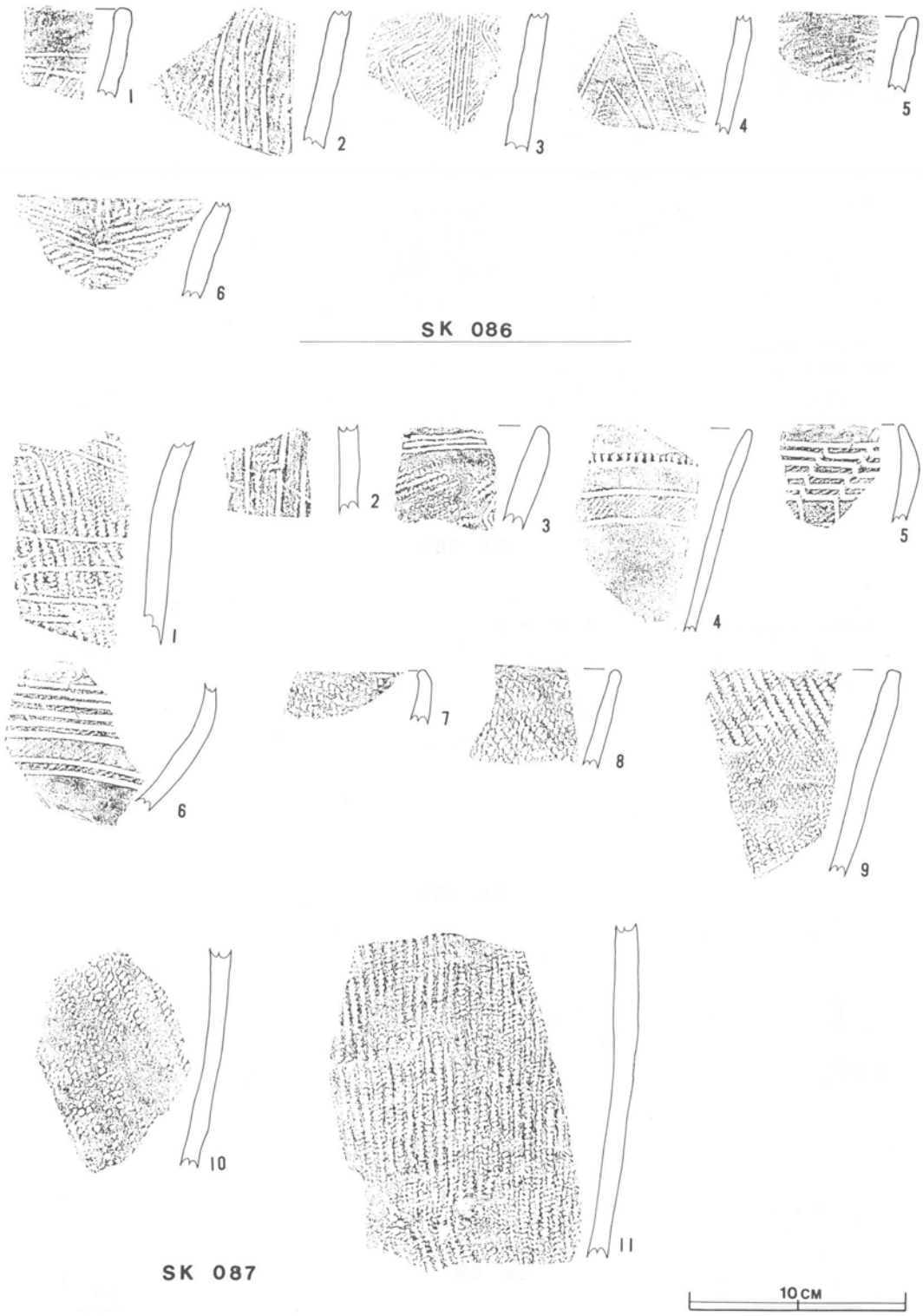
SK 082

SK 083



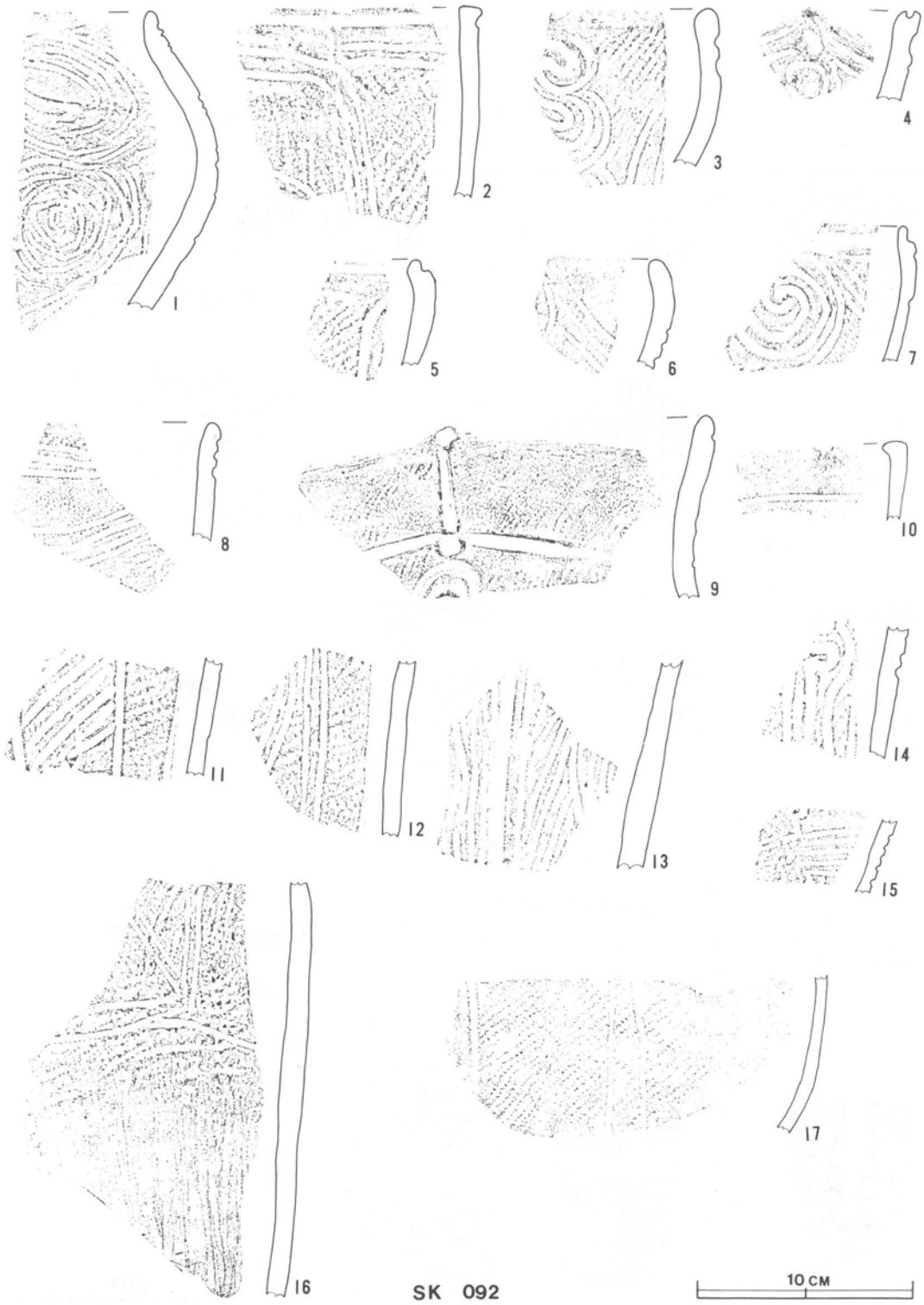
SK 085

第97図　土壙出土遺物

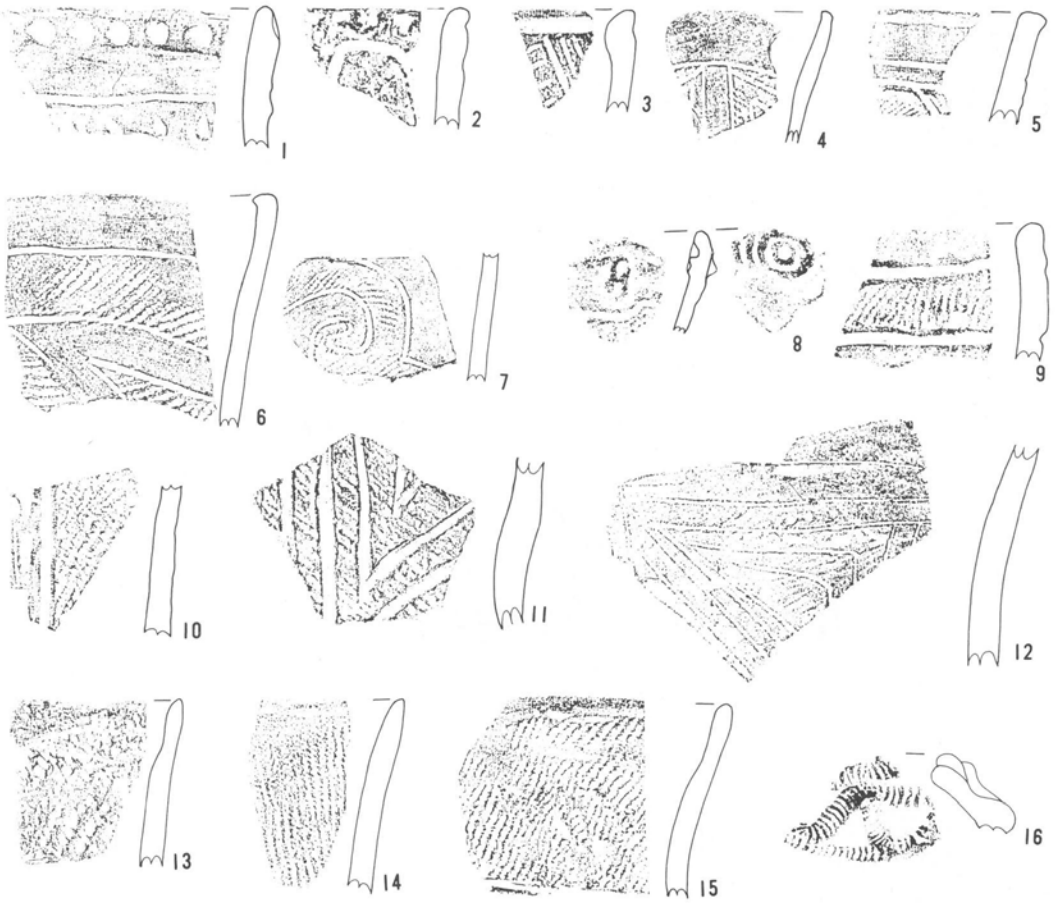


第98図　土壙出土遺物

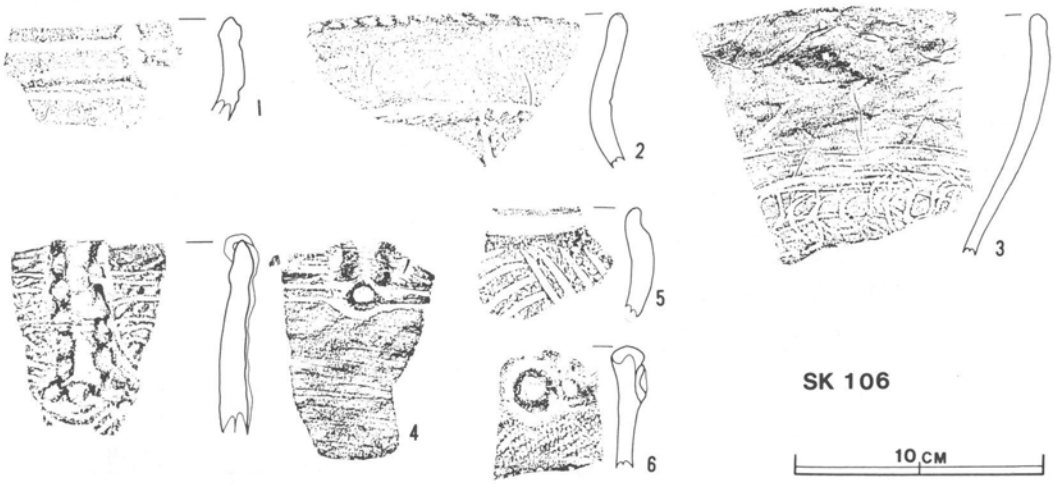
第99図　土壙出土遺物



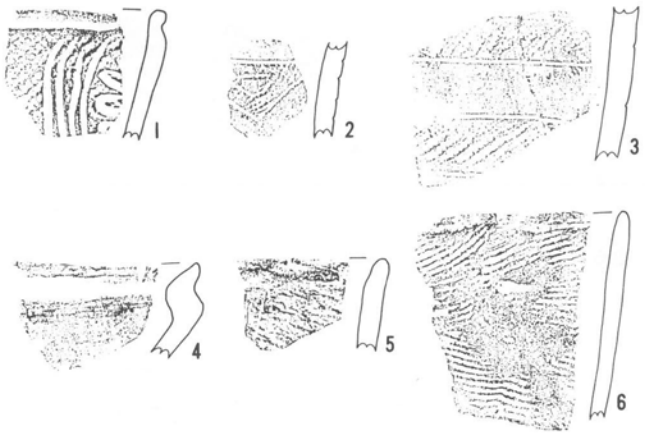
第100図　土壙出土遺物



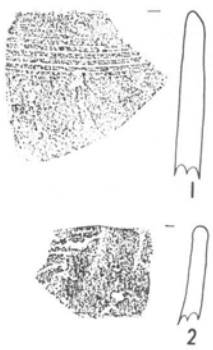
SK 105



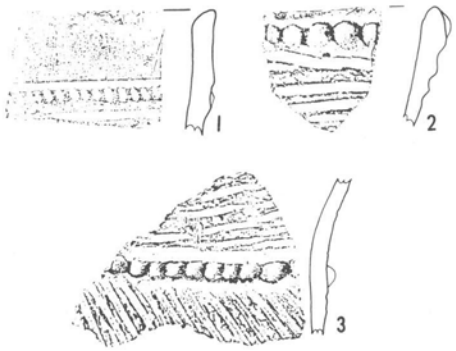
第101図　土壙出土遺物



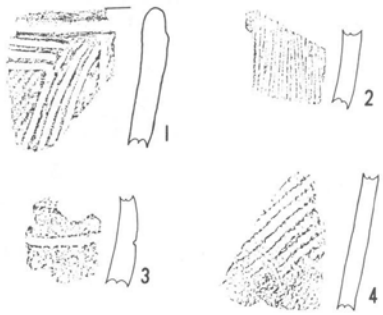
SK 110



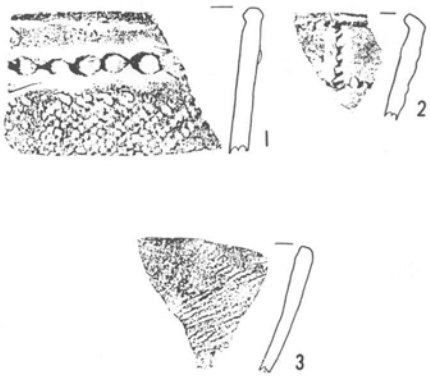
SK 117



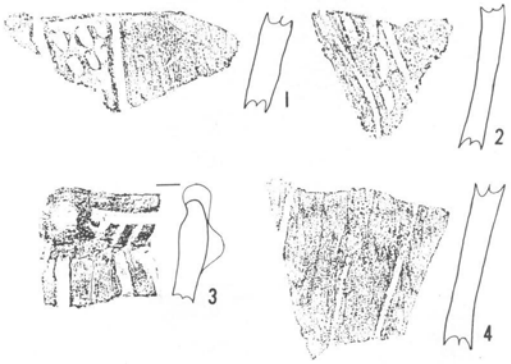
SK 118



SK 119



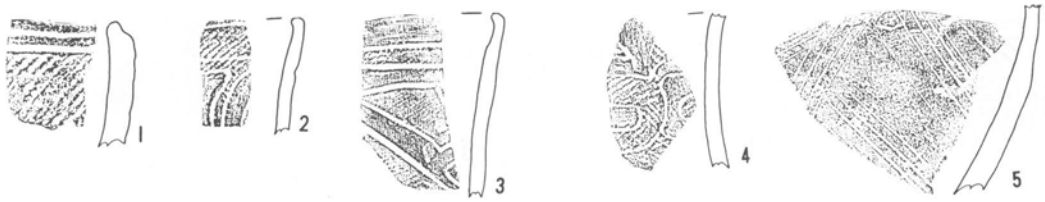
SK 122



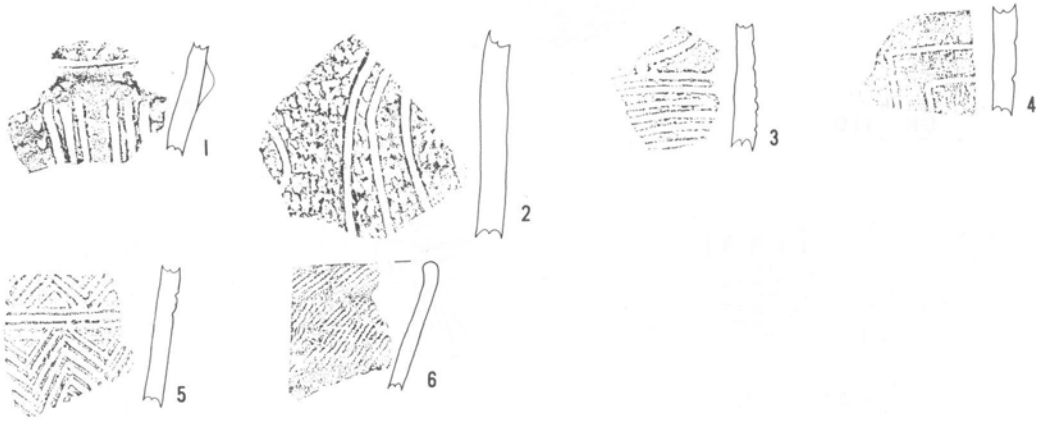
SK 123

10 CM

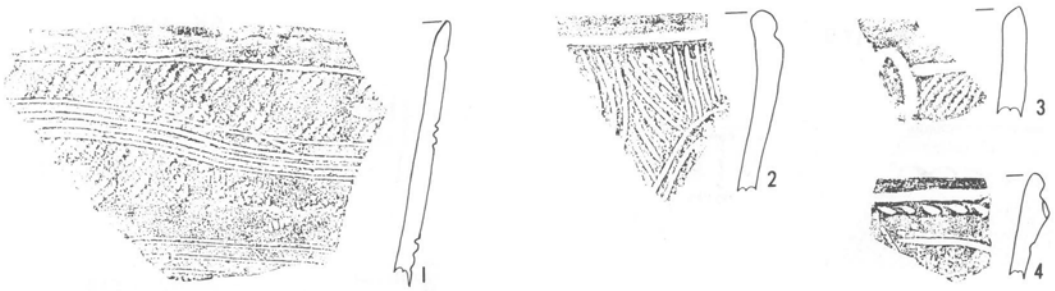
第102図　土壙出土遺物



SK 126



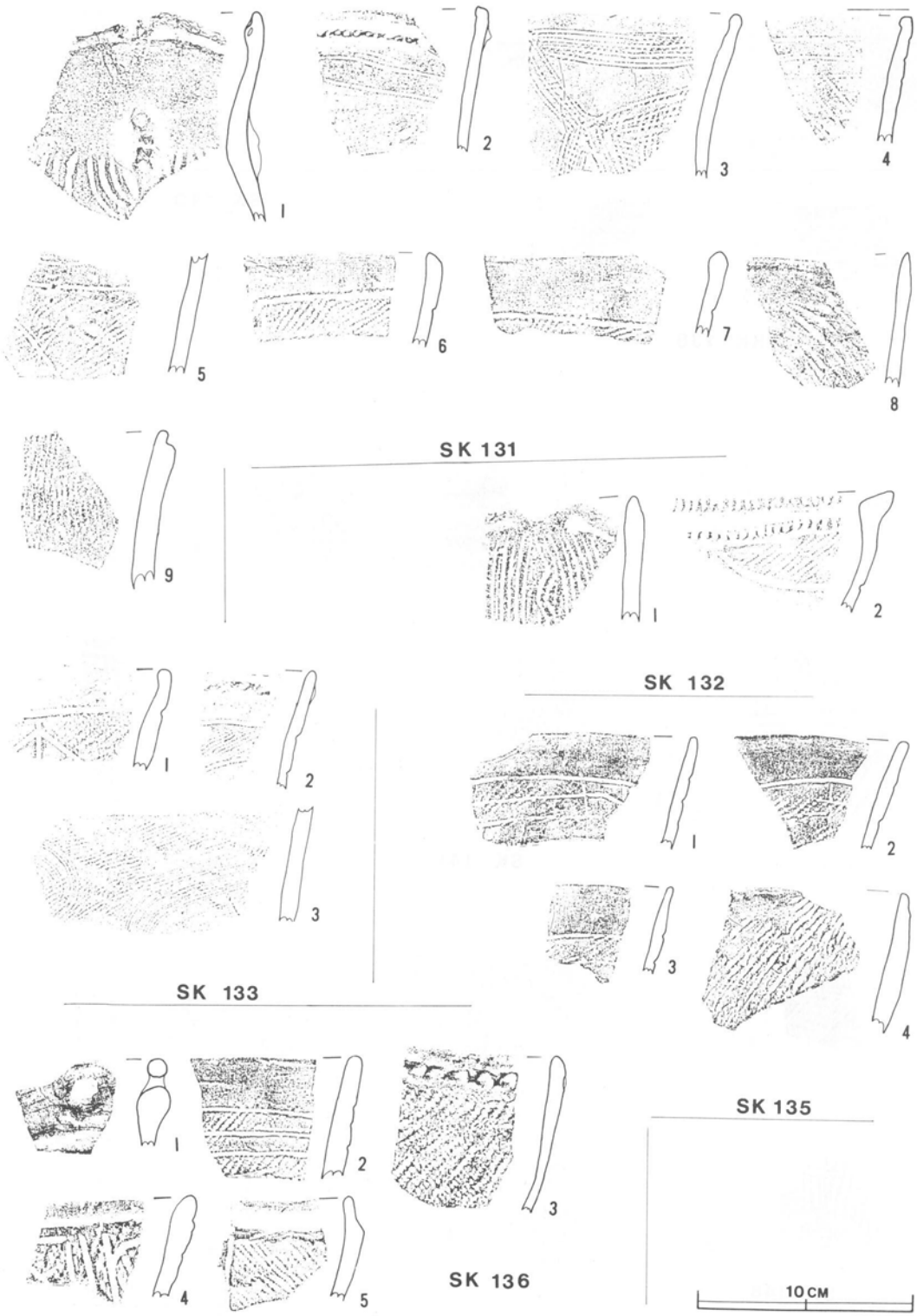
SK 127



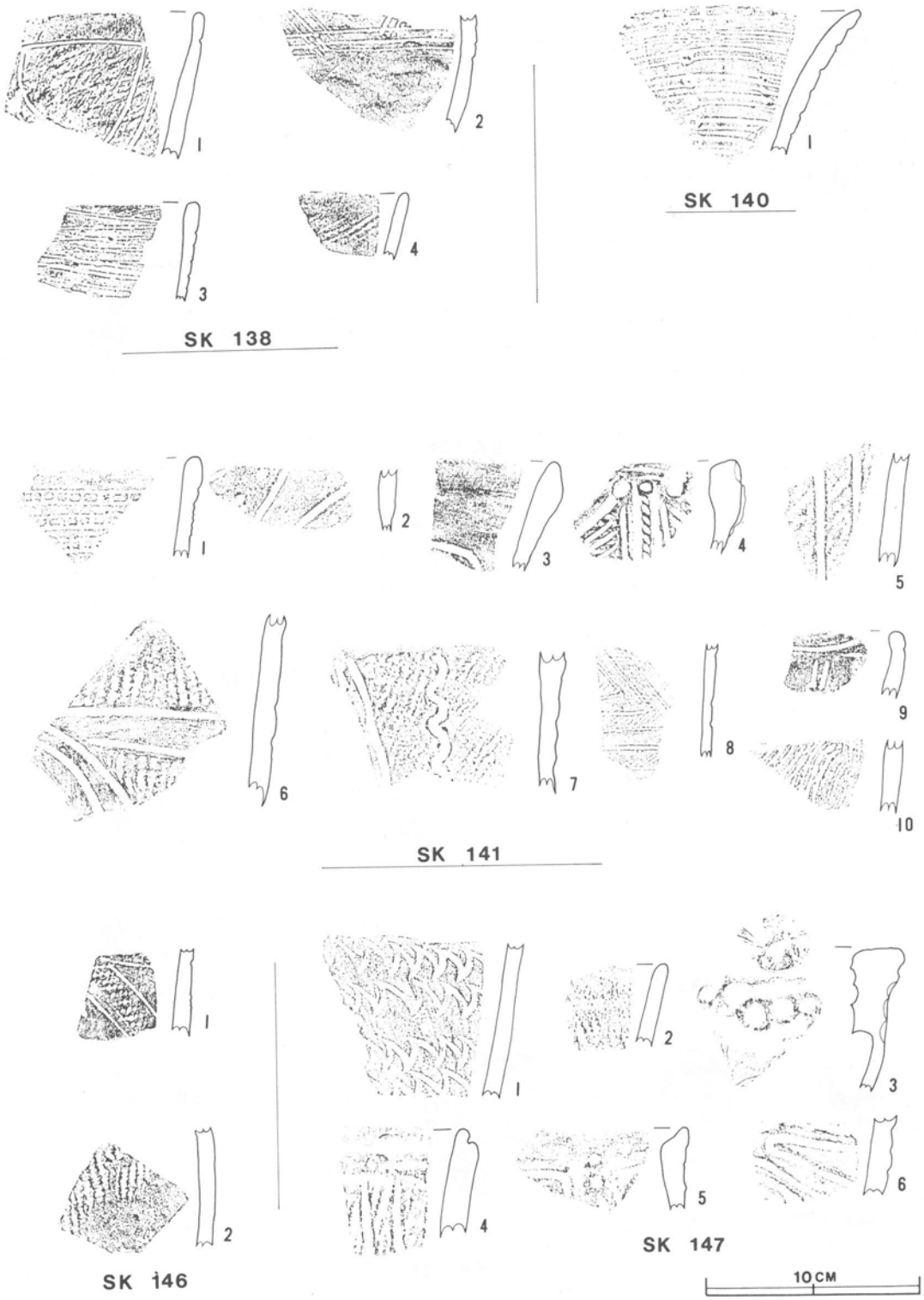
SK 130

10CM

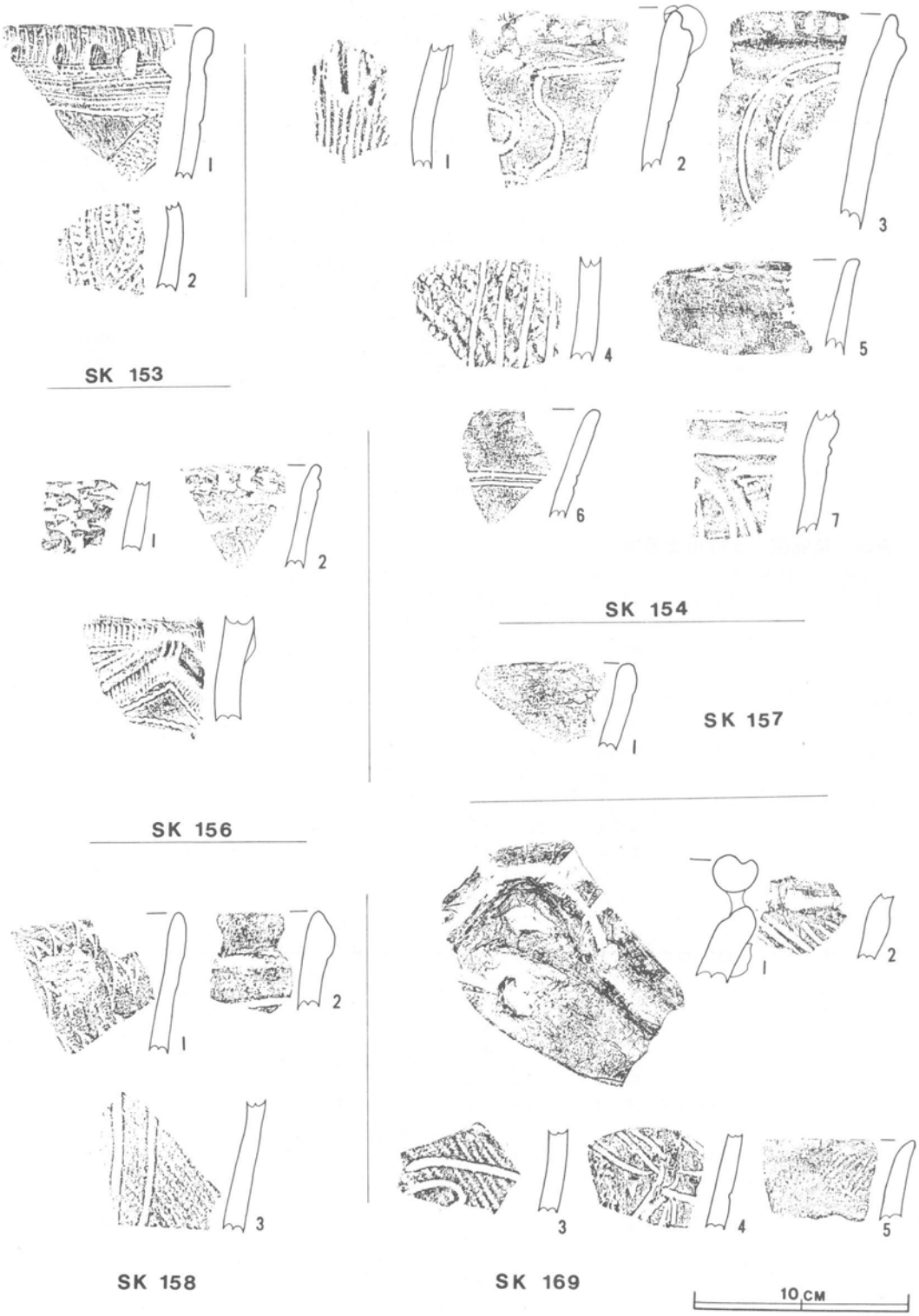
第103図　土壙出土遺物



第104図　土壙出土遺物



第105図　土壙出土遺物



第106図　土壙出土遺物

表43　第95図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－087	1	甕形	口径 20.5 現存高 25.2	口縁部に粘土紐を貼り付け，指頭による刺突を施す。半截竹管文を施す。内面はヘラ磨き	胎土にスコリア・砂粒を含む。上半は明赤褐色，下半は黒褐色，内面は灰黄褐色を呈する
	2	深鉢底部	現存高 6.5 底径 9.3	体部は粗い縄文のみ。内部はヘラ磨き，底部に網代痕	胎土に砂礫・スコリアを含有する。暗褐色を呈する
	3	甕形	口径 18.4 現存高 16	口縁部に粘土紐を貼付，指頭による刺突を施す。半截竹管による平行沈線・縦の爪形文を配する。内面に2条の沈線	橙色を呈する
SK－092	1	鉢形	口径 24.0 器高 16 底径 8.4	口縁部に，半截竹管による二重の横長の楕円文を配し，中間に縦2列の刺突文を施す。地文は粗い縄文	胎土にスコリア・砂粒を含む。焼成は普通。灰褐色を呈する
	2	鉢形	口径 27 器高 12.6 底径 15	内・外面ともヘラ磨き	黒褐色を呈する
	3	深鉢形	口径 14.9 器高 20.8 底径 7.7	口縁に4ヶ所の突起を有し，突起下に2条の沈線。中間に1条の沈線を懸垂し，各々の間を羽状を呈する沈線で充填する	胴部上半は黒褐色，下半はにぶい橙色を呈する。堀之内Ⅰ式（写33－1）

表44　第96図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－105	1	深鉢底部	現存高 11.6 底径 6.0	幾何学形磨消縄文を有する。外面胴部下半、内面はヘラ磨き，底部に網化圧痕	黒褐色を呈する，堀之内Ⅱ式
	2	鉢形底部	現存高 2.2 底径 6.4	沈線施文後に縄文を施す。底部近くはヘラ削り，内面はヘラ磨き	黒色を呈する
SK－106	1	鉢形底部	現存高 3.7 底径 11.8	外面・底部……ヘラ削り 内面……ヘラ磨き	灰褐色を呈する
SK－118	1	鉢形底部	現存高 3.0 底径 4.6	外面……ヘラ磨き 内面……ヘラナデ	黒褐色を呈する
SK－119	1	深鉢口縁部	口径 21.2 胴部最大径 24.1 現存高 18.5	頸部に縄文帯，内・外面ヘラナデ，口縁部ヘラ磨き	赤褐色を呈する（写37－1）
SK－129	1	手捏土器	口径 6.2 現存高 4.2	外面……指おさえの後ナデ 内面……ヘラ削り 口縁部……内・外面横ナデ	褐灰色を呈する（写40－3）
SK－131	1	深鉢口縁部	口径 19.1 現存高 12.6	口縁に8の字形の粘土紐の貼付け，隆帯に刻みを有する。幾何学形の磨消縄文が見られる	暗褐色を呈する。堀之内式
SK－136	1	深鉢底部	現存高 16.4 底径 11.0	外面……ヘラナデ 底部・内面……ヘラ削り 横走する沈線を有する	橙色を呈する
SK－150	1	小型深鉢底部	現存高 4.3 底径 6.8	外面・底部……ヘラ削り 内面……ヘラ磨き 横走する沈線を有する	にぶい褐色を呈する
	2	深鉢口縁部	口径 40.6 胴部最大径 44.2 現存高 27.8	直線的な沈線文を充填する。地文は縄文	スコリア・砂粒を含み焼成は良好，黒褐色を呈す
SK－217	1	深鉢底部	現存高 5.9 底径 11.6	全面ヘラ削り	明赤褐色を呈する
SK－222	1	小型深鉢底部	現存高 3.4 底径 5.3	外面……ヘラ磨き 内面・底部……ヘラ削り	黒褐色を呈する
SK－235	1	深鉢底部	現存高 10.2 底径 10.4	外面……ヘラ磨き 内面……ナデ，胴部に炭化付着	橙色と一部黒褐色を呈する

表45　第97図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－080	1	口縁部		口唇部に沈線。ヘラ整形	
	2	胴部		縦位の平行沈線	
	3	〃		沈線で区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	4	〃		沈線で区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	5	口縁部		ヘラ整形後に沈線	
SK－081	1	口縁部		大きな刺突から左右方向に沈線をのばす	
	2	〃		口縁に平行な数条の沈線をめぐらす	
	3	胴部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	4	〃		横位の沈線	
	5	〃		縄文のみ	
	6	〃		縄文のみ	
SK－082	1	胴部		縦位・斜位の沈線を施文する	
	2	〃		縦位の沈線。地文は縄文	
	3	〃		斜位の沈線。地文は縄文	
	4	〃		縄文のみ	
SK－083	1	胴部		縦位の沈線文	
	2	〃		沈線を曲線状に施す	
	3	口縁部		細い紐線を付し，横位の沈線を引く	
	4	〃		紐線を付し，横位の平行沈線を施文する	
	5	胴部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	6	口縁部		口縁に平行な太い沈線	
	7	胴部		縄文のみ	
SK 085	1	胴部		太い沈線で文様を描く。地文は縄文	
	2	〃		縄文	
	3	口縁部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	4	胴部		縄文のみ	

表46　第98図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—086	1	口縁部		縦位・斜位の沈線文	堀之内式
	2	胴部		縦位の沈線文	〃
	3	〃		縦位及び屈曲する平行沈線を施す	〃
	4	〃		沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充塡する	〃
	5	口縁部		縄文のみ	
	6	胴部		縄文のみ	
SK—087	1	胴部		横位及び弧状の沈線を施す。地文は縄文	
	2	〃		縦位の沈線で区画し，中は磨消しと縄文	
	3	口縁部		口縁に平行な沈線。地文は縄文	
	4	〃		口縁部に紐線を付し，沈線で区画された縄文帯をもつ	
	5	〃		6本以上の平行沈線文で縦位沈線を階段状に施す。沈線間は縄文	加曽利B式
	6	胴部		鉢形土器で，8本の平行沈線文である。沈線間は縄文	
	7	口縁部		縄文	
	8	〃		縄文	
	9	〃		縄文。RL	
	10	胴部		縄文	
	11	〃		縄文	

表47　第99図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－088	1	胴部		曲線状の沈線文	
	2	口縁部		斜行沈線	
	3	胴部		沈線で区画された中に縄文を充填する	
	4・	〃		縦位・斜位の沈線文	
	5	口縁部		口縁部に紐線文を付し，1本の沈線が横走する	
	6	〃		紐線を付し，縦位の沈線を施す	
	7	〃		沈線で区画された縄文帯	
	8	〃		縄文のみ	
	9	〃		No.8 と同一個体	
	10	〃		縄文のみ	
	11	〃		縄文。口唇部はナデ整形	
	12	胴部		縄文	
SK－089	1	口縁部		口唇部に段差あり。ヘラ整形	
	2	〃		紐線を貼り付ける。縄文	
	3	〃		縄文のみ	
	4	胴部		縄文のみ	
	5	〃		縄文のみ	
SK－091	1	胴部		円形の小突起から上・左右に隆帯がのびる。上方向だけ刺突が加わる	
	2	〃		沈線で文様を区画し内部は斜沈線で埋める	
	3	〃		No.2 と同一個体	
	4	口縁部		口縁に平行な沈線を有する	
	5	胴部		縄文のみ	

表48　第100図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—092	1	口縁部		口縁部はくの字状に内彎し，沈線で渦文を施す	堀之内式
	2	〃		沈線文。地文は縄文	〃
	3	〃		口縁部は内彎し，沈線による曲線文を施文する	〃
	4	〃		波状口縁を呈し，刺突文から沈線がのびる	〃
	5	〃		口縁部は内彎し，沈線を施す。地文は縄文	〃
	6	〃		内彎する口縁で，沈線文を主体とする	〃
	7	〃		沈線で渦巻文を施す。地文は縄文	〃
	8	〃		横位の沈線を主に施文する。地文は縄文	〃
	9	〃		ゆるやかな波状口縁を呈し，刺突間を縦の沈線で結ぶ。下側の刺突から左右に沈線がのびる。地文は縄文	〃
	10	〃		口唇部が内側に突出し，口縁に平行な沈線が横走する	〃
	11	胴部		縦位の沈線間を斜沈線で埋める。地文は縄文	〃
	12	〃		縦位の沈線文を主体とする。地文は縄文	〃
	13	〃		縦位・斜位の沈線文	〃
	14	〃		蛇行沈線文	〃
	15	〃		S字状沈線が下降し，左右斜沈線を配する	〃
	16	〃		沈線で文様を区画する。胴下半部は縦方向のヘラ整形	〃
	17	〃		2本で1単位の沈線を縦方向に施す。地文は縄文	〃

表49　第101図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－105	1	口縁部		口縁に沿って円形刺突文が並ぶ。沈線及び刺突文	
	2	〃		口縁に沿って刺突。胴部にかけては沈線	
	3	〃		口縁に平行な沈線を有し，斜沈線を施す	
	4	〃		直線的な沈線で区画し，中を縄文で充塡する	
	5	〃		口縁に平行な沈線を3本配し，下部は縄文と沈線	
	6	〃		沈線で幾何学的な文様を区画し，中は縄文を埋める。外は磨消し	
	7	胴部		曲線状の沈線で文様を区画し，内部に縄文を充塡する	
	8	口縁部		小波状口縁で，8の字状の貼付文，内側は沈線による円文を描く	
	9	〃		2本の沈線間に縄文を充塡する	
	10	胴部		縦位の沈線間に刺突を施す。地文は縄文	
	11	〃		直線的な沈線文。地文は縄文	
	12	〃		沈線で幾何学的な文様を区画する。内外を縄文で埋める	
	13	口縁部		縄文	
	14	〃		口縁部に浅い沈線を有す。縄文	
	15	〃		外反して立ち上がる。縄文	
	16	〃		鉢形土器の口縁部で，隆帯に刺突が加わる	
SK－106	1	口縁部		横位の沈線文	
	2	〃		口唇部に刺突を有する。胴部は沈線と刺突	
	3	〃		口縁部は内彎し，横位の沈線により胴部と区画される。曲線文を主にする	
	4	〃		紐線を縦に2本貼り付け，周囲を沈線で埋める。内側にも紐線がのび，横位の沈線を施す	
	5	〃		口縁部に太い沈線。斜沈線を施文する。地文は縄文	
	6	〃		円形の貼付文を施す。縄文	

表50　第102図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－110	1	口縁部		口縁に平行な沈線。縦位及び蛇行沈線を配す	
	2	胴部		沈線で文様を区画し，中に縄文を充填する	
	3	〃		沈線で区画された縄文帯	
	4	口縁部		口縁部がくの字状に屈曲し，太い沈線を有する	
	5	〃		縄文	
	6	〃		縄文	
SK－117	1	口縁部		多くの沈線が横位に施文される	
	2	〃		縄文	
SK－118	1	口縁部		２本の沈線の間に刺突文が並ぶ	
	2	〃		口縁部に紐線を付し，横位の沈線を施す	
	3	胴部		くびれ部に紐線を付し，上下とも荒い沈線を施す	
SK－119	1	口縁部		口縁に平行な沈線を有し，胴部にかけて沈線を施文する	
	2	胴部		条線文	
	3	〃		横位の沈線。地文は縄文。	
	4	〃		縄文	
SK－122	1	口縁部		口縁部に紐線を付す。縄文	
	2	〃		隆線を工字状に貼り付け，上に刺突を加える	
	3	〃		縄文	
SK－123	1	胴部		２本の沈線間に米粒状の刺突文を配する。ヘラ整形	
	2	〃		２本の沈線間に米粒状の刺突文を配する	
	3	口縁部		円形刺突から横位・縦位の沈線をのばす	
	4	胴部		ヘラ整形後斜位の沈線を施す	

表51　第103図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物№	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−126	1	口縁部		口縁部に平行な2本の沈線を有する。縄文	
	2	〃		沈線で区画された中に縄文を充填する	
	3	〃		沈線で直線的な文様を区画し，中に縄文を充填する	
	4	胴部		沈線で区画された文様の中に縄文を充填する	
	5	〃		斜位の平行沈線	
SK−127	1	胴部		沈線及び刺突文	
	2	〃		弧状の沈線。地文は縄文	
	3	〃		沈線文	
	4	〃		沈線で区画し，縄文を充填する	
	5	〃		横位の平行沈線の上下に山形の平行沈線を配する	
	6	口縁部		縄文のみ	
SK−130	1	口縁部		数条の平行沈線を横位に施文する。地文は縄文	
	2	〃		口縁部に平行な沈線を有し，斜沈線を施文する	
	3	〃		太い沈線を施す。地文は縄文	
	4	〃		口縁に平行な沈線及び刺突をもつ隆線をもつ	
	5	〃		口縁に平行な2本の沈線をもつ	
	6	〃		まばらな縄文	

表52　第104図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−131	1	口縁部		8の字状の貼付文を有し，半円形の沈線を施文する	堀之内式
	2	〃		細い紐線を付し，数条の沈線を横位につける	〃
	3	〃		口縁は外反し，平行沈線で文様を区画し，上に縄文を施す	
	4	〃		横位→斜位の順に沈線を施す	
	5	胴部		沈線文。地文は縄文	
	6	口縁部		沈線で区画された内部に縄文を充填する	
	7	〃		No.6 と同一個体であろう	
	8	〃		細い沈線をまばらに施文する	
	9	〃		口唇部に段差を有し，ゆるく外反する。縄文	
SK−132	1	口縁部		口縁に平行な沈線を有し，縦位の沈線を充填する	
	2	〃		口縁に平行な沈線を2本施し，その間に刺突を加える	
SK−133	1	口縁部		沈線で区画した中に縄文を充填する	
	2	〃		口縁部に平行な紐線を付し，沈線で区画された縄文帯をもつ	
	3	胴部		細い沈線を弧状に施す。地文は縄文	
SK−135	1	口縁部		口縁に平行な数条の沈線を施文し，中は縄文を充填する。部分的に縦位の沈線を加える	
	2	〃		沈線で区画された中に縄文を充填する。縦位の沈線もみられる	
	3	〃		No.2 と同一個体か	
	4	〃		縄文のみ	
SK−136	1	口縁部		波状口縁の突起部で貫通孔を有する	
	2	〃		平行沈線で区画された中に縄文を充填する。外は磨消し	
	3	〃		口縁部に紐線を付す。縄文	
	4	〃		直線及び曲線の沈線で区画する	
	5	〃		口唇部が大きく削られ，縦位の沈線を施す。地文は縄文	

表53　第105図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−138	1	口縁部		口縁に平行な沈線から下部に伸びる弧状の沈線が施文される	
	2	胴部		斜沈線のあと，横位の沈線が施される。	
	3	口縁部		斜位の沈線を施文する	
	4	〃		縄文	
SK−140	1	口縁部		横位の平行沈線を施文後，円形の竹管文を刺突する	
SK−141	1	口縁部		平行沈線を3段に施文し，間を縦の沈線で区切る	
	2	胴部		2本の沈線間に刺突文を施す	称名寺式
	3	口縁部		ヘラ整形後沈線	
	4	〃		波状口縁の波頂部。3個の刺突文から隆線と沈線が垂下する。隆線には刺突が加わる	堀之内式
	5	胴部		縦位の沈線文。地文は縄文	〃
	6	〃		太目の沈線で区画された内側を磨消す。外は縄文	
	7	〃		縦位の沈線で，直線と蛇行がある	堀之内式
	8	〃		沈線で幾何学的な文様を区画し，中に縄文を充填する	〃
	9	口縁部		沈線文	
	10	胴部		弧状の沈線を充填する	
SK−146	1	胴部		沈線で区画された中に縄文を充填する	堀之内式
	2	〃		底部に近く縄文のみ	
SK−147	1	胴部		鋸歯状の連続貝殻文を施す	浮島式
	2	口縁部		アナダラ属の貝を用いた腹縁文がみられる	〃
	3	〃		波状口縁の突起部で，太い沈線。円形刺突の手法が用いられる	
	4	〃		口唇部に1条の沈線を有し，縦位の沈線を施す。地文は縄文	
	5	〃		沈線間に円形刺突を施文する	
	6	胴部		沈線文	

表54　第106図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−153	1	口縁部		沈線が主で，磨消し手法もみられる	
	2	胴部		平行沈線間をC字状の刺突で埋める	
SK−154	1	胴部		集合沈線に貼付文がみられる	
	2	口縁部		口唇部に刺突が入り，以下は沈線文	
	3	〃		No.2と同1個体であろう	
	4	胴部		縄文地に縦位の沈線	
	5	口縁部		口縁部に弱い沈線が入る	
	6	〃		口縁部に平行な半截竹管による沈線を施文する	
	7	胴部		沈線で平行線か曲線を描き中に刺突か縄文を加える	
SK−156	1	胴部		三角形の陰刻文列をもつ	浮島式
	2	口縁部		口縁部に陰刻文をもつ	〃
	3	胴部		帯状の隆帯に刻みをもつ	
SK−157	1	口縁部		わずかに縄文が残る	
SK−158	1	口縁部		鋸歯状の貝殻腹縁文を施文する	
	2	〃		口縁に平行な沈線2本	
	3	胴部		縦位の沈線。地文は縄文	
SK−169	1	波状口縁		大波状口縁の波頂部で沈線と刺突を施す。中央に貫通孔を有す	
	2	胴部		斜沈線がみられる	
	3	〃		縄文地に沈線文	
	4	〃		沈線文	
	5	口縁部		縄文のみ	

表55 （土壙一覧表 (15)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	分類	実測図・写真
170	C_2j_8	楕 円 形	N—18°—E	1.71 × 約1.4	0.14	SK—193 と重複	A1	図107
174	B_2g_4	円 形	N—0°	1.11 × 1.08	0.09	ピット 2	A1	図108 (写21—6)
175	B_2i_2	不整楕円形	N—21°—W	1.21 × 0.98	0.49		B′	図108
176	B_1e_8	楕 円 形	N—38°—W	0.81 × 0.73	1.5 以上	井戸状を呈す，混貝土層あり	B′	図108
177	B_1d_8	不整楕円形	N—3°—W	1.16 × 0.96	0.8	SI—25 と重複，磨石	B′	図108 (写22—1)
178	B_1d_8	楕 円 形	N—61°—E	1.28 × 1.0	1.5 以上	井戸状を呈す，貝層あり	B′	図108
179	B_1 c_9,c_0 d_9,d_0	円 形	N—75°—W	1.02 × 0.96	1.0 以上	覆土は混貝土層	B′	図108
180	B_1 f_9,f_0 g_9,g_0	楕 円 形	N—4°—E	1.29 × 1.08	1.04	ピット 1，混貝土層あり	C1	図108
181	A_2i_4	／	／	(N—S)2.0 (E—W)1.65	0.49	東側は通路	A1′	図109
182	A_2 i_4 j_4	楕 円 形	N—2°—E	1.07 × 0.68	0.65		A′	図108
183	A_2i_4	楕 円 形	N—85°—W	1.71 × 1.0以上	0.19	北側は通路，南壁にピット 1	A1	図108
184	B_1 f_9 g_9	円 形	N—1°—W	1.33 × 1.29	0.26	磨石	A	図108

表56 （土壙一覧表 (16)）

土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
185	B_1 f_8,f_9	不整楕円形	N—31°—E	1.55 × 1.02	0.24	ピット2	B1	図108
186	B_2 h_2 i_2	楕円形	N—20°—W	1.04 × 0.85	0.85	西壁は袋状を呈す，貝層あり	B′	図109
187	C_2d_0 C_3d_1	円形	／	1.2	0.37	砥石	A	図109
188	C_3 d_1 e_1	不整楕円形	N—47°—W	1.46 × 1.21	0.66	覆土に貝殻を含む，打製石斧	A′	図109
189	C_2 f_0 g_0	不定形	N—27°—E	1.98 × 1.59	0.39	ピット1	E	図109
190	C_3d_1,d_2	不整円形	N—50°—E	0.81 × 0.73	0.53	SI—17・18の接点部に位置する	A′	図109
191	C_2j_7	楕円形	N—80°—W	1.31 × 0.99	0.26		A	図109
192	B_2 b_2	不整楕円形	N—55°—E	0.81 × 0.64	0.25		A	図109
193	C_2j_8	楕円形	N—8°—E	約2.5 × 1.64	0.15	SK—170と重複	A1	図110
194	C_2j_8 D_2a_8	不定形	N—86°—W	0.95 × 0.75	0.1	ピット2	E	図109
195	C_3 e_1 f_1	楕円形	N—64°—W	1.42 × 1.25	0.15	深鉢形土器	A	図109
196	C_2e_0 C_3e_1	円形	／	1.33	0.25	ピット4	A1	図109

表57 （土壙一覧表 (17)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	分類	実測図・写真
197	C_2f_0	楕 円 形	N—3°—E	1.41 × 0.97	0.23	ピット2	A1	図110
198	C_2j_7	不整楕円形	N—53°—W	1.8 × 1.08	0.14	ピット1，混貝土層あり	A1	図110
199	C_2i_7,i_2	不整楕円形	N—82°—W	1.98 × 1.28	0.27	混貝土層あり	A	図110
200	B_2d_1,d_2	不整楕円形	N—82°—W	0.85 × 0.7	0.99	井戸状を呈す，貝が混入する	B′	図109
201	B_2 c_1,c_2 d_1,d_2	不 整 円 形	N—37°—W	1.11 × 1.04	0.58		B′	図110 (写22—2)
202	C_2j_4	楕 円 形	N—25°—E	1.17 × 0.9	0.68		B′	図110
203	C_2j_8 D_2a_8	楕 円 形	N—82°—E	1.29 × 1.0	0.14		A	図110
204	D_2 a_7,a_8 b_7,b_8	不整楕円形	N—29°—W	1.76 × 1.42	0.87	壙底2段掘り込み，オーバーハング部経1m	C	図110
205	C_2j_8,j_9	不整楕円形	N—38°—E	1.53 × 1.23	0.76		A′	図111
206	B_2 g_3 h_3	不整長方形	N—37°—E	2.58 × 1.54	0.76		D′	図111
207	B_2f_3,f_4	楕 円 形	N—14°—W	0.86 × 0.76	0.61		B′	図110
208	B_2f_3,f_4	楕 円 形	N—14°—W	1.74 × 1.1	0.38		A	図111

表58 （土壙一覧表 (18)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	分類	実測図・写真
209	B_2f_1,f_2	楕 円 形	N−90°	1.03 × 0.93	0.67	ピット1	B1′	図110
210	B_2d_4	不整円形	N−35°−W	1.08 × 0.99	0.18		A	図110
211	C_2j_5 D_2a_5	不整楕円形	N−0°	1.75 × 1.08	0.51	壙底は2段掘り込み，ピット5，混貝土層あり	A1	図111
212	C_2j_6	楕 円 形	N−56°−W	1.75 × 1.54	0.43		A′	図112
213	C_2j_4	不整楕円形	N−1°−E	1.7 × 1.0	0.15	ピット6	A1	図111
214	C_2i_1	不整円形	N−56°−E	0.98 × 0.94	0.48	深鉢形土器	A′	図111
215	C_2 i_6 j_6	楕 円 形	N−54°−E	1.23 × 0.91	0.21	ピット2，覆土上部は混土貝層	A1	図111
216	C_2h_1	楕 円 形	N−81°−W	1.19 × 1.05	0.54	純貝層・混貝土層あり	C	図111 (写22−3)
217	C_2h_1	不整楕円形	N−52°−W	1.08 × 0.86	0.19	ピット1	A1	図111
218	C_1 h_0 i_0	楕 円 形	N−78°−E	1.37 × 0.85	0.33		A	図111
219	C_2i_1,i_2	／	／	2.68	0.43	2基の土壙が連結した形を示す	E	図112
220	B_2b_3	楕 円 形	N−12°−W	1.0 × 0.82	0.53		B′	図111

表59 （土壙一覧表 (19)）

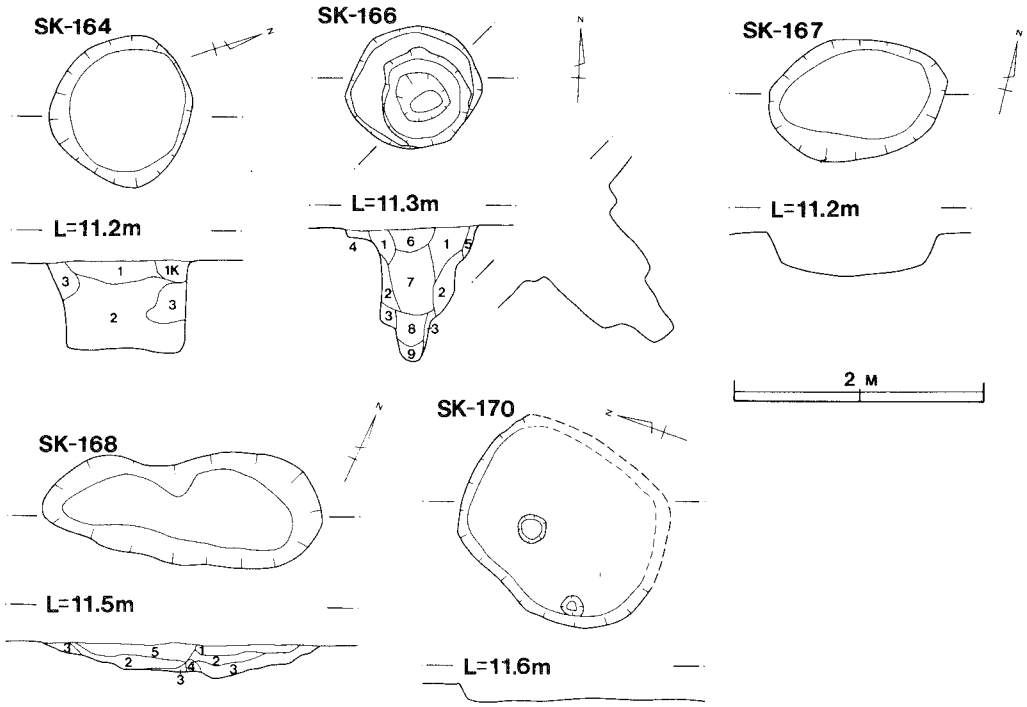
土壙No	地区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備考	分類	実測図・写真
221	$B_2 i_3$	不整円形	N—58°—W	0.74 × 0.68	0.14		A	図112
222	$B_2 h_3$	円形	／	1.19	1.38	井戸状を呈する，深鉢形土器	B′	図112
223	$B_2 d_3$	不整楕円形	N—0°	1.24 × 1.0	0.29		A	図112
224	B_2 b_3 c_3	不整楕円形	N—6°—W	2.07 × 1.39	0.71		A′	図112
225	$B_2 c_1$	不整楕円形	N—75°—E	1.41 × 1.23	0.92		A′	図113
226	$B_2 c_1$	不整楕円形	N—10°—W	0.73 × 0.71	0.69	北壁が1部でオーバーハングする	C	図112
227	$B_2 a_3$	楕円形	N—70°—E	0.97 × 0.87	0.57		A′	図112
228	$B_2 b_4$	不整楕円形	N—32°—E	1.32 × 1.14	0.31		A	図112
229	$B_2 a_3$	楕円形	N—0°	約0.9 × 0.65	0.42	ピットにより1部を切られている	A1	図112
230	$B_2 a_3$	楕円形	N—63°—E	1.03 × 0.82	0.18		A	図112
231	$A_2 j_3$	隅丸長方形	N—27°—E	1.57 × 0.78	0.55		D′	図113
232	$A_2 i_3$	／	／	0.8 × 0.6	0.45	平面形状不明	E	図113

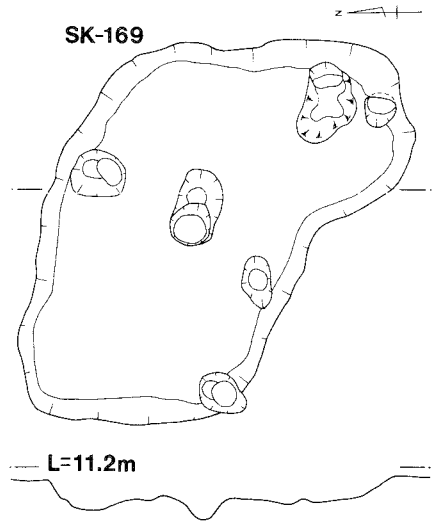
表60 （土壙一覧表 (20)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
233	A_2 j_2	／	／	(N−S)1.7 (E−W)1.5	0.12	西側通路，ピット1	A1	図113
234	A_2 i_3,i_4 j_3,j_4	／	／	3.0 × 1.7	0.17	ピット5，北側攪乱	E	図113
235	B_2 d_4	不整楕円形	N−12°−W	1.18 × 0.89	0.65		B′	図113 (写22−4)
237	C_3e_1,e_2	円 形	N−38°−E	0.82 × 0.7	1.02	井戸状を呈する	B′	図113
238	B_2 j_3,j_4	不整楕円形	N−22°−E	1.08 × 1.0	0.27	壙底北側は2段掘り込み	A1	図113 (写22−5)
239	B_2 j_3,j_4	不整楕円形	N−60°−E	2.08 × 1.92	0.13	混貝土層あり	A1	図113
240	B_2 i_1	不整円形	／	1.95	0.95	井戸状を呈す	B′	図114
241	C_2d_1	／	／	1.33	0.78	北側半分は不明	A′	図114
242	B_2 c_4	不 定 形	N−85°−W	1.78 × 1.27	0.75		E	図114
243	B_2 c_4	不 定 形	N−77°−W	1.79 × 0.63	0.72		E	図114
244	B_2 d_3	楕 円 形	N−74°−W	0.87 × 0.78	0.72		B′	図114
245	B_2 c_2 d_2	楕 円 形	N−22°−W	1.39 × 1.01	0.76	壙底部長径 1.79 m，同短径 1.28 m	C	図114 (写22−6)

表61 （土壙一覧表 (21)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備 考	分類	実測図・写真
246	B_1 d_0	楕 円 形	N—30°—W	1.1 × 0.98	1.4 以上	井戸状を呈す，混貝土層	B′	図114
247	B_1 c_0 d_0	円 形	／	0.98	0.83	SK—248 と重複	A′	図114
248	B_1c_0,d_0 B_2c_1,d_1	不 整 方 形	N—61°—W	約1.7 × 1.42	0.75	SK—247 と重複	D′	図114





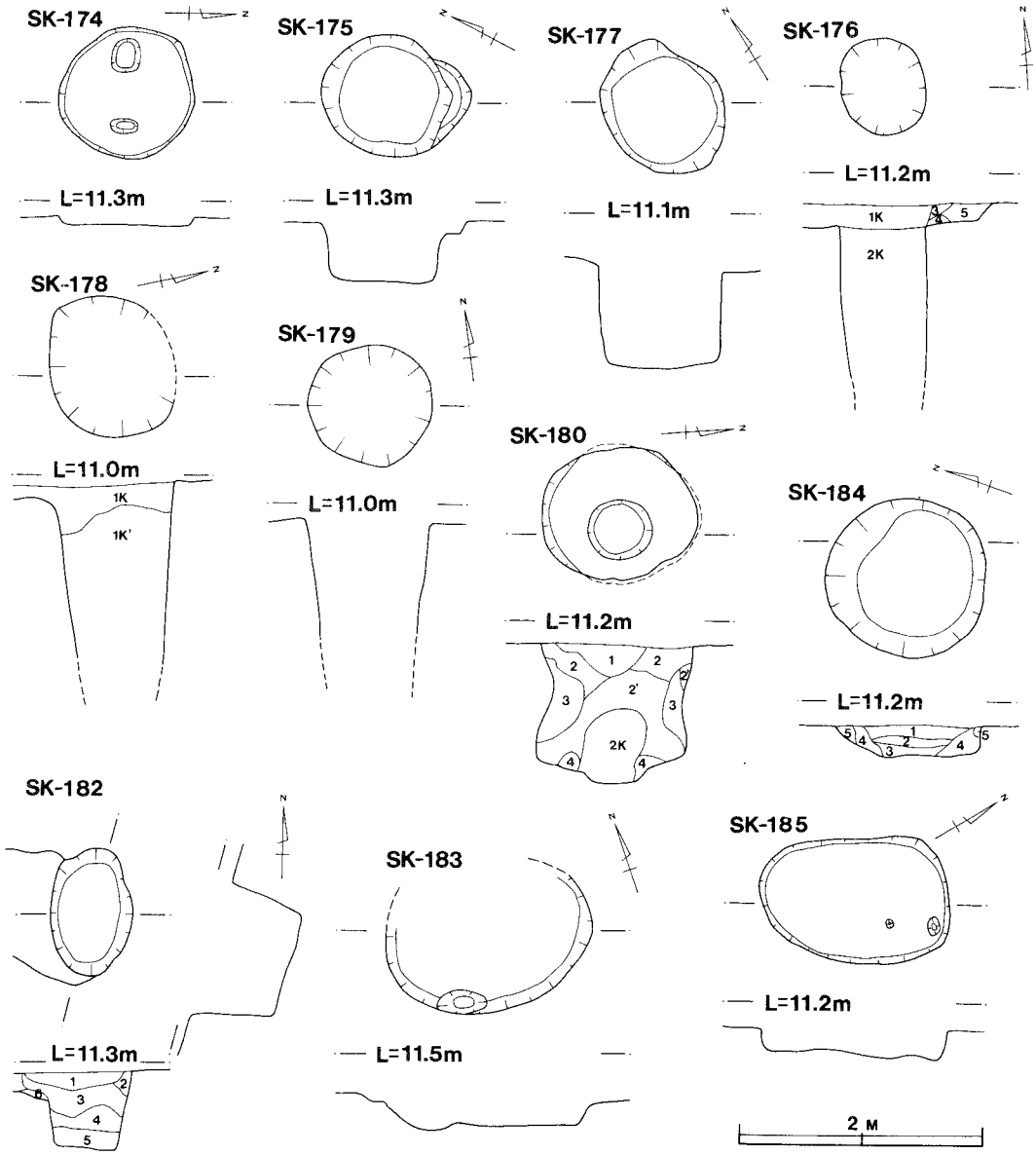
第166号土壙土層解説

1	暗褐色土	(YP・ローム粒子・炭化物を含む)
2	〃	(ロームブロック含む)
3	褐色土	(湿気あり,ロームブロック含む)
4	明褐色土	(締まりあり)
5	暗褐色土	(締まり弱くローム粒子を多く含む)
6K	黒褐色土	(混貝土層,締まりあり)
7K	暗褐色十	(混貝土層,ローム粒子含む)
8K	〃	(混貝土層,締まり弱くローム粒子を含む)

第168号土壙土層解説

1	黒褐色土	(ハードロームブロック・YP・ローム粒子含む)
2	暗褐色土	(ロームブロック・YPを含む)
3	〃	(粘性あり,ハードロームブロックを含む)
4	〃	(ハードロームブロックを含む)
5	黒褐色土	(よく締まり焼土粒子・YP・パミス・炭化物を含む)

第107図　第164・166～170号土壙



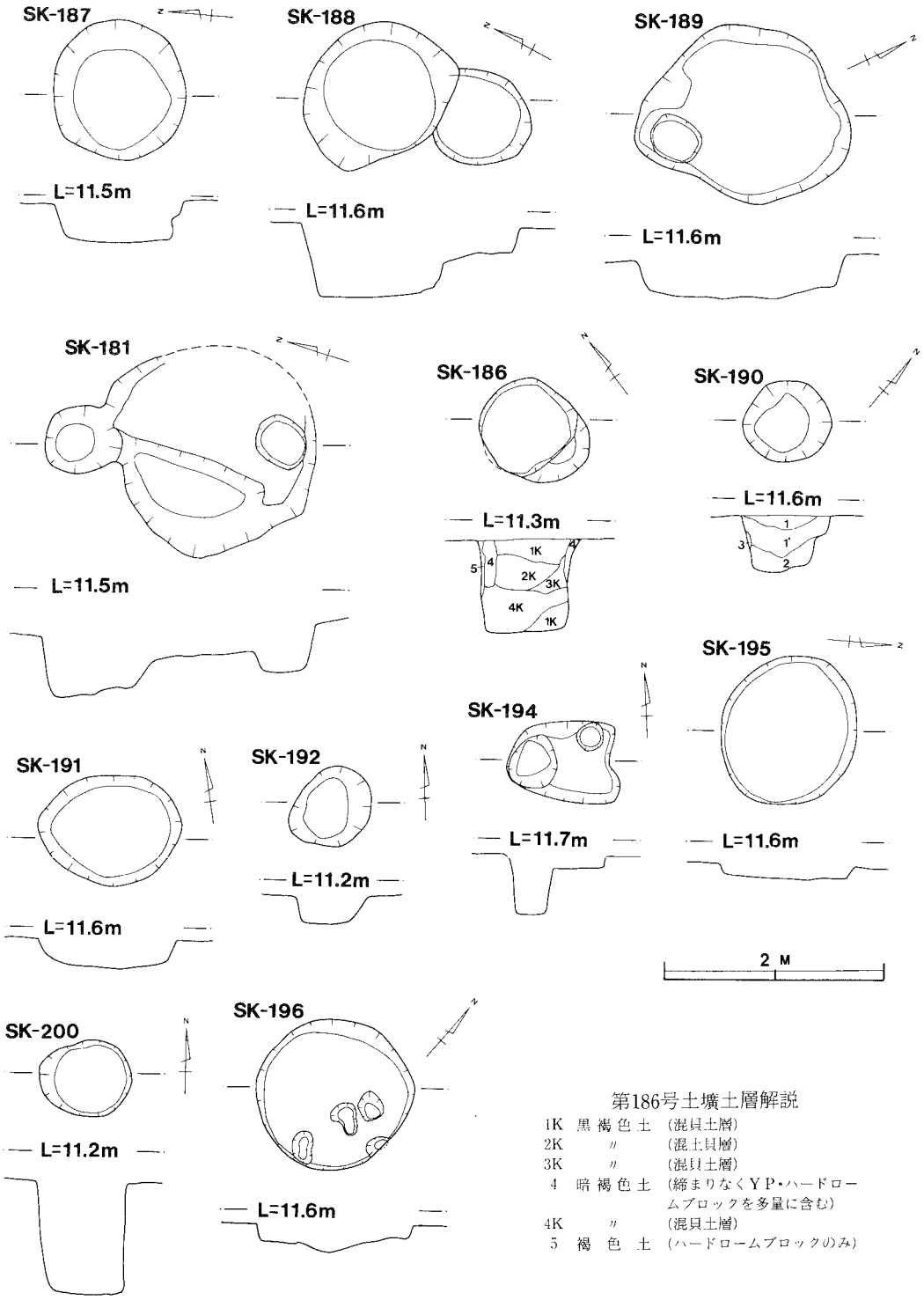
第180号土壙土層解説

1	黒褐色土	(締まりなく炭化物・ハードロームブロックを含む)
2	〃	(締まりなくハードロームブロックを多く含む)
2′	〃	(締まりなく炭化物・ハードロームブロックを多量に含む)
2K	〃	(混貝土層,締まりなし)
3	暗褐色土	(粘性あり,ハードロームブロックを多く含む)
4	〃	(締まりなく炭化物・黒色ハードロームブロックを含む)

第182号土壙土層解説

1	暗褐色土	(ハードロームブロック・炭化物を含む)
2	〃	(ハードロームブロックを含む)
3	極暗褐色土	(ハードロームブロック・炭化物を含む)
4	黒褐色土	(締まり弱く炭化物粒子を含む)
5	暗褐色土	(固く締まりハードロームブロックを含む)
6	〃	(少量のハードロームブロックを含む)

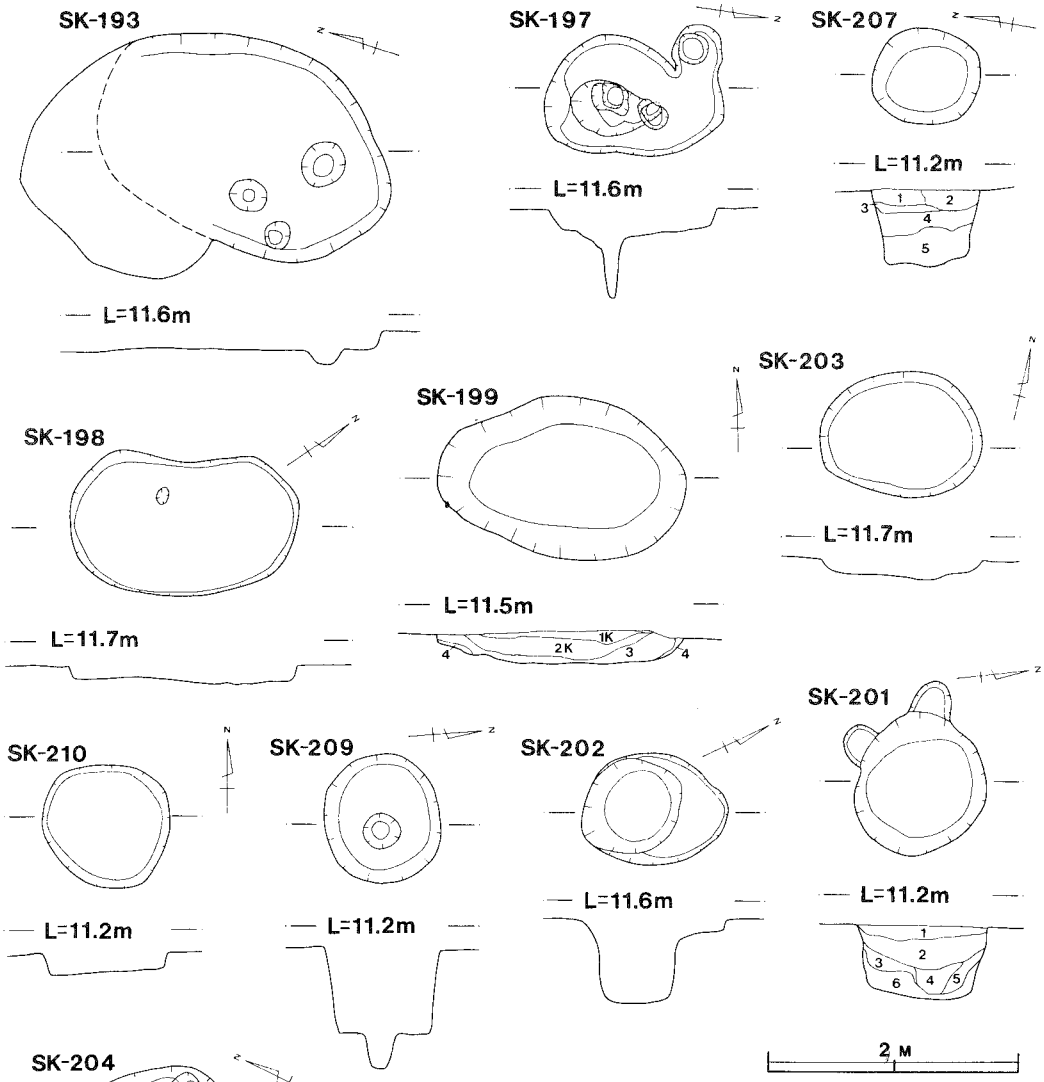
第108図　第174～180・182～185号土壙

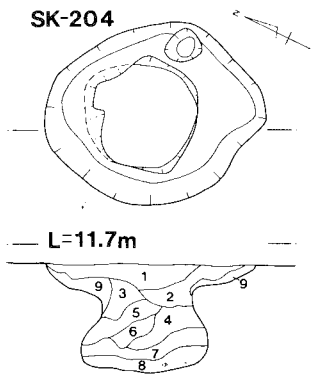


第186号土壙土層解説

1K	黒褐色土	(混貝土層)
2K	〃	(混土貝層)
3K	〃	(混貝土層)
4	暗褐色土	(締まりなくYP・ハードロームブロックを多量に含む)
4K	〃	(混貝土層)
5	褐色土	(ハードロームブロックのみ)

第109図　第181・186～192・194～196・200号土壙

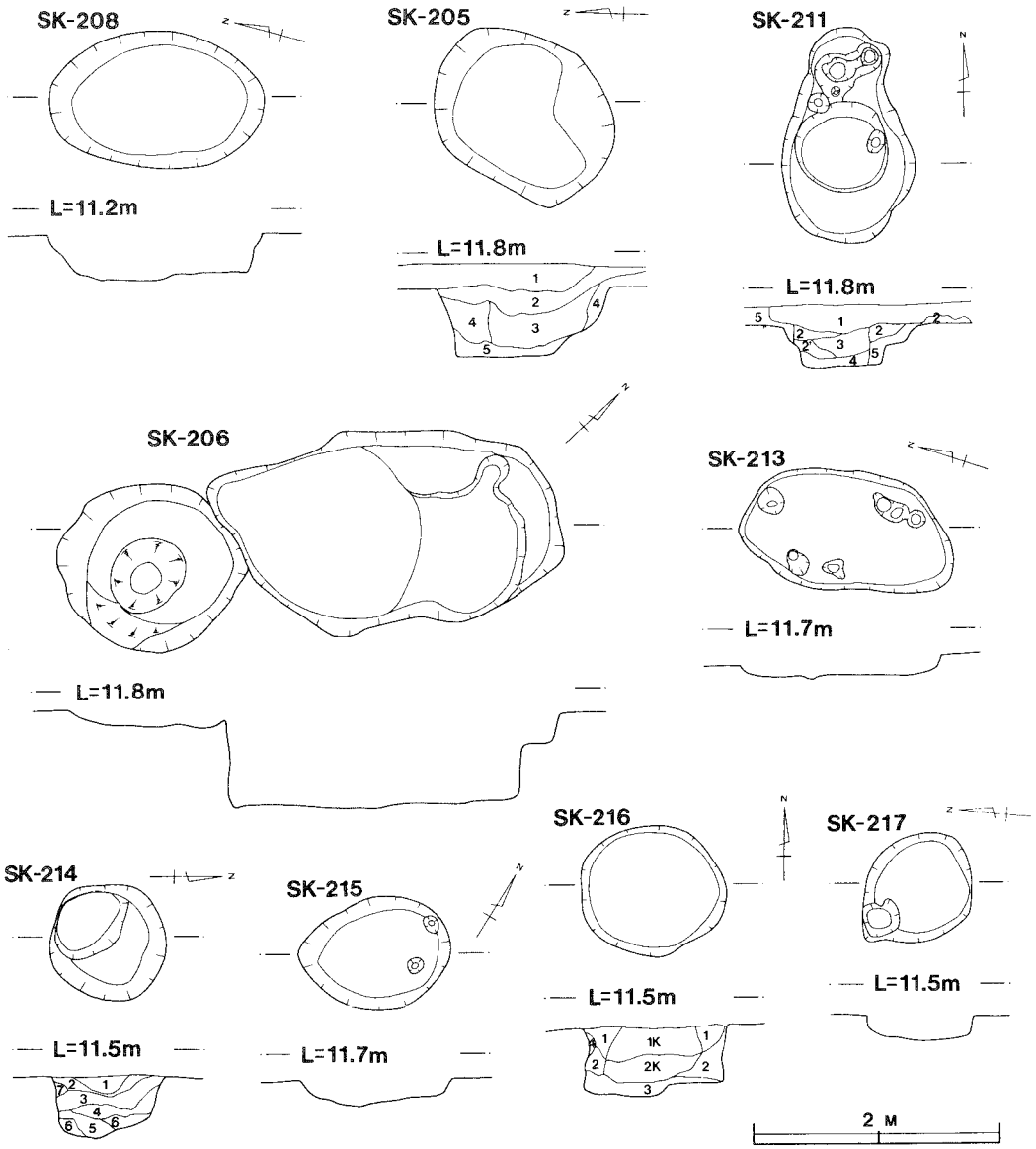


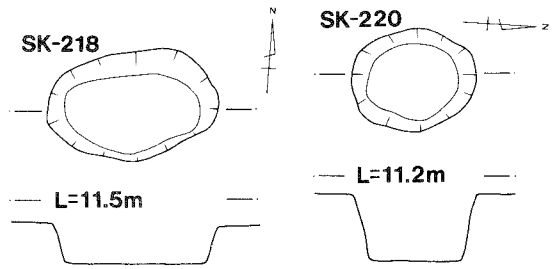


第204号土壙土層解説

1　黒褐色土　(混貝土層)
2　暗褐色土　(締まり弱く焼土粒子・ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
3　黒褐色土　(よく締まりＹＰ・ハードロームブロック・炭化物を含む)
4　暗褐色土　(締まり弱くＹＰ・ハードロームブロックを含む)
5　〃　(締まり弱くＹＰ・炭化物・ハードロームブロックを含む)
6　〃　(締まりなくロームブロックを含む)
7　黒褐色土　(締まり弱くローム粒子を少量含む)
8　暗褐色土　(締まり弱くブラックハードロームブロックを多量に含む)
9　〃　(良く締まり，ＹＰ・ロームブロックを含む)

第110図　第193・197～199・201～204・209・210号土壙

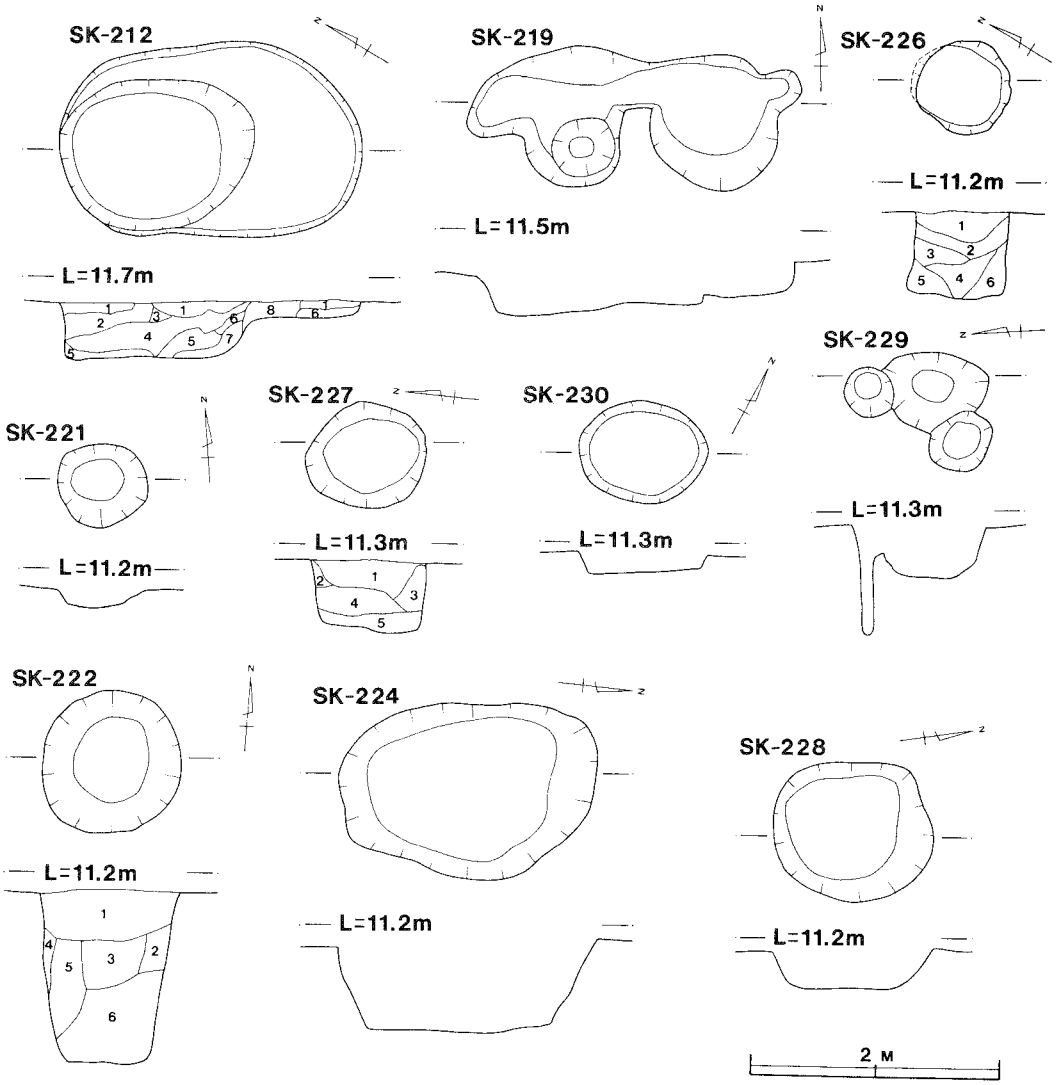


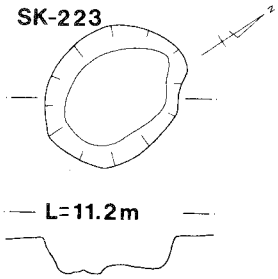


第214号土壙土層解説

1 黒褐色土 (よく締まり焼土粒子・ハードロームブロックを含む)
2 〃 (よく締まりＹＰ含む)
3 〃 (よく締まりハードロームブロック・ＹＰ・焼土粒子を含む)
4 〃 (締まり弱くＹＰ・ローム粒子・炭化物を含む)
5 暗褐色土 (よく締まりブラックハードロームブロックを含む)
6 褐色土 (締まり弱く粘性あり，ローム及びハードロームブロック含む)
7 暗褐色土 (よく締まりロームブロックを含む)

第111図　第205・206・208・211・213～218・220号土壙





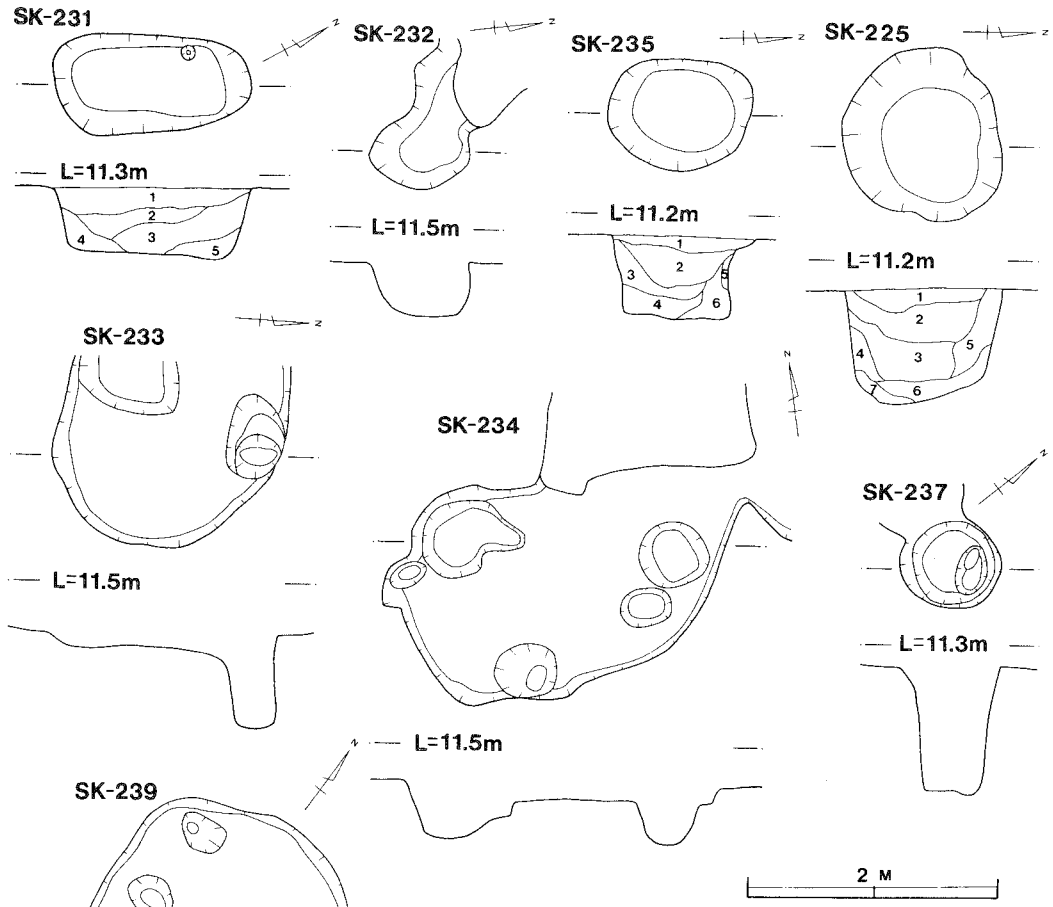
第212号土壙土層解説

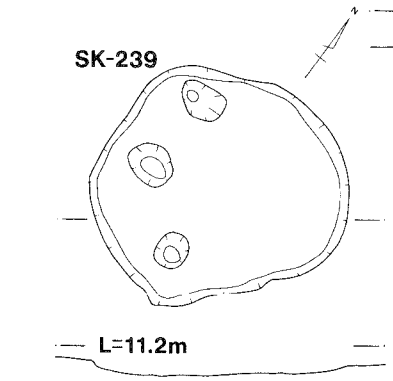
1	褐色土	(YPを含む)
2	暗褐色土	(ハードロームブロック・YPを含む)
3	褐色土	(ハードロームブロックのみ)
4	暗褐色土	(よく締まりハードロームブロックを含む)
5	〃	(ハードロームブロックを少量含む)
6	褐色土	(よく締まり少量のハードロームブロックを含む)
7	〃	(よく締まり少量のハードロームブロックを含む)
8	〃	(よく締まりYPを含む)

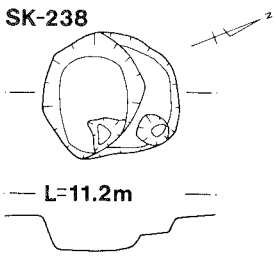
第222号土壙土層解説

1	暗褐色土	(よく締まりYP・ローム粒子を含む)
2	〃	(YP・ローム粒子・ロームブロックを含む)
3	〃	(締まり弱くYP・ローム粒子・炭化物・焼土粒子を含む)
4	極暗褐色土	(締まり弱くローム粒子を含む)
5	暗褐色土	(締まり強く獣骨片・焼土粒子・炭化物を含む)
6	〃	(ローム粒子を含む)

第112図　第212・219・221～224・226～230号土壙







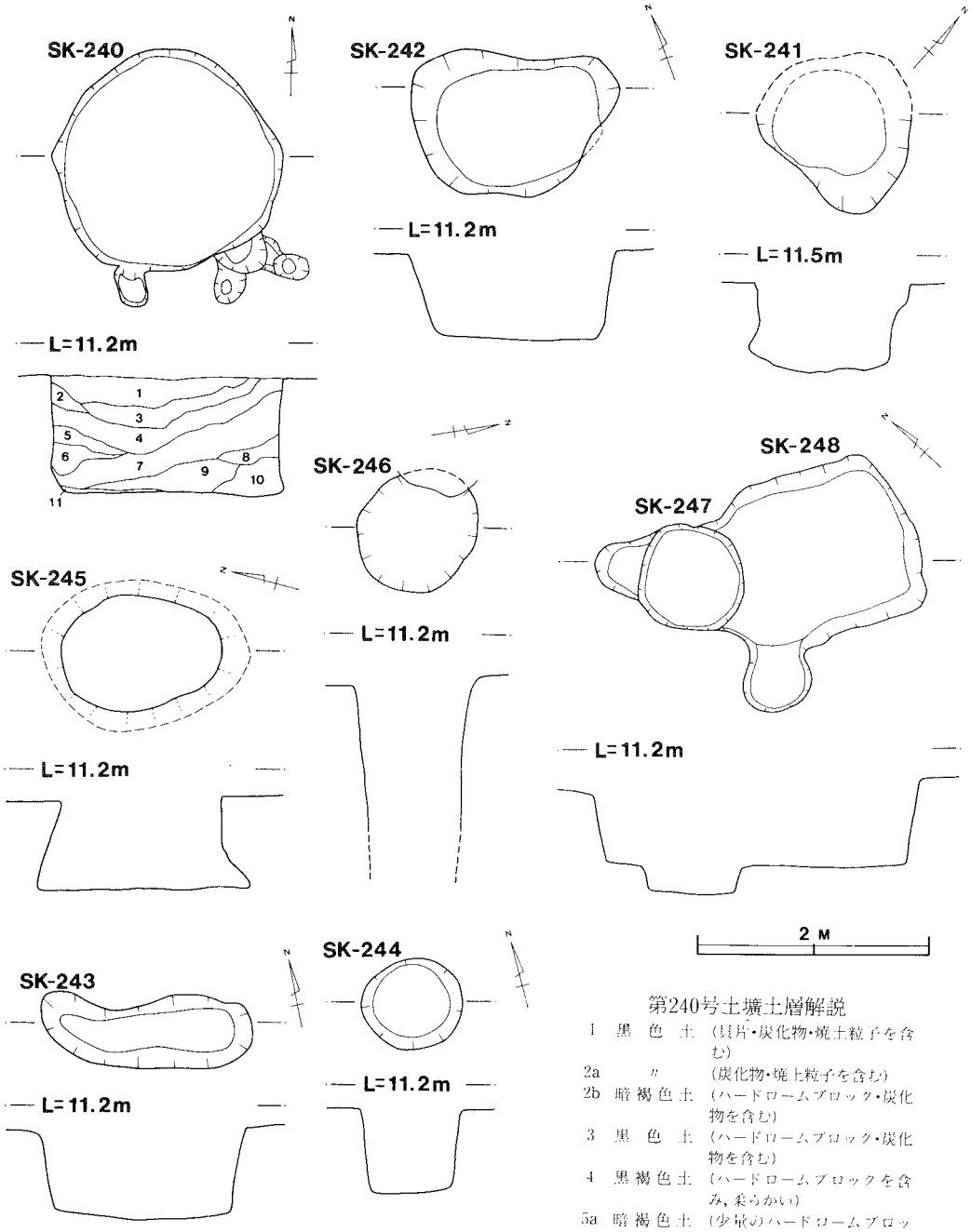
第231号土壙土層解説

1	暗褐色土	(よく締まり焼土粒子・YP・炭化物を含む)
2	〃	(よく締まり焼土粒子・ハードロームブロック・炭化物を含む)
3	〃	(ハードロームブロック・焼土粒子を含む)
4	極暗褐色土	(焼土粒子・炭化物を含む)
5	黒褐色土	(よく締まりハードロームブロックを含む)

第235号土壙土層解説

1	褐色土	(よく締まり,YP・ローム粒子・炭化物を含む)
2	〃	(よく締まりYP・ローム粒子・炭化物を含む)
3	〃	(よく締まりYP・ローム粒子・焼土粒子を含む)
4	〃	(よく締まりブラックロームブロックを含む)
5	〃	(ロームブロックを含む)
6	〃	(YP・ローム粒子・ロームブロックを含む)

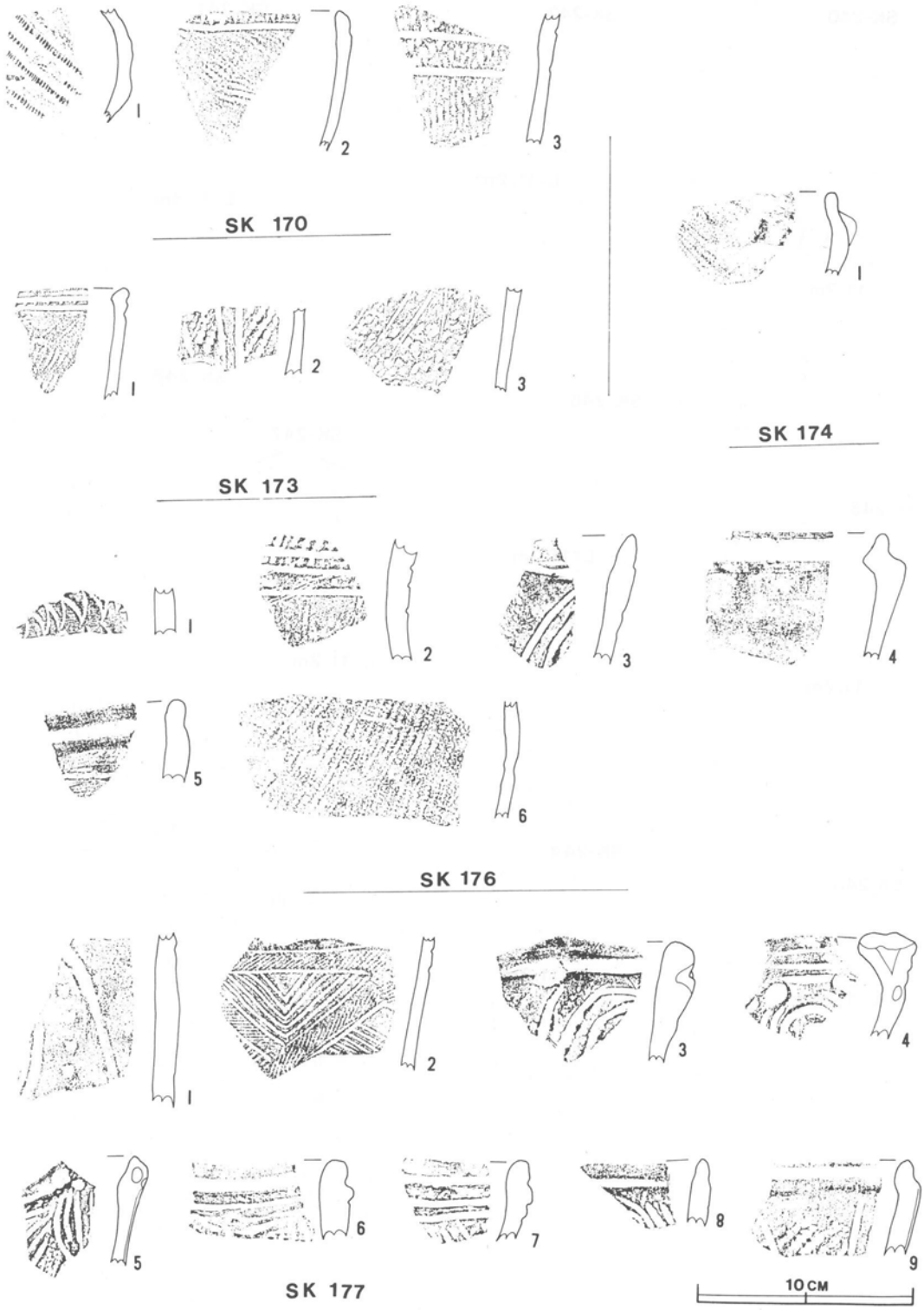
第113図　第225・231～235・237～239号土壙



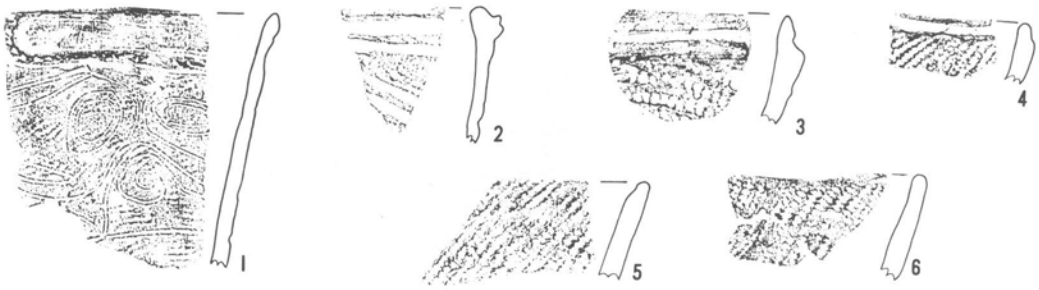
第240号土壙土層解説

1	黒色土	(貝片・炭化物・焼土粒子を含む)
2a	〃	(炭化物・焼土粒子を含む)
2b	暗褐色土	(ハードロームブロック・炭化物を含む)
3	黒色土	(ハードロームブロック・炭化物を含む)
4	黒褐色土	(ハードロームブロックを含み，柔らかい)
5a	暗褐色土	(少量のハードロームブロックを含む)
5b	黒褐色土	(少量のハードロームブロック・炭化物を含む)
6a	暗褐色土	(ハードロームブロックを含み，粘性あり)
6b	〃	(ハードロームブロック・炭化物を含む)
7	〃	(焼土粒子・炭化物を含む)
8	〃	(少量のハードロームブロックを含む)

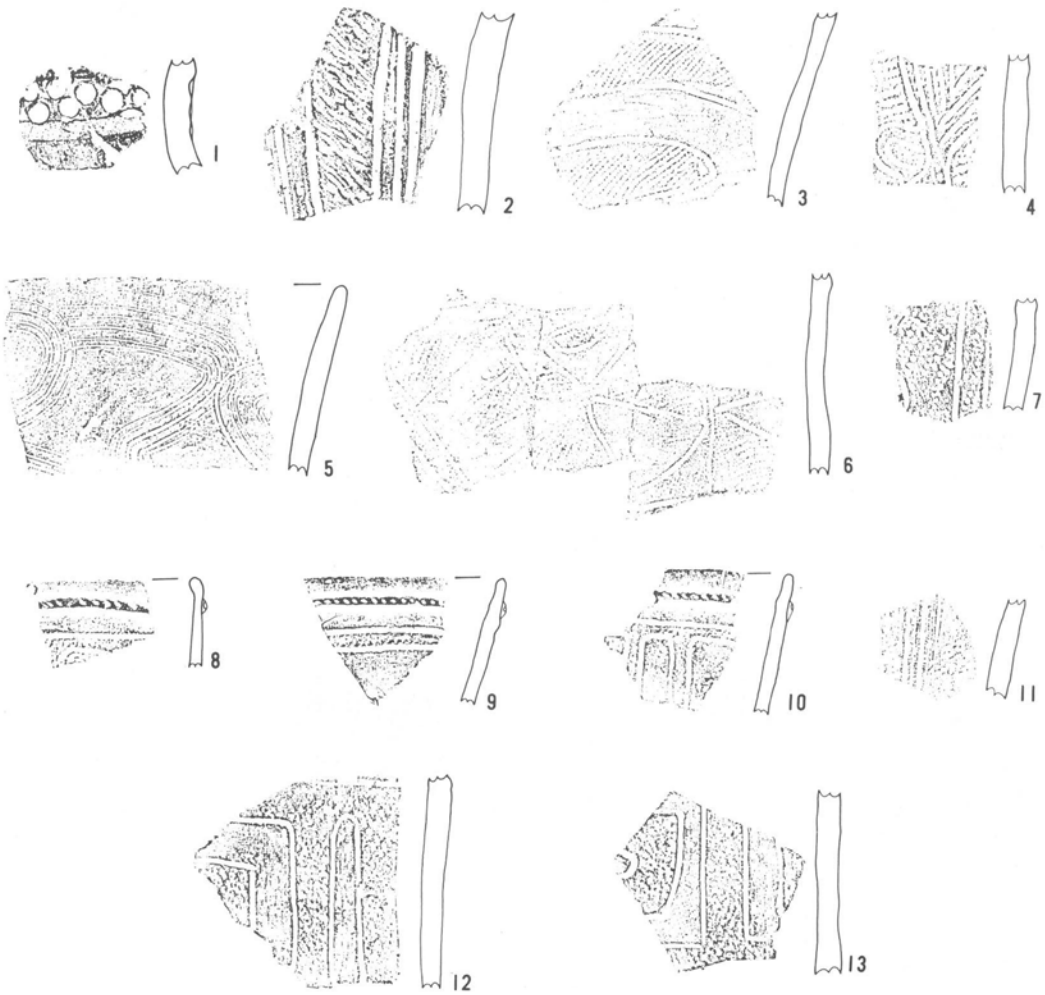
第114図　第240～246・248号土壙



第115図　土壙出土遺物



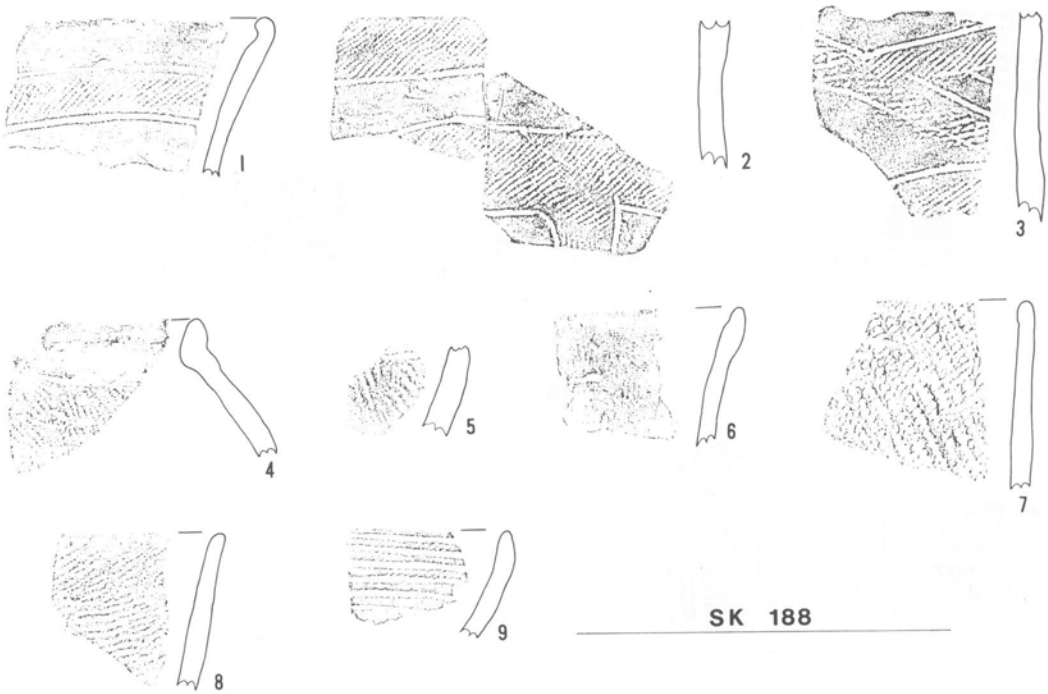
SK 186

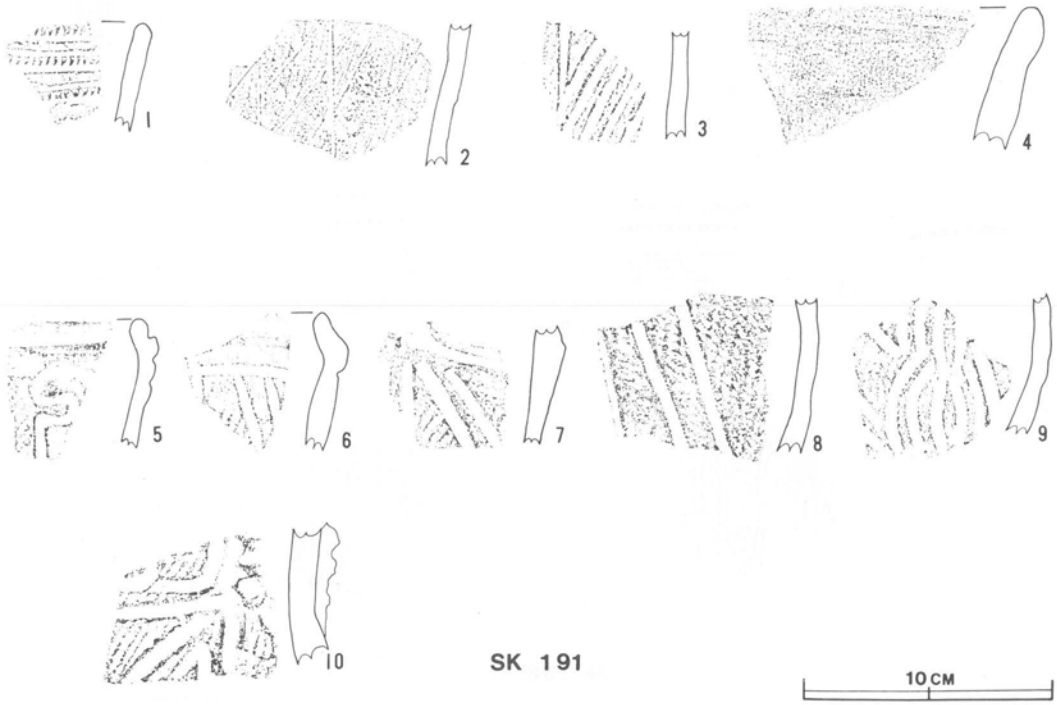


SK 188

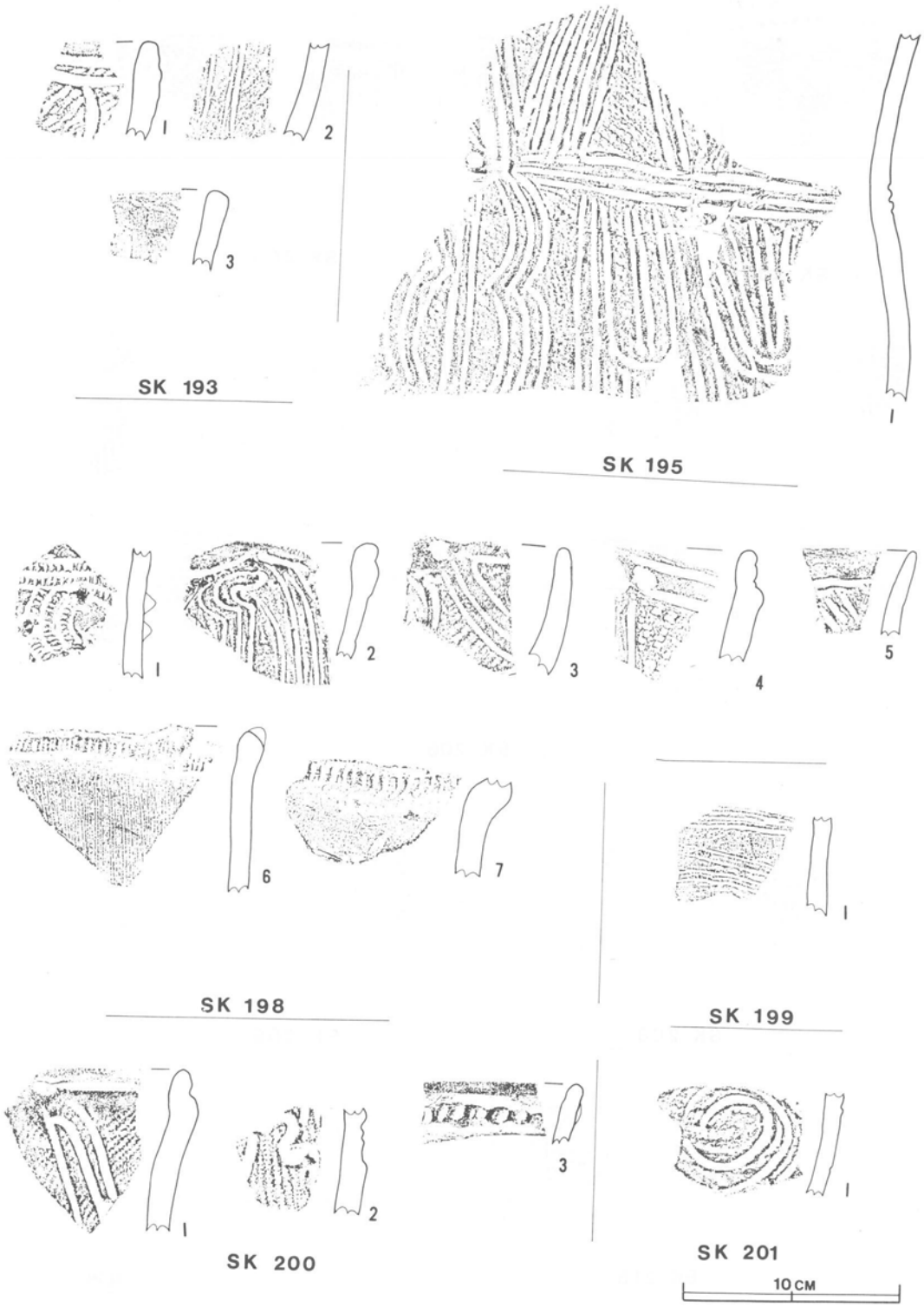
10 CM

第116図　土壙出土遺物

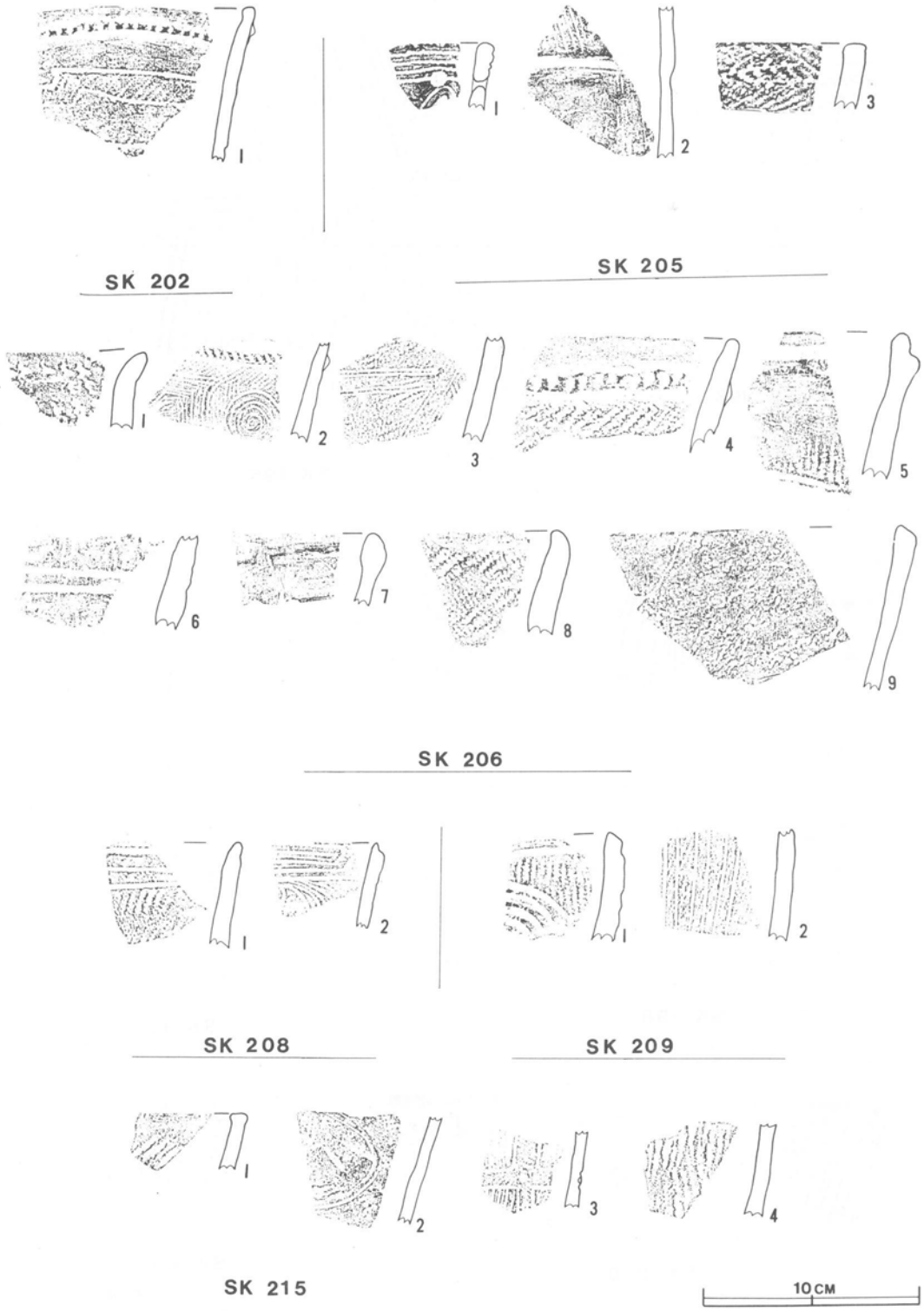




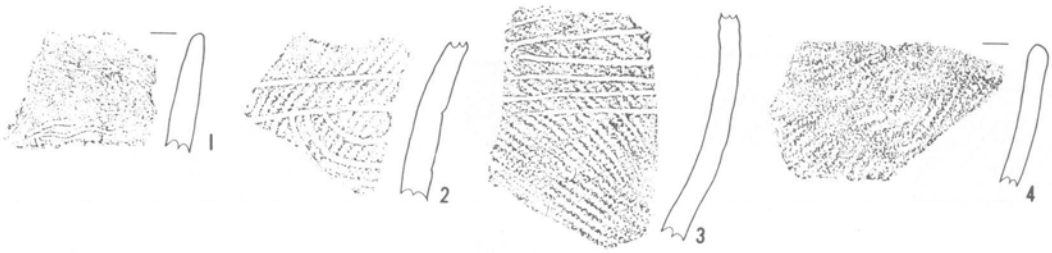
第117図　土壙出土遺物



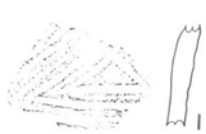
第118図　土壙出土遺物



第119図　土壙出土遺物

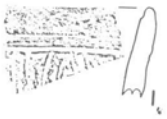


SK 216

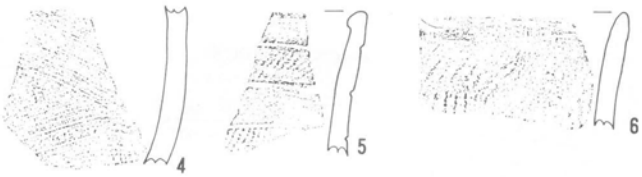


SK 217

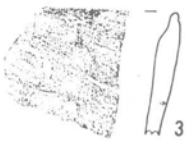
SK 218



SK 221



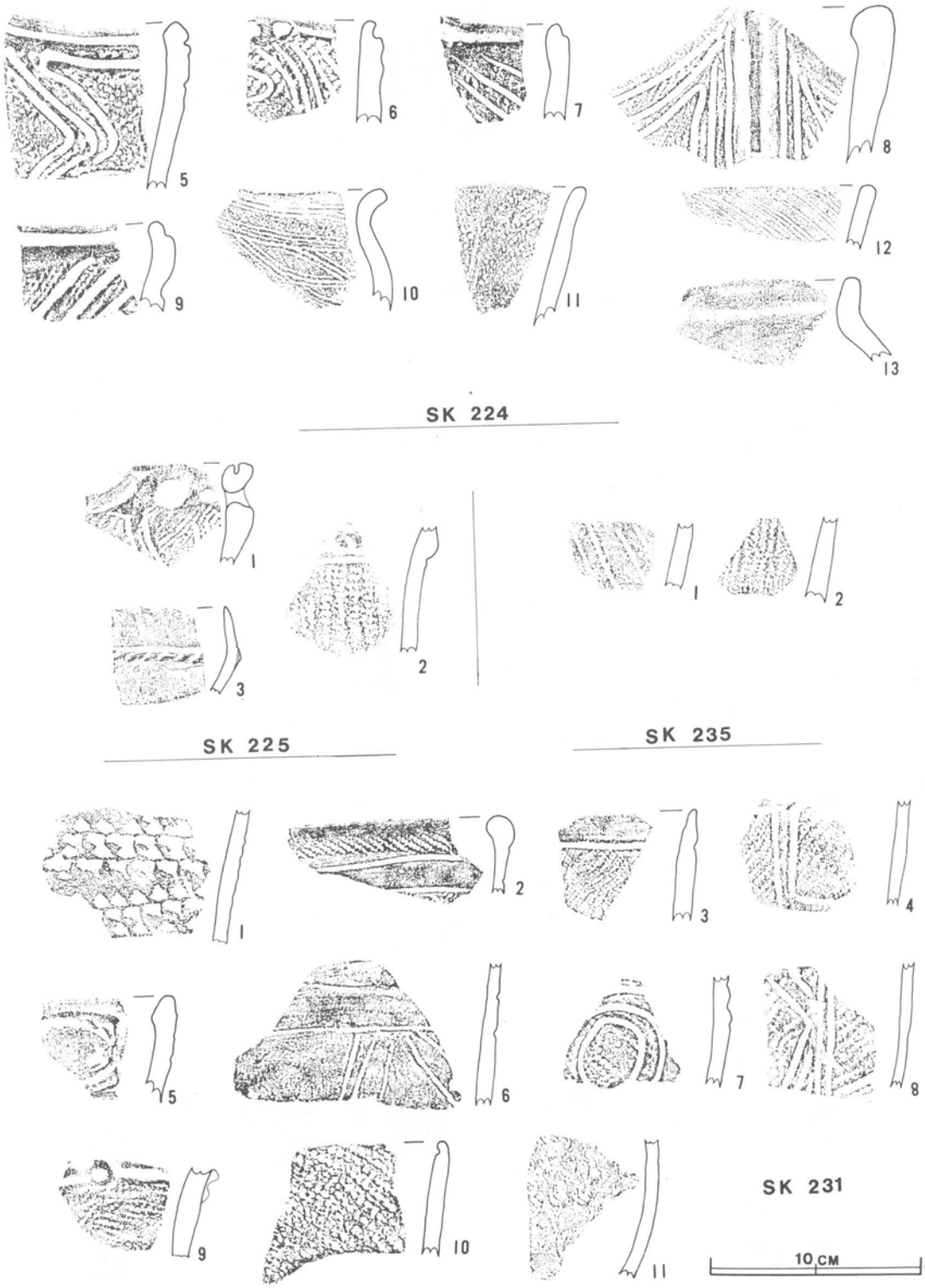
SK 222



SK 223

SK 224

第120図　土壙出土遺物



第121図　土壙出土遺物

表62　第115図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－170	1	胴部		右下がりの沈線間の凸帯に刻みを入れる	
	2	口縁部		口縁に平行な沈線とそれに沿って施される刺突文から成る	
	3	胴部		横位の沈線。地文は縄文	
SK－173	1	口縁部		口縁部に平行沈線を施し，間に刺突を加える	
	2	胴部		縦位の沈線文	
	3	〃		斜行沈線の末端部。地文は荒い縄文	
SK－174	1	口縁部		内彎する口縁部で，貼付文がみられる	
SK－176	1	胴部		鋸歯状の貝殻腹縁文	浮島式
	2	〃		横位の沈線と刺突を施す	
	3	口縁部		沈線文。地文は縄文	
	4	〃		口縁部がくの字状に屈曲し，太い沈線を施す	
	5	〃		横位の沈線文	
	6	胴部		縄文のみ	
SK－177	1	胴部		沈線で区画された中に棒状工具による刺突を有する	称名寺式
	2	〃		沈線で幾何学的文様を区画し，中に縄文を充填する	堀之内式
	3	口縁部		小突起部と思われ，直線及び弧状の沈線を施文する	〃
	4	〃		口唇部断面三角形状を呈し，刺突と沈線から成る	〃
	5	〃		波状口縁を呈し，刺突を加えた隆線を付し，胴部にかけて沈線を施す	〃
	6	〃		口縁部に平行な沈線を有する	〃
	7	〃		三本の沈線が口縁に平行に走る	〃
	8	〃		口縁に平行な沈線と弧状の沈線から成る	〃
	9	〃		口縁に平行な沈線と縦位の沈線からなる	〃

表63　第116図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物№	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—186	1	口縁部		口縁部に刺突のある隆線を貼り付け，曲線状の沈線で飾る	
	2	〃		口唇部に太い沈線。斜位の沈線を施す	
	3	〃		口唇部に沈線。縄文	
	4	〃		口唇部に沈線。縄文	
	5	〃		縄文	
	6	〃		縄文	
SK—188	1	胴部		円形刺突文	
	2	〃		縦位の沈線の間に右下がりの斜沈線	
	3	〃		沈線で区画された中に縄文を充填。外は磨消し	
	4	〃		沈線文	
	5	口縁部		沈線による曲線文	
	6	胴部		沈線で文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	7	〃		縦位の沈線	
	8	口縁部		口縁部に隆線を付し，沈線で文様を区画する。地文は縄文	
	9	〃		口縁部に刺突を有す隆線を付し，横位の沈線２本を施す	
	10	〃		口縁部に刺突を有す隆線を付し，沈線で文様を区画する	
	11	胴部		縦位の沈線	
	12	〃		沈線で文様を区画し，中を磨消す。外は縄文	
	13	〃		No.12 と同一個体	

表64　第117図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−188	1	口縁部		口縁に平行な縄文帯	
	2	胴部		沈線で文様を区画し内部に縄文を充填する	
	3	〃		No.2 と同一個体	
	4	口縁部		内傾する口縁部で，１条の沈線と縄文	
	5	胴部		横位の沈線と縄文	
	6	口縁部		外反する口縁部で無文	
	7	〃		縄文	
	8	〃		縄文	
	9	〃		内彎する口縁部で，鉢形土器とみられる。口縁に平行な沈線を施し，内部に刻みを加える	
SK−191	1	口縁部		平行沈線＋刺突	
	2	胴部		斜位→縦位の順で沈線を施す	
	3	〃		沈線文	
	4	口縁部		無文	
	5	〃		口縁に平行な沈線と垂下する蛇行沈線を施す	堀之内式
	6	〃		口縁部がくの字状に屈曲し，横位及び斜位の沈線を施す	〃
	7	胴部		沈線文。地文は縄文	〃
	8	〃		縦位の沈線文。地文は縄文	〃
	9	〃		弧状の沈線文	〃
	10	〃		沈線文。地文は縄文	〃

表65　第118図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—193	1	口縁部		口縁に平行に2本の沈線を配し中を刺突で埋める	
	2	胴部		縦位の沈線。地文は縄文	
	3	口縁部		縄文	
SK—195	1	胴部		くびれ部に3本の沈線を横位に施文し，上下に斜行及び弧状の沈線を配する	堀之内式
SK—198	1	胴部		平行沈線間に刺突を加える。所々に粘土貼付けが施される	
	2	口縁部		ゆるやかな波状口縁で，縦位の沈線を主に施文する。地文は縄文	
	3	〃		口縁部に刺突を有し，沈線で文様を区画する	
	4	〃		波状口縁を呈し，横位・縦位の沈線を施文する。地文は縄文	
	5	〃		口縁に平行な沈線及び右下がりの斜沈線を有する	
	6	〃		口縁部に低い隆帯を有し，上に刺突を施す。全面に縦位の沈線を施文する	
	7	〃		爪形の刺突を有する	
SK—199	1	胴部		横位の沈線文	
SK—200	1	口縁部		口縁に平行な沈線を有し，途中に刺突がみられる。斜行沈線を施文する	
	2	胴部		蛇行沈線。地文は縄文	
	3	口縁部		紐線貼り付け	
SK—201	1	胴部		沈線で円弧文を描く	

表66　第119図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−202	1	口縁部		口縁に刺突のある隆線を付し，沈線で区画された縄文帯をもつ	堀之内式
SK−205	1	口縁部		口縁に平行な沈線を4本有する。補修孔あり	
	2	胴部		横位の沈線の上下に斜沈線を配す	
	3	口縁部		縄文	
SK−206	1	口縁部		口縁部は外反し，アナダラ属の貝殻腹縁文をもつ	浮島式
	2	胴部		刺突のある隆帯を付し，沈線による渦巻文を有する	堀之内式
	3	〃		直線状の沈線文。地文は縄文	〃
	4	口縁部		口縁部に紐線を付す。縄文	〃
	5	〃		口唇部に沈線を有する。縄文地に沈線を施文する	〃
	6	胴部		横位の平行沈線	
	7	口縁部		無文	
	8	〃		縄文。LR	
	9	〃		縄文	
SK−208	1	口縁部		口縁に平行な2本の沈線を有する。縄文	
	2	〃		横位・弧状の沈線を有する	
SK−209	1	口縁部		ゆるく内彎する口縁部で，沈線文	
	2	胴部		縦位の沈線	
SK−215	1	口縁部		縄文	
	2	胴部		沈線による円弧文	
	3	〃		沈線で十字形を区画し，中央部に刺突を有する。内部は斜沈線	
	4	〃		縄文	

表67　第120図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−216	1	口縁部		弧状の沈線が数本走る	
	2	胴部		横位・円弧文を施す。地文は縄文	
	3	〃		横位の沈線を施文する。地文は縄文	
	4	口縁部		縄文	
SK−217	1	胴部		沈線で三角文を描き縄文を充塡する。	
SK 218	1	口縁部		斜位の沈線を施す	
	2	〃		無文。ヘラ整形	
	3	胴部		縄文	
SK 221	1	口縁部		平行沈線を横位に施し，下部に縦位の沈線を施す	
SK−222	1	胴部		横位・縦位の沈線を施す	
	2	〃		縦位の沈線の末端部	
	3	〃		沈線。縄文も残る	
	4	〃		斜行沈線で文様を区画する	
	5	口縁部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	6	〃		縄文	
SK−223	1	胴部		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	2	口縁部		口縁部に紐線を付す	
	3	〃		無文	
SK−224	1	胴部		アナダラ属の貝殻腹縁文を有す	浮島式
	2	口縁部		口縁部に隆線を付し，上に刺突を加える	堀之内式
	3	胴部		沈線	
	4	〃		横位の沈線。地文は縄文	〃

表68　第121図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-224	5	口縁部		波状口縁を呈し，蛇行沈線を施文する	堀之内式
	6	〃		2個の刺突から左右に沈線を伸ばし，胴部にかけては曲線文を施す	〃
	7	〃		口縁に平行な沈線。胴部へは斜行沈線を施文する	〃
	8	〃		波状口縁を呈し，波頂部より縦位の沈線を垂下させる	〃
	9	〃		沈線文。地文は縄文	〃
	10	〃		口縁部はS字状を呈し，平行沈線を横位・斜位に施文する	〃
	11	〃		縄文	
	12	〃		右下がりの沈線文	
	13	〃		口縁部はくの字状を呈し，頸部に浅い凹みを有する	
SK-225	1	口縁部		波状口縁を呈し，波頂部に貫通孔を有する	
	2	胴部		横位の沈線。地文は縄文	
	3	口縁部		口縁部はくの字に内彎し，口縁に平行な沈線と隆線を施す	
SK-235	1	胴部		斜沈線	
	2	〃		縄文	
SK-231	1	胴部		三角形の陰刻文列をもつ	浮島式
	2	口縁部		横位の沈線で区画し，間に磨消し部と縄文充填部とを施す	
	3	〃		口縁に平行な沈線を有する。縄文	
	4	胴部		沈線により文様を区画する。地文は縄文	
	5	口縁部		沈線・刺突文	
	6	胴部		横位及び斜位の沈線で文様を区画する	
	7	〃		沈線で円文を描く。地文は縄文	
	8	〃		縦位及び斜位の沈線文。地文は縄文	
	9	〃		沈線上に貼り付けを有する。地文は縄文	
	10	口縁部		口縁部内側に沈線を有する。縄文	
	11	胴部		縄文のみ	

第7号土壙土層解説

1　表　　土
2　暗　褐　色　土　(ハードロームブロックを少量含む)
2′　　〃　　(2よりロームブロックが少ない)
3　黒　褐　色　土　(締まりなく，炭化物含む)
4　暗　褐　色　土　(YP・焼土粒子・ハードロームブロック含む)
5　暗　赤　褐　色　土　(焼土を多く含む)
6　褐　　色　　土　(ハードロームブロック含む)

第22号土壙土層解説

1　純　　貝　　層
1′　　(貝の他に，獣骨を多く含む)
2　暗　褐　色　土　(YP・焼土粒子含む)
2′　　〃　　((YP・ロームブロック含む)
3　褐　　色　　土　(ロームブロック多量に含む)
4　黄　褐　色　土　(ロームブロックのみ)

第25号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(ハードロームブロック・炭化物・焼土を含む)
2　暗　褐　色　土　(ブラックハードロームブロック含む)
3　　〃　　(ブラックハードロームブロックを含み，よく締まる)

第29号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(YPを多く含む)
2　暗　褐　色　土　(ローム粒子含む)

第35号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(混貝土層)
2　　〃　　(ハードロームブロックを含む)
3　　〃　　(ハードロームブロックを多量に含む)
3′　　〃　　(　　〃　　を含まない)
4　暗　褐　色　土　(炭化物含む)
5　褐　　色　　土　(ハードロームブロック含む)
6　暗　褐　色　土　(ローム及び焼土粒子含む)
7　褐　　色　　土　(ロームを含む)

第52号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(炭化物・焼土粒子を含む)
2　暗　褐　色　土　(ブラックハードロームブロック含む)
3　褐　　色　　土　(よく締まり，ブラックハードロームブロックを含む)
4　暗　褐　色　土　(ブラックハードロームのみ)

第78・79号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(混貝土層)
2　暗　褐　色　土　(YPを含む)
3　黒　褐　色　土　(ブラックハードロームブロックを多量に含み，大変固い)

第87号土壙土層解説

1　純　　貝　　層
2　黒　色　土　層　(混貝土層，炭化物・焼土を含む)
3　暗　褐　色　土　(よく締まりハードロームブロック・焼土粒子を含む)

第96号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(YP・ハードロームブロック含む)
2　暗　褐　色　土　(ロームが多い)
3　黒　褐　色　土　(YP・ブラックハードロームブロック含む)

第103号土壙土層解説

1K　暗　褐　色　土　(混貝土層)
2　　〃　　(ハードロームブロックを含む)
3　極　暗　褐　色　土　(灰白色粘土粒子含む)
4　暗　褐　色　土　(いくらか締まりをおびている)

第110号土壙土層解説

1　黒　色　土　(ＹＰ・炭化物を含む)
2　〃　(１に同じ，焼土粒子が多くなる)
3　暗　褐　色　土　(よく締まりＹＰを含む)

第126号土壙土層解説

1K　暗　褐　色　土　(混貝土層)
2　橙　色　土　(焼土，熱を受けサラサラしている)
3K　黒　褐　色　土　(混貝土層，焼土ブロックを含む)
3K′　〃　(３Ｋに同じ，焼土ブロックがない)
4　暗　褐　色　土　(大変固く黒色ハードロームブロックを多く含む)
5　褐　色　土　(ハードロームブロックのみ)

第127号土壙土層解説

1K　黒　褐　色　土　(混貝土層)
2　〃　(締まり弱くハードロームブロック含む)
3　〃　(ロームブロック・炭化物含む)
3′　〃　(３より多少締まりあり)
4　暗　褐　色　土　(ロームを多く含む)
5　黒　褐　色　土　(締まりなくハードロームブロック・炭化物を含む)
6　〃　(ロームブロック含む)
7　ハードローム層

第136号土壙土層解説

1　暗　褐　色　土　(極めて固くハードロームブロックを多く含む)
2　〃　(ハードロームブロック・炭化物を含む)
2′　〃　(２より混入物がより多くなる)
2K　〃　(混貝土層)

第155号土壙土層解説

1　暗　褐　色　土　(ＹＰ含む)
2　極暗褐色土　(粘性あり，焼土粒子含む)
3　黒　褐　色　土　(少量のハードローム粒子を含む)
4　暗　褐　色　土　(少量のハードローム・焼土粒子を含む)
5　〃　(焼土粒子を含む)

第164号土壙土層解説

1　暗　褐　色　土　(よく締まりハードロームブロックを含む)
1K　〃　(混貝土層)
2　黒　褐　色　土　(ハードロームブロックを含む)
3　暗　褐　色　土　(よく締まりハードロームブロックを含む)

第176号土壙土層解説

1K　黒　褐　色　土　(混貝土層，焼土・炭化物を含む)
2K　〃　(混貝土層，炭化物を多く含む)
3　〃　(締まりなく粘性あり)
4　黄　褐　色　土　(ハードロームブロックのみ)
5　暗　褐　色　土　(よく締まりハードロームブロックを含む)

第178号土壙土層解説

1K　黒　褐　色　土　(混貝土層，よく締まりハードロームブロックを含む)
1K′　〃　(混貝土層，締まりなし)

第184号土壙土層解説

1　黒　褐　色　土　(締まり弱く灰・焼土粒子を含む)
2　〃　(よく締まり焼土粒子・炭化物・ハードロームブロックを含む)
3　〃　(締まり弱く炭化物・焼土粒子・ハードロームブロック含む)
4　暗　褐　色　土　(よく締まり焼土粒子・灰・炭化物・ハードロームブロックを含む)
5　褐　色　土　(ハードロームブロックのみ)

第190号土壙土層解説

1　極暗褐色土　(固く締まりハミス・ＹＰ・ハードロームブロックを含む)
1′　〃　(１より黄色味を帯びる)
2　黒　褐　色　土　(固く締まりハードロームブロックを含む)
3　黄　褐　色　土　(ハードロームブロックのみ)

第199号土壙土層解説

1K 暗褐色土 (混貝土層，焼土粒子を含む)
2K 〃 (混貝土層，1Kより貝が少ない)
3 にぶい黄褐色土 (固く締まり炭化物・ハードロームブロック・貝破片を含む)
4 黄褐色土 (ハードロームブロックのみ)

第207号土壙土層解説

1 褐色土 (YP・ローム粒子・焼土粒子などを含む)
2 〃 (YP・ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む)
3 〃 (YP・ローム粒子・ロームブロックを含む)
4 〃 (ローム粒子・ブラックハードロームブロックを含む)
5 暗褐色土 (ブラックハードロームブロックを含む)

第211号土壙土層解説

1 黒褐色土 (混貝土層)
2 暗褐色土 (よく締まりロームブロック・YPを多く含む)
2′ 〃 (2よりロームブロックが少なくなる)
3 黒褐色土 (締まり弱くYP・ハードロームブロックを少量含む)
4 〃 (締まり弱くブラックハードロームブロックを含む)
5 褐色土 (ローム)

第225号土壙土層解説

1 黒褐色土 (よく締まりハードローム粒子及び焼土粒子を含む)
2 〃 (よく締まり焼土粒子・炭化物を含む)
3 極暗褐色土 (よく締まり炭化物を含む)
4 暗褐色土 (ハードロームブロックを含む)
5 褐色土 (よく締まりハードロームブロック・炭化物を含む)
6 暗褐色土 (よく締まりハードロームブロックを含む)
7 〃 (よく締まりハードロームブロックを含む)

第227号土壙土層解説

1 黒褐色土 (よく締まりYP・炭化物を含む)
2 暗褐色土 (少量のハードローム粒子を含む)
3 〃 (締まりを帯びハードローム粒子を含む)
4 極暗褐色土 (よく締まりハードロームブロック・焼土粒子を含む)

第201号土壙土層解説

1 極暗褐色土 (よく締まり少量のYPを含む)
2 黒褐色土 (YP・炭化物を含む)
3 〃 (YP・炭化物・焼土粒子を含む)
4 〃 (YP・炭化物を含む)
5 暗褐色土 (YPを含む)
6 黒褐色土 (YP・ハードロームブロックを含む)

第205号土壙土層解説

1 黒褐色土 (よく締まりパミス・YP・焼土粒子を含む)
2 暗褐色土 (よく締まりロームブロックを含む)
3 〃 (よく締まりハードロームブロック・パミスを含む)
4 褐色土 (よく締まり粘性あり，ブラックハードロームブロックを含む)
5 暗褐色土 (よく締まりブラックハードロームブロックを多量に含む)

第216号土壙土層解説

1 黒褐色土 (固く締まり焼土粒子・炭化物・ハードロームブロックを含む)
1K 純貝層
2 暗褐色土 (締まり弱くYP・ハードロームブロックを含む)
2K 〃 (混貝土層)
3 〃 (極めて固くブラックハードロームブロックを含む)
4 〃 (固く締まりハードロームブロック・YPを含む)

第226号土壙土層解説

1 暗褐色土 (よく締まり焼土粒子を含む)
2 極暗褐色土 (少量のハードローム粒子を含む)
3 〃 (YPを含む)
4 黒褐色土 (少量のハードロームブロック・炭化物を含む)
5 暗褐色土 (締まり弱くYP・炭化物を含む)
6 黒褐色土 (少量のYPを含む)

5 暗褐色土 (よく締まり多量のハードロームブロックを含む)

3．溝

本遺跡では住居址・土壙の他に，溝が2条検出された。以下その概要を記す。

第1号溝（実測図　図122，遺物　図123・124・125）

本址は調査区東側に位置し，D2区よりC3区にかけて縦断する形で検出された。確認された範囲の南端は $D2e_8$ であり，N－19°－Eの方向で北北東に一直線に延び，$C3a_3$ 地区まで確認できた。これ以北については建物のコンクリート基礎などが残り，調査不可能であった。いずれにしても調査区内で切れてしまうことはないと思われるので，多分遺跡北側の陸田まで延びていると考えられる。

溝断面は逆台形を呈し，上幅 1.08～1.75m，深さ 0.67～0.78m，底幅 0.25～0.55m を測る。壁及び底部は極めて硬いロームから成り，掘られた当初は，表土下第2層にあたる黒色土層の最上面から掘り込まれていたものと思われる。

覆土は場所により多少の差異はあるが，基本的には3層に分けられる。暗褐色土及び極暗褐色土が主で，C3区の貝層堆積地区においては，表面はもちろん溝内部まで貝の堆積がみられた。この貝層はC3区に広がる大きな貝層を本址が分断して掘られ，その後に両側から貝が流れ込んで形成された状態を示している。したがってC3区の貝層が形成された後に本址が造られたことが推測できる。

本址底部のレベルをみると，$D2b_9$ 内で 10.66m を示し，$C2i_0$ で 9.93m，$C3d_2$ で 10.92m，$C3a_3$ で 10.15m である。確認された範囲内でのレベル差は最高 0.98m である。この結果をみると必ずしも一方向に傾斜を有しているわけではないことがわかる。むしろ確認された範囲では中央部が最も低く，両端部が高くなり，水などは流れるよりも溜まってしまうことになる。

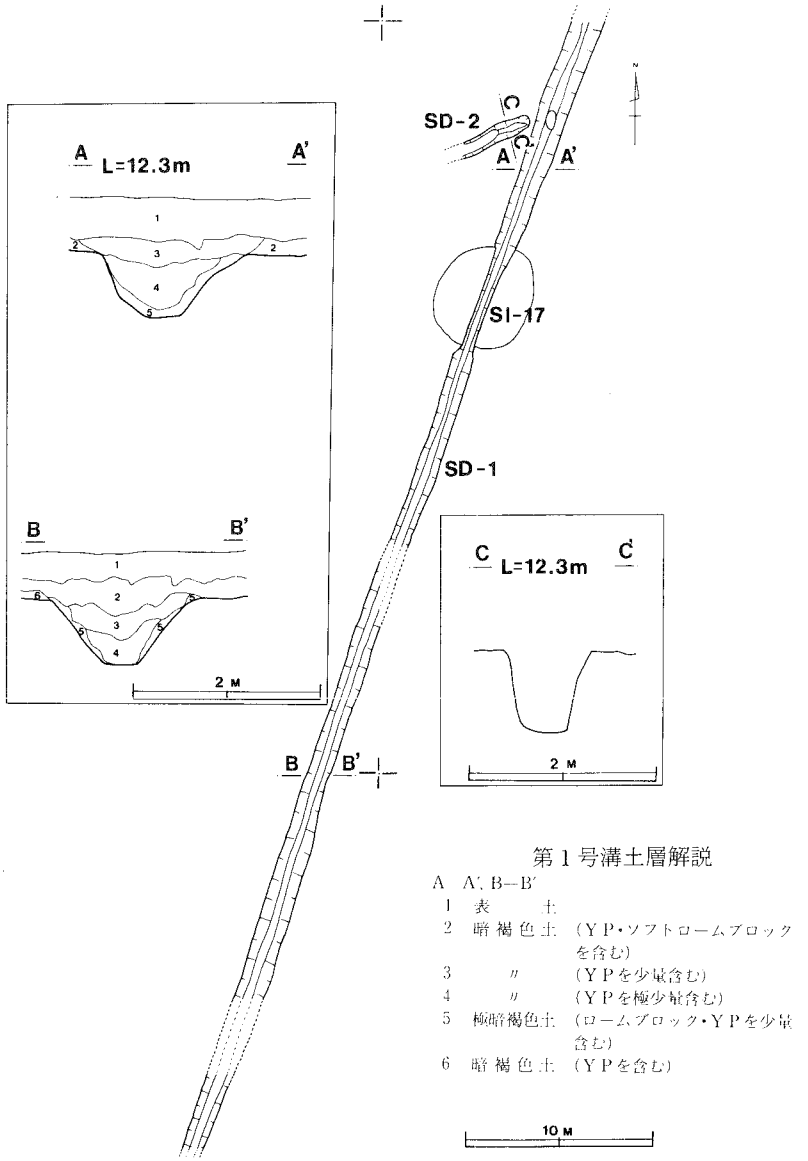
出土遺物はすべて縄文後期に属するとみられるものだけで，完形品は1点もなく土器片のみである。この土器片の断面形状をみると，摩滅して丸くなっており，覆土とともに流れ込んだ遺物と考えられ，溝が掘られた当時の遺物とみることには無理である。前述の貝の堆積状況，そして本址が加曽利B期の住居址や土壙を切って走っていることなどから考えると，古くみても縄文後期中葉以降に掘られた溝であると判断したい。

第2号溝（実測図　図122，遺物　図125）

本址は $C3b_2$ 区において検出された溝状遺構である。第1号溝に合流していると思われたが，調査の結果，単独の溝状遺構であることが判明した。西側は通路になっているため確認できなかったが，C2区には本址に続く遺構は検出されていないためそれほど長くはないと判断される。

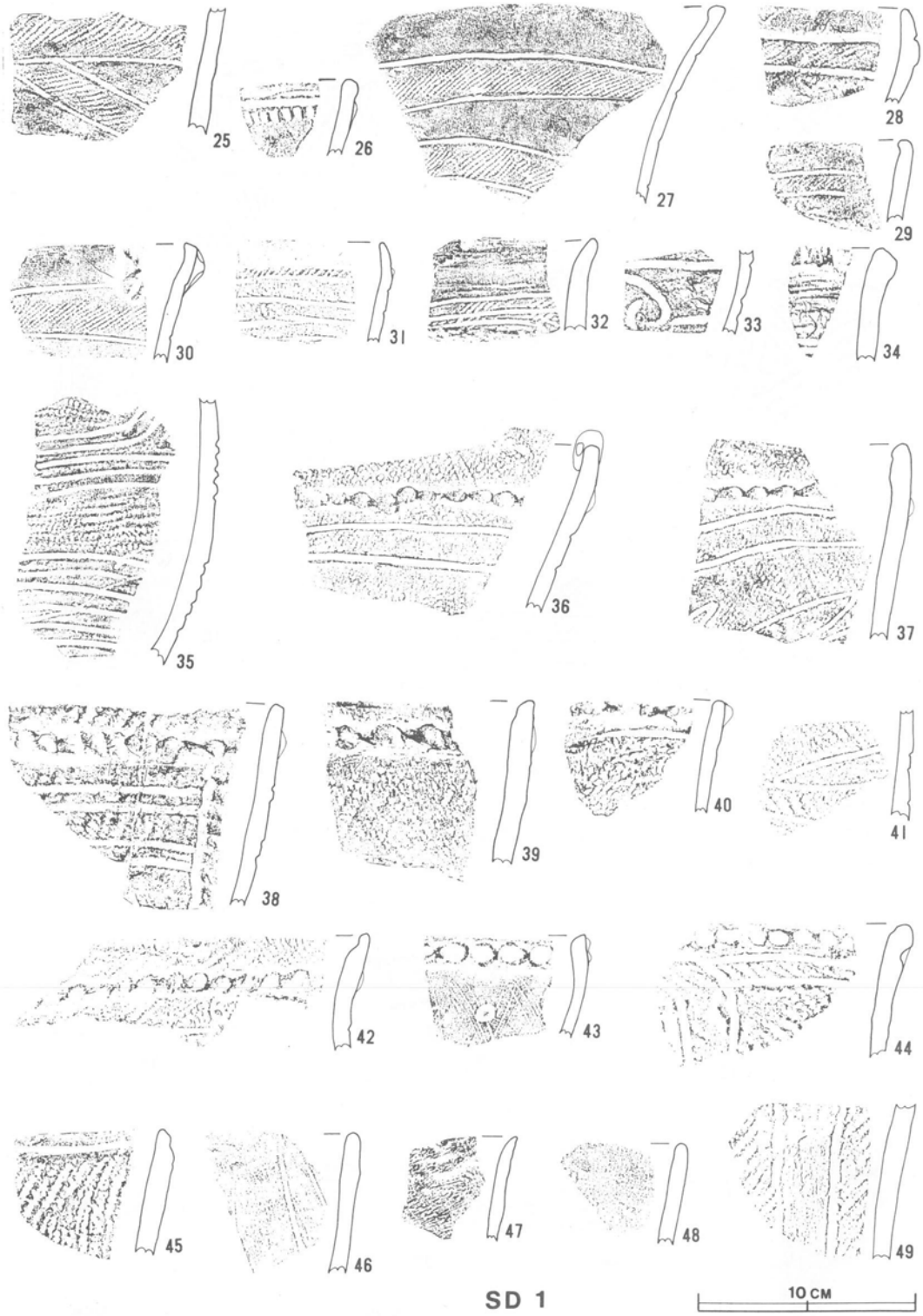
確認全長は約 3.8m，走行方向N－63°－Eで，上幅 0.77～0.92m，深さ 0.87～0.94 m，底幅は 0.38～0.65 mである。壁は急角度で外反して立ち上がっており，底部は中央部がやや低くなり，東側は1段落ち込んでいる。全体的に底部は第1号溝の方向にゆるい傾斜を有しているが，合流することなく手前で切れてしまっている。

出土遺物は縄文後期に属すると思われる土器片多数と他に磨石がある。覆土から土偶の上半身部が出土した。この土偶は後に $C2a_4$ 地区から出土した下半身部と接合することができた。



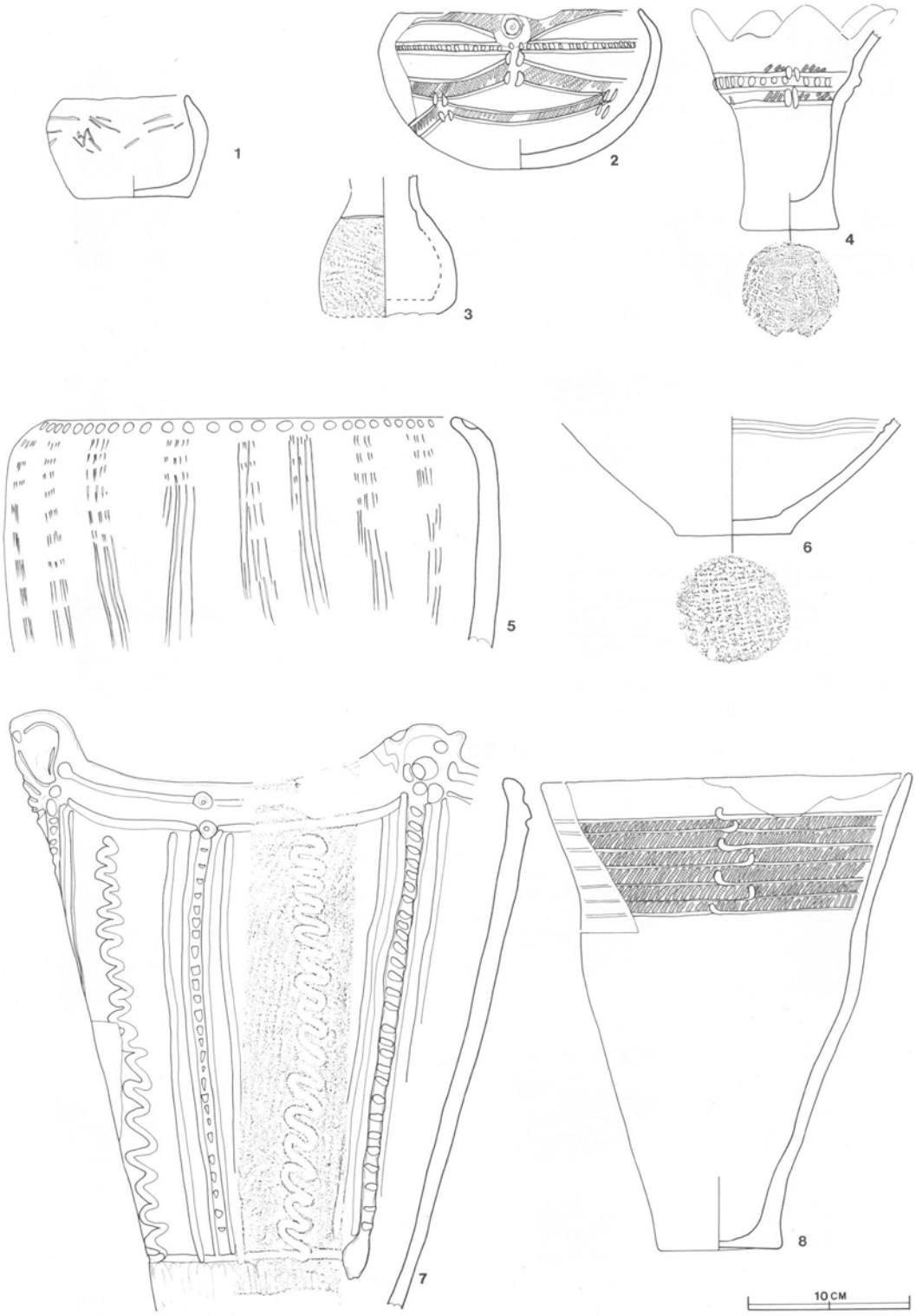
第122図　第1・2号溝

第123図　溝出土遺物

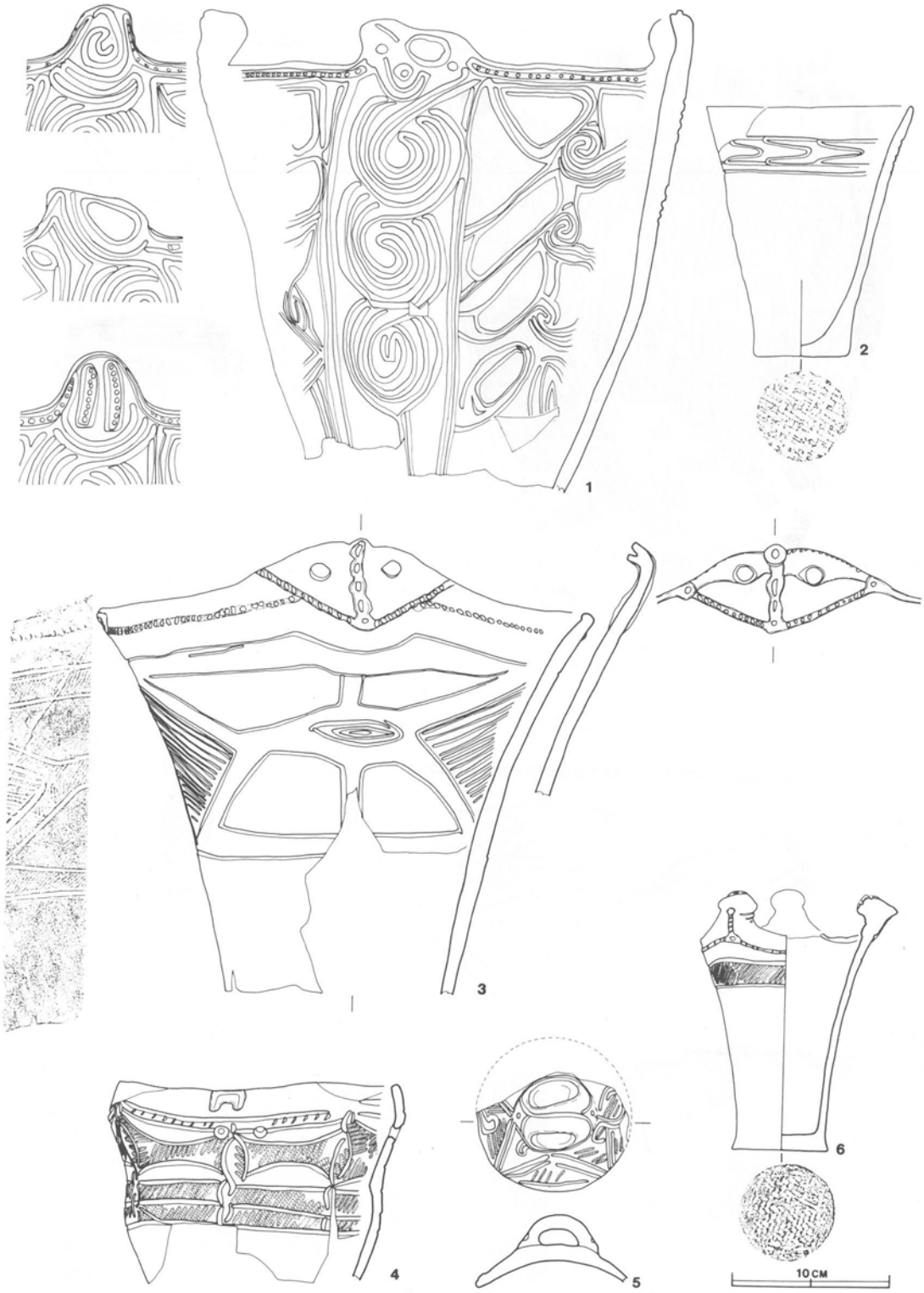

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
SD 1
10 CM

第124図　溝出土遺物

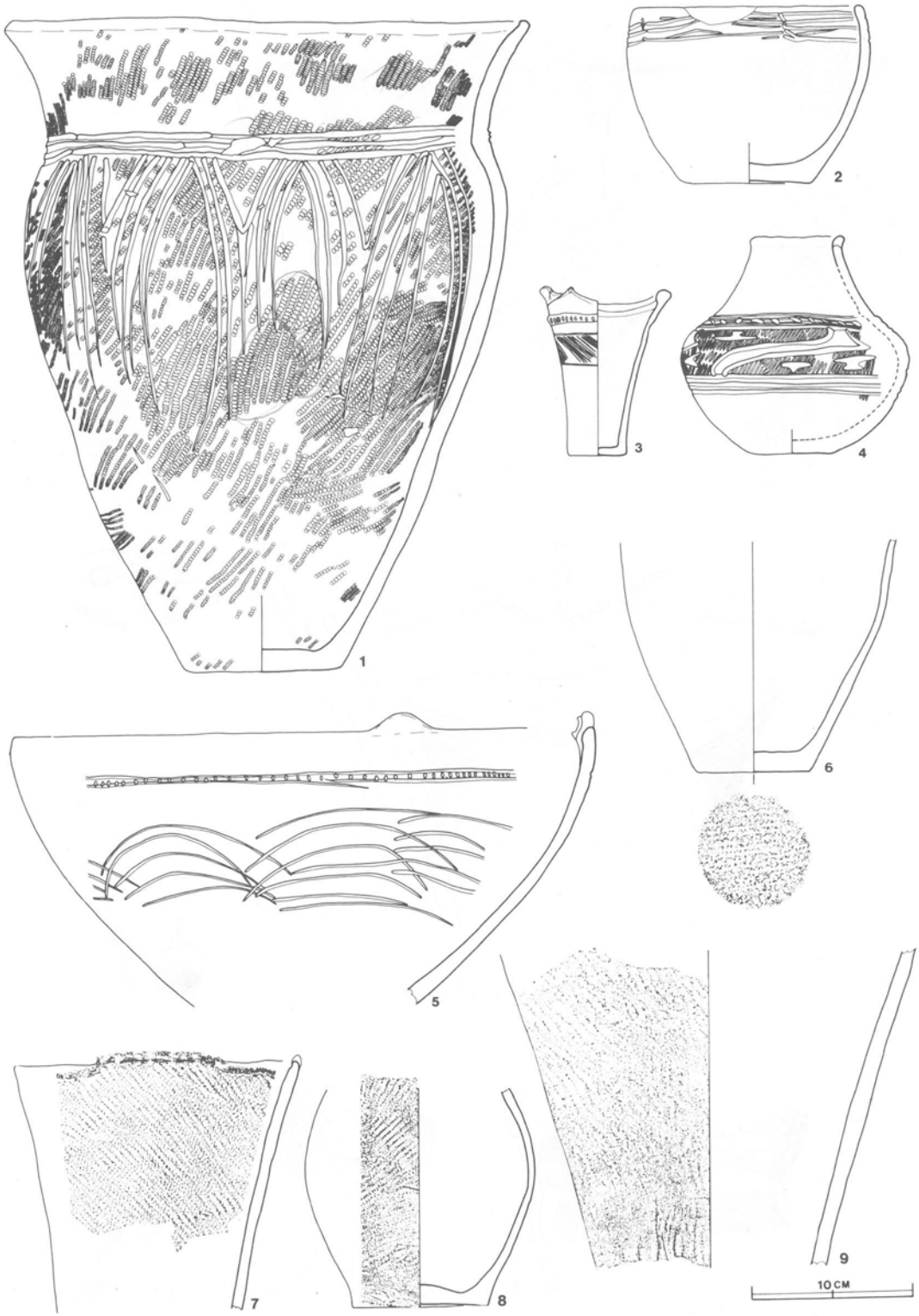
第125図　溝出土遺物



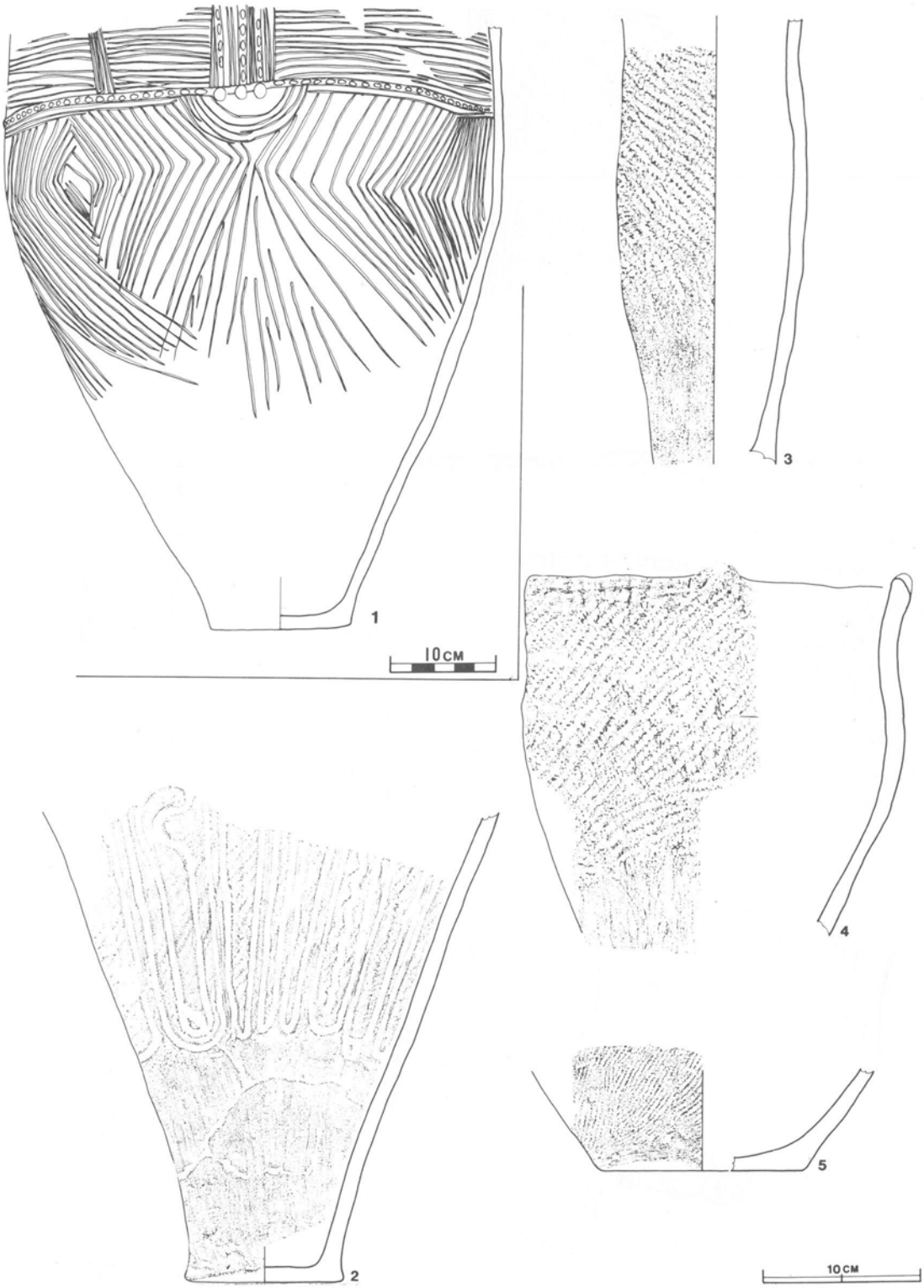
第126図　グリッド出土遺物



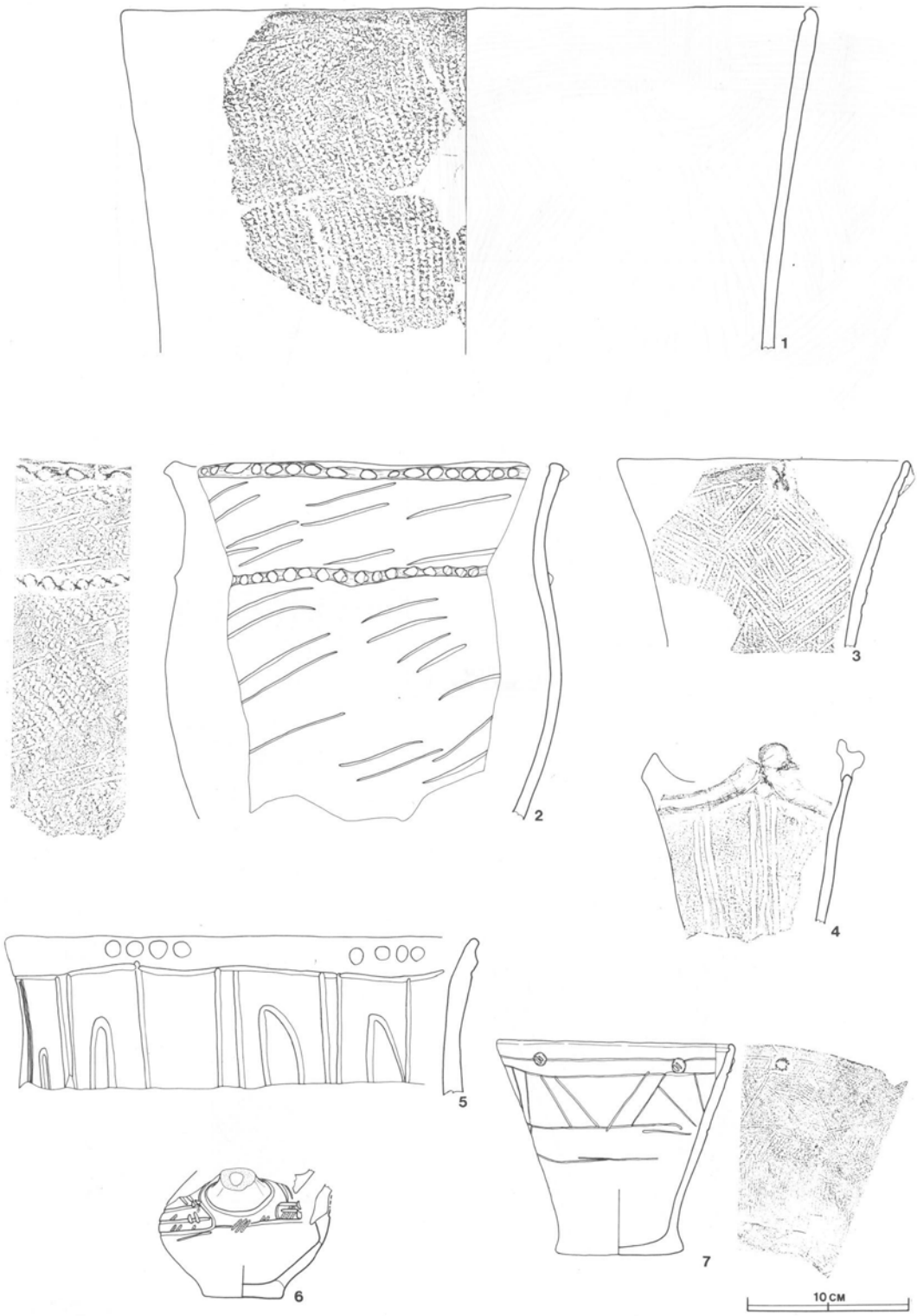
第127図　グリッド出土遺物



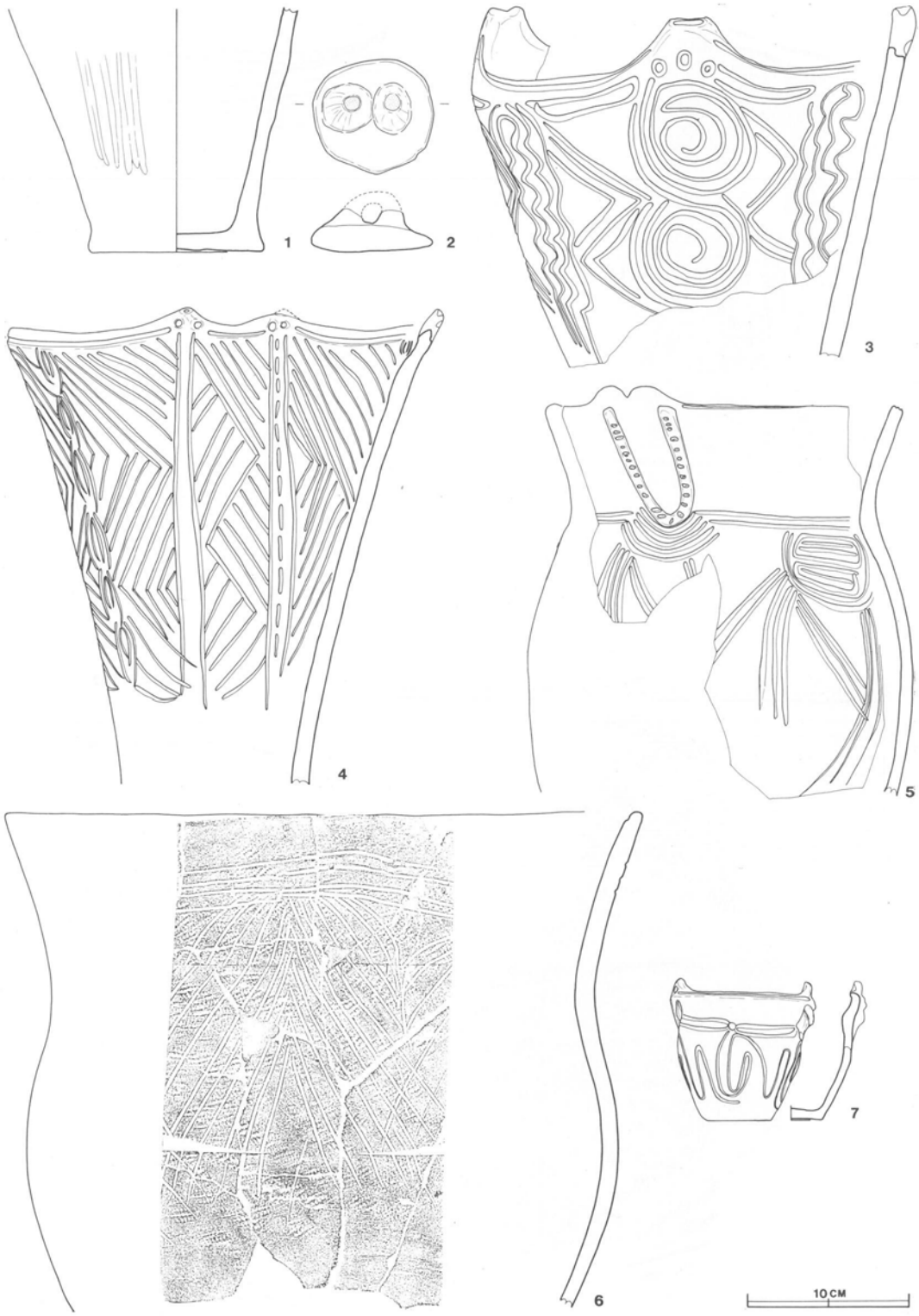
第128図　グリッド出土遺物



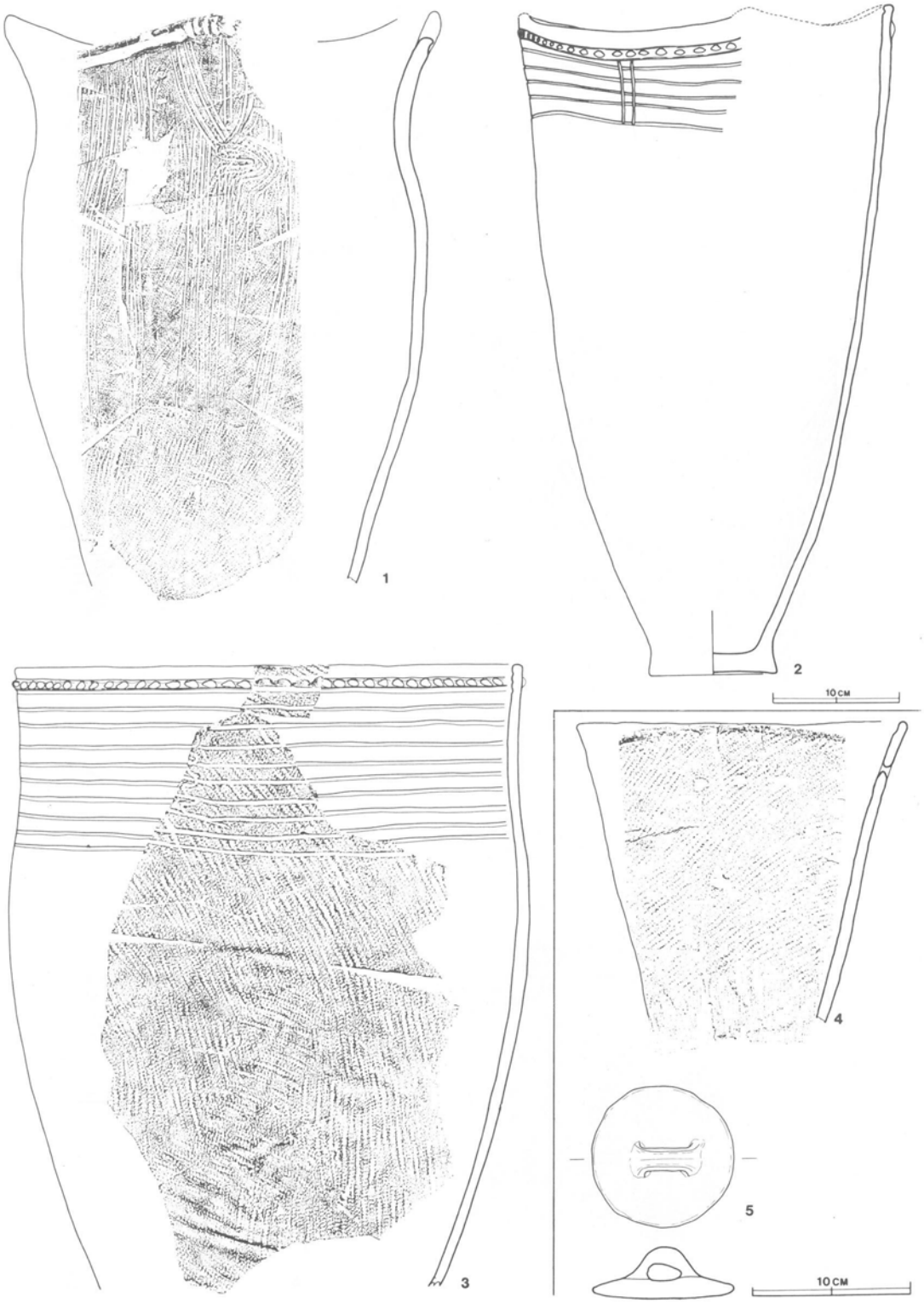
第129図　グリッド出土遺物（5-SK150）



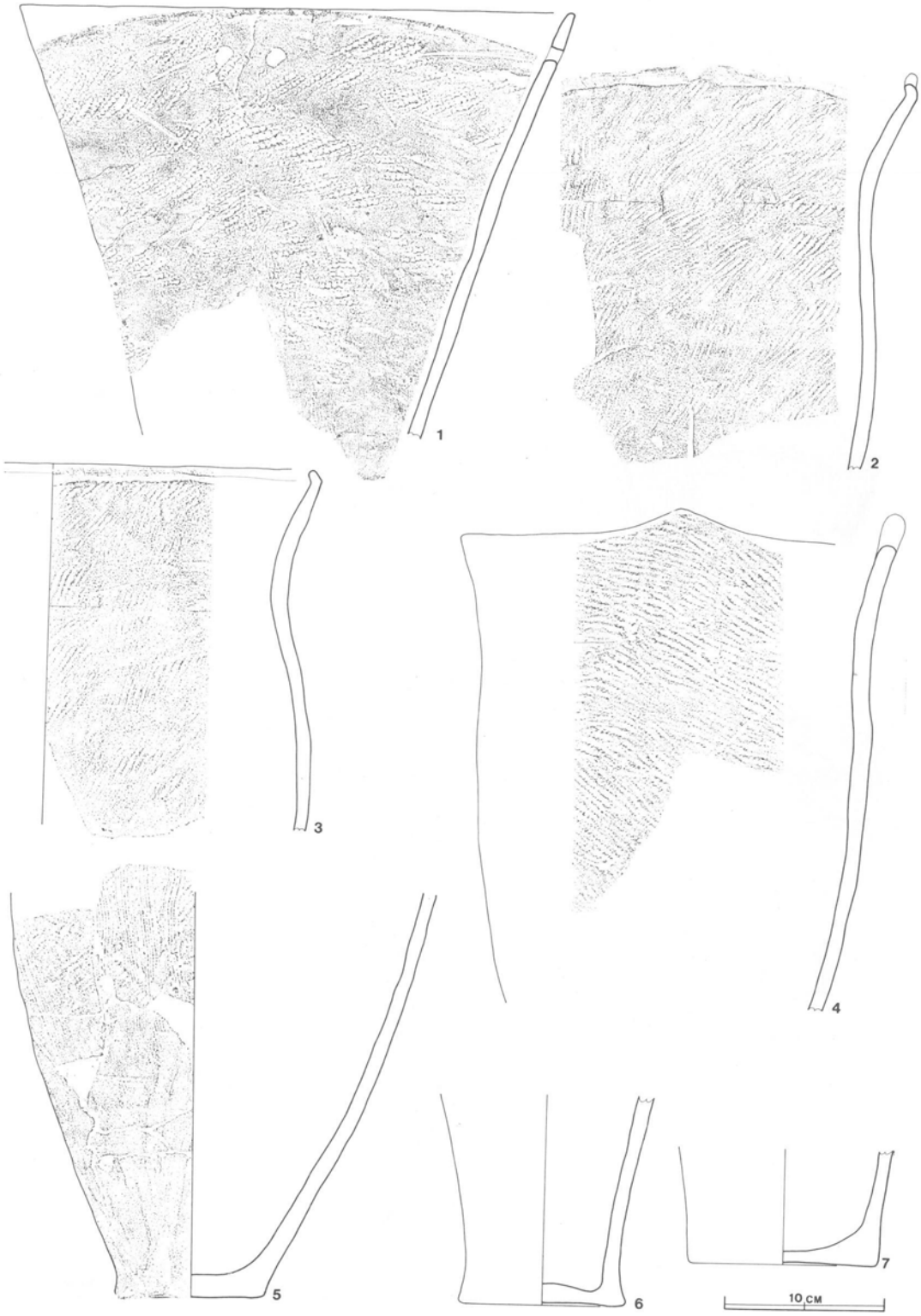
第130図　グリッド出土遺物



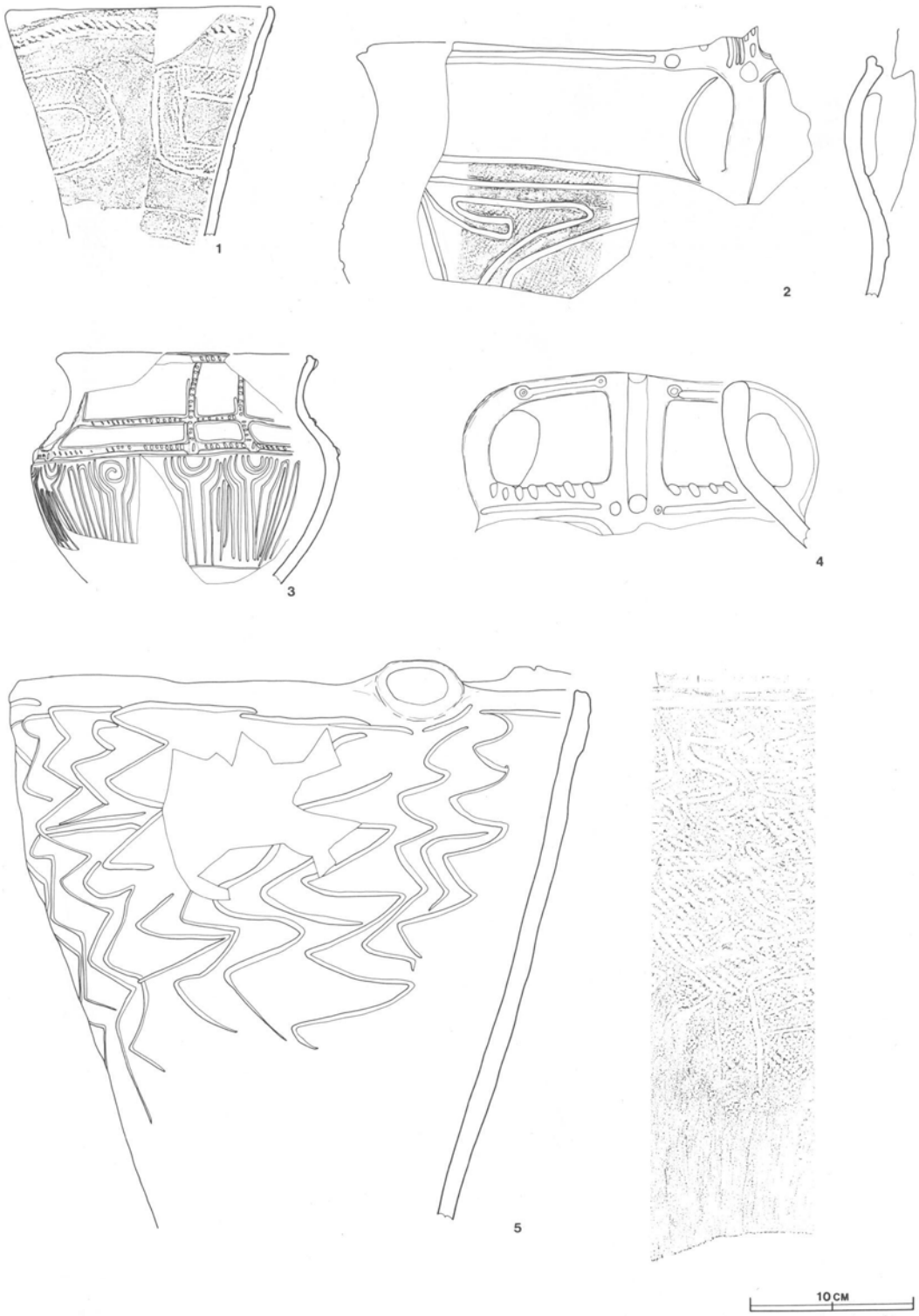
第131図　グリッド出土遺物



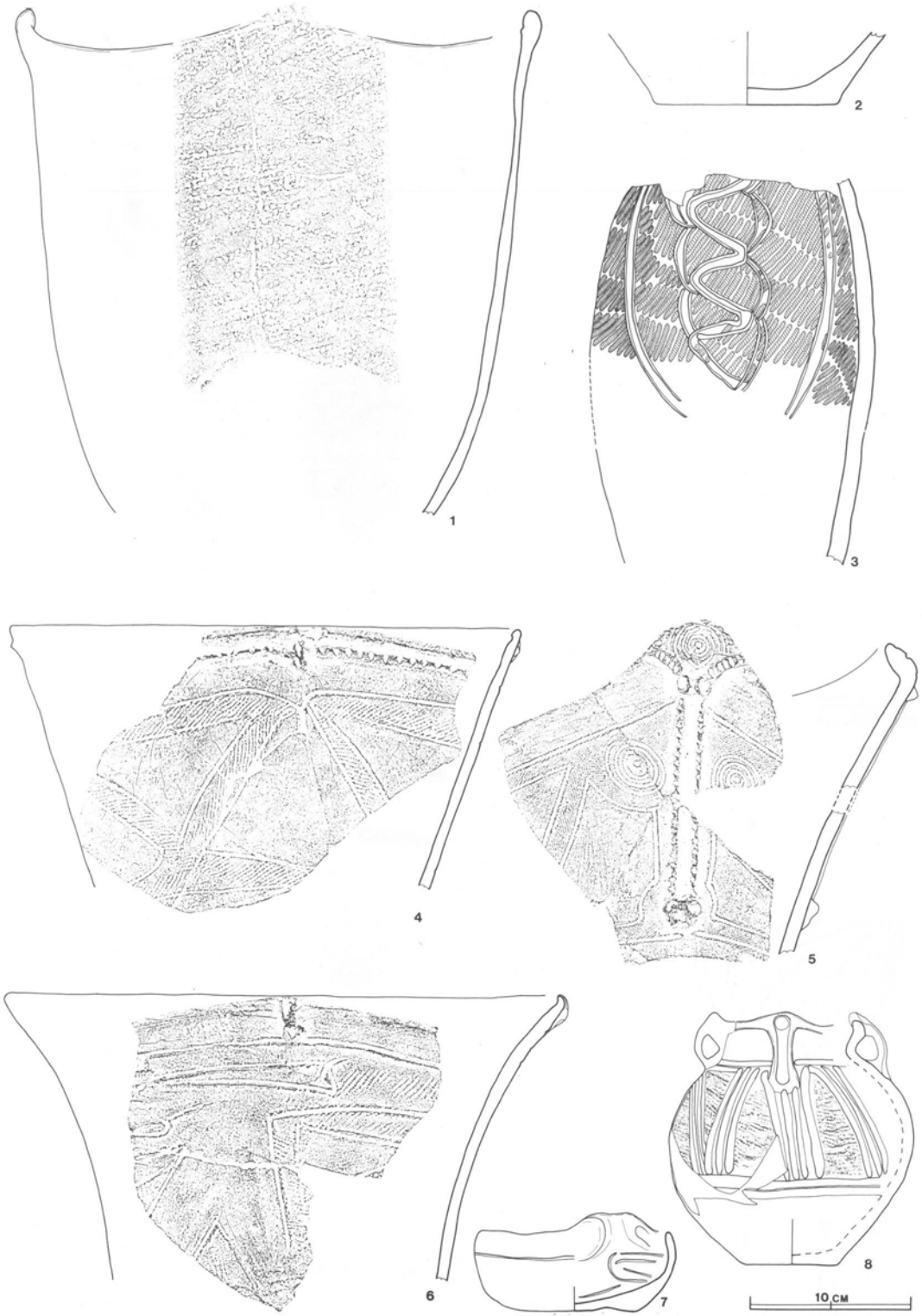
第132図　グリッド出土遺物



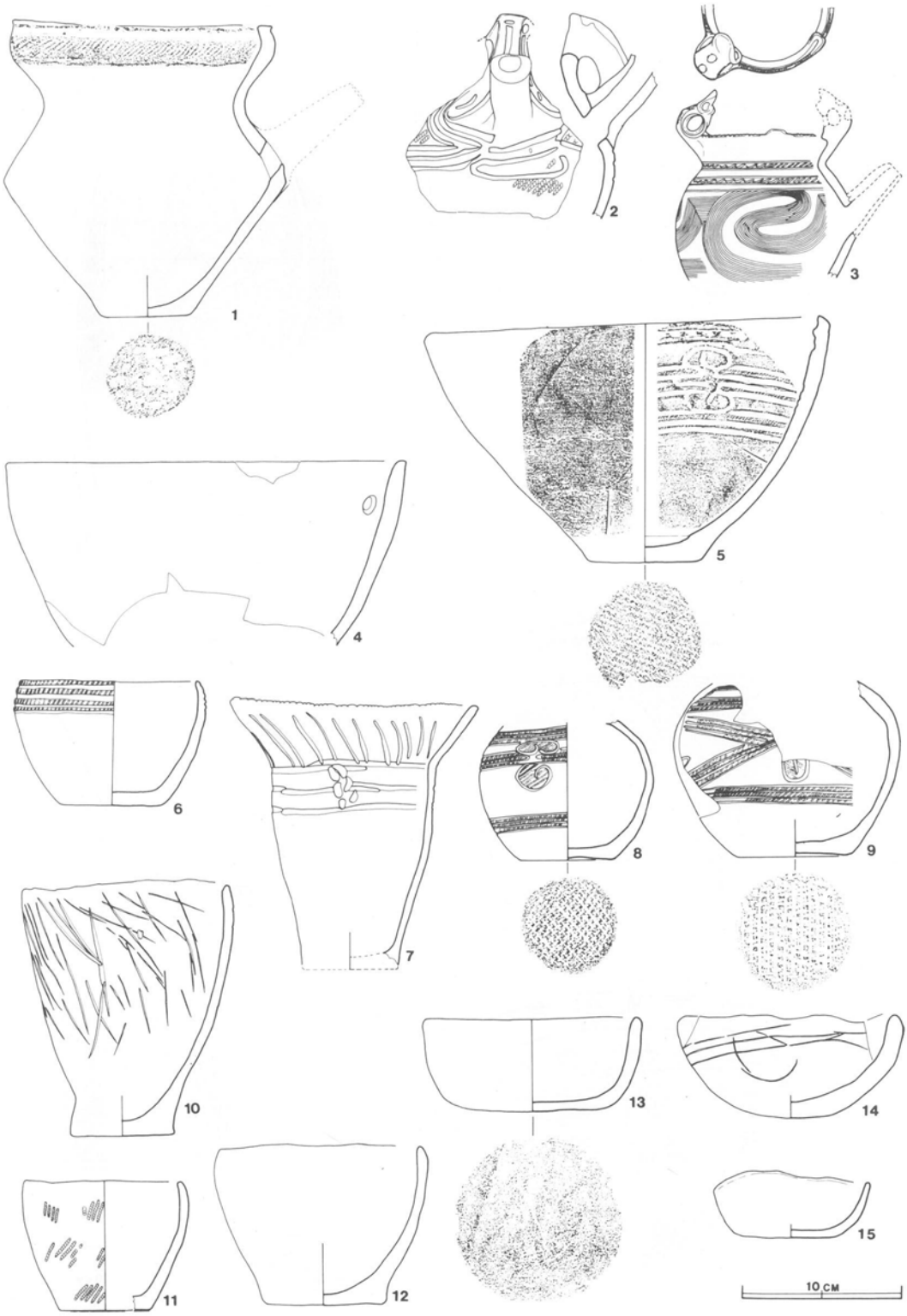
第133図　グリッド出土遺物



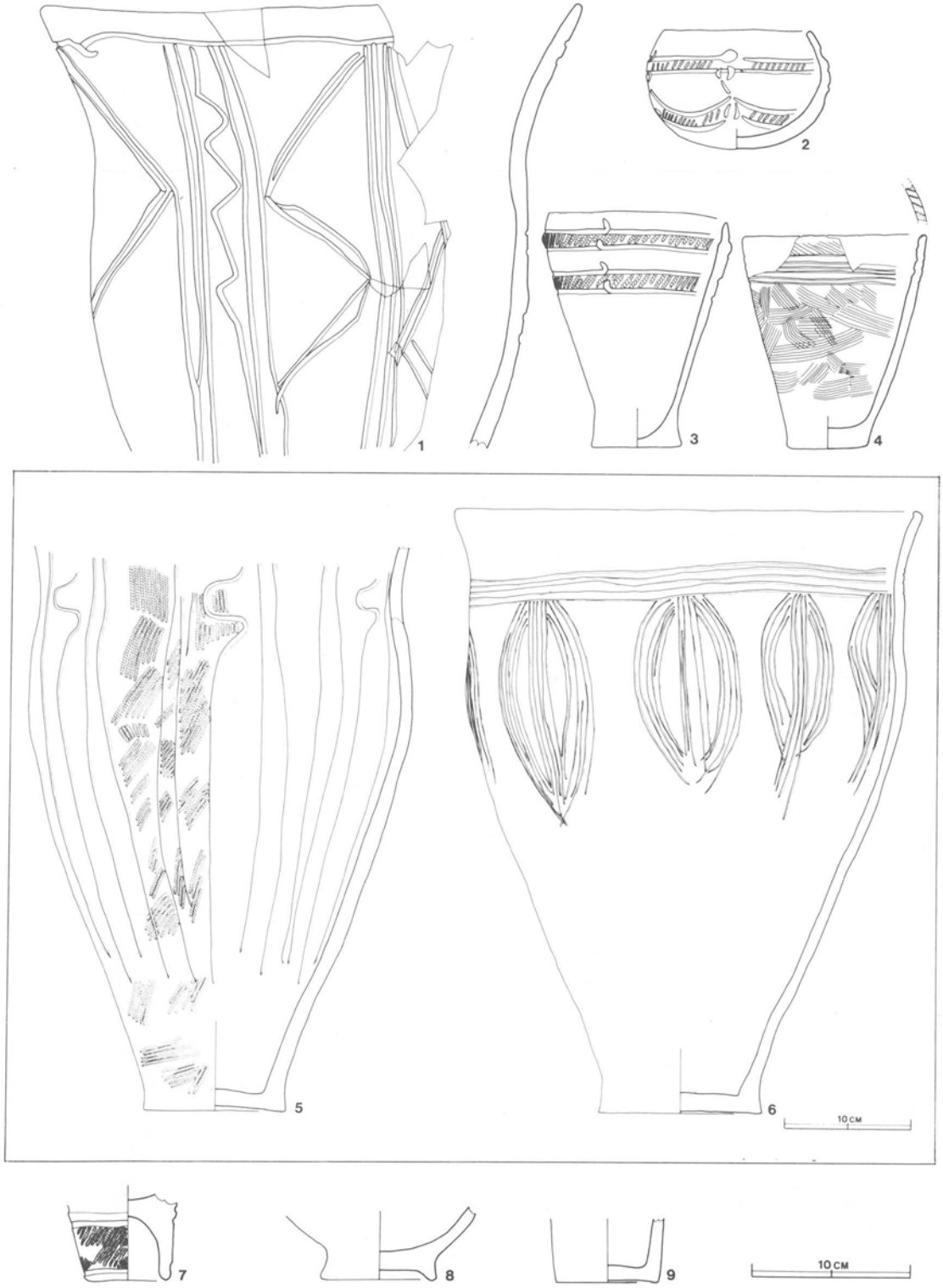
第134図　グリッド出土遺物



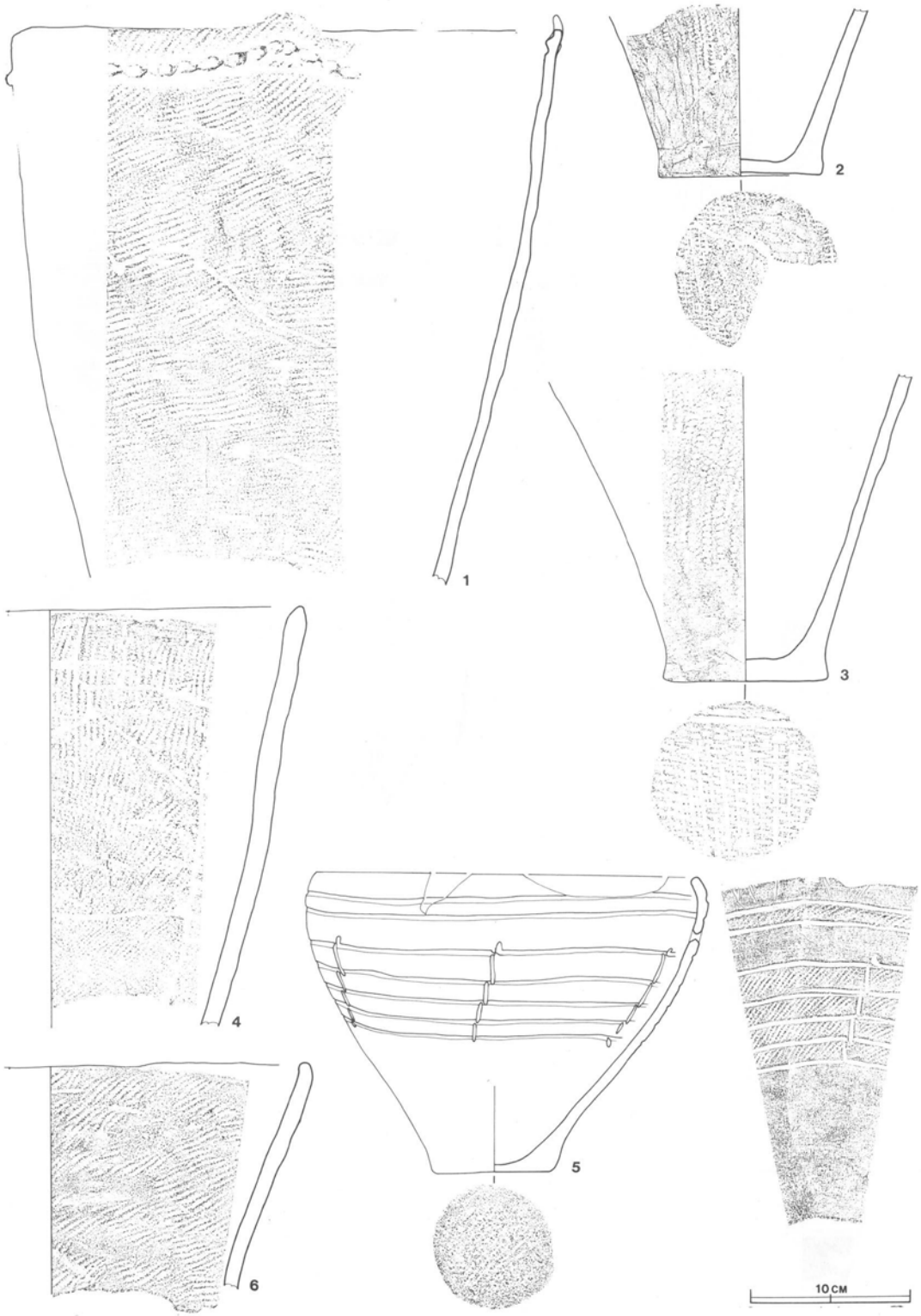
第135図　グリッド出土遺物



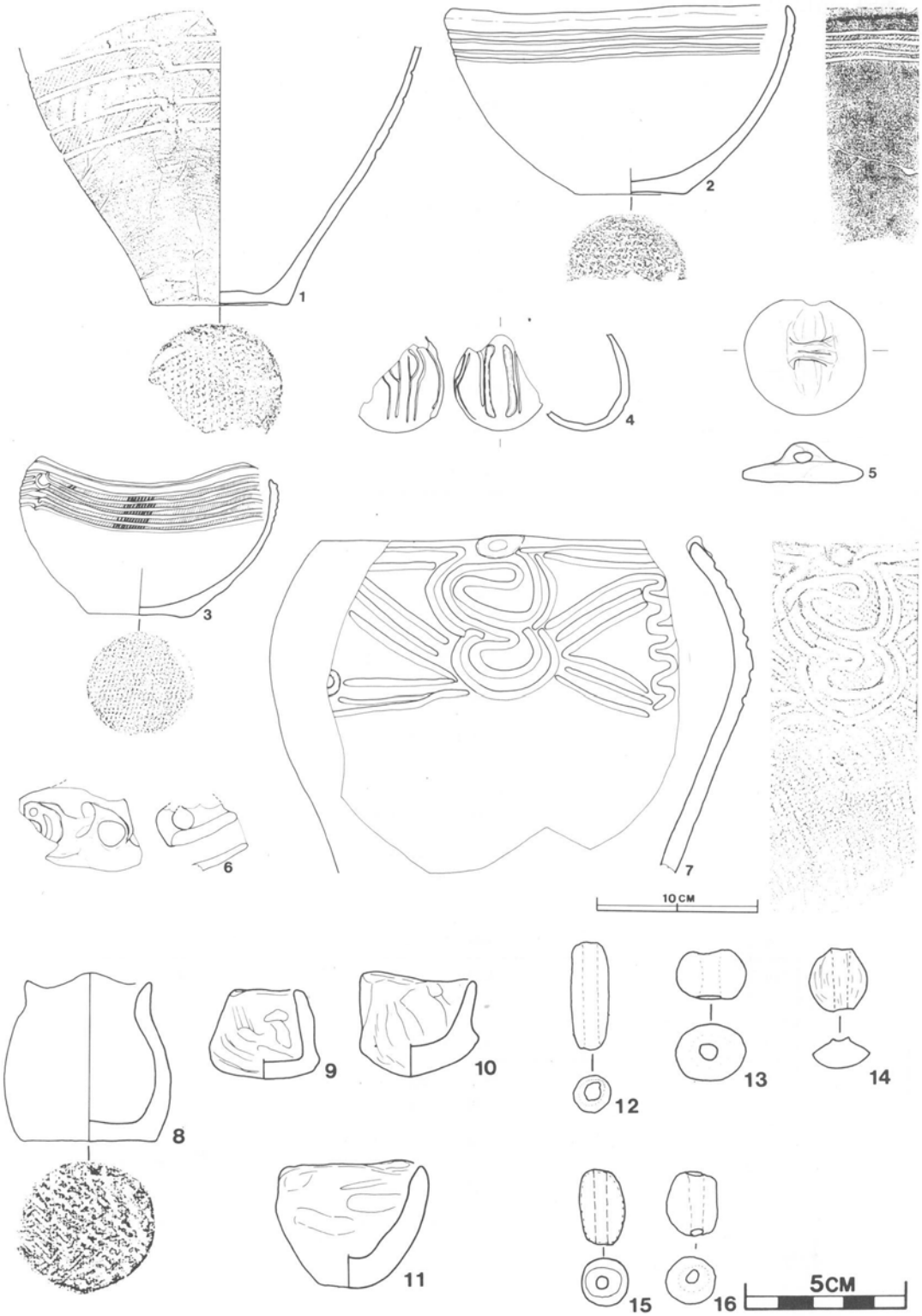
第136図　グリッド出土遺物



第137図　グリッド出土遺物



第138図　グリッド出土遺物



第139図　グリッド出土遺物

表69　第123図　溝出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SD—1	1	口縁部		外側は無文。内側に刺突文を3段に施文する。補修孔あり	中期
	2	キャリパー形		キャリパー形を呈し，太い沈線で区画される。地文は縄文	〃
	3	口縁部		沈線文。地文は縄文	
	4	〃		口縁に平行な沈線を有し，円弧文を描く	
	5	〃		弧状の沈線が縦位に施文される	
	6	〃		波状口縁を呈し，円形刺突文から蛇行沈線が垂下する	
	7	胴部		蛇行沈線が垂下する	
	8	口縁部		沈線により幾何学的な文様を構成する。地文は縄文	
	9	〃		横位の沈線を数条施文し，縦位の蛇行沈線を加える	
	10	〃		波状口縁の突起部で刺突文を有す	
	11	〃		口縁部に粘土粒を貼り付け，沈線で角形の文様を描く	
	12	〃		沈線で幾何学的文様を施す。地文は縄文	
	13	〃		沈線で四角文を施す	
	14	〃		斜沈線が充填される	
	15	〃		左下がりの斜沈線を施文する	
	16	〃		口縁に平行な沈線が6本施文される。地文は縄文	
	17	〃		斜行沈線が左下がり→右下がりの順で施文される	
	18	〃		隆線を有し，沈線で区画された縄文帯を施す	
	19	〃		隆線の上に刺突を施し，沈線で区画された縄文帯をもつ	
	20	〃		波状口縁を呈し，沈線と刺突がみられる	
	21	〃		無文ヘラ整形痕が残る。内側には5本の平行沈線がみられる	
	22	〃		口縁に平行な2本の沈線を有する	
	23	〃		沈線文	
	24	〃		波状口縁を呈し，貫通孔をもつ	

表70　第124図　溝出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量(cm)	表面・裏面の特徴	備考
SD-1	25	胴部		沈線で区画された内側に縄文を充填する	
	26	口縁部		口縁に平行な沈線を配し，下部に刺突文を加える	
	27	〃		外反して立ち上がる口縁部で沈線で区画された縄文帯を有する	
	28	〃		内彎する口縁で沈線で区画された縄文帯を有する	
	29	〃		沈線で区画された縄文帯をもつ	
	30	〃		No.27と同一個体。8の字状の貼り付けが加わる	
	31	〃		口縁に沿って細いスリットのある隆帯を有し，それに平行な沈線を数条配する	
	32	〃		横位の沈線間に斜沈線を施文する	
	33	胴部		沈線による入組文が施文される	
	34	口縁部		横位の沈線を施し，口唇部に刺突がみられる	
	35	胴部		横位の沈線を主に施す。地文は縄文	
	36	口縁部		ゆるやかな波状口縁を呈し頂部に粘土紐の貼り付けを施す。口縁部には紐線を付し，横位の沈線をめぐらす	
	37	〃		No.36と同一個体。鋭角に屈曲する沈線が加わる	
	38	〃		口縁部に紐線を付し，横位及び縦位の沈線を施文する	
	39	〃		口縁部に紐線を付す。胴部は縄文	
	40	〃		口縁部に紐線を付し，部分的に沈線を走らせる	
	41	胴部		屈曲する沈線がみられる	
	42	口縁部		口縁部は外反し，紐線を付す	
	43	〃		紐線を付し，斜交沈線を施文する竹管刺突がみられる	
	44	〃		口縁部に円形の刺突を連続に施し，横位及び縦位の沈線を施文する	
	45	〃		口縁に平行な沈線を有する。地文は縄文	
	46	〃		ヘラ整形後沈線を施す	
	47	〃		縄文	
	48	〃		縄文	
	49	胴部		縦位の沈線間を磨消す。地文は縄文	

表71　第125図　溝出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SD－1	50	口縁部		2本の沈線間に刺突を充填する	
	51	〃		縄文	
	52	〃		縄文	
	53	〃		口唇部に浅い圧痕を持ち，平行沈線間に刺突を施す	
	54	〃		まばらな縄文	
	55	〃		口唇部内側に沈線を有する。縄文	
	56	〃		口唇部内外面に沈線を施す。縄文	
	57	〃		口唇部に刺突文列を有し，右下がり→左下がりの順に斜位の沈線を施文する	加曽利B式
	58	〃		平行沈線間に刺突を加える。縄文	〃
	59	〃		鉢形土器で6本の平行沈線間を縦位の沈線で階段状に区画する	〃
	60	〃		口縁は直立気味で，5本の平行沈線文を有し，縦位沈線を階段状に施す	〃
	61	〃		口唇部に刺突を有し，内側に5本の平行沈線を施文する	〃
	62	〃		表は横方向のヘラ整形。裏は削りによる段差をもち6本の平行沈線を施文する。沈線間に縄文あり	〃
	63	胴部		表は無文。裏は削りによる段差を有し，数条の平行沈線を施文する。沈線間に刻みがはいる	〃
SD－2	1	口縁部		沈線文	
	2	〃		沈線で文様を描く	
	3	〃		斜行沈線を施す	
	4	胴部		くびれ部に横位の沈線と刺突文列を有し，上段は左下がり，下段は右下がりの沈線を施す	
	5	口縁部		口唇部に浅い圧痕文がみられ，平行沈線が数条横走する	
	6	〃		口唇部に紐線文を有する。縄文	
	7	〃		口唇部に列点刺突を有し，右下がりの斜沈線を施す	
	8	〃		波状口縁で，口唇部に列点刺突及び沈線を有する	
	9	〃		口唇部に紐線を付す	
	10	〃		口唇部に刺突が加わり，1条の沈線が横走する。地文は縄文	

表72　第126図　グリッド出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
A_2j_8	1	椀形	口径 7.6 器高 6.3 底径 6.7	口縁部が内彎し，沈線文が施される。ヘラ整形	砂粒を含み焼成は良好。にぶい橙色を呈す
A_2i_3	2	浅鉢形	口径 14.8 器高 9.6	口縁部に刺突文列を有し，上下に沈線で区画された弧状の縄文帯を有する	砂粒を含み焼成は良好，灰褐色を呈す (写41－1)
A_2j_2	3	壺形	現存高 8.5	肩部に1条の沈線を有し，他は縄文を充填する	口縁部及び底部の一部が欠ける
A_2j_2	4	小型深鉢形	現存高 11.6 底径 5.7	3本の沈線をめぐらし，間に刺突文及び縄文を埋める。底部は極めて厚い	口縁部は欠くが，波状口縁を呈すると思われる。(写33－3)
B_1e_8	5	深鉢形	口径 25 現存高 14.3	口唇部に指先で押した刺突文列を有し，二又に突起のあるヘラ状工具で刺突及び沈線を縦位に施文する	口縁部内彎し，橙色を呈する
B_1d_8	6	鉢形	現存高 6.6 底径 7	太目の平行沈線をまわす。内・外面ともヘラ磨き手法	スコリア・砂礫を含み，灰褐色を呈す
B_1f_0	7	深鉢形	口径 (31) 現存高 35.5	波頂部から，平行沈線を垂下させ，間に刺突を加える。波頂部間にも同様の施文を施し，蛇行沈線が垂下する	堀之内式，波状口縁を呈し，突起は3ヶ所　(写31－2)
B_1b_2	8	深鉢形	口径 22.6 器高 29 底径 7.3	口縁部に7本の沈線を施文し，中にLRの縄文を充填する。なお沈線の一端ははね上がる。下部はヘラナデ	加曽利B式，にぶい黄橙色を呈す。 (写38－2)

表73　第127図　グリッド出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B_1g_0	1	深鉢形	口径 30.5 現存高 30	口唇部に刺突文列を有し，突起部下に渦巻を3段に施文する。これが4単位くり返され，渦巻間は同様の沈線文を充填する	堀之内式。突起部の交様は4ヶ所とも異なっている (写31－3)
B_1g_0	2	小型深鉢形	口径 12.8 器高 15.6 底径 5.7	口縁部に3本の平行沈線を引き，上2本の間にS字状の蛇行沈線を施文する。内面ヘラ磨き	網代痕。焼成は良好で褐灰色を呈す
B_1e_8	3	深鉢 波状口縁	口径 30.5 現存高 24	口縁部に刺突のある細い隆線を付し，以下沈線で幾何学的な文様を区画する	2ヶ所の波頂を有し，内彎する。
B_1b_0	4	深鉢形	口径 (17.2) 現存高 12.2	横位及び弧状の沈線で区画した中に縄文を充填する。縄文帯を（　）状の沈線で区切る	2個の補修孔を有する。砂粒を含み，褐灰色を呈する
B_1d_9	5	蓋	直径 9.7	沈線及び縄文を施す。表裏ともヘラ削り	堀之内式。スコリア細砂粒を含み焼成は良好，橙色を呈す (写41－6)
B_1d_9	6	小型深鉢形	口径 11.0 器高 16.2 底径 6.0	口縁部に3個の突起を有し，刻みを持つ隆帯と帯縄文が口縁に沿って一周する	堀之内式，黄橙色 (写34－2)

表74　第128図　グリッド出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B_1e_8	1	深鉢形	口径 31.5 器高 39.9 底径 9.5	くびれ部に3本の沈線を有し，弧状の沈線を縦位に施文する。地文はＬＲの縄文	堀之内式(写32－1)
B_2d_3	2	鉢形	口径 13.5 器高 11 底径 7.7	口縁部に数本の沈線を階段状に施文する。内外面ともヘラ削り	加曽利Ｂ式，にぶい褐色を呈す (写39－4)
B_2h_2	3	小型深鉢形	口径 7.6 器高 10.2 底径 3.5	波状口縁を呈し，把手は3ヶ所，口縁部に刻みのある隆帯を付し，下部に沈線で区画された縄文帯をもつ	堀之内式，焼成は極めて良好で明褐色を呈す (写34－4)
B_2d_3	4	壺形	口径 5.5 器高 13.4 底径 5.1	頸部及び胴部に，平行沈線を施文し中を，Ｚ字状の磨消縄文で区画する	胴部最大径 14.2cm 焼成は良好で，黒褐色を呈す(写39－8)
B_2g_1	5	鉢形口縁	口径 35.5 現存高 17.9	口縁に平行な沈線間に刺突を加え胴部に逆Ｕ字形の沈線を充填する	口縁部に突起を1ヶ所有する
B_2d_3	6	深鉢底部	現存高 14.2 底径 7.0	外面は，荒いヘラ削り，内面はヘラナデの整形を施し，底部は網代痕	胎土に砂粒，黒雲母を含み，にぶい橙色を呈す
B_2h_3	7	深鉢口縁	口径 15.7 現存高 15.8	口唇部に刺突文を施し，他はＲＬの縄文を充填する	砂粒，スコリアを含み灰褐色を呈す
B_2g_2	8	鉢形	現存高 13.2 底径 8.4	胴中央部が最大径を測り縄文のみ	砂粒を含み，明赤褐色を呈す。胴部最大径 14.2cm
B_2e_3	9	深鉢形	現存高 19.6	縄文のみ。底部は縦方向のヘラ削り	焼成は普通で，赤褐色を呈す

表75　第129図　グリッド出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B_2h_3	1	深鉢形	胴部径 46.0 現存高 61.0 底径 13.2	1条の紐線を付し，上段は横位の沈線下部は円弧文とくの字状の沈線を充填する	焼成は普通で，暗褐色を呈す(写36－3)
C_1a_9	2	深鉢形	現存高 29.5 底径 10.0	蛇行沈線及び縦位の沈線を施文し，下部は切れずに連結する	堀之内式(写31－6)
C_1a_8	3	円筒形	現存高 29.0 胴部最大径 11.9	全面にＲＬの縄文が施文され，胴下半部はヘラ削りがみられる	砂粒を含み焼成は良好である。灰黄褐色を呈する (写37－4)
C_1a_9	4	深鉢形	口径 23.8 現存高 22.4	ＬＲの縄文を充填し，下部はヘラ削りである	口縁部に小突起を有する (写35－6)
SK－150	5	鉢形	現存高 6.3 底径 12.6	縄文のみ。横方向のヘラ整形が底部にみられる	

表76 （第130図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
B_2h_3	1	深鉢形	口径 42.2 現存高 21.0	縄文のみ	焼成は悪く，にぶい褐色を呈す
B_2a_2	2	深鉢口縁部	口径 23.5 現存高 21.8	紐線を口唇部と頸部の2ヶ所に付し，左下がりの沈線を施す，地文は縄文	焼成は良好，スコリア，細砂粒を含有し，精製されている，にぶい赤褐色
B_3e_9	3	深鉢形	口径 (17.8) 現存高	口縁部に8の字状の貼り付けがみられ沈線で幾何学文様を施文する	堀之内式
C_1c_9	4	深鉢形	口径 現存高	波状口縁を呈し，山は3ヶ所，縦位の沈線文が施される	堀之内式
C_1a_9	5	深鉢形	口径 28.7 現存高 9.4	口唇部に4個で1単位の円形刺突文を配し，横位及び縦位の沈線で文様を区画する	焼成は普通で明褐色を呈す
C_1a_0	6	注口土器	胴部最大径(10.4) 現存高 7.7 底径 4.8	横位の沈線及び縦位の沈線を引き，中にまばらな縄文を施す，胴下部はヘラ磨き	胎土は，砂粒が多くにぶい褐色を呈す。堀之内式
C_1a_0	7	小型深鉢	口径 14.4 器高 13.0 底径 7.9	沈線で幾何学的な文様を区画し，中に縄文を充填する，上部の沈線部にボタン状の粘土を貼り付ける，胴下部はヘラ磨き	堀之内式。焼成は良好で明赤褐色を呈す（写33－2）

表77 （第131図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_1a_9	1	深鉢底部	現存高 14.9 底径 10.5	無文，縦方向のヘラ磨き	焼成は良好で，にぶい赤褐色を呈す
C_1c_9	2	蓋	直径 7.5	無文	スコリア，細砂粒を含む，焼成は良好，にぶい橙色（写41－7）
C_2b_5	3	深鉢形	口径 25.6 現存高 21.5	波頂部下に渦巻文を施し，その間に蛇行沈線及び山形文を縦位に施文する	堀之内式，波状口縁で突起は3ヶ所（写31－4）
C_2c_1	4	深鉢形	口径 26.3 現存高 29	2個づつの突起が3単位みられ，平行沈線を垂下し，間に刺突を加える，突起間には弧状，山形状の沈線文を施文する	堀之内式，黒褐色を呈する
C_2a_6	5	深鉢形	口径 22 現存高 24.2	頸部を2本の平行沈線で区切り，上部には，刺突のあるU字形の隆帯を付す，下部は沈線で文様を区画する	堀之内式，明赤褐色を呈す
C_2e_7	6	深鉢形	口径 38.9 現存高 30.6	口縁部に平行な沈線をめぐらし，下部に逆V字状の沈線文を充填する	堀之内式，砂粒を含み黒褐色を呈す
C_2g_4	7	小型深鉢	口径 11.2 器高 8.6 底径 4.0	把手が2個付き円形刺突文から左右に弧状の沈線を引き胴部は沈線で曲線文を施文する	完形，明灰褐色を呈す（写34－1）

表78 （第132図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2a_4	1	深鉢形	口径 33.1 現存高 44.1	波状口縁を呈し頸部がくびれる。口唇に沿って太い沈線を施し，波頂部に円形及び三ヶ月状の刺突を加える。縦位の沈線文を充填する	堀之内式。焼成は良好で灰褐色を呈す
C_2a_9	2	深鉢形	口径 29.4 現存高 51.9	小波状口縁を呈し，口縁部に紐線を付す。5本の平行沈線を施文し，縦位の平行沈線で区画する。地文は縄文	スコリア，砂レキを含み，褐色を呈す （写38　1）
C_2b_5	3	深鉢形	口径 (39.7) 胴部最大径(40.7) 現存高 48.5	口縁部に紐線及び10本の平行沈線を施す。沈線部に蛇行沈線を加える	スコリアを含み，褐色を呈す
C_2c_2	4	深鉢形	口径 20.7 現存高 18.7	口縁部内側がくぼむ。文様は縄文のみ。下部は縦方向のヘラ削り	砂粒・スコリアを含み，焼成は良好である。にぶい赤褐色を呈す
C_2g_0	5	蓋	直径 8.9	表・裏ともヘラ整形。高さ 2 cm の把手がつく	砂粒を含み，焼成は良好。にぶい橙色を呈す　（写41－8）

表79 （第133図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2c_5	1	深鉢形	口径 (34.1) 現存高 26.3	まばらな縄文を施文する	砂粒を含みにぶい褐色を呈する （写35－1）
C_2b_4	2	深鉢形	現存高 23.9	縄文。口唇部にスリットのある小突起がつく	砂粒，スコリアを含みにぶい黄褐色を呈す
C_2a_4	3	深鉢形	口径 (32.0) 現存高 22.3	大きく外反する口縁部で，縄文のみ	砂れきを含みにぶい黄橙色を呈す
C_3d_4	4	深鉢形	口径 26.5 現存高 29.0	波状口縁を呈し，文様は縄文のみ	砂粒スコリアを含みにぶい黄褐色を呈す　（写35－5）
C_2d_3	5	深鉢底部	現存高 25.0 底径 9.2	6～7本で一単位の平行沈線を縦位に施文する。底部はヘラ整形	砂粒スコリアを含み褐色を呈す
C_2i_5	6	深鉢底部	現存高 13.0 底径 10.4	ヘラ整形	砂粒を含みにぶい褐色を呈す
C_2c_4	7	深鉢底部	現存高 7.3 底径 11.7	ヘラ整形	砂粒スコリアを含み褐色を呈す

表80 （第134図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2e_5	1	深鉢形	口径 (16.4) 現存高 13.9	口縁部に，きざみのある隆帯をつけ，胴部に沈線で四角形をかく。中は縄文	砂粒を含み，焼成普通，堀之内式
C_2g_5	2	鉢形口縁部	現存高 15.1	口縁部に把手がつき胴部は沈線で区画し中に縄文をほどこす	長石，スコリアを含み，褐色を呈す
C_2e_7	3	壺形	口径 14.8 胴部最大径 18.8 現存高 14.0	刺突のある隆帯を口縁部に貼り付ける，胴部に沈線をほどこす	砂粒を含み，にぶい橙色を呈す （写37－5）
C_2d_5	4	〃	口径 現存高 9.9	把手が4ヶ所につき，肩部に刺突及び横位の沈線を施文する	砂粒を含み，焼成は良好。にぶい橙色を呈す
C_3d_5	5	深鉢形	口径 34.5 現存高 33.7	口唇部に3ヶ所の刺突をもち，Z字状の屈曲する沈線を垂下させる。地文は縄文	後期。砂粒，スコリアを含み，橙色を呈す　（写36－1）

表81 （第135図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2b_4	1	深鉢形	口径 (30.7) 現存高 30.9	地文は縄文。波状口縁を呈し，口縁部内側に沈線が1本入る	砂粒・スコリア・白雲母を含み灰褐色を呈す
C_2h_2	2	鉢形底部	現存高 4.2 底径 11.2	ヘラ削り及びヘラ磨きの手法による	焼成は普通でにぶい黄褐色を呈す
C_3d_4	3	円筒形	胴部最大径 17.6 現存高 23.6	(　)状の沈線間に2本の蛇行沈線を垂下させる。蛇行沈線の外に弧状の沈線文を配する。地文はLRの縄文	砂粒を含みにぶい橙色を呈す (写37－3)
C_3h_2	4	深鉢形	口径 (31.1) 現存高 16.0	口縁部に刺突のある隆線及び8の字状の貼り付けを有し，沈線で幾何学文を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	砂粒を少し含み焼成は良好，黒褐色を呈す。堀之内式
C_3e_2	5	深鉢形	現存高 19.0	波状口縁。波頂部に同心円文を配し，刺突のある隆線を垂下させる。胴部に幾何学文及び同心円文を施文する	砂粒を含み，灰黄褐色を呈す。堀之内式
〃	6	深鉢形	口径 (34.5) 現存高 17.4	口唇部に8の字状の貼り付け文。沈線で幾何学文を施し，中に縄文を充填する	砂粒，砂礫を含み焼成は良好，にぶい橙色を呈す
C_3g_1	7	浅鉢形	口径 11.6 器高 6.1	内・外面ともヘラ磨き。横位及び弧状の沈線を施文する	焼成は良好で橙色を呈す
C_3i_3	8	壺形	胴部最大径 15.0 器高 15.6 底径 5.6	4ヶ所の把手を持ち，頸部及び胴部を太い沈線で区画し，中に縦位の沈線を施文する	砂粒を多く含み，黄褐色を呈す。堀之内式　(写39－8)

表82 （第136図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2e_0	1	注口土器	口径 16.1 器高 18.2 底径 5.5	胴部は算盤玉状を呈し，口縁部に縄文帯をほどこす。底部網代痕	砂粒を含み焼成は良好。にぶい赤褐色を呈す　(写39－5)
C_2h_2	2	注口土器	現存高 12.7	沈線で文様を区画する。地文は縄文	堀之内式。
C_2e_7	3	注口土器	胴部径 11.2 現存高 11.8	口唇部は刻みがみられる。頸部に平行沈線を2段に配し中にも沈線を充填する。胴部は10数本の目をもつ櫛状工具により施文される	砂粒を含み灰黄褐色を呈す。石英，長石を含み，黒色を呈す (写39－6)
C_2h_2	4	鉢形	口径 (24.7) 現存高 11.2	無文。ヘラ整形	スコリア，砂粒を含む，灰黄褐色を呈す
C_2c_4	5	鉢形	口径 (24.0) 器高 14.8 底径 6.8	外面はヘラ整形。内面は列点刺突文及び7本の平行沈線を配し，沈線間は極めて細い刻みを加える	加曽利B式
C_2a_4	6	鉢形	口径 10.9 器高 7.6 底径 6.4	口縁部に四本の平行沈線をほどこし，中に縄文を充填する。胴部ヘラ整形	白雲母，砂粒を含み焼成は良好
C_2b_1	7	深鉢形	口径 15.2 器高 (16.8) 底径 (5.9)	口縁部に縦位の沈線，頸部に3本の平行沈線をめぐらす。平行沈線間には刺突文を施す	砂粒を含み焼成は良好，灰褐色を呈す (写33－4)
C_2c_5	8	鉢形	胴部径 10.8 現存高 8.4 底径 5.8	4本で一単位の平行沈線を3段に配し，沈線間に縄文を充填する。2段目の沈線をはさんで「の」の字状の沈線で文様を加える	砂粒を含み黒色を呈す。加曽利B式 (写39－3)
C_2c_4	9	鉢形	胴部径 14.1 現存高 10.7 底径 6.9	4本の平行沈線で幾何学的な文様を区画する。中に縄文を充填する	石英・砂粒を含み，黒褐色を呈す。加曽利B式
C_2d_1	10	深鉢形	口径 12.6 器高 15.8 底径 6.4	斜位の沈線をほどこす	砂粒スコリアを含み，焼成は良好。にぶい橙色を呈す (写34－3)
C_2f_0	11	鉢形	口径 9.6 器高 8.0 底径 (5.7)	文様は縄文のみ。内部はていねいなヘラ磨きをほどこす	白雲母・スコリアを含み，にぶい黄橙色を呈す

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_2d_6	12	鉢形	口径 12.4 器高 10.0 底径 7.2	無文。ヘラ整形	砂粒を含み焼成は良好、赤褐色を呈す
C_2i_8	13	鉢形	口径 13.1 器高 5.7	無文。ヘラ整形。底部に △ 状の沈線がみられる	砂粒を多く含み暗赤褐色を呈す (写40 2)
C_2c_0	14	浅鉢形	口径 13.1 器高 6.4	横位及び弧状の沈線を施文する	砂粒・スコリアを含み、黒褐色を呈す
C_2i_9	15	鉢形	口径 9.6 器高 4.1	無文。ヘラ整形	砂礫・スコリアを含み、焼成は良好、にぶい橙色を呈す

表83 (第137図 グリッド出土遺物)

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_3e_5	1	深鉢形	口径 33.4 現存高 27.9	蛇行及び平行沈線を縦位に施文し，その間に斜位の沈線をつける	堀之内式。口縁部は外反する
C_3j_3	2	椀形	口径 9 器高 7 胴部最大径 11.4	口縁部に平行な縄文帯を有し，胴下部には弧状の縄文帯を有する。4ヶ所に縦位の沈線を加える	口縁部は内彎し，底は丸底である (写40 4)
C_3g_1	3	小型深鉢	口径 11.2 器高 14 底径 5.7	口縁部に平行沈線で区画された縄文帯が2段に施文され，沈線の1端は上にはね上がる。縄文は LR	外面は縦方向のヘラミガキ。焼成は良好で黒褐色を呈す (写33 5)
C_3e_2	4	小型深鉢	口径 11.4 器高 13.3 底径 5.1	表・裏とも口縁に平行な沈線をめぐらす。表6本。裏4本。胴部は7～9本で1単位の細い沈線を充填する	口唇部に刻みあり
C_3d_5	5	深鉢形	器高 44 底径 11	蛇行沈線及び左右の2本づつの沈線を1単位として，計6単位を施文する。沈線間は主に LR の縄文を施す	堀之内式。焼成は普通で，にぶい褐色を呈す (写32 3)
C_3d_3	6	深鉢形	口径 36.0 器高 47.3 底径 12.8	5本の沈線を頸部に施文し，4～6本の沈線を縦位に引き，この沈線間を弧状の沈線で充填する	堀之内式。焼成は良好で，赤褐色を呈す (写32 2)
C_3b_2	7	台付土器	現存高 4.8 底径 5.1	接合部に2本，開脚部に1本の沈線を有し，中に LR の縄文を充填する	加曽利B式。台付浅鉢もしくは異形土器の脚部ではなかろうか
C_3c_2	8	台付鉢形	現存高 4.1 底径 7.4	内・外面ともヘラナデによる整形がみられる	胎土は砂粒を多く含み，暗黄灰色を呈す
C_3f_3	9	深鉢底部	現存高 4.0 底径 6.4	外面はヘラミガキ，内面はヘラ削りの整形痕を残す	スコリア・砂粒を含み褐色を呈す

表84 (第138図 グリッド出土遺物)

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_3c_1	1	深鉢形	口径 (33.6) 現存高 35.4	口縁部に紐線を付し，口唇部に小突起を有する。縄文	焼成は良好で，にぶい褐色を呈す (写36 2)
C_3d_1	2	深鉢形底部	現存高 10.1 底径 10.1	縄文。胴下部は縦方向のヘラ削り	網代痕がみられる。スコリア・砂粒を含み褐色を呈す
C_3f_2	3	深鉢形底部	現存高 18.6 底径 10.2	縄文のみ。底部はヘラ整形。網代痕を有する	焼成は不良で，にぶい黄褐色を呈す (写37 2)
C_3e_5	4	深鉢形	口径 (30.1) 現存高 26.1	縄文のみ	胎土に砂粒を多く含み，にぶい黄褐色を呈す (写35 2)
C_3g_2	5	鉢形	口径 23.5 器高 18.1 底径 7.4	7本の平行沈線を施し，下5本には短い縦位沈線を埋める。沈線間には縄文を充填する	加曽利B式。砂粒・スコリアを含み，黒褐色を呈す(写38 3)
C_3g_8	6	深鉢形	口径 (31.6) 現存高 13.6	縄文のみ	砂粒・スコリアを含み，褐色を呈す

表85 （第139図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
C_3g_1	1	鈴形	現存高 15.9 底径 8.3	平行沈線を2段に施し，沈線間に縄文を充填する	加曽利B式。砂粒・スコリアを少し含み，焼成は良好，灰褐色を呈す
C_3d_2	2	鉢形	口径 20.9 器高 11.6 底径 5.9	口縁に平行な4本の沈線を施し，沈線間は縄文。内・外面ともヘラ磨き	加曽利B式。砂粒を含み焼成は良好，黒褐色を呈す
C_3c_1	3	鉢形	口径 15.1 器高 9.8 底径 6.2	口縁に平行な6本の沈線を施し，沈線間に縄文を充填する	加曽利B式。スコリア・砂礫を含み，焼成は良好，黒褐色を呈す　（写39－1）
C_3d_5	4	壺形（？）	現存高 6.0	底部は球形を呈し，縦位の沈線を施す	堀之内式。細砂粒を含有し精製されている。にぶい橙色を呈す
C_3f_4	5	蓋	直径 7.5	表・裏ともヘラ整形。高さ 1.3 cm の把手がつく	長石・スコリアを含み，灰黄褐色を呈す
D_2c_0	6	注口土器	／	注口部のみ。沈線が施文される	堀之内式。砂粒・砂礫・スコリアを含み焼成はやや黒い橙色を呈す
B_1g_0	7	鉢形	口径 (23.3) 胴部径 (29.9) 現存高 20.6	口縁部は内彎し，口唇部に円形の粘土紐を付す。胴部にかけて蛇行及び斜位の沈線を施文する	堀之内式。砂粒を含み焼成は良好，にぶい黄褐色を呈す
C_2c_4	8	手捏土器	口径 3.9 器高 5.1	3山の波状口縁を呈し，外面はヘラ磨き，内面は指ナデによる整形を施す。底は網代痕が残る	スコリアを含み，焼成は良好。黄橙色を呈す　（写41－2）
C_2f_8	9	手捏土器	口径 2.0 器高 2.8	ヘラ整形	砂粒を多く含み，にぶい黄橙色を呈す　（写41－3）
C_2f_4	10	手捏土器	口径 3.5 器高 3.3	表・裏とも指痕が残る	長石・スコリアを含み，灰黄褐色を呈す　（写41－4）
C_2f_6	11	手捏土器	口径 4.4 器高 3.9	無文。ヘラ整形	石英・長石を含み，にぶい橙色を呈す　（写41－5）
C_2d_8	12	土玉	最大径 1.2 高さ 3.3	ナデ整形	灰黄褐色を呈す
C_2f_2	13	土玉	最大径 2.2 高さ 1.5	ナデ整形	砂粒を多く含み，橙色を呈す
C_2i_3	14	土玉	最大径 (1.8) 高さ 2.0	ナデ整形	砂粒を含み，にぶい黄橙色を呈す
C_3d_5	15	土玉	最大径 1.4 高さ 2.4	表面はヘラ整形	砂粒を含み，にぶい橙色を呈す
C_3f_5	16	土玉	最大径 1.6 高さ 2.0	内径は約 4 mm で，ナデ整形	砂粒を含み，灰黄褐色を呈す

第3節　ま　と　め

冬木A貝塚における調査の結果，29軒の住居址，243基の土壙，2条の溝が確認された。住居址の時期は，出土遺物の大半が覆土からの検出ということもあり確実なことは言えないが，ある程度の推測は可能である。推定するに29軒の住居址のうち，縄文時代前期のものが1軒，後期前葉と思われるものが最も多くて19軒，後期中葉が5軒，時期不明が3軒となる。土壙は詳細については後述するが，大きく5種の形態に分類できる。数的に多数の割合を占めているのは平面形が円形もしくは楕円形を呈し，深さの浅い土壙である。いわゆる袋状土壙も20基ほど確認されている。溝は明確な遺構としては1条だけで，排水溝ではないかとみられるものである。

上記各遺構からは大量の土器片と石器類，そして自然遺物が出土している。土器類は前期・中期・後期に編年されるもので，極めて多量に出土しているのが後期前葉に位置する堀之内式土器である。これは全体の8割以上を占めている。石器類では打製・磨製石斧，凹石，磨石などが比較的多く出土した。他に石鏃，石棒もみられた。自然遺物も多量に出土し，貝類，魚骨・獣骨類が検出され，釣針も確認された。なお，人骨が18体発見されている。

1．貝層と人骨の埋葬ゾーンについて

冬木A貝塚の貝層は，その平面的な広がりを見ると，ブロック状に貝殻が密集する部分とやや貝の密集の度合が希薄である部分がある。断面を観察することによってもブロック状の純貝層が認められ，20～40cmの堆積を示している。各ブロックに多くの場合遺構を伴う。これは，本貝塚の貝層の形成過程を，「遺構廃棄→貝殻投棄→埋没→投棄範囲の拡大→ブロックの連続」としてとらえることが可能であることを示している。

貝層が重なり合っている部分は認められなかった。これは地点毎に形成時期が異ることを示すものと思われる。しかし貝層だけを見た場合，層位・広がりのいずれを見ても，形成時期を明確に区別することは困難であった。エリア西側の土採り・木工所建設の際の削平等によって破壊され，貝層の残った部分が，今回調査した区域であったと思われる。

本貝塚における人骨の埋葬ゾーンは，著しい偏在性を示し，貝層堆積区の周縁部に位置している。埋葬した場所は「ゴミ捨て場」そのものではなく，堆積しつつある貝層の周辺だったのである。これは，人骨の上に堆積した貝層がいずれも薄く，貝殻を投棄した場所の中心と見なすことができないからである（注1）。

人骨が上述した場所に集中していることは，保存の問題を考慮しても，埋葬が意図的に貝層周辺に行なわれたと考えてさしつかえないと思われる。当時死体を「ゴミ」と同様に考えたか否かは不明であるが，意図的に「場所」を定めて埋葬が行なわれたということは，とりもなおさず当

時「埋葬する場所」(「墓」と同一視することは疑問である)の概念が存在したものと見てさしつかえないであろう。

人骨の頭位は大部分が南から東の間にある。これは出土層位・埋葬姿態の如何にかかわらず，極めて顕著な傾向と言える。埋葬姿態に関しても，仰臥伸展葬と右膝位仰臥屈葬が大部分を占める。以上の2点から，埋葬に際して頭位及び埋葬姿態に関する一種の「形式」が存在したことを考えることが可能である。

「形式」は，時期及び埋葬者の所属集団によって異る可能性が考えられる。この問題は，他の貝塚の発掘が行なわれ，より多くの資料が集められた時に初めて明らかにされる性質のものである。従ってここでは可能性を指摘するにとどめたい。

2．住居址について

本遺跡で確認された住居址は29軒である。遺跡内での位置をみると，北側を除く3方向で検出された。北側の一部が調査できなかったためもあるが，いずれにしても，C2区中央部より北側一帯における遺構の分布密度は他の部分よりも薄くなっている。住居址もこの一帯からは検出されておらず，広場的性格が考えられよう。

平面形状をみると，方形・隅丸方形・円形・楕円形などがみられ，いずれかの形状に片寄る傾向はみられない。これは時期別にみても同様である。各住居址の時期は縄文後期の堀之内期～加曽利B期に属するものが大部分である。しかし堀之内期・加曽利B期とも明確な形状差は認めがたく，平面規模もほとんど差はないといえよう。

これら各住居址の確認面は表土下50～80cmのローム層上面である。最初は一層上面にあたる暗褐色土層で遺構をとらえようと努力したが，確実にとらえることができず，止むなく前述のようにローム面での確認となったわけである。

この結果，炉址が単独で暗褐色土中に残ってしまったり，ピット列で検出した床面の上部に炉址が浮いてしまった住居址が若干あったことは誠に残念である。

以上のことに加えて，冬木A貝塚は元来もっと高低差のあった土地であったと言われるが，木工所の建設等でかなり土地削平と攪乱を受けており，これも遺構確認が困難であったひとつの理由であろうと思われる。

ところで今回調査された住居址の特徴及び問題点等について若干ふれておきたい。

まず，炉を持たない住居址が全体の4分の3を占めていることである。ちなみに炉址あるいは焼土の確認された住居址は，第9号・10号・11号・13号・21号・22号・24号・27号の8住居址に過ぎず，他はその痕跡は全く認められなかった。この炉址をもたない住居址は床の軟かなものが多く，ピットもそれほど良好でないことなどを考えると，長期間にわたって生活が営まれた遺

構ではなかったと考えてよいかもしれない。

炉址そのものは，全て地床炉である。住居址床面を鍋底状に掘り下げた上で火を使用したものである。炉に伴う礫や埋設土器は検出されなかったが，第11号住居址と第21号住居址で検出された炉址は極めて良好な状態であり，灰白色の灰層と赤褐色の焼土層が鮮明なコントラストを成して観察された。

埋設土器に関しては，前述のように遺構内からの検出はなかったが，C1区及びC3区において単独で確認された。いずれも縄文式の深鉢形土器で，2個並列に並んでおり，内部には灰が充塡されていた。ただこの土器は暗褐色土中に検出されたもので，関連する遺構は確認されていない。この事例から考えると黒色土及び暗褐色土中に営まれた住居址があったのではないかと思われる。しかし前述のように黒色土層での遺構確認は極めて困難であるため確認できなかったものであろう。

今回の調査では第16号・27号住居址の2遺構だけが黒色土中に検出された遺構である。第27号住居址については最初に焼土が確認され，この焼土を追っていったところ本遺構が確認されたわけである。床面は軟かで，焼土がなければ覆土との区別は困難であった。

住居址の出入口部が確認できたのは第21号住居址のみであった。一周してきた壁溝が南西コーナー部で分断され，ここが出入口部であると考えられる。この幅は数10cmで両側にはピット列が溝状に検出された。これとよく似た遺構が第22号住居址でも確認されている。位置的にも第21号住居址と同様に南西コーナー部である。ただそれほど良好な検出状態ではないため断定はできないが，恐らく出入口であろうと思われる。

調査された29軒の住居址群のなかで，第26号住居址と第29号住居址は他の住居址と比較して若干その形態を異にするものであった。平面形状は楕円形で，長径3.52～3.94m，短径3.31～3.52mを計り，炉を持たず，床中央部に向けて鍋底状に傾斜を有し，壁の一部が2段掘り込みになっている。覆土から出土した遺物をみると，共に堀之内期に属することがわかる。この住居址に似た形態を有する住居址は他に確認されておらず，その性格等についてはさらに追求していきたい。

3．土壙について

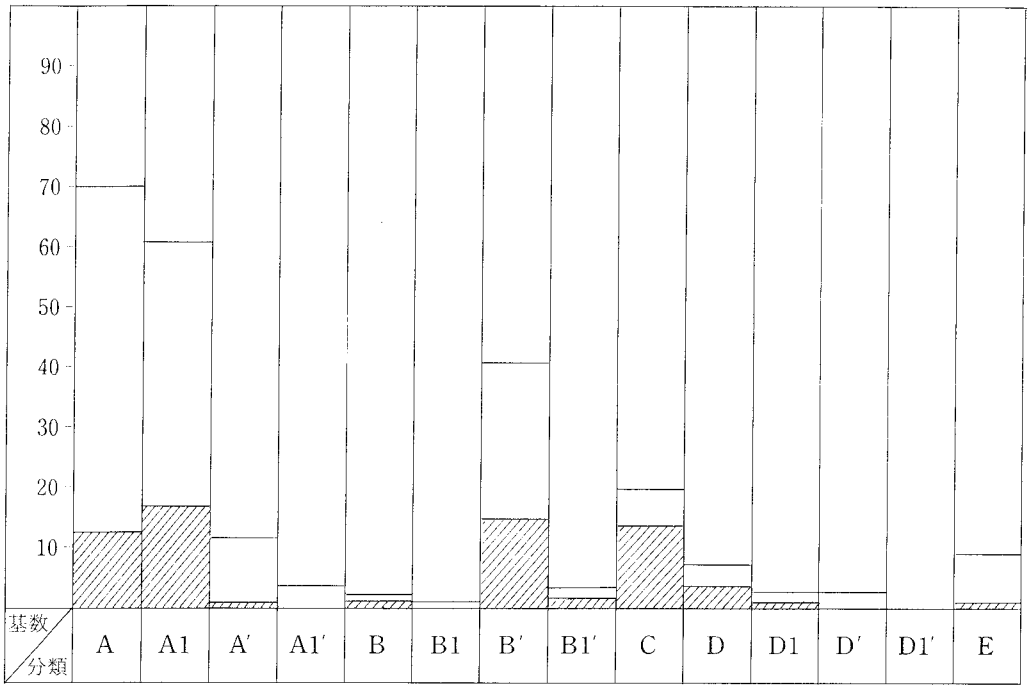
本遺跡で確認された土壙は243基である。ナンバーは248までついているが，134・171～173・236の5基が欠番となるため実数は上記の通りである。

さて整理の都合上いくつかのグループに分類したわけであるが，まずその結果をまとめておきたい。

実数243基のうち全体の調査ができず分類不可能な土壙を除く237基を対象とした。

数量的に最も多かったのはAグループで，147基あり，次にBグループの48基，Cグループの

土　壙　分　類　　（斜線部は貝層を含む土壙）



土壙分類及び基数

グループ	類	基　数	総基数に対する割合（%）	貝層を認めた土壙数（　）内はグループ内での%	備　　考
A	A	70	29.5	12	深さが浅くピットを持つ土壙が多い
	A1	61	25.7	17	
	A′	12	5.1	1	
	A1′	4	1.7　Aグループ計 62.0%	0　(20.4%)	
B	B	2	0.8	1	深くピットのない土壙が多い
	B1	1	0.4	0	
	B′	41	17.3	15	
	B1′	4	1.7　Bグループ計 20.2%	2　(37.5%)	
C	C	20	8.4　8.4%	14　(70.0%)	貝層を含む例が多い
D	D	7	3.0	4	
	D1	3	1.3	1	
	D′	3	1.3	0	
	D1′	0	0.0　Dグループ計 5.6%	0　(38.5%)	
E	E	9	3.8　3.8%	1　(11.1%)	
計		237 基	100%	72 基　(30.4%)	

20基，Dグループの13基，Eグループの9基と続く。以上のようにAグループに属する土壙が圧倒的に多く全体の62%を占めることがわかる。ちなみにBグループは20.2%である。

Aグループについてみると，A及びA1類の土壙が極めて多く全体の89%を占めている。これに対してより深くなるA′・A1′類は極めて少量になっていることがわかる。

Bグループでは，B・B1類は少なく，B′・B1′類が多くなり93.8%を占めている。Aグループではピットを持つものが半数近くあったのであるが，Bグループにおいては10.4%しか存在しない。

Cグループはいわゆる袋状土壙であり，それほど多くは検出されなかった。全体の8.4%ほどであり，他のグループとはその性格に違いのあることがうかがえる。

DグループはAグループに似かよっているが，平面形状だけが異なるものであり，大局的にはAグループと同類とみてもよいと考える。全体の5.5%とこれも少数である。

A～Dグループのどれにも属さない土壙をEグループとしてまとめたわけである。平面形状が不定形を呈する土壙で，検出例は少なく全体の3.8%程である。

ところでAグループとBグループを比較してみると興味ある事実が出てくる。Aグループは壙底までの深さが浅く，かつピットを持つものが極めて多いのに対し，Bグループはまったく反対に深さ40～50cm以上でしかもピットを持たないものが大部分を占めているのである。これだけの相異がみられるからには両グループの用途にもはっきりした違いがあったものと思われる。しかし現状では明確な使用目的・方法等は不明である。ただ両者とも「貯蔵穴として利用されたもの」と仮定することが許されるならば，次のようなことが言えるのではないだろうか。すなわちAグループの土壙群は，簡単な上屋を設け，毎日の食料あるいはそのまま保管しても悪くならない食物などの倉庫として使用され，Bグループの土壙群は何らかの手段を講じないと保管できない物，もしくは木の実などを長期間保存する際などに屋根は特に設けず土などをかぶせ，その上に目印でも置いておくというような使われ方が考えられる。ただBグループに属していても，調査途中で出水のため壙底の確認ができなかった土壙が数基あり，これなどは明らかに井戸としての利用を考えてもよいと思われる。

今回の調査で内部に貝の堆積が認められた土壙は237基中72基であった。これは全体の30.4%に当たっている。この割合も各グループ間で比較すると興味あるデータが浮かび上がってくる。A・B・D・Eの各グループは11.1%～38.5%程度であるが，Cグループだけ70.0%と極端に高い比率を示すのである。この数字から判断すると，Cグループいわゆる袋状土壙が他の土壙よりも貝捨て場として利用される機会の多かったことが考えられよう。しかし当然ながらこの事実が袋状土壙本来の使用目的を意味しているのでないことは明らかである。Cグループに属する残り30%は貝の堆積は認められないし，また認められた土壙にしても，壙底から堆積している例

は少なく，覆土途中あるいは上面での堆積例がかなり認められるからである。

それにしても各種土壙の中で，貝をはじめとするゴミ捨て場として最も多く利用されたのがCグループの袋状土壙であったことは確かなことである。この土壙は比較的規模の大きいものが多く，開口部が崩れても他の土壙よりは長期間埋まらずに凹んでいたことが予想される。そしてこの凹みを当時の人々が再利用したのかもしれない。

最後になったが，B類の土壙の中で恐らく井戸であろうとみられる数基の土壙は，遺跡の中でもB1区のc・d・e列付近に集中して検出されている。第246号土壙は深さ1.4mまで確認でき，その後出水のため調査不可能となってしまったが，ボーリングしてみるとさらに1mは楽に掘ることができる状態であり，元来は少くても2m以上の深さがあったようである。この種の土壙の時期がいつのものかは不明であるが，出土遺物はすべて縄文土器片であった。

結局多くの土壙の中でその利用目的あるいは性格等の推定できるのは上述の井戸とみられる土壙ぐらいであった。大多数の土壙については不明としか言いようがない。土壙の性格については従来から多くの説が言われてきた。最も一般的な考えは貯蔵穴説であろう。ただ袋状土壙については最近になって，土器の原料である粘土を取るための採掘壙ではなかったかという考えも出てきている。極めて興味のある考えであるが，冬木A貝塚で調査された袋状土壙に関してはこの考えは当てはまりそうにもない。土壙内部からは粘土の検出は全然なく，壙底及び壁ともにローム，あるいはハードロームから成り，粘土層らしきものは一切認められなかったからである。覆土の状態をみると，大部分が自然堆積であることを示しており，若干壁部の崩れがわかるぐらいで，採掘壙らしき痕跡は検出されなかった。他の土壙も同じような傾向をみせており，本遺跡で調査された土壙は貯蔵穴として利用された可能性が強かったのではないだろうか。一部の土壙で壙底直上に純貝層が存在していた例があり，これなどは最初から貝捨て場として掘られたものであるかもしれない。しかし覆土上部には貝の混入はなく，まるで貝殻を捨てた後土をかぶせてしまったかの如き様相を呈しており，必ずしも貝捨て場として掘られたものであったかは疑問である。貝捨て場としての使われ方は，あくまでも土壙本来の使用目的を失った後の再利用という形が多かったと考えられる。

4．溝について

本遺跡で検出された溝は2条である。第2号溝は短かく不完全なものであるが，第1号溝は遺跡東側を南北に従断する形で伸びている。

断面形状をみると，逆台形を呈しており，底部までの深さは70cm前後である。底部のレベルは両端が高く，中央部が比較的低くなっている。出土遺物はすべて縄文土器片であり，完形品は1点も出土していない。なお詳細は溝の項を参照されたい。

さて本址の性格及び用途であるが確実な結果はでていない。恐らく排水溝であろうと思われるが，関連するとみられる遺構も確認されておらず，現段階では不明とせざるを得ない。

時期については，上限は推定できると考える。すなわち本址は加曽利B期の住居址及び土壙を切って掘られていることから，少なくとも加曽利B期以前までさかのぼることはあり得ないことである。貝層部では溝中にも貝の堆積があったが，これは溝の凹みに直接堆積したわけではなく両側の貝層から流れ込んだものと思われ，純貝層はなく，混土貝層・混貝土層である。また土器片の断面も摩滅しているものが多くみられる。さらに覆土の様子などから判断しても，弥生時代以降に掘られたのではないかと想像されるのであるが，下限の時期を決定する資料がないため断定しかねるところである。

5．出土遺物について

冬木A貝塚の出土遺物はその種類・量とも極めて豊富であった。土器類，石器類，自然遺物類，と三大別される。土器類については型式分類をするまでに到っておらず，ここではその概略を記するにとどめ今後の研究の参考としたい。

（土器類）

本遺跡からは縄文前期・中期・後期の各時期に編年される土器が出土した。前期では浮島式，諸磯式に属するものであり，数は少ない。文様としては貝殻腹縁文，波状貝殻文，半截竹管文，爪形文などである。少数ながらも目立つのは集合沈線にボタン状貼付文を施された諸磯C式の土器片である。中期に編年される土器群としては，五領力台式，加曽利E式に属するものがみられる。文様は山形の連続する陰刻文が五領力台式にみられ，加曽利E式では磨消縄文が施されている。後期に編年される土器群としては，称名寺式，堀之内Ⅰ・Ⅱ式，加曽利B1・2式に属するものである。本遺跡ではこの時期の遺物が最も多く出土しており，全体の90%以上を占めている。称名寺式はそのほとんどが深鉢の胴部片と思われ，沈線によって渦巻文あるいは曲線文が描かれ，沈線間には縄文や棒状工具による米粒状の刺突文が充塡される。

本遺跡を代表するのは堀之内式である。器形としては深鉢形が多く，胴部に張りを有する大型深鉢，胴部から口縁部にかけて外反もしくは直線的に立ち上がる小型深鉢があり，他に鉢形土器，浅鉢形土器，注口土器等がみられ，少数ではあるが壺形土器，ミニチュア土器なども出土している。文様は沈線文系と磨消縄文系とに大別できる。沈線文系では口縁部が無文のものが多く，頸部以下に曲線文，直線文，同心円文，蛇行沈線文が施文される。地文はそのほとんどが縄文である。磨消縄文系では沈線によって三角形や四角形などの幾何学的な文様を区画し，なかに縄文を充塡するものが多い。この土器群には8の字状の貼付文や平行沈線文，さらに細い隆線を口縁に平行あるいは縦位に付し，その上に刺突を加える手法も多く使われている。前者は堀之内Ⅰ式に，

後者は堀之内II式に編年されるものと考える。

加曽利B式になると器形的には鉢形および浅鉢形土器が多くなり，小型深鉢や大型深鉢，そして注口土器等もみられる。精製品は，磨消縄文の手法が多く，器壁は丹念にヘラ磨きされ，黒色を呈するものが目立つ。大型の深鉢では粗製土器が多くなり，いわゆる紐線文系の土器である。文様はほとんど施されず，口縁部の紐線以外では荒い縄文の上に条線がみられるぐらいである。

土器以外の遺物としては土偶や耳栓が出土している。土偶は10体ほど発見され，堀之内期〜加曽利B期に位置づけられるものが多いと思われる。このなかでも第2号溝とC2a$_4$地区から出土したものが接合できた点は興味深い（図170—3）。この土偶は頭部に冀状の突起を有し，顔は鼻が隆起し，まゆは沈線，目は竹管刺突で表現され，口の直下から復部にかけて1条の沈線が垂下する。胸部には豊かな乳房が付けられ，背後は左肩より腰部まで2条の沈線がカーブを描いて施されている。第2号溝とC2a$_4$地区とでは約30 m離れている。このように遠く離れた2地点から出土したものが接合できるという例は土偶などではままあることだと言われているが，今回の例も土偶の性格などを考える上でひとつの資料となるであろう。耳栓は直径1.7 cmの小型のもので，上面に2本の沈線が施文されている。

（石器類）

本遺跡で最も多く出土したのは凹石，磨石である。これらは比較的小型のものが多く，石質は火山岩系のものである。その使用痕をみると，両者の機能が明確に区別できるのは少なく，磨石であっても凹みを有するものも多く見られ，使用目的によって1個の石を使い分けていた場合が多々あったと考えられる。石斧は磨製と打製の2種があり，打製石斧が極めて多い。磨製石斧のなかには長さ数cm程のミニチュア的なものも出土している。刃先に使用痕のみられるものが多い。石質は大部分が安山岩であり，硬砂岩・緑泥片岩が少数まじっている。石鏃は有茎と無茎とに大別される。さらに無茎石鏃については，抉入みを有するものと有しないものに分類できる。数的には抉入みを有する無茎石鏃が大多数を占めている。第177図—20，22，23などは比較的少数のタイプである。石質は黒曜石，チャート，硬質砂岩などである。石皿は完形品はなく，すべて破片である。これは形として残る限度まで使用されたためと考えられ，出土した破片のなかには厚さ数mmのものも認められた。火山岩系の岩石が利用されている。なお石皿にも凹みを有するものが多く凹石の機能をも合わせ持っていたことが考えられる。以上の他に石棒，石錘，装身具，浮子等が出土しとている。第172図—5は先端部に沈線状の彫り込みがみられ，明らかに男根を表現しているものであろう。石錘は4点出土している。円板状が3点（図178—12，13，14），棒状のもの1点（図178—15）である。装身具は2点（図178—9，10）出土した。9は細長い刀子状を呈し，両方向からの磨切り手法がみられる。10の石質は翡翠である。浮子はすべて軽石が利用されていた。形状の確認できるものはほとんどなく，小破片である。一端に孔を有す

るものが確認された。

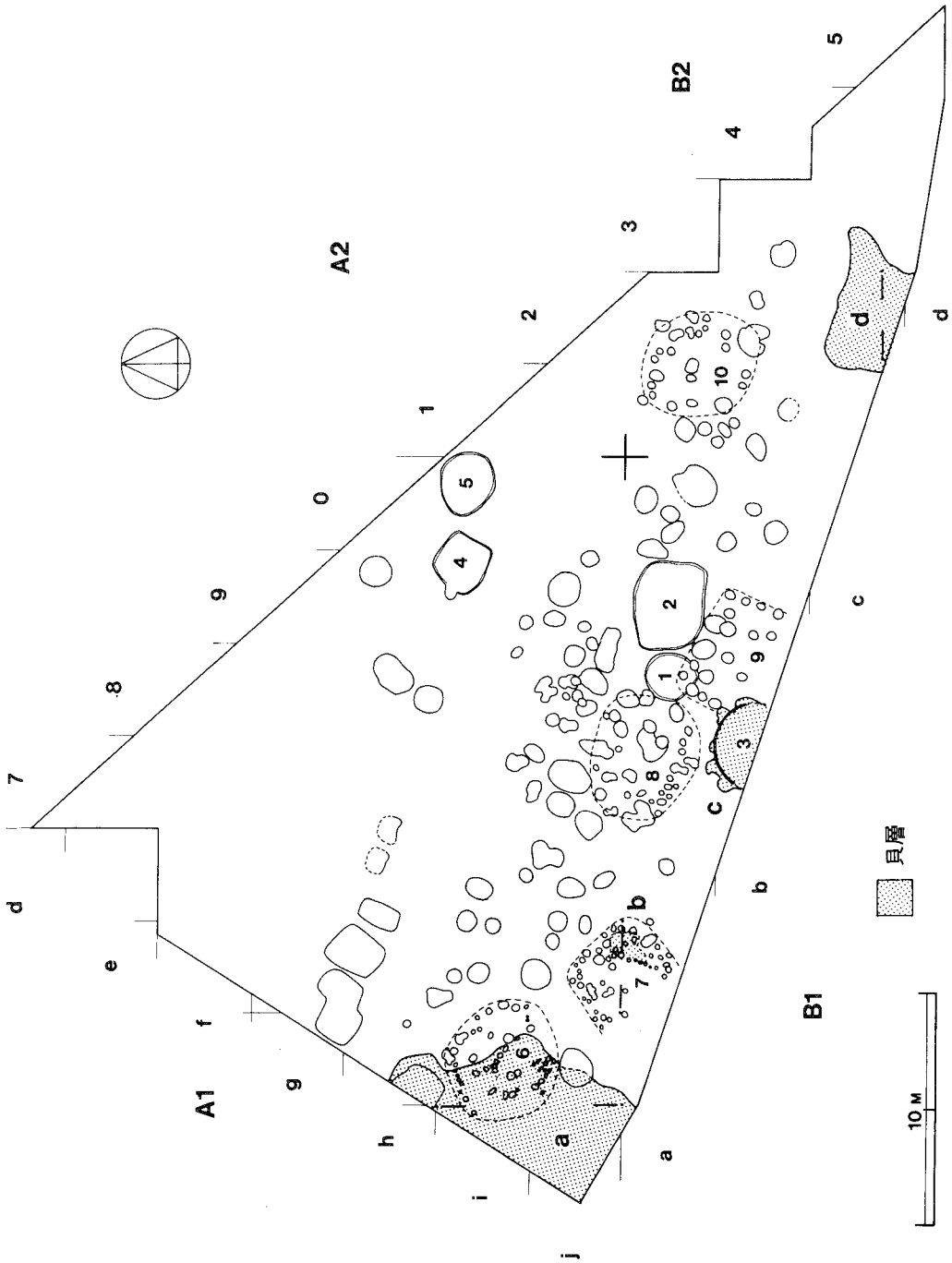
（その他の遺物）

本遺跡では18体の人骨，多数の自然遺物類が発見されている。人骨と獣骨・魚骨の一部については東京大学理学部人類学教室に鑑定を依頼していることもあり，詳細については別項を参照されたい。

貝輪は破片も含めると数10点検出されたが，写63—貝輪は$C3e_5$グリッドから小型の深鉢に入れられた状態のまま一括して発見されたものである（写24—6）。他にいわゆる浮袋の口といわれるものや，刺突具，垂飾，針などが出土している。骨鏃は3点だけ確認された（写64—12，13，写65—13）。獣骨や鹿角のなかには切断痕や擦痕の認められるものがある（写66）。これらは解体する時についた傷や，製品化する時の加工痕であろうと推察できる。

注1　「埋葬ゾーン」については，「加曽利南貝塚」（杉原荘介編　中央公論美術出版）において後藤和民氏が同様のことを指摘している。

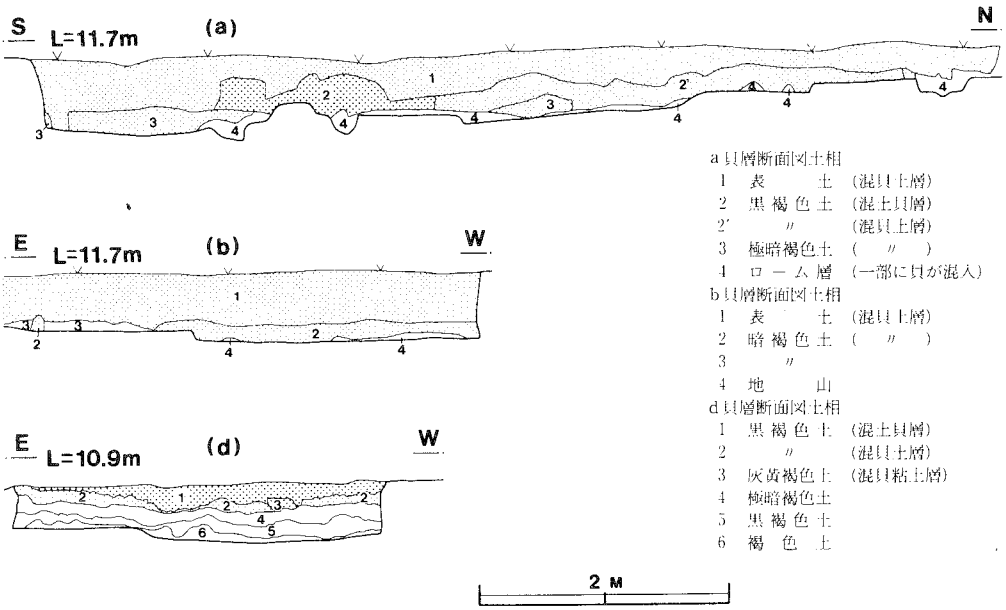
第4章　冬木B貝塚



第140図　冬木B貝塚グリッド及び遺構配置図

第1節　自　然　遺　物

1．貝　　層



第141図　冬木B貝塚貝層断面図

冬木B貝塚における貝層の堆積は，第140･141図に示すように4ケ所に確認された。それぞれの堆積区とも小規模であり，地点貝塚状である。説明の都合上，西側から順にa～dの番号を付した。

a堆積区は，本貝塚の中心であるエリア西側の住宅地から東へ広がる大きな堆積区の末端部にあたるものと思われる。耕作等により混土貝層の上面が攪乱されているため，堆積の厚さは不明であるが，残存部で最大30 cmを測る。周辺は貝殻が少なく，混貝土層となっている。20 cm内外の堆積である。貝層下からは，第1号・6号土壙及び第6号住居址が検出されている。

b堆積区の貝層は，暗褐色土中にわずかに貝殻を混ずる混貝土層である。堆積の厚さは7～15 cmを計り，ピット状に落ち込む部分があることが認められる。本来はもっと厚い堆積であったものが，耕作等により攪乱を受けたものであろう。貝層下からは第7号住居址のピット群が検出されており，同住居址の廃棄後に投棄された貝殻によって形成されたものと思われる。

c堆積区は，第3号住居址が廃棄された後に投棄された貝殻により形成されたものである。断面図（第3号住居址の項）の第1層からは縄文時代晩期中葉に属する土器片が出土し，第2層からは同前葉の土器片が出土している。

d堆積区では，遺構を確認することはできなかった。あるいは自然の凹地に投棄された貝殻に

よって形成されたものかも知れない。周囲には投棄された貝殻が小ブロック状に散在している。貝層は 20～25 cm の厚さを有するが，貝殻の密度は比較的小さい。

以上の 4 堆積区の貝の種類はほとんど同じである。シジミが圧倒的に多く，極く少量のタニシ・カワニナを混ずる。A貝塚と同様に，ほとんど単一種から成っていると言える。ハマグリ 2 点・オキシジミ 2 点（同一個体）を検出したが，本貝塚では珍らしい。（写 67）

2．獣骨・魚骨

本貝塚において出土した魚骨・獣骨は，写 68・69 に示した通りである。種類は，A貝塚のそれと類似しているが，量的に極めて少量である。保存状態も冬木A貝塚と比較すると劣悪であった。

第 2 節　遺構と遺物

1．住 居 址

第 1 号住居址（図 142，152，写 28－1）

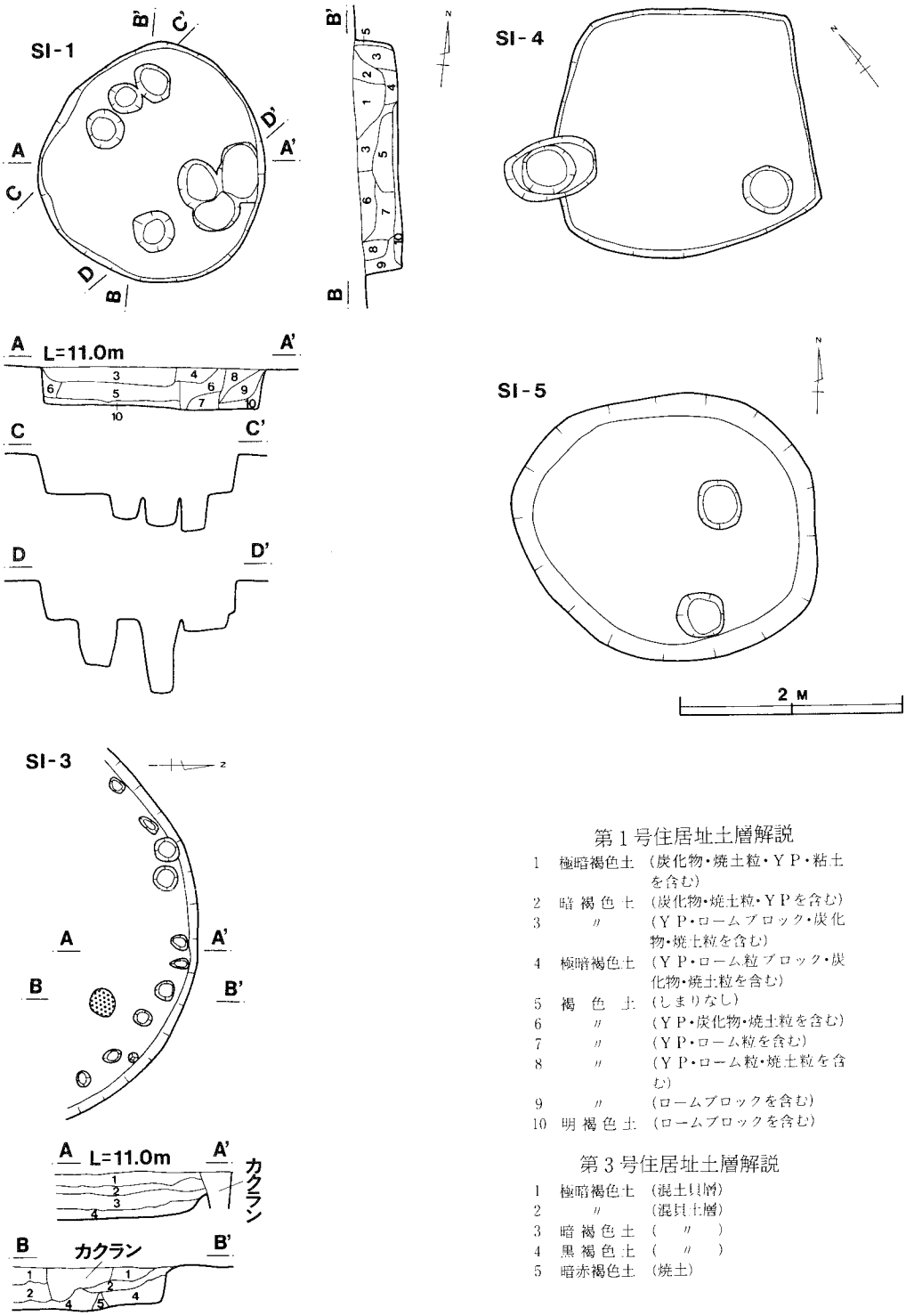
本址は $B1a_8$ にあり，第 9 号住居址と重複しているが，新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形状で，主軸はN－42°－Wを示し，長軸は 2.1 m，短軸は 2.05 m である。壁高は約 0.35 m で，80°内外の傾斜をもって立ち上がっている。床面は平坦で軟かい。ピットは 6 ケ所あり，その大きさは 径35～50 cm・深さ 20～60 cm である。炉址は検出されなかった。出土遺物は，縄文晩期に属する多量の土器片，石皿片，磨石片，耳飾片等である。

第 2 号住居址（図 143，153，写 28－2）

本址は第 1 号住居址の東側に位置し，$B1a_8$・a_9 にまたがっている。平面形は隅丸長方形状で，主軸はN－88°－Wを示し，長軸は 3.59 m，短軸は 3.0 m である。壁高は約 0.25 m で壁は約 70° 傾斜で立ち上がっている。床面は平坦で軟かい。ピットは 17 ケ所あり，東側と西側の壁に沿った状態で径 40 cm 内外のピットが並び北側の壁に沿った状態で径 70cm 内外のピットが並んでいる。深さは 30～60cm である。遺物は，縄文後期に属する土器片及び同晩期に属する土器片が多量に出土した。住居址内に土壙が検出されたが，本住居址に伴うものかどうか不明である。

第 3 号住居址（図 142，154）

本址は $B1b_7$・b_8 にまたがっており，第 1 号住居址の南西約 2m に位置している。南側半分はエリア外である。平面形はほぼ円形状を呈するものと思われ，径 3m 以上に及ぶものと推測される。壁高は 0.35m 内外で，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁に沿った状態で 11 ケ所のピットが検出された。大きさは径 17～25 cm であるが，1 ケ所だけは径 9 cm と小さかった。床面から焼土塊が検出され，炉址と思われるが判然としない。遺物は縄文後期～晩期の土器片が多数出土し



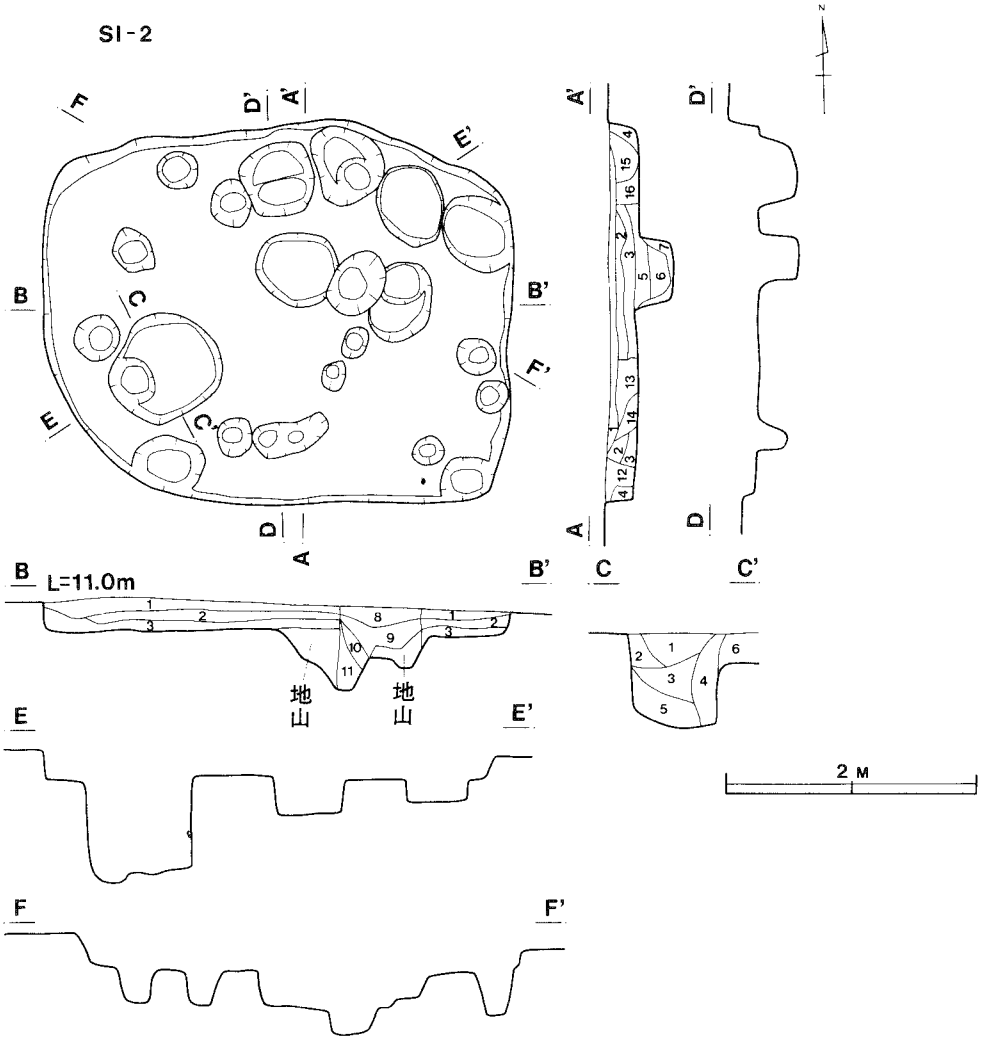
第1号住居址土層解説

1　極暗褐色土　(炭化物・焼土粒・ＹＰ・粘土を含む)
2　暗褐色土　(炭化物・焼土粒・ＹＰを含む)
3　〃　(ＹＰ・ロームブロック・炭化物・焼土粒を含む)
4　極暗褐色土　(ＹＰ・ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
5　褐色土　(しまりなし)
6　〃　(ＹＰ・炭化物・焼土粒を含む)
7　〃　(ＹＰ・ローム粒を含む)
8　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒を含む)
9　〃　(ロームブロックを含む)
10　明褐色土　(ロームブロックを含む)

第3号住居址土層解説

1　極暗褐色土　(混土貝層)
2　〃　(混貝土層)
3　暗褐色土　(　〃　)
4　黒褐色土　(　〃　)
5　暗赤褐色土　(焼土)

第142図　第1・3～5号住居址



第２号住居址土層解説

1　褐　色　土　(焼土粒・炭化物を含む)
2　〃　(ロームブロックを含む)
3　〃　(ロームブロックを多量に含む)
4　〃　(ロームブロックを主体とする)
5　暗褐色土　(ローム粒・焼土粒を含む)
6　〃　(ローム粒を含む)
7　〃　(ロームブロックを含む)
8　〃　(炭化物・焼土粒・ローム粒を含む)
9　黒褐色土　(ローム粒・炭化物を含む)
10　暗褐色土　(ロームブロック・炭化物を含む)
11　褐　色　土　(ロームブロックを含む)
12　暗褐色土　(ローム粒・ブロックを含む)
13　褐　色　土　(ローム粒・焼土粒を含む)
14　暗褐色土　(ローム粒を含む)
15　〃　(ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
16　黒褐色土　(ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)

第２号住居址内土壙土層解説

1　暗褐色土　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む，締りあり)
2　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
3　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む，水分多い)
4　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
5　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む，粘性あり)
6　褐　色　土　(ローム)

第143図　第２号住居址

た。住居址が廃棄された後，貝殻が投棄されている。

第4号住居址（図142）

本址は $A1i_9 \cdot i_0$ にまたがっており，一部が h_9 にかかっている。平面形は隅丸方形状で，主軸はN－59°－Wを示し，長軸 2.33 m・短軸 2.25 m である。壁高は 0.45 m で壁は垂直に近い立ち上がりを見せているが，西隅に攪乱を受けている。床は軟かい，ピットは南東隅に1ヶ所のみを確認した。大きさは径 40 cm・深さ 42 cm である。

第5号住居址（図142）

本址は $A1i_0 \cdot A2i_1$ にまたがっており，第4号住居址の東側 0.7 mに位置している。平面形は楕円形状で，主軸はN—75°—Wを示し，長径 2.85m・短径 2.43m である。壁高は 0.49m で約 70°の傾斜をもって立ち上がる。床面は平担で軟かい。ピットは2ヶ所あり径 45 cm深さ 20～30 cmである。

第6号住居址（図143）

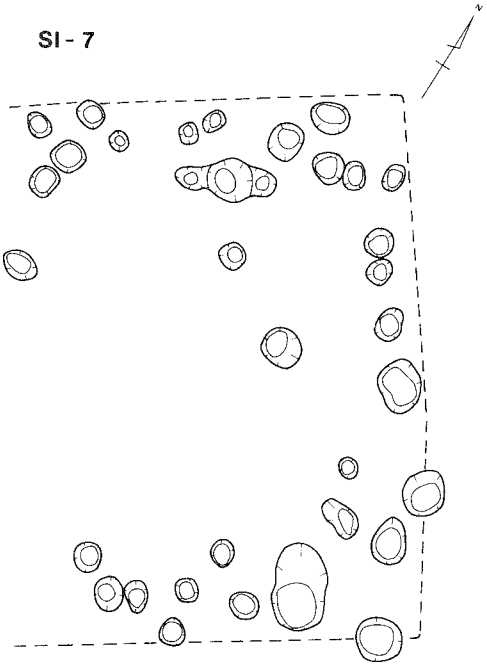
本址は $A1i_3 \cdot i_4 \cdot i_5 \cdot j_4 \cdot j_5$ にまたがったピット群の検出によって確認されたもので，貝層下にある。調査エリアの西端に位置し，中央部付近で第2号土壙と重複するが，新旧関係は不明である。壁・周溝は確認できなかった。ピットの配列状態から，平面形は長方形状を呈し，主軸はN—33°—W・長軸約 4.55m・短軸約 3.9m あったと思われる。ピット群は壁柱穴群と思われるグループと主柱穴群と思われるグループに分けられる。前者は径 10～40 cm，深さ 15～60 cm を測り，後者は径 25～40 cm，深さ 15～80 cm を測る。住居址廃棄後，貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。

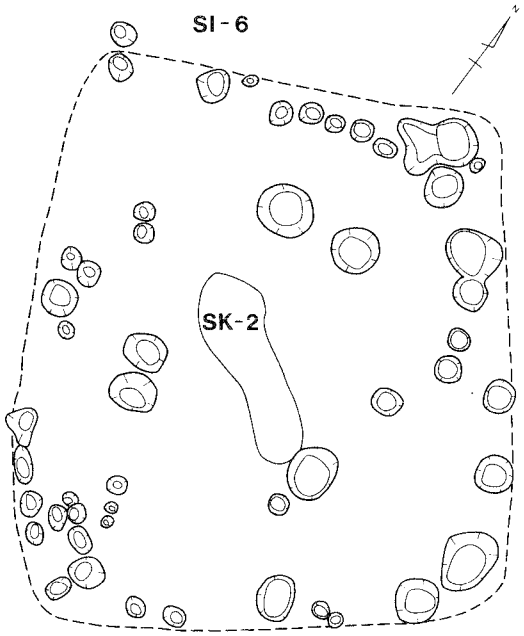
第7号住居址（図144）

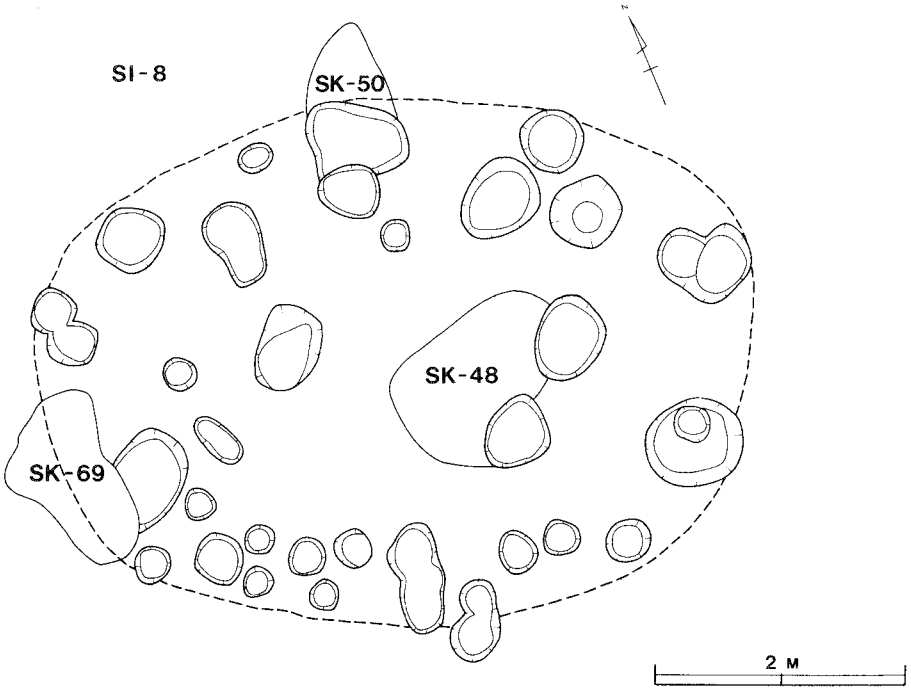
本址は $A1j_4 \cdot j_5 \cdot B1a_4 \cdot a_5$ にまたがるピット群の検出によって確認されたものである。第6号住居址の南東 2.4m に位置し，南西部はエリア外である。壁・周構等の確認はできなかった。ピットの配列状態から，平面形は方形状を呈し，主軸はN—34°—W，長軸約 4.3m・短軸 3m 以上と思われる。ピット群は径 20～40 cm・深さ 15～20 cm で，壁ぎわまたは壁から若干離れた位置に並んでいたものと思われる。

第8号住居址（図144）

本址は $A1j_7 \cdot j_8 \cdot B1a_7 \cdot a_8$ にまたがるピット群の検出によって確認されたもので，第1号住居址の西側に隣接している。壁・周溝の確認はできなかった。中央で第48号土壙，北側で第50号土壙，西側で第69号土壙とそれぞれ重複するが，新旧関係は不明である。ピットの配列状態から，平面形は楕円形状を呈し，主軸は N—71°—W，長径 5.7m 内外・短径 4.2m 内外を測るものと思われる。ピットは南側に径約 30 cm・深さ 30～110 cm を測るものが並び，他の側には径 50～70 cm，深さ 40～90 cmを測るものがある。







第144図　第６号・７号・８号住居址

第 9 号住居址（図 145）

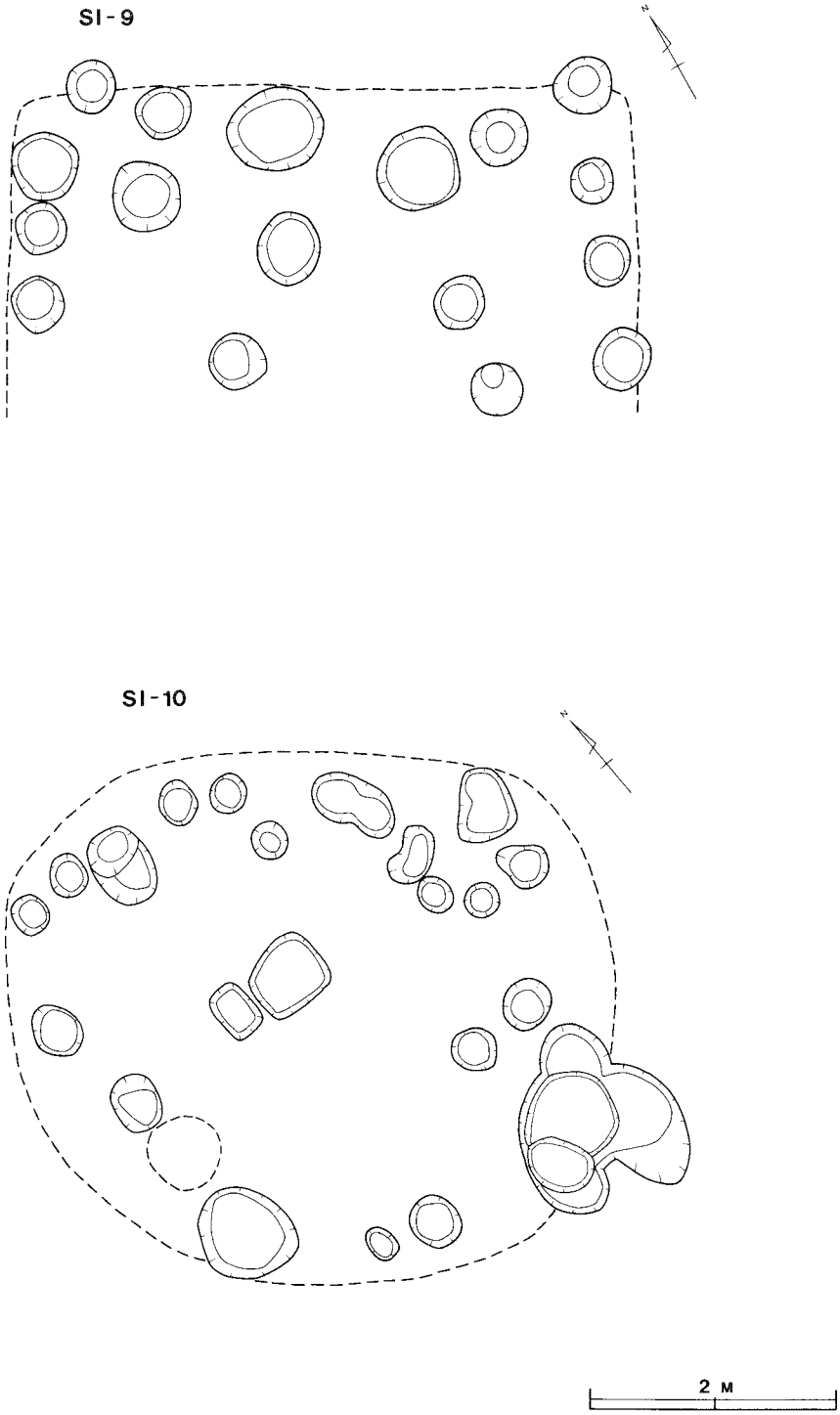
本址は $B1a_8$・a_9・b_8・b_9にまたがるピット群の検出によって確認されたもので北西隅が第 1 号住居址，北東部が第 63 号土壙・第 64 号土壙とそれぞれ重複しているが，新旧関係は不明である。壁・周溝等の確認はできなかった。ピットの配列状態から，平面状は方形状を呈し，長軸約 5.2m・短軸 2.7m 以上と思われる。ピットは，中央部付近に径 40～55 cm・深さ 20～60 cm を測る一群があり，壁に沿って径 40～50 cm・深さ 20～60 cm を測る一群があったと思われる。ただし，北東部付近は重複のため判然としていない。

第 10 号住居址（図 145）

本址は $B2a_1$・a_2・b_1・b_2にまたがるピット群の検出によって確認されたもので,北東隅で第 59 号土壙と重複している。壁・周溝は確認できなかった。ピットの配列状態から，平面形は楕円形状を呈し，主軸は N－30°－W を指し，長径約 5.2m・短径約 4.4m を測るものと思われる。ピットは南西隅で径 90 cm・深さ 36 cm を測るものがあり，他は径 30～50 cm・深さ 25～60 cm である。それぞれ，壁に沿って一周したものと思われる。

表86　住居址一覧表

住居址No.	地　区	主軸方向	長軸×短軸(m)	壁高(m)	炉　址	備　考
1	B_1a_8	N－42°－W	2.1×2.05	0.35	なし	隅丸方形 土器片・石器，耳飾
2	B_1a_8, a_9	N－88°－W	3.59×3.0	0.25	なし	隅丸長方形 土器片
3	B_1b_7, b_8		(3)	0.35	地床炉 (?)	円　形（?） 土器片
4	A_1i_9, i_0	N－59°－W	2.33×2.25	0.45	なし	隅丸方形
5	A_1i_0 A_2i_1	N－75°－W	2.85×2.43	0.49	なし	楕円形
6	A_1i_3, i_4 i_5 j_4, j_5	N－33°－W	4.55×3.9		なし	長方形 ピットのみ
7	A_1j_4, j_5 B_1a_4, a_5	N－34°－W	4.3×(3)		なし	方　形（?） ピットのみ
8	A_1j_7, j_8 B_1a_7, a_8	N－71－W	5.7×4.2		なし	楕円形 ピットのみ
9	B_1 a_8, a_9 b_8, b_9		5.2×(2.7)		なし	方　形（?） ピットのみ
10	B_2 a_1, a_2 b_1, b_2	N－30°－W	5.2×4.4		なし	楕円形 ピットのみ



第145図　第９号・10号住居址

2．土　　壙

本貝塚における土壙は，以下に一覧表として示したとおりである。

表87　（土壙一覧表（1））

土壙No.	地　区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	実測図・写真
01	A_1j_4	不整楕円形	N−63°−E	1.81 × 1.42	0.29	ピット2	図146
02	A_1i_4	不整長楕円形	N−60°−W	1.55 × 0.9	0.17	ピット4，縄文土器片(少)	図146
03	A_1 i_5 j_5	楕　円　形	N−61°−E	1.47 × 1.31	0.48	壙底はローム，平担，縄文土器片(少)	図146 (写29−1)
04	A_1i_5	楕　円　形	N−16°−W	0.99 × 0.88	0.63	ピット2	図146 (写29−2)
05	A_1i_5	不整円形	N−0°−S	0.66 × 0.65	0.58	スリバチ状，縄文土器片(数点)	図146 (写29−3)
06	A_1 h_4 i_4	長　方　形	N−28°−E	1.87 × 1.15以上	0.9	壙底はローム，平担，縄文土器片(少)	図146
07	A_1i_6	不整楕円形	N−11°−E	1.23 × 0.9	0.58	南側が深い，縄文土器片(少)	図146 (写29−4)
08	A_1 h_5 i_5	不整方形	N−90°−E	0.87 × 0.7	0.25	ピットに切られる，縄文土器片(数点)	図146
09	A_1j_5	不整楕円形	N−65°−E	0.73 × 0.61	0.57	床はローム，平担	図146
10	A_1j_5,j_6	不整円形	N−59°−E	0.94 × 0.91	0.59	縄文土器片(数点)	図146
11	A_1j_5,j_6	楕　円　形	N−81°−W	0,76 × 0.55	0.58	縄文土器片(数点)	図147 (写29−5)
12	A_1j_6	不整双円形	N−6°−E	1.36 × 1.24		縄文土器片(多)	図147

表88 （土壙一覧表 (2)）

土壙No.	地 区	平面形状	長軸方向	長径軸×短径軸m	深さm	備　　考	実測図・写真
13	A_1g_5,h_5	長 方 形	N—27°—E	1.85 × 1.24		壙底は凸凹，後世に掘られたもの	図147
14	A_1 g_5 h_5	長 方 形	N—32°—E	2.16 × 1.72		後世に掘られたもの	図147
15	A_1i_7,j_7	楕 円 形	N—29°—E	1.0 × 0.67	0.3	縄文土器片(数点)	図147 (写29—6)
16	A_1h_4	楕 円 形	N—11°—E	0.38 × 0.31			図147
17	A_1i_6	楕 円 形	N—12°—E	1.31 × 0.87	0.41		図147
18	A_1i_5,i_6	円 形		0.72 × 0.72	0.58		図147
19	A_1 i_6 j_6	楕 円 形	N—6°—W	0.68 × 0.63			図147
20	B_1a_9,a_0	不整楕円形	N—30°—E	1.32 × 0.88		ピット1，縄文土器片(少)	図147
21	B_1a_0	楕 円 形	N—86°—W	1.2 × 1.02	0.94	中央部スリバチ状の落ち込み，縄文土器片(多)	図148
22	B_1a_0	不整楕円形	N—46°—W	1.19 × 0.79	0.41	壙底はスリバチ状，縄文土器片(少)	図148
23	A_1j_9	楕 円 形	N—4°—W	0.79 × 0.75		ピット1，縄文土器片(多)	図148
24	A_1j_9	円 形		1.6 × 1.6	0.5	壙底はスリバチ状，ピット1，縄文土器片(多)，磨石(1)	図148

表89 （土壙一覧表 (3)）

土壙№	地 区	平面形状	長軸方向	長径(軸)×短径(軸)m	深さm	備　　考	実測図・写真
25	A_1 i_9 j_9	楕 円 形	N—52°—W	0.69 × 0.62	0.62	壙底はスリバチ状，縄文土器片(多)，敲石(1)	図148
26	A_1j_9	不整楕円形	N—16°—W	0.92 × 0.75	0.15		図148
27	A_1j_8	不整楕円形	N—14°—W	1.06 × 0.93	0.26	2ヶ所でピットに切られる，縄文土器片(多)	図148
28	A_1j_8	円　　形		0.47 × 0.47			図148
29	A_1j_8	楕 円 形	N—17°—W	0.88 × 0.76		ピットと重複，縄文土器片(多)	図148
30	A_1j_8	楕 円 形	N—82°—E	約0.5 × 0.43		ピットと重複，縄文土器片(多)	図148
31	A_1j_8	楕 円 形	N—0°—S	0.55 × 0.53			図148
32	A_1j_8	不 整 円 形		0.44 × 0.44		縄文土器片(多)	図148
33	A_1i_8	楕 円 形	N—56°—W	0.59 × 0.43		縄文土器片(多)	図148
34	A_1j_6	不整楕円形	N—40°—W	1.07 × 0.66		縄文土器片(数点)	図148
35	A_1j_8	双 楕 円 形	N—55°—E	0.86 × 0.4		ピット2ヶの切り合いか？縄文土器片(数点)	図148
36	A_1j_8	不整楕円形	N—13°—E	0.8 × 0.64		縄文土器片(数点)	図148

表90 （土壙一覧表 (4)）

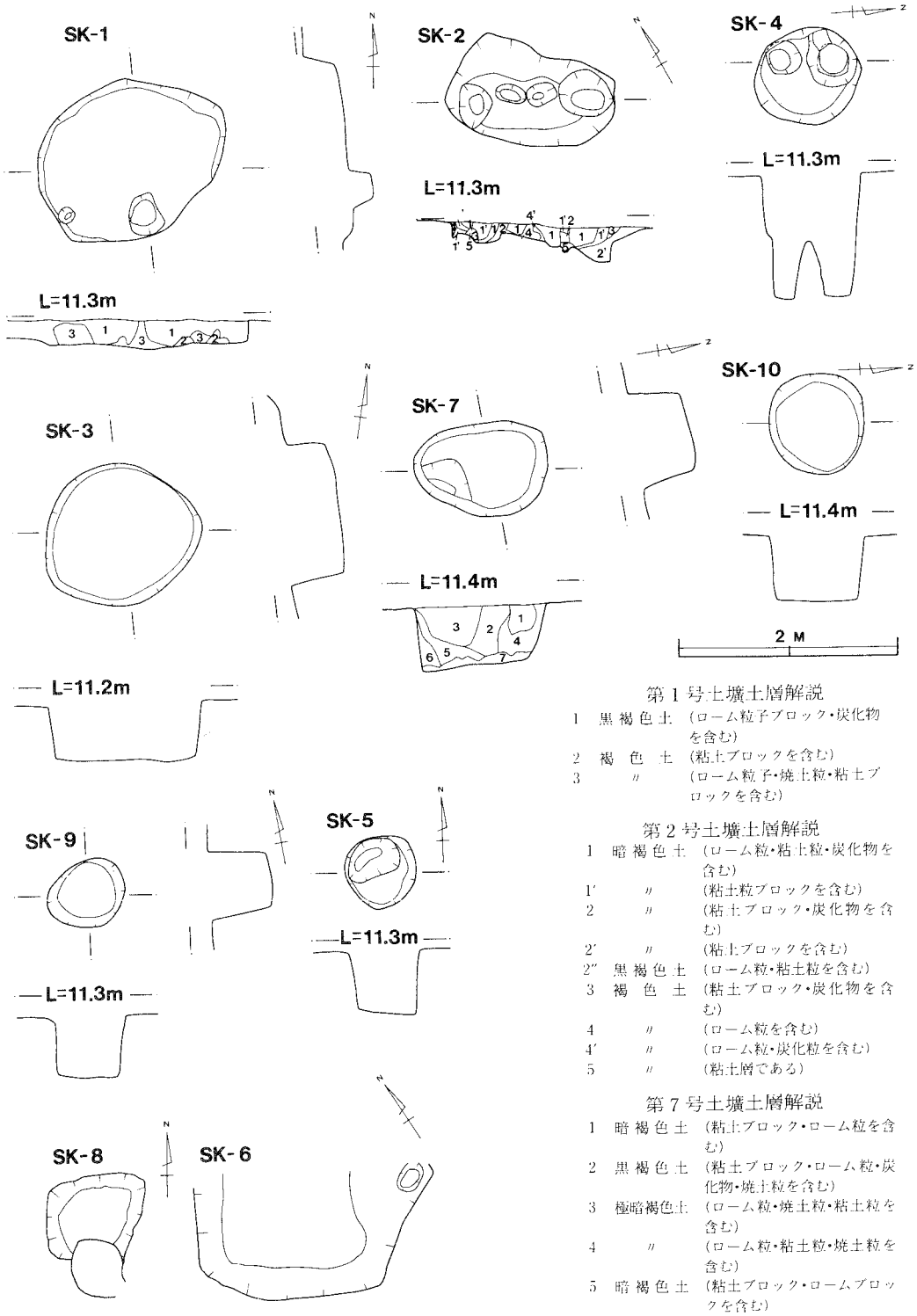
土壙No	地 区	平面形状	長軸方向	長径軸×短径軸m	深さm	備　　考	実測図・写真
37	A_1j_8	円　　形		0.34 × 0.34			図148
38	A_1j_9	不整楕円形	N—22°—W	0.55 × 0.49			図149
39	B_1a_0	楕 円 形	N—44°—E	0.87 × 0.68		縄文土器片(少)	図149
40	A_1j_8,j_9	不 整 円 形		0.57 × 0.57		縄文土器片(少)	図149
41	B_1a_0	不整楕円形	N—48°—E	2.45 × 1.6		ピット 4	図149
42	B_1a_6	円　　形		0.72 × 0.72		縄文土器片(数点)	図149
43	A_1j_8,j_9	不整長方形	N—75°—W	1.89 × 0.83		縄文土器片(多)	図149
44	B_2a_1	楕 円 形	N—79°—E	1.01 × 0.9	0.72	壙底はスリバチ状，縄文土器片(1点)	図149
45	B_2b_2	不整楕円形	N—74°—E	0.89 × 0.55		ピット 1，縄文土器片(少)，磨石片 1	図149
46	B_2b_1	不　　明		NS0.39 × EW0.97		ピット 1，縄文土器片(数点)	図149
47	B_2b_3	不整楕円形	N—79°—E	0.93 × 0.71		ピット 1，縄文土器片(少)	図149
48	B_1a_7,a_8	不整楕円形	N—66°—E	1.53 × 0.84	0.43	壙底はスリバチ状，縄文土器片(少)	図149

表91 （土壙一覧表 (5)）

土壙No	地 区	平面形状	長軸方向	長径軸×短径軸m	深さm	備　　考	実測図・写真
49	A_1j_7	楕 円 形	N—19°—E	1.93 × 1.39	0.58	縄文土器片(多)	図149
50	A_1j_7	不整楕円形	N—19°—E	0.65以上 × 0.7		縄文土器(2) 縄文土器片(少)	図149
51	A_1j_6,j_7	不 整 方 形	N—56°—E	1.36 × 1.11		縄文土器片(多)	図149
52	A_1j_7	隅 丸 方 形	N—26°—E	1.15 × 1.07		縄文土器片(少) 独鈷石(1)	図150
53	A_1h_6,h_7	不　　明		EW1.25 × NS0.4		一部エリア外，縄文土器片(数点)	図150
54	A_1h_6	不　　明		EW1.0 × 0.25		一部エリア外，縄文土器片(数点)	図150
55	A_1 h_8 i_8	円　　形	N—3°—E	1.28 × 1.22		縄文土器片(少)	図150
56	A_1h_8	長 楕 円 形	N—43°—E	1.96 × 1.29		ピット1，縄文土器片(少)	図150
57	A_1h_9	不 整 円 形		1.34 × 1.34		ピット1，縄文土器片(少)	図150
58	B_1b_0 B_2b_1	不整楕円形	N—67°—E	1.21 × 0.86			図149
59	B_2a_2	不整楕円形	N—9°—E	0.77 × 0.51		ピット1，縄文土器片(少)	図149
60	B_1b_9,b_0	隅 丸 方 形	N—42°—W	0.83 × 0.81		縄文土器片(少)	図150

表92 （土壙一覧表 (6)）

土壙No.	地区	平面形状	長軸方向	長径軸×短径軸m	深さm	備考	実測図・写真
61	B_1b_0	長楕円形	N—0°—S	1.04 × 0.58		縄文土器片(少)	図150
62	B_1b_0	不整楕円形	N—52°—W	1.35 × 0.99		ピット1，縄文土器片(多)	図150
63	B_1 a_9 b_9	楕円形	N—21°—E	0.75以上 × 0.8		縄文土器片(少)，耳飾(1)	図150
64	B_1a_8,a_9	不明		EW0.92 × 0.92		一部エリア外，縄文土器片(少)	図150
65	A_1j_8	不整楕円形	N—47°—E	1.32 × 0.94		縄文土器片(多)	図150
66	A_1i_7	不整楕円形	N—10°—W	1.04 × 0.78		縄文土器片(数点)	図150
67	A_1i_5,i_6	楕円形	N—69°—E	0.96 × 0.92		縄文土器片(数点)	図150
68	A_1i_7,j_7	双円形	N—75°—W	0.98 × 0.59		ピット2ヶの切り合いか，縄文土器片(数点)	図150
69	B_1a_6,a_7	長楕円形	N—23°—W	1.23 × 0.6		SI—8 ピットに切られる，縄文土器片(少)	図150
70	A_1h_5,h_6	長方形	N—30°—E	1.48 × 0.78		後世に掘られたもの	図150
71	A_1 g_4,g_5 h_4,h_5	長方形	N—29°—E	1.9 × 1.7		後世に掘られたもの	図147



第1号土壙土層解説

1　黒褐色土　(ローム粒子ブロック・炭化物を含む)
2　褐　色　土　(粘土ブロックを含む)
3　〃　(ローム粒子・焼土粒・粘土ブロックを含む)

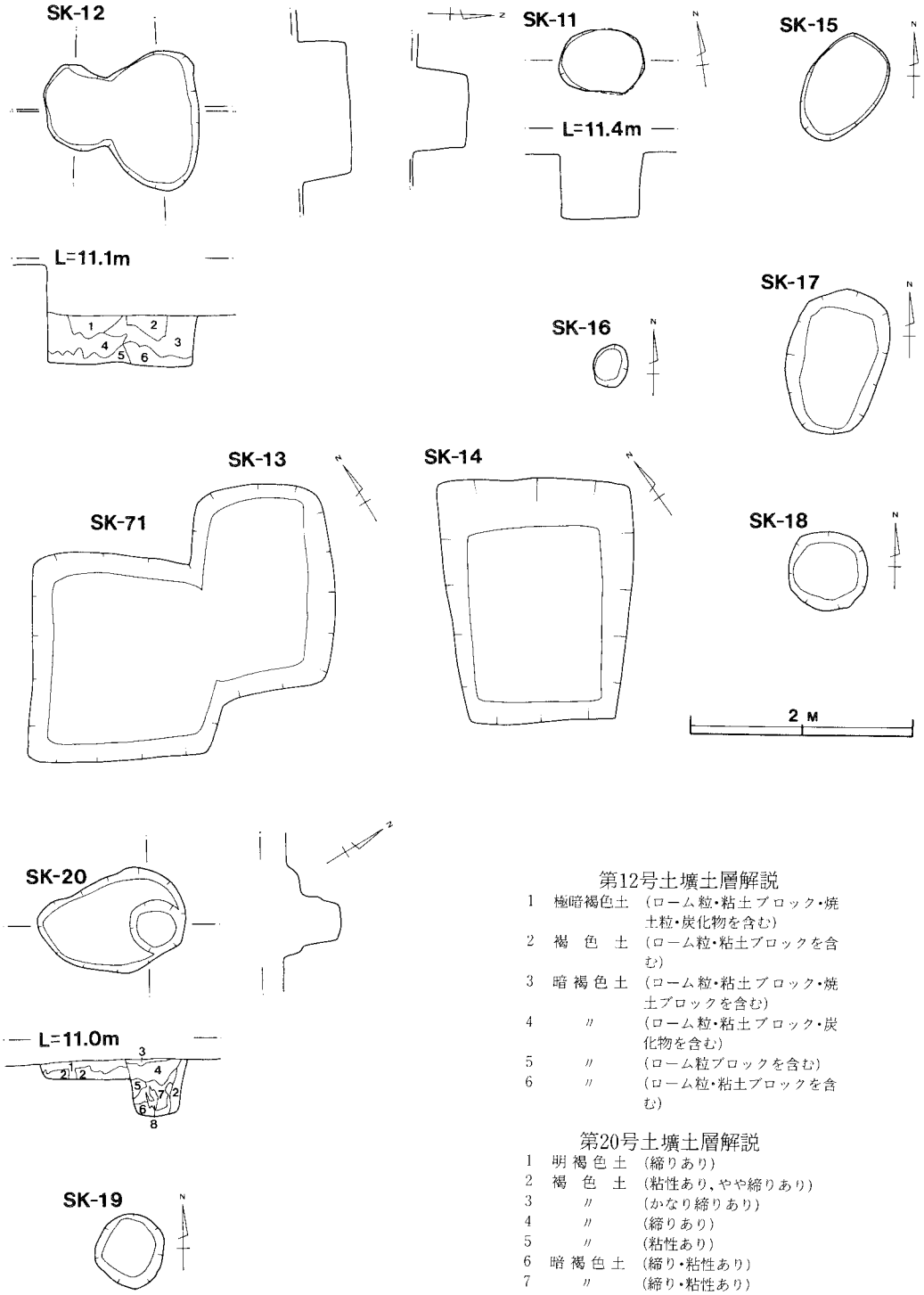
第2号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ローム粒・粘土粒・炭化物を含む)
1′　〃　(粘土粒ブロックを含む)
2　〃　(粘土ブロック・炭化物を含む)
2′　〃　(粘土ブロックを含む)
2″　黒褐色土　(ローム粒・粘土粒を含む)
3　褐　色　土　(粘土ブロック・炭化物を含む)
4　〃　(ローム粒を含む)
4′　〃　(ローム粒・炭化粒を含む)
5　〃　(粘土層である)

第7号土壙土層解説

1　暗褐色土　(粘土ブロック・ローム粒を含む)
2　黒褐色土　(粘土ブロック・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
3　極暗褐色土　(ローム粒・焼土粒・粘土粒を含む)
4　〃　(ローム粒・粘土粒・焼土粒を含む)
5　暗褐色土　(粘土ブロック・ロームブロックを含む)
6　黒褐色土　(粘土層である)
7　褐　色　土　(粘土層である)

第146図　第1～10号土壙



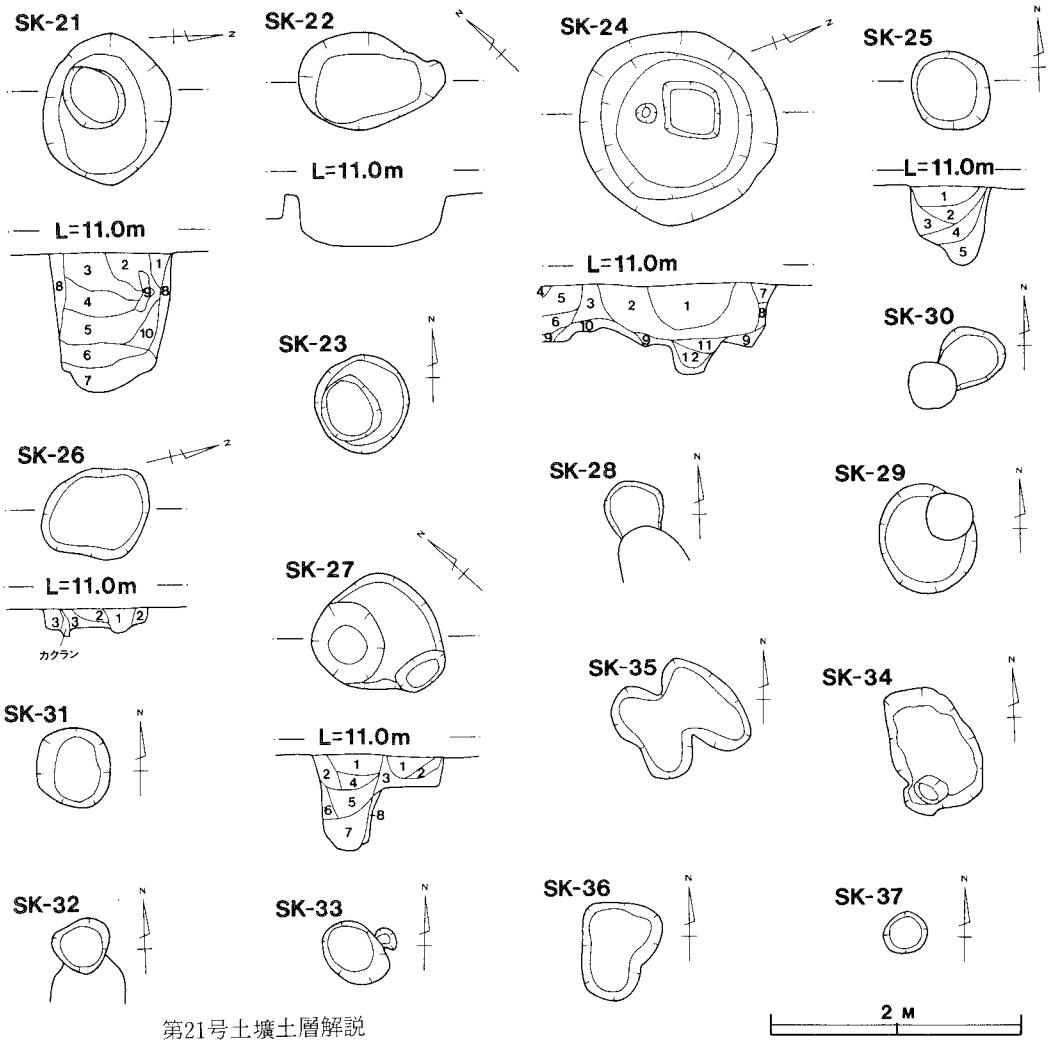
第12号土壙土層解説

1	極暗褐色土	(ローム粒・粘土ブロック・焼土粒・炭化物を含む)
2	褐　色　土	(ローム粒・粘土ブロックを含む)
3	暗褐色土	(ローム粒・粘土ブロック・焼土ブロックを含む)
4	〃	(ローム粒・粘土ブロック・炭化物を含む)
5	〃	(ローム粒ブロックを含む)
6	〃	(ローム粒・粘土ブロックを含む)

第20号土壙土層解説

1	明褐色土	(締りあり)
2	褐　色　土	(粘性あり、やや締りあり)
3	〃	(かなり締りあり)
4	〃	(締りあり)
5	〃	(粘性あり)
6	暗褐色土	(締り・粘性あり)
7	〃	(締り・粘性あり)
8	〃	(粘性あり,焼土粒を含む)

第147図　第11～20・71号土壙



第21号土壙土層解説

1　褐　色　土　(やや締りあり)
2　暗褐色土　(ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
3　黒褐色土　(やや軟かい)
4　〃　(粘性あり)
5　〃　(ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
6　〃　(粘性あり，ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
7　明褐色土　(炭化物・ローム粒を含む)
8　褐　色　土　(締り・粘性あり)
9　黒褐色土　(締りなし)
10　暗褐色土

第24号土壙土層解説

1　黒褐色土　(ローム粒・炭化物・焼土粒を含む，締りあり)
2　極暗褐色土　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
3　暗褐色土　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
4　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む，締りあり)
5　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
6　〃　(ＹＰ・ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
7　褐　色　土　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
8　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
9　〃　(ロームブロックを多量に含む)
10　〃　(ロームブロックを含む)
11　暗褐色土　(ＹＰ・炭化物を含む，粘性あり)
12　褐　色　土　(炭化物・ＹＰを含む，粘性強い)

第25号土壙土層解説

1　褐　色　土　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
2　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
3　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
4　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む，粘性あり)
5　〃　(ＹＰ・ローム粒を含む)

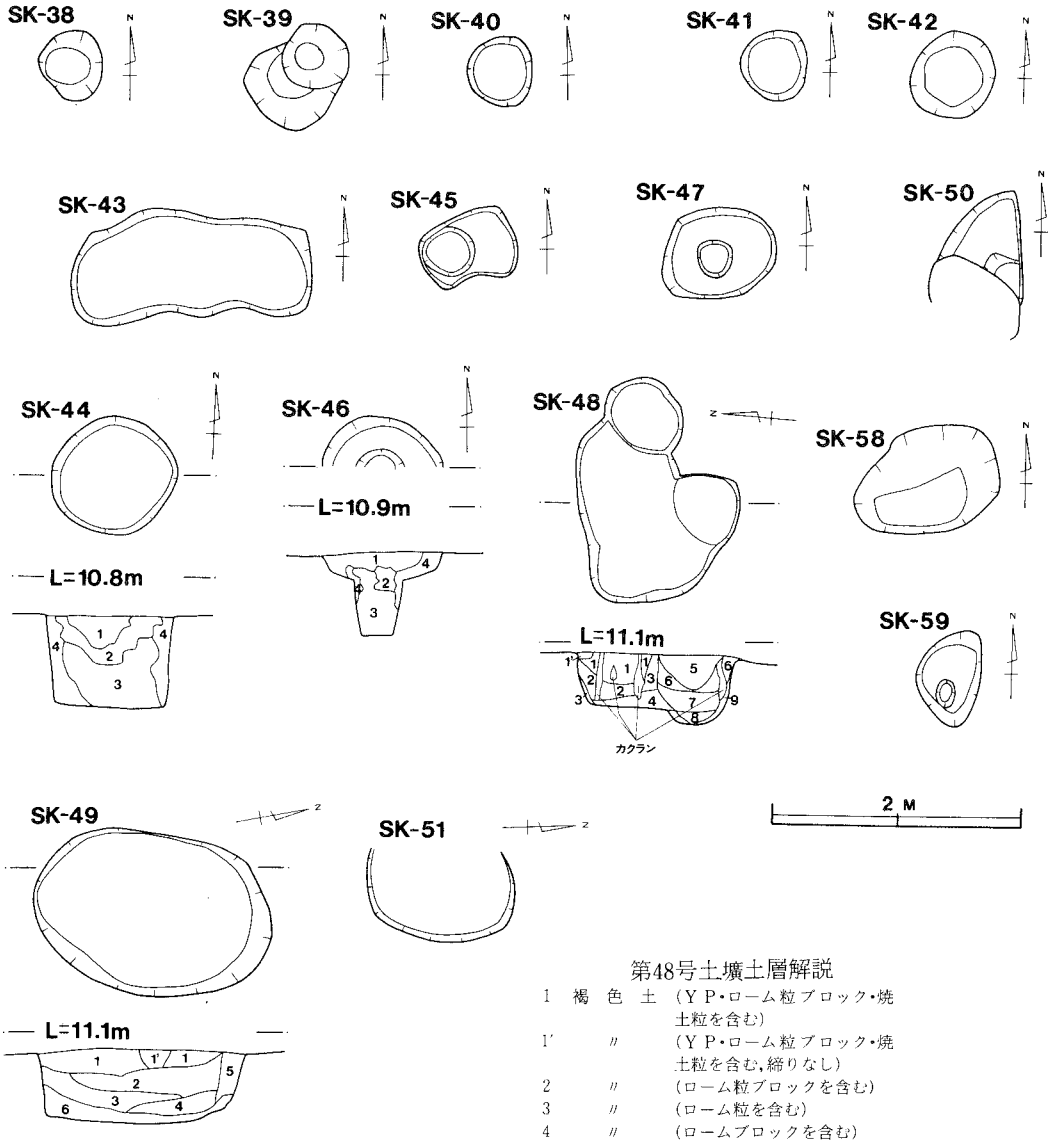
第26号土壙土層解説

1　褐　色　土　(ＹＰを含む，締りあり)
2　〃　(ＹＰを含む，締りあり)
3　〃　(ＹＰを含む，かなり締りあり)

第49号土壙土層解説

1　褐　色　土　(ＹＰ・焼土粒・炭化物を含む，締りあり)
2　〃　(ＹＰ・焼土粒・炭化物を含む)
3　〃　(ＹＰ・焼土粒・炭化物を含む，締りあり)
4　〃　(ＹＰ・ローム粒・焼土粒・炭化物を含む)
5　暗褐色土　(ＹＰ・焼土粒・炭化物を含む)
6　〃　(ＹＰを含む)
7　〃　(ＹＰを含む，粘性あり)
8　褐　色　土　(ＹＰを含む，粘性あり)

第148図　第21～37号土壙



第44号土壙土層解説

1　黒褐色土　(ローム粒を多量に含む)
2　〃　(ローム粒・焼土粒を含む)
3　〃　(ロームブロックを含む)
4　〃　(ローム粒を含む)

第46号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ローム粒・炭化物・焼土粒を含む)
2　〃　(ローム粒を含む)
3　〃　(ローム粒を多量に含む)
4　黄褐色土　(締りあり)

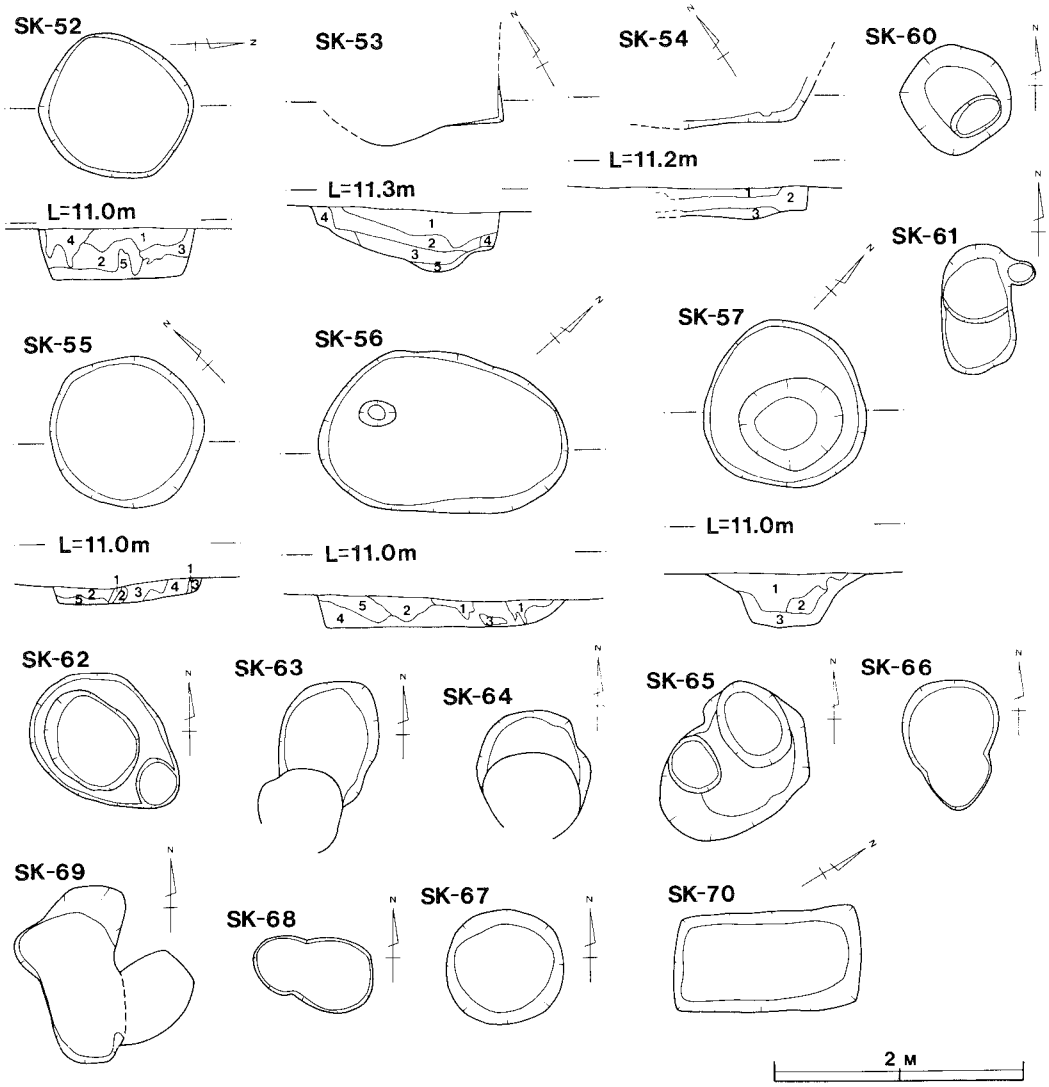
第48号土壙土層解説

1　褐色土　(ＹＰ・ローム粒ブロック・焼土粒を含む)
1′　〃　(ＹＰ・ローム粒ブロック・焼土粒を含む,締りなし)
2　〃　(ローム粒ブロックを含む)
3　〃　(ローム粒を含む)
4　〃　(ロームブロックを含む)
5　〃　(ＹＰ・ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
6　〃　(ＹＰ・ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
7　〃　(ローム粒を含む)
8　〃　(粘性あり)
9　〃　(締り弱い)

第49号土壙土層解説

1　褐色土　(ローム粒ブロック・炭化物・焼土粒を含む)
2　〃　(多量のローム粒ブロックを含む)
3　暗褐色土　(ローム粒ブロックを含む)
4　〃　(ＹＰ・ローム粒を含む)
5　褐色土　(ＹＰ・ローム粒を含む)
6　明褐色土　(ローム層である)

第149図　第38～51・58・59号土壙



第52号土壙土層解説

1　暗褐色土　(炭化物を含む)
2　〃　(ローム粒ブロックを含む)
3　〃　(ローム粒を含む)
4　〃　(ローム粒ブロック・炭化物・粘土粒を含む)
5　黄褐色土　(締りあり)

第53号土壙土層解説

1　灰褐色土　(粘土粒・ローム粒を含む)
2　褐灰色土　(粘土粒・ローム粒を多量に含む)
3　褐色土　(ローム粒ブロックを多量に含む)
4　〃　(ローム粒ブロック・粘土粒を多量に含む)

第54号土壙土層解説

1　灰褐色土　(ロームブロック・粘土ブロックを多量に含む)
2　暗褐色土　(粘性・締りあり)
3　褐色土　(粘性・締りあり)

第55号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ローム粒を含む)
2　〃　(ローム粒・炭化物を含む)
3　〃　(ローム粒・黒褐色土ブロックを含む)
4　〃　(ローム粒ブロックを含む)
5　〃　(ローム粒を多量に含む)

第56号土壙土層解説

1　暗褐色土　(ローム粒を含む)
2　〃　(ローム粒ブロックを含む)
3　黒褐色土　(ローム粒を含む)
4　褐色土　(締りあり)
5　〃　(ロームブロックを含む)

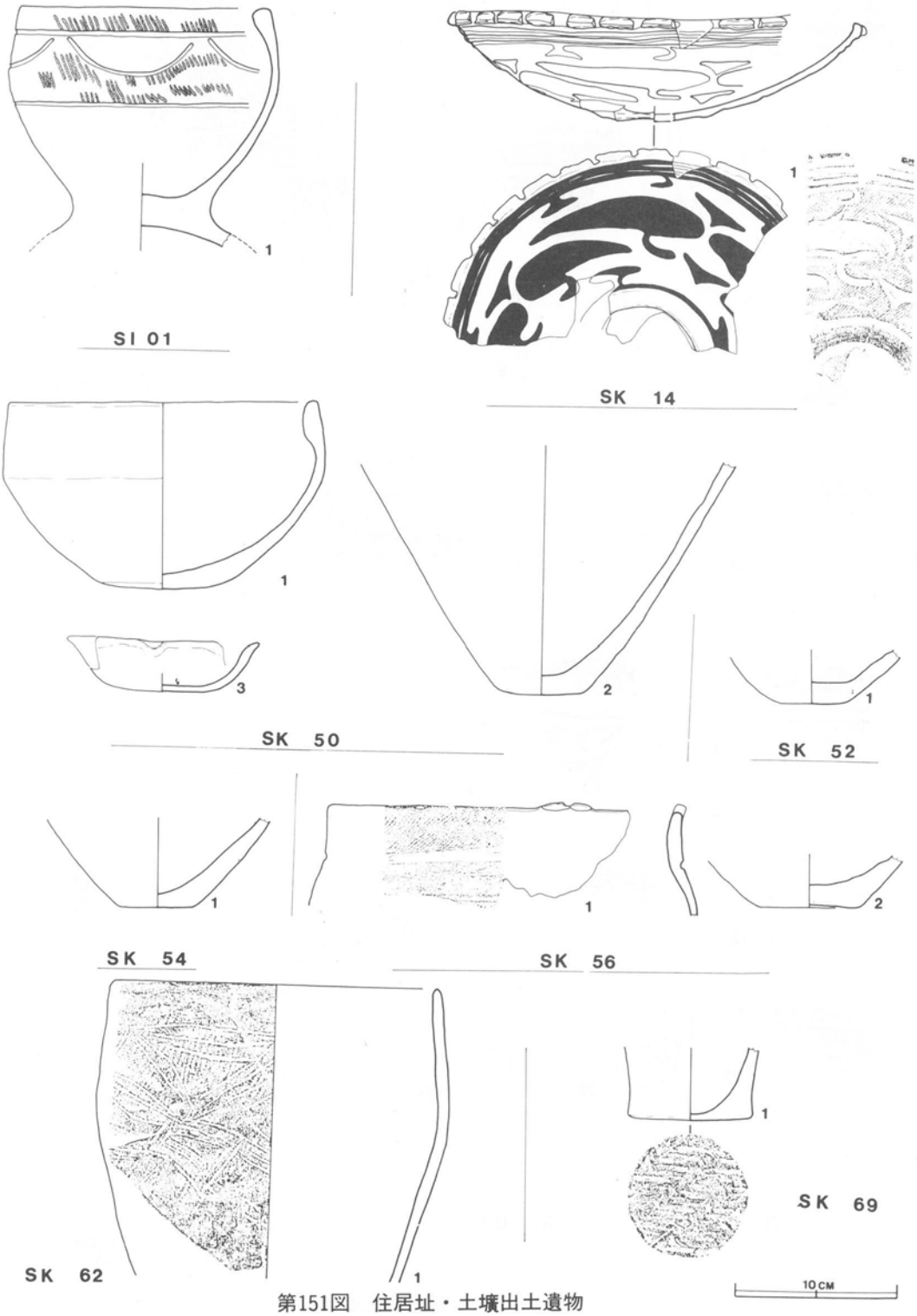
第57号土壙土層解説

1　黒褐色土　(ローム粒を含む)
2　〃　(ロームブロックを含む)
3　褐色土　(締りあり)

第150図　第52～57・60～70号土壙

3．遺　物

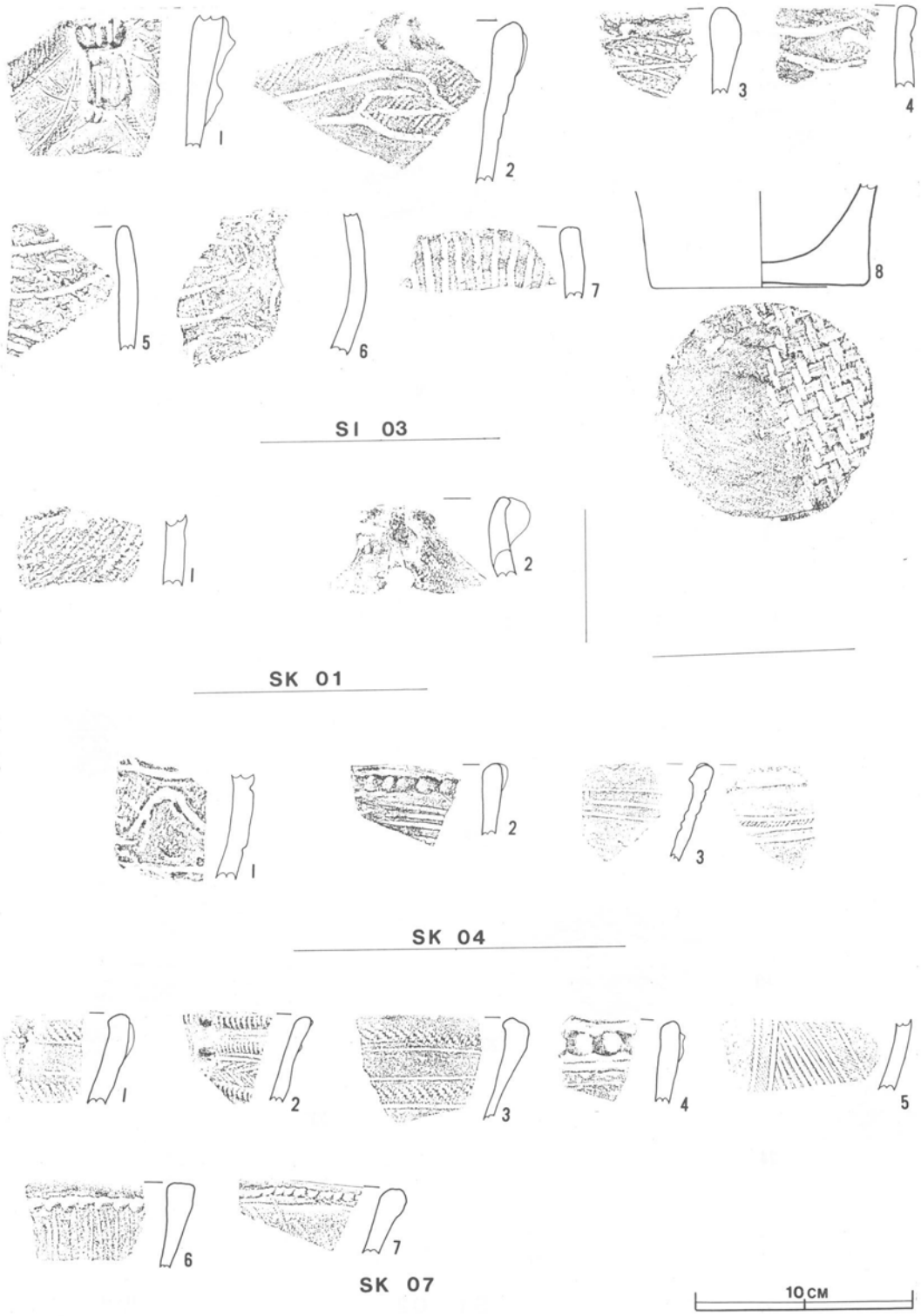
遺構出土遺物（実測図・拓影図）・グリッド出土遺物（実測図）に分類し，以下に掲載した。



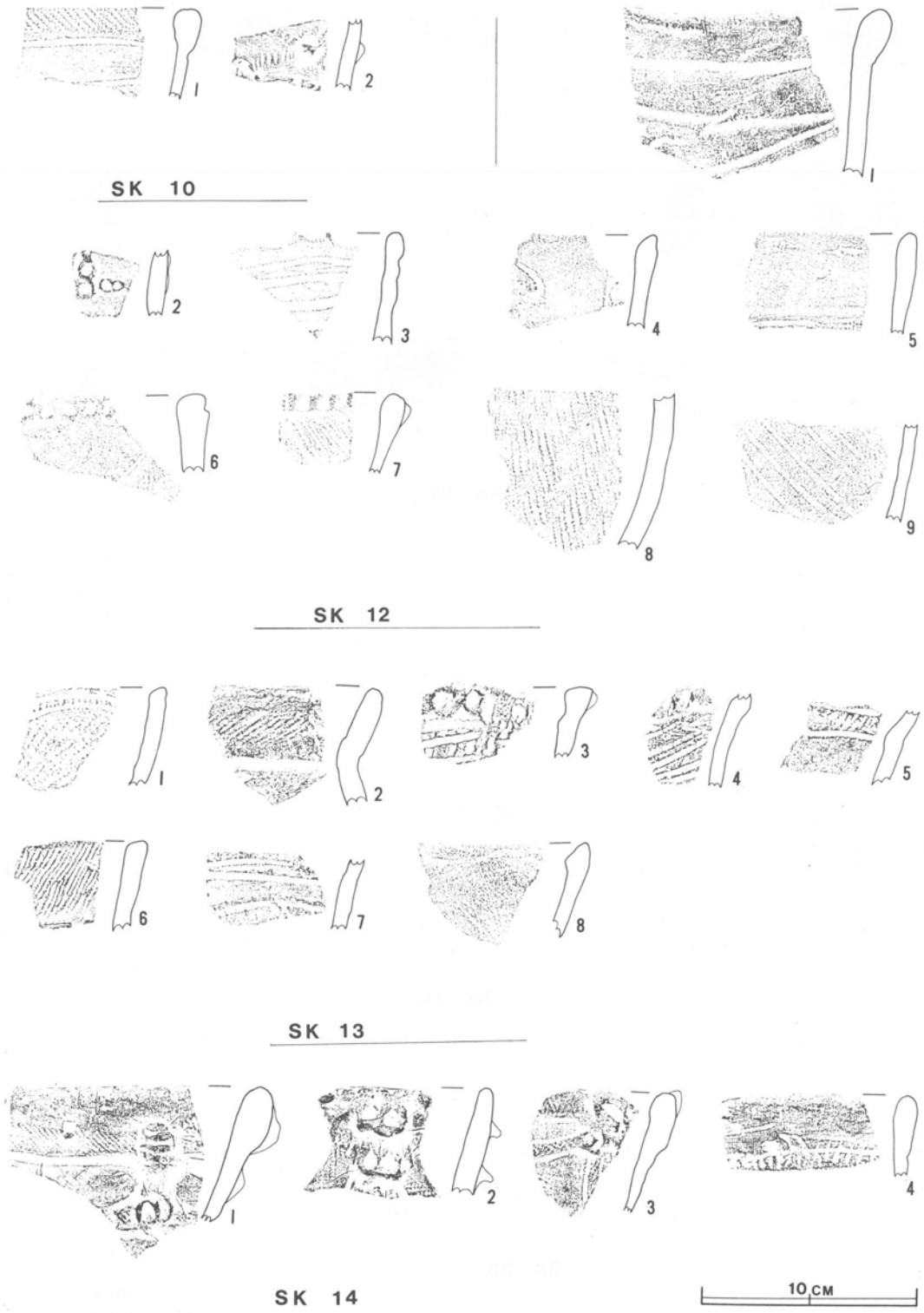
第151図　住居址・土壙出土遺物

第152図　住居址出土遺物

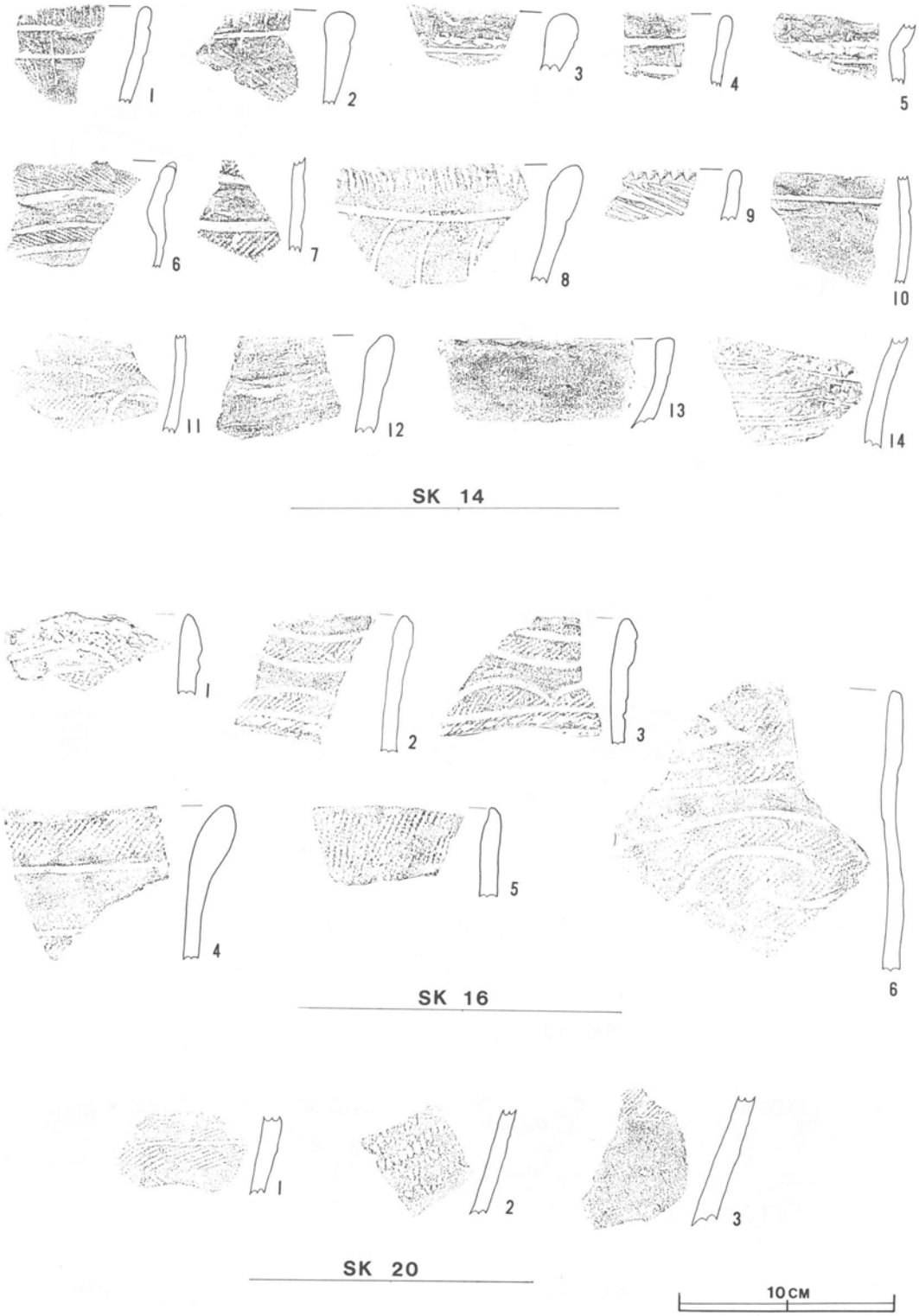
第153図　住居址出土遺物



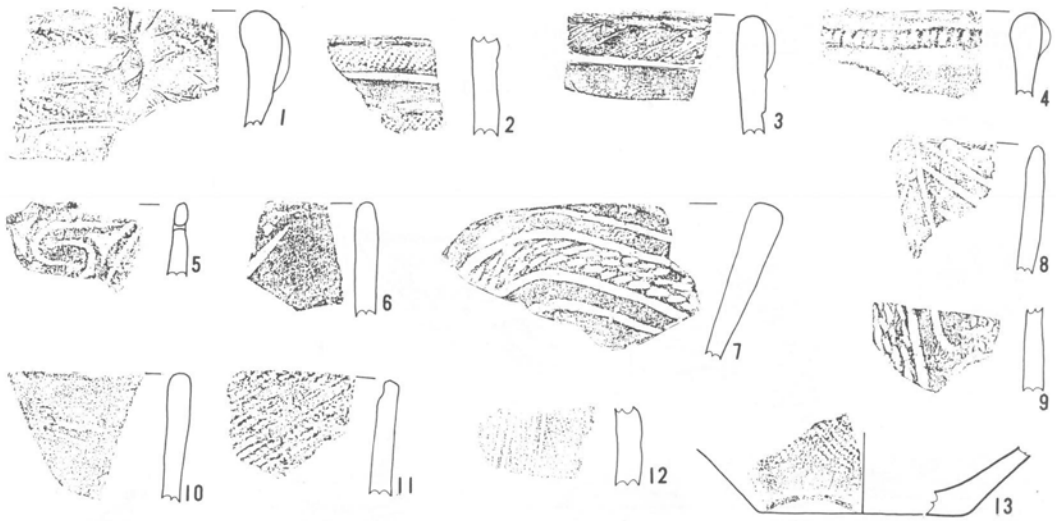
第154図　住居址土壙出土遺物



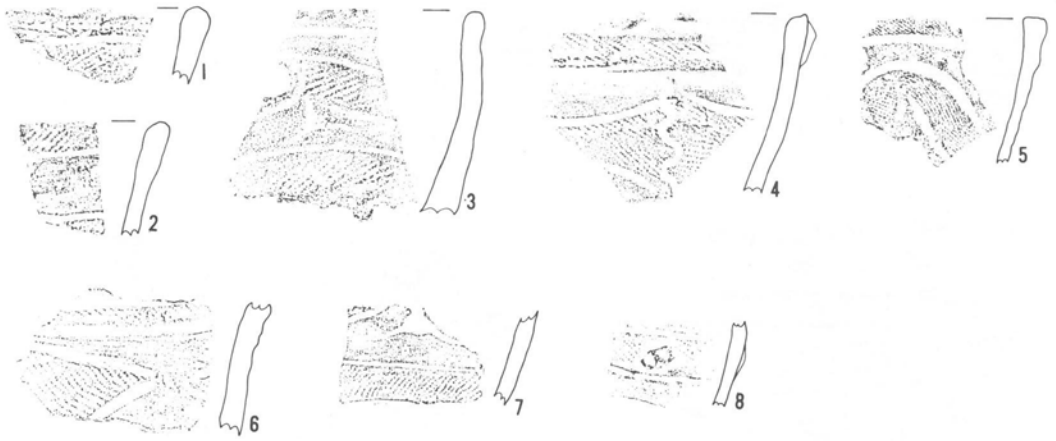
第155図　土壙出土遺物



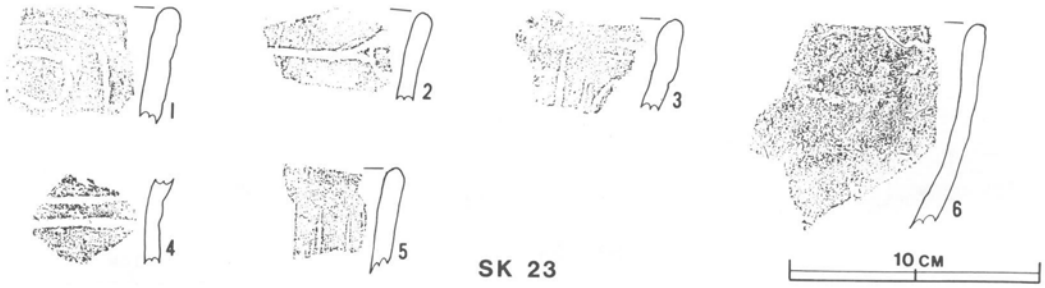
第156図　土壙出土遺物



SK 21

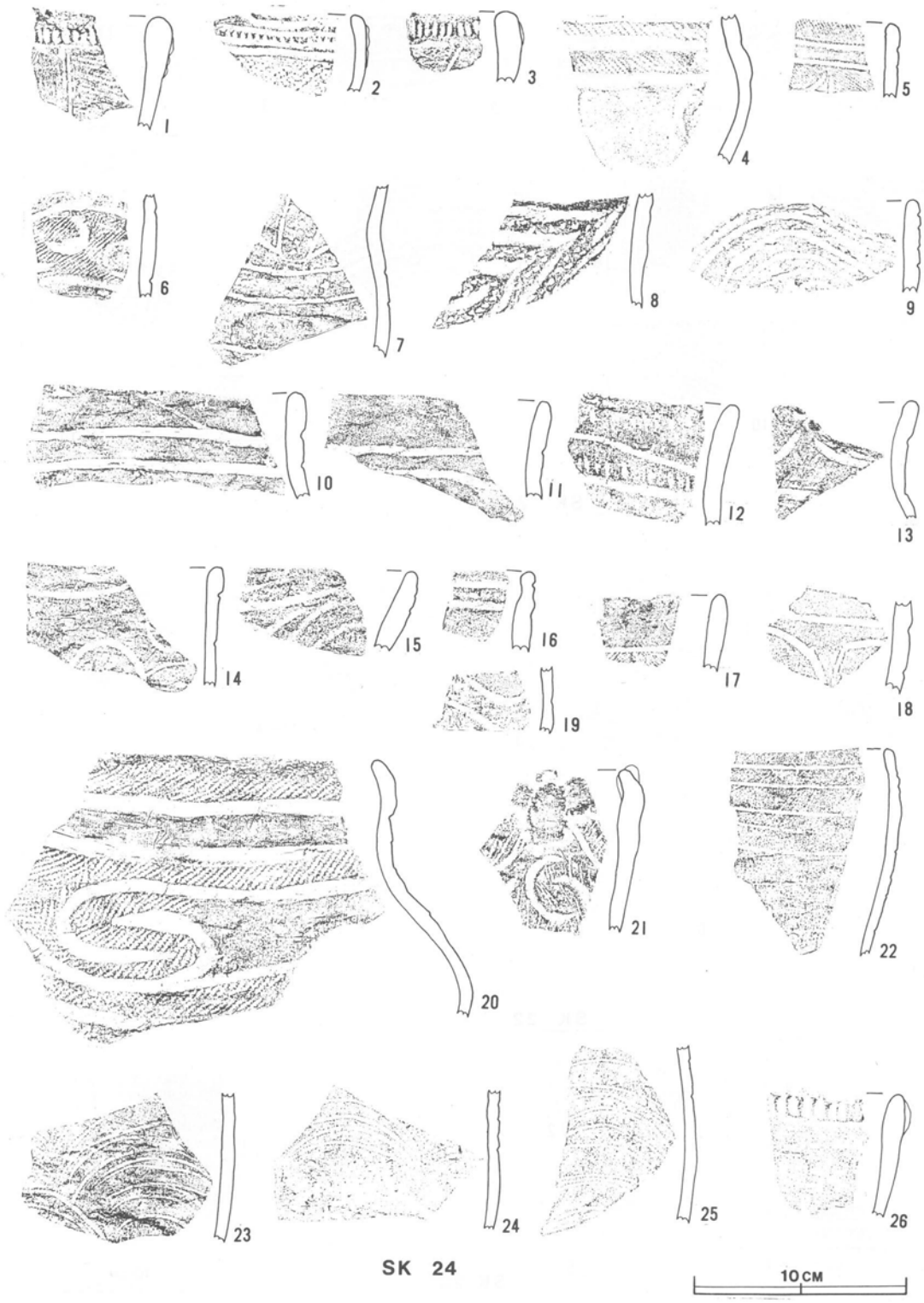


SK 22

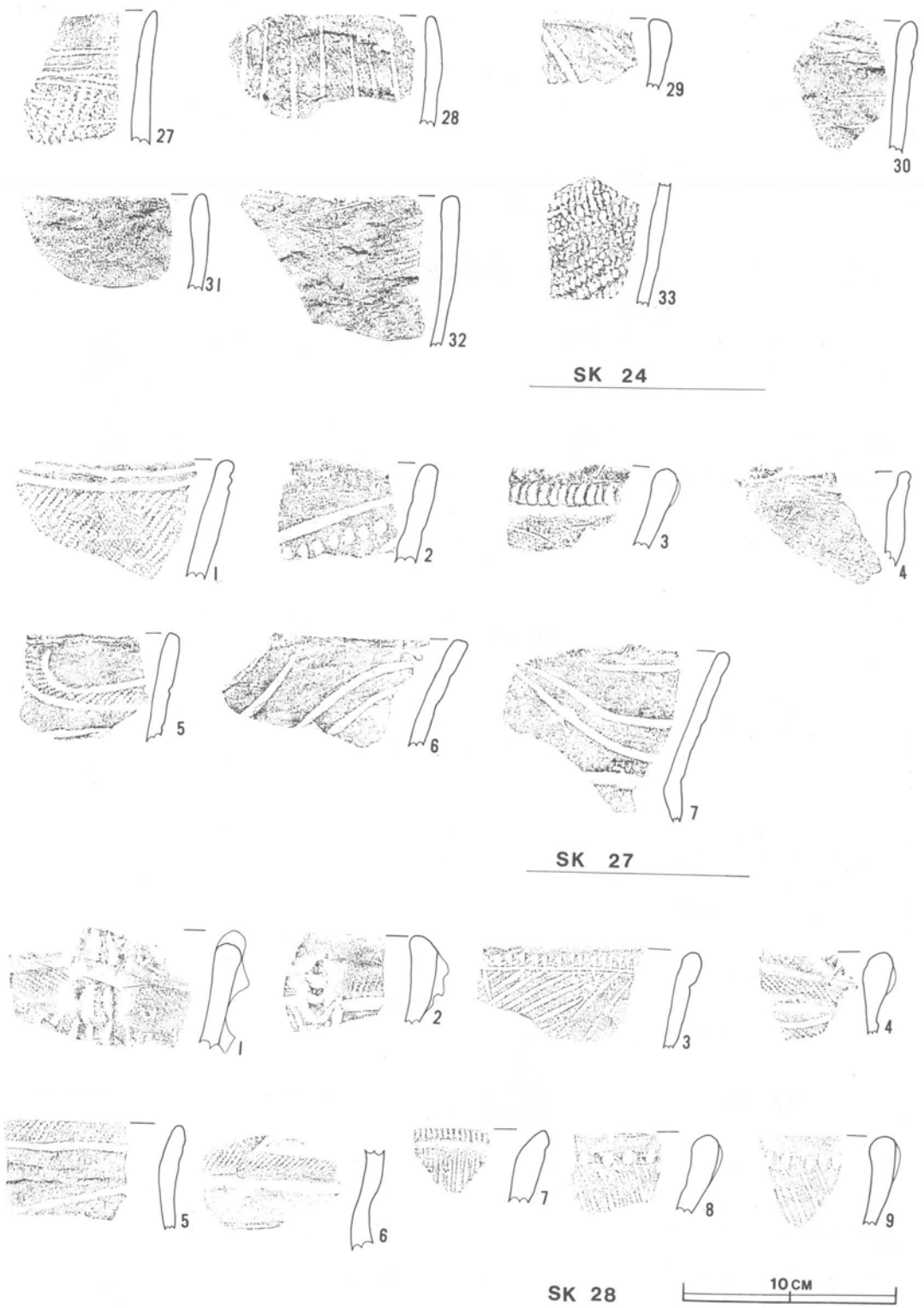


SK 23

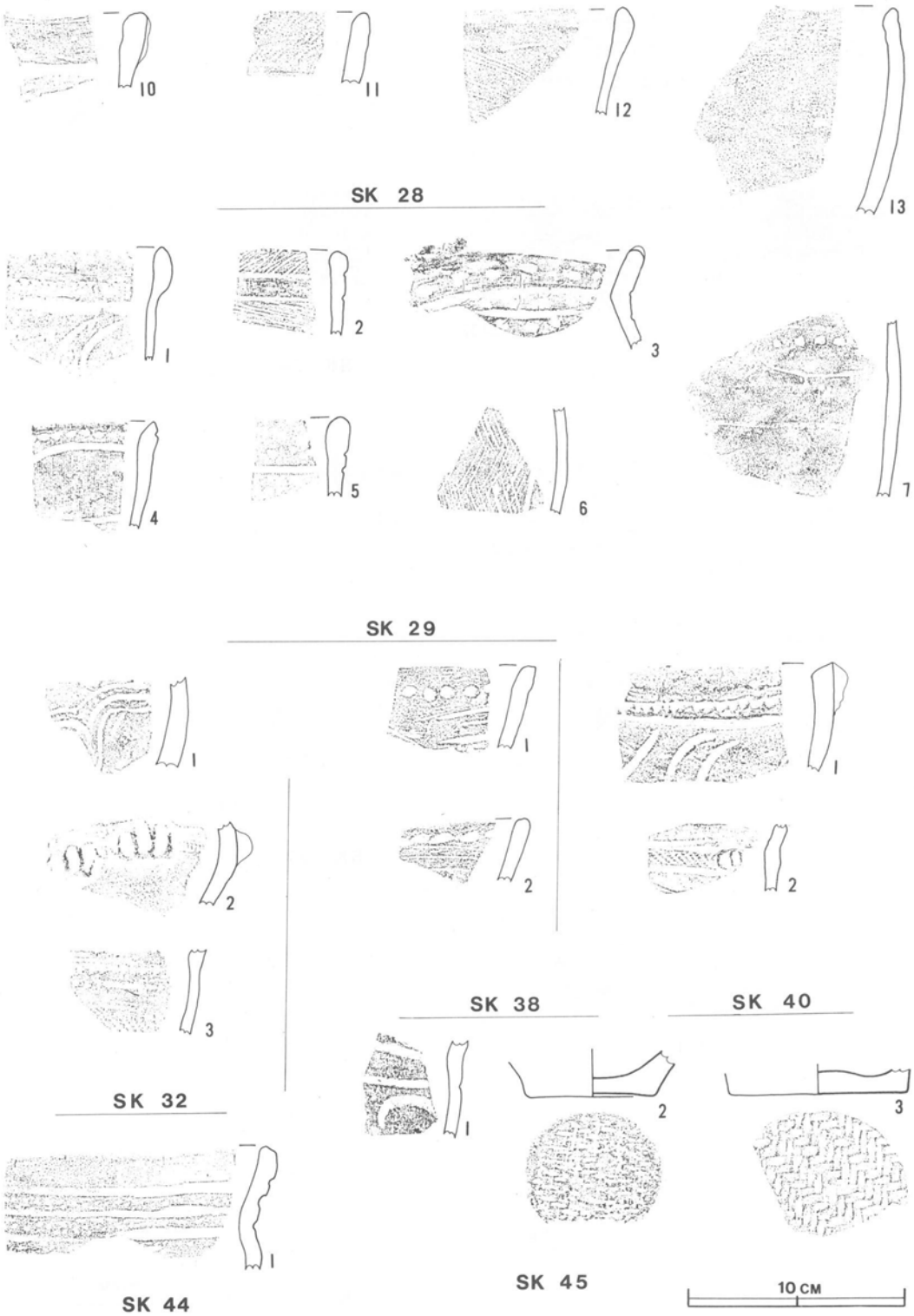
第157図　土壙出土遺物



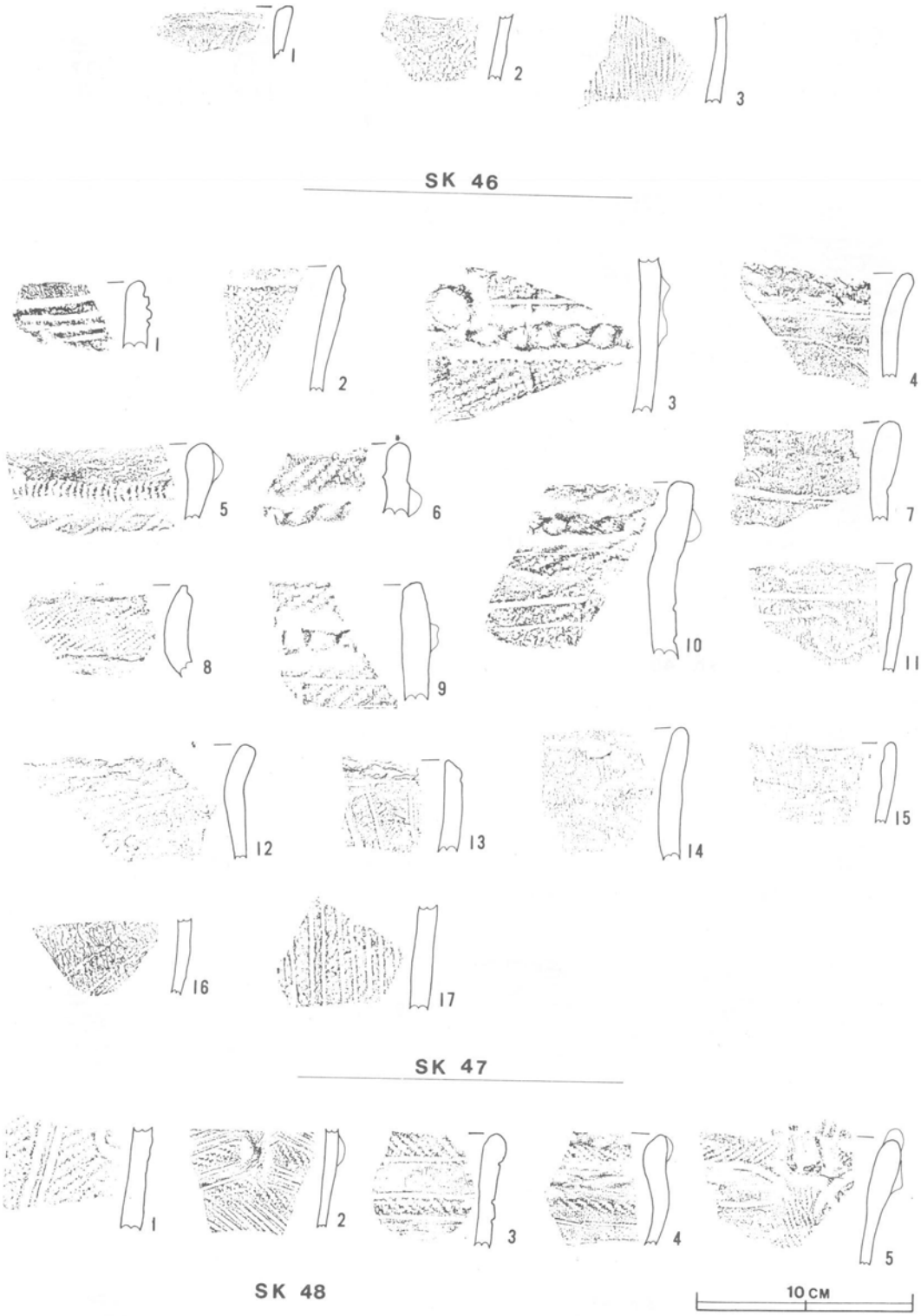
第158図　土壙出土遺物



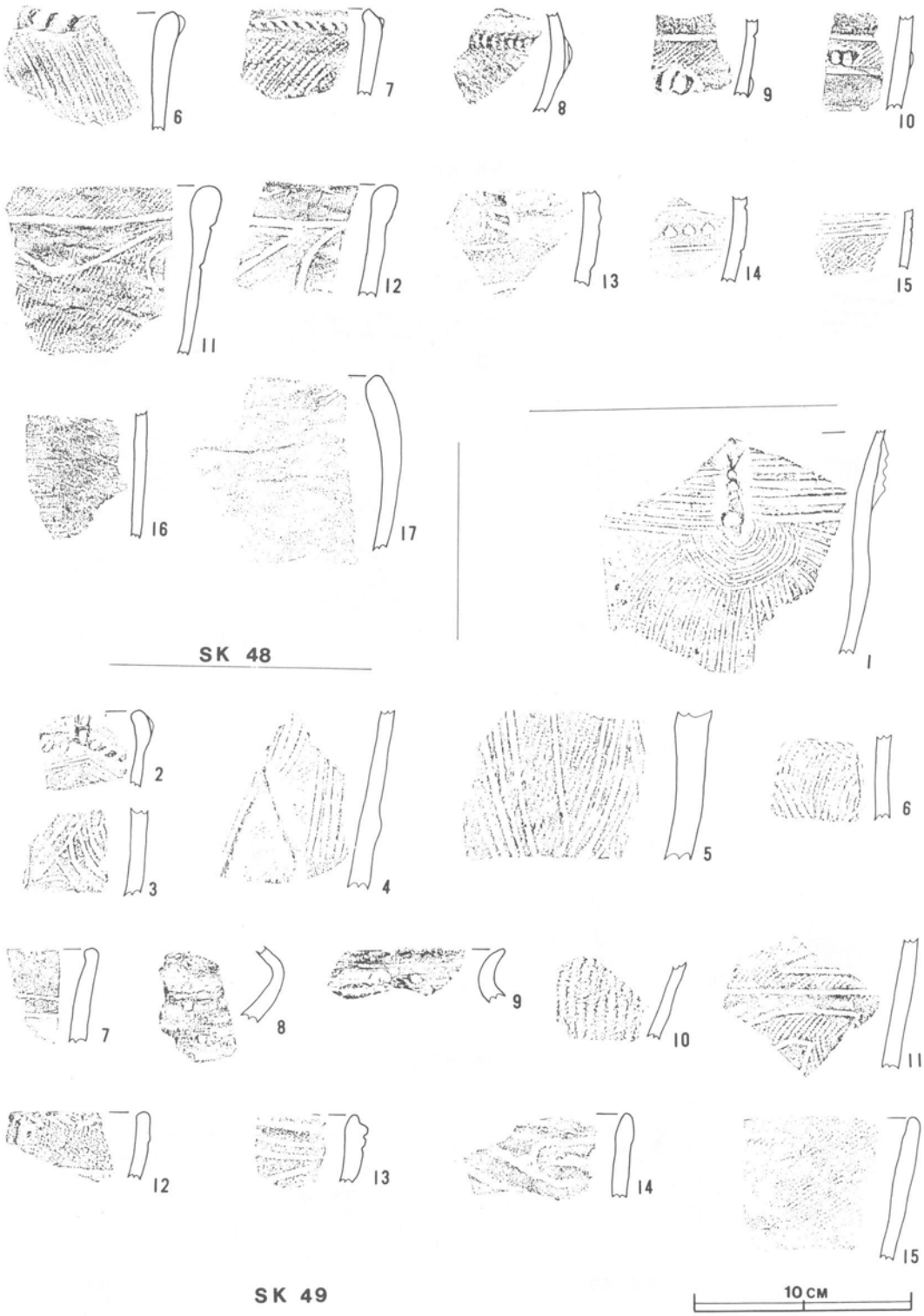
第159図　土壙出土遺物



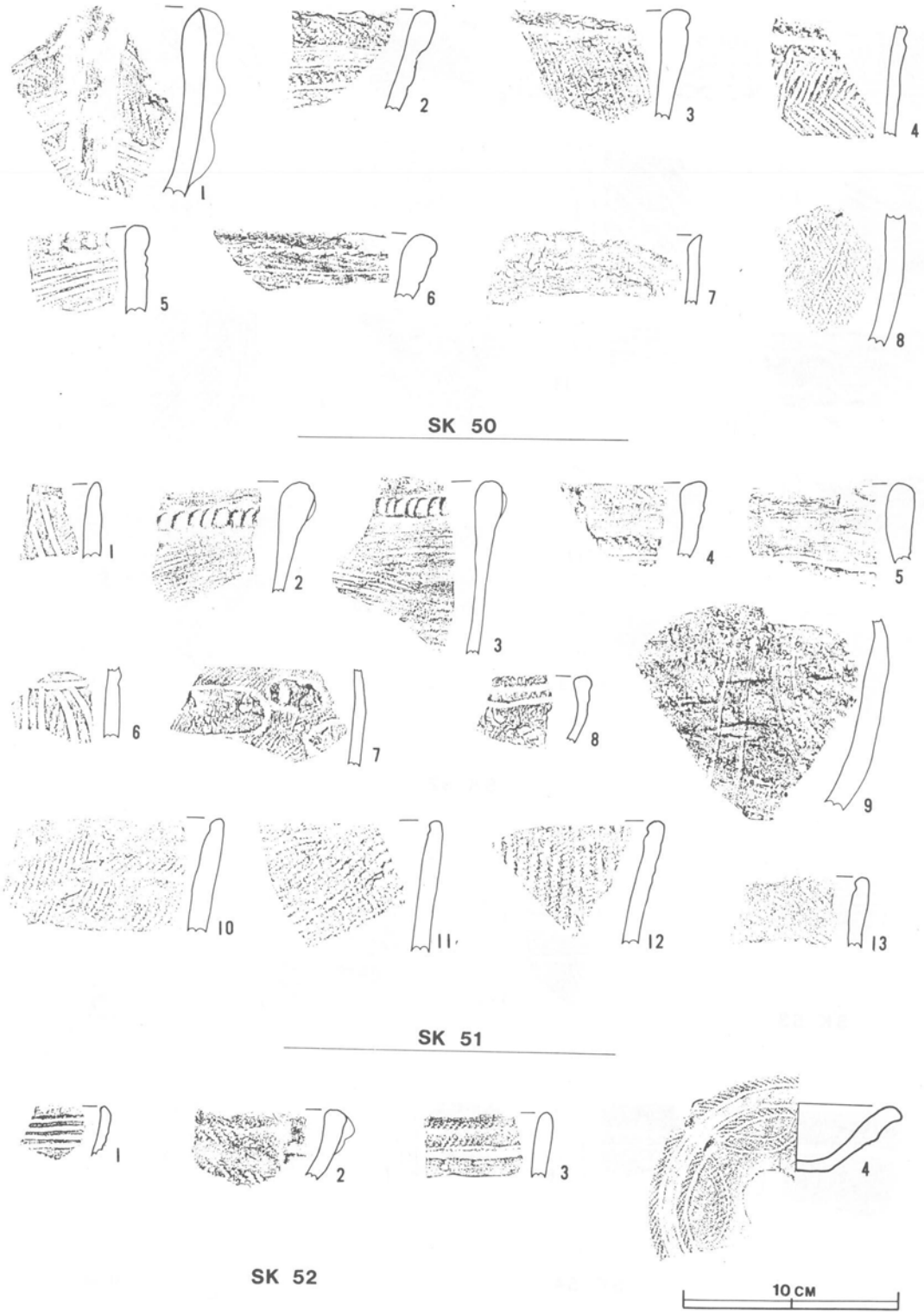
第160図　土壙出土遺物



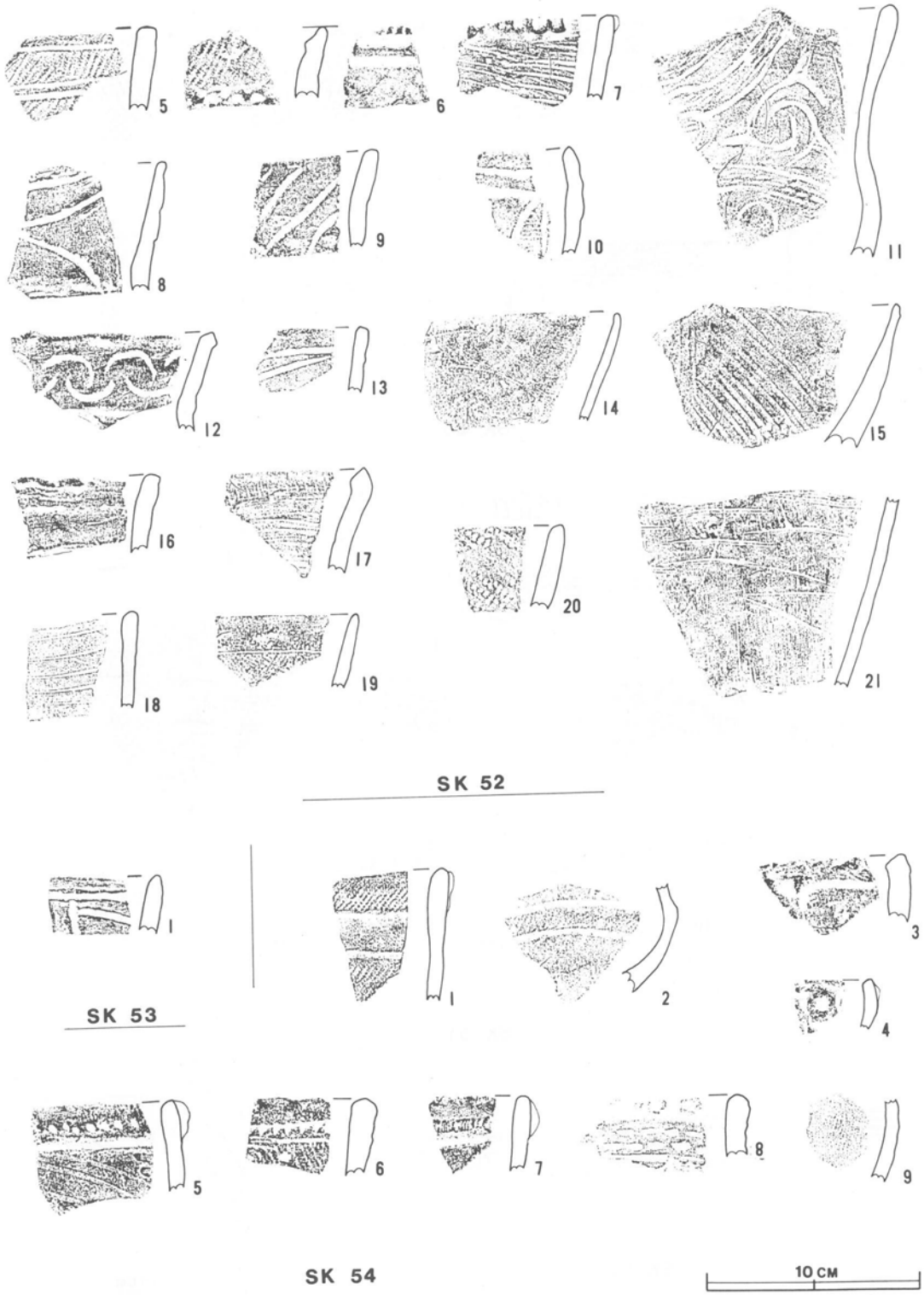
第161図　土壙出土遺物



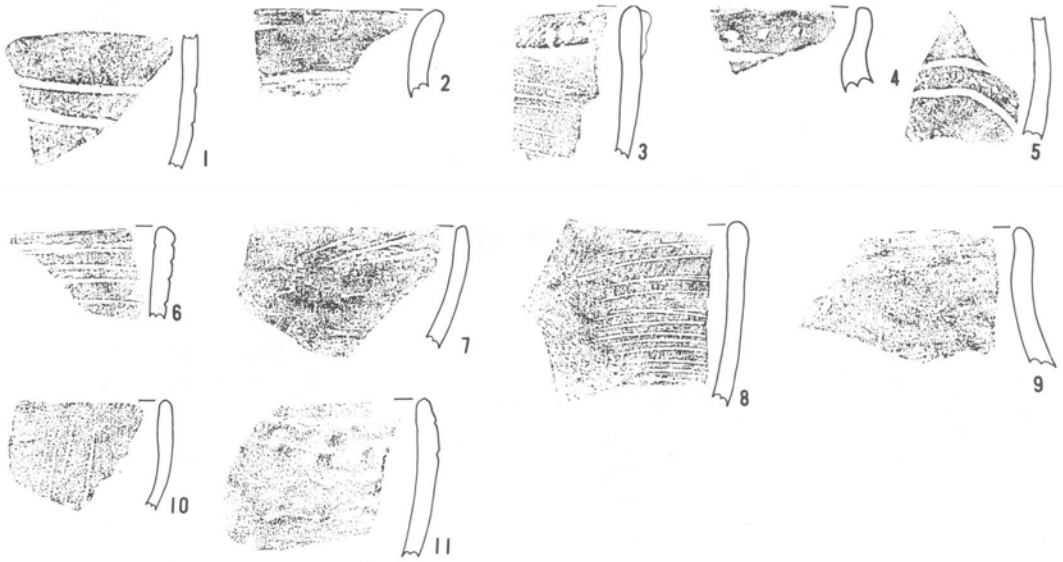
第162図　土壙出土遺物



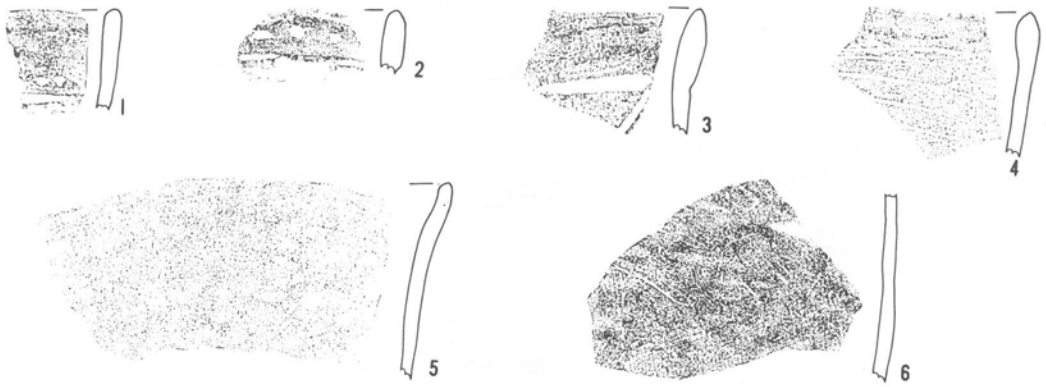
第163図　土壙出土遺物



第164図　土壙出土遺物



SK 55

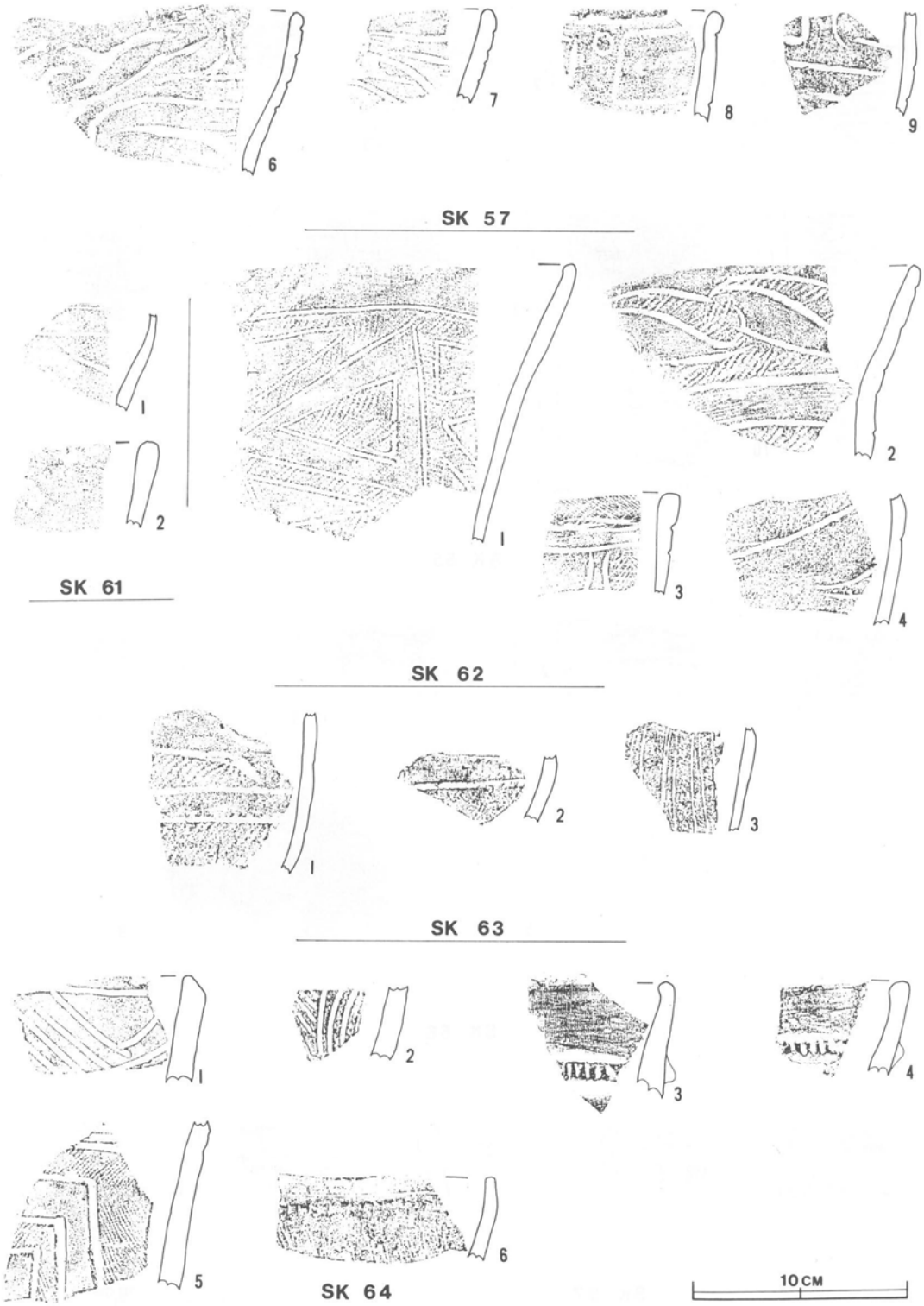


SK 56

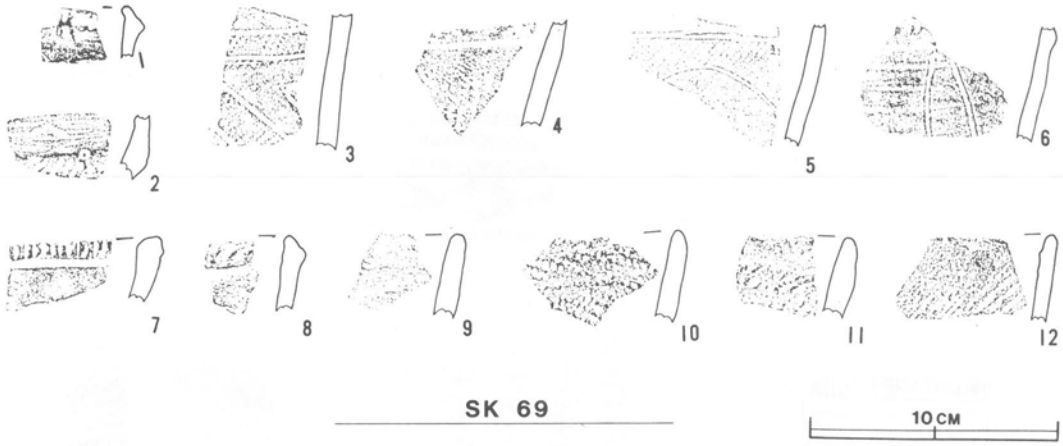
SK 57

10CM

第165図　土壙出土遺物

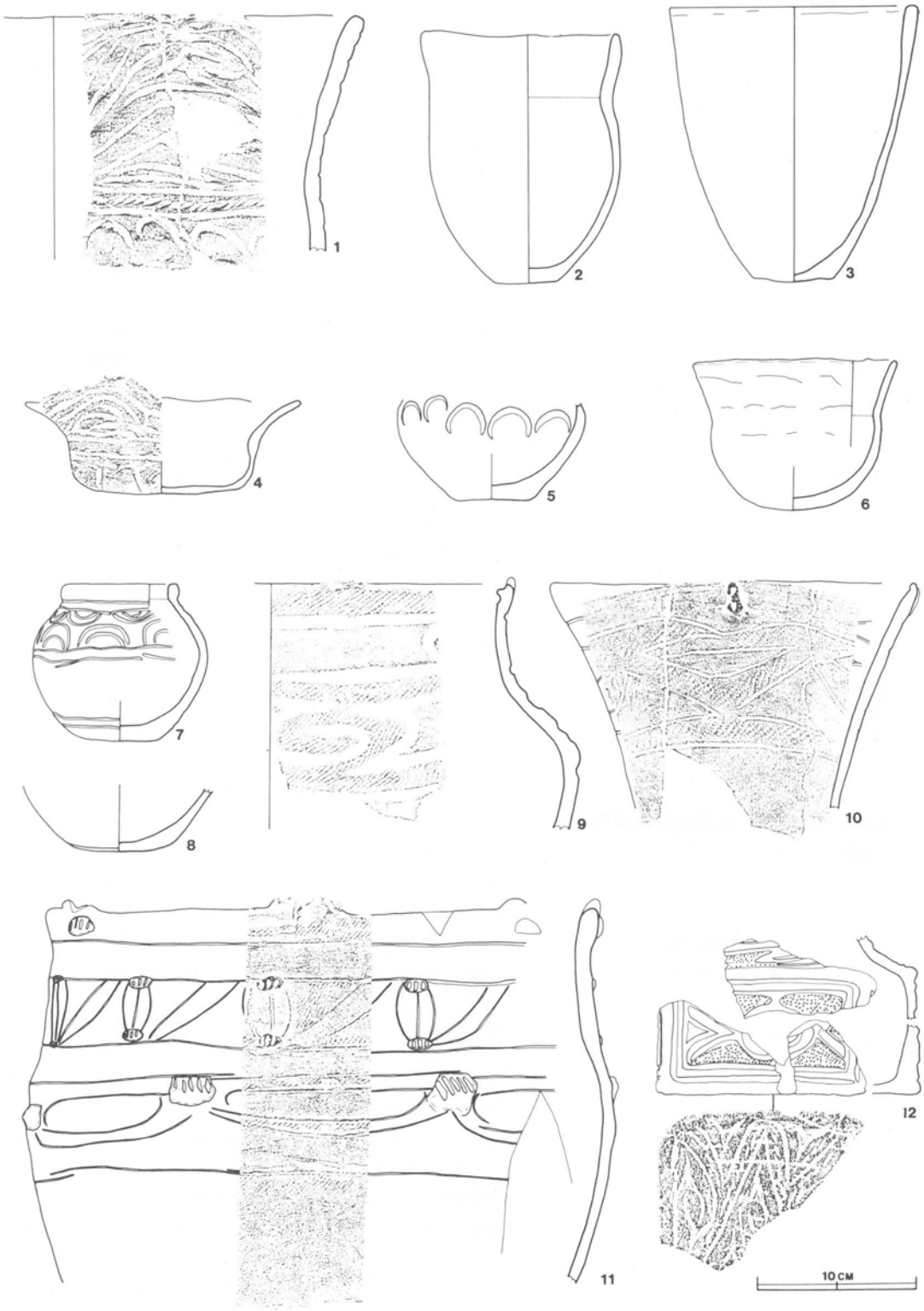


第166図　土壙出土遺物



第167図　土壙出土遺物

第168図　グリッド出土遺物



第169図　グリッド出土遺物

表93　第151図　住居址・土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI−01	1	台付鉢形	口径 15.3 器高 14.6	沈線で区割された口縁部及び弧状沈線と横走する沈線の間には縄文（RL）が施されている。内面はヘラ磨き	明赤褐色を呈する，安行1式
SK−14	1	浅鉢形	口径 24.8 器高 6.1	外面はヘラ削りによる雲形文，内面はヘラ磨き，口唇に深い刻み	にぶい赤褐色を呈する，大洞CI式
SK−50	1	鉢形	口径 18.7 器高 11.4 底径 5.4	内・外面ともヘラによるナデ・削りによる整形。外面胴部に炭化物付着	全体に薄く最小厚4mm，にぶい黄褐色を呈する
	2	深鉢形	現存高 13.8 底径 5	外面はヘラ削り，内面はヘラナデ一部(下半)に炭化物付着	にぶい橙色を呈する
	3	浅鉢形	口径 11.8 器高 3.3 底径 5	外面はヘラ削り後雑なヘラ磨き，内面はナデ，底部は一部ヘラ削り	内面は橙色，外面はにぶい黄橙及び灰黄褐色を呈する
SK−52	1	深鉢底部	現存高 3 底径 3.6	外面はヘラナデ，内面はヘラ削り	にぶい褐色を呈する
SK−54	1	深鉢形	現存高 5.3 底径 4.4	外面はヘラナデ，内面はヘラ削り	にぶい橙色を呈する
SK−56	1	深鉢形	口径 現存高	口縁に粘土貼付による二瘤の隆起太い沈線で区割し，口縁部縄文帯と下位無文帯	暗褐色を呈する，前浦式
	2	浅鉢形	現存高 2.8 底径 6	外面はヘラ削り，内面は指による整形	にぶい黄橙を呈する
SK−62	1	深鉢形	口径 20 胴部最大径 20.8	口縁部無文帯，縄文（LR）施文後，細い沈線による菱形文	褐色を呈する
SK−69	1	深鉢底部	現存高 4.3 底径 7.6	外面ヘラ磨き，内面はナデ，底部は網代痕	褐灰色を呈する

表94　第152図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI−01	1	口縁部		隆起帯状文（RL横）とそれをつなぐ瘤状突起がある。隆起帯間は横方向の研磨	安行1式
	2	口縁波頂部		波頂部に粘土紐を巻く。隆起帯縄文	晩期
	3	口縁部		口縁に1条の粘土紐を巻き，指頭による刺突，頸部以下は半截竹管による横方向の沈線	安行2式
	4	胴部		横方向の沈線によって上下を区画，上は無文，ヘラ状工具により三叉文，下は縄文（横）	晩期
	5	口縁部		厚みを有する口縁と，太めの沈線による区画内に施された縄文	
	6	口縁波頂部		ボタン状の文様と，沈線による区画内の縄文及び菱形の無文帯	晩期
	7	口縁部		三帯の隆起帯状縄文と隆起帯間の横方向の研磨	
	8	〃		連弧状の沈線と沈線によって区画された無文帯	
	9	〃		頸部のやや広い無文帯と，胴部と区画する帯縄文	

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI−01	10	〃		横方向の沈線	
	11	〃		やや肥厚した口縁部と横方向の沈線	
	12	〃		肥厚した口縁部と横方向の沈線	
	13	〃		沈線による2段の区画，下段は沈線間に刺突	晩期
	14	〃		頸部の連弧状沈線とその下の横方向の沈線	晩期
	15	〃		横方向の2本の沈線と，その下の弧状沈線，沈線の上下に刺突，口縁は外反	安行3C式
	16	〃		横方向の2本の沈線と弧状沈線，沈線間に刺突を施す	安行3C式
	17	〃		刺突及び横方向の沈線	安行3C式
	18	〃		やや厚味をおびる口縁と広く浅い沈線，刺突を2段に配する	
	19	〃		細い沈線とその上下に刺突を施す	
	20	〃		彎曲する頸部，沈線による区画内の刺突	安行3C式
	21	胴部		沈線による区画内に刺突を施す	安行3C式
	22	〃		弧状の沈線による区画と，その内部の刺突	安行3C式
	23	口縁部		地文として縄文(LR)，半截竹管による横方向の平行沈線	
	24	〃		口縁部に横方向の太い沈線，胴部は半截竹管による横及び斜の条線	
	25	〃		やや肥厚した口縁に横の沈線を施し，斜方向に条線	
	26	〃		条線	

表95　第153図　住居址出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI−02	1	口縁波頂部		波頂下の蛇行沈線による懸垂文。口縁の沈線と懸垂文の間に充塡される沈線	
	2	〃		波頂部を沈線で区画し，縄文（RL）を施す，内面は，くびれの下で大きくふくらむ	
	3	口縁部		2帯の隆起帯状縄文とそれをつなぐ瘤状突起がある。横方向の研磨が見られる	安行1式
	4	〃		口縁部の沈線と，沈線による懸垂文，地文は無節縄文	
	5	〃		口縁部外側に細い隆線を貼り，刺突を施す。8の字状貼付，口縁部内側に1条の沈線	
	6	〃		縦長の瘤状突起に刻み目，隆起帯状縄文	安行2式
	7	〃		3帯の隆起帯状縄文(RL)，隆起帯間は横方向の研磨	安行1式
	8	〃		「く」の字に折れ曲がり，外反する口縁，くびれの直下に，よく研磨された帯状の部分	
	9	〃		2帯の隆起帯状縄文と研磨部分	
	10	底部		無節縄文（Lr）	胴部下端より台にかけての部分

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI-02	11	胴部		2帯の隆起帯状縄文とそれをつなぐ瘤状突起に縦長の刻み目。隆起帯間は横方向の研磨が見られる	安行2式
	12	〃		やや太目の弧線によって区画された縄文	
	13	口縁部		沈線及び三叉文	安行3b式
	14	〃		肥厚した口縁と刻み目1条の沈線	
	15	〃		2帯の隆起帯状縄文（RL），横方向の研磨	安行1式
	16	〃		口唇に粘土瘤，横方向の研磨が良好	大洞系
	17	胴部		横位の磨消縄文	
	18	口縁部		口縁部外側の縄文及びその下の横方向の研磨	補修孔(?)あり
	19	〃		横位の太い沈線と刺突	
	20	〃		沈線による入組文で区割された中に縄文を施す	安行3b式
	21	〃		沈線による入組文	安行3c式
	22	〃		沈線による入組文	安行3c式
	23	〃		2つの隆起を有する瘤状突起と，突起を中心に横走する太い沈線	
	24	〃		口縁部に2条の沈線がめぐる	
	25	〃		口縁部に1条の沈線がめぐり，上に刺突，下に横走する条線がある	
	26	〃		肥厚した口縁部下に三角形の刺突があり，下に横走する沈線と斜の条線がある	
	27	〃		肥厚した口縁に連続爪形文を施し，胴部には横方向の条線が走る	
	28	〃		外面は縄文のみ。口縁部内側に1条の沈線がめぐる	

表96　第154図　住居址・土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SI−03	1	口縁部		瘤状突起に，縦長の刻み目，2帯の隆帯状縄文と横方向の研磨	安行3a式
	2	〃		口縁をめぐる帯状縄文と，沈縁による三叉状入組文	安行3b式
	3	〃		口縁部下の三角形刺突文と条線	
	4	〃		弧状沈線	
	5	〃		弧状沈線	
	6	胴部		沈線による入組文で区割，弧状沈線	安行3c式
	7	口縁部		縦方向の沈線	
	8	底部		網代痕	
SK−01	1	胴部		縄文のみ	
	2	口縁部		波状口縁の波頂部で瘤状突起と貫通孔を有する	安行1式
SK−04	1	胴部		横走する2条の沈線の間に波状沈線と縄文	
	2	口縁部		口縁に粘土紐を貼り付け指頭による刺突を施す。胴部は横方向の条線	

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−04	3	口縁部		外面は3条の沈線。内面は削りによる段を有し，3条の沈線を施す。上位沈線間に刻み目	加曽利B1式
SK−07	1	〃		2帯の隆帯状縄文とそれをつなぐ削りによる隆線。横方向の研磨	
	2	〃		3帯の隆帯に爪形文を配し，下位の隆帯間に綾杉状の条線	
	3	〃		口縁はやや肥厚し，横走する沈線で区割された間に縄文（RL）	
	4	〃		口縁に粘土紐をめぐらせ，指頭による刺突文を配する	
	5	胴部		区割内縄文を三角形に配し，内部を条線で充填する	堀之内II式
	6	口縁部		肥厚した口縁下に連続刺突文と縦位の条線	
	7	〃		口縁に粘土紐をめぐらせ，連続刺突文を配する	

表97　第155図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−10	1	口縁部		2帯の隆帯状縄文。横方向の研磨	
	2	胴部		瘤状の小突起をつなぐ隆線と刻み目	
SK−12	1	口縁部		口縁と平行に横走する沈線と，胴部の沈線による区割	
	2	胴部		粘土紐上の刺突	
	3	口縁部		横走する沈線	
	4	〃		沈線文	
	5	〃		口縁部無文帯と横走する沈線	
	6	〃		口縁に段を有し，刺突文を配する。左下へ沈線が走り，縄文がわずかに残る	
	7	〃		口縁に粘土紐を貼り，指頭による刺突を配する。胴部は右下へ条線が走る	
	8	胴部		縄文のみである	
	9	〃		条線のみである	
SK−13	1	口縁部		口縁に沿って沈線を配し，点刻を加える。胴部は縄文を施す	加曽利B2式
	2	〃		外反する口縁に縄文を施し，頭部にやや太い沈線を有する	
	3	〃		口縁に粘土紐を貼り，下位に沈線，刻み目を配する	
	4	胴部		交差する条線を有する	
	5	〃		沈線で器面を区割し，縄文を配する	
	6	口縁部		絡文を施し，下位に横走する沈線を配する	
	7	胴部		沈線が横走する	
	8	口縁部		内面に段を有し，外面は右下へ条線が走る	

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－14	1	〃		隆帯状縄文をつなぐ部分に瘤状突起を有し，刻み目，刺突を配する	安行２式
	2	〃		波状口縁の突起，瘤状突起に豚鼻状の刺突を配する	安行２式
	3	〃		隆帯状縄文に瘤状突起を配する	安行２式
	4	〃		口縁部無文帯を有し，下位に沈線と刺突を有する	

表98　第156図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－14	1	口縁部		横走する２条の沈線	
	2	〃		１条の沈線で上下を区割し，上位に刻み目下位に右下への条線を配する	
	3	〃		口縁と平行に刺突・沈線を配し，下位に斜の沈線を施す	
	4	〃		横走する２条の沈線	
	5	胴部		横走する沈線と平行に配された刺突	
	6	口縁部		口唇部に粘土の小突起をもち，２帯の隆帯状縄文が配される	
	7	胴部		２帯の隆帯状縄文を有する。横方向の研磨が見られる	
	8	口縁部		口縁に爪形文を有し，口縁をめぐる１条の沈線と縦方向の沈線が見られる	
	9	〃		口縁に刻み目を有し，右下へ走る条線がある	
	10	胴部		横走する１条の沈線のみである	
	11	〃		弧状の沈線と縄文が見られる	
	12	口縁部		無文	
	13	〃		無文	
	14	胴部		横走する条線とまばらな縄文	
SK　16	1	口縁部		沈線による入組文で区割された中に縄文が施文される	
	2	〃		沈線・弧状沈線により区割され，内部に縄文が施文される	
	3	〃		横走する沈線・連弧文により区割され，内部に縄文・列点文が施文される	
	4	〃		口縁に縄文帯を有し，下位の縄文帯との間にやや広い無文帯を有する	
	5	〃		縄文のみである	
	6	〃		沈線による入組文による区割内に縄文を施し，一部に無文帯を残す	
SK－20	1	胴部		縄文が施文された中に沈線が横走する	
	2	〃		縄文（ＬＲ）のみ	
	3	〃		上端に縄文が見られ，以下は無文	

表99　第157図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK--21	1	口縁部		2帯の隆帯状縄文と瘤状突起	
	2	胴部		2帯の隆帯状縄文。横方向の研磨	
	3	口縁部		肥厚した口縁に斜の条線を有する	
	4	〃		口縁をめぐる粘土紐に刺突が配される	
	5	〃		沈線による入組文と三叉文。貫通孔が見られる	安行3c式
	6	〃		斜の沈線	
	7	〃		口縁に沿って数条の沈線が配され，三段の列点文が施文される	安行3c式
	8	〃		縦及び斜の沈線	
	9	胴部		縦及び弧状の沈線と列点文	安行3c式
	10	口縁部		無文	
	11	〃		縄文のみ	
	12	胴部		条線のみ	
	13	底部		縄文のみ	
SK--22	1	口縁部		口縁に沿って列点文・沈線が配される	
	2	〃		2帯の隆帯状縄文	
	3	〃		沈線による入組文・三叉文	
	4	〃		口縁に沿って縄文帯を有する。弧線文によって無文帯・縄文帯に分けられ，蛇行沈線が縦に施文される	
	5	〃		弧線による入組文	
	6	胴部		横位の沈線と弧状沈線による区割の内部に縄文が施される	
	7	〃		沈線による区割と三叉文	
	8	〃		沈線による区割と瘤状突起	
SK--23	1	口縁部		沈線による円形文	
	2	〃		口縁に沿った沈線	
	3	〃		縦・横の沈線	
	4	胴部		横走する2条の沈線	
	5	口縁部		縦位の条線	
	6	〃		無文	

表100　第158図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量(cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—24	1	口縁部		口縁部に粘土紐を貼り付け，刺突を施す。縦方向の沈線と横の条線が見られる	
	2	〃		口縁に沿って沈線がめぐり，刻み目が施される	
	3	〃		口縁部に粘土紐を貼り付け，刺突を施す	
	4	胴部		横走する2条の太い沈線によって区割された帯縄文と下位の弧線文	
	5	口縁部		口縁に沿って2条の沈線を配し，弧線文によって区割し，条線を施す	
	6	胴部		横走する2条の沈線と弧線文	
	7	〃		横走する沈線と縦方向の沈線が施され，列点文が配される	
	8	〃		弧線文が何重にも組み合わされて木葉状を呈し，列点文が配される	
	9	口縁部		波状口縁に沿って数条の沈線が配される。地文は粗い縄文である	
	10	〃		口縁に沿った2条の沈線	
	11	〃		口縁に沿った2条の沈線	
	12	〃		2条の沈線間に爪形文が配される	
	13	〃		波状口縁に沿った弧状沈線と横走する1条の沈線	
	14	〃		口縁に沿った沈線と弧状沈線	
	15	〃		弧状沈線による入組文	
	16	〃		口縁に沿った2条の沈線と列点文	
	17	〃		口縁部無文帯下に沈線で区割された条線文	
	18	胴部		沈線による入組文	
	19	〃		沈線による入組文で区割された中に列点文が配される	安行3c式
	20	口縁部		太い沈線による入組文で区割された中に縄文が施される	前浦式
	21	〃		口縁波頂部のハチ巻状粘土紐と沈線による入組文	晩期
	22	〃		横走する条線	
	23	胴部		弧状の条線	
	24	〃		弧状の条線	
	25	〃		弧状の条線	
	26	口縁部		口縁部粘土紐の刺突文と横走する条線	

表101　第159図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK-24	27	口縁部		口縁に平行な沈線を数条施文する。地文は縄文	
	28	〃		縦位の沈線を施す。地文は縄文	
	29	〃		斜行沈線文	
	30	〃		横位の沈線	
	31	〃		無文	
	32	〃		まばらな沈線	
	33	胴部		縄文	
SK-27	1	口縁部		口縁に平行な沈線を2条有する。縄文	
	2	〃		2本の沈線間に円形の刺突文を配する	
	3	〃		口唇部に刺突を有し，下部に細い沈線を施す	
	4	〃		口唇部に沈線文	
	5	〃		沈線で区画された中に縄文を充填する。外は磨消し	
	6	〃		外反する口縁部で沈線を施文する	安行3c式
	7	〃		No.6と同一個体と思われ，頸部でくの字状に屈曲する	〃
SK-28	1	口縁部		縦の刺突をもつ瘤状突起を持つ。帯縄文がみられる	安行2式
	2	〃		瘤状突起・沈線をもつ。地文は縄文	〃
	3	〃		口唇部に列点刺突を有し，下部に斜沈線を充填する	
	4	〃		隆起帯状縄文がみられ，横位の沈線が施文される	
	5	〃		口唇部に縄文帯を有し，沈線が施文される	
	6	胴部		沈線で区画された縄文帯を有する	
	7	口縁部		口唇部にスリットを配し，沈線区画した下部は縦位の沈線を施文する	
	8	〃		口縁部に刺突文列を有し，下部は斜行沈線を充填する	
	9	〃		No.8と同一個体であろう	

表102　第160図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物№	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—28	10	口縁部		太い沈線文	
	11	〃		縄文	
	12	〃		斜方向に細い沈線を施す	
	13	〃		内彎して立ち上がる口縁部。無文	
SK—29	1	口縁部		太い沈線で，口唇部と区画し，上部は刺突文，下部は沈線文を施す	
	2	〃		口縁部に横位の沈線を施し，それに刺突を加える	
	3	〃		口唇部に突起を有し，沈線と刺突文が施される	
	4	〃		口唇部に刺突文列を有し，沈線で文様を区画する	
	5	〃		横位の沈線と刺突文を有する	
	6	胴部		斜行沈線	
	7	〃		沈線で区画し中に刺突を加える	
SK—32	1	胴部		沈線文。地文は縄文	
	2	〃		横方向の瘤状突起を有する	
	3	〃		横位の沈線間に刺突を加える。地文は縄文	
SK—38	1	口縁部		口縁に沿って刺突文を施し，下部は横位の沈線	
	2	〃		口唇部の刺突と横位の沈線文からなる	
SK—40	1	口縁部		横位の沈線間に刺突を加え，太目の沈線を施文する	
	2	胴部		細い帯縄文中に小瘤状突起を有する。	
SK—44	1	口縁部		口縁部に平行な沈線を施し，間に刺突を加える	
SK—45	1	胴部		沈線文のみで，連弧文の1部がみえる	
	2	底部		網代痕	
	3	〃		網代痕	

表103　第161図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－46	1	口縁部		沈線のみ	
	2	胴部		縄文	
	3	〃		縄文	
SK－47	1	口縁部		横位の沈線	
	2	〃		口唇部に段差をもつ。縄文	
	3	胴部		横位の紐線を有し，地文は縄文	
	4	口縁部		口唇部に刺突を有し，細い沈線を施文する	
	5	〃		口縁部に爪形の刺突文列を有し，斜沈線を施す	
	6	〃		口唇部は縄文。紐線を有する	
	7	〃		横位の沈線文がみられる	
	8	〃		帯縄文を有する	
	9	〃		口縁に平行な紐線及び沈線を施す。地文は縄文	
	10	〃		口縁部に紐線を付し，横位の沈線を施文する地文は縄文	
	11	〃		沈線文及び入組文を有する	
	12	〃		数条の沈線を施す	
	13	〃		横位及び縦位の沈線で区画する	
	14	〃		縄文	
	15	〃		縄文地に沈線を施す	
	16	胴部		縄文地に斜行沈線を施す	
	17	〃		縦位の平行沈線を施文する	
SK－48	1	胴部		沈線文。地文は縄文	
	2	〃		瘤状突起を縦方向に貼り付け，斜位の平行沈線を施す。地文は縄文	
	3	口縁部		2段の帯縄文がみられる	
	4	〃		粗雑であるが帯縄文を2段に施す	
	5	〃		口唇部に突起を有し，沈線で区画された帯縄文をもつ	

表104　第162図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−48	6	口縁部		口唇部に紐線を付し，斜位の沈線を施す	
	7	〃		刺突を有す隆線をめぐらす。縄文	
	8	胴部		刺突を有す隆帯をめぐらす	
	9	〃		縄文帯をもち，玉抱き文が施文される	安行２式
	10	〃		帯縄文の中に瘤状突起をつける	〃
	11	口縁部		沈線で文様を区画する。地文は縄文	
	12	〃		横位及び孤状の沈線文を有する	安行３ｃ式
	13	胴部		孤状の沈線を主に施文する	〃
	14	〃		平行沈線間に刺突文を有する	
	15	〃		縄文地に平行沈線を施す	
	16	〃		横位及び斜位の沈線を施す	
	17	口縁部		内彎する口縁部で，無文である	
SK−49	1	胴部		刺突のある突起を縦につけ，沈線を横位に施す。突起下に円孤文を配する	堀之内式
	2	口縁部		８の字状の貼り付け文及び刺突を加えた隆帯を施し，下部は細い沈線を配する	〃
	3	胴部		沈線文を施す。地文は縄文	
	4	〃		斜位の沈線を施文する。地文は縄文	
	5	〃		斜位の沈線が多くみられる。地文は縄文	
	6	〃		孤状の沈線を充填する	
	7	口縁部		口縁に平行な沈線を２本横走させる	
	8	〃		大きく屈曲し，刺突文を施す	
	9	〃		外反する口縁で，平行沈線及び刺突文を有する	
	10	胴部		縄文	
	11	〃		沈線で文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	12	〃		口縁に平行な沈線を有する。地文は縄文	
	13	〃		沈線文を施す	
	14	〃		三叉状入組文が施文される	
	15	〃		縄文	

表105　第163図　土壙出土遺物

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK−50	1	波状口縁		波頂部から縦位に瘤状突起が3個つけられ，平行沈線が施文される	安行1式
	2	口縁部		沈線で区画された帯縄文を有する	
	3	〃		口唇部に1条の沈線をめぐらし，右下がりの斜沈線を施す	
	4	胴部		横位の沈線により下部に屈曲する沈線を縦位に施文する	
	5	口縁部		口唇部に圧痕あり。横位の沈線を施文する。地文は縄文	
	6	〃		刺突及び沈線文がみられる	
	7	〃		縄文	
	8	胴部		斜行沈線。地文は縄文	
SK−51	1	口縁部		沈線文	堀之内式
	2	〃		紐線を付し胴部は条線文	
	3	〃		紐線を付し斜位の沈線を施す	
	4	〃		2段以上の帯縄文をめぐらす	
	5	〃		横位の沈線を施し，ヘラ整形がみられる	
	6	胴部		横位及び縦位の沈線文	堀之内式
	7	〃		沈線で楕円形を描く。地文は縄文	
	8	口縁部		口縁に平行な沈線を2本施文する	
	9	胴部		孤状の沈線文。地文は縄文	
	10	口縁部		縄文	
	11	〃		縄文	
	12	〃		縄文	
	13	〃		縄文	
SK−52	1	口縁部		横位の平行沈線	
	2	〃		帯塚文を施し，瘤状突起をつける	
	3	〃		口唇部に帯縄文を有する	
	4	小型浅鉢		口縁に平行な帯縄文を2段に施文し下段の縄文帯に接して半円形の縄文帯を施文する	

表106 （第164図　土壙出土遺物）

出土遺構・区	遺物№	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK—52	5	口縁部		沈線で区画された帯縄文を有する	
	6	〃		波状口縁を呈すと思われ，紐線を有する。内外は横位の沈線を施す	
	7	〃		口唇部に紐線を付し，右下がりの斜沈線を施文する	
	8	〃		沈線文	安行３ｃ式
	9	〃		沈線文で，入組文が施されると思われる	〃
	10	〃		沈線文。部分的に条線が施される	〃
	11	〃		入組文と沈線で区画された中に刺突文が施される	〃
	12	〃		沈線で連孤文が施文される	〃
	13	〃		沈線文	〃
	14	〃		条線文が部分的に施される	
	15	〃		口唇部が極めてうすくなり，浅い沈線が斜位及び縦位に施文される	
	16	〃		不明確な横位の沈線が残る	
	17	〃		口唇部に刻みを入れ，条線を施す	
	18	〃		横位の沈線文	
	19	〃		横位の沈線を１条めぐらす。地文は縄文	
	20	〃		縄文	
	21	胴部		斜位の沈線文	
SK—53	1	口縁部		太い沈線が施文される	
SK—54	1	口縁部		帯縄文を数段にわたって施す	安行１式
	2	胴部		屈曲部に帯縄文を施文する	〃
	3	口縁部		刺突及び沈線文	
	4	〃		刺突及び沈線文	
	5	〃		１本の沈線で口唇部と区別し，上部に刺突文，下部に斜位の沈線を施す	
	6	〃		口縁部に２本の沈線を有し，中を列点刺突文で埋める	
	7	〃		口縁部に刺突を加えた横位の隆帯を施す	
	8	〃		沈線間を刺突文で埋める	
	9	胴部		細い縄文	

表107 （第165図　土壙出土遺物）

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－55	1	胴部		平行沈線を残す	
	2	口縁部		口縁に平行な沈線を有する	
	3	〃		口唇部に帯縄文を有し，それに刺突文が加わる	
	4	〃		沈線及び刺突文	安行３ｃ式
	5	胴部		沈線間に刺突文を施文する	〃
	6	口縁部		口縁に平行な沈線を施文する	
	7	〃		まばらな斜沈線	
	8	〃		横位・斜位の条線文	
	9	〃		無文	
	10	〃		縦位の条線	
	11	〃		刺突文を施す	
SK－56	1	口縁部		沈線及び刺突文	
	2	〃		平行沈線間に刺突を有する	
	3	〃		沈線文。ヘラ整形	
	4	〃		斜位の沈線文を施す	
	5	〃		口縁部は外反し，無文	
	6	胴部		条線文がみられる	
SK－57	1	口縁部		口縁部はＳ字状に屈曲し，沈線及び刺突文を施す	
	2	胴部		平行沈線間に刺突を加える	
	3	口縁部		沈線及び刺突文がみられる	安行３ｃ式
	4	〃		斜位の沈線を有する	〃
	5	胴部		横位の沈線を施文し，上部には刺突文が加わる	〃

表108 （第166図　土壙出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK 57	6	口縁部		沈線による入組文を施す	安行3c式
	7	〃		沈線による入組文が施されていると思われる	〃
	8	〃		沈線で円及び長方形を施文する	
	9	胴部		No. 8の下部に相当すると思われる	
SK 61	1	胴部		平行沈線及び弧状の沈線を施文し，弧状の沈線間には縄文を充填する	
	2	口縁部		わずかに条線文がみられる	
SK 62	1	口縁部		沈線で三角形状の文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	堀之内式
	2	〃		横位及び弧状の沈線で文様を区画し中は縄文を残す。外はヘラ整形	
	3	〃		横位及び弧状の沈線で区画し中に細い斜行沈線を充填する	
	4	胴部		沈線文で入組文を呈していたと思われる	安行3c式
SK－63	1	胴部		沈線で文様を区画し，中に縄文を充填する。外は磨消し	
	2	〃		沈線及び縄文が施文される	
	3	〃		縦位の沈線が施される	
SK 64	1	口縁部		沈線文	
	2	胴部		弧状及び斜位の沈線が施される。地文は縄文	
	3	口縁部		波状口縁の波頂部で，刻みのある隆帯が付されている	
	4	〃		口縁に平行な刻みのある隆帯を付す	
	5	胴部		沈線で方形状の文様を区画し中に縄文を埋める。外は磨消し	堀之内式
	6	口縁部		口唇部に平行な細い沈線を施文し，胴部は条線を埋める	

表109 （第167図　土壙出土遺物）

出土遺構・区	遺物No.	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
SK－69	1	口縁部		8の字状の貼り付けを有する	
	2	〃		竹管刺突から隆線がのび，下部に斜沈線を施す	
	3	胴部		沈線で区画された中に縄文を充填する。外は磨消し	
	4	〃		横位の沈線文がみられる。地文は縄文	堀之内式
	5	〃		沈線で区画された中に縄文を充填する。外は磨消し	
	6	〃		上部に刺突のある隆線を配し，横位及び縦位の沈線を施文する	安行2式
	7	口縁部		口縁に平行な沈線及び刺突文を施す	
	8	〃		口唇部に刺突文がみられる	
	9	〃		沈線文？	
	10	〃		縄文	
	11	〃		縄文	
	12	〃		縄文	

表110 （第168図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物№	器形・部位	法量 (cm)	表面・裏面の特徴	備考
A_1i_9	1	台付鉢形	現存高 14.1	外面はヘラ磨き，内面はていねいなヘラナデ，横走する2段の縄文帯 (RL) を有する	黒褐色を呈する 写48－1
A_1i_7	2	注口土器	器高 5.8 底径 7.8	沈線・隆帯に縄文が配され，口縁部は刻み目，刺突が施される。口縁部左右に1対の貫通孔がある	外面は灰黄褐色，内面は灰白色を呈する。晩期 写48－3
A_1j_0	3	深鉢形	口形 10 器高 10.2 底径 2.3	外面はヘラ削り，内面は上部横ナデ，下部はヘラ削り	にぶい褐色を呈する。晩期 写47－5
A_1i_7	4	深鉢形	口径 10.3 器高 13 底径 2	外面はヘラ削り後沈線及び細密線，一部炭化物付着，内面はヘラ削り	明赤褐色を呈する。晩期 写41－4
A_1h_7	5	深鉢形	口径 12 器高 15.3 底径 2.8	ヘラ削り後斜め方向の浅い条線を施し，文様を施す。縦方向の1単位文様は全周11ヶ所である	黒褐色を呈する。晩期 写47－3
A_1i_9	6	深鉢形	口径 12.7 器高 15.3 底径 5	ヘラ状施文具により，全面に沈線を配する。胴部上位は平行沈線間に羽状を呈する沈線，中位は横走，下位は縦位の沈線。口唇に粘土紐による3ヶ所の小突起	灰褐色を呈する。晩期 写47－2
A_1h_7	7	浅鉢形	口径 16.4 器高 5.8	口縁に粘土紐貼付による4ヶ所の隆起を有する。平行沈線間に列点文を配する。内外面ともヘラナデ	にぶい褐色を呈し，底部は橙色を呈する。安行3c式 写46－2
A_1i_9	8	鉢形	口径 10 器高 8.3 底径 4.6	頸部・胴部両文様帯ともに沈線による区割内に刺突。全体にヘラナデ，外面底部付近はヘラ削り	茶褐色及び黒褐色を呈する。安行3c式 写45－4
A_1i_9	9	浅鉢形	口径 15.7 器高 5.3 底径 10.6	角の丸い方形を呈する。胴部・底部とも沈線による入組文。口縁下に2ヶ所の貫通孔を有する	灰黄褐色を呈する。安行3c式 写46－1
A_1h_6	10	浅鉢形	口径 13.5 器高 4.6	沈線・弧線による区割内に刺突が配される。口縁部に貫通孔あり	黒色を呈する。安行3c式 写45－6
A_1i_9	11	鉢形	口径 16.6 器高 9.3	口唇及び平行・弧状沈線間に列点文を配す。弧状沈線間に沈線による入組文が施される	橙色を呈する。安行3c式 写45－1
A_1i_9	12	深鉢形	口形 11.7 器高 13.1 底径 4.2	外面はヘラ削り後，沈線・刺突を配する。内面はヘラ削り	暗褐色及至極暗褐色を呈する。安行3c式 写47－6
A_1i_0	13	壺形	口径 10.7 器高 11.8 底径 4.2	全面横方向ヘラナデ，内面下部のみ縦方向ヘラナデ，沈線は丸ノミ状のもの及びヘラ先により刺突又は棒状の物の先端を斜に刺突する	極暗赤褐色を呈する。安行3c式
A_1i_9	14	鉢形	口径 12.5 器高 6.8	口縁に大小1対の突起が5ヶ所，弧線・平行沈線・爪形文を組合せて上下2段に配列する	褐色を呈する。安行3c式 写45－2

表111 （第169図　グリッド出土遺物）

出土遺構・区	遺物No	器形・部位	法量(cm)	表面・裏面の特徴	備考
A_1h_8	1	深鉢形	口径 (37.8) 現存高 14.5	頸部に刺突を有する平行沈線を施し，上部には三叉状入組文，下部に連弧文を施文する	長石・スコリアを含み焼成は普通，にぶい褐色を呈す。安行3c式　写49—1
A_1h_7	2	深鉢形	口径 12.0 器高 15.3 底径 3.9	表・裏面ともヘラ削り手法がみられ，口縁部から胴部にかけて炭化物が付着する	砂粒を含み，極暗褐色を呈す　写47—1
A_1j_0	3	深鉢形	口径 15.0 器高 16.8 底径 4.9	表・裏面ともヘラ削り後ナデによる整形。無文	砂粒・雲母を含み，にぶい赤褐色を呈す
A_1i_9	4	浅鉢形	口径 16.9 器高 6.8 底径 9.5	ゆるやかな波状口縁を呈し，三叉状入組文・連弧文が施文される	スコリア・砂粒を含み灰黄褐色を呈す。安行3c式写45—3
A_1j_0	5	鉢形	底径 4.3 現存高 6.2	逆U字形の沈線が横方向に1周する。内外面ともヘラ削り後ヘラナデ	スコリア・砂粒を含み，にぶい橙色を呈する。安行3c式
A_1h_6	6	小形丸底土器	口径 12.6 器高 9.1	ヘラ削り後ヘラナデによる整形，外面は輪積痕が残る	スコリア・砂粒・砂礫を含み，にぶい赤褐色を呈す　写49—2
A_1i_9	7	壺形	口径 7.0 器高 9.9	平行沈線が三段に施され，上位の空間に向き合った弧状沈線が交互に配される	スコリア・砂粒を含む。安行3c式　写50—1
A_1j_0	8	鉢形底部	現存高 3.8 底径 6.5	内外面ともヘラ磨きが見られる	スコリア・砂粒を含み，黒褐色を呈する
A_2j_2	9	甕形	口径 (29.2) 胴部最大径(19.2) 現存高 (15.0)	外面は太い沈線による入組文と縄文，内面は口縁に沈線がめぐり胴部はヘラナデ	スコリア・砂粒を含み褐色を呈す。前浦式
B_2c_2	10	深鉢形	口径 22.6 現存高 14.2	口縁部に8の字形の粘土紐を貼り付け，下位には三角形の磨消縄文が1周する	砂粒を含み灰褐色を呈する。堀之内式
B_2b_1	11	深鉢形	口径 33.8 現存高 23.2	口唇に粘土紐を貼り付けた小突起を配する，横方向の磨消縄文をつなぐ瘤状突起に縦長の刻みを有する	砂粒・スコリアを多く含み，灰黄褐色で部分により橙色を呈する
A_1h_7	12	角形壺	幅 13.0 現存高 5.9	胴部は沈線による区割内に小刺突を充塡する，底部は沈線による入組文内に列点文と三叉文	砂粒・砂礫を含む，にぶい赤褐色を呈する。安行3c式

第3節　ま　と　め

本貝塚においては，純貝層の堆積をみることはできなかった。4ヶ所の小規模な堆積区は全て貝殻の密集の度合が小さく，冬木A貝塚の貝層の様相と異っている。これは，調査エリアが冬木B貝塚の中心を大きくはずれていたためであると思われる。各堆積区の周辺には，ブロック状の貝殻の小堆積が見られる。これは，「貝殻を捨てる場所」へ正確に投棄されたとはかぎらないこと，言い換えれば，「貝殻を捨てる場所」の「あたり」へ「適当に」投棄が行なわれた可能性があ

ることを思わせる。そのまま投棄が続けられれば，中央には貝殻が厚く堆積して純貝層を形成して周囲に広がり，周辺に捨てられた貝殻（ブロック状の小堆積）と連続して混土貝層・混貝土層を形成したであろうことが予想される。今回調査した各堆積区は，貝層の形成過程の観点から考えるならば，冬木A貝塚において見られた堆積区の前段階と考えることができる。

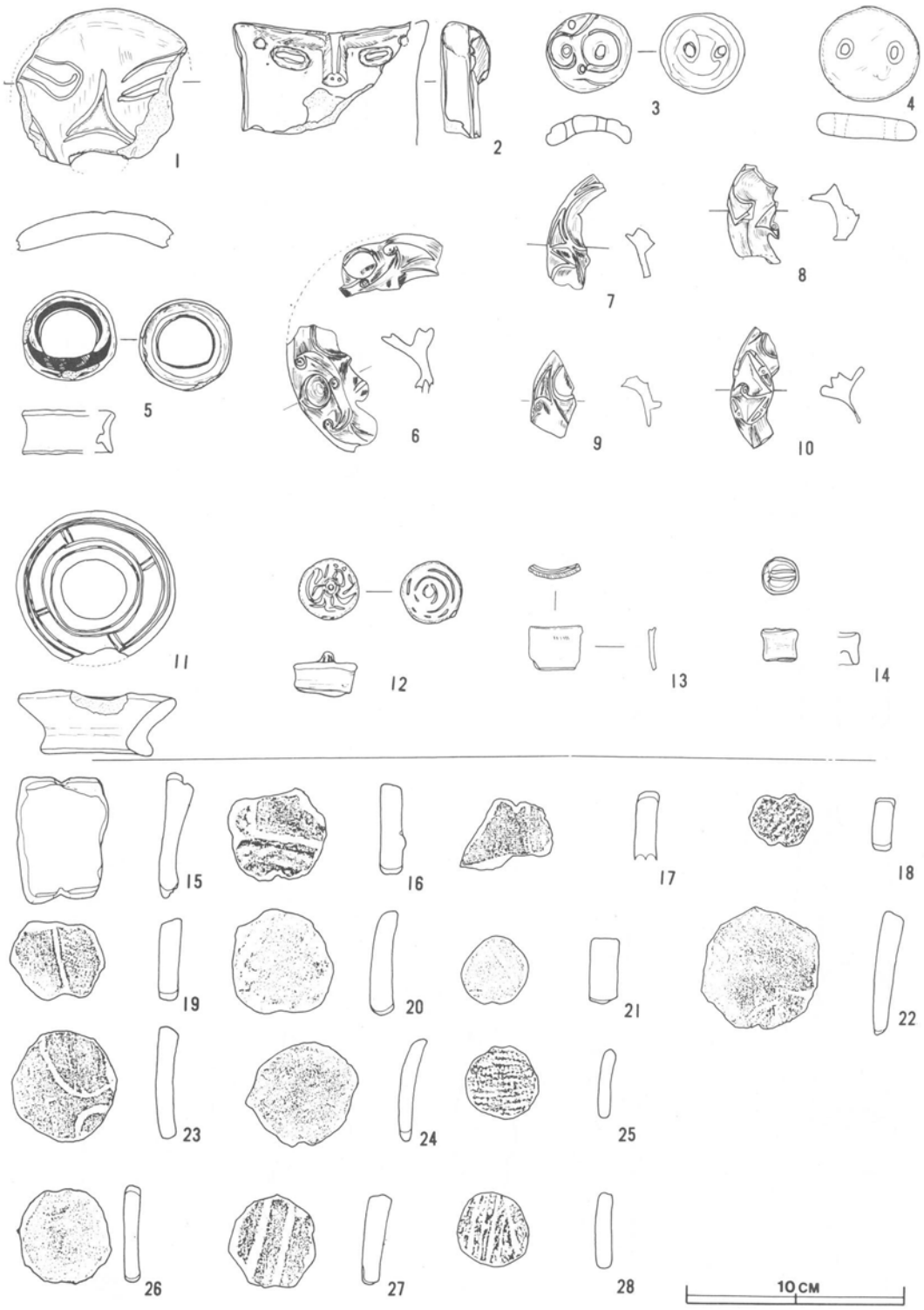
住居址は，その大半がエリアの南縁にあたる台地の縁辺部の線とほぼ平行に並び，特に中央部に集中している。北部は第4号・5号住居址を除き検出されていない。平面形は楕円形状を呈するものと隅丸方形状・長方形状を呈するものである。ピット群の検出によって確認された住居址は，楕円形状を呈する1群が北寄りに並び，長方形状を呈する1群が南寄りに並んでいる。構築時期は不明であるが，その位置から二期に分けることが可能である。なお，これらの住居址の床はロームであるが，本来はもっと上の面にあった可能性が強い。床が確認された住居址の構築時期については，不明である。炉址と断定できる遺構を確認することもできなかった。出土遺物についてみると，第1号住居址は縄文晩期に属する土器片が多く，第2号住居址は同後期に属する土器片が多い。

土壙は，住居址群の北寄りに住居址群とほぼ平行に並び，中央部に多く検出された。平面形は多岐にわたるが，円形状を呈するものが最も多い。床は大部分が平担である。小ピットを有する土壙が数例見られた。第1号・41号の土壙の小ピットは柱穴と思われるが，他の土壙の小ピットについては，性格は不明である。

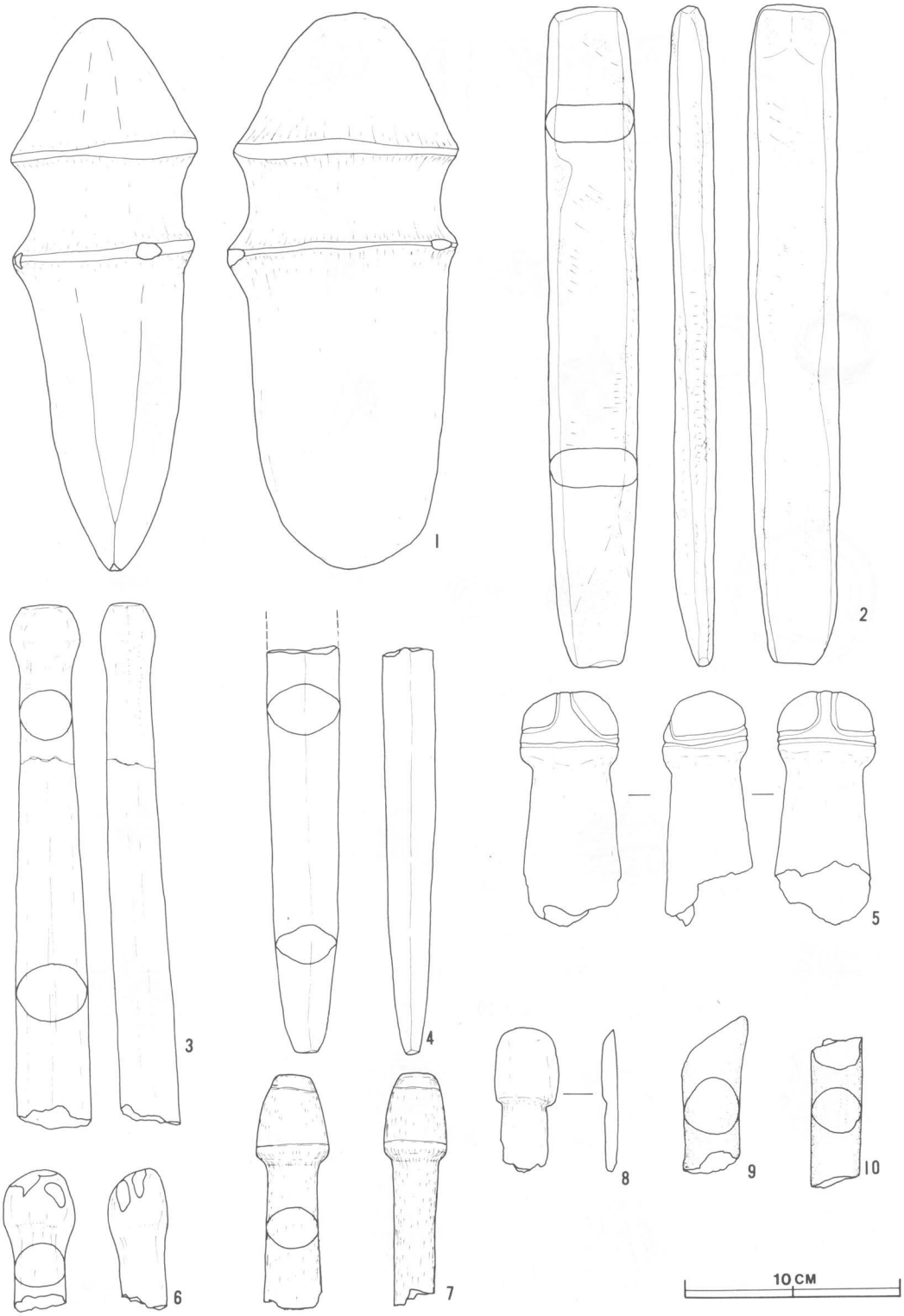
本貝塚において出土した土器は，縄文後期後半から同晩期に属するものが大部分を占める。第4号住居址の西側・南側から，小型深鉢等の完形品が多数出土している。遺構は確認することができず，むしろ「包含層」としてとらえるべきであったかも知れない。石斧・石鏃等はあまり多く出土していないが，台付石皿・石棒・独鏃石等の石製品がみられた。

本貝塚は，遺物等から判断して縄文後期前葉から中葉にかけて小規模な集落が営まれ，同末葉晩期初頭及び中葉に隆盛期をむかえたものと思われる。冬期A貝塚の隆盛期（後期前葉）にはすでに集落が営まれ，同貝塚の終末期である後期末葉に，最初の隆盛期を迎えたわけである。両貝塚において，同時に集落が営まれた可能性については，何とも言えない。しかし，時期的には冬木A貝塚において集落が営まれて貝塚が形成され，その後冬木B貝塚に集落が営まれたと見る事が妥当であろう。

第170図　冬木Ａ・Ｂ出土土偶

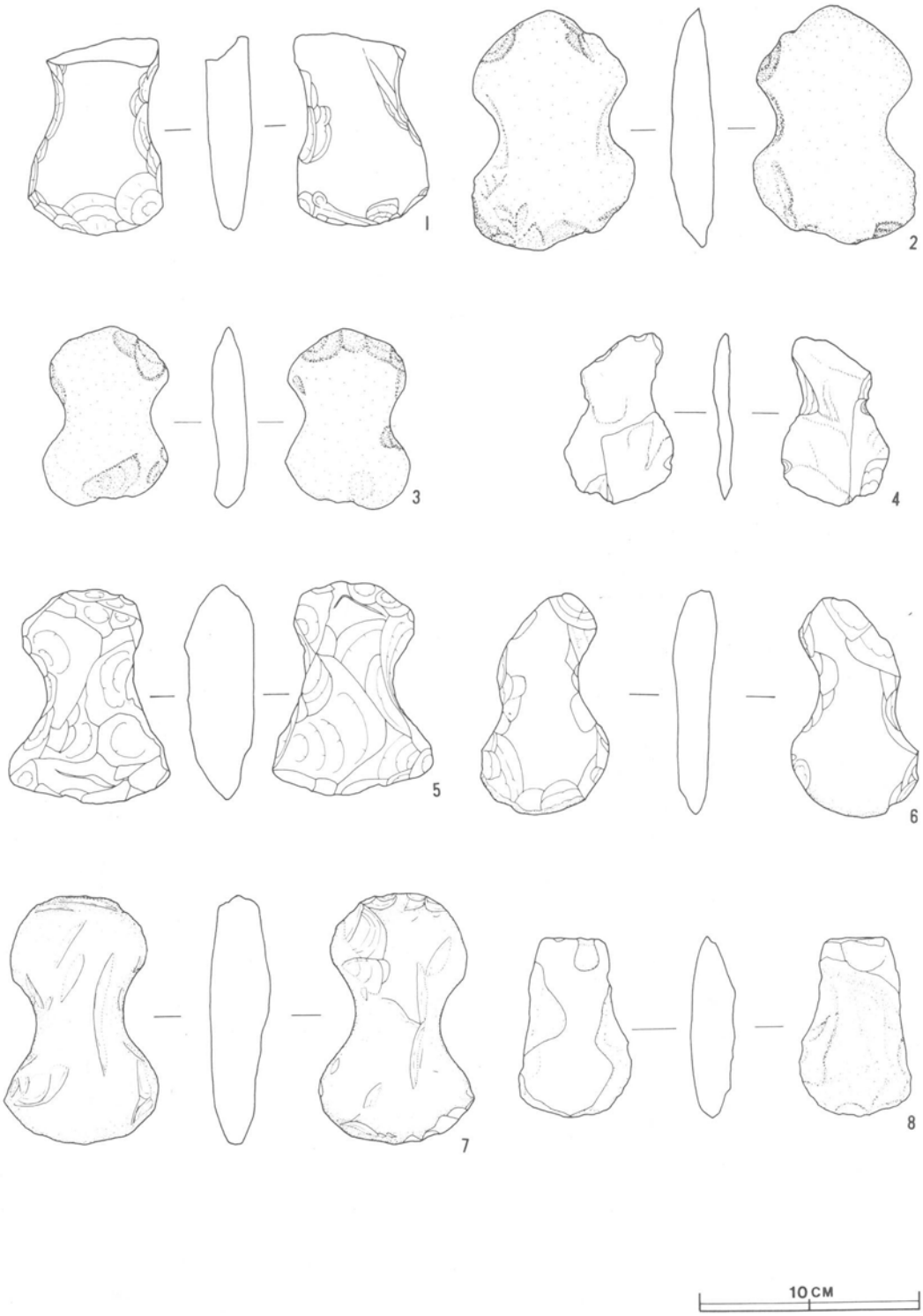


第171図　冬木Ａ・Ｂ出土土製品

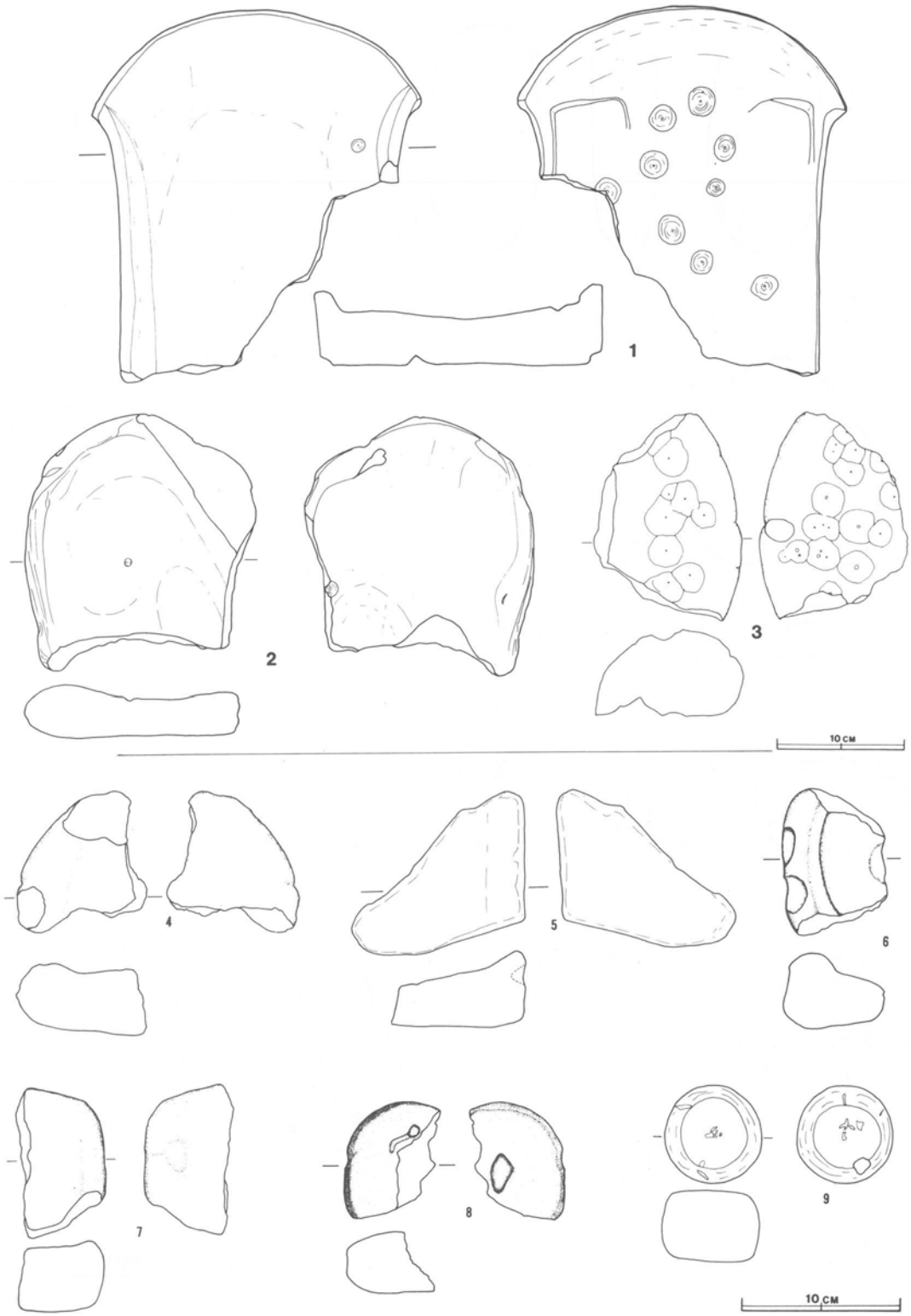


第172図　冬木Ａ・Ｂ出土独鈷石・石棒・石剣

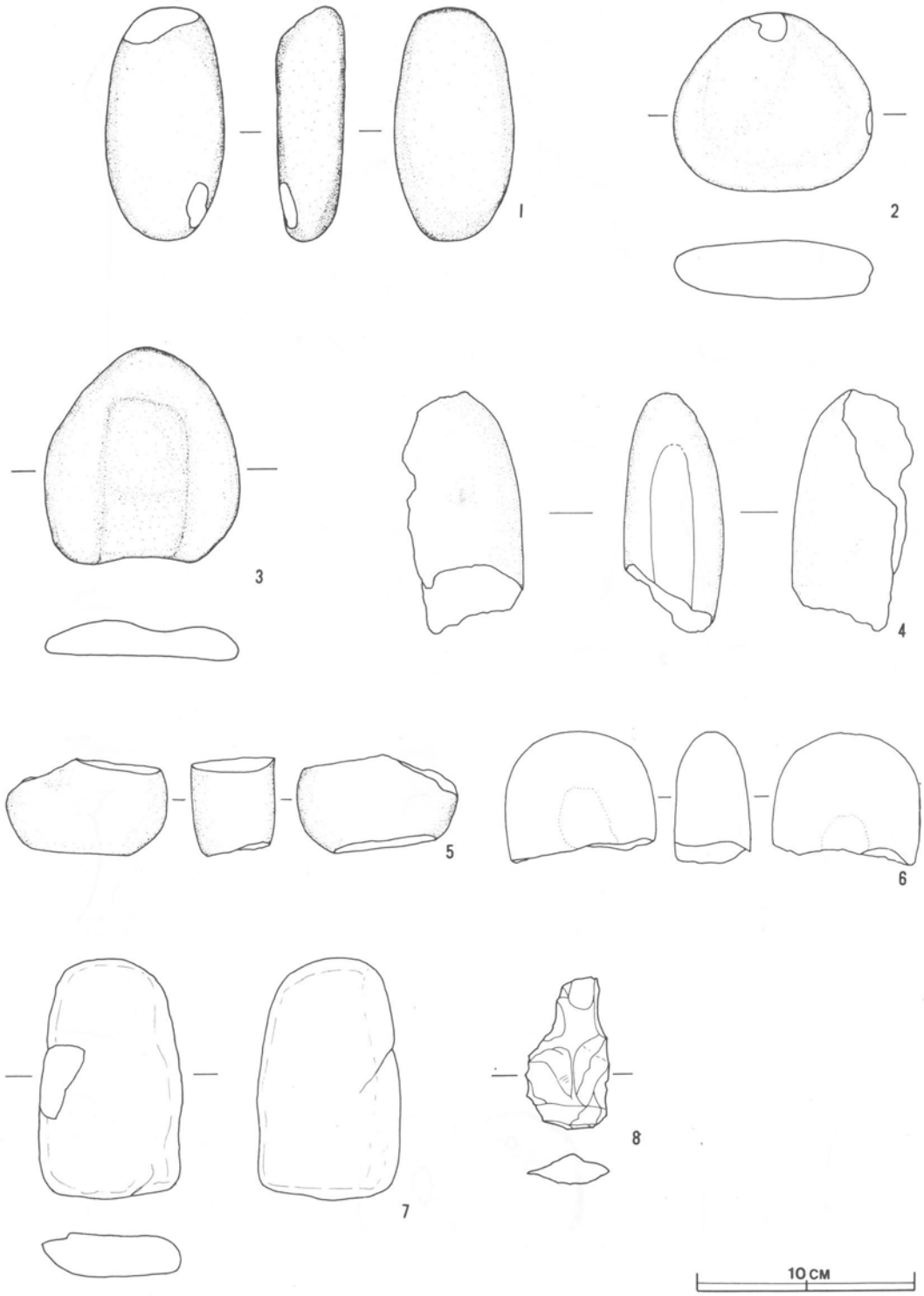
第173図　冬木A出土磨製石斧



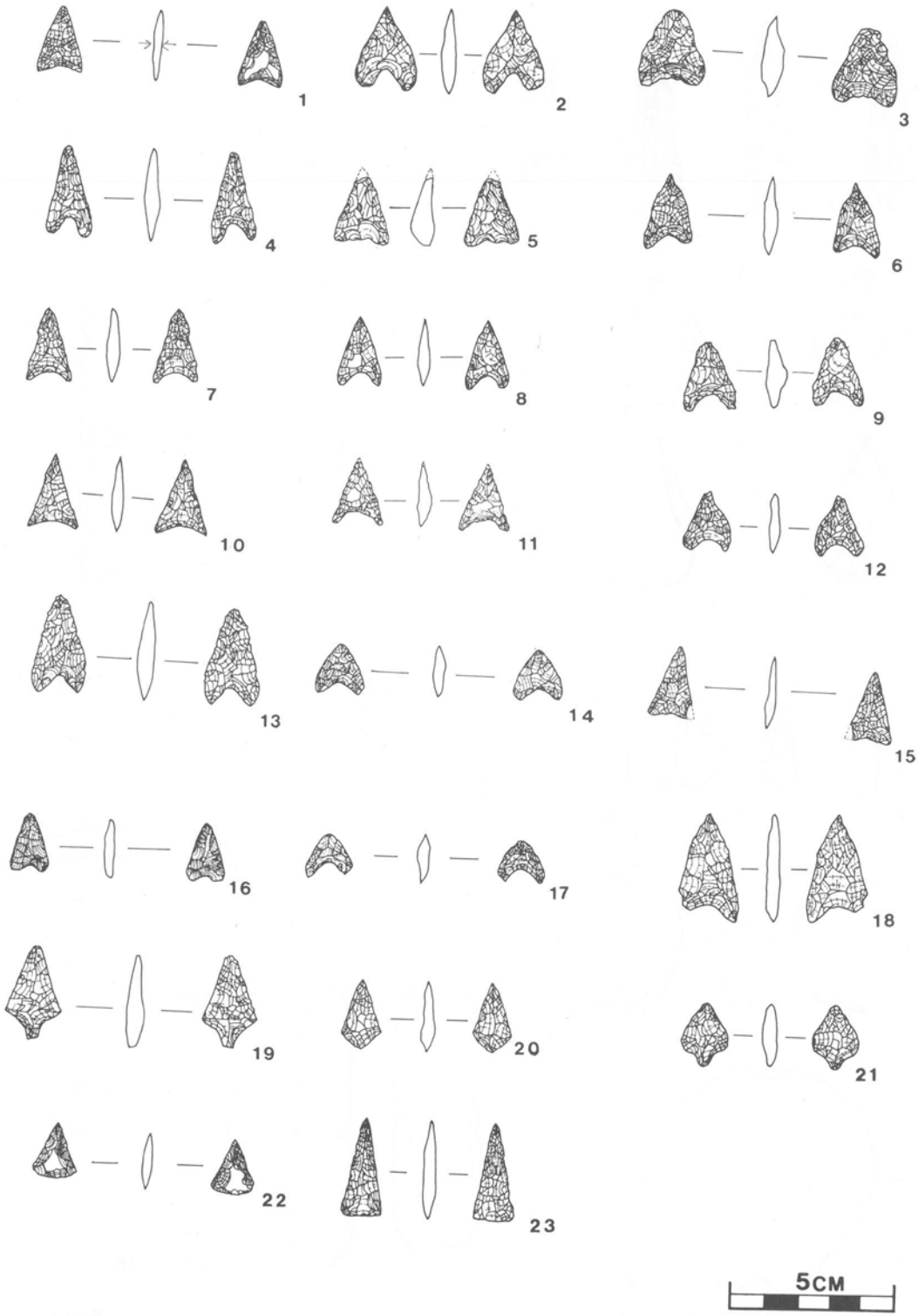
第174図　冬木Ａ出土打製石斧



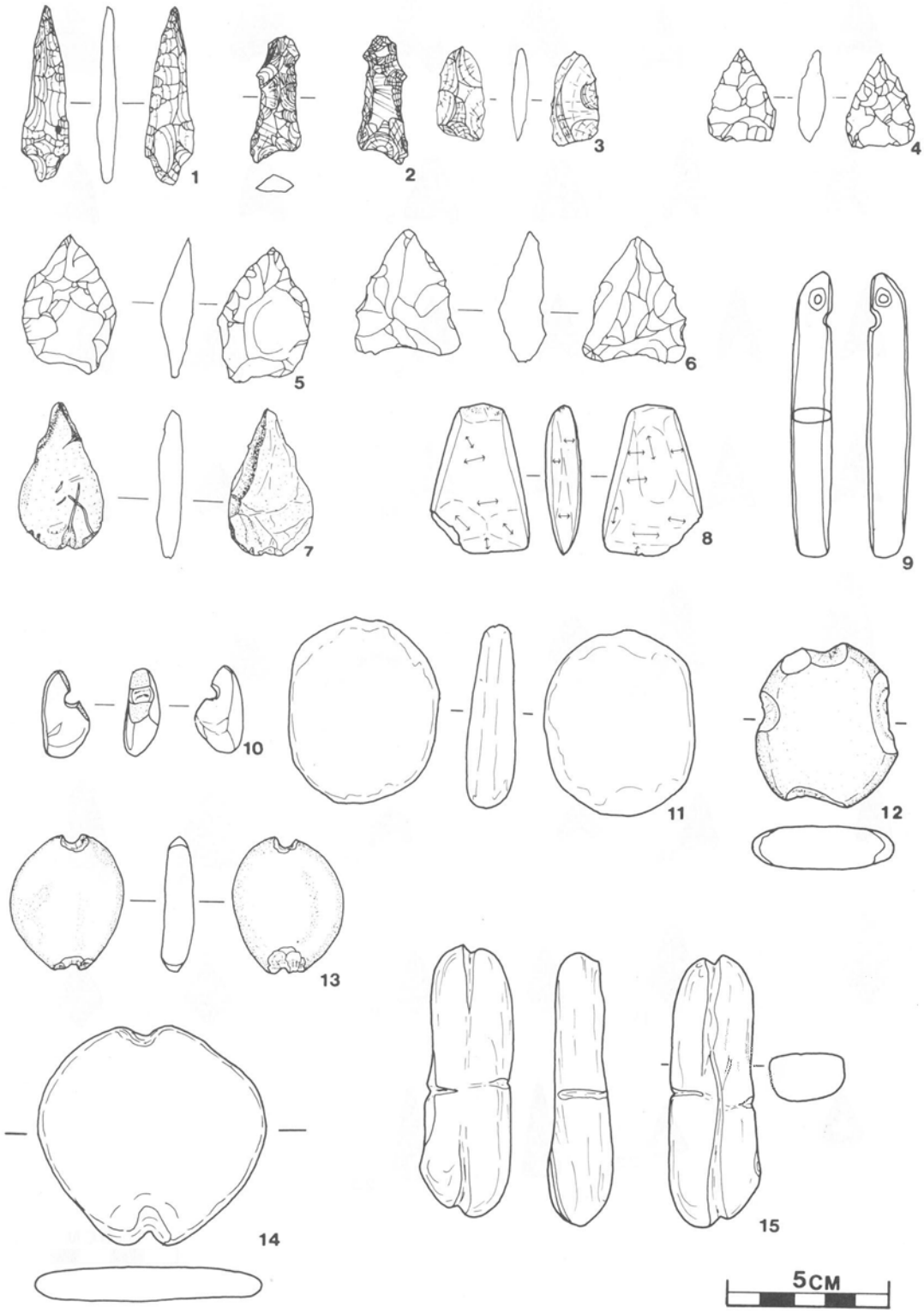
第175図　冬木Ａ・Ｂ出土石皿・磨石類



第176図　冬木Ａ出土磨石・凹石類



第177図　冬木Ａ・Ｂ出土石鏃



第178図　冬木A・B出土石製品

表112　第170図　冬木A・B出土土偶

No	冬木A・B	出土位置	部　位	備　　考
1	A	C_2h_0	頭・左肩	目は円形貼付，口は貫孔によって表現される。後頭に「髪」を表現したと思われるブリッジ状突起の痕跡を残す。堀之内式期　写52－1
2	A	C_2a_0	頭・胴	全体に粗雑で，体部はヘラによる縦位のナデ。頭頂部は指頭による渦文。眼は刺突。鼻孔1ヶあり。加曽利B式期　写52－2
3	A	SD_2 C_2a_4	頭・胴・右足	乳房・腹を誇張する。頭部を渦巻状に盛り上げ，髪を表現しているらしい。上半身はSD2，下半身は$C2a_4$から出土。加曽利B式期　写52－3
4	A	A_2i_3	頭・肩・胴・足	乳房・鼻などは貼り付。文様はヘラと丸棒状の工具により浅い沈線が施される。頭部はS字状の凹みを有する。目及び性器(？)は凹みで表現される。脚部は空洞になっている。縄文後期
5	A	C_2a_5	頭・胸	胸部を誇張。目・口は小豆状の粘土を貼り付け，刺突を施す。後頭部は瘤状隆起。加曽利B式期　写52－4
6	A	C_2g_6	胸	列点文により体の線が表わされる　写52－5
7	B	SI1	右足	全面に沈線・隆帯を配し，隆帯上には刻み目が施される。朱が付着する　写52－6
8	B	A_2c_3	頭	眉・鼻は貼り付け。目・鼻孔・口・耳は刺突により表現される。耳は貫通孔である。後頭部に突起を付け，顔面には朱が残っている
9	A	B_2j_4	左足	下が太い丸太状。ヘラ磨きが施される　写52－7
10	A	C_2f_8	胸	浅い沈線により文様が施される。整形はヘラによる縦位のなで　写52－8
11	A	C_3e_1	頭・胴・左手	頭部は抽象的に表現される。胴部は丸棒状　写52－9
12	A	B_1e_8	下半身部	体部の整形は指頭による粗雑なもの。立つことができる　写52－10

表113 (No.1～14) 第171図 冬木A・B出土土製品

No.	名称	A・B貝塚	出土位置	層位	備考
1	土面	B	A_1h_9	III	断面は彎曲し，目・鼻は沈線で施し，口は貫通している。ヘラ削り 写53－1
2	土版	A	A_2j_1	II	糸巻状を呈し，頂部の左右に貫通孔を有する。鼻・眉は隆帯貼付で目は沈線で表現する 写53－2
3	有孔土製円板	A	C_3g_3	II K	沈線及び刺突で施文し，中央左右の穴は貫通孔である。人面を表現しているのであろうか 写53－3
4	〃	A	B_1h_0	II K	2ヶ所の貫通孔を有し，径 0.9～1.0cm である 写53－4
5	耳飾	B	SK63		直径 4.3cm, 高さ 2.0cm を測る。内部には刻みのある隆帯がみられる。図中黒色部には朱が付着している 写53－5
6	〃	B	A_1j_0	III	極めて大型の耳飾で直径 10cm をオーバーすると思われる。立体的な装飾がなされている 写53－6
7	〃	B	A_1h_7	II	〃 写53－7
8	〃	B	A_1h_9	III	〃 写53－8
9	〃	B	A_1i_9	II	〃 写53－10
10	〃	B	A_1h_7	II	〃 写53－11
11	〃	B	A_1h_7	III	上面直径 7.8cm。下面直径 5.2cm。内部には平行沈線を2段に施し，4ヶ所に縦位の沈線を引く。黒色部に朱が残っている 写53－12
12	〃	B	SK29		粘土板を巻いて仕上げたもので，上面中央部に突起がつく。上面は弧状の沈線を施し，下面には板を巻いた痕が沈線状にみえる直径 2.8cm 写53－13
13	〃	B	A_1h_7	III	上面外端に刻みが施される。厚さ 2.0cm 写53－14
14	〃	A	A_2j_1	II	直径 1.7cm。厚さ 1.5cm。上面に2本の沈線が施される。ヘラ整形 写53－15

(No.15～28)

No.	名称	出土位置	ノッチ間長さ(長径)(cm)	幅(短径)(cm)	重さ(g)	備考
15	土錘	SK56	5.4	4.2	33.5	
16	〃	SK25	3.9	4.9	25.5	上部欠
17	〃	SK25	2.5	3.8	14.0	下部欠
18	〃	SD1	2.0	2.9	8.0	
19	〃	SK55	3.3	4.3	15.5	切れ込み3ヶ所
20	〃	C_2h_9	4.6	4.6	24.0	写53－9
21	〃	C_2d_5	3.0	3.1	14.0	
22	〃	B_2a_2	5.4	5.2	33.5	冬木B貝塚
23	土製円板	A_1h_8	5.2	4.7	24.5	冬木B貝塚
24	土錘	A_1g_8	4.5	4.4	16.5	冬木B貝塚
25	〃	A_1h_7	3.3	3.3	8.5	冬木B貝塚
26	〃	B_2a_1	4.2	4.1	17.5	冬木B貝塚
27	〃	A_1h_8	4.2	3.8	9.5	冬木B貝塚
28	土製円板	SK24	3.5	3.2	8.5	冬木B貝塚

表114 （第172図　冬木A・B出土石製品）

No.	器　　種	出土位置	層　位	石　質	備　　考
1	独鈷石	SK52	覆　土	安山岩	冬木B貝塚，使用痕あり　写51－4
2	石　剣	C_3f_4	II	頁　岩	明瞭な擦痕が残る　写43－7
3	石　棒	B_2a_1 A_1h_8		閃緑岩	冬木B貝塚，先端がB_2a_1：下部がA_1h_8から出土　写51－2
4	石　剣	A_1h_9		〃	冬木B貝塚，断面菱形を呈する　写51－3
5	石　棒	C_2a_4	II	雲母片岩	先端に沈線を配する　写43－1
6	〃	A_1j_9	II	安山岩	冬木B貝塚
7	〃	A_1g_9	II	閃緑岩	冬木B貝塚，先端に2条の沈線を配する
8	〃	A_1j_9	II	頁　岩	冬木B貝塚
9	〃	B_1c_0	II	緑泥片岩	
10	〃	SK91	覆　土	〃	

表115 （第173図　冬木A出土磨製石斧）

No.	器　　種	出土位置	層位	石　質	備　　考
1	磨製石斧	SK106	覆　土	安山岩	使用痕　写42－1
2	〃	C_2e_0	IIK	砂　岩	安山岩質　写42－2
3	〃	C_2c_4	〃	安山岩	写42－7
4	〃	C_3d_4	〃	砂　岩	写42－4
5	〃	C_3e_3	II	安山岩	写42－3
6	〃	C_3e_3	IIK	〃	写42－9
7	〃	D_2a_7	III	〃	写42－8
8	〃	D_2a_7	III	〃	写42－6
9	〃	C_2c_3	IIK	チャート	
10	〃	C_2f_2	II	蛇紋岩	
11	〃	C_2i_7	II	〃	
12	〃	C_2g_3	II	チャート	
13	〃	C_3e_5	IIK		
14	玉	C_3h_3	III	蠟　石	穿孔部で半分に欠

表116 （第174図　冬木Ａ出土打製石斧）

No.	器　　種	出土位置	層 位	石　質	備　　考
1	打製石斧	SI25	覆　土		局部磨製　写42—14
2	〃	B_2f_3	I	頁　岩	一方の端が三角形状に尖る　写42—5
3	〃	B_2f_1	II K	安山岩	局部磨製　写43—4
4	〃	B_2d_0	II K	頁　岩	写43—2
5	〃	C_2b_1	II K	砂　岩	写43—2
6	〃	C_3i_2	II	頁　岩	局部磨製
7	〃	C_3a_3	II	ハンレイ岩	〃
8	〃	C_3i_3	II	〃	〃　写42—11

表117 （第175図　冬木Ａ・Ｂ出土石皿・磨石類）

No.	器　　種	出土位置	層 位	石　質	備　　考
1	石　皿	$B1b_9$	II	安山岩	冬木Ｂ貝塚，良く整形されている　写51—1
2	〃	SI10	覆　土	緑泥片岩	両面に小さな凹み
3	〃	SK056	〃	安山岩	両面に多数の深い凹み　写43—9
4	〃	SI11	〃	〃	多孔質
5	〃	SK049	〃	〃	側面に深い凹み　写43—8
6	〃	SK130	〃	〃	表面に明瞭な稜を持つ
7	〃	SK085	〃	〃	表面に明瞭な稜を持つ
8	磨　石	SK087	〃	〃	両面に浅い凹み
9	〃	SI11	〃	〃	写42—16

表118 （第176図　冬木Ａ出土磨石・凹石類）

No.	器　　種	出土位置	層 位	石　質	備　　考
1	敲　　石	SD2	覆　土	安　山　岩	磨石としても使用(？)
2	砥　　石	SK102	〃	砂　　岩	敲石としても使用(？)
3	〃	〃	〃	〃	
4	磨　　石	SK025	〃	安　山　岩	両面に浅い凹み
5	〃	SK013	〃	〃	
6	〃	SI25	〃	〃	両面に凹み　　写42—15
7	砥　　石	SI26	〃	砂　　岩	
8	剝　　片	SK188	〃	安　山　岩	

表119 （第177図　冬木Ａ・Ｂ出土石鏃）

No.	器　　種	出土位置	層 位	石　質	備　　考
1	石　　鏃	B_1f_8	II K	黒　曜　石	
2	〃	C_2d_6	II	チ　ャ　ー　ト	
3	〃	C_3e_3	II K	〃	
4	〃	C_3e_4	II	〃	
5	〃	C_2g_4	II K	黒　曜　石	
6	〃	SI2	覆　土	〃	
7	〃	C_3d_2	III	チ　ャ　ー　ト	
8	〃	D_2c_6	II	〃	
9	〃	C_3c_4	II	〃	
10	〃	C_2d_9	II	〃	
11	〃	C_2g_5	II	〃	
12	〃	B_2h_1	II K	石　　英	
13	〃	C_3f_5	III	チ　ャ　ー　ト	
14	〃	SI-8	覆　土	黒　曜　石	
15	〃	C_2c_0	III	チ　ャ　ー　ト	
16	〃	C_3f_4	II K	黒　曜　石	
17	〃	C_3e_4	II	チ　ャ　ー　ト	
18	〃	SI12	覆　土	〃	
19	〃	B_2a_1	II	〃	冬木Ｂ貝塚
20	〃	B_2f_1		黒　曜　石	
21	〃	C_3d_6	II K	チ　ャ　ー　ト	
22	〃	C_3a_5	II	黒　曜　石	
23	〃	C_3h_3	II	硬 質 頁 岩	

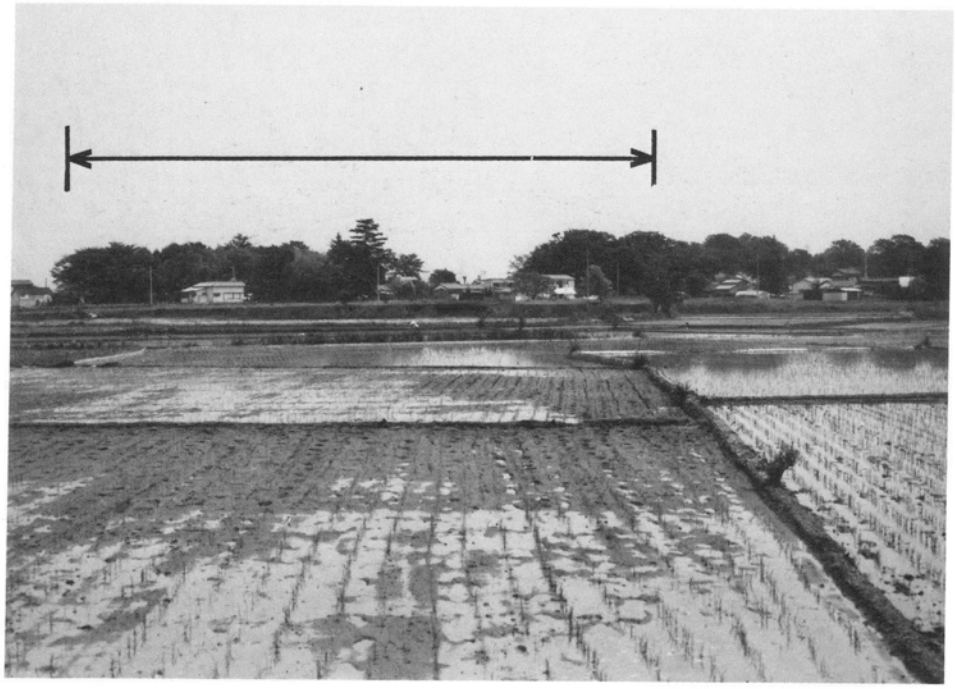
表120 （第178図　冬木Ａ・Ｂ出土石製品）

No.	器　　種	出土位置	層 位	石　質	備　　考
1	有柄尖頭器	B_2c_4	II	硬質頁岩	
2	異形石製品	C_2b_7	I	黒　曜　石	
3	石　　鏃	C_2e_9	II K	チャート	
4	石　　鏃	SI8	覆　土	チャート	
5	〃	C_2h_0		頁　　岩	未成品
6	〃	SK78	覆　土	チャート	未成品　　写35－4
7	剝　　片	C_3c_4	II K	砂　　岩	自然面を残す
8	石　　斧	D_2b_8		蛇　紋　岩	研磨により光沢
9	垂　　飾	SI-11	覆　土		くびれあり（穿孔の痕跡か？）
10	〃	B_1d_9	II K	ヒ　ス　イ	穿孔部より欠
11	石製円板	B_1a_0	II	泥　　岩	冬木Ｂ貝塚
12	石　　錘	C_2h_9		砂　　岩	四隅を両面から打ち欠
13	〃	C_2b_2	II K	〃	両端を打ち欠
14	〃	C_3e_2	II K	頁　　岩	打ち欠部に磨耗が見られる
15	〃	B_2i_1	I	緑泥片岩	断面Ｖ字形の溝

図　　版

（冬木Ａ貝塚
冬木Ｂ貝塚）

写真１　冬木Ａ



１，冬木Ａ貝塚遠景

２，冬木Ａ貝塚発掘前全景

写真２　冬木Ａ

１，調査風景

２，調査風景

写真３　冬木Ａ

１，Ｂ１・Ｂ２区遺構全景

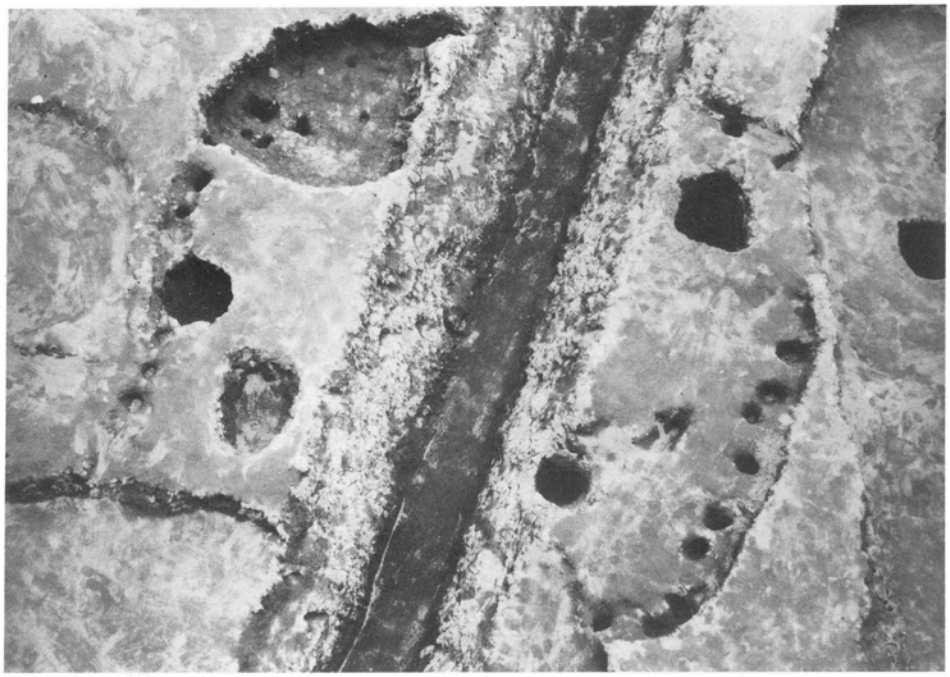
２，Ｃ２区遺構全景

写真４　冬木Ａ

１，Ｃ３区遺構全景

２，Ｄ２区遺構全景

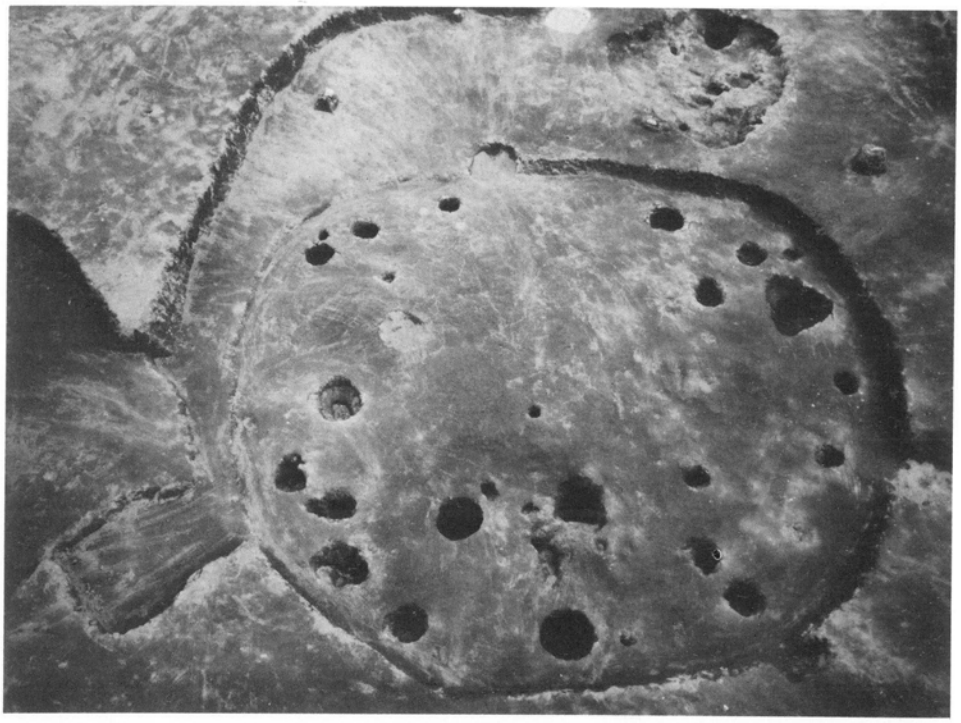
写真5　冬木A



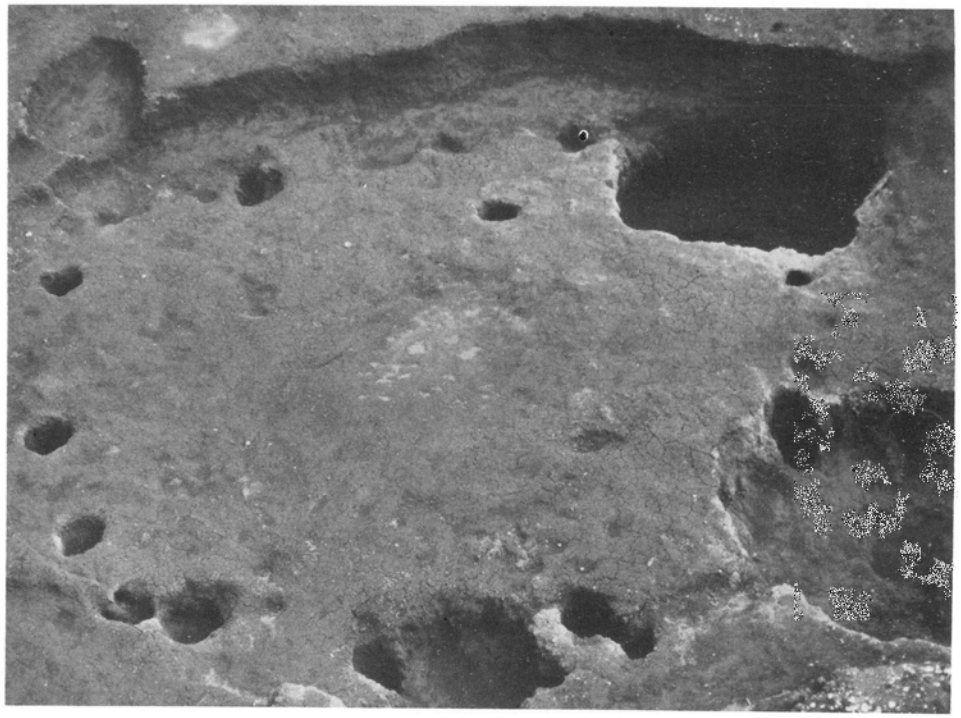
1，第1号住居址

2，第3号住居址

写真6　冬木A



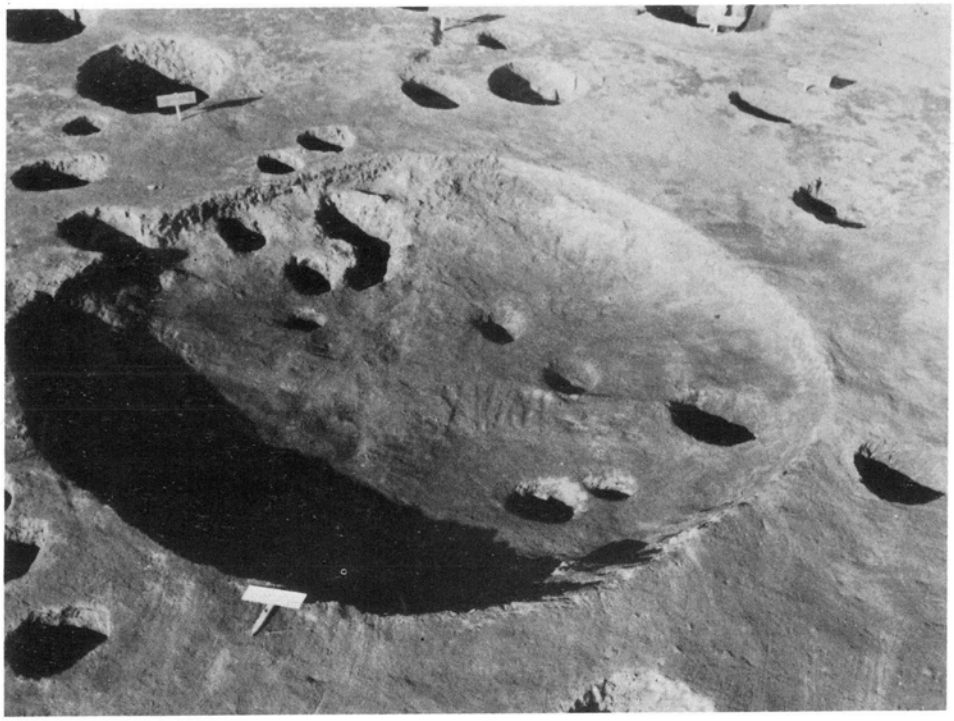
1，第4号住居址



2，第5号住居址

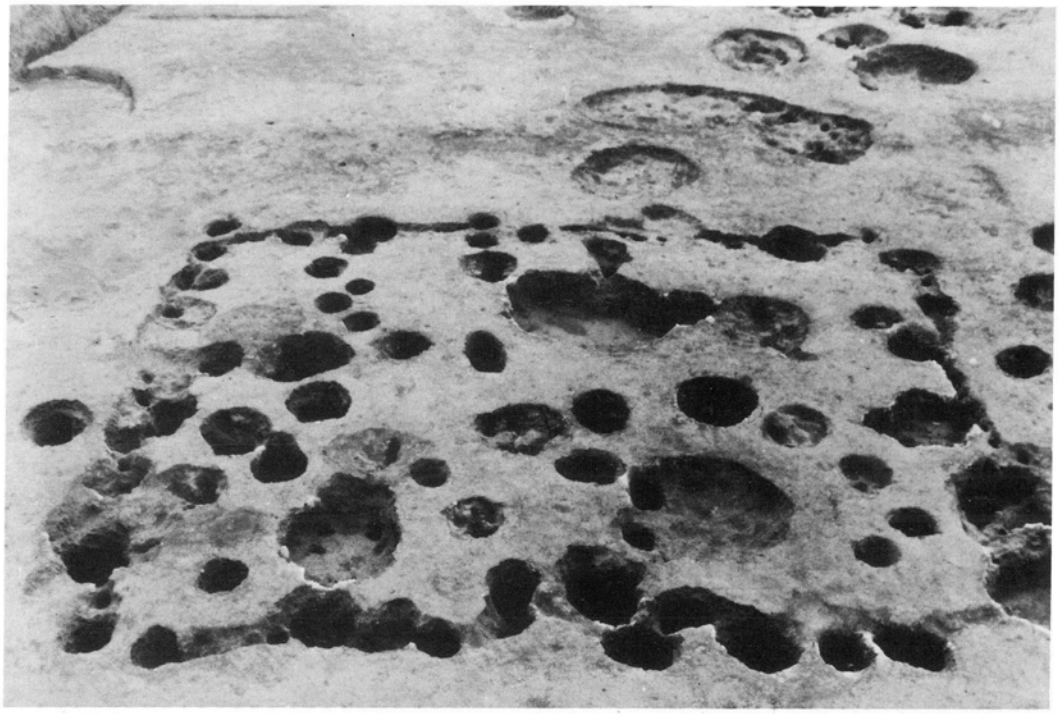
写真7　冬木A

1，第6号住居址

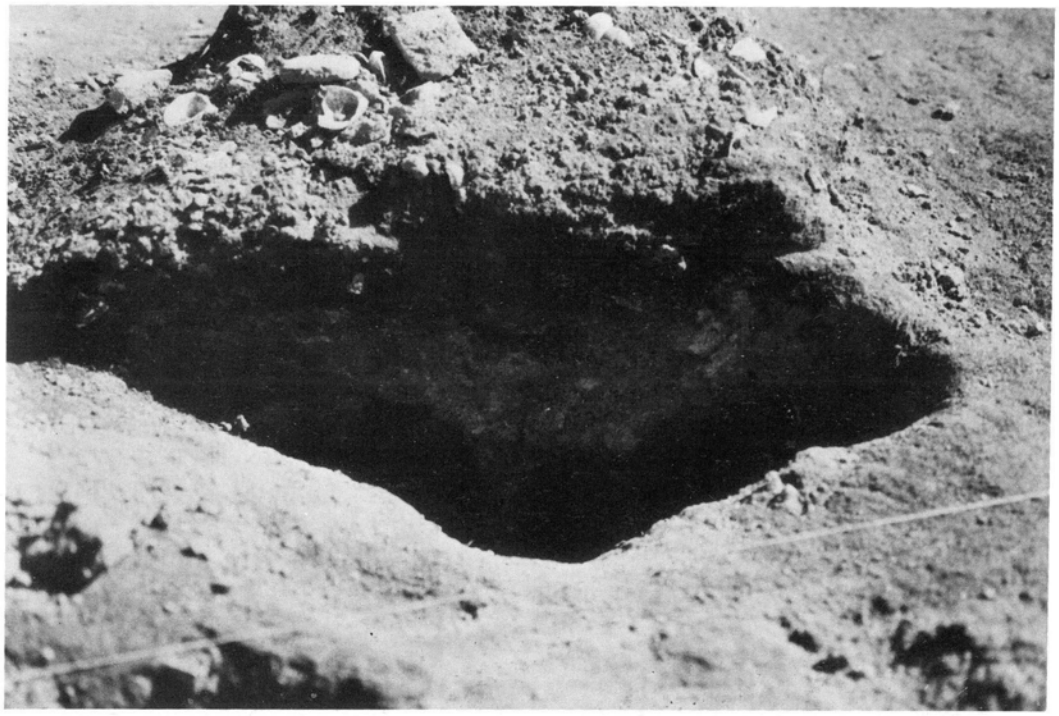


2，第29号住居址

写真8　冬木A

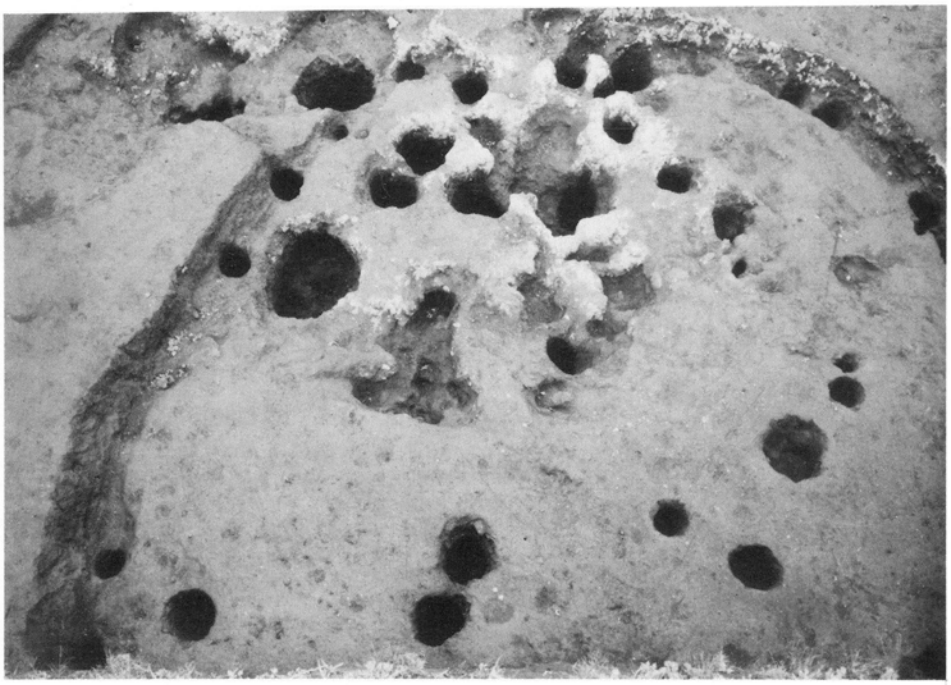


1，第9号住居址

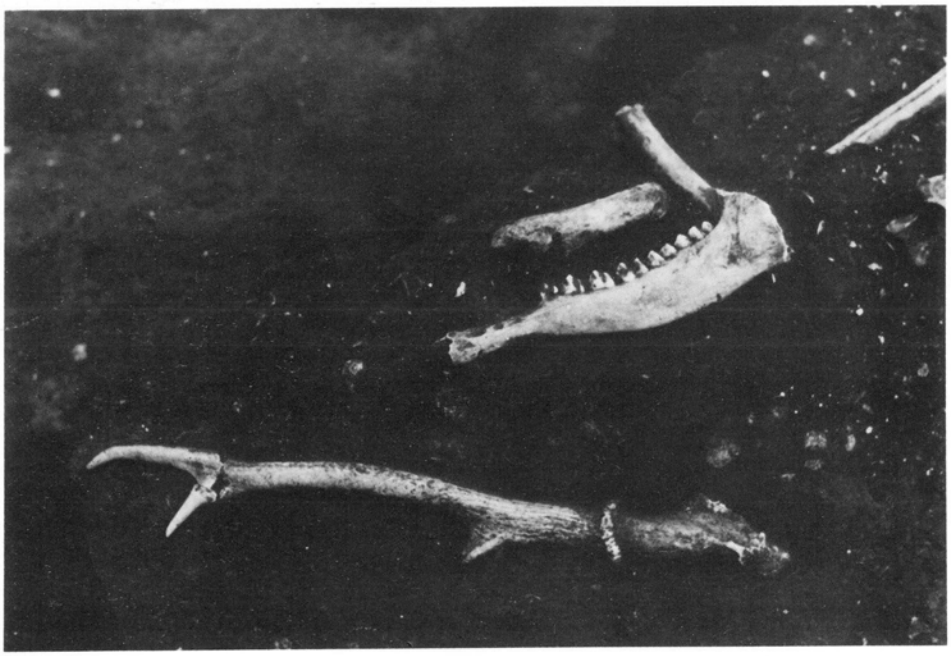


2，第9号住居址炉址断面

写真9　冬木A



1，第10号住居址



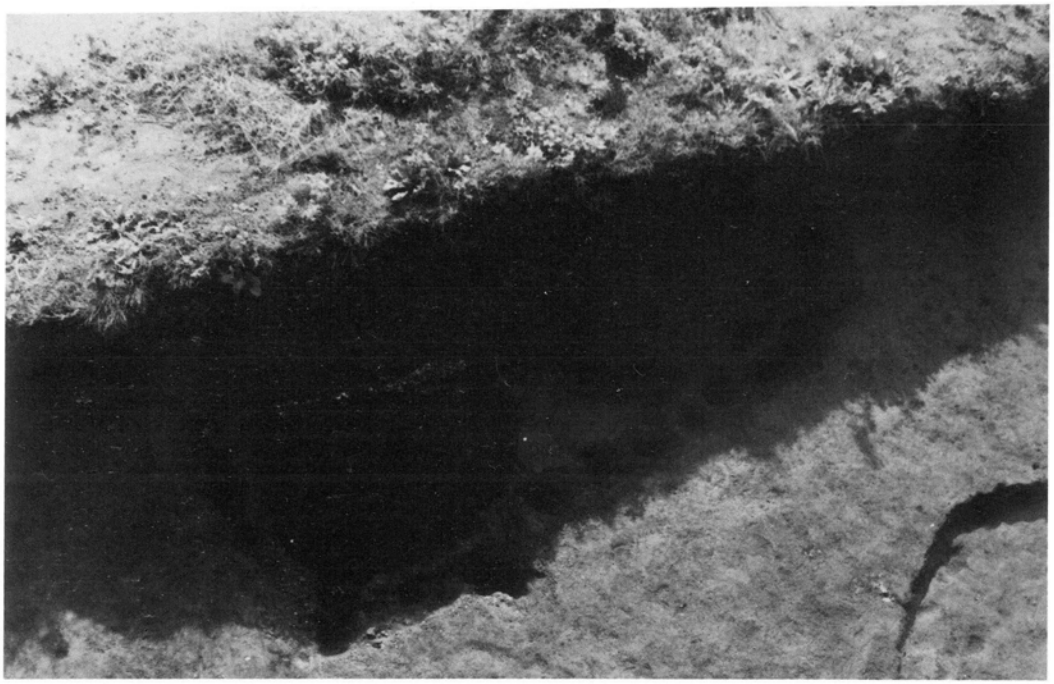
2，第10号住居址遺物出土状況

写真10　冬木A

1，第11号住居址

2，第11号住居址炉址断面

写真11　冬木A

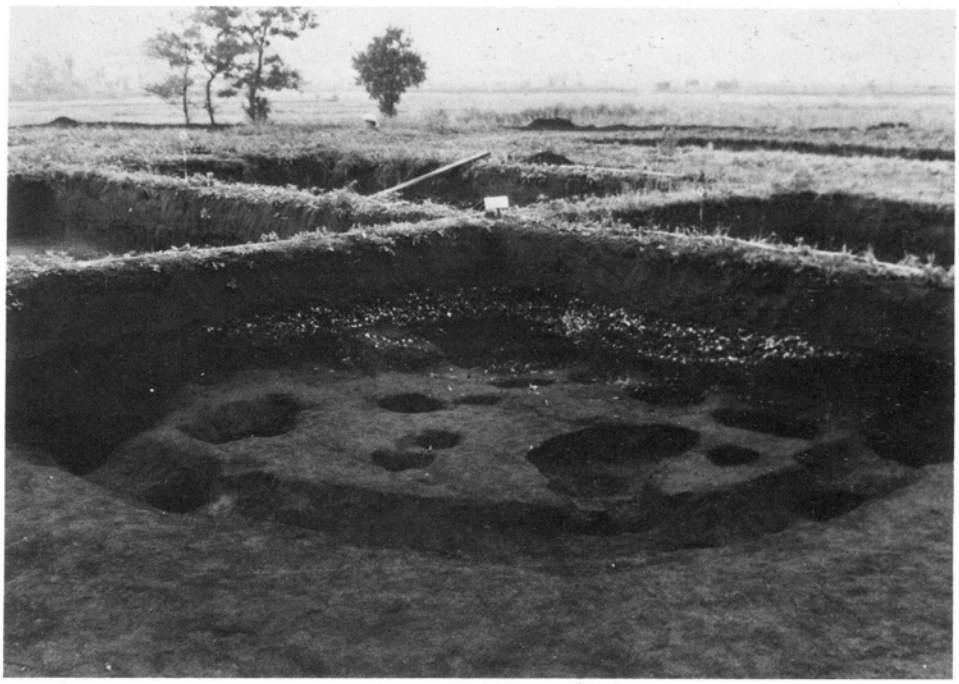


1，第15号住居址

2，第17号住居址

写真12　冬木A

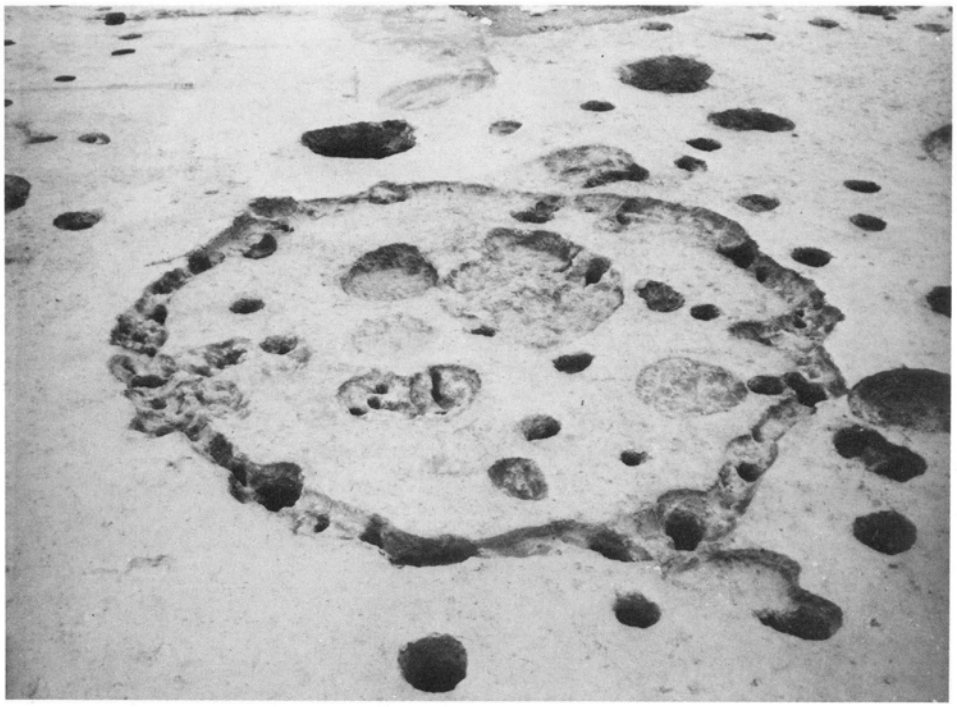
1，第21号住居址



2，第21号住居址土層断面

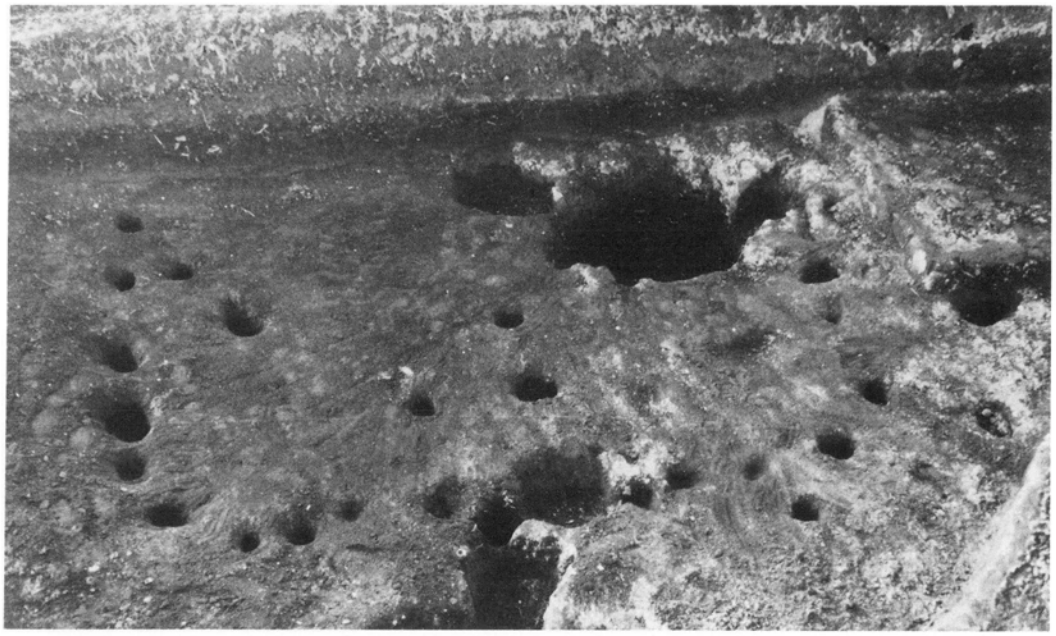
写真13　冬木A

1，第22号住居址

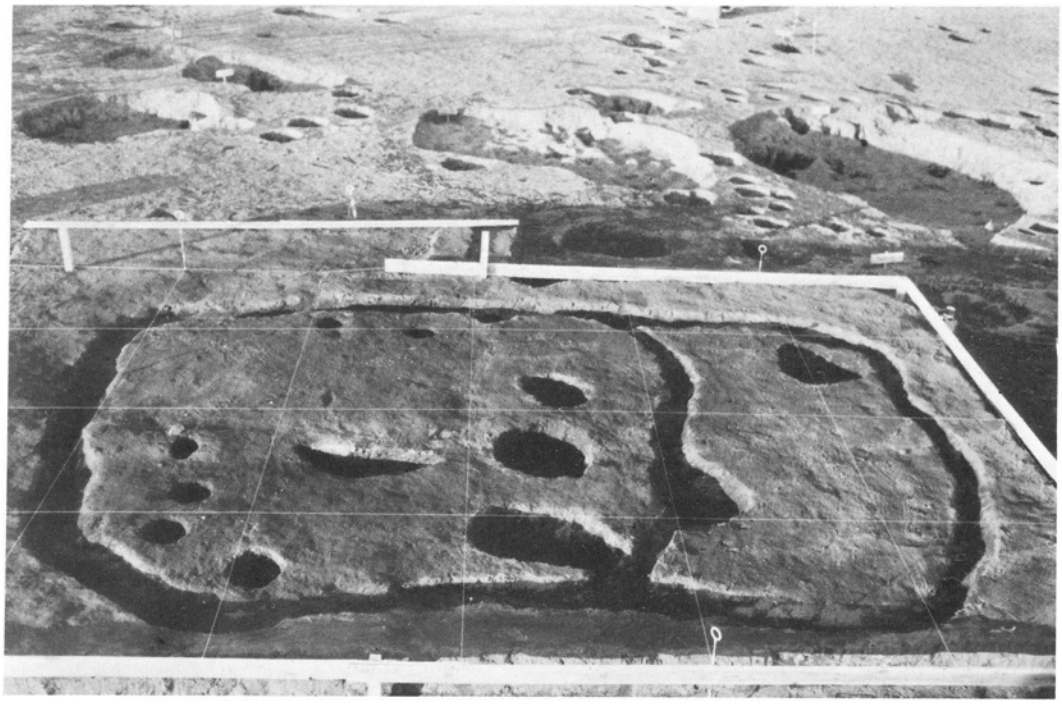


2，第24号住居址

写真14　冬木A



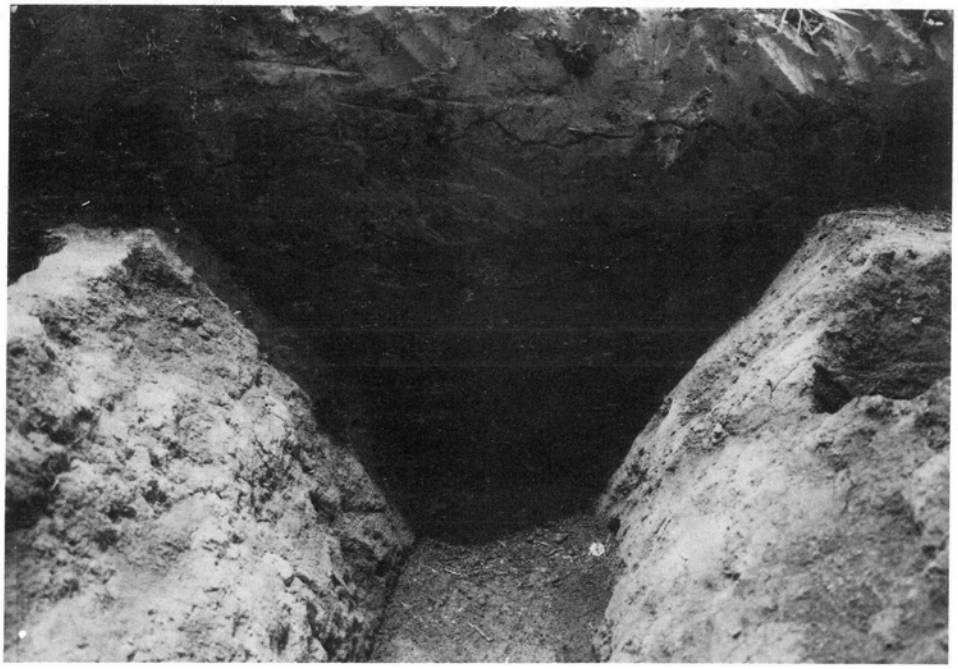
1，第25号住居址



2，第27号住居址

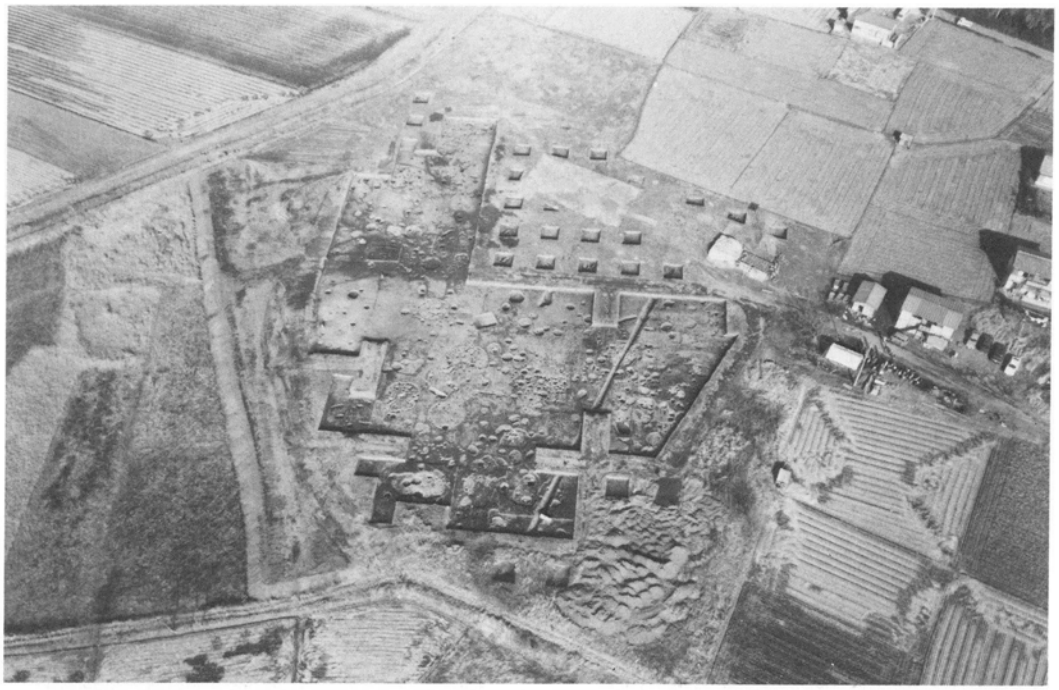
写真15　冬木Ａ

1，第１号溝（Ｃ３区内）

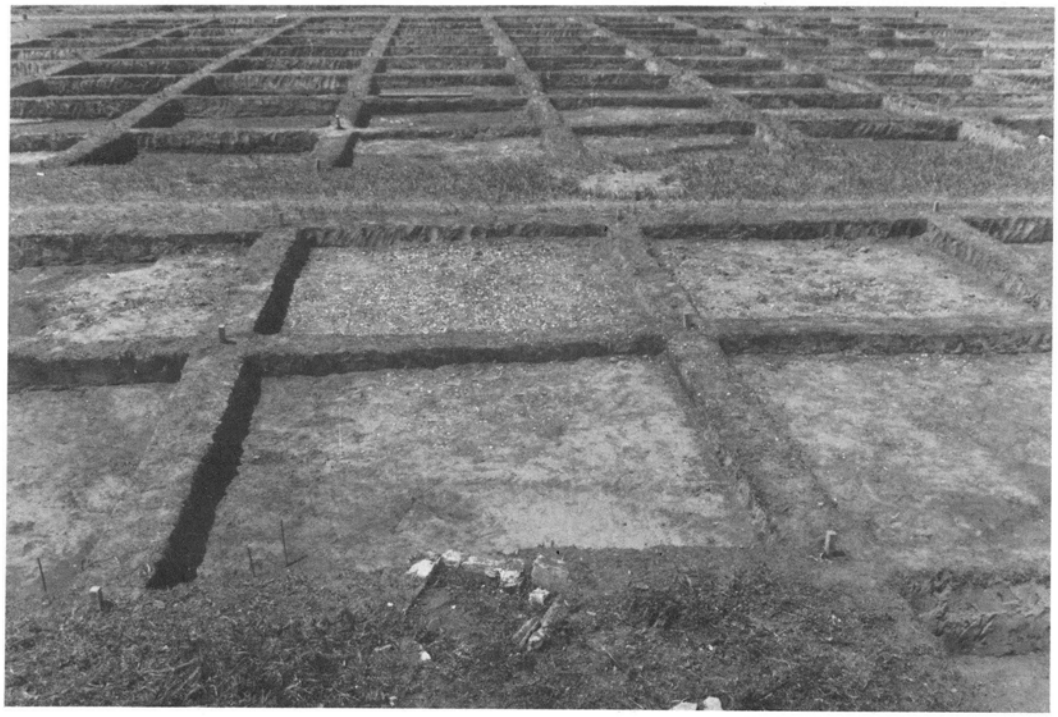


2，第１号溝土層断面

写真16　冬木Ａ

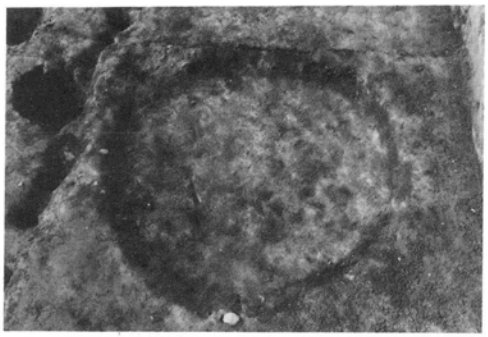


1，冬木Ａ貝塚全景（航空写真）

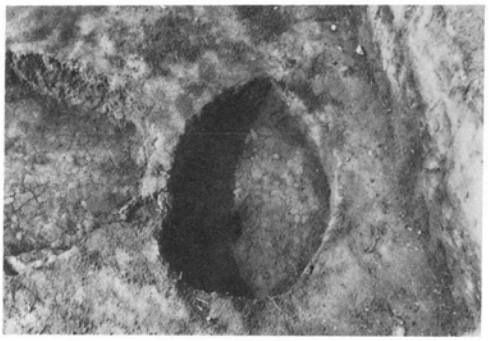


2，Ｄ２区貝層分布状況

写真17　冬木A

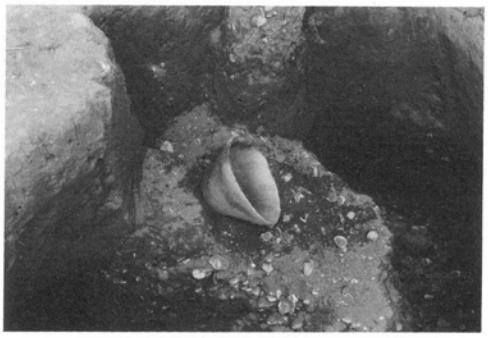


1，第3号土壙

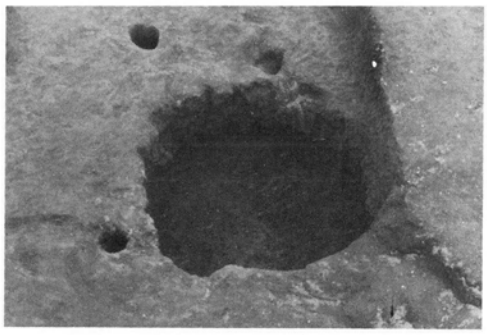


2，第10号土壙

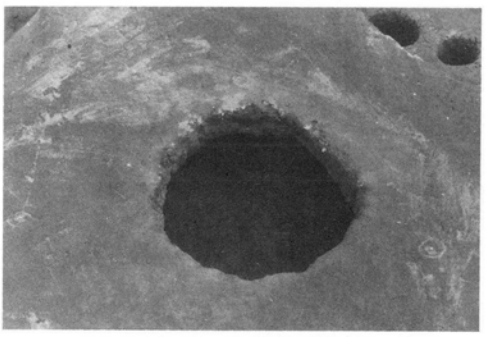
3，第11号土壙



4，第16号土壙遺物出土状況

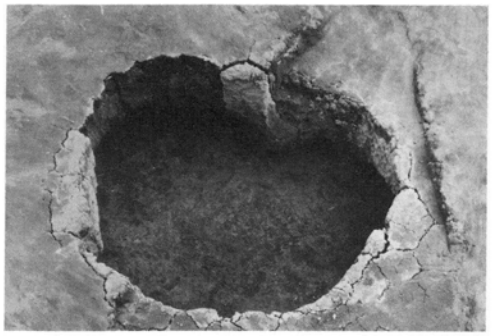


5，第16号土壙

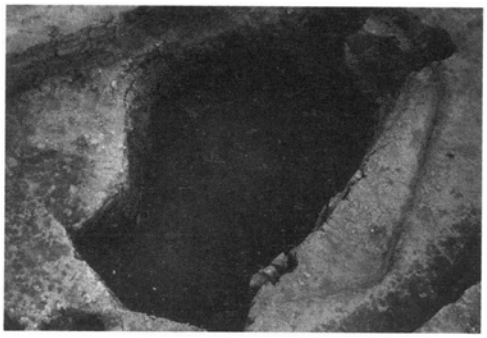


6，第20号土壙

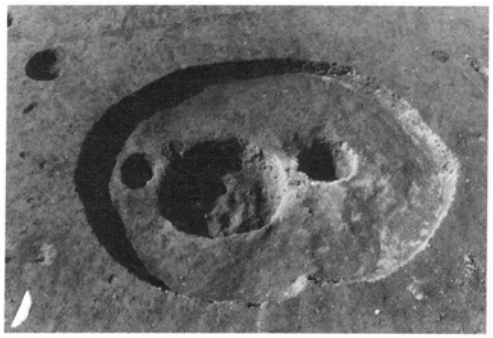
写真18　冬木A



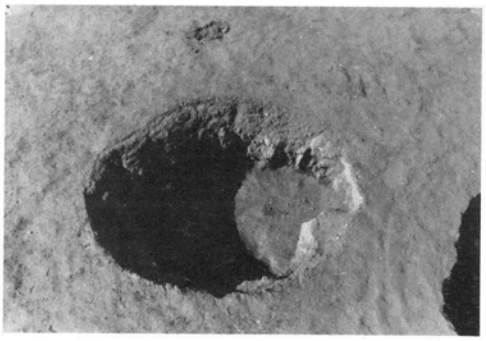
1，第42号土壙



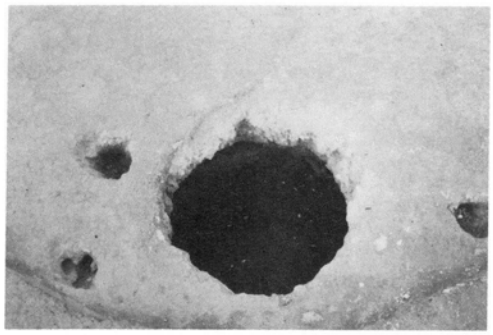
2，第63土壙



3，第87土壙



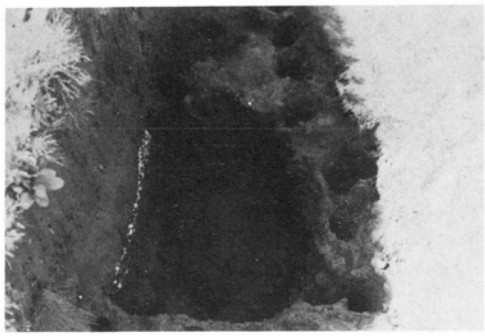
4，第89号土壙



5，第92号土壙

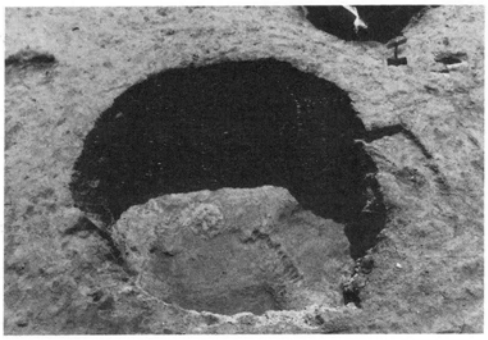
6，第98号土壙

写真19　冬木A

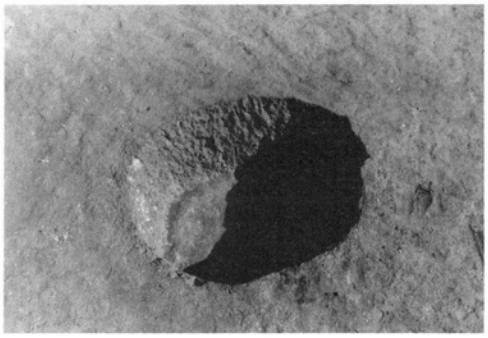


1，第99号土壙

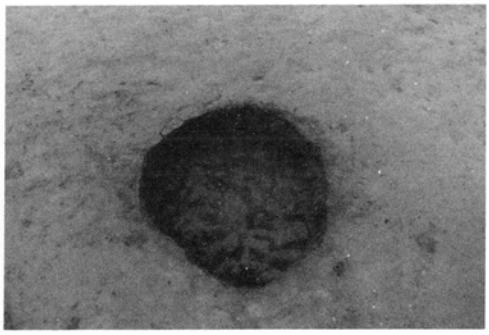
2，第104号土壙



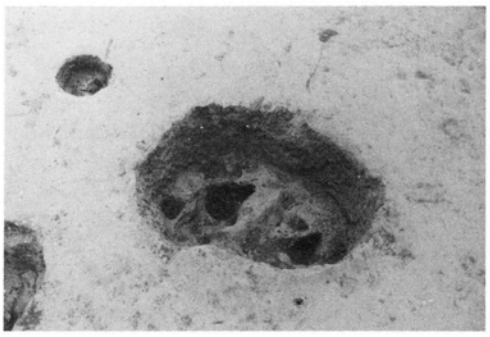
3，第106号土壙



4，第107号土壙

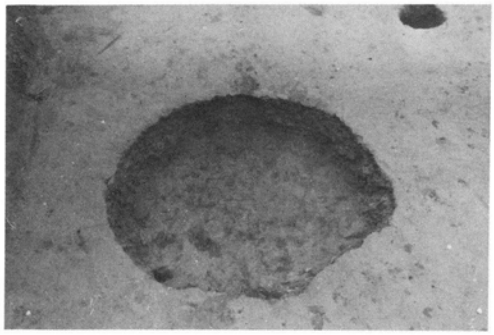


5，第110号土壙



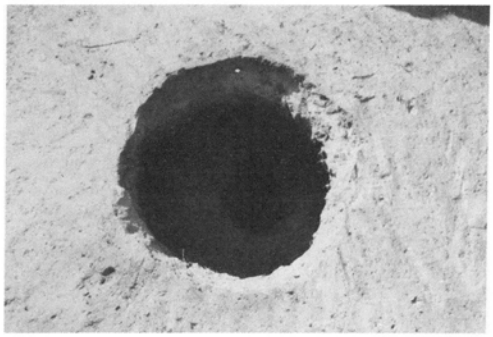
6，第119号土壙

写真20　冬木A

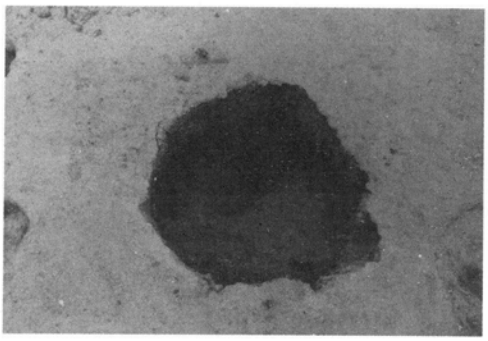


1，第122号土壙

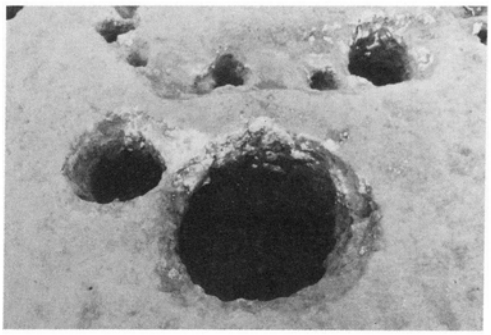
2，第122号土壙土層断面



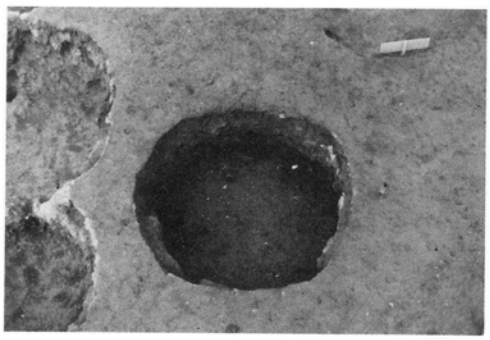
3，第123号土壙



4，第127号土壙

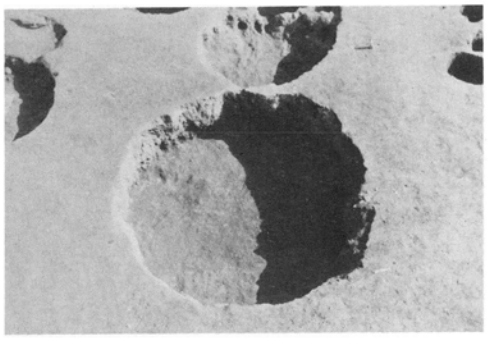


5，第128号土壙

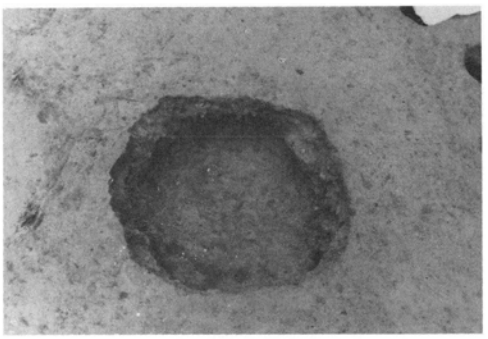


6，第138号土壙

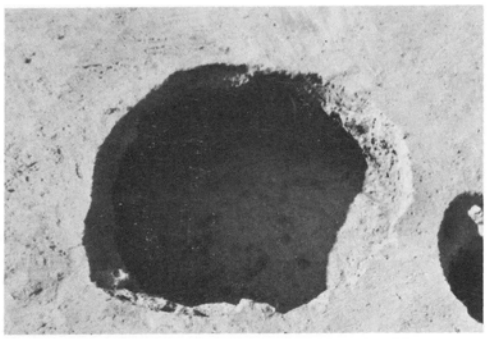
写真21　冬木A



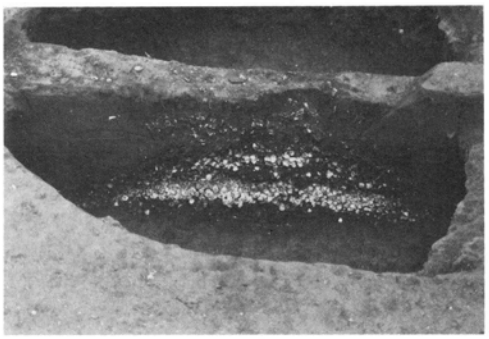
1，第148号土壙



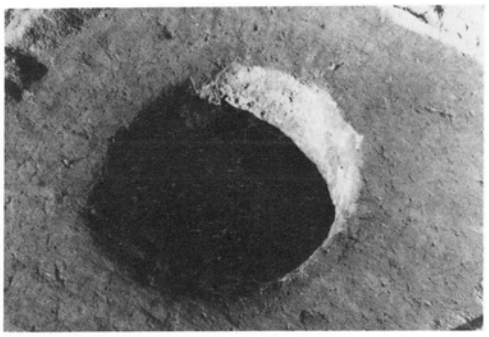
2，等149号土壙



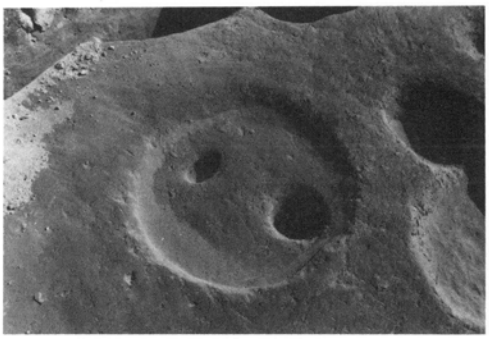
3，第150号土壙



4，第150号土壙土層断面

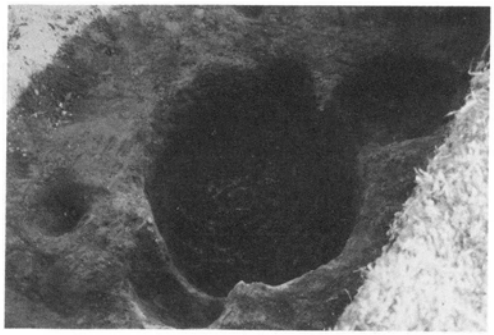


5，第164号土壙

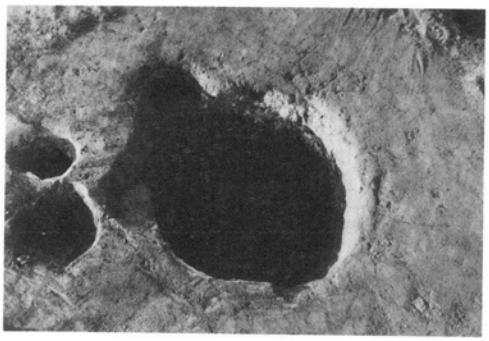


6，第174号土壙

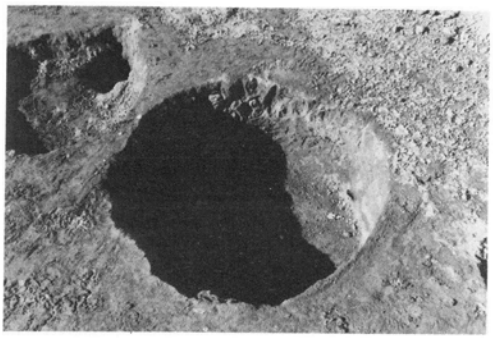
写真22　冬木A



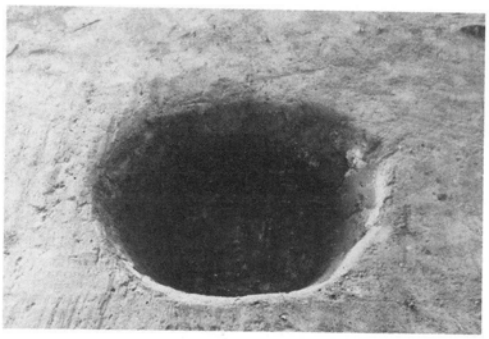
1，第177号土壙



2，第201号土壙

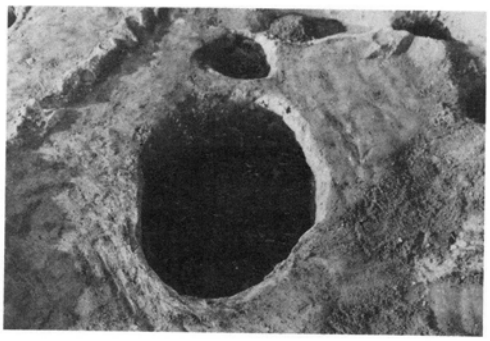


3，第216号土壙



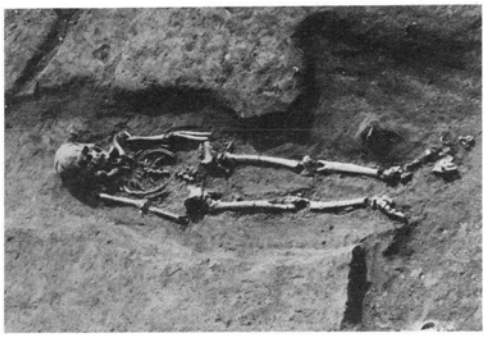
4，第235号土壙

5，第238号土壙



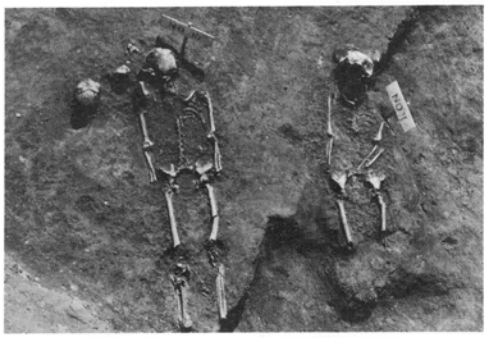
6，第245号土壙

写真23　冬木A



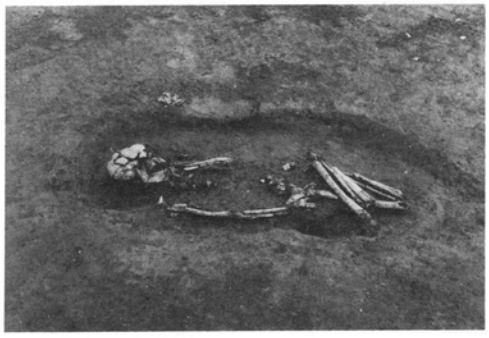
1，第４号人骨出土状況

2，第４号人骨顎部出土状況

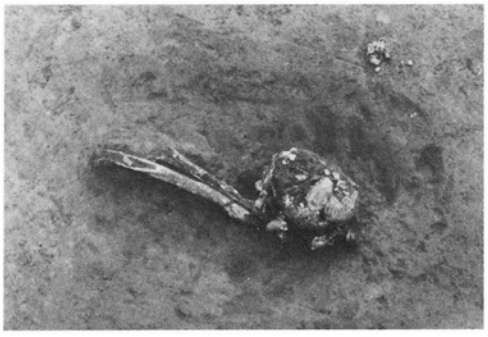


3，第７号・10号人骨出土状況

4，第15号人骨出土状況



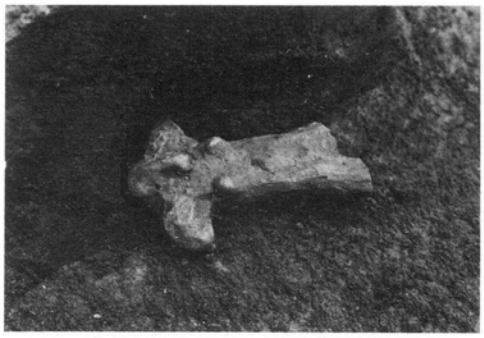
5，第17号人骨出土状況



6，第18号人骨出土状況

写真24

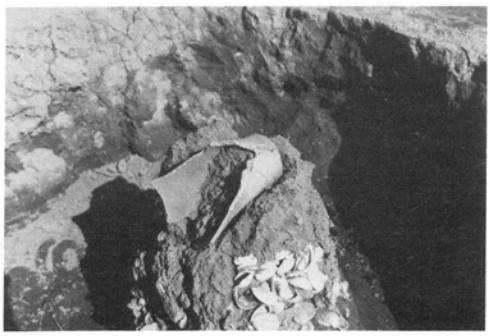
1，第２号溝土偶出土状況



2，$C2d_7$土偶出土状況

3，$C2h_0$ グリッド土偶出土状況

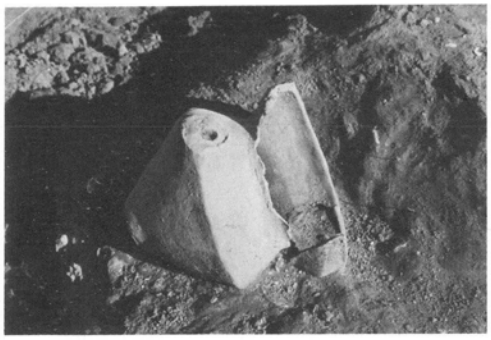
4，第46号土壙鹿角出土状況



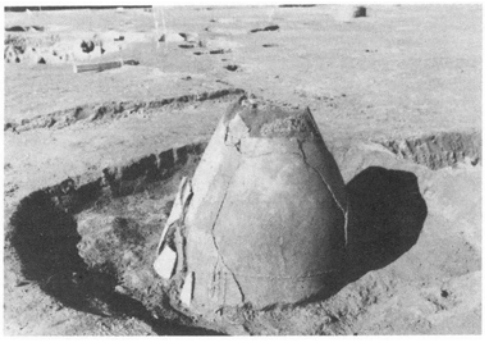
5，第105号土壙遺物出土状況

6，$C3e_5$ グリッド遺物出土状況

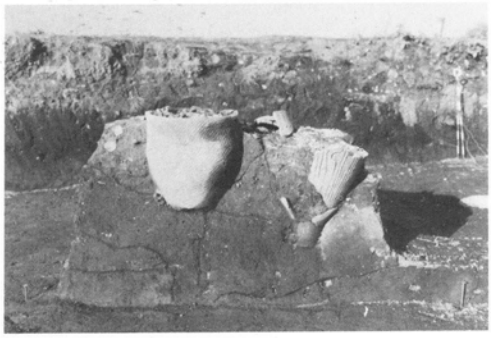
写真25　冬木A



1，$C2e_0$ グリッド遺物出土状況



2，$B2h_3$ グリッド遺物出土状況



3，$C1a_9$ グリッド遺物出土状況

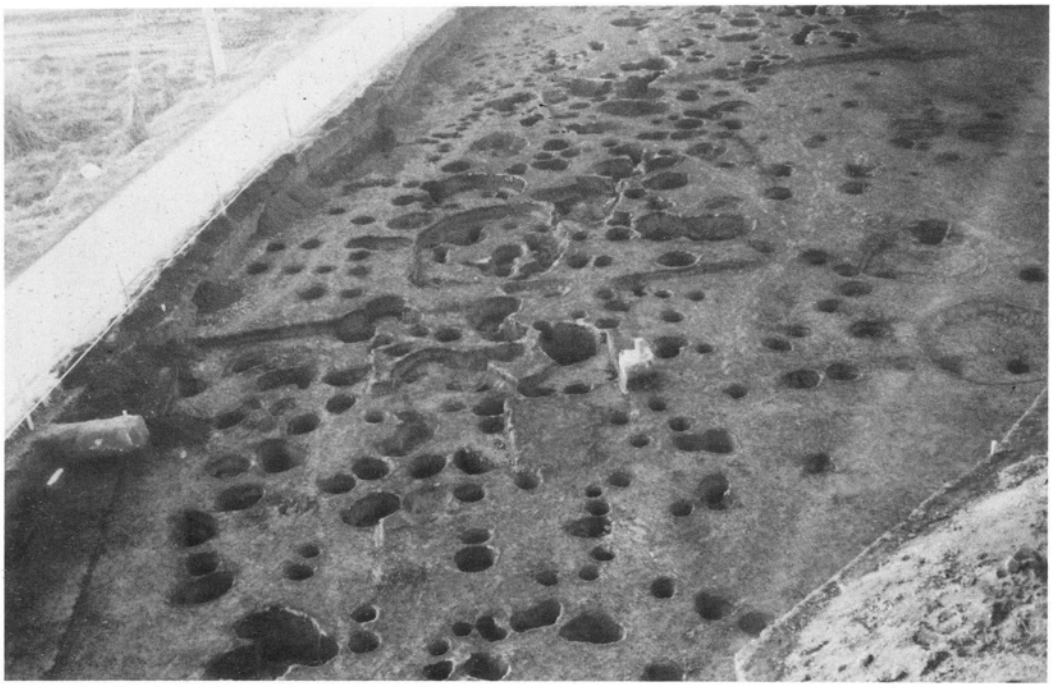
4，第4号土壙遺物出土状況

写真26　冬木Ｂ

1，冬木Ｂ貝塚全景

2，冬木Ｂ貝塚調査風景

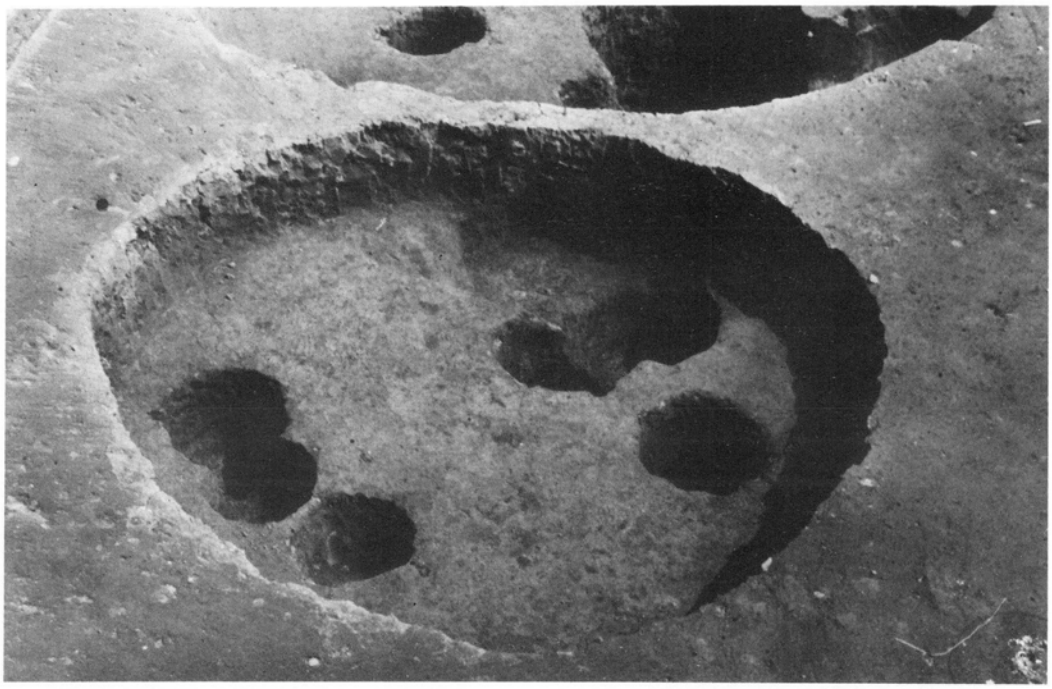
写真27　冬木B



1，冬木B貝塚遺構全景

2，冬木B貝塚C貝層分布状況

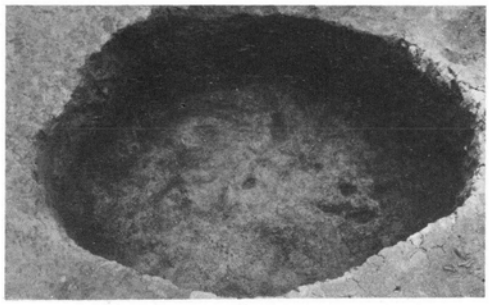
写真28　冬木B



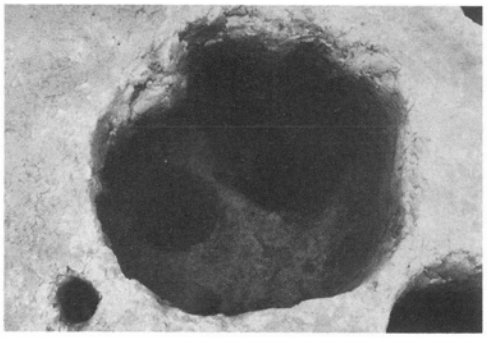
1，第1号住居址

2，第2号住居址

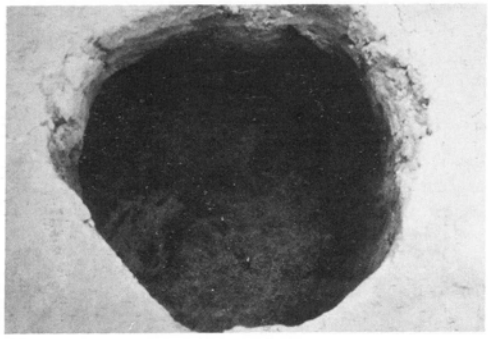
写真29　冬木B



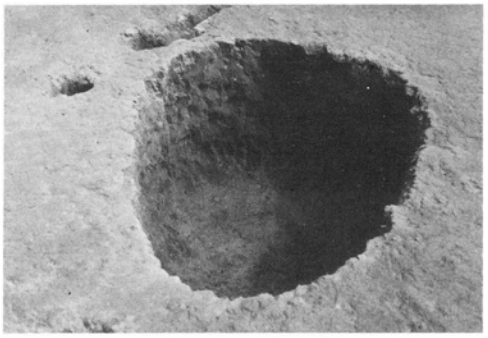
1，第3号土壙



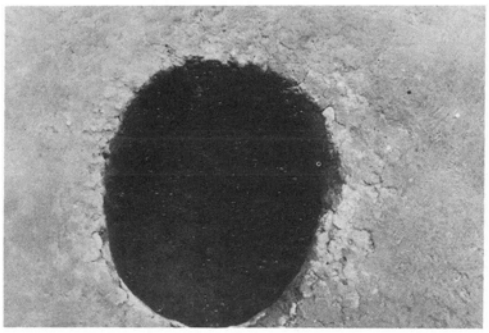
2，第4号土壙



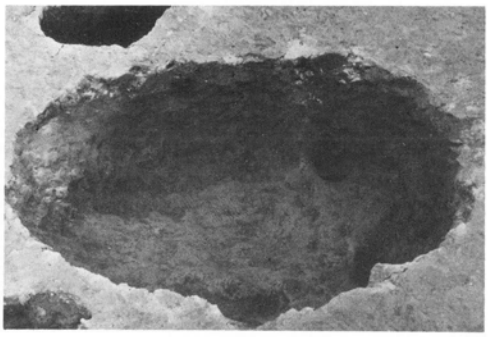
3，第5号土壙



4，第7号土壙



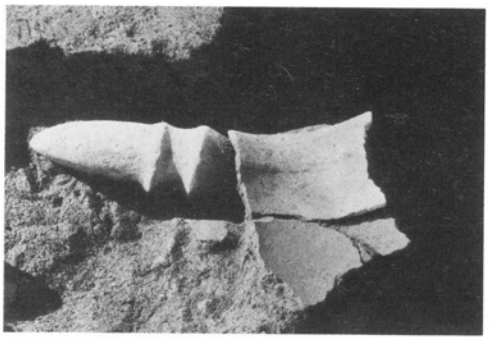
5，第11号土壙



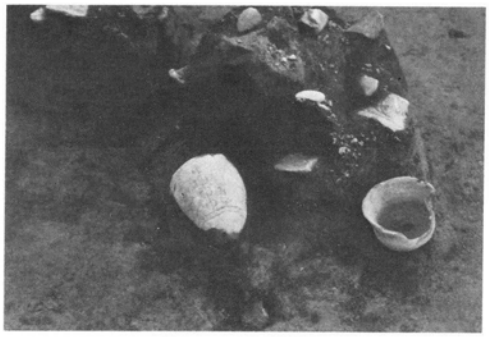
6，第15号土壙

写真30　冬木B

1，$B1b_9$ グリッド遺物出土状況

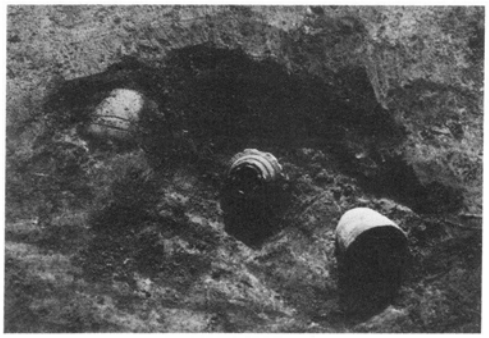


2，第52号土壙遺物出土状況



3，$A1h_7$ グリッド遺物出土状況

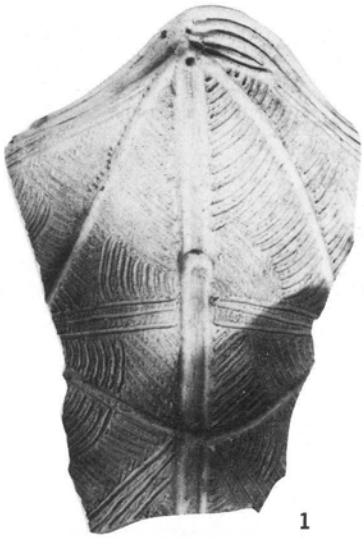
4，$A1i_9$ グリッド遺物出土状況



5，$A1i_7$ グリッド遺物出土状況

6，$B1b_8$ グリッド獣骨出土状況

写真31　冬木A



1

2

3

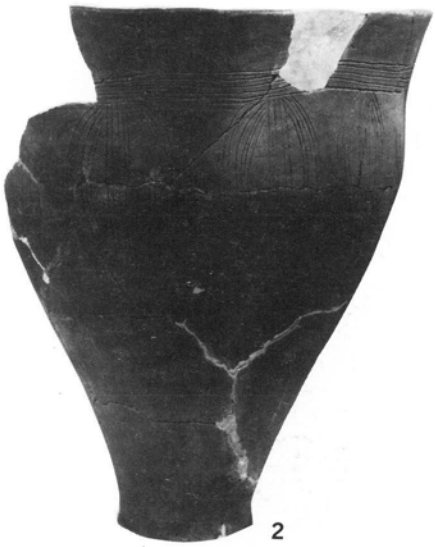
4

5

6

第26号住居址（1），第21号住居址（5），グリッド（2～4，6）出土遺物（S＝1/6）

1


2

3

4

5

第17号住居址（5），グリッド（1～4）出土遺物（S＝1/6）

1

2

3

4

5

第92号土壙（1），グリッド（2～5）出土遺物（S＝1/6）

写真34　冬木A

1

2

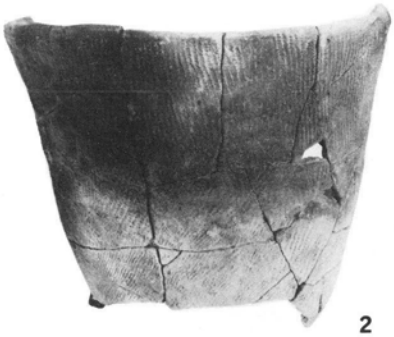
3

4

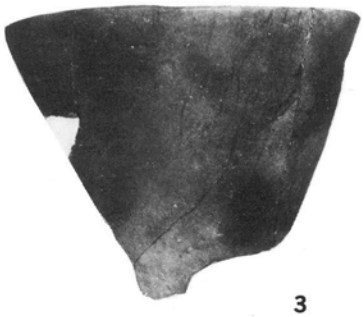
グリッド出土遺物（S＝½）

写真35　冬木A

1



2



3

4

5

6

グリッド出土遺物（S＝1/6）

写真36　冬木A

グリッド出土遺物（S＝ 1/4.5）

1

2

3

4

5

第119号土壙（1），グリッド（2～5）出土遺物（S＝1/4.5）

写真38　冬木A

1

2

3

グリッド出土遺物（S＝ 1/4.5）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

第10号住居址（7），グリッド（1～6，8，9）出土遺物（S＝⅓）

写真40　冬木A

1

2

3

4

5

第16号土壙（1），第129号土壙（3），第13号住居址（5），グリッド
（2，4）出土遺物（S＝½，3のみ1/1）

写真41　冬木A

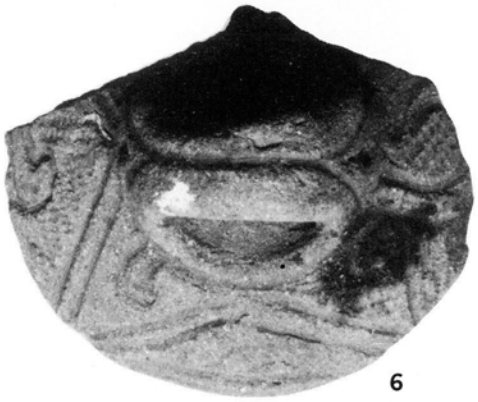
1

2

3

4

5

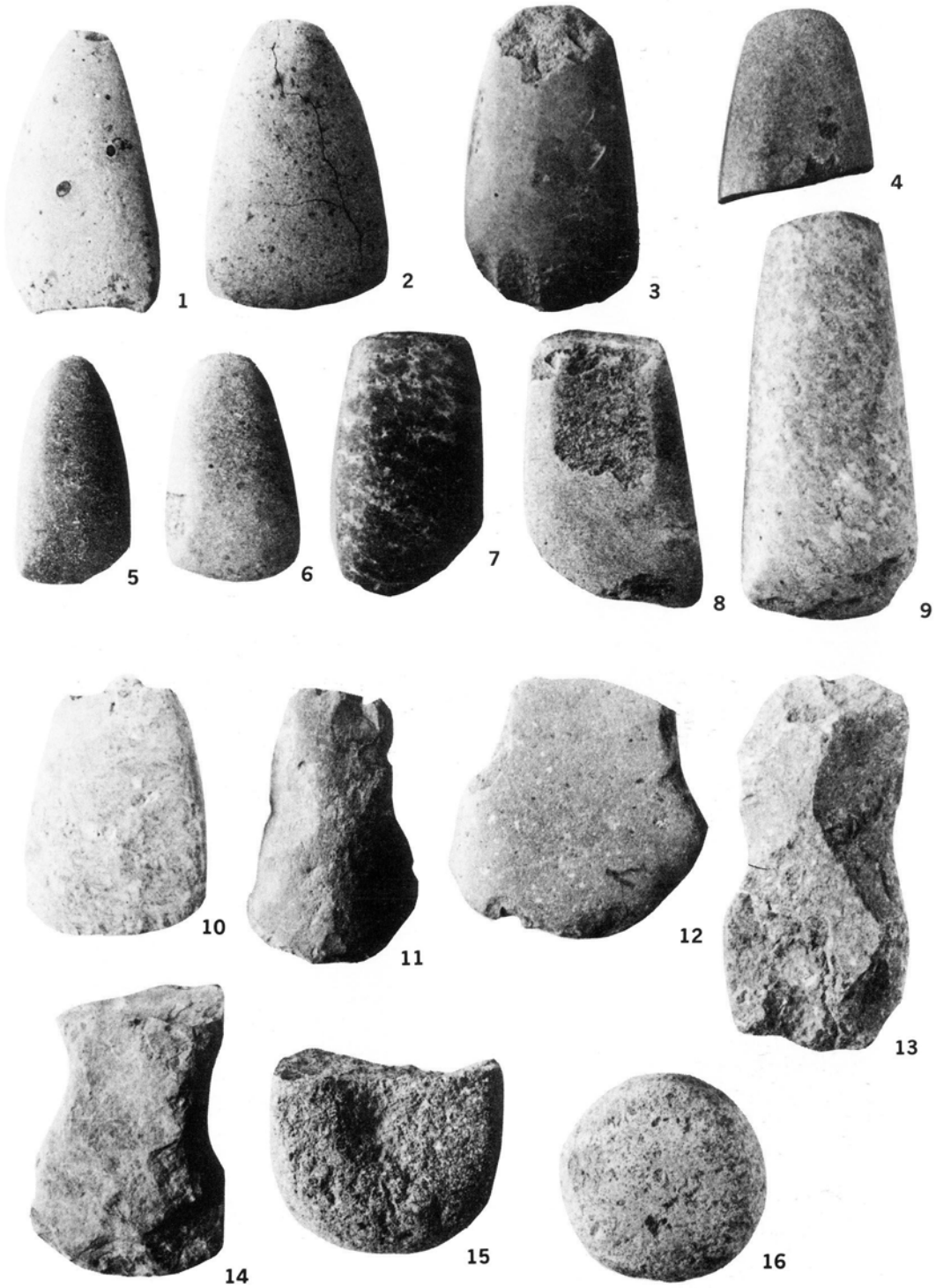

6

7

8

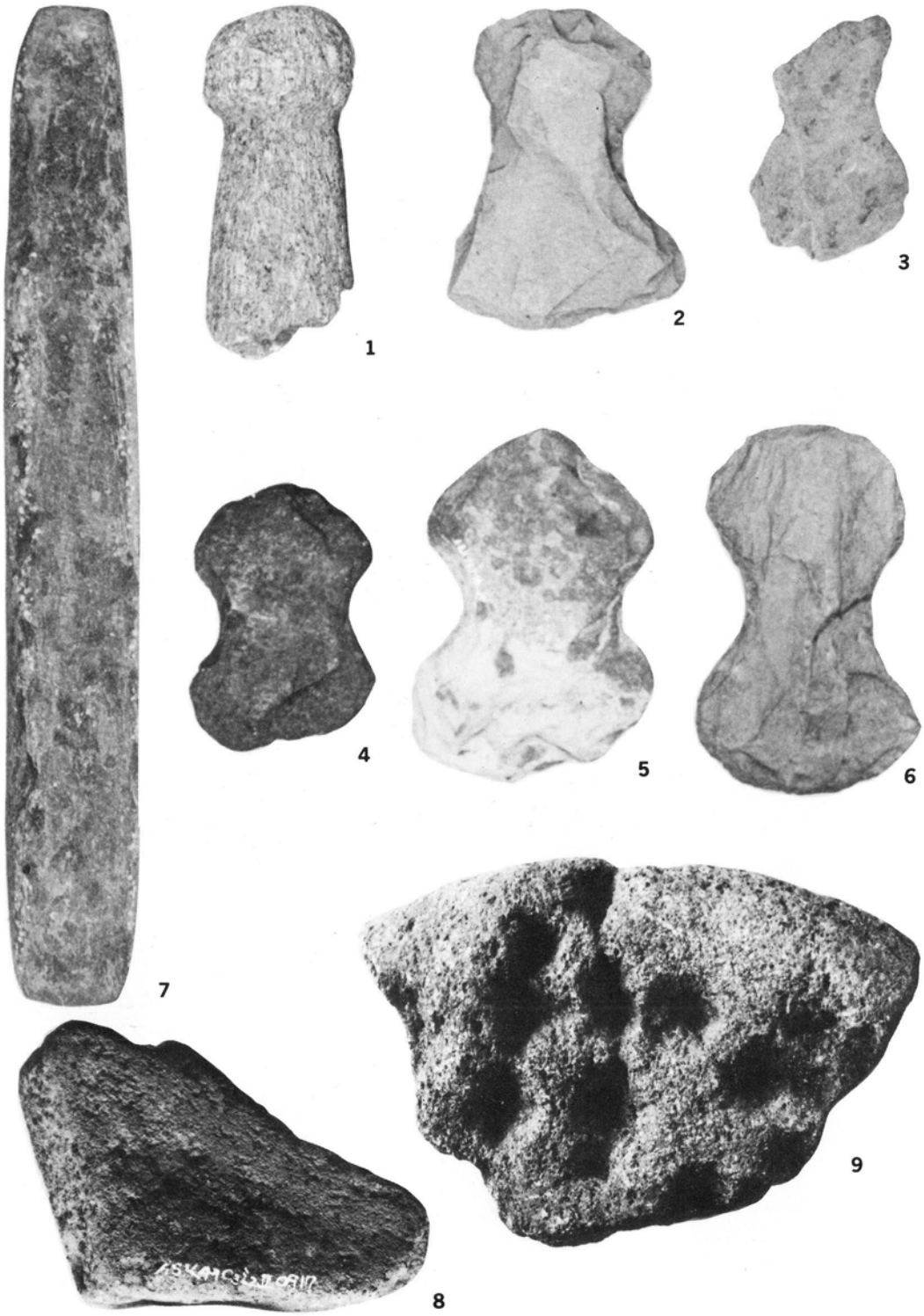
グリッド出土遺物（S＝ 1/1.5）

写真42　冬木A



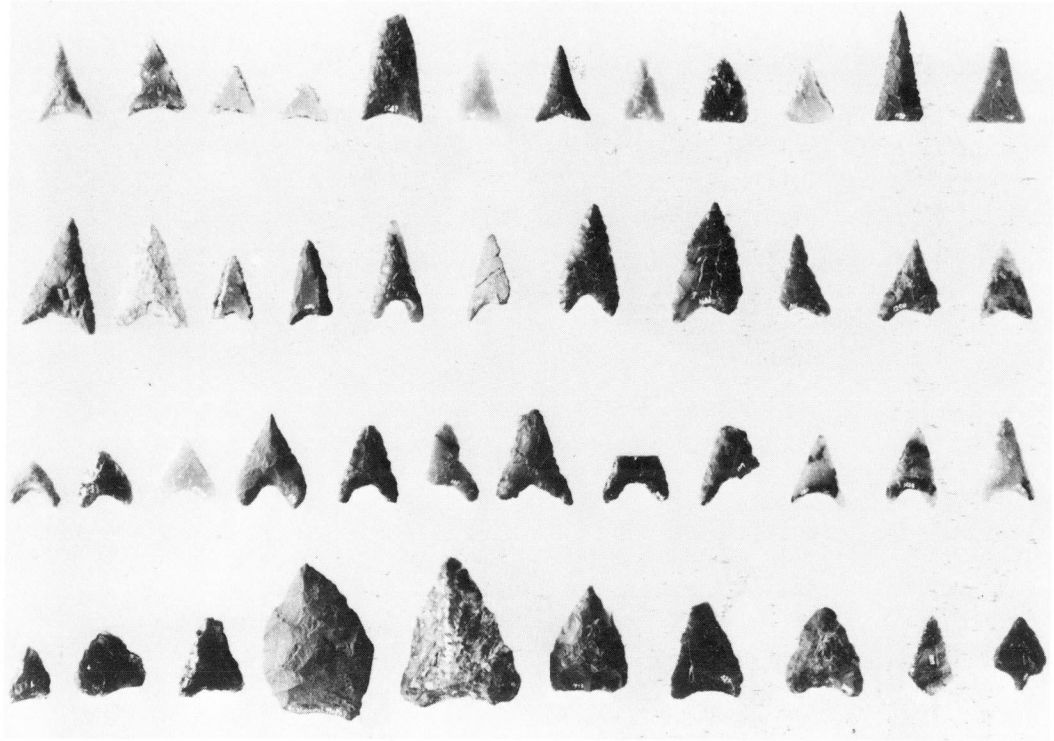
石斧・磨石（S＝½）

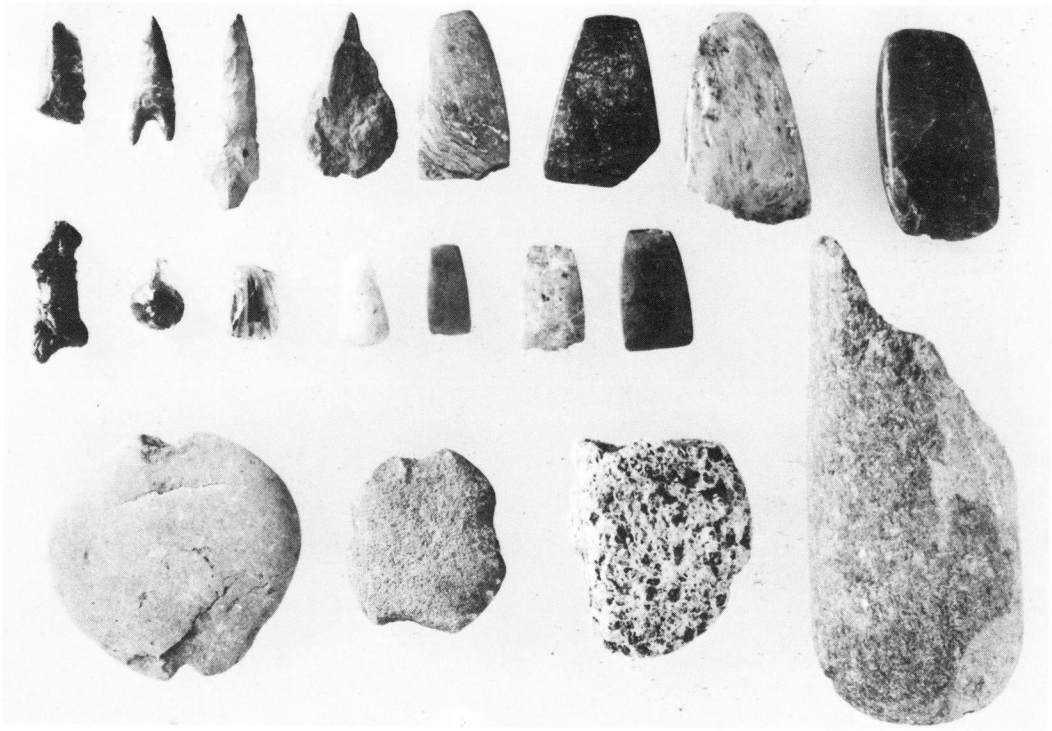
写真43　冬木A



石棒・石斧・石皿（S＝½）

写真44　冬木A





石鏃・石斧・石錘（S＝½）

写真45　冬木B

1

2

3

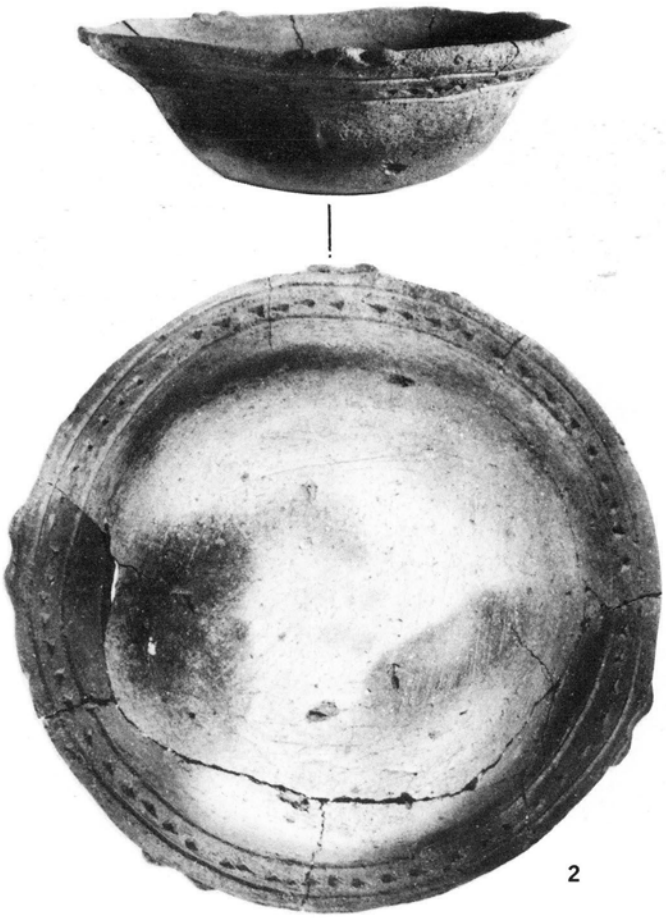
4

5

6

グリッド出土遺物（S＝½）

写真46　冬木B

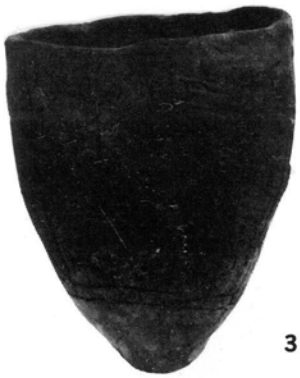


グリッド出土遺物（S＝½）

写真47　冬木B

1

2


3

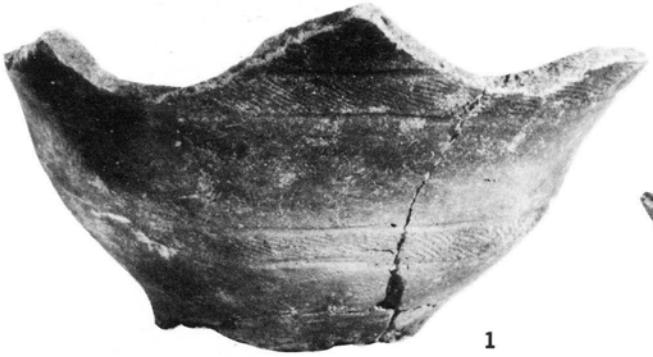
4

5

6

グリッド出土遺物（S＝⅓）

写真48　冬木B



1

2

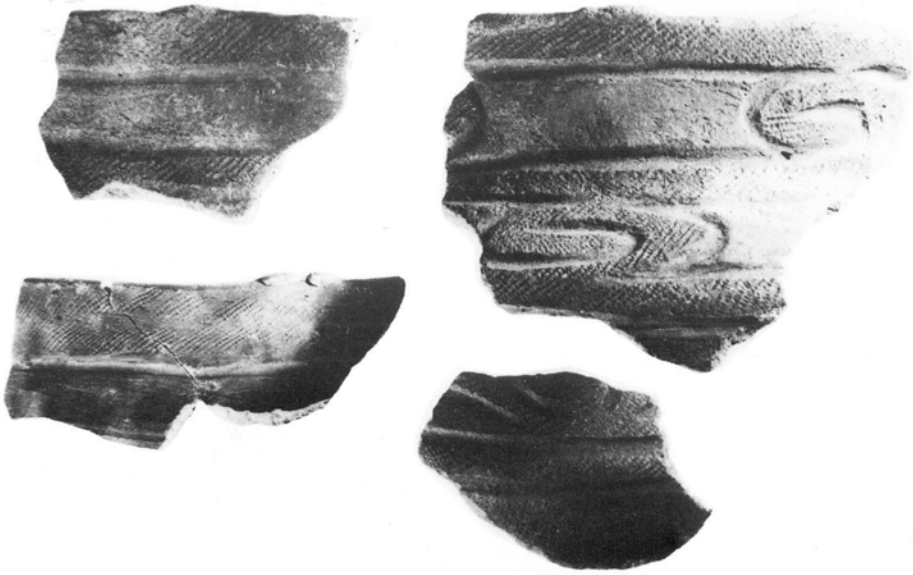
3

4

5

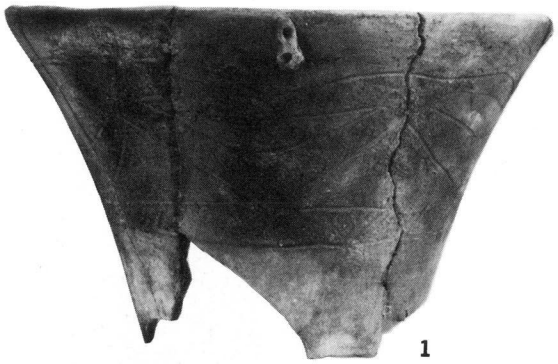
グリッド出土遺物（S＝½）

1

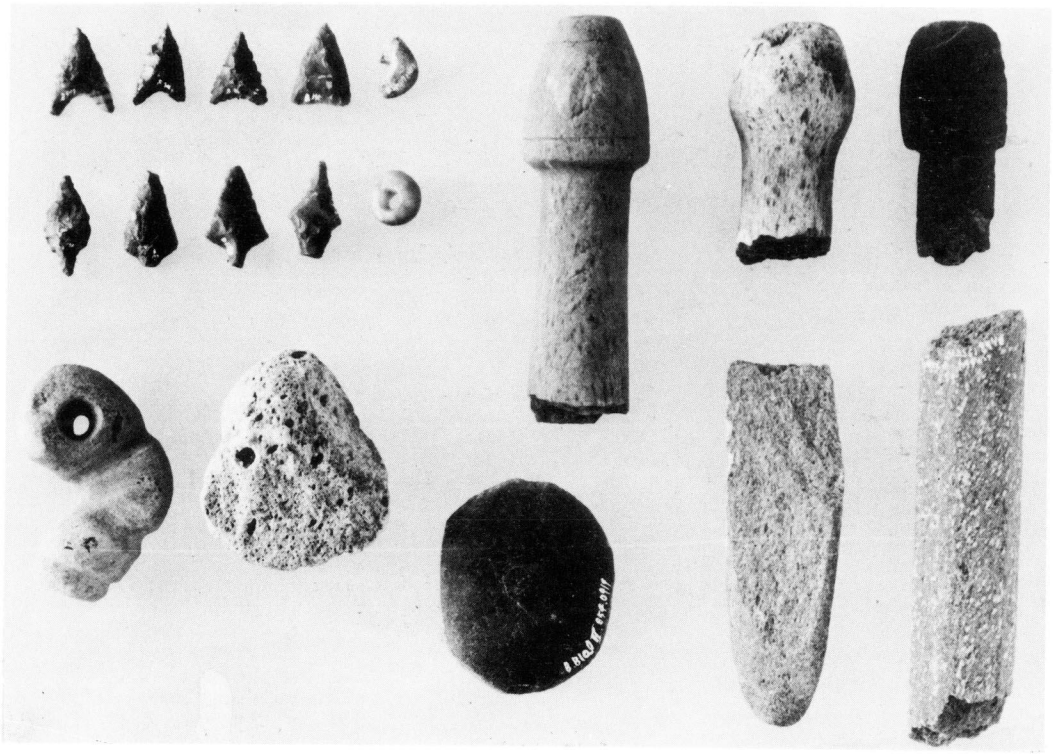


2

第56号土壙（2），グリッド（1）出土遺物（S＝⅓）



1，冬木Ｂグリッド出土遺物（１Ｓ＝⅓）（２Ｓ＝½）



2，冬木Ｂ石鏃・石製品（Ｓ＝½）

写真51　冬木B

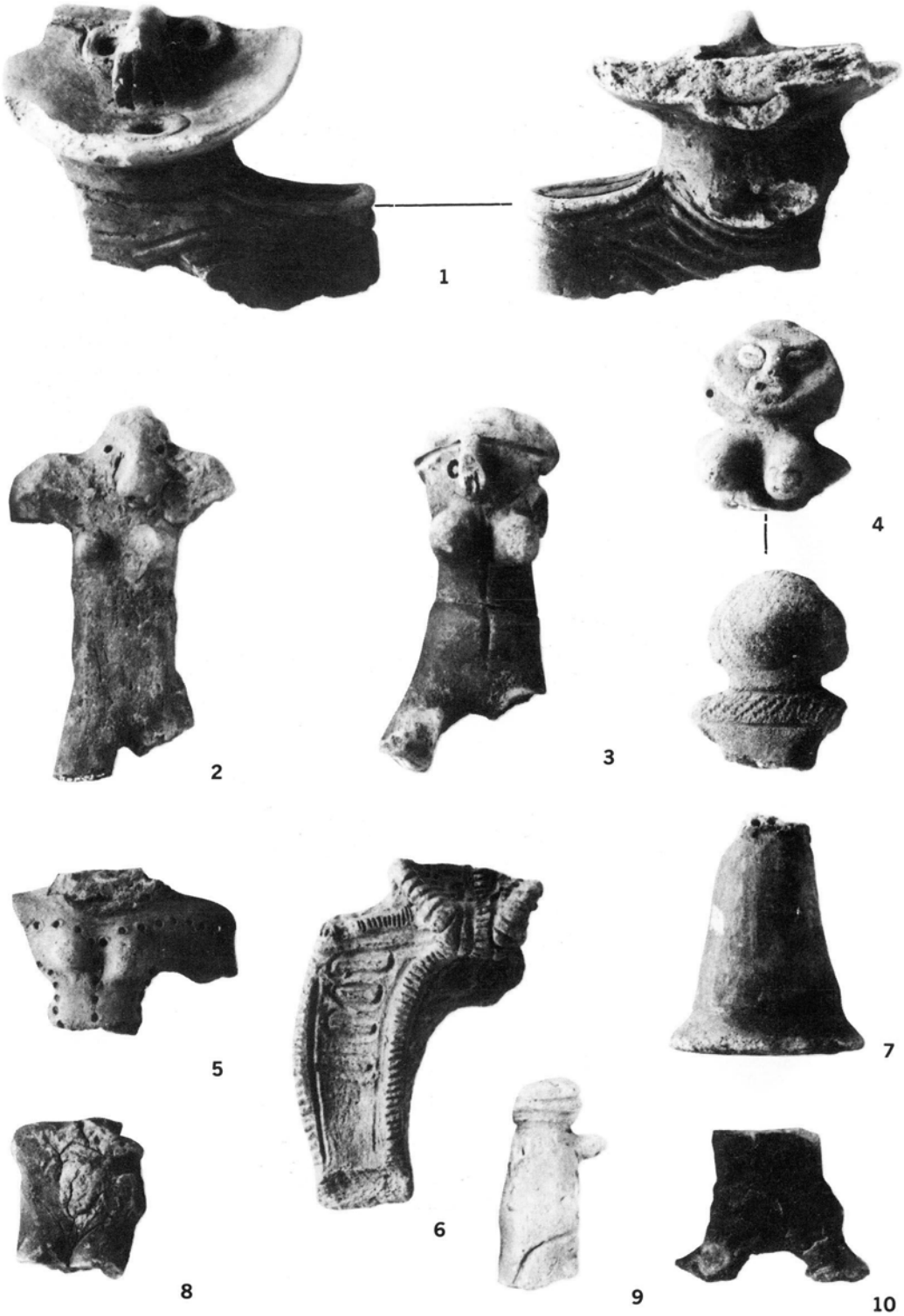
1

2

3

4

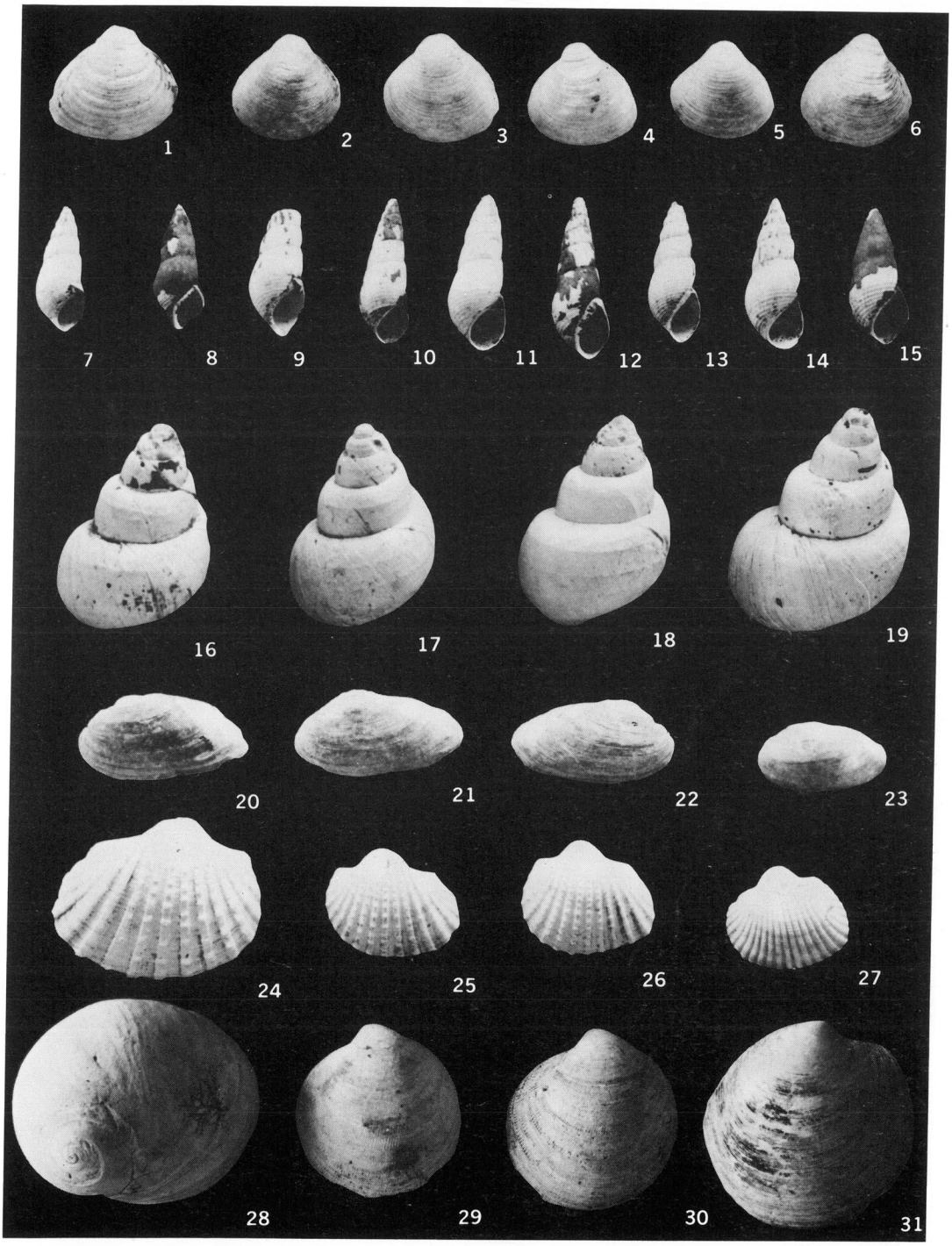
石皿・石棒・独鈷石（S＝½）



冬木A・B貝塚出土土偶（S＝½）

冬木A・B貝塚出土土板・有孔円板・耳栓（S＝½）

写真54

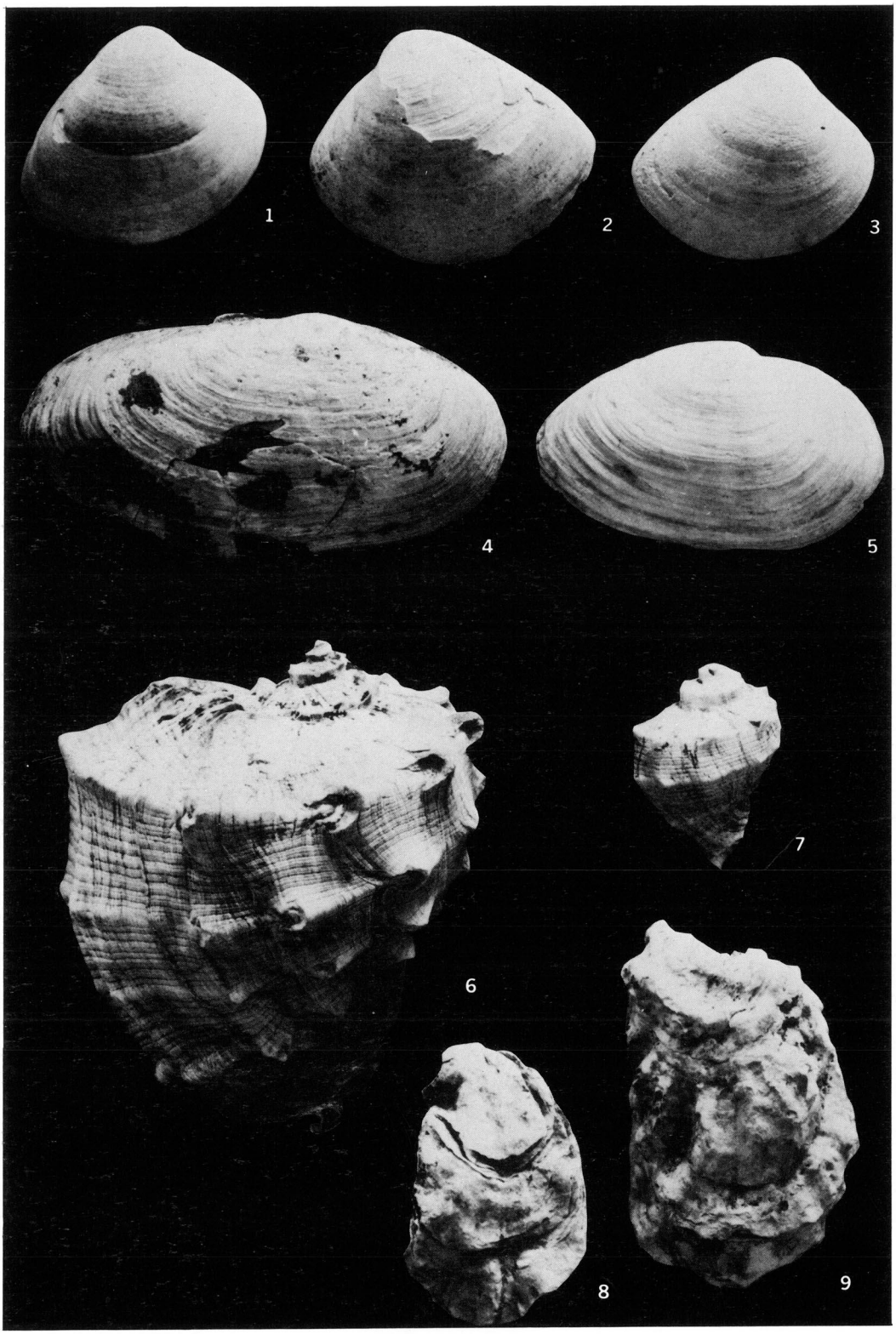


1～6ヤマトシジミ，7～15カワニナ　16～19オオタニシ，20～23イシガイ

24～26ハイガイ，27サルボウガイ　28ツメタガイ，29・30オキシジミ，31カガミガイ（S＝½）

冬木A出土貝類

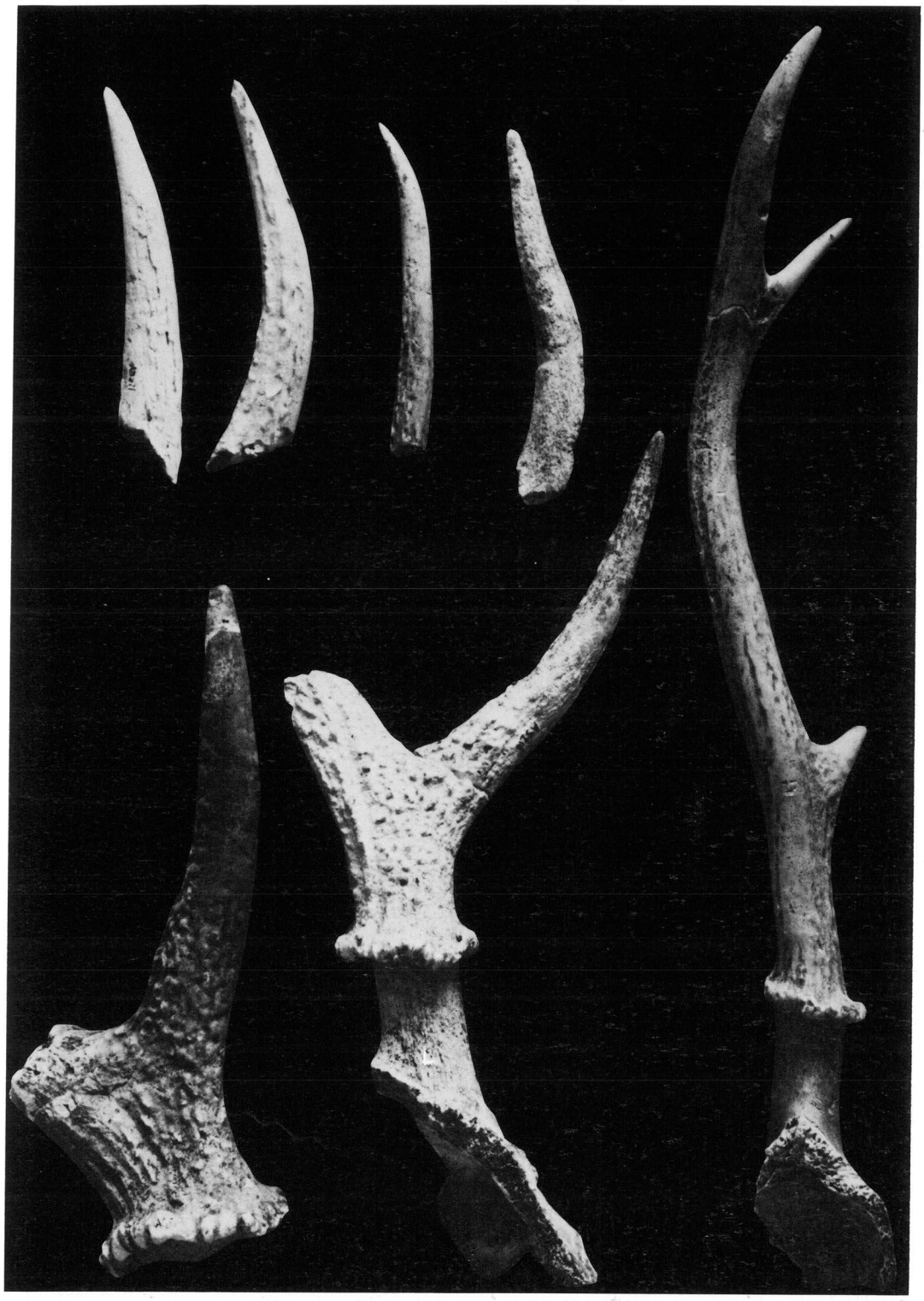
写真55



冬木A出土貝類

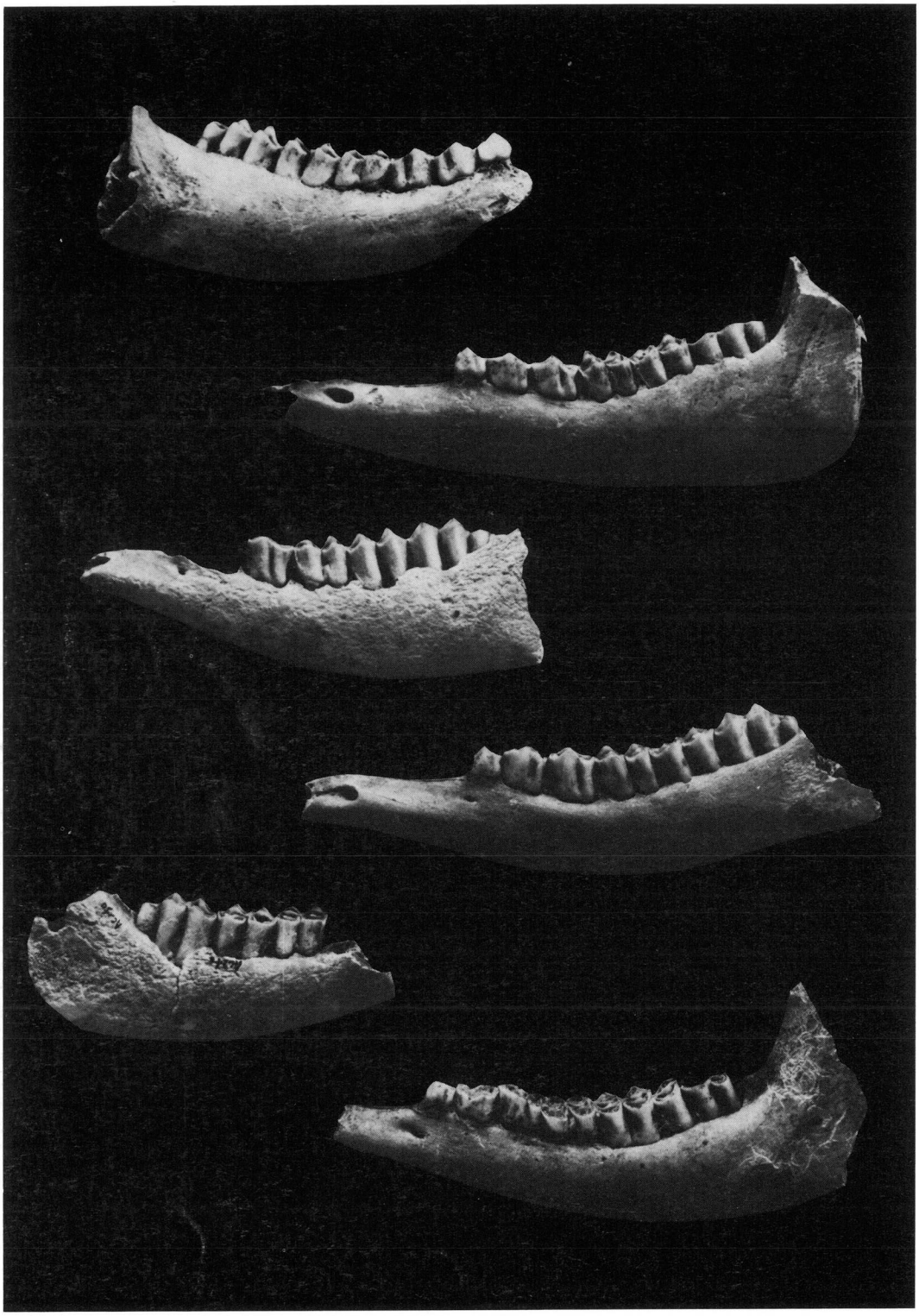
1～3チョウセンハマグリ，4・5オオノガイ
6・7アカニシ，8・9マガキ（S＝½）

写真56

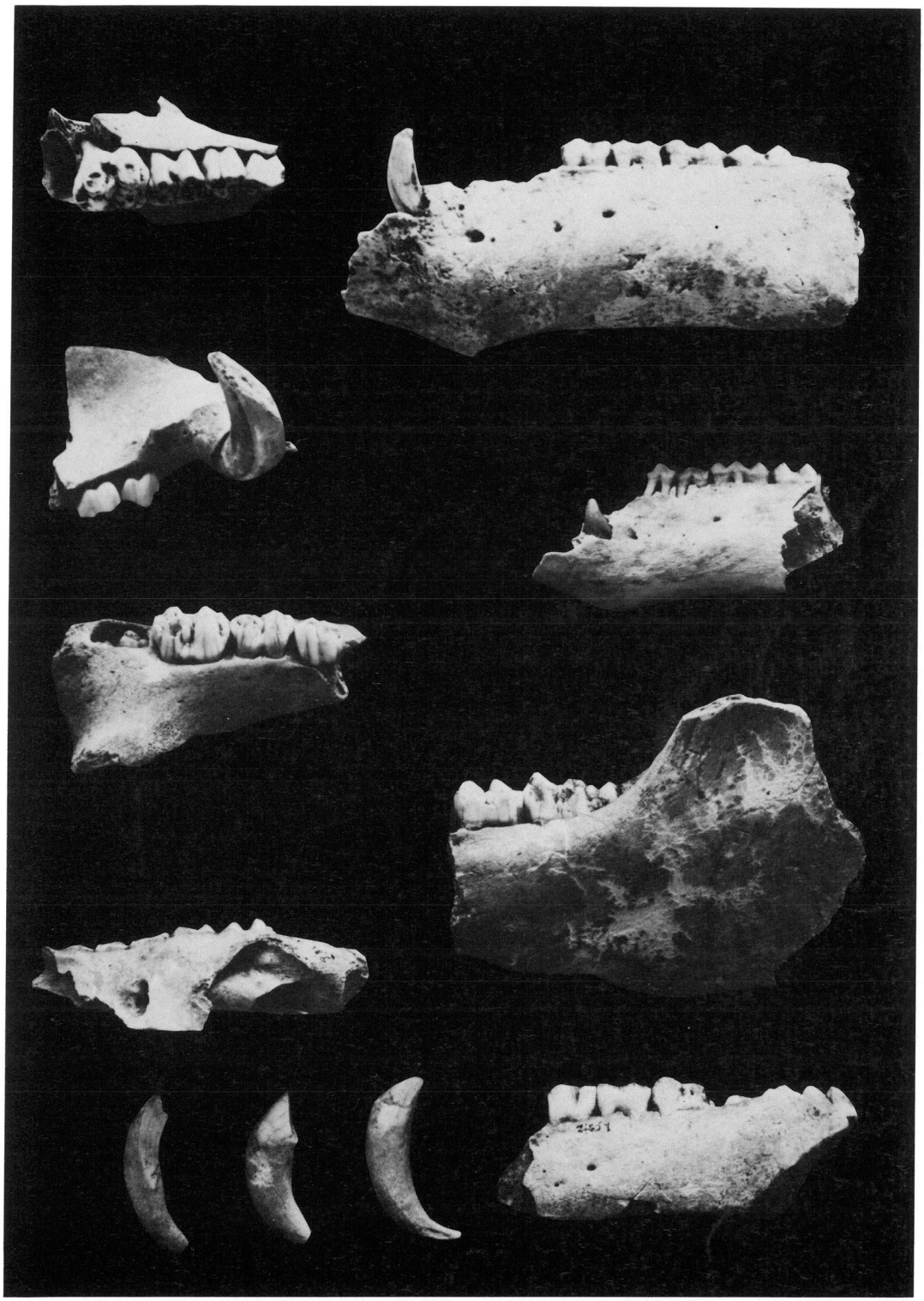


冬木A出土鹿角（S＝½）

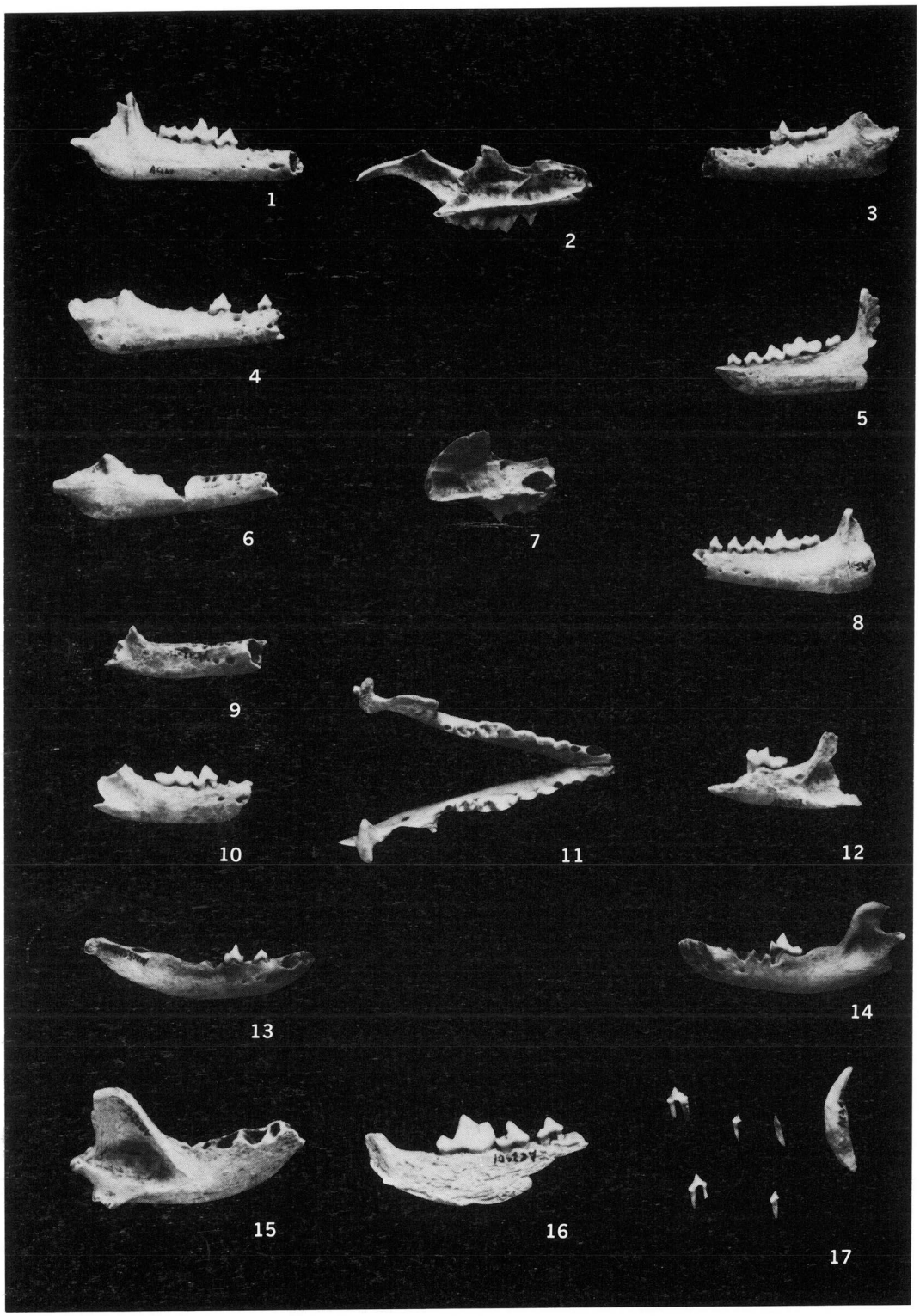
写真57



冬木A出土獣骨（シカ）（S＝½）

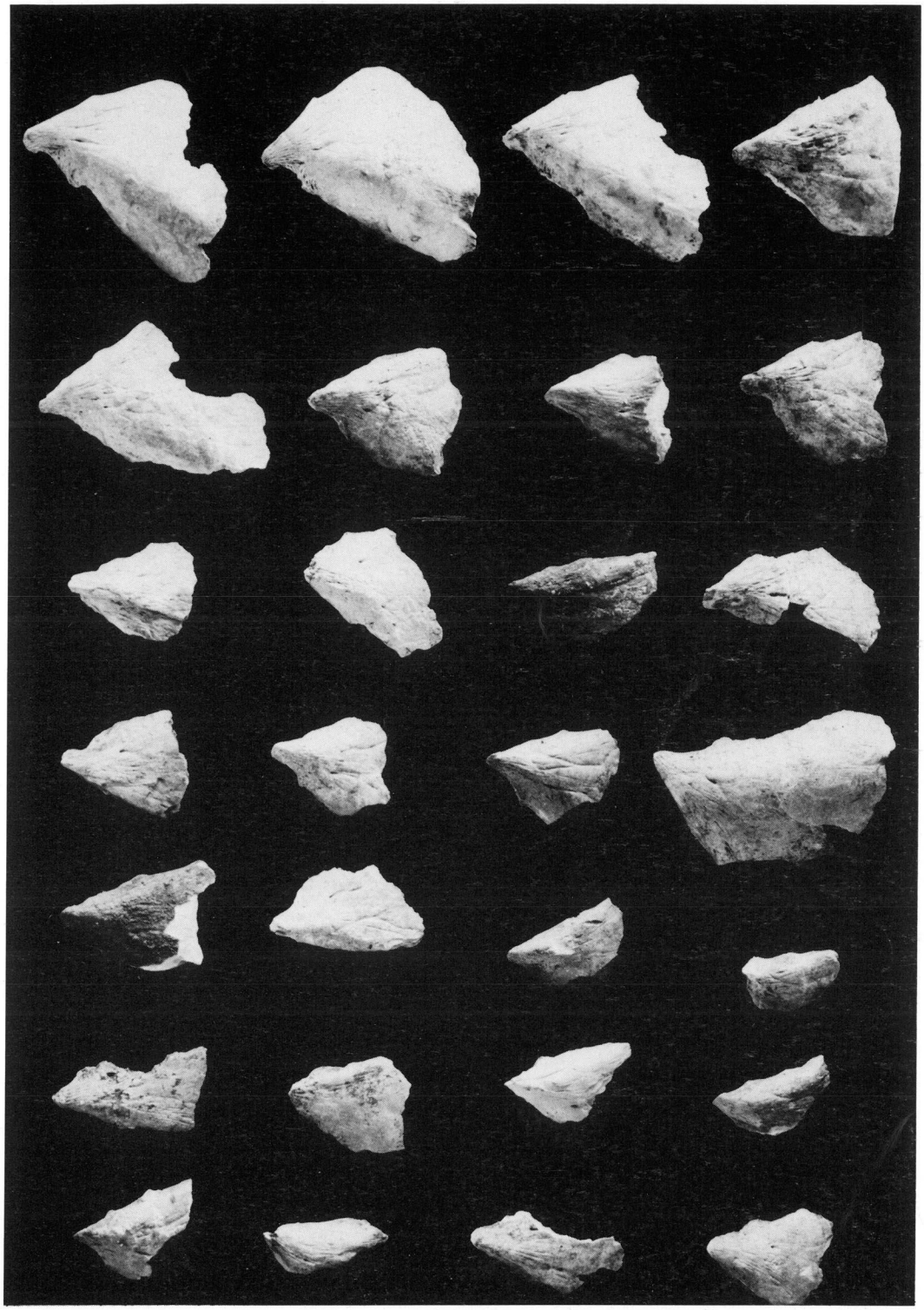


冬木Ａ出土獣骨（イノシシ）（Ｓ＝½）



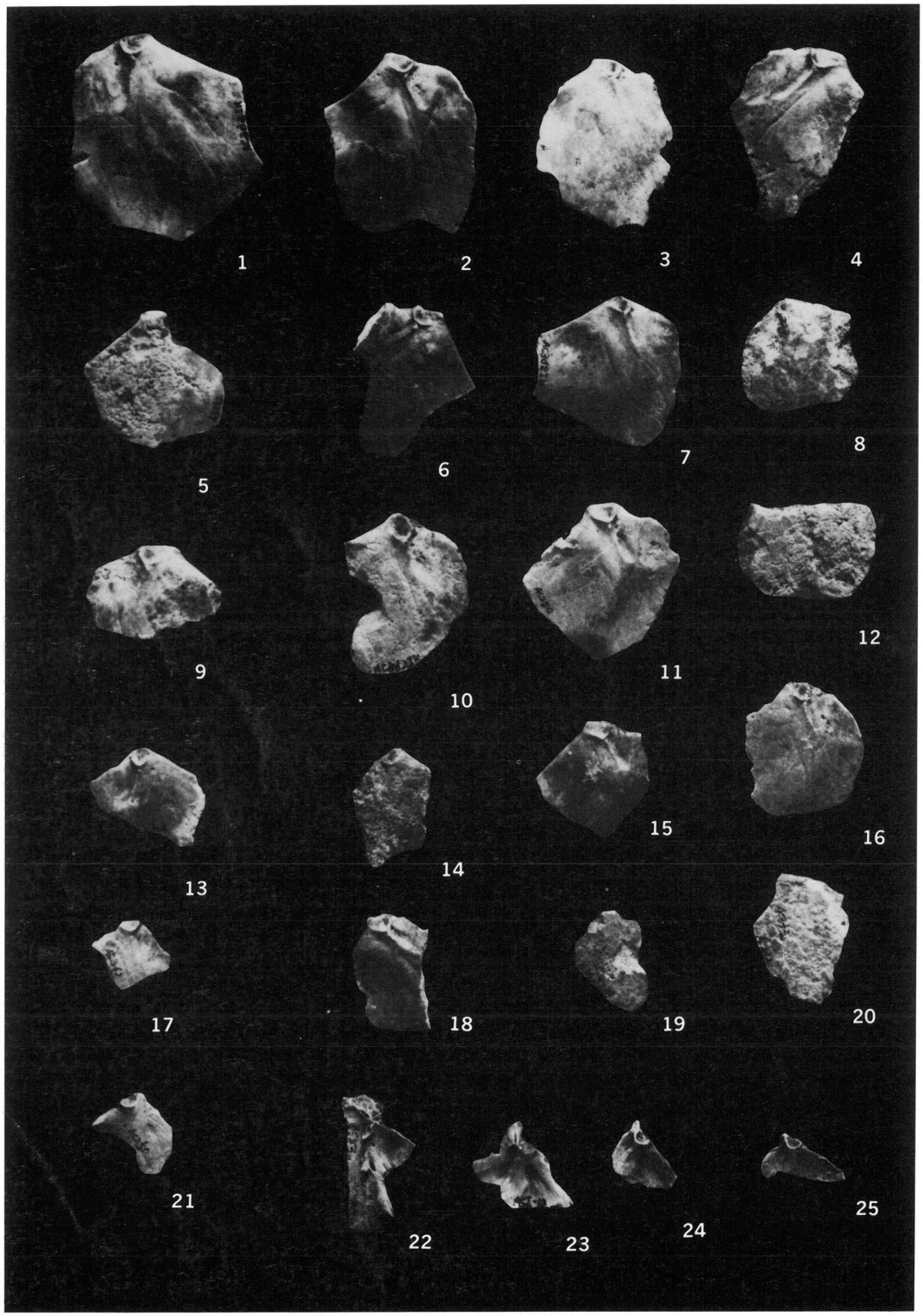
冬木A出土獣骨類　1～6・8・9・11タヌキ，10テン　7・12～17イヌ（S＝½）

写真60



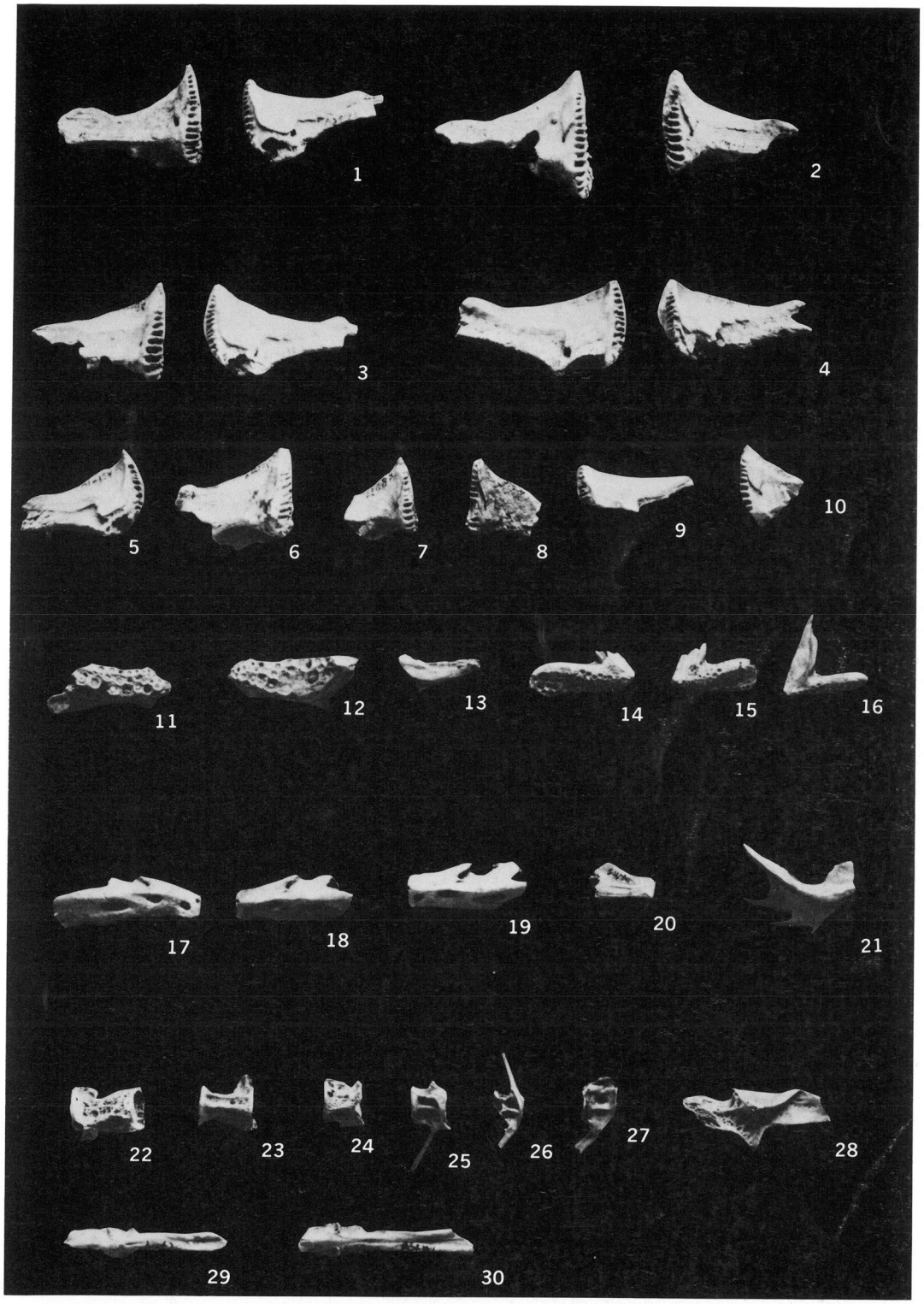
冬木Ａ出土魚骨（ボラ）（Ｓ＝½）

写真61



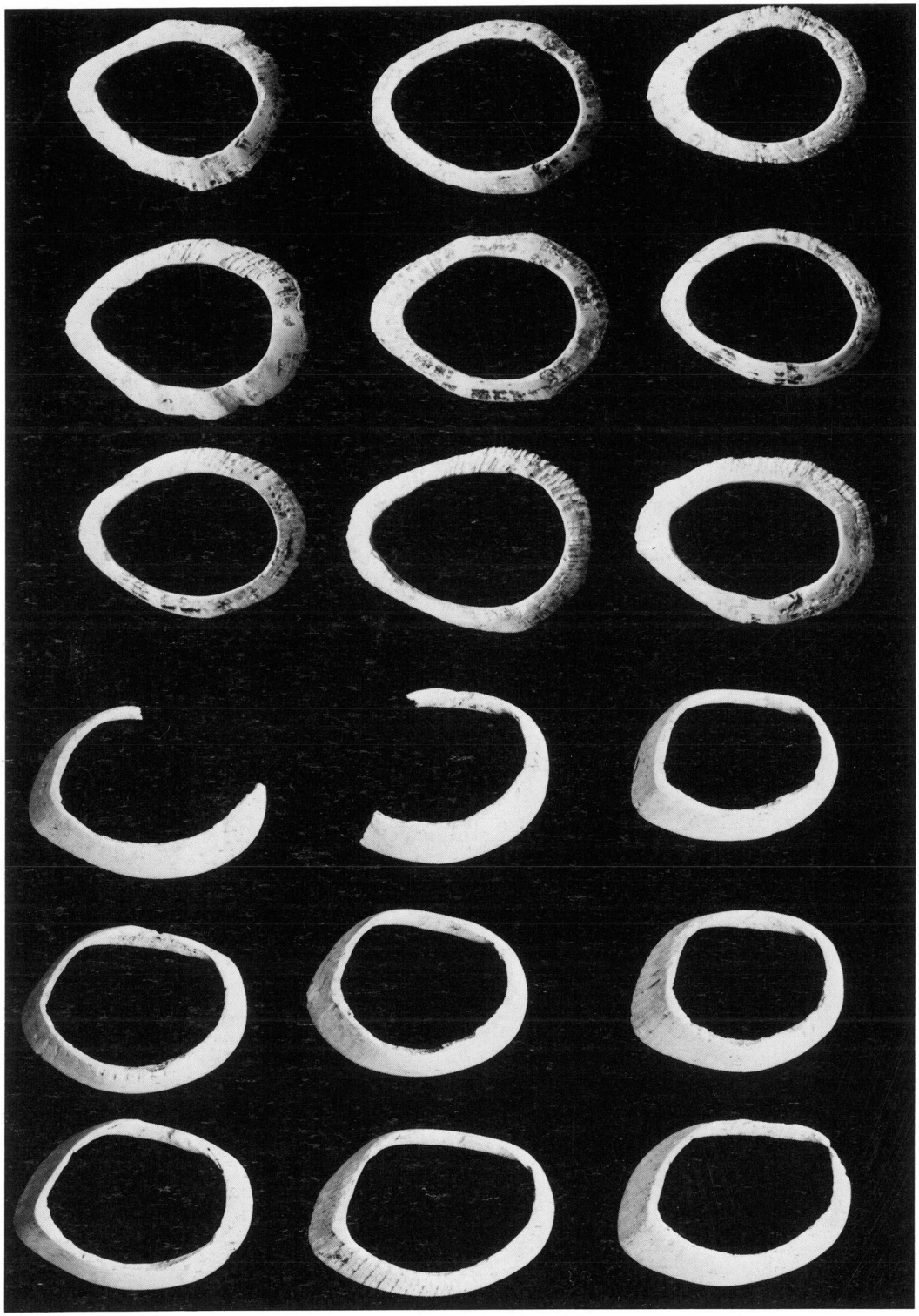
冬木Ａ出土魚骨類　１～20スズキ鰓蓋骨（Ｓ＝½）

写真62

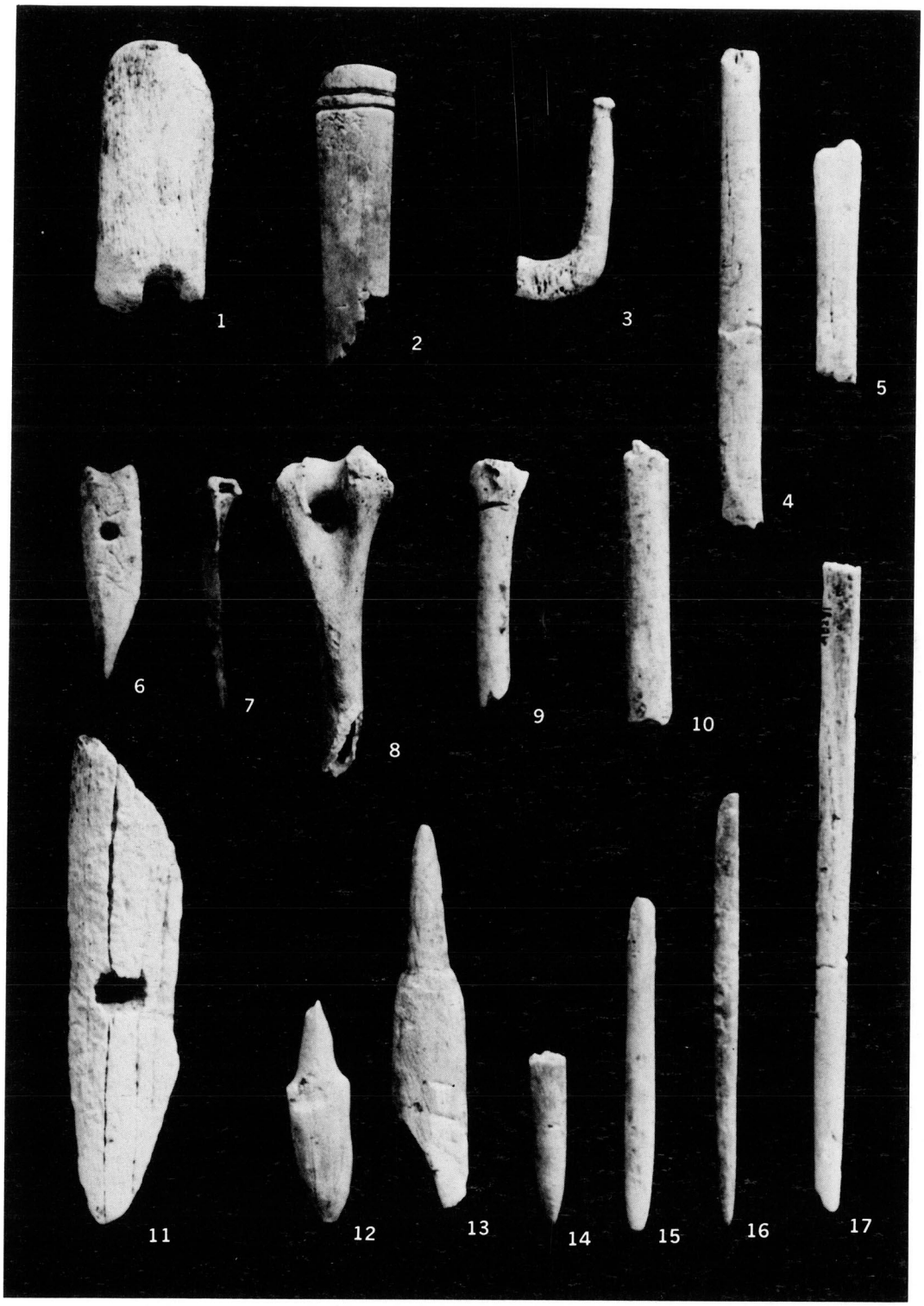


冬木Ａ出土魚骨類　　1～10フグ，11・12・14～16クロダイ
13マダイ，17～21スズキ，25～27タイ（Ｓ＝½）

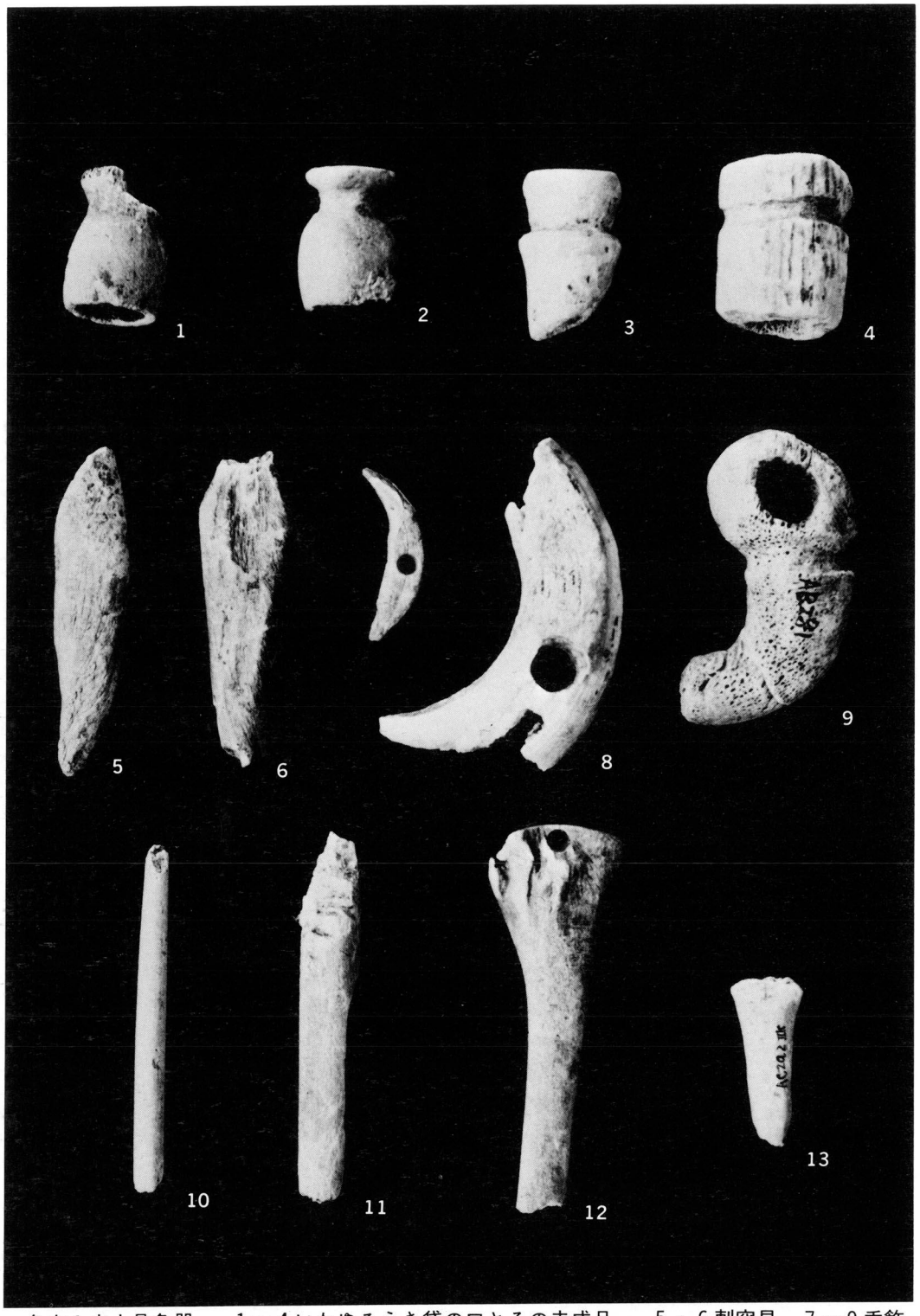
写真63



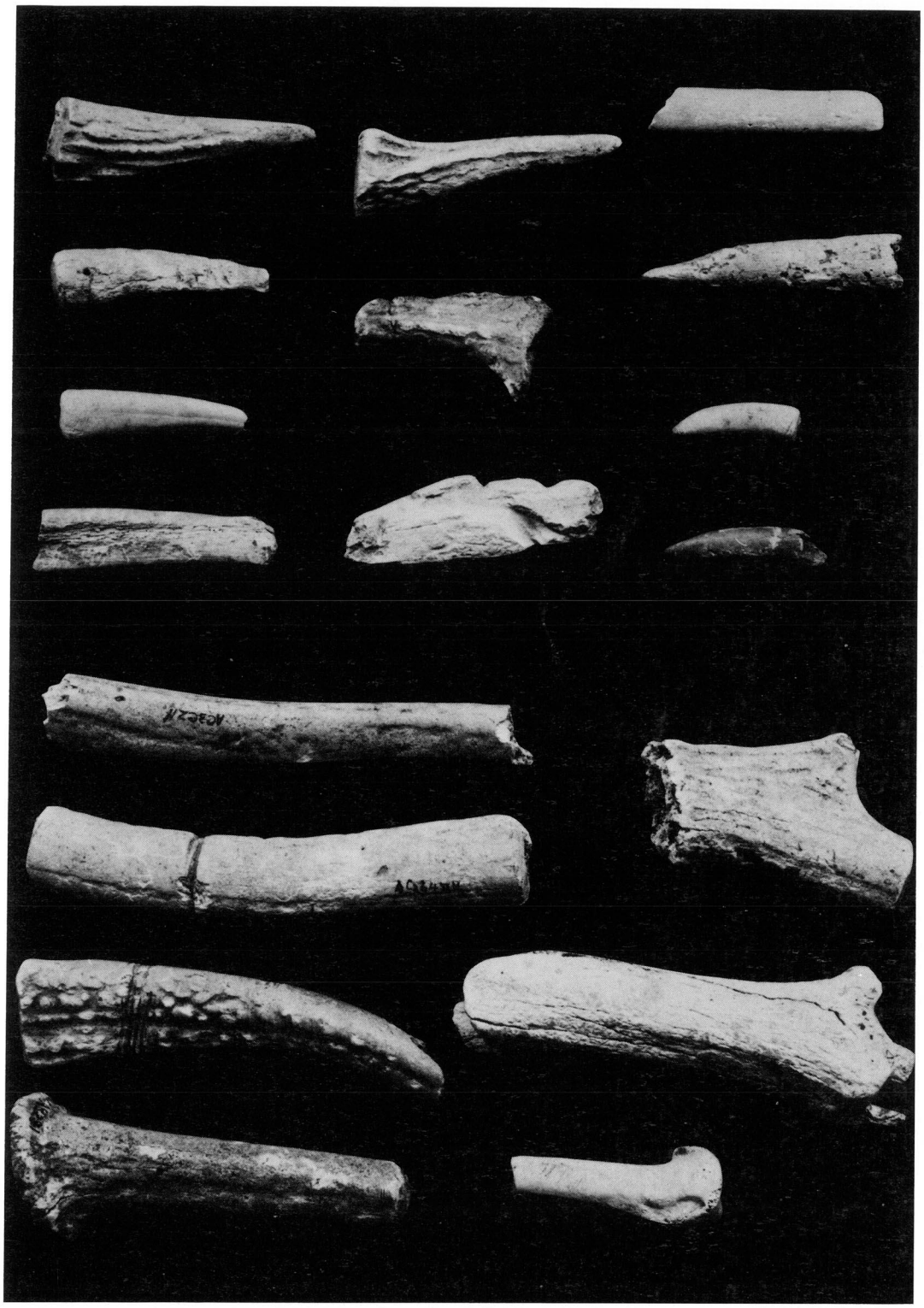
冬木A出土貝輪（S＝½）



冬木A出土骨角器　1・11装身具，2ヘラ状製品，3釣針　4・5・10・14～17針，6不明（装身具か？）　7～9未成品，12・13鏃（S＝½）

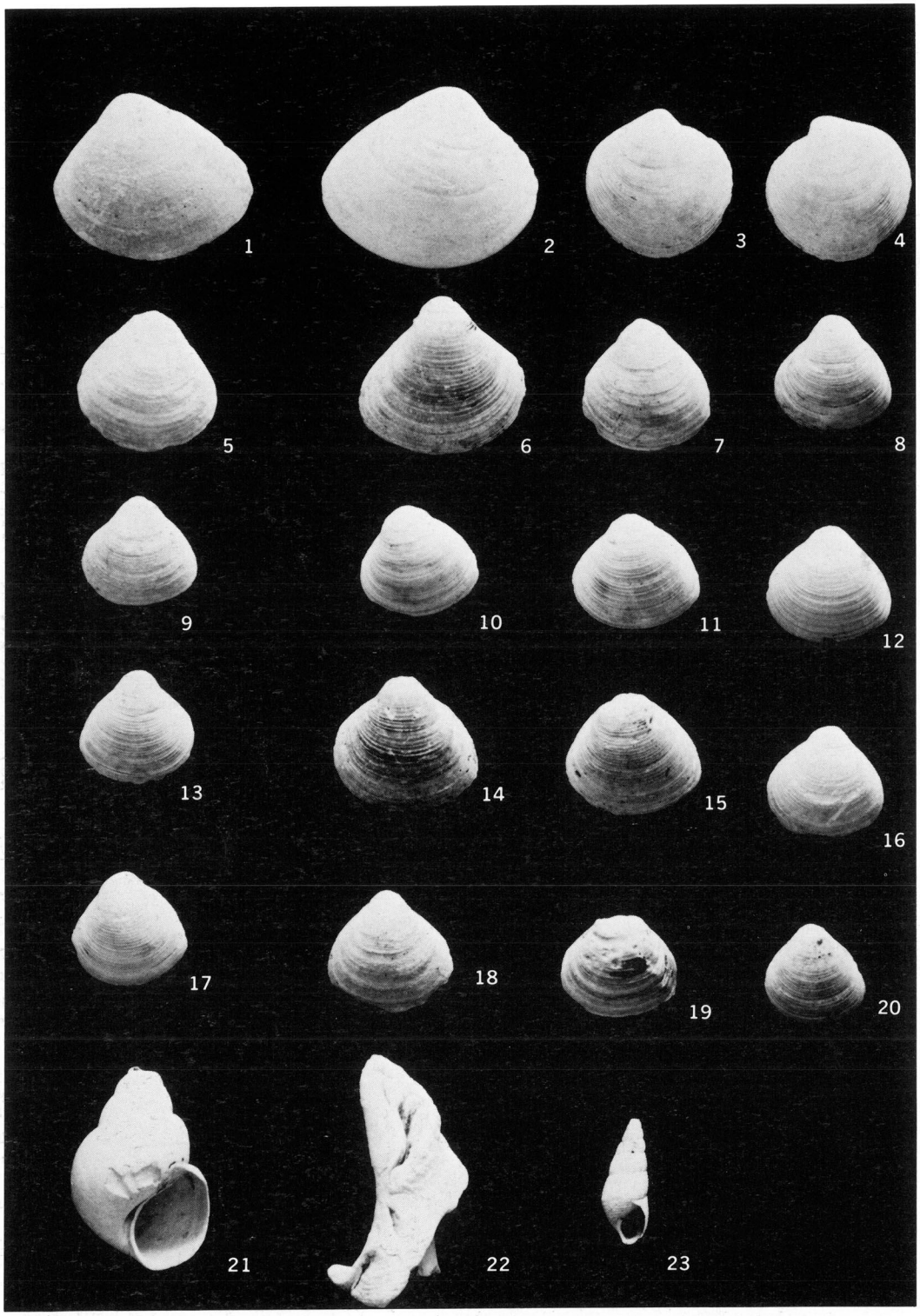


冬木Ａ出土骨角器　1～4いわゆるうき袋の口とその未成品　5・6刺突具，7～9垂飾，10針　11・12ヘラ状製品，13鏃（Ｓ＝½）

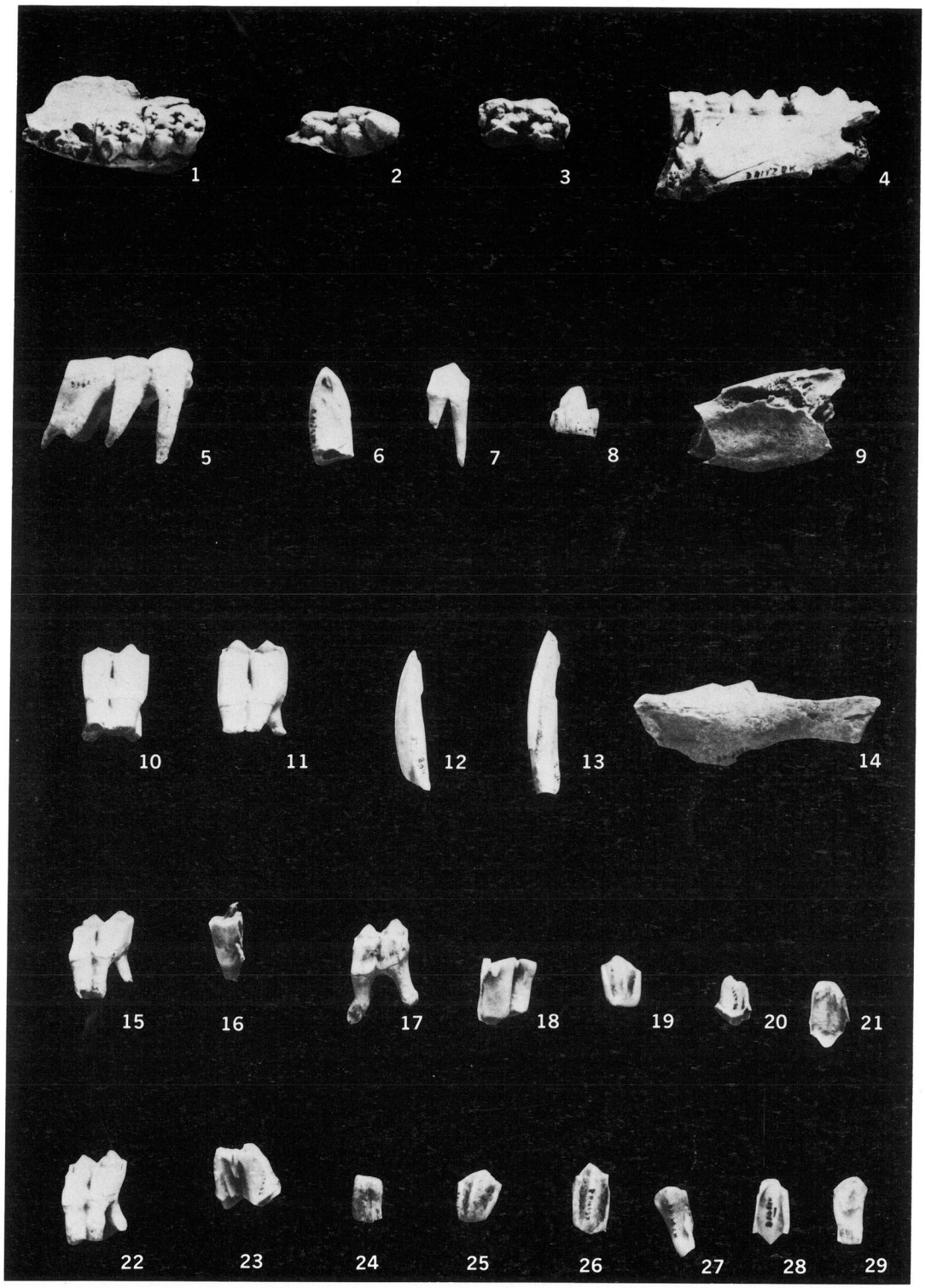


冬木Ａ出土切断痕を有する骨・角（Ｓ＝½）

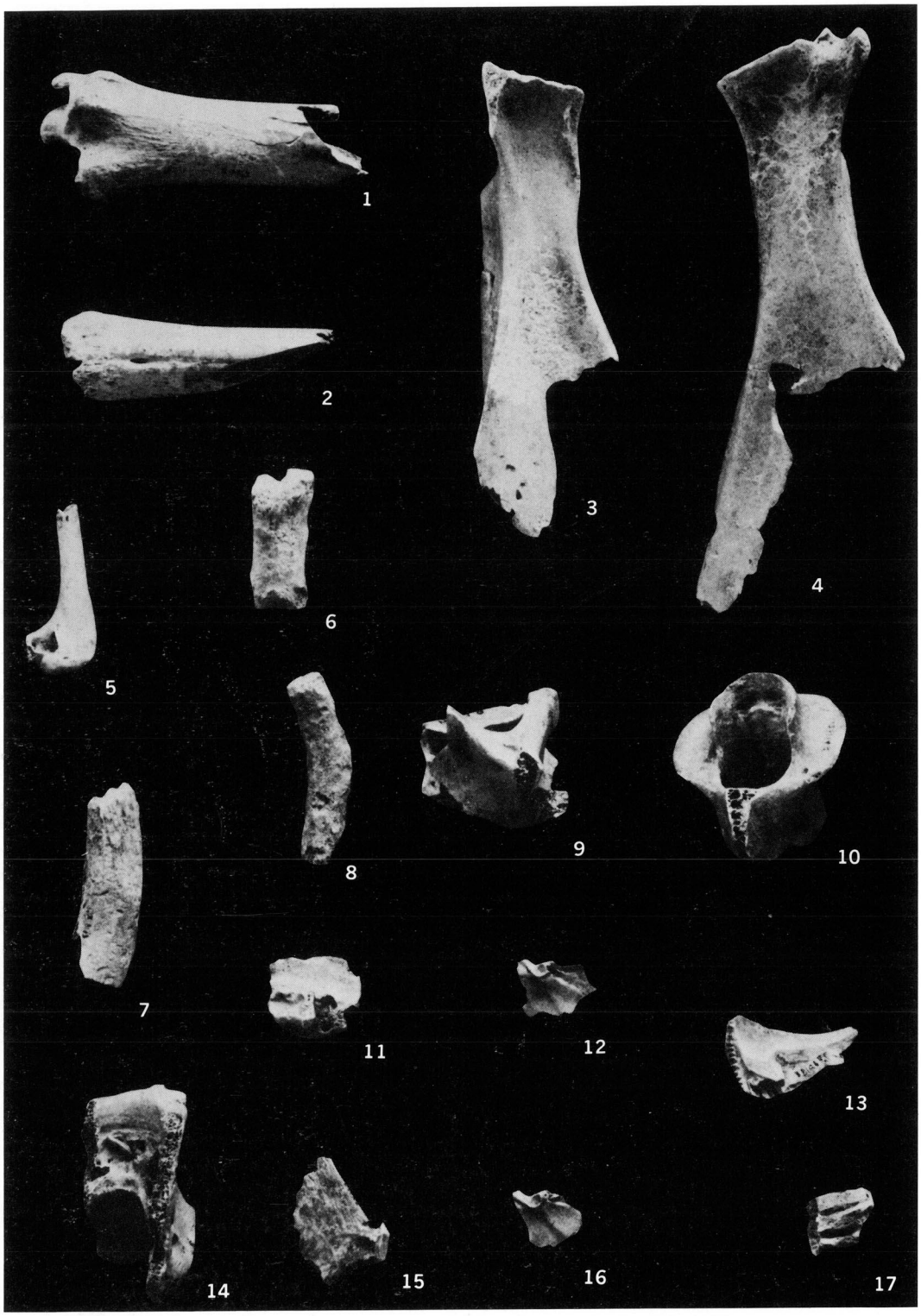
写真67



冬木B出土貝類　1・2チョウセンハマグリ，3・4オキシジミ　5～20ヤマトシジミ，21オオタニシ　22アカニシ殻軸，23カワニナ（S＝½）



冬木Ｂ出土獣骨　　1～9イノシシ，10～29シカ（S＝½）



冬木B出土獣・魚骨　1～4・6～10シカ，11イノシシ，13フグ（S＝½）

別冊

冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動

赤沢　威　東京大学総合研究資料館

小宮　孟　千葉県文化財センター

1981

財団法人　茨城県教育財団

本論は冬木貝塚産魚骨の種同定結果を報告し，その先史学上の意味を検討することにある。本論は次の5章で構成されている。第1章は貝塚産魚骨の同定結果で，魚種の組成・種間の量的な組み合わせの特徴を検討することにある。第2章は，第1章で示す結果を他遺跡で報告されている同種の結果と比較することである。それによって冬木貝塚の魚種組成の特徴を解釈する手掛りがえられる。第3章は縄文時代の漁撈具の特徴を用いて縄文遺跡を分類する。この結果は魚種の組成にもとづいて特徴づけられる縄文貝塚を縄文人の漁撈適応という面から検討する手掛りとなる。第4章は以上の議論を総合して冬木貝塚人の漁撈適応を検討することである。最後に上記の研究の基礎となる冬木貝塚産魚骨の同定の結果を記載する。

第1章　分析標本と同定結果

今回扱う資料は，冬木A貝塚・第IIK層出土品である。標本のサンプリングは発掘と平行しておこなわれ，発掘時に検出されたものである。従って，すでにしばしば指摘されているように微小な標本が検出されていない可能性が高い。この問題点を考慮して，SK—87(第87号土壙)の堆積物で試みられた水洗選別法によって検出された標本が追加分析されている。

第1表は今回分析した第IIK層出土標本の同定結果を示す（同定の基準は第5章に記載されている)。同定部位を特定できないために魚種組成を個体数にもとづいて示すことはできない。しかし，この結果によって魚種の組成に関する一般的傾向を知ることはできる。

出現頻度の高い魚種は，フナ属・ボラ科・スズキ属・トラフグ類である。同定部位を考慮して個体数レベルでの比較を試みると，椎骨数が高い値を示したフナ属の出現頻度を他のボラ科・スズキ属・トラフグ類の頻度と同一レベルとみなすことはできない。そして，フナ属を除くと，ボラ科の出現頻度が最も高く，次いでトラフグ類・スズキ属の頻度が高いという傾向が認められる。

以上4魚種の出現頻度は，相互の割合は別として，残る多数の同定魚種に比べて有意に高い。そして，クロダイ属の頻度がやや高い点を除くと，他の魚種はほとんど無視できる程度にしか出現していないことになる。

すでにのべたように，サンプリング法が必ずしも完全ではなく，かつ未同定の椎骨数が202点を数えるから，以上の結果をもって冬木貝塚の魚種組成とみなすには尚若干の問題を残す。従って，今回扱った標本の同定結果としては，フナ属・ボラ科・スズキ属・トラフグ類の出現頻度が高かったという点にとどめる。

第１表　冬木貝塚第ＩＩＫ層の魚骨標本同定結果

軟骨魚綱 Chondrichthyes	エイ目種不明	Rajiformes fam. indet.	t	1
	種不明	Fam. indet.	ce	1
硬骨魚綱 Osteichthyes 真骨類 Teleostei	タナゴ亜科種不明	Rhodeinae gen. & sp. indet.	ph	L 1 / R 1
	ニゴイ属種不明	*Hemibarbus* sp.	ph	0 / 2
	フナ属種不明	*Carassius* sp.	mx	3 / 1
			de	1 / 0
			ph	15 / 16
			ce	PRECAU 174 + CAU 114
	コ　イ	*Cyprinus carpio*	pmx	1 / 1
			de	2 / 4
			ph	6 / 1
	コイ科種不明	Cypridae gen. & sp. indet.	mx	1 / 0
	ウ　ナ　ギ	*Anguilla japonica*	ce	PRECAU 1 + CAU 3
	ボラ科種不明	Mugilidae gen. & sp. indet.	op	86 / 120
			ce	PRECAU 14 + CAU 7
	スズキ属種不明	*Lateolabrax* sp.	pmx	1 / 0
			mx	0 / 2
			de	8 / 9
			ang	0 / 2
			op	20 / 24
	クロダイ属種不明	*Acanthopagrus* sp.	pmx	5 / 7
			de	8 / 5
			ang	1 / 0
			pal	1 / 0
	タイ科種不明	Sparidae gen. & sp. indet.	op	0 / 1
	トラフグ類	*Takifugu rubripes*	pmx	39 / 34
			de	27 / 43
			ang	1 / 2
			q	3 / 5
	コ　チ	*Platycephalus indicus*	pmx	0 / 1
			de	1 / 2
	種　不　明	Fam. indet.	ce	202

ang：角骨，ce：椎体，de：歯骨，mx：上顎骨，op：主鰓蓋骨，pal：口蓋骨，ph：咽頭骨，pmx：前上顎骨，q：方骨
L：左，R：右，PRECAU：腹椎，CAU：尾椎

第2章　他遺跡との比較

貝塚産魚種の組成が遺跡によって異なることはしばしば指摘されている。そこで冬木貝塚の魚種組成の特徴を先史学的に検討するために，他の若干の遺跡で報告されている魚種組成との比較をおこなう。対比資料は，岩手県宮野貝塚（鈴木，1977），茨城県上高津貝塚（小宮，1980），千葉県新田野貝塚（小川他，1975），同西広貝塚（金子・牛沢，1977），同富士見台貝塚（金子，1964），同鉈切遺跡（金子，1958），神奈川県称名寺貝塚（鈴木，1977），以上7遺跡である（第1図）。

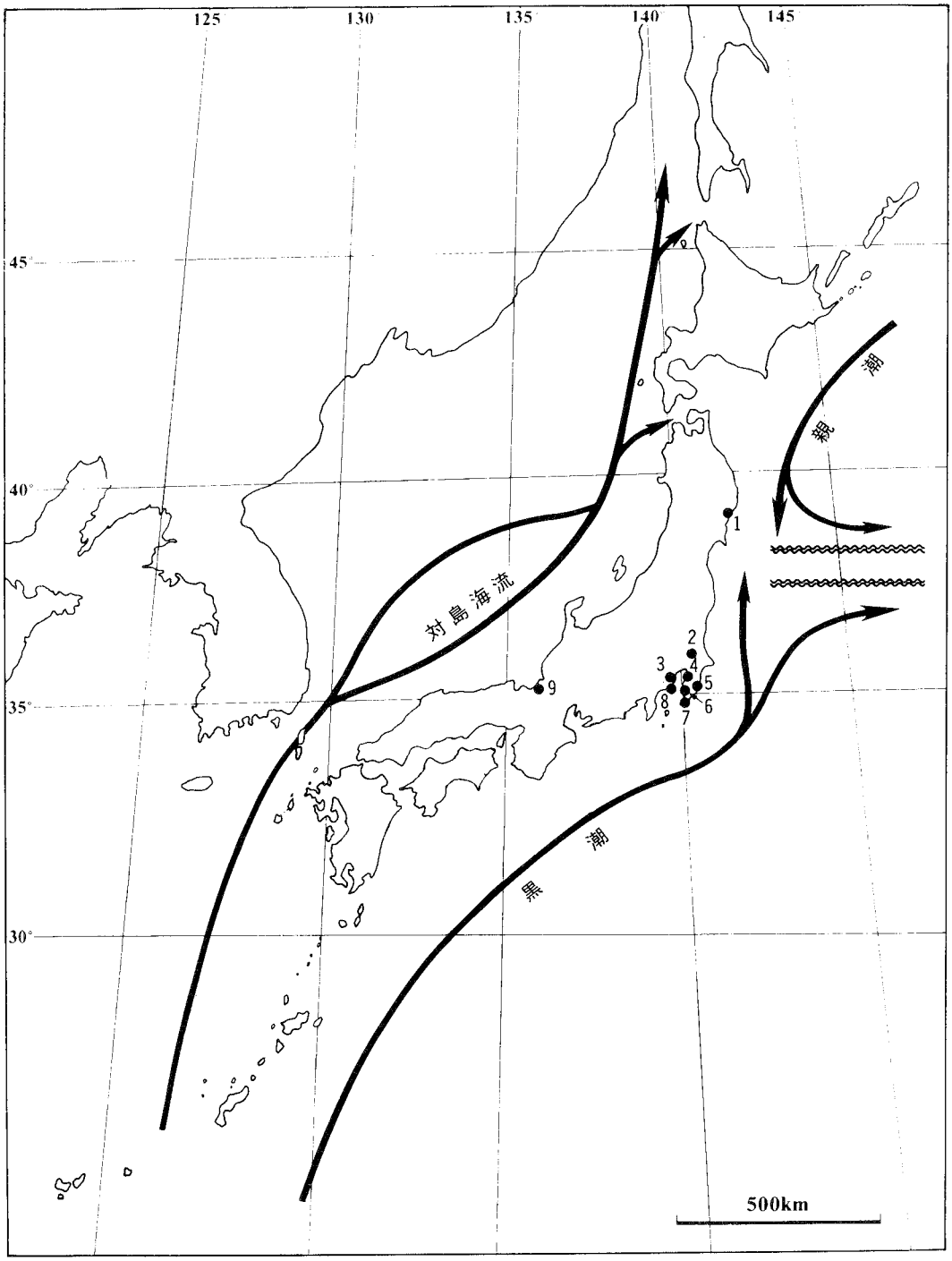
以上の遺跡は魚骨の分析結果が詳しく記載されており，尚かつ，宮野・称名寺・上高津貝塚では堆積物に対してシステマティックなサンプリング法が適用され，同じレベルの同定結果が利用できる。

第2表は，新田野・西広・菊名・富士見台・鉈切5遺跡の間で，スズキ・クロダイ・マダイ3魚種の出現頻度を比較したものである。その結果は極めて明瞭である。各遺跡における3魚種の量的組み合わせは様々であるが，その中で特別に頻度の高い魚種が認められる。すなわち，スズキが新田野貝塚を特徴づけ，クロダイは西広・菊名遺跡，マダイは富士見台・鉈切遺跡をそれぞれ特徴づけている。

第2表　貝塚産：スズキ(1)，クロダイ(2)，マダイ(3)の前上顎骨＋歯骨数の比較

		(1)		(2)		(3)		Total		文献
		N	%	N	%	N	%	N	%	
新田野	縄文中期	122	65.59	60	32.26	4	2.15	186	100.00	小川他 1975
新田野	縄文前期	551	60.68	336	37.00	21	2.31	908	99.99	小川他 1975
西広	縄文後期—晩期	17	6.54	240	92.31	3	1.15	260	100.00	金子他 1977
菊名	縄文前期	10	34.48	17	58.62	2	6.90	29	100.00	小宮 1976
富士見台	縄文後期	15	7.89	16	8.42	159	83.68	190	99.99	金子 1964
鉈切	縄文後期	2	0.50	13	3.24	386	96.26	401	100.00	金子 1958

第3表は，さらに宮野・称名寺2遺跡の魚種組成を追加し，第2表と同様の比較を試みている。比較には魚種の同定に利用された部位の数が用いられている。第2表は，同定が特定の部位数でもって表現されているため同一レベルで個体数を推定できる。第3表の場合には，個体数を同一基準で比較することができない。その代りに，前上顎骨・歯骨の保存が望めないか，あるいはそのような部位の同定が困難な魚種の出現頻度をも含めた一般的傾向を知ることができるという利点がある。



第1図

第3表　貝塚産魚種の比較

			宮野 鈴木 1977	上高津 小宮 1980	新田野 小田他 1975	西広 金子 1977	富士見台 金子 1964	鉈切 金子 1958	称名寺 鈴木 1977	菊名 小宮 1976
	ネコザメ　*Heterodontus japonicus*	t ce					1	8 12		
	ナヌカザメ　*Cephaloscyllium umbratile*	ce						2		
	アオザメ？　*Isurus oxyrinchus*	t						1		
	オナガザメ　*Alopias vulpinus*	ce						5		
	ドチザメ　*Triakis scyllia*	ce					2	34		
	カスザメ　Squatina japonica	ce						8		
	カスザメ科　Squatinidae	ce					1			
	ネズミザメ亜目種不明　Lamnoidei fam. indet.	t ce			— —		 6			
	サメ目種不明　Lamniformes fam. indet.	ce				12				
	トビエイ　*Myliobatis tobijei*	t csp			106 85	1	3	3 1		
	マダラトビエイ	t			10					
	エイ目種不明　Rajiformes fam. indet.	t csp		6		5				1
	軟骨魚綱種不明　Chondrichthyes fam. indet.	ce	13	105					7	21
	ニシン亜目種不明　Clupeoidei fam. indet.	ce	106	216					143	760
*	マイワシ　*Sardinops melanostictus*	ce			1	2	6	—		
	カタクチイワシ　*Engraulis japonica*	ce	33	387			1	1,441	10	
	タナゴ亜科　Rhodeinae gen. & sp. indet.	ph		1						
	ニゴイ属　*Hemibarbus* sp.	ph								
*	ウグイ　*Tribolodon hakonensis*	ph								
**	フナ属　*Carassiun* sp.	ph ce		8	1	—				
	コイ　*Cyprinus carpio*	ph		2						
	ギギ科　Bagridae gen. & sp. indet.	psp				1				
	ウナギ　*Anguilla japonica*	m + d ce		49 1,678	***1					
	マアナゴ　*Canger myriaster*	m + d						3		
*	ハモ属　*Muraenesox* sp.	f m + d			8					3
	トラウツボ　*Muraena pardalis*	m + d						2		
	ウツボ　*Gymnothorax kidako*	m + d						80		
	ウナギ亜目種不明　Anguilloidei fam. indet.	ce	24							4
	サヨリ属　*Hemiramphus* sp.	ce		273						
**	ボラ科種不明　Mugilidae gen. & sp. indet.	op ce		30	375	10	3 5	53		 2
*	カマス科種不明　Sphyraenidae gen. & sp. indet.	ce							15	
**	マグロ属　*Thunnus* sp.	pm + d ce	 13			 1	 1	2 41		
	カツオ　*Euthynnus pelamis*	ce	27				1	30		
	マグロ属 or カツオ	ce	35							
**	ソウダガツオ属　*Auxis* sp.	ce	2					—	1	
	サバ属　*Scomber* sp.	pm + d ce	1 41	 1				5 97	2 9	
	マカジキ　*Tetrapturus audax*	—								
	メカジキ　*Xiphias gladius*	ce						3		
	バショウカジキ　*Istiophorus platypterus*	ce						3		
	アジ亜科種不明　Caranginae gen. & sp. indet.	sc		71						23
	アジ科種不明　Carangidae gen. & sp. indet.	ce	2						25	16

			宮野 鈴木 1977	上高津 小宮 1980	新田野 小川他 1975	西広 金子 1977	富士見台 金子 1964	鉈切 金子 1958	称名寺 鈴木 1977	菊名 小宮 1976
*	マアジ *Trachurus japonicus*	pm+d				—		3		
		ce				—	2	176		
		sc				—		52		
**	ブリ属 *Seriola* sp.	pm+d	2	1				21		
		ce				1		138		
**	イシダイ属 *Oplegnathus* sp.	pm+d					7	8	4	
**	スズキ属 *Lateolabrax* sp.	pm+d	12	101	673	17	15	2	16	10
*		ce	5						5	29
	マハタ *Epinephelus septemfasciatus*	pm+d						28		
	ハタ科種不明	pm+d					2			
	ニベ科種不明 Sciaenidae gen. & sp. indet.	pm+d			16					
	チダイ *Evynnis japonica*	f						1		
	ヘダイ *Sparus sarba*	pm+d				3		10		
**	クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.	pm+d		179	396	240	16	13	30	17
		ce				10				
	マダイ *Pagrus major*	pm+d	31	63	25	3	159	386	77	2
	キダイ *Dentex tumifrons*	pm+d			4					
		f						2		
*	タイ科種不明 Sparidae gen. & sp. indet.	ce	15						7	6
****	フエフキダイ *Lethrinus haematopterus*	pm+d						11		
	メジナ？ *Girella punctata*	pm+d						1		
	イサキ *Parapristipoma trilineatum*	pm+d						8		
	コショウダイ *Plectorhynchus cinctus*	pm+d			8			8	2	
	マハゼ *Acanthogobius flavimanus*	pm+d		255						
	カンダイ *Semicossyphus reticulatus*	pm+d					1	10		
		ph					1	33		
	ベラ科種不明 Labridae gen. & sp. indet.	pm+d						4		
	ブダイ *Calotomus japonicus*	pm+d						5		
		ph						17		
	アオブダイ *Ypsiscarus ovifrons*	ph						1		
	カワハギ *Stephanolepis cirrhifer*	dsp						4		
	カワハギ科種不明 Aluteridae gen. & sp. indet.	dsp						1		
	モンガラカワハギ亜目種不明 Balistoidei fam. indet.	dsp								3
		ce	1						9	7
	トラフグ類 *Takifugu rubripes*	pm+d		18						
	マフグ科種不明 Tetraodontidae gen. & sp. indet	pm+d		7	5	2	1			
	イシガキフグ *Chilomycterus affinis*	pm+d						2		
	フサカサゴ科種不明 Scorpaenidae gen. & sp. indet.	pm+d	78	3					12	
*		ce	50						18	4
	トゴットメバル *Sebastes joyneri*	pm+d						6		
	カサゴ *Sebastiscus marmoratus*	pm+d						8		
	オニカサゴ *Scorpaenopsis cirrhosa*	pop						1		
	オニオコゼ *Inimicus japonicus*	pop						2		
*	アイナメ科種不明 Hexagrammidae gen. & fam. indet.	ce	39						8	
	コチ *Platycephalus indicus*	pm+d		22	119	5			3	
		op						2		
		ce				2				
	ホウボウ *Chelidonichthys spinosus*	pm+d						1		
	ヒラメ *Paralichthys olivaceus*	pm+d				1		5		
	ウシノシタ科種不明 Cynoglossidae gen. & sp. indet.	ce				—		1		
	真骨類種不明 Teleostei fam.indet.	pm+d	10	?	?	?	?	?	23	
		ce	220	4,392	?	?	?	?	600	138

csp：尾棘，ce：椎体，d：歯骨，dsp：背鰭棘，f：額骨，m：上顎骨，op：主鰓蓋骨，pm：前上顎骨，ph：咽頭骨，pop：前鰓蓋骨，sc：稜鱗
*同定に疑問があり，今後の検討を要すと思われるもの

**現状では同定を属もしくは科段階までにとどめるのが妥当と思われるもの
***小川ほか（1975）では鋤背板
****金子（1958）ではタマミ
――データが不明確なもの

この結果も第2表の場合と同じく，魚種組成の特徴によって遺跡のグルーピングが可能である。そして，第2表では認められなかった新しいタイプの魚種組成があきらかとなる。それは新たに追加された宮野貝塚の魚種組成にみられる。宮野貝塚の組成は第2表で用いられた遺跡の富士見台・鉈切遺跡の組成と比較的類似している。特に鉈切遺跡との類似点が多い。しかし両者の間には，サメ類・ニシン類・ウツボ・ウナギ類・ボラ科・マアジ・ブリ属・マハタ・クロダイ属・タイ類・カサゴ科・アイナメ科等において出現頻度に差異が認められる。また発掘容積を考慮して，すなわち発掘容積が非常に少なかった宮野貝塚でマグロ・カツオ・サバ・タイ科・カサゴ科の頻

第4表　宮野・称名寺・上高津貝塚魚種組成

	宮　野	称名寺	上高津		
			ST－III	ST－II	ST－I
軟骨魚綱（魚種不明）	13	7	54	38	6
ニシン亜目	106	143	21	157	13
カタクチイワシ	33	10	21	346	38
フナ属	0	0	2*	4*	2*
コイ科	0	0	2*	0	0
ウナギ科	24	0	593	695	390
サヨリ科	0	0	46	204	23
ボラ科	0	0	3**	0	1**
カマス科	0	15	0	0	0
マグロ属	13	0	0	0	0
カツオ	27	0	0	0	0
マグロ属／カツオ	35	0	0	0	0
ソウダカツオ属	2	1	0	0	0
サバ属	41	9	0	1	0
アジ亜科	2	25	27***	36***	8***
スズキ属	5	5	4****	12****	9****
タイ科	15	7	8****	14****	0
マハゼ	0	0	54****	125****	76****
カワハギ科	1	9	0	0	0
マフグ科	0	0	4****	2****	1****
カサゴ科	50	18	0	0	0
アイナメ科	39	8	0	0	0
コチ	0	0	0	0	1****
未同定	220	600	1,009	2,310	1,073

*咽頭骨，**主鰓蓋骨，***稜鱗，****顎骨

度が高いという結果となる。一方称名寺・富士見台遺跡の組成は，各種サメ類・ボラ科・マアジ・クロダイ・マダイ等の組み合わせが顕著な特徴といえよう。

残る4遺跡を調べると，第2表の結果ではスズキで代表される新田野貝塚と，それ以外のグループに分れる。しかし第3表の結果ではそのようなグルーピングは無理である。むしろこれらの遺跡はイワシ類・ボラ科・スズキ属・クロダイ属・フグ類・コチ等の出現頻度が高いという共通した特徴が認められる。

ところで第3表の同定結果は，すでに触れたように発掘容積に差があり，サンプリング法においても異なる出土標本にもとづいている。その結果を同一基準で比較するのは無理な面がある。次に宮野・称名寺・上高津3遺跡の同定結果を利用した比較を試みる（第4表）。

この結果は3遺跡の魚種組成がそれぞれ異なることを示している。マグロ属・カツオが宮野貝塚を特徴づけ，他の遺跡ではこれらの魚種が認められない。称名寺・上高津遺跡間の差異も顕著である。称名寺で同定されるカマス科・サバ科・カワハギ科・カサゴ科・アイナメ科等は上高津遺跡では認められない。しかし，フナ属・ウナギ科・サヨリ科・ボラ科・マアジ・フグ科等は上高津貝塚でしか同定されなかった。

以上3種類の表を用いて遺跡によって魚種の組成が異なり，しかも一定の基準をもうけることにより魚種組成にもとづいた遺跡分類が可能であることを示した。すなわち今回比較に利用した遺跡の魚種組成は次の3つのタイプに分類できる。

Aタイプ魚種組成

宮野貝塚の結果に代表される組成である。マグロ属・カツオ・サバ属・カサゴ科・アイナメ科等の出現頻度が高い。しかし，ウナギ・サヨリ属・マハゼ・ボラ科等の出現頻度は非常に低いか，ゼロに近い。

Bタイプ魚種組成

富士見台・鉈切・称名寺遺跡の結果に代表される組成である。タイ科，特にマダイの出現頻度が高い。Aタイプの魚種組成との類似が強いが，より沿海性の魚種の割合が多く，相対的にAタイプを特徴づけるマグロ・カツオ・サバ等の頻度は低くなる。

Cタイプ魚種組成

上高津・新田野・西広・菊名貝塚の結果に代表される組成である。このグループに分類される遺跡の間では組成が変異に富む。一般的傾向としてボラ科・ウナギ・フナ属・マハゼ・クロダイ

属・スズキ属等が高い出現頻度を示す。

以上3つのタイプに大別される魚種組成を調べると，それぞれのタイプを構成する魚種は相互に類似した習性・生態を示すことがわかる。例えば，Aタイプを構成する魚種は，いわゆる外洋性の回遊魚と岩礁性の沿海底捷魚から成るという特徴を示す。Bタイプの組成の主要魚は岩礁性の沿海底捷魚である。そしてCタイプの組成を代表する魚種は内湾域・河口・河川域に生息する潮間帯・濠水・淡水性魚である。何故このように遺跡によって同種の習性・生態を示す魚種が組み合わせをもつようになるかが問題となる。これを解決する鍵は遺跡テリトリーを想定することによってえられる。

遺跡テリトリーとは，遺跡の住人が食物その他の資源を得るために恒常的に利用していた地理的広がりである。遺跡テリトリーの範囲は当然遺跡によって異なっていた。資源の分布・密度・変異により利用法に変化が生じる。また採集狩猟民と農耕民とでは当然活動範囲は異なる。縄文貝塚人のテリトリーの分析は未だ試みられていないので，今回は外国の研究者がしばしば利用する遺跡中心半径10 - kmの円テリトリーを用いることにする。実は，このテリトリーは今回比較資料として利用した新田野貝塚に適用されたことがあり(Akazawa, 1980)，その結果分析概念として一応有効であることがあきらかになっている。この遺跡テリトリーを各遺跡に適用し，遺跡の魚種組成の特徴を説明することが，テリトリー分析の一つの目的である。

第2図は，第2・3表の作成に利用された上高津・新田野・西広・富士見台・鉈切・称名寺・菊名の7遺跡，及び冬木貝塚の分布図である。各遺跡は今回適用する半径10 - kmの円テリトリーをもって表現されている。すなわち各遺跡の住人が恒常的に利用した地理的な広がりをテリトリーでもって想定してあることになる。

第2図には，約6000年前の縄文海進によって海水が侵入したと想定されている標高10 m以下の範囲があわせて記入されている。この縄文海進図は海進が最も進行した時点での状況を示しており，必ずしも各遺跡が形成された時期の海岸線図と一致しない。ただ，現在の自然地理学上の知見でもって縄文時代を通じての海岸線を復原することはできない。従って，この図をもって各遺跡テリトリーと関連する海岸線の一つのイメージとしておきたい。この分布図にもとづいて，遺跡テリトリーと魚種組成との関連を調べると次のようになる。

Bタイプの魚種組成に特徴づけられる富士見台・鉈切・称名寺遺跡は現在の海岸線に近く分布し，かつテリトリーの中に外洋水の影響を強く受ける海水域を広く包含している。また岩礁性の海岸線を有している点においても共通している。縄文海進の影響を受けた面積は少なく，淡水の影響を直接受ける部分も少ない。

Cタイプ魚種組成を示した上高津・新田野・西広・菊名貝塚は現在の海岸線から遠く内陸に位

置している。そして，テリトリーの中に縄文海進によって海水が侵入したと考えられる部分を多く含んでいる。このようなテリトリー内にはいわゆる干潟が広く形成され，それも淡水の影響を強く受けた潟水域が広く存在したことが想定される。

Aタイプの魚種組成を示した宮野貝塚は三陸海岸の太平洋岸に位置し（第1図参照），テリトリー内の海岸線はいわゆるリアス式の岩礁性である。縄文海進の影響は殆んど受けておらず，テリトリーの海水域は黒潮・親潮が混流する外洋水から成る。一方淡水域の影響はないに等しいといえる。

以上のように遺跡テリトリーとその海水域の環境を想定すると，遺跡の魚種組成と遺跡テリトリーの潜在的な魚類生産との間に高い相関を認めざるを得ない。遺跡で同定される魚種がすべて遺跡の住人がテリトリーの中で漁獲したかどうかは疑問である。しかし，各魚種組成タイプを代表する魚種がテリトリーの中の潜在資源量と相関していることは明瞭である。簡単に要約すると，宮野貝塚のテリトリーは外洋性海水域に適応しており，潜在魚種である回遊性魚や外洋性種が実際に漁獲されている。鉈切・富士見台・称名寺遺跡テリトリーは外洋性から若干内湾性に向いているが，潜在魚種としては外洋性の岩礁性種が大きな比重を占めていたことが想定され，事実それら遺跡魚種組成もそのような特徴を示している。その他の遺跡テリトリーは内湾性の特徴を示し，潜在魚種として潟水性種・淡水性種が大きな比重を占めたと推測されるが，事実それら遺跡の魚種組成がそのような特徴を有している。

以上の結果から，遺跡で同定される魚種の組成が遺跡テリトリーの潜在魚種組成と強い相関を示すことがわかる。おそらく多くの遺跡に於て，精密なサンプリングがおこなわれ，正確な同定分類作業が試みられれば，以上の関係はさらに明瞭な事実となる可能性が高い。

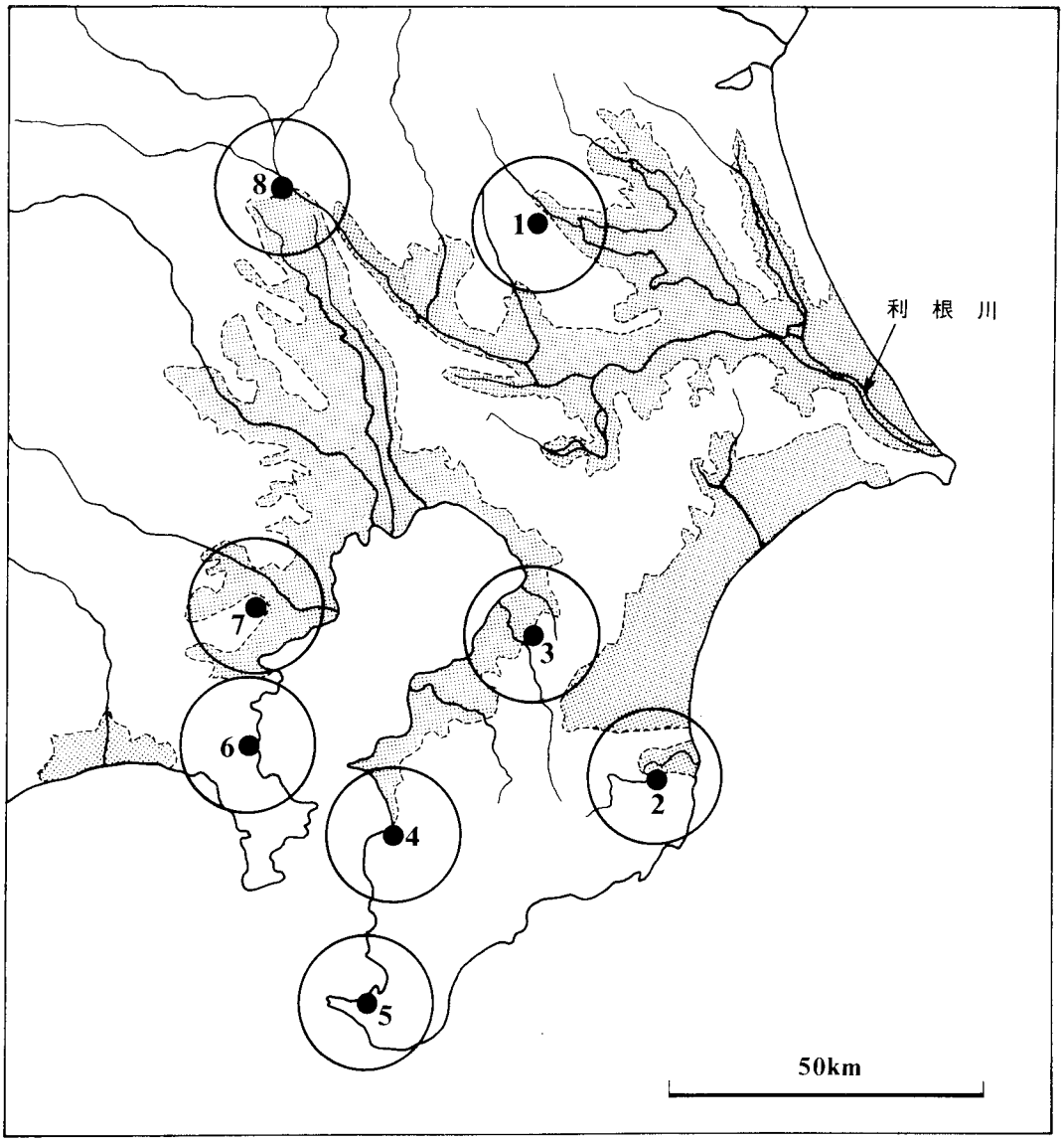
ところで以上のような関係は，冬木貝塚のテリトリーと魚種組成との間にも想定できよう。第3図は冬木貝塚のテリトリーを想定したものである。

冬木貝塚は縄文時代後期―堀之内式―の土器が大多数を占める。おそらくこの時期に形成された遺跡である。縄文海進はこの時期にはすでに可成り後退していたとする考え方が強い。従って，第3図に示されている標高 10 m 以下の低地が海となっていたかどうかは疑問である。ところが一方でこの時期の海岸線のイメージを正確に描くこともできない。そこで今回の分析に利用している半径 10 - km 円テリトリーの中に海水が侵入していたという想定のもとに冬木貝塚資料を検討する。

まず冬木貝塚の魚種組成とすでに定義したA・B・Cの3タイプの魚種組成との比較を試みる。あきらかにその組成はCタイプとした特徴と一致する。フナ属・ボラ科・スズキ属・トラフグ類

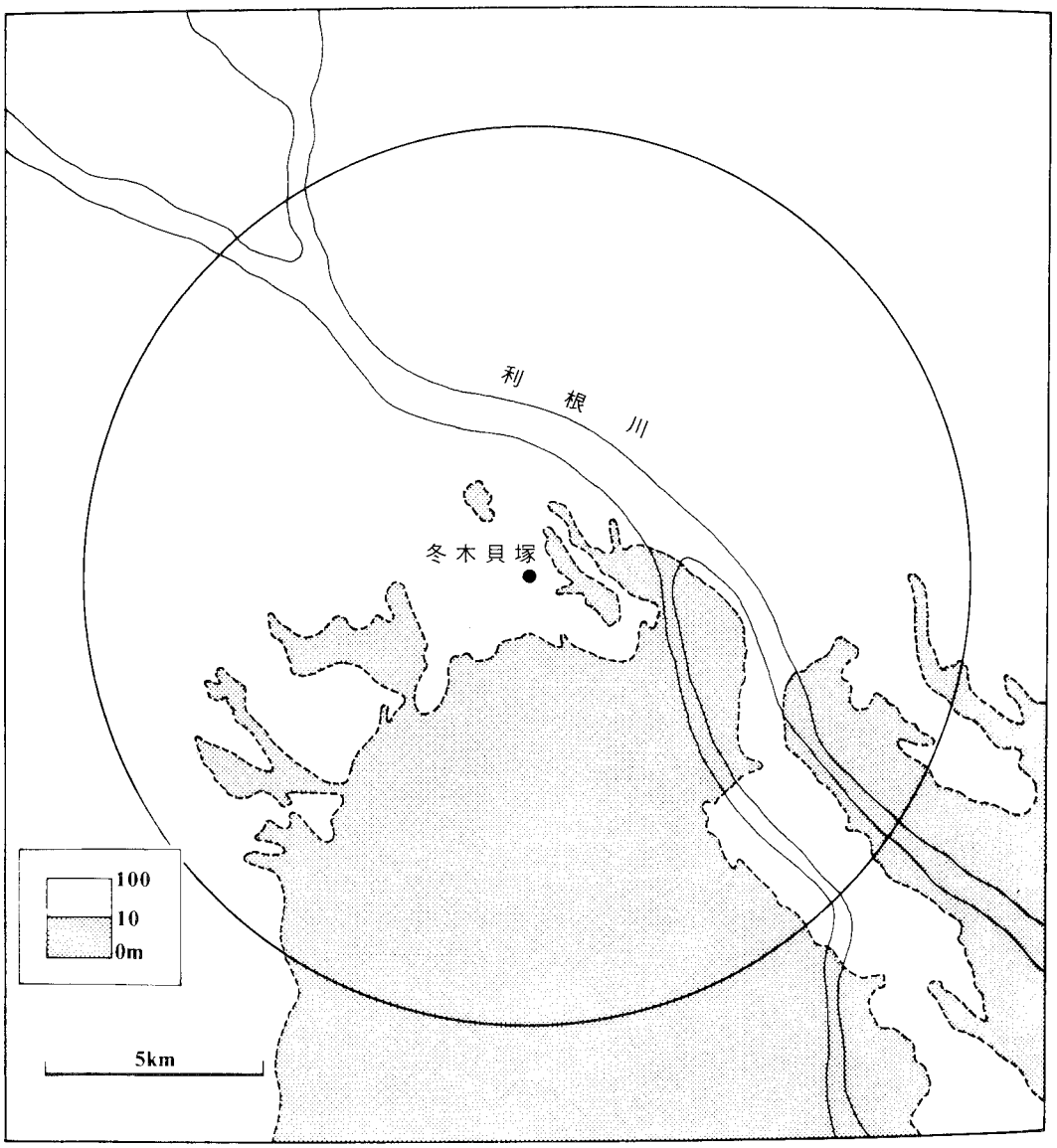
の組み合わせは，Ｃタイプの組成を特徴づける内湾性の潮間帯・潟水性・淡水性種の混在を示している。やや出現頻度が高かったクロダイ属も同じ傾向を示す魚種である。第１表と第２・第３表との比較を試みると，例えば上高津貝塚の魚種組成との類似が非常に強いことがわかる。

ところで一方，冬木貝塚テリトリーの環境を調べると，少くとも今回利用している分析基準では，Ｃタイプの魚種組成を示す遺跡群，すなわち上高津・西広・新田野・菊名貝塚等のテリトリーとよく一致している。



第２図

すなわち，冬木貝塚の魚種組成はCタイプを示し，その結果は遺跡テリトリーの特徴と矛盾するものではない。そして冬木貝塚においても遺跡テリトリーと漁獲物の特徴との間に高い相関が認められる。ここで問題として残るのはテリトリーを想定するために用いた半径 10 - km の基準である。この点については第 4 章で再検討する。



第 3 図

第3章　漁撈具にもとづく縄文遺跡の分類

遺跡産魚種組成が遺跡テリトリーと相関しているという事実は，遺跡産漁撈具の組成が遺跡テリトリーあるいは魚種組成とも一定の相関を示す可能性を意味する。縄文時代人は様々な環境に適応したが，そのテリトリーが有する潜在魚種を開発する過程で独特の漁撈具の組成を発達させた可能性がある。テリトリー分析はこの過程をあきらかにする上でも有効である。そこで遺跡テリトリーが異なる若干の遺跡を用いて，発見されている漁撈具の組成にもとづいた遺跡分類を試みてみる。

分析に利用する遺跡は，渡辺（1973）が記載した遺跡の中から漁撈具を比較的多量に出土したもの45遺跡である（第5表）。第4図は分析遺跡の分布図であり，北海道から近畿地方に分布す

第5表　分析遺跡リスト（渡辺1973から抽出）．遺跡番号は第4図の遺跡番号と一致する

番号	遺跡名	時期（縄文）	所在	番号	遺跡名	時期（縄文）	所在
1	船泊	後	北海道礼文町	24	馬場	後晩	〃　原町市
2	三ツ谷	晩	〃　乙部町	25	万間	後晩	〃　浪江町
3	大浦	晩	青森県青森市	26	蟹沢	中一晩	〃　猪苗代町
4	鍬ガ崎	後晩	岩手県宮古市	27	大畑	中後	〃　いわき市
5	宮野	後晩	〃　三陸村	28	寺脇	晩	〃　〃
6	門前	後	〃　陸前高田市	29	綱取	後	〃　〃
7	中沢浜	後晩	〃　〃	30	崖ノ上	晩	〃　棚倉町
8	大洞	後晩	〃　大船渡市	31	御所内	中後	茨城県東海村
9	細浦	後晩	〃　〃	32	平原	中後	〃　〃
10	獺沢	後晩	〃　陸前高田市	33	若海	中後	〃　玉造町
11	貝鳥	後	〃　花泉町	34	岩坪	中後	〃　出島村
12	神矢田	中一晩	山形県遊佐町	35	高松	中一晩	栃木県足利市
13	浦島	晩	宮城県唐桑町	36	姥山	中後	千葉県市川市
14	泉沢	中一後	〃　〃	37	祇園	後	〃　木更津市
15	山下	中後	〃　女川町	38	富士見台	後	〃　天羽町
16	尾田峰	晩	〃　〃	39	鉈切	後	〃　館山市
17	沼津	中一晩	〃　石巻町	40	称名寺	後晩	神奈川県横浜市
18	南境	中後	〃　〃	41	西富	後	〃　藤沢市
19	西の浜	中一晩	〃　松島町	42	堤	後	〃　茅ガ崎
20	台囲	後晩	〃　鳴瀬町	43	蜆塚	後	静岡県浜松市
21	二月田	後晩	〃　七ガ浜町	44	長瀬	中一晩	岐阜県小坂町
22	三貫地	後晩	福島県駒ガ嶺村	45	上賀茂	後	京都府京都市
23	小川	後晩	〃　新地村				

る。関東地方から東北地方の太平洋岸に分布する遺跡が多いが，若干内陸に分布する遺跡も抽出した。時期は縄文時代後期から晩期の堆積物を有するものである。

遺跡の分類には漁撈具が用いられる。すなわち渡辺が各遺跡ごとに集計した漁撈具である。ただ，渡辺の分類法が非常に詳細であり，その結果をそのまま利用した場合分析結果の解釈が困難であり，かつ分析上問題もある。従って実際の分析には渡辺の分類法を基本とするが以下のように修正し利用した。

分析変数	漁撈具の名称
1．H 1	開窩式回転式銛頭
2．H 2	閉窩式回転式銛頭
3．F 1	単式釣針
4．F 2	錨形単式釣針
5．F 3	組合釣針
6．N 1	土器片錘
7．N 2	切目石錘
8．N 3	有溝土錘
9．N 4	有溝石錘

具体的な分析目的は，上記9タイプに分類された漁撈具を変数として，45遺跡間の類似度を計算することである。統計計算には東京大学大型計算機センター，HITACシステムを利用した。分析プログラムとして，BIOMEDICAL COMPUTER PROGRAMS－Pの中からクラスター分析にはBMDP 2 M，因子分析にはBMDP 4 M，判別分析にはBMDP 7 Mをそれぞれ利用した。

漁撈具のコンビネーション

最初の分析は45遺跡を用いて分析変数とした9種類の漁撈具がどのようなコンビネーションをもって出現するかを目的とする。第6表は各変数が示した因子負荷量である。この結果9つの変数が4つのグループに大別されることがあきらかとなる。H 2・F 1・N 1が1つのコンビネーションを作り，主として第1因子によって支配されていることがわかる。ただH 2・F 1は正の値を示すがN 1は負の値を示している。第2因子で抽出される変数は，H 1・F 3である。第3因子ではN 2，第4因子ではN 3がそれぞれ抽出されている。以上の結果は45遺跡における漁撈具のコンビネーションを知る手掛りとなる。

第4図

第6表　漁撈具を変数とする因子分析によって抽出された
4つの因子と因子負荷量

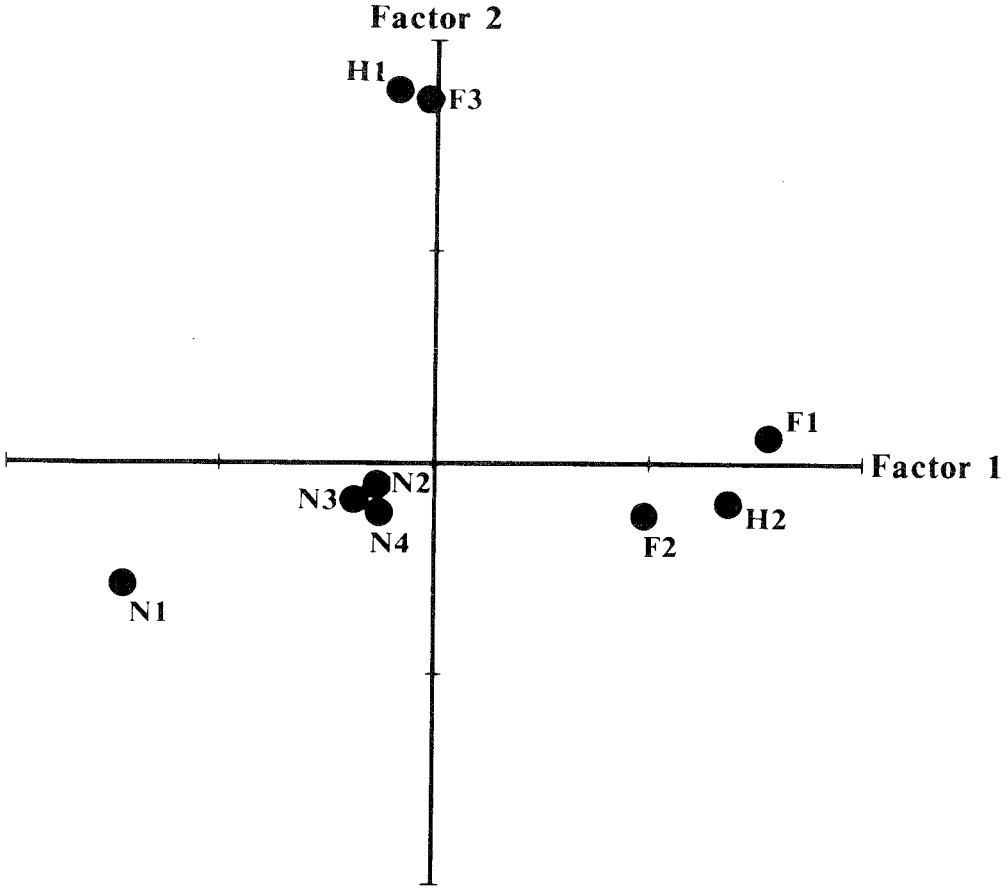
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
H1開窩式回転式銛頭	−0.089	0.875	−0.043	−0.056
H2閉窩式回転式銛頭	0.694	−0.094	−0.133	−0.050
F1単式釣針	0.780	0.063	−0.265	−0.137
F2錨形単式釣針	0.491	−0.119	−0.048	−0.130
F3組合釣針	−0.022	0.864	−0.057	−0.016
N1土器片錘	−0.717	−0.288	−0.458	−0.421
N2切目石錘	−0.147	−0.063	0.872	−0.222
N3有溝土錘	−0.180	−0.079	−0.036	0.925
N4有溝石錘	−0.181	−0.081	0.540	0.326

次に変数ごとの因子負荷量を用いて漁撈具の関係を調べてみる。第5図は第1・第2因子負荷量を用いて9つの変数の相互の関係を二次元に展開表示したものである。第7表は因子ごとの固有値と累積寄与率とを示しているが，第1と第2因子負荷量を用いた第5図によって約40%の情

報が示されていることになる。

第5図の結果は9つの変数が4つのクラスターを形成することを明瞭に示している。すなわち，1）F1－F2－H2クラスター，2）H1－F3クラスター，3）N2－N3－N4クラスター，4)N1クラスターである。この結果を第6表の結果と対比してみると，4つのクラスターを構成した漁撈具のコンビネーションが抽出された因子によって，十分説明できることがわかる。

すなわち今回分析した45遺跡では漁撈具の組合わせとして次のような一般的特徴が認められたことになる。先ず，閉窩式回転式銛頭と2種類の単式釣針の組合わせ，開窩式回転式銛頭と組み合わせ釣針の組み合わせ，土器片錘を除く他3種類の錘の組合わせ，最後に土器片錘である。すでにのべたようにこの結果は約40%の情報しか含んでいない第1と第2の因子負荷量を用いた結果の解釈である。従って十分な説明には程遠いのであるが，一般的傾向を示していることは確かである。そしてこのような傾向から，遺跡によって漁撈具の組合わせに差が生じている，すなわち遺跡によって異なった漁撈具が発達していることがわかる。これが，おそらく異った遺跡テリトリーへの適応の結果であることを，遺跡の分類によって検討してみたい。

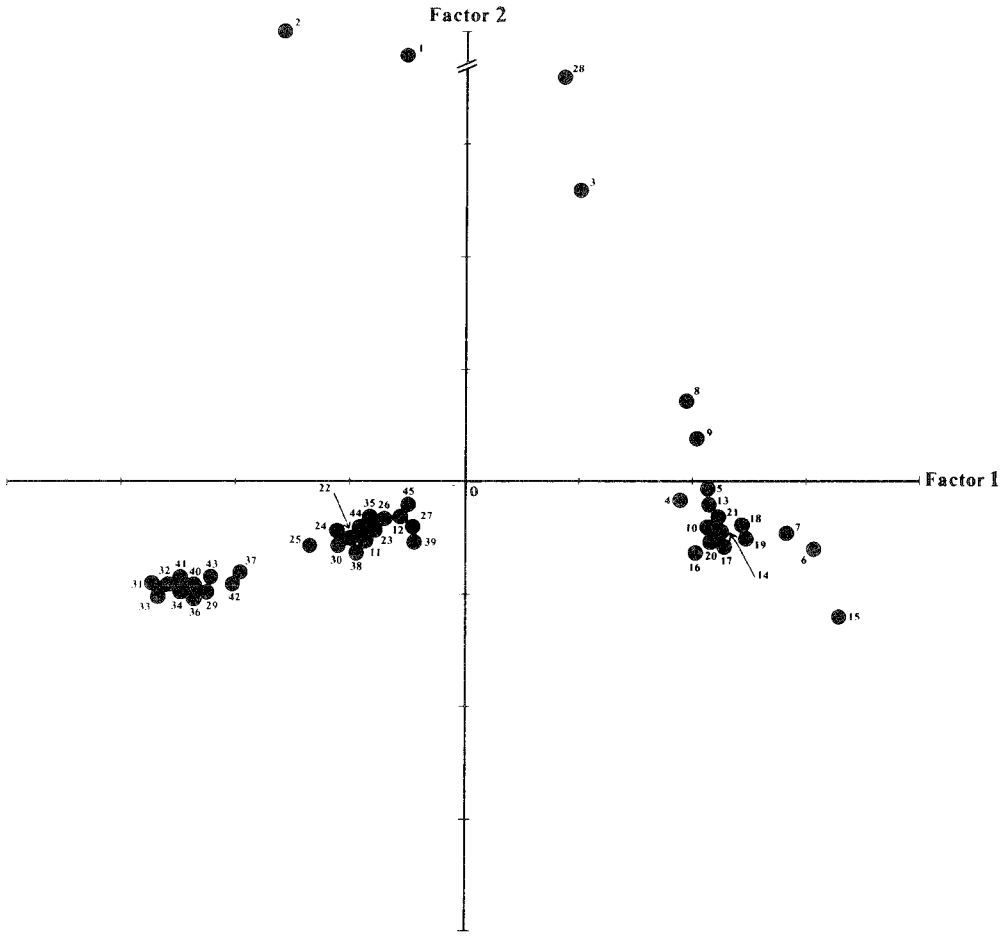


第5図

第7表　因子分析で算出された固有値と累積寄与率

因　子	固有値	累積寄与率
1	2.053	0.228
2	1.620	0.408
3	1.407	0.564
4	1.085	0.685
5	0.959	0.792
6	0.828	0.884
7	0.591	0.949
8	0.456	1.000

上記分析に用いたデータを利用して45遺跡の因子分析・クラスター分析を試みた。第6図は因子分析で算出された因子得点を用いて遺跡間の関係を二次元に表示したものである。一見して，45遺跡が3つのクラスターを形成することがわかる。1つはY軸の右側で一群を成す遺跡である。次にY軸の左側で近接して群を成す2つのクラスターである。X軸上方の4遺跡は必ずしもクラスターを形成するとはみなされない。

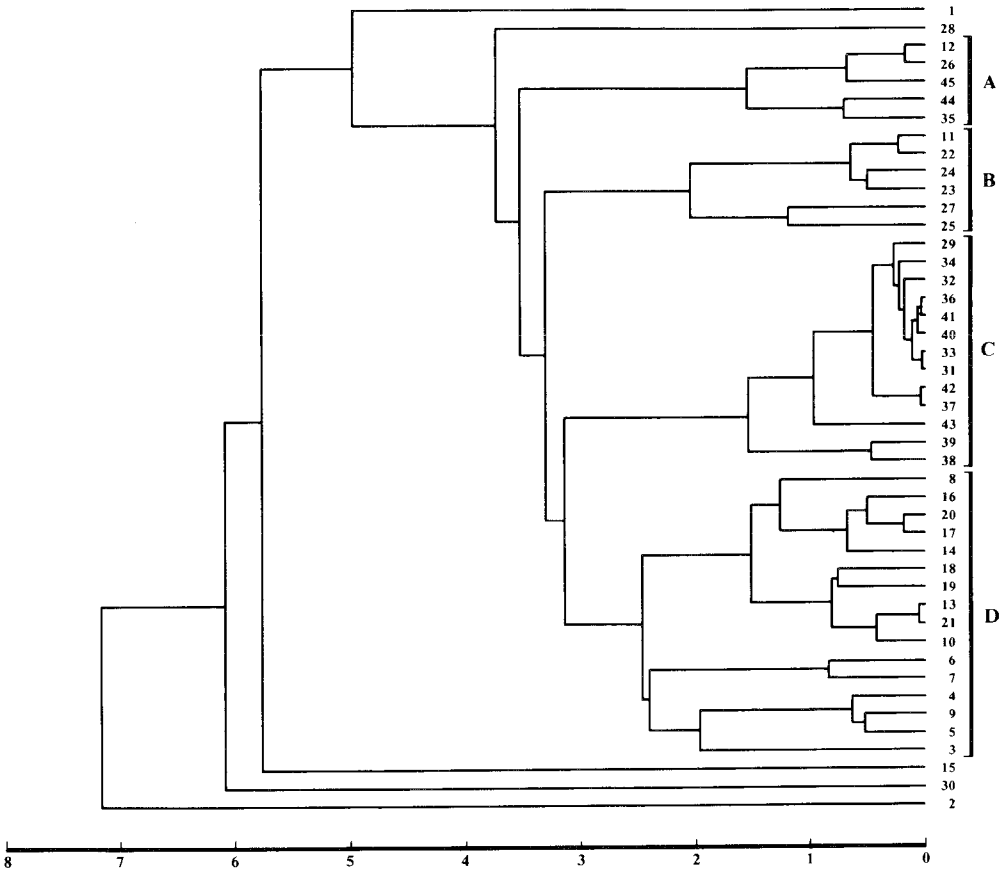


第6図

Y軸の右側でクラスターを形成する16遺跡は,閉窩式回転式銛頭と2種の単式釣針が高い頻度を示すが,錘の出現頻度は低いという共通性を示す。一方Y軸の左側に分布する2つのクラスターは，錘が高い頻度で発見される遺跡で構成されている。ただ2つのクラスターの間で錘の組合わせに差がある。より左側のクラスターは土器片錘，その右側のクラスターは他の錘が，それぞれ高い頻度で発見されるという共通性がある。

以上の結果は，すでにのべた漁撈具のコンビネーションの結果と比較的よく一致している。ただ遺跡のクラスタリングが未だ不十分という感をもつ。そこで同じデータを用いて45遺跡のクラスター分析を試みた。

第7図はクラスター分析の結果算出された遺跡間の距離を樹状図を用いて表現したものである。結果は明瞭であるが，例えば距離3.0の点で切ってみるとA・B・C・Dの4つの遺跡クラスターが認められる。遺跡の分類結果としては前記因子分析よりも説明し易い。この結果を分析に利用した遺跡の原データにもとづいて説明すると以下のようになる。



第7図

クラスターA

このクラスターを形成する遺跡群は，変数N２（切目石錘）が最も重要な因子として働いている。それに変数N３（有溝土錘）・N４（有溝石錘）等も同時に影響力をもった支配的因子として働いている。

クラスターB

クラスターAと同じく土器片錘を除く各種錘が支配的因子の役目を果しているが，特にN３（有溝土錘）が支配的変数として強く関与している。

クラスターC

このクラスターを形成する遺跡では土器片錘の出現頻度が高いという一般的特徴がある。ただ遺跡間の漁撈具組成の変異が大きく，変数F１（単式釣針）の頻度が高い例もある。

クラスターD

このクラスターを構成する遺跡はH２（閉窩式回転式銛頭）とF１（単式釣針）が多数発見される点で共通している。この２変数が主たる支配因子として形成されたクラスターとみなすことができる。

以上の結果の先史学上の意味を検討するため，各クラスターを構成した遺跡の地理的分布を調べてみる（第４図参照）。

クラスターAを形成した12・26・35・44・45の５遺跡は日本海側から琵琶湖畔にかけての内陸に分布する。いわゆる河川流域・内陸湖水域に近く分布するといえる。クラスターBを構成する11・22・23・24・25・27の６遺跡は東北地方南部・関東地方北部の太平洋岸に近く分布している。クラスターCを構成した29・31・32・33・34・36・37・38・39・40・41・42・43の13遺跡は関東地方から東海地方に分布する。第４図では説明しにくいが，このグループの多くの遺跡はすでにのべた縄文海進で形成された内湾に近く位置する。クラスターDを形成する３・４・５・６・７・８・９・10・13・14・16・17・18・19・20・21の16遺跡は東北地方の太平洋に面して分布するという共通性を示す。

以上の結果を総合すると，漁撈具のコンビネーションで分類された遺跡クラスターとその地理的分布との間の一定の相関が認められるといってよいであろう。この結果をすでにのべた遺跡テリトリーと魚種組成との関係と一緒にして考慮すると，あらたに遺跡テリトリーと魚撈具組成との間に相関が成り立つことがわかる。すなわち，遺跡テリトリーの潜在魚種と貝塚人との関係に

よって遺跡に独特の魚種組成があらわれるが，その両者の関係を結びつける技術として遺跡独特の漁撈具組成が発達した。ここに縄文人の遺跡テリトリーへの適応の一つの結果をみることができる。そのような適応状態を前記A・B・C・Dと分類された遺跡を用いて次のように要約する。

遺跡クラスターA

今回魚種組成を調べた遺跡の中にはこのクラスターに分類される例がない。すでにのべたように，このクラスターを形成する遺跡は内陸に分布し，河川域・内陸湖水域に近く位置している。今回は福井県鳥浜貝塚（福井県教育委員会，1979）を用いてこの遺跡のクラスターの特徴を要約する。

第8図は当遺跡テリトリーを示し，半径 5 - km：10 - km の2種類の円テリトリーが描かれている。10 - km テリトリーの場合，外洋水域が含まれる。この場合には外洋性種，例えばBタイプの魚種組成に近いものが認められてよい。ところが実際に同定された魚種組成は，フナ属・コイ属を主としている。貝種の特徴は，ヤマトシジミ・トンガリササノハガイ・イシガイ・マツカサガイ等である。すなわち，魚貝類とも淡水性・汽水性種の出現頻度が高い。ところが，外洋性ないし潮間帯性種であるマダイ・クロダイ・スズキ・サザエ・レイシ等の頻度は極めて低い。

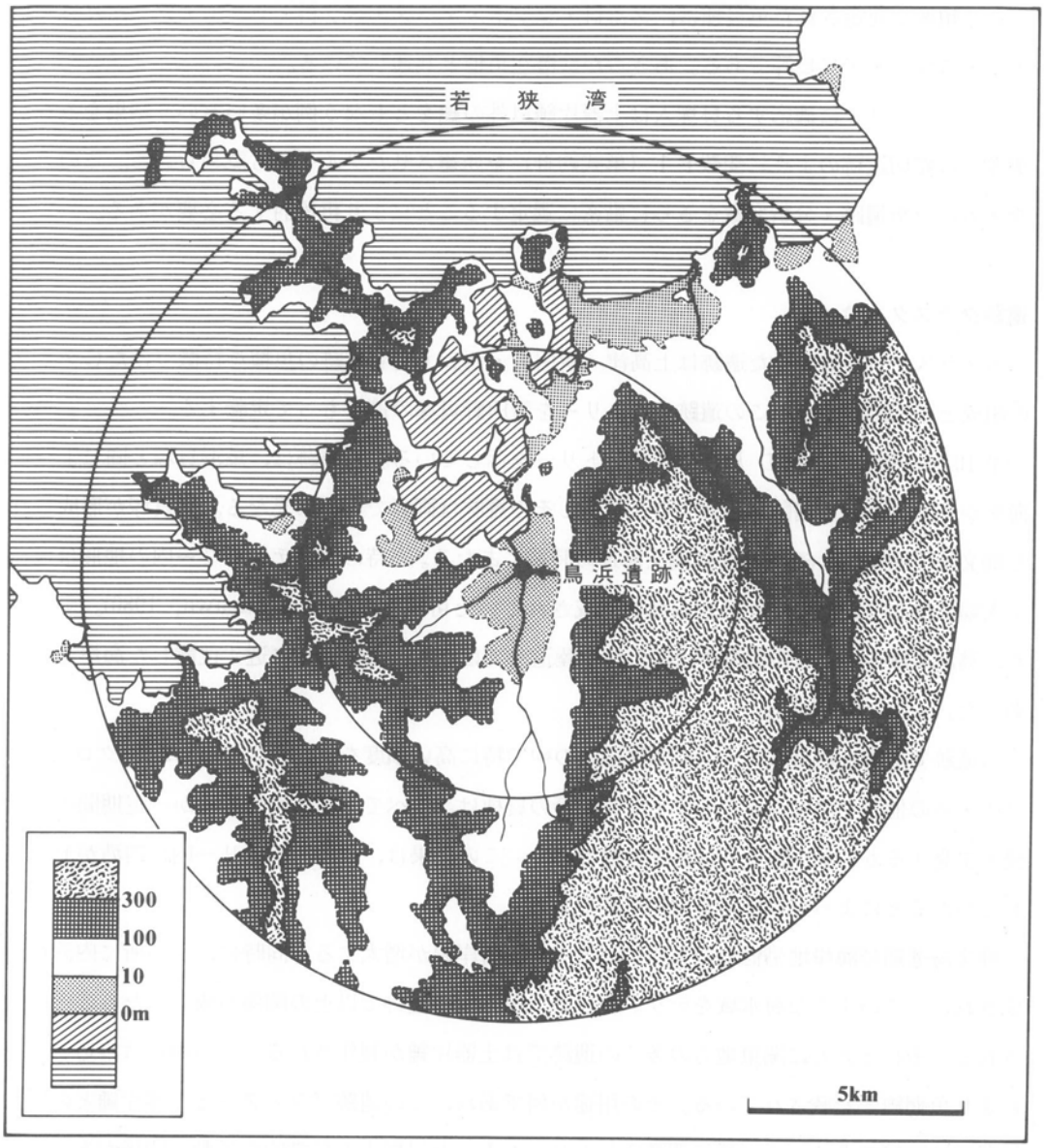
以上の魚類・貝類組成は，当遺跡テリトリーとして 10 - km よりも 5 - km テリトリーを想定する方がより適当であることを示している。このテリトリーは縄文海進の影響を大きく受けていない。たとえあったとしても内陸湖水が拡大したにとどまる。以上の特徴はクラスターAを形成した内陸遺跡のテリトリーを定義する一般的特徴であったと考えられる。

このような遺跡テリトリー及び潜在魚種資源に対する適応結果として，クラスターAを定義した変数であるN2（切目石錘）が発達する。事実鳥浜貝塚ではこの種の遺物の出現頻度は高い。また，今回の分析で利用されていない漁撈具であるヤスが同じくこの遺跡テリトリーと相関する（第8表）。

第8表　銛頭(1)，釣針(2)，ヤス(3)の遺跡別出現頻度
（金子　1971：第1表を改変）

	(1)	(2)	(3)	発掘面積(m²)	遺跡テントリータイプ(本文参照)
西の浜	38	43	10	274	D
鉈切	2	20	28	?	B
余山	22	22	43	128	B
富士見台	4	7	9	24	B
称名寺	12	6	16	70	B
大倉南	0	2	54	21	C
上高津	0	1	23	27.2	C
椎塚	1 ?	2	40	16	C
広畑	0	3	30	16	C
蜆塚	0	0	148	?	A
鳥浜*	0	0	多	?	A

*鳥浜貝塚報告書　1979より



第8図

遺跡クラスターB

当クラスターを構成した遺跡は，富士見台・鉈切・称名寺遺跡を特徴づけたBタイプの魚種組成との相関が高い。今回は鉈切遺跡のテリトリーを利用して当クラスターの一般的特徴をのべる。

第9図は鉈切遺跡の 10 - km テリトリーを示す。テリトリーの特徴は鳥浜貝塚とは著しく異なる。直接外洋に面し，かつ外洋水域の割合が極めて高い。また縄文海進の影響を受けた範囲は狭く，長い海岸線は直接外洋水の影響を受けている。このような遺跡テリトリーの潜在魚種組成は主として外洋性種・岩礁性種から成るはずである。事実当遺跡組成がそのような特徴を示す。

高い頻度で同定された魚貝種は，タイ科・ウツボ・マハタ・ベラ科・サザエ・マツバガイ・レイシ・スガイ・アワビ等である。あきらかに潜在魚種と共通している。

このテリトリーに適応する貝塚人は土器片錘以外の錘をともなう例が多いという結果をみるが，実際には鉈切遺跡のように変数F１（単式釣針）を発達させたグループも認められる。このような矛盾は分析遺跡・分析変数をさらに厳密に選定することにより再検討する必要がある。

遺跡クラスターC

当クラスターを構成した遺跡は上高津・新田野・西広・菊名遺跡の魚種を特徴づけたCタイプの組成との相関が高い。この遺跡テリトリーを新田野貝塚の例をもって定義する。

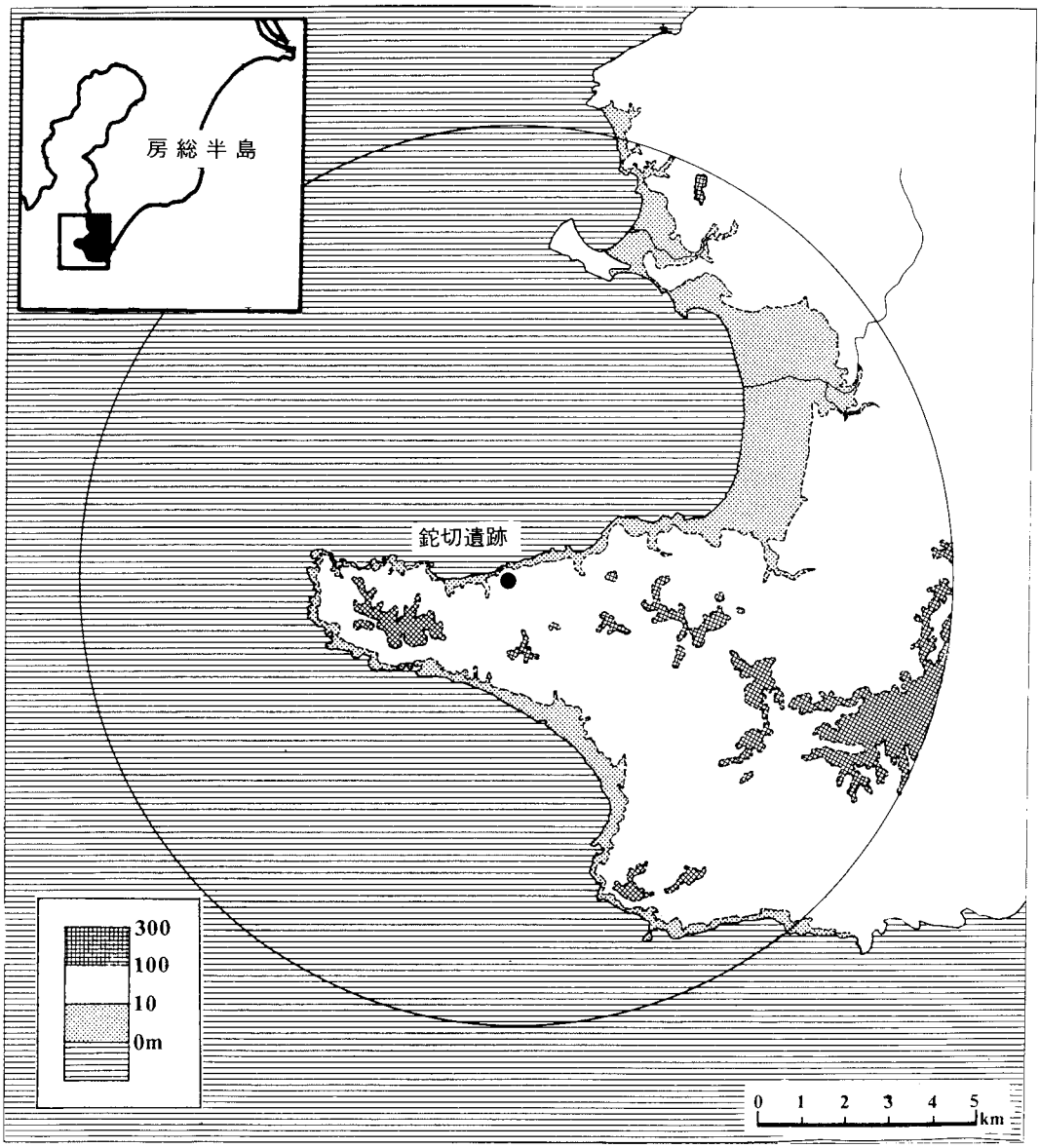
第10図は新田野貝塚の 10 - km テリトリーを示している。当遺跡は，鳥浜貝塚と同じように，海岸から5 - km近く内陸に位置する。しかしその意味は両者で大幅に異なる。当貝塚が形成された縄文時代前期，約6000年前は縄文海進の時期にあたる。当時の遺跡テリトリー内の地形は現在と大幅に異なり，夷隅川ぞいに内湾が形成されていた可能性が高い (Akazawa, 1980)。すなわち，鳥浜貝塚のような内陸湖水に面した内陸遺跡ではなく，実は内湾に近く位置した海岸遺跡であった。

当遺跡で同定されたCタイプの魚種組成の中で特に高い頻度を示したスズキ・ボラ・クロダイ・コチ・その他のヤマトシジミ・オキシジミ等の貝種は，すべて内湾の潮間帯種か一定期間内湾に侵入生息するものか，あるいは淡水性種である。この結果は，遺跡テリトリー内に内湾が形成されていたことによってはじめて説明可能である。

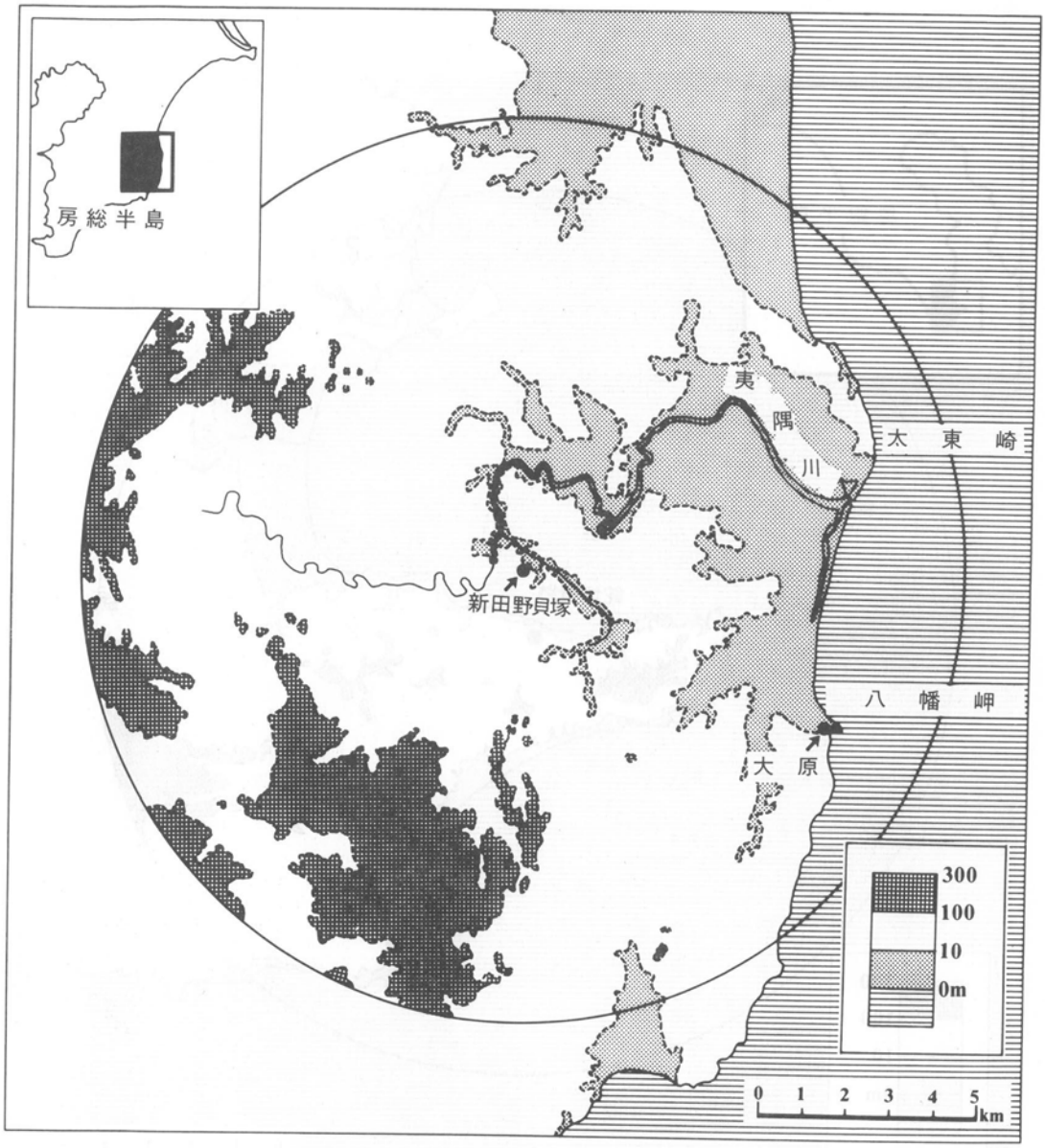
縄文海進期に海岸地帯低地の多くが海となり，海岸線が増大すると同時に，ずい所に内湾が形成された。このような海水域をテリトリーの一部とした遺跡で以上の関係が成立したものと推定される。それとともに関東地方の多くの遺跡では土器片錘が製作される。この用途は渡辺(1973)により魚網錘と記載されている。その用途が何であれ，この遺跡クラスターと土器片錘との関係は非常に密接である。この種の遺跡テリトリーをもった貝塚人の日常的な活動と関係があった遺物であることに間違いない。

遺跡クラスターD

当クラスターを構成する遺跡は東北地方太平洋岸に分布する。それを特徴づける魚種組成は宮野貝塚で同定されたAタイプである。第11図は宮野貝塚の 10 - km テリトリーを示す。同テリトリーはリアス式の岩礁性海岸を含み，黒潮・親潮が混流した外洋水域を包含している。この海域は現在でもよく知られた漁場であり，その潜在魚種資源としてマグロ・カツオ等の回遊魚を含んでいることでもよく知られている。



第 9 図

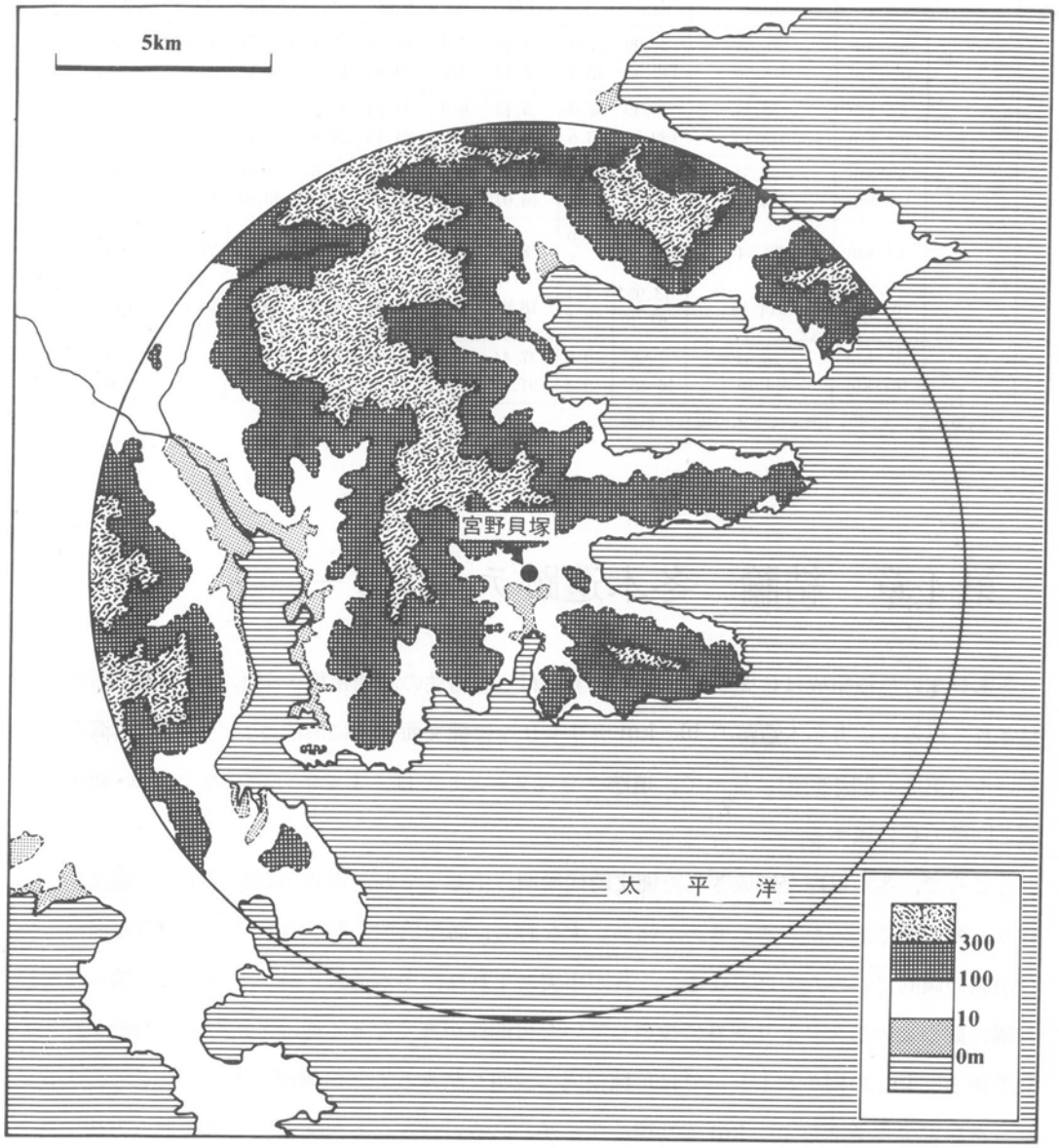


第10図

宮野貝塚はじめこの一帯の遺跡産魚種はこのようなテリトリーの特徴をよく反映している。すなわち，マダイ・カサゴ科・アイナメ科の外洋性岩礁性魚，マグロ・カツオ等の回遊魚が高い頻度で発見される。同じく高い頻度で発見されるイガイ・スガイ・チョウセンハマグリ等はいずれも岩礁性・外洋砂質性の貝種である。

このようなテリトリーに適応した縄文人は各種の漁撈具を発達させ，他のいずれのクラスターよりも海への適応度が高かったことがわかる。特に発達した閉窩式回転式銛頭・単式釣針は，その形態の分化において，かつ頻度において，他のいずれのクラスターよりもまさっているのが特

徴である（第８表参照）。



第11図

今回は各遺跡テリトリーの特徴を魚種組成・漁撈具組成にもとづいて検討するにとどめた。しかし，各遺跡テリトリーは，図示されている地形上の特徴においてもテリトリー間の差異は著しいことがわかる（第９表）。すなわち，縄文遺跡のテリトリー分析は土地利用の状態を含めたものでなければならない（Akazawa, 印刷中）。それによって縄文人の遺跡テリトリーとの関係がより明確となり，縄文人の環境への適応形態，そのプロセスがより具体的に復原できるはずである。

第9表　遺跡テリトリーの標高差にもとづく地形区分とその面積比

		テリトリー面積 (km²)	0m以下 面積	0m以下 %	0－10 面積	0－10 %	10－100 面積	10－100 %	100－300 面積	100－300 %	300以上 面積	300以上 %
宮　野	5－km	78.54	21.90	27.9	2.10	2.6	18.75	23.9	25.74	32.8	10.05	12.8
	10－km	314.16	142.35	45.3	8.40	2.7	49.85	15.3	74.16	23.6	39.30	12.5
鉈　切	5－km	78.54	45.49	57.9	5.42	6.9	24.72	31.5	2.91	3.7	0	0
	10－km	314.16	199.70	63.6	21.20	6.7	84.13	26.8	9.13	2.9	0	0
新田野	5－km	78.54	0	0	13.32	17.0	63.32	80.6	1.90	2.4	0	0
	10－km	314.16	30.41	9.7	46.97	14.9	195.94	62.4	40.84	13.0	0	0
鳥　浜	5－km	78.54	10.20* 0	13.0 0	8.70	11.1	24.30	30.9	16.74	21.3	18.60	23.7
	10－km	314.16	13.95* 61.20	4.4 19.5	16.65	5.3	51.96	16.5	89.85	28.6	80.55	25.7
冬　木	5－km	78.54	7.68*	9.8	27.44	34.9	43.42	55.3	0	0	0	0
	10－km	314.16	16.45*	5.2	91.45	29.1	206.25	65.7	0	0	0	0

*内陸湖及び大河川（例えば冬木の場合の利根川）

第4章　結論—冬木遺跡テリトリー—

冬木貝塚の魚種組成はCタイプである。すなわち内湾性の潮間帯種・濠水性種が高い頻度で発見されている。一方冬木遺跡の 10 - km テリトリーは縄文海進期に形成されたはずの内湾を有している（第2・3図参照）。従って，遺跡クラスターとしては，すでに分析した上高津・新田野貝塚と同種のCに属する。

ところで，冬木貝塚が形成された縄文時代後期，主として堀之内式の時期はすでに縄文海進は終り，海退期であったとする考えが強い。すなわち，海岸低地に形成されていた内湾は縮小ないし消滅の傾向にあったことになる。これが事実とすれば，冬木遺跡テリトリー内の内湾もすでに大幅に縮小ないしテリトリー外に後退していた可能性が強くなる。従って，今回の分析に利用した半径 10 - km の円テリトリーでは魚種組成の説明を試みることが無理である。そこで，テリトリーを想定する基準を 10 - km より遠くするか，あるいは主たる魚種が交易その他の方法で持ち込まれた可能性を考えなければならない。今回の結果から以上の可能性を否定する証拠は得られていないが，もう一つ別の可能性を指摘し本論のしめくくりとする。

冬木貝塚の堆積物の状態は，今回の分析標本を出土した第II K層の下部に地質学的に細分される数枚の地層が認められる（堆積物の記載の章参照）。ところが，第II K層は純貝層と記載されるごとく多量の貝を包含するが，その下部層は極めて低い頻度でしか貝を包含しない。そして土層ないし混貝土層と記載されている。これら区分されている地層はそれにともなう土器の型式から，同じ縄文時代後期，堀之内式の時期の堆積物とみなされている。このような堆積物の性質の著し

い差異を考えると，1)同型式の土器が使用されていた期間に海進海退が繰り返され，テリトリーの環境が変った，2）当遺跡の形成されたのは貝層が形成された時期であり，その期間は海進期でテリトリー内に内湾が形成されていた。従ってそれ以外の地層は二次的な堆積物であるという2つの可能性が考えられる。ただいずれの場合も，縄文時代の後期に海進期のあったことを推測している。

以上の推測をうらづける直接的証拠はない。ただ今回行なった遺跡テリトリー分析にもとづく限り，このような可能性によって冬木貝塚のデータを合理的に説明できる。また次に示す上高津遺跡のデータが以上のような解釈を間接的にうらづける一つの証拠となる（小宮，1980)。

上高津貝塚は大別して縄文時代後期初頭（堀之内期)・中葉（加曽利B期)・末葉（安行I・II期）の堆積物から成る。魚種組成はCタイプである。遺跡テリトリーもクライスターCの特徴を示し，魚種組成との間に矛盾はない。ところが，後期中葉の魚種組成がその前後と若干異なる。すなわち，この時期の堆積物からマダイが高い頻度で発見される。この事実も，冬木貝塚の場合と同じく，遺跡テリトリーの範囲を変更するか，テリトリー外から持ち込まれた可能性を検討する必要がある。にもかかわらず，その前後の時期では何故同じ事実が認められなかったかという疑問が残る。この現象が海進海退が繰り返された結果にもとづくとすれば，冬木貝塚において示した2つの可能性も十分に考えられることになる。

今回は魚種の同定結果を中心とした分析結果である。その他の遺物を加味したテリトリー分析を試みることにより以上の問題も解決するであろう。

第5章　冬木貝塚産魚骨の同定結果

今回分析した標本は12種類に分類された（第1表参照）。以下その同定基準を記載する。学名については，中村（1971）・内田編（1979）を用いた。微小な標本はオリンパス製X—Tr型実体顕微鏡を用いて6.3倍に拡大し同定した。同定に利用した現生骨格比較標本にはHKC（Hajime Komiya Collection）番号・体長（cm）・採集場所・採集年月日を示した。

軟骨魚綱　Chondrichthyes
エイ目　Rajiformes

種不明　Fam. indet.（Plate I：fig.1）

同定標本は特徴的な形態をもつエイ類の歯で，2つの歯が連なったまま採集されたが，いずれも一部を欠損する。欠損部を復原したのち計測した歯の左右両端間は約28 mmである。咬合面は平滑で硬く，ほぼ全面に前後方向に走るかすかな溝が多数存在する。裏面は櫛歯状になる。咬合面側から見た歯の形状は弱い弓形で両端は尖らない。

現在比較に用いるエイ類の比較骨格標本が不備であり，科以下の同定はおこなわない。

尚，軟骨魚綱に属する小形の椎体が1点採集されている。ただ目以下の同定は困難であった。

硬骨魚綱　Osteichthyes
真骨類　Teleostei
コイ目　Cypriniformes
コイ科　Cypridae

タナゴ亜科種不明　Rhodeinae gen. & sp. indet.

同定標本はタナゴ *Acheilognathus moriokae*（HKC 7206,7.0, 茨城県北浦，1967, IX）の咽頭骨に酷似するが，前腕・後腕などは欠損している。さらに同標本は小林・前田（1961）が記載するタナゴ亜科咽頭骨の特徴と以下の点で一致する。

(1) 咽頭歯は1列で少なくとも3本以上の咽頭歯をもつ。

(2) 前角と後角がある。

(3) 前角と後角間の長さに比べて咽頭骨幅が相対的に広い。

以上の点から本標本をタナゴ亜科に同定した。なお，同標本の咽頭骨のサイズは，小林・前田の

方法にもとづくと推定体長 5～6 cm 前後の個体のものとなる。

ニゴイ属 *Hemibarbus* sp. (Plate I : figs. 2－5)

同定標本は破損した咽頭骨である。figs. 2・3 は比較的大形で，コイ *Cyprinus carpio* の可能性もあるが，以下の点に着目しニゴイ属とした。

(1) 後突起は側扁し，比較的長くのびる。

(2) 後突起先端部がわずかに曲る。

(3) 咽頭歯が 3 列で，その大部分は脱落しているが，残存する 2 列第 1 歯は小形で先端が尖り，咀嚼面は刻まれない。

咽頭骨幅を復原計測し，小林・前田の方法で体長を推定すると約 50 cm の個体となる。

上記標本以外にも破損したコイ科咽頭骨片が認められた(fig.4)。この標本は咽頭歯の列数を復原することが困難であったが，以下の 6 点からニゴイ属とした。

(1) 咽頭骨が大形である。

(2) 残存する 1 本の咽頭歯は大きく，それが 1 列目の歯である。

(3) 咽頭歯の先端部は曲り，前縁部が凹状である。

この標本の推定体長は 50～60 cm と考えられる。

中村 (1971) によれば，わが国に分布するニゴイ属はニゴイ *Hemibarbus barbus* とズナガニゴイ *H. longirostris* である。後者は近畿地方以西に分布する。縄文時代にこの 2 種がどのように分布していたかを推測するには比較標本が不備である。従って今回の同定はニゴイ属にとどめる。

フナ属 *Carassius* sp. (Plata II : figs. 6—8)

同定標本はギンブナ *Carassius auratus langsdorfii* (HKC 7905, 15.0, 千葉県東金市，1979, IV) の咽頭骨・前上顎骨・歯骨および椎体に酷似する。同標本は HKC 7905 比較標本とのサイズを比べると，体長 10 cm 前後の個体の資料とみられる。

フナ属の尾椎標本はニシン科 Clupeidae の尾椎と類似する。しかし今回の標本については以下の基準にもとづいて区別することができた。

(1) 側隆線は 1 本で明瞭であるが，隆起の程度が相対的に弱い。

(2) 前神経顆突起および前血管顆突起は前方に細くのびていない。

(3) 神経弓門・血管弓門の発達は良好であり，前面観では両者の基部が椎体の側面側にそって発達する。

コイ *Cyprinus carpio* LINNAEUS (Plate II : figs. 1—5)

同定標本は咽頭骨・上顎骨・前上顎骨・歯骨である。同定の基準は咽頭骨の咽頭歯であり，それが臼歯状を呈し，第1列第1歯を除いて，他はいずれも咀嚼面を横切る溝が認められる。この標本類はそのサイズを現生比較標本と比較することによって，推定体長約 15 cm の個体となる。

ウナギ目　Anguilliformes

ウナギ科　Anguillidae

ウナギ　*Anguilla japonica* TEMMINCK ET SCHLEGEL

同定標本は椎体である。以下の特徴にもとづいて同定した。

(1) 神経弓門と椎体が癒合している。

(2) 神経棘が椎体後部から発し，細い。

(3) 側隆線が網目状で，側方に突出する骨柱突起がない。

スズキ目　Perciformes

ボ ラ 科　Mugilidae

種不明　Gen. & sp. indet. (Plate III : figs. 1—5)

同定標本はボラ *Mugil cephalus* (HKC 7430, 22.0, 神奈川県葉山町, 1974, X) の主鰓蓋骨・椎体に酷似する。わが国では本種以外に，セスジボラ *Mugil carinatus*・メナダ *Liza haematocheila* 等の近縁種が分布している。しかし，比較標本が不備のため属以下の同定は困難であった。

当貝塚産ボラ科標本は保存状態が極めて良好である。貝塚産ボラ科の主鰓蓋骨は関接部位周辺を除いて欠損している例が多い。ところが冬木貝塚標本には完全なものが極めて多く，鰓蓋縁部の特徴を詳しく観察できる。

スズキ科　Percichthyidae

スズキ属　*Lateolabrax* sp. (Plate IV : figs. 1—5)

同定標本はスズキ *Lateolabrax japonicus* (HKC 7002, 57.5, 千葉県夷隅郡大原, 1967, XII) の前上顎骨・上顎骨・歯骨・角骨・主鰓蓋骨の特徴と類似する。マハタ属 *Epinephelus* 比較標本との対比をおこなっていないが，今回はスズキ属と記載する。

わが国にはスズキ属に分類される2種が分布している。ただ貝塚産標本をこの2種に区別することは困難である。

同定標本の多くは，上記 HKC 7002 標本と同じ程度の推定体長を示す個体である。

タ イ 科　Sparidae

クロダイ属　*Acanthopagrus* sp.（Plate V ：figs. 1—4）

同定標本はクロダイ *Acanthopagrus schlegeli*（HKC 7003, 43.0, 千葉県館山市，1969, X）の前上顎骨・歯骨・角骨・口蓋骨の特徴と一致する。ただ，現在貝塚産標本を，本属に属する3種に分類することは困難である。従って同定は属のレベルにとどめた。

採集標本の中に，HKC 7003 標本の主鰓蓋骨と類似したものがある（Plate V ： figs. 5)。しかし，チダイ属 *Evynnus* ・ヘダイ属 *Sparus*・マダイ属 *Pagrus*・キダイ属*Dentax*など本属以外のタイ科標本との十分な対比が困難であったため，当標本の同定をタイ科レベルとした。同定されたタイ科・クロダイ属の標本はいずれも大きく，上記 HKC 7003 標本と同程度の個体と推定される。

フ グ 目　Tetraodontiformes
フ グ 科　Tetradontidae
トラフグ属　Takifugu

トラフグ類　*Takifugu rubripes* (Plate VI ： figs. 1—4)

同定標本は歯と顎骨とが癒合し，嘴状になった前上顎骨・歯骨・角骨・方骨である。フグ目には歯が嘴状になるものが比較的多く,同じ特徴はフグ科以外にもウチワフグ科 Triodontidae・ハリセンボン科 Diodontidae ・マンボウ科 Molidae などにも認められる。またフグ目以外にも，イシダイ属 *Oplegnathus* ・アオブダイ属 *Ypsiscarus*に於ても同様の特徴がある。しかし，冬木貝塚の標本は以下の点でフグ科に同定した。

(1) 歯板の咬合部が刃状で臼歯状を呈していない。

(2) 上顎・下顎の歯板で中央部の縫合面が明らかで，上下顎骨とも左右の歯板がこの縫合部分でつながっていたことが明瞭である。

(3) 当標本がブダイ科 Scaridae に属するとすれば，その咽頭骨が発見される可能性が高い。しかし全く発見されていない。

フグ科には今回同定したトラフグ属以外にもキタマクラ属 *Canthigaster* ・サバフグ属 *Lagocephalus*・モヨウフグ属 *Tetraodon*等が分布する。顎骨からこれらを区別することは困難である。しかし当標本類は以下の特徴からトラフグ *Takifugu rubripes rubripes* もしくはカラスフグ

T. rubripes chinensis と同定するのが適当である。

(1) 上下顎骨のサイズが大きく，復原推定体長が 60～70 cm 以上の個体が多い。

(2) フグ科には上記 2 種以外で以上の体長に成長するものがある。カナフグ *Lagocephalus laevigatus inermis*・センニンフグ *Pleuranacanthus sceleratus*・シマフグ *Takifugu xanthopterus* 等である。ただいずれもわが国にはほとんど分布しない（阿部，1963）。

カジカ目　Scorpaeniformes

コ チ 科　Platycephalidae

コチ *Platycephalus Indicus* (LINNAEUS) (Plate VII : figs. 1—2)

同定標本は大給（1943）が報告したコチの標本と特徴の一致する前上顎骨・歯骨である。

種不明 Fam. indet.

目・科レベルの同定が困難な椎体 202 点である。いずれも真骨類の椎体である。そのうち 194 個は椎体直径 1～2 mm であり，おそらくその多くは小形魚に由来すると考えられる。

腹椎標本は，いずれも神経棘がよく発達しており，かつ神経棘基部が椎体から脱落せず残存している。さらに神経弓門が椎体と癒合していない。以上の特徴を総合的に検討すると，これら椎体は，少なくともニシン目・ウナギ目以外の魚種に属する可能性が高くなる。

引　用　文　献

阿部宗明　1963　「原色魚類検索図鑑」北隆館

AKAZAWA.T　1980　Fishing Adaptation of Prehistoric Hunter-gatherers at the Nittano Site,Japan. *Journal of Archaeological Science,* Vol.7, pp.325-344.

AKAZAWA.T　印刷中　Cultural Change in Prehistoric Japan:The Receptivity Process of Rice Agriculture in the Japanese Archipelago.In *Advances in World Archaeology* edited by Fred Wendorf.Vol.1.Academic Press.

金子浩昌　1958　「館山鉈切洞窟」千葉県教育委員会

金子浩昌　1964　「富士見台貝塚」千葉見教育委員会

金子浩昌　1971　「現利根川下流域の縄文貝塚にみる石器時代漁撈の諸問題」利根川，pp.113-132　九学会連合利根川流域調査委員会

金子浩昌他　1977　「西広貝塚」早稲田大学

小宮　孟　1976　「横浜市菊名貝塚採集の魚貝類遺存体」史学　Vol.47,pp.335-358

小宮　孟　1980　「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」第四紀研究　Vol.19,pp.281-299

中村守純　1971　「原色淡水魚類検索図鑑」第2版　北隆館

大給　尹　1943　「史前漁撈関係資料としてのハモとコチ」史前学雑誌　Vol.15,pp.26-41

小川信子他　1975　「脊椎動物」新田野貝塚　pp.52-61　立教大学考古学研究会

鈴木公雄　1977　「先史時代遺跡における魚骨標本の組成に関する基礎研究」自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究　昭和52年次報告書　pp.115-150

渡辺　誠　1973　「縄文時代の漁業」雄山閣

図 版 説 明 文

第1図　本論で分析する縄文時代遺跡の分布図。
1．宮野貝塚　2．上高津貝塚　3．菊名貝塚　4．西広貝塚　5．新田野貝塚
6．富士見台貝塚　7．鉈切貝塚　8．称名寺貝塚　9．鳥浜遺跡

第2図　本論で分析する関東地方の縄文貝塚分布図（1．上高津貝塚　2．新田野貝塚　3．西広貝塚　4．富士見台貝塚　5．鉈切遺跡　6．称名寺貝塚　7．菊名貝塚　8．冬木貝塚)。各遺跡を中心とする円は半径 10 - km であり，本研究用に想定される遺跡テリトリーを示す。当図は約6,000年前の縄文海進期の海岸線のイメージを示す（破線が縄文海進期の海岸線)。

第3図　冬木貝塚の半径 10 - km を用いた場合の遺跡テリトリー図。縄文海進期の海岸線(破線)のイメージが記入されている。

第4図　縄文遺跡のクラスター分析に用いた45遺跡の分布図。遺跡は渡辺，1973から選択。

第5図　45遺跡で発見される9タイプの漁撈具の頻度を用いた因子分析の結果。因子負荷量第1と第2を用いて9タイプの漁撈具相互の関係を示す。9タイプの漁撈具が4つのクラスターを形成している。

第6図　45遺跡の因子分析の結果，因子得点第1と第2を用いて遺跡間の類縁関係を示す。

第7図　45遺跡のクラスター分析によって算出された遺跡間の距離を示す樹状図である。A・B・C・Dは距離レベル3.0で切った場合に認められる4つの遺跡クラスターを意味する。

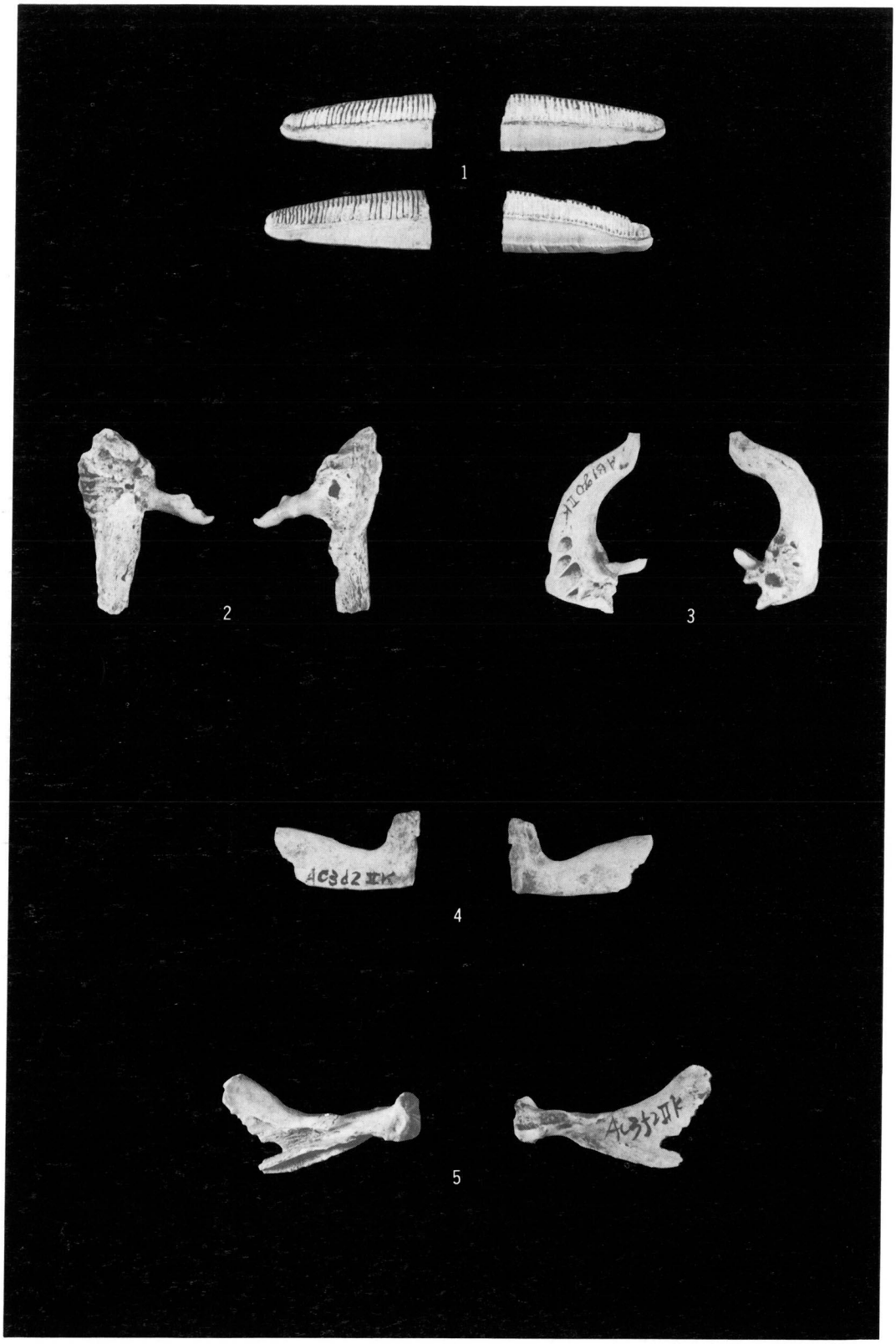
第8図　鳥浜貝塚の半径 10 - km, 5 - km を用いた場合の遺跡テリトリー図。縄文海進の影響が弱いことがわかるが，たとえあったとしても 5 - km テリトリーの中の内水湖の割合が増加したことになる。

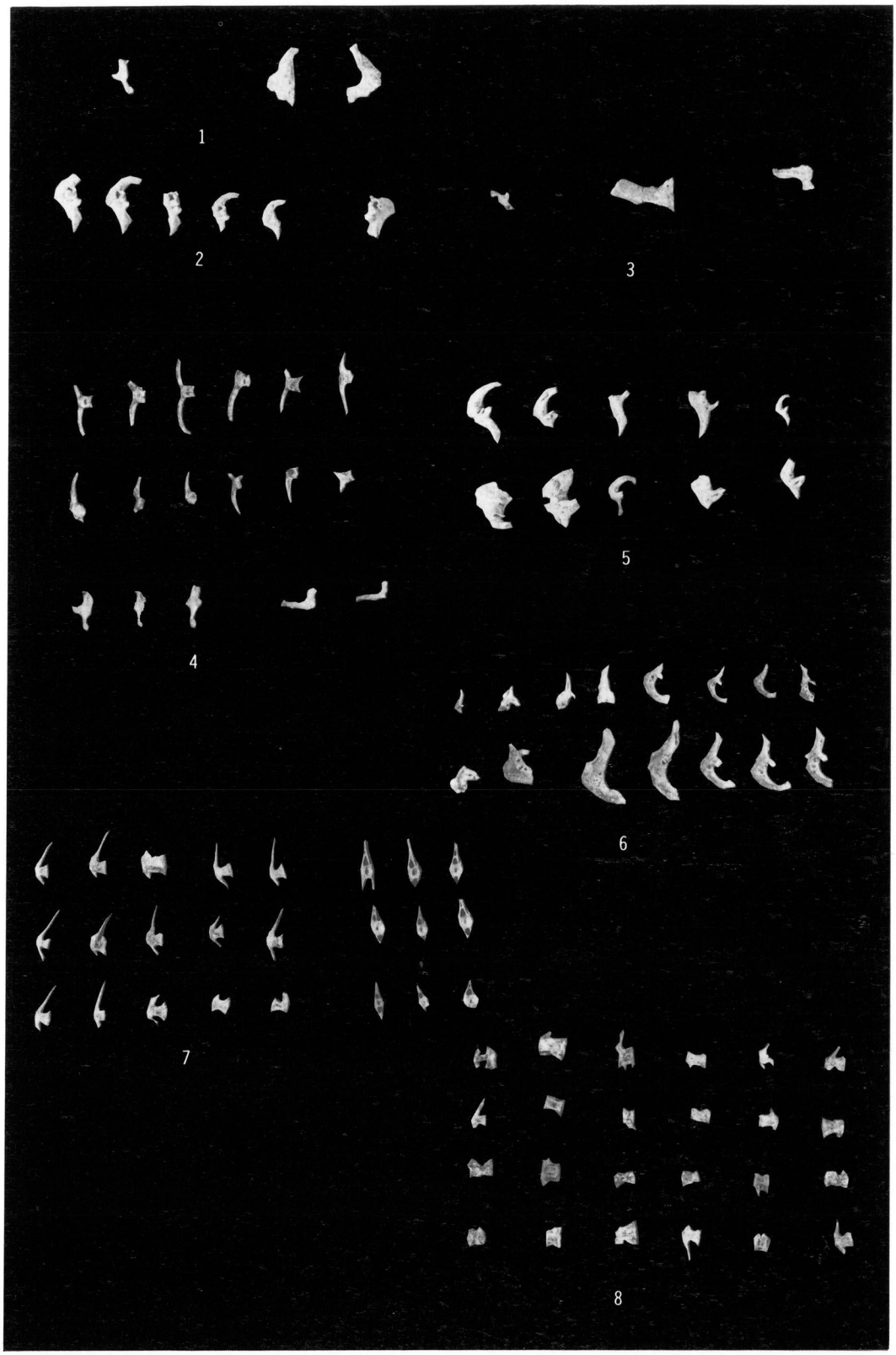
第9図　鉈切遺跡の 10 - km テリトリー図。

第10図　新田野貝塚の 10 - km テリトリー図。

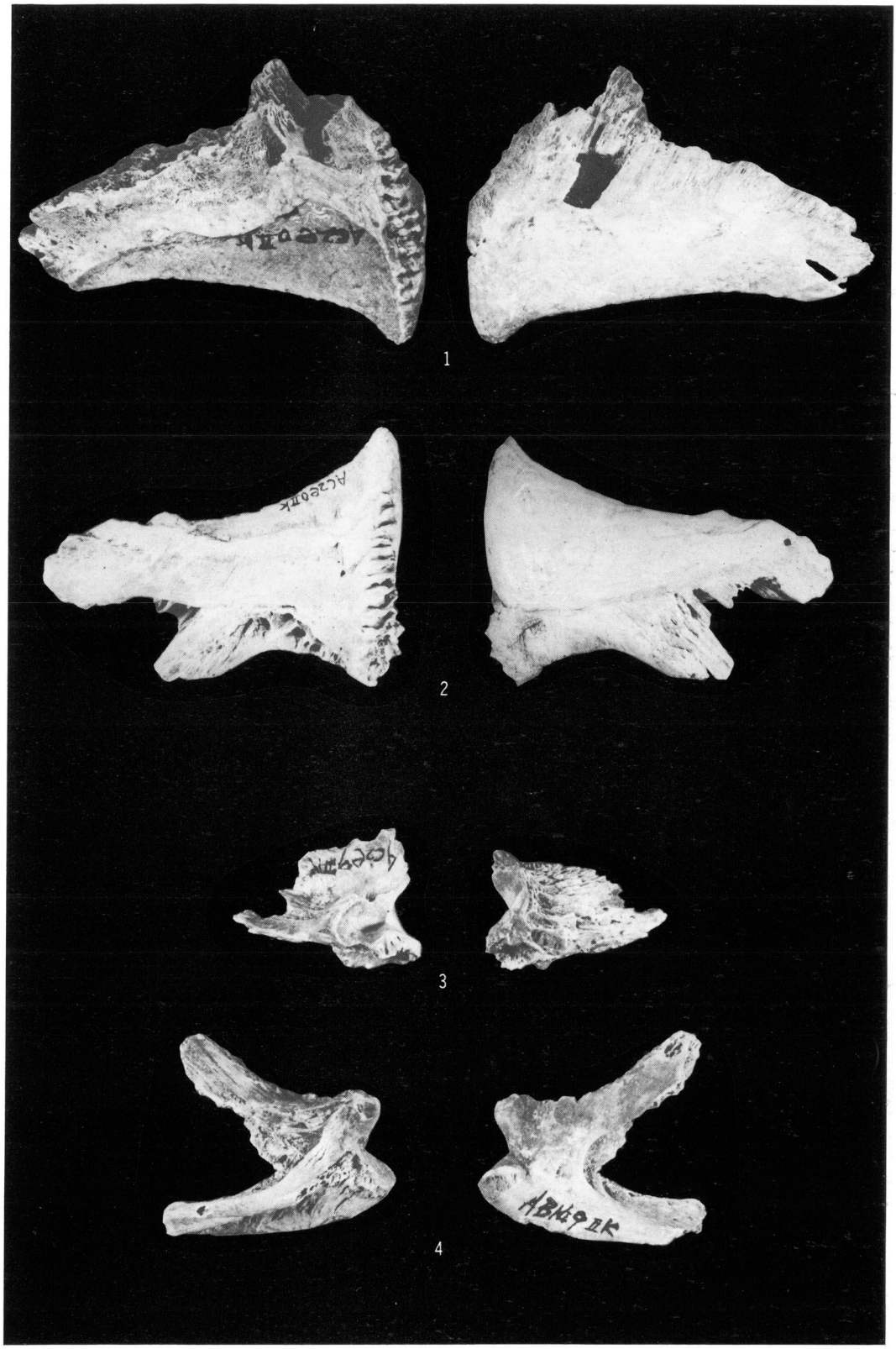
第11図　宮野貝塚の 10 - km テリトリー図

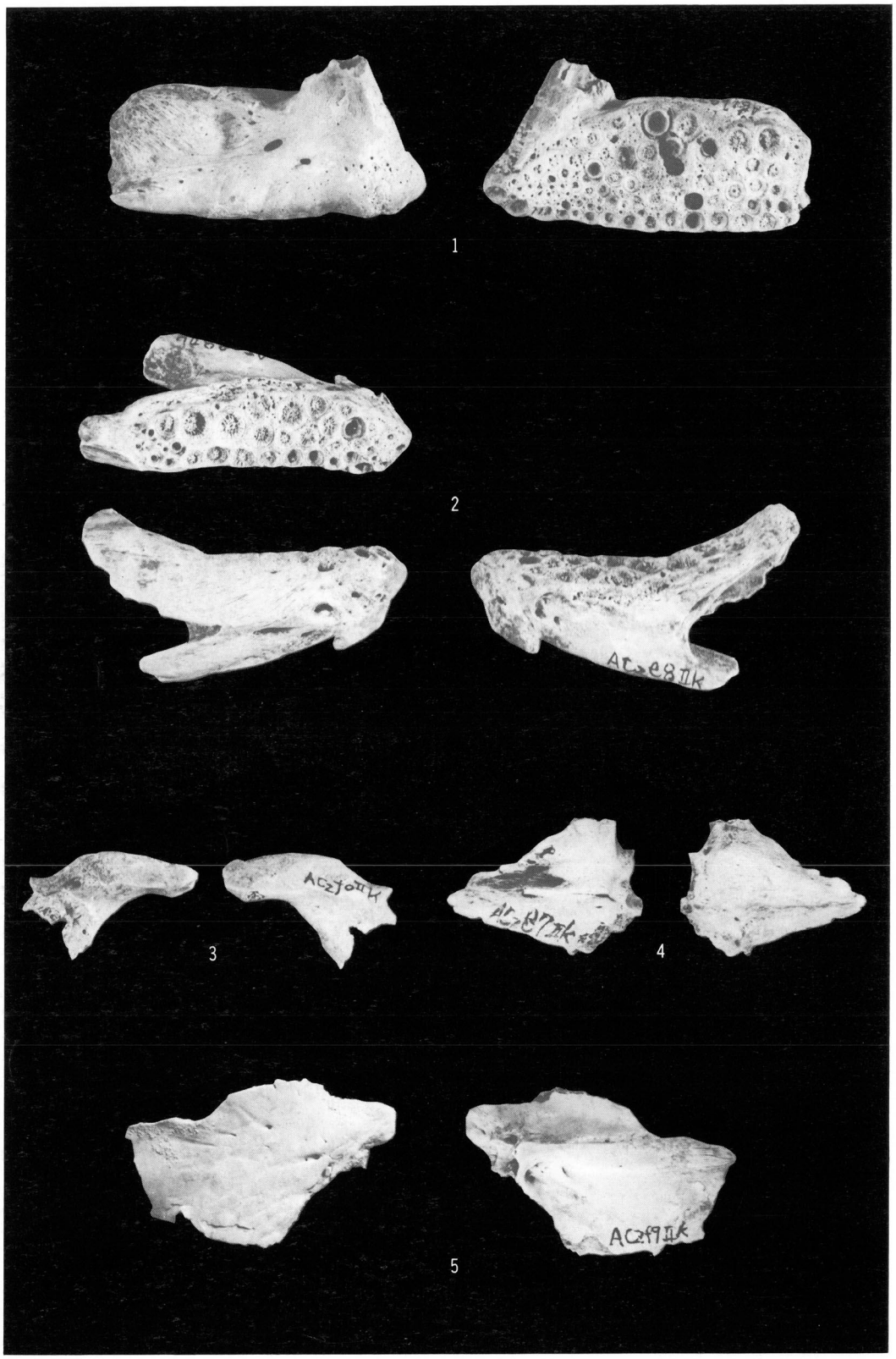
図　　版


1
2
3
4
5


1
2
3
4
5
6
7
8

1
2
3
4
5


4
3
2
1


1
2
3
4
5

1
2
AC3dzIIK
3
4
5
AC2f02K

1
2

319

茨城県教育財団文化財調査報告Ⅸ

昭和56年3月27日印刷
昭和56年3月31日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3－4－57
印刷　有限会社　綿引プリント社
水戸市城東1－5－21